
魔法少女リリカルなのは～ある転生者の新たな世界～

メガネ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはある転生者の新たな世界

【Nコード】

N39650

【作者名】

メガネ

【あらすじ】

「死ぬのなら…こんな人生にした奴を皆殺しにしてやりたかった…」そう言っただけで死んだのは美女と言えるほどの青年だった。だがその青年は死んでおらず、いつの間にか白い空間に寝ていて、辺り目回すとそこに綺麗な羽をもった女性が土下座をしてガタガタ震えていた。初投稿で処女作です。原作崩壊、キャラ崩壊、オリ主チート（最強ではない）転生が含まれます。9/21 The Striker 編開始しました！

プロローグ（前書き）

原作知識はほぼ二次創作でしか知りません。

これは自分の趣味で書いている小説の主人公をリリカルなものに入れたらどうなるかを妄想してそれを形にしました。

遅くても完結を目指しますのでどうか生暖かい目で見てください。

プロローグ

「ゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイ
イゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイ
イ」

今、俺の目の前で綺麗な羽を生やした女が土下座をしてガタガタ震えていた。

「……………何これ？」

周りは白い空間でここにいるのは現時点で俺と女の二人だけしかいなかった。

「……………おい」

「ヒイツ！ゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイ
メンナサイゴメンナサイ」

今、この現状を把握したいがこの女は謝罪と土下座ばかりで聞いていない。

……………この際無視だ。とにかく自分に何が起きたのか整理しよう。……
…確か死んだはずだ、このままじゃ一か月以内に死ぬって言われた
が無視して野望の半ばで死んだはずだ。自業自得だが後悔はしていない。

……………なのになんで生きている？両手両足を動かしてみろ……異常なし。
動けるなら問題ない、動けなくても動かせばいい、この白い空間を
歩けば手掛かりくらいはあるだろう。そう思って立ち上がった……

……………

「あつあの！待ってください！お話があるん「やだ」ってええっ！」
出鼻を挫いたこの土下座女（仮名）を無視して、探索を始める。

「この空間は私がいないと出られないんです！だからどうかお話を
聞いてください！」

「何故先に言わない」

「無視して言わせてくれなかつたじゃないですか！」

「真つ先に無視していた奴に言われたくない。あそこで謝らずに話を始めればよかつただろう。今はそんな事はどうでもいいから早くここから出せ、正直目が痛い」

全部が真つ白で壁があるのかどうか分からない。ここを普通に入れる奴の色彩感覚を疑う。

「そうですね、流石に疲れちゃいますね。これから向かうのは俗に言う天界です。えっと私の事は名前は特に無いんで天使って呼んでください」

「天使か…分かつた」

確かに天使の容姿を見ればわかる、ウェーブの入った金髪と白い羽。まさにおとぎ話の天使をそのまま引つ張ってきた感じだ。

「…で天界にはどう行くんだ？」

「私の手を握ってください。後は私がします。……そういえばまだ名前を聞いてませんでしたね」

「そういえば言っていなかったな。俺の名前は」

天使の手を握り俺の名前を言うと天使まさに天使の微笑み見せた。

「とてもいい名前ですね」

そう言つて俺と天使は天界へ消えた行つた

プロローグ（後書き）

？「まだ名前でてないな」

メガネ「ゴメン…次回あたりに設定書くから」

？「別にいいが、大丈夫なのか？俺の原作も放置気味だろ？」

メガネ「100%オリジナルはムズイ。とにかく完結させると言うのが目標だから」

？「打ち切り何て事にならないのを祈るばかりだ」

！次回もお楽しみにしてください！

主人公設定（前書き）

作者は中二病と思わせるぐらいの中二設定です

10/26 加筆修正しました

主人公設定

名前 時代ときがわ 古代こたい 本編ではカタカナで表記

妄想C.V. 柚木涼香（武装錬金の津村 斗貴子をイメージ）

年齢 転生時6歳

身長 なのは達より少し低いぐらい

体重 なのは達より軽め

好き 料理、動物

嫌い 正義

特技 料理、声帯模写、瞬間記憶、完全記憶 e t c .

趣味 家事全般（料理の腕は桃子やはやて以上）

容姿

黒髪膝までの超ロングで前髪で殆ど顔を隠して、青い目（ハイライ
ト無し）が特徴。

端正な…と言うよりぶっちゃんけ美女。（男だけど本人は気にしない）
肌は白く細い体格。（なのは曰くお人形さん）

普段は黒づくめを着ている（制服も改造）が桃子に女装をさせられ
るが、女装に関してはオシャレとしか認識してない。

寝る時はほぼパンツとワイシャツ。

性格

良く言えば天然ドS。女子供容赦なしの性格。

学力は常にトップ。運動神経は抜群で戦えば恭也よりも強い。

性格を除けば完璧超人、だが天然で直球の言動で羞恥心がほとんど無い故にあり得ない位フラグビルダーである。

桃子と色んな意味で息が合う。

主人公設定（後書き）

コダイ「何この中二病……柚木涼香とかかぶるだろ」

メガネ「問題ないだろ。斗貴子さんの声聞いた時。え？これ柚姐？
って驚いたし」

コダイ「容姿とか性格とかどうでも良いけど6歳で恭也に勝つのは
やりすぎじゃないか？」

メガネ「なのはと仲良くなる 恭也襲来 返り討ち。は仕様でしょ
？」

コダイ「返り討ちよりお話の方が仕様じゃないか？恭也に勝てるな
ら士郎ならどうなんだ？」

メガネ「士郎よりは少し弱い。体が子供だからね。そんなの聞いて
どうするの？」

コダイ「恭也に勝てば士郎と戦うかもしれないからな」

メガネ「あゝ……両者死なないでね」

コダイ「そうするのはそつちだろ」

メガネ「そうだった……（´・`・;A」

〜次回もお楽しみにしてください〜

新たな世界へ（前書き）

ようやく転生させます。

新たな世界へ

天使に連れられ天界についた俺は……

「スイマセンデシタアアアアアアアア!!」

天使とは違う銀髪の女がジャンピング土下座をしていた。

「天界は土下座が挨拶なのか？」

「違います！女神様が怖がっているのはコダイが死ぬ前に言った事のせいです！」

死ぬ前に言った事？天使に言われて思い出ししてみる………あつ

「死ぬのなら……こんな人生にした奴を皆殺しにしてやりたかった……だっけか？つてそうか貴様が貴様なのか女神様とか言うから人生弄るのは簡単だよなあ。一応ここまで連れてきたんだ辞世の句ぐらい読ませてやる………」

「待つてください！女神様が呼んだのはその死んだ事についてです！」

まずこの女神を縛ろうと鎖を取りだしたが、天使に羽交い締めされた。身長は天使の方が高いので足が浮いた。

「どうということだ？」

「話しますからその鎖をしまってください」

「……分かった……しもうから降ろせ」

羽交い絞めを解いてもらい、鎖をしまってから女神に話しかけた。

「どうということかしっかり聞かせてもらおう」

「分かったわ。でもこれから話すことは真実だから………」

そう言って女神は立ち上がる。ジャンピング土下座をした所為か額が赤くなってる。

「まず分かりやすく言うわ。人生は私たちが完全に決めてなくて人と言つある程度の制限をもった自律性のプログラムを人生と言つソフトに入れて自由にさせる、時々調整は行つけどそれは本当に稀で基本野放しよ」

女神が話が長くなるからと言って、何処からか緑茶と茶菓子を出してそれを囲つように3人で座ってる。

「本来なら役目を終えるとプログラムは自動消滅つまり死ぬ事になるんだけど、あなたの場合異物・・・つまりバグを取り込んでしまつて制限を無視した行動をとるようになって、行く先全てが最悪の結末に繋がつてたの。何度も修正したけど全然意味がなかったわ…… 私達は最終手段としてその最悪の結末に行く前にあなたを死なす事だつたの」

「なるほど……だがそれは俺が勝手にバグを取り込んだ自業自得ではないのか？」

「それは違うわ。あなたはもっと幸せになるべきだつたのよ、家族も生きていて結婚して子供もできて、沢山の暖かい人たちに巻き込まれて幸せに死んでいく……そんな人生になるはずだつたの」

「そうか……で、これから俺はどうなるんだ？話を聞く限り最悪の結末は回避できたが、バグの方が解決してないだろう」

「本来なら一度再構成するんだけどバグがそうさせてくれないのよ。だからそのバグを含めあなたとして人生を全うすればバグも消えるはず。あとこれはバグを対処できなかったお詫びとして聞いてほしいのよ、つまり……」

「つまり？」

「あなたの人生不幸過ぎ！つて事で転生させるね」

女神が言い終えると同時に俺の拳は鼻めがけて吸い込まれるように伸びた。

ゴスッ！

「アゲツ！……何で殴るのさ〜！せつかく明るい雰囲気しようと思つたのに〜」

「いい年こいて語尾に星を付けるな……ウザイ」

「ヒドッ！」

「スイマセン女神様、私もそれは無いかと……」

「天使まで〜！」

正直イラツときた……敬語も無くなってるし……それにしても転生ね……てつきり地獄に落ちるのかと……

「グスツ……あなたの転生先は『リリカルなのは』の世界よ！」

「リリ……カル……なのは？」

聞いたこと無いぞ、そんな世界。あと鼻をかめ女神。

「え？知らないの？だったら今からアニメでも見せて「いらん」ってえっ？」

「未来がわかったら面白くはない、専門用語の知識だけでいい」

「え？それなら簡単にできるけど……あとこれはお詫びだから特典を付けるね」

「特典？」

「うん……まずは身体能力はそのまま、あなたの持っている力もそのまま、住むための一軒家もね、あとお金はそっちで使えるように換金しておくね、それと学校の編入もさせておくね」

「……警沢すぎないか？」

金や家はどうとでもなるが身体能力はありがたい。

「大丈夫！条件あるから」

女神が手をかざすと俺の体が強い光を放ち辺りを埋め尽くした。

「うわっ！」

光が収まると俺の目に映っていたのは、尻餅をついた5〜6歳前後の俺の体だった……

「子供になってる……」

プニプニムニムニ

頬を触ってみる俺ってこんな肉付き良かったっけ？……でも子供頬を触っていたい気持ちは分かる、これは癖になる。

ツンツンプニプニ

しばらく頬を触っていると後ろから気配……いや殺気を感じて前に跳んだ。

「カワイイ ！／／／／」

さっきまで俺がいた所に天使が突っ込んだ……いったい何がつてまた後ろから殺気！

「隙あり ！／／／／」

今度は横に跳ぶ、今のは女神だ……二人とも目が怖い……

「お願い！一回だけ一回だけでいいから！」

「先っちょ！先っちょだけでいいから！」

「主語を使え！落ちつけ！目が危ない！」

飛びついてくる二人の下を潜ってかわす、どうやら身体能力は本当にそのままの様だ。

「ハアハア……………／／／」

「ジュールリ……………／／／」

この獣二人をどうするか……………殺^ヤるか……………

くしばらくお待ちください

「落ち着いたか、シヨタコン共……………」

「ハイ……………」

二人にはアニメの様なタンコブが3段重ねになっていた。

「……………でもういいか？そろそろ行きたいんだが」

「そ、そうねですね時間をロスしましたし／／／」

天使は目の前に扉を作った……………まだ顔が赤いみたいだ。

「あ、あと武器についてだけどアレ以外なんとかなるわ」

「そうか……………」

アレは持ってこれないか……………アレは本来俺が持つべきじゃないからな……………」

「じゃあ……………」

「うん……………それと最後にこれだけは言わせて」

ドアノブに手を掛けると女神に後ろから声をかけられた。

後ろを向くと二人は手を組み祈るように立っていた。

「……………どうか幸せになってください」

「……………善処するよ」

そして俺は『リリカルなのは』の世界へ向かった。

新たな世界へ（後書き）

メガネ「やっと転生できたよ。最初はギャグ済まそうと思ったけど、何でシリアスに……」

コダイ「中二病だからじゃないか？キャラに重い設定にしたがる」

メガネ「これからはほのぼのとギャグを主体にできるように頑張るさ」

コダイ「そうか…さて、俺はもう行く後は任せた」（スタスタ）

メガネ「皆様からの質問や感想を待っています。どうかよろしくお願ひします」

（次回もお楽しみにしてください）

あの店に行くのは巨大な意思を感じるb yコダイ（前書き）

時期は無印前、なのははアリサとすずかと友達になっています。

あの店に行くのは巨大な意思を感じるbyコダイ

「あ、あの！私は高町なのはって言うの。友達になって欲しいの！
／／／／」

……………どうしてこうなった。

今俺は『翠屋』という喫茶店でケーキとコーヒーを頼んだら、それらを持ってきたこの店主の娘か？茶色の髪をツインテールにしてる美少女に顔を赤くして上目遣いでこちらを見てる……………さて、どうしてこうなったか思い出してみるか……………

数時間前

「ん？ここか？」

扉を抜けると無人の家の居間らしき所だった。どうやらここが女神の言っていた俺の家か……………広すぎないか？冷蔵庫（業務用）やテレビ（かなり大型）、クローゼット（これもかなりでかい）やら必要最低限の家具は置いてるみたいだな。後は日用品を……………ん？

絶対！開けてね by女神

「……………」

ピリッ！グシャグシャ！シュッ！

大型の段ボールの上に蓋をする様に貼られていた紙を無言で破り、丸め、窓から全力投球した。

あのシヨタ女神は語尾に星以外を入れればいいと思ってるのか？……ん？ポイ捨てるな？すまないがここにはゴミ箱はないんだ、さらに言えばあんな物を例え残骸でも家に入れたくない。さてこの段ボールはおそらくこの世界に必要な物だろう、頼むから中身はまともで合ってくれ。

まず出たのはカードと貯金通帳そして財布（約50万円入り）だこつちの世界用に換金してるらしく、総額は大きく言えないが億は越してる。

次に出てきたのは白を基調とした制服、私立聖祥大学付属小学校と書かれている履歴書、つまりここが俺の通う学校か。案内書を見る限りかなりレベルが高いみたいだ、前に通っていた学校も私立の中でかなりのレベルが高かったから丁度いいだろう。教科書とバックもあるみたいだし後は筆記用具だけか。

そして最後に段ボールにピタリフィットする様に入っているアタッシュケース4つ、これは見なくても分かる。前の世界に使っていた武器だ、もう使うことは無いけど念のために常にナイフ二本とハンドガン一丁にマガジン5、6本持って行こう。

後は買い物に行くだけだな。俺は財布を持って家を出た。（鍵は玄関に引っ掛かっていた）

適当に歩くと近くに大型スーパーがあったのでそこで筆記用具、日用品、服などを買い揃えた、食料に関しては深夜まで営業してる所か閉店間近の店に行けばいい。必要な物を買った後荷物を置きに一度家に戻り、今度は市内探索することにした。一応女神から土地の知識を貰っているが、それは何かあるのかであって何処にあるかでは無い。実際スーパーも帰りより行きの方が三倍時間が掛った。「なるほど………海鳴市については大体分かった」

予想以上に時間が掛ったな、流石に子供の体で市内を探るのは無理

があつたな……

いや、その他にも色々あつた……例えば廃墟に迷っていたら不良に見つかりそれを山にしたり、ナンパしてきた変態を吊るしたり、ヤのつく職業の連中に当たり屋の様な難癖を付けてきたので裏路地に連れ込まれたと同時に半殺しにしたりと気づけば昼を過ぎていた。「何か食べるにしても家の冷蔵庫は空だから外食一択か……」特に好き嫌いはないが和食・洋食・中華料理は自分が作ったの方が美味しいので却下、ファーストフードは……店の近くで変態を吊るしたので行きたくない……となると消去法として……軽食喫茶にするか。

「確かこの近くに喫茶店が……あつた、翠屋だ」

少し歩くと翠屋を見つけた、最初に見た時はかなりの客で込んでいたが今はピークを過ぎたか空いていた。

「いらつしゃいませ……あら？」

店に入ると女性店員俺を見て首を傾げた。

「あなた……さつき店の前を通った子よね？」

「よく分かつたな」

かなり忙しそうだったはず……

「とつても綺麗だったから目に入ったわ」

「人の事が言えるか？」

俺から見ても美人だと思つし、さつき首を傾げた姿も似合っていた。

「うふふ ありがとう、こちらへどうぞ」

嬉しそうに笑いながら案内された、一つだけあいてる窓際の席だ。

「ご注文は何にしますか？」

お冷とメニューを渡せれメニューを開いた……これとこれでもいいか。

「ケーキセットAとブレンドコーヒーを」

「かしこまりました、少々お待ちください」

そういつて店員は離れた。さてケーキが来る間に何をしようか……
……そうだ、この世界で携帯が使えるか確かめるか。ポケット

から携帯（F・01A）を取り出し確認する、電波は三本……普通に使えるようだ、インターネットも問題なし、念のため前のアドレスや電話帳は全部消すか？メールは……これも消すか。

「お待たせしまし……わあ／＼／＼」
携帯をデータを整理していると、おそらくさっきの店員に似た……娘だろ？少女が注文した品を持って来た……が俺を見ると顔を真っ赤にして固まった……どうしたんだ？

「……………どうした？」

「／＼／ふえっ！？ご、ごめんなさい！」

俺が声を掛けて再起動したらしく、かなり慌てている……それでケーキやコーヒが倒れないのは奇跡だ。

「で、では！ご、ごゆっくりどうぞ／＼／＼」

テッテッテッテッテ……

どうしたんだ？そんなに慌てたらころ「にやっ！」あ、転んだ。すぐ起き上がったから大した事はなさそうだ。

さて……………ショートケーキ、ガトーショコラ、ロールケーキどれにしようか……………ん？さっきの子がまたこっちに来た、ケーキを持つてる。

「追加か？」

「えっと、これはお母さんが休憩しなさいって……………」

チラリと見てる方に視線を追う、さっきの店員……………つまり母親が満面の笑みでサムズアップをいていた。

一緒に食べるなさい……………と言ってるかの様だ。

「嫌じゃなかったらここでもいいぞ」

「いいんですか？」

「断る理由がない。早く座った方がいい休憩時間がなくなるぞ」

「はい！あ、ありがとうございます／＼／＼」

そう言つて向かいに座る。その子の前にあるのは俺と同じケーキ
ツト、違つのは飲み物が紅茶だけ「あ、あの！」「…ん？
声が出た方を向くと顔を赤くして。

「あ、あの！私は高町なのはつて言つたの。友達になつて欲しいの！
／／／／」
冒頭に戻るといつわけだ。

「えつと……だめですか？」

赤くしていた顔が一変して少し不安そうな顔でこっちを見ている。

「ん？いいぞ、断る理由もないし」

「やったあ！」

今度はさっきの母親と同じぐらい満面の笑みで両手を上げて喜んで
いた。周囲の客はそれを微笑ましく見ている。

「名前がまだだったなトキガワコダイだ、コダイでいい」

「よろしくお願いします／／／」

それからなのはと色んな話を話した。同い年と言つたら驚かれた、
年上だと思つていたらしい。聖祥に通うと言つたらすごく喜んでい
た。なのはが自分の家族や友達の事を話すたびに表情がコロコロと
変わっていた。

「それでね、今日はアリサちゃんとすずかちゃんが来てくれるの」
その二人は確か喧嘩してその後仲良くなつたつて言つていたな。丁
度いいその二人が来たら適当に挨拶して帰るか………つと思つた
んだよ………

「私も友達になりたいからすずか呼んで／／／」

「アタシも別にいいわ、アンタの事も名前前で呼ぶから／／／」

予想通り。客も含めほとんどの人が驚いてる……………が桃子の反応は予想外だぞ……………

「ふえええっ！おとこってあのおとこ!?」

「なのは、それ以外に何がある」

「という事は私、男の子に…………… / / / /」

「よしすずか、分かったなら腕から離れる」

「嘘よ！サギよ！こんな超美人顔が男のはず無いわ！」

「アリサ……………残念だがこれが現実だ」

「丁度よかったわ！なのはに接客の時に着せようと思っていたんだけど、サイズが小さくて、でもあなたなら着れるわ！この白ゴス」

「桃子……………黒の色違いがあれば着る」

「……………着るの!?!」

「あるわよ、もちろん!」

「……………あるの!?!」

「あと、あまり露出は嫌いだからニーソックスとかないのか？無ければガーターでも」

「両方あるわよ。縞々のニーソ何てどう？」

「……………採用」

「……………何か着る前提で進んでる!?!」

「ちよつと待つて！何でちゃん付けで呼んでいた時言わなかったの？それよりお母さんは何で男の子と分かってそれを着させるの？」

「聞かれなかったし、触った時に気づくと思っていたが第一に……………

……………

「そんなの決まってるじゃない」

「……………その方が面白い（もの）（リアクション）が見れるから!……………

……………え?」

美由紀の言葉に桃子と八モったので、思わず桃子を見る……………桃子も俺の方を見ていた……………

ガシッ!

無意識に俺達は握手を交わしていた。

「やるわね……」

「そつちも……」

桃子とはかなり気が合いそうだな。

「にやははははは……お、お母さんが二人いるみたい……」

なのはの引きつった笑いが印象的だった。他の人も同じ顔なので多分同じ事を考えているんだろう。

まあ、そんな事でゴスロリ服を着たんだが。

「ゴゴノノノノノノノノノノノノノノノノノノ」

おいそこの三人娘何か喋れよ。

「お母さん、本当にだ、大丈夫？」

「ええ……むしろとても幸せな物を見れたから……」

少し遠くでは心配そうにする美由紀に若干鼻声で返す桃子。

……え？何で鼻声かって？それはこのゴスロリを最初に見た桃子が悶絶した揚句暴走して色々危ない発言があつたので、血の海にしてやった。……ん？鼻声と関係ない？じゃあなんで生きてる？

心配するな。血の海の正体は鼻血で俺がした事と言えば上目遣いで『お姉ちゃん』と連呼しただけだ。

その後は三人娘を猫だまして復活させた。その時の悲鳴が「」にやっ！」「」と猫らしい悲鳴だったと付け加えておく。

「はあ……何か今までにない濃厚な一日だったな……」

ベットの（何故かビクサイズ）上に寝転んで今日の事を思い出していた。

復活させた後も話は続いたが、流石に暗くなると色々危険なので（体験談）アリサとすずかが帰るときに俺も帰ることにした。（もちろん着替えて）

その時アリサが車で送って貰うことになったが。その車内でアリサとすずかに挟まれ腕を組まれたまま帰路に着いた。

家に着いた時、食料が無い事を思い出し速攻で商店街に買い物に行った。それでまあ、体が子供だからお使いと間違われ色々おまけしてくれたのは嬉しい誤算だ。

あとは、食材を冷蔵庫に入れて、部屋の確認して放置した物を整理など休む暇もなく動き回り全てが終わる頃には10時だった、夕食も食べる気分じゃないのでシャワーを浴び寝間着（男物のブルブルのYシャツ）に着替え寝ることにした。

「明日から学校か……三人と同じクラスになれると……いいな……」

なぜかそう思いながら眠りに着いた。

こうして俺の転生して一日目は終わった。

くオマケ1

「そうだ、勘定を払ってない」

「あ、いいわよ今回は」

帰るときにケーキの金を払って無かったので財布を取り出すと桃子に止められた。

「今日はあなた見たさにたくさんお客さんが入ったのよ。そのために窓際の席にしたんだから」

桃子よ……俺は客寄せパンダか？

「どっちかって言うと客寄せ人形？」

心を読むな……

あの店に行くのは巨大な意思を感じるbyコダイ（後書き）

メガネ「なんとかできた……」

コダイ「イメージ出来ても文章にできないというよくあるパターンで詰んでいたな」

メガネ「いっつもそれに苦しめられてる（´・`・´）」

コダイ「まあ……頑張れ……」

メガネ「うん……皆様からの質問や感想を待っています。どうかよろしくお願いします」

コダイ「次回から学校か……嫌な予感しかしない……」

（次回もお楽しみにしてください）

転入生は大体そんなモノbyコダイ（前書き）

PCのトラブルで少々鬱になっていた

転入生は大体そんなモノbyコダイ

「う……ん……？」
ん〜と、朝だよな…朝でいいよなコレ……

時刻、午前三時

正確には明け方だなこれ……二時間以上暇になるなこれ。

「やっぱり、寝るのが早すぎたか？」

色々考えた結果、こんなに時間があるのならかなり凝った弁当でも作ろうとこのまま（ワイシャツ）にエプロンを着けてキッチンに直行。

「えっと………主食はパンにしてサラダとデザートを一品づつにするか……じゃあまずはパンの生地を………」

（約三時間後）

「よし、こんな物かな？」

出来上がった弁当は焼いたイングリッシュマフィン（朝マツクのパン）をベーコン、目玉焼きを挟んだのと、レタス、トマト、クリームチーズを挟んだマフィン。プチトマトよりやや大き目のトマトの中をくり抜き（中身はマフィンのソースに使用）細かく刻んでドレッシングを和えたサラダを入れた一口サラダ、渋皮を剥いたオレンジとグレープフルーツをヨーグルトと混ぜたデザート。

崩れないように包んでバックに入れる。後は着替えて出ればいいので残りの時間でキッチンを掃除した。

「少し早すぎたか？」

改造した制服着た俺はスクールバスの停車場にいる……ん？なんで改造してんだって？それは普通に着るとそれはもうあり得ない位に似合わないからだ。

例えるなら無理に男装している女子というところだ。今は黒の長ズボンにして、髪は適当に後ろで白いリボンで二つに縛ってる。

「時刻表の通りだと……来た」

時間ピッタリにバスが着いた、これからはなるべく遅く起き「待つて〜！」「ん？……」

「すいませ〜ん乗りま〜す！」

向こうから走ってくるのは……声からしてなのはか……

「すまない、もう一人乗るから待ってほしい」

そう運転手に声を掛けなのはが来るのを待った。

「はあ……はあ……待っててくれてありがとう……ってコダイ君！？」

「ん、とにかく乗るぞ」

驚いてるのはを無視してバスに乗る。

さて、開いてる席は……

「ん？なのは、あそこにアリサとすずかがいるぞ」

「ふえ？あつ！ホントだアリサちゃん！すずかちゃん！」

なのはが最後尾二人に気付くとそこへ走っていった。さて、俺も開いてる席を探さないと……

「コダイく〜ん」

「早くこっちに来なさいよ！」

「一緒に座ろ〜」

おい三人娘、名前を呼ぶのは構わないが大声で呼ぶな、乗客に迷惑が掛かるだろう……

無視すると後が面倒なので（主にアリサ）三人の元に向かう。

「えへへ／／／／」

「……／／／／」

「む」

右隣に嬉しそうに腕に抱きついてるなのは。

左隣に顔を赤くして俯いて、腕を組んでるアリサ。

その隣で頬を膨らましてるすずか。

なぜか三人がジャンケンして勝ったほうの隣に俺が座ることになり結果が上記の通りすずかが負けた。

ただのジャンケンなら問題ない、だがこの三人はグーを出すやらチヨキを出すなど小学生かとツッコミたくなる心理戦をしていた。

その後は学校に着くまで三人娘の質問攻めだった。『そのスタイルをどう維持してる』とか『どんなスキンケアしてる』や『髪の毛はどんな手入れしてる』などもはや男に聞く質問じゃないよなそれ……

全てノーコメントと答えた。特に何もしてないから。

学校に着いてから職員室に行き教師に軽く挨拶して教室に案内され、紹介されたんだが………

「……わあ／／／／」

女子共、第一声がそれか？……それと男子無言で殺気を込めて睨むな、というか何で俺が男と分った？……あつ制服か……

「じゃあトキガワ君は高町さんの後ろの席でお願いします」

なのはの後ろは一番後ろでその席に座った。あとアリサもすずかも席が近い。男子からの殺気が一気に増えた……この際無視だ。

そして一時間目なんだが何故かそのまま質問会に……それでいいのか教師？でもつまらない勉強聞かされるよりマシかな……

「誕生日と星座は？」

「六月六日の双子座」

「何処に住んでるの？」

「翠屋から徒歩10分の一軒家」

「趣味と特技は！？」

「共に家事」

「好みのタイプは！」

「貴様には興味はない！」

「ののしつてください」

「この豚野郎………おい待て！今の質問じゃないだろ！誰だ！」
「なんだこの状況！？前の世界の学校と何か違う………それとこの三人娘はメモしてないで止める！」

「明日からサボろうかな」

「転入早々何言ってるの！」

後ろから来るアリサの拳をかわす。

「当たり前さいよ！」

「当てるよ」

再びアリサの攻撃、そしてかわす。

他のクラスに迷惑じゃないかって？問題ない、ここ屋上で今は昼休みだ。あの質問会は後半から俺が罵倒してるだけだったし、アリサがキレなきゃ二時間目も続いてはず………そのアリサもキレる前まで参加してたけど、もちろんなのはとすずかも例外ではない。

「しかしこの学校は転入生がそんなに珍しいのか？」
とにかくアリサを落ち着かせて弁当を広げた。

「あ、コダイ君のお弁当かわいい」

「そうか？」

隣にいたはずかが俺の弁当を覗き込んだ。それを聞いたなのはとアリサも覗き込んだ。

「わぁ〜お店で売ってるみたいなの〜」

「彩りも良いし、トマトを入れ物にしたサラダもセンスいいわね」
三人が手放して褒めてくる、料理は前の世界では子供の頃からやっているから不味いわけが無い。

「これ、コダイ君のお母さんが作ってくれたの？」

「自分で作ったぞパンから全部……………」

「……………嘘お！……………」

おいその反応は心外だぞ、言っておくが家事……………事料理に関しては同年代（実年齢）に負けるつもりは無いぞ。

「けどパンってかなり時間掛かるんじゃない……………」

「それは今日は三時に起きたから凝ったものを作ろうと……………」

「凝りすぎよ！つてか早すぎ！」

「そうか？まあ、実際は凝ってる凝ってないとかはどうでもいい、美味しければそれでいい。ほら、あーん」

「アムツ！？」

「……………あつ！……………」

さつきから詰め寄ってくるアリサの口に一口サラダを放り込む。

「……………どうだ？」

「お、美味しい……………」

ほらな？けど顔が赤いのはなぜ？

「アリサちゃんずるい！コダイ君、私も！」

「私も……………食べさせて欲しいな……………」

「ん？いいぞ、あーん」

サラダを今度はなのはとすずかの口に放り込む。

「えへへ……………」

「…………………………」

二人とも顔が赤いけど、美味しそうに食べてるからいいか。

「じゃあ、このおかずと交換ね……えっと、あ〜ん／＼／＼」
おかずを掴んだ箸を口元に近付けてくるすずか。それって恥ずかしいか？俺は恥ずかしくないけど。

「じゃあ……アム……モグモグ………あっ美味しい」

「えへへ／＼／＼」

嬉しそうに笑うすずか……なるほどこんな味付けもあつたか……
…うん、大体分った今度試してみよう。

「コダイ君、私も！……あ、あ〜ん／＼／＼」

「アタシだけ貰ってちゃ不公平でしょ、だからア、アタシのも食べなさいよ／＼／＼」

「え？じゃあ……アム……」

なのは、アリサの順に食べる………うん……

「やっぱり美味しい」

「／＼／＼／＼」

さつきから三人の顔が赤くなったりするけど風邪か？

「……ふざけんな〜！！」「……」

突然、周りの男子の大部分が立ち上がった。どうしたんだ？

「さつきから見せつけやがって！」

「アイドル三人と昼食でしかもあ〜ん合戦だとお！？」

「このハーレム野郎が！」

何怒ってるんだ？

状況把握中………状況把握完了

「その……何だ………男の嫉妬は醜いぞ？」

ブチッ！

「「「「「ぶつ殺す！」「」「」「」

「穏やかじゃないな」と

そう言いながら、屋上から飛び降りる。

「逃がすな追え！」

「「「「「おおおおおおおおおおおおお！！！！」「」「」「」

そした俺の逃走劇が……………始まるわけがない。屋上から飛び降りるふりをして縁に捕まっていただけなんだよねこれ。

「よつと」

「「「コダイ（君）！？」「」

やっぱり驚いてるな。

「どうした？キョトンとした可愛い顔して」

「可愛いって／＼／……………で、でも、さっき飛び降りて男子達に追いかけられてるんじゃない」

「すずか、その答えはな『あんなのを相手にしても疲れるだけで逃げふりをした』だ」

三人の引きつった笑いを浮かべていた。

ちなみに追いかけた男子達は昼休みが終わった後も俺を探していたらしく先生に物凄く怒られたらしい、どうでもいいけど。

転入生は大体そんなモノbyコダイ（後書き）

メガネ「やっと更新できた……………orz」

コダイ「どうした？」

メガネ「実はPCがトラブル起こして修正不可能だから再セットアップしたんだ」

コダイ「それは災難」

メガネ「はあ……………まあ気を取り直して。今回は折角の斗貴子さんボイスなので「この豚野郎」と言わせてみました」

コダイ「質問もまんま武装連金だな、あと料理の描写は細かったな、トマトのアレって面倒くさくないか？」

メガネ「あれも利益あるよ？ドレッシングが染みにくいし、一口で食べれるから他の料理にも掛からないし」

コダイ「さすが調理師免許取得者」

メガネ「まあね。皆様からの質問や感想を待っています。どうかよろしく願います」

（次回もお楽しみにしてください）

何処へ行ってもシスコはこんな扱いb yコダイ(前書き)

無印はもう少し先だと思えます。

何処へ行ってもシスコンはこんな扱いbyコダイ

初登校から数日、初めての休日になのはが家に遊びに来てと言われ来たんだが……正直かなり時間を無駄にした……例えばナンパして来た奴を地面にめり込ませ犬神家をさせたり。そのストレスを道の真ん中でたかってる連中にワザとぶつかり当たり屋のごとくボロボロにして発散したりとそのせいで本来の三十分オーバーしてしまっただ……ん？ナンパはともかく後半は自分の自業自得だろ？……その通りだ、だが後悔はしていない。

ピーンポーン

「さて、なのはどうしてるのやら……」

多分、怒るか、泣くか、拗ねるか……いや全部だな……

「あら？コダイ君遅かった……」

そんなこと考えてると桃子が俺を見て固まった……

「か……」

「か？」

聞き返した瞬間、俺の視界は暗くなった……

「可愛い〜！／／／／」

抱きしめられた、正確に言えばそのまま頬擦りされてる……

「桃子……何をしてる……」

「可愛いから抱きしめています」

「分った……今すぐ離せ」

「いやよ コダイ君が可愛い格好してるのがイケないのよ」

「男物の服はあり得ない似合っていないから仕方ない」

「ん〜お肌スベスベ〜」

このままじゃあずつと家に入れない……やるか……

〜しばらくお待ちください〜

「と云うことでのなのは所に案内してくれ」

「わ、分ったは……………こっちよ」

鼻を押さえて案内してくれる桃子、手の隙間から血が滴ってる……………察しのいい人は分つてると思うが俺はただ上目遣いで『お姉ちゃん』と言っただけだ。ん？いくらなんでも男捨てすぎじゃないか？つて……………そんなの今さらだろ？それにこの顔（女顔）は気になっているぞ？それに女装はオシヤレだろ？（かなり違う）ちなみに服装はこの世界に来た時の服装と同じ黒ずくめ、違つとすれば上着が黒のロングコートじゃなく黒のパーカーなだけだ。

それで桃子になのはの所へ案内されたのがいいが……………

「髪縛つてるんだ、可愛い」

「学校ではいつもこの髪型なの！」

そこには美由紀もいた、あと黒髪の男が一人……………後なのは、何で貴様が胸を張る。

「土郎さんこの子が前言ったコダイ君よ」

土郎……………確かなのはの父親だっけ？後は会ってないのは……………確か長男の恭也だけか……………

「君がコダイ君か……………なのはから聞いたよ、新しい友達出来たつてとても嬉しそうにね」

「そうか……………」

そう返した後は、他愛もない会話が続いた。

「コダイ君、もしかして武術を習っていないかい？」

「そうと言えるかどうか分らないが習った……………と言つべきか主に

剣術だな」

俺がそういうと士郎の目が輝いた。

「主にといいと剣以外にも？」

「ああ、正確には剣術を習う前に手当たり次第覚えただが簡単すぎた、だがその剣術は違った一つを完璧に覚えるに何度も死にかけ……いや死んだな……人はあんなに臨死体験を行えるのかと思っただよ」

「そうか、実は俺も剣をしていてね。どうだい？今度手合わせでも……」

「子供に血の海を見せるつもりか、そう話した時点で互いに実力がわかるだろ」

「ははっ、それもそうだね」

一瞬キョトンとして残念そうに笑う士郎。

実際の所元の体なら互角にやれるだろう、けどこの子供の体なら……

……ギリギリ負ける。

「じゃあ後十年待つとするよ」

「気が変わっていないければな……」

そのあとは、趣味とか普通の会話が行われた。

「コダイ君、どうしたらそんなに髪の毛が綺麗になるのか本当に教えてほしいの」

「ノーコメント、前にも言った通り特に何もしていない」

なのは、それは男に対する質問じゃないだろ。それと詰め寄るな、士郎が引きつった笑いを浮かべてるぞ……って殺気！？

「へ？に、にや！／／／／」

なのはを抱きかかえ前へ跳ぶ、俺のいた所には木刀が振り下ろされていった。

「かわしたか……」

そこには黒髪の青年……おそらくなのは兄の恭也だろう。

「そんな殺気を撒き散らしていたら誰でもかわせる」

「少しはやるようだな……だがその程度ではなのはは渡さん！」

「意味がわからん」

「貴様がなのはを誑かした男か………！」

は？何言ってるのこのオトコ？

「何処をどう見ればそう見える」

「今の貴様を見れば誰だったそう思う、なぜ抱き合ってる!？」

抱き合ってる………ってあ………

「うゝ／＼／＼／＼」

抱きかかえたなのはを忘れていた。

「アラアラ大胆」

桃子………この現状でよくそんな事言えるな………

「こうなったら、コダイとか言っただな！俺と勝負しろ！」

「どつしてこうなる………」

もはや口癖だなコレ………

あの後士郎が「だったら道場に案内しよう！」と張り切っていた。

俺の剣術見たいのもあるが止めるよ親として。

高町家が隅で全員集合しているし………それで今俺は殺気を撒き

散らせた恭也と向かい合っていた。恭也は木刀の小太刀二刀、俺は

木刀の大太刀（約2メートル）。審判は士郎だ。

「御神真刀流・小太刀二刀術、高町恭也。参る！」

恭也が構える………こっちも名乗るかのか？

「………神殺の死手の一振り………神滅流殺神剣。トキガワコダイ

対して俺は自然体。

「では………始め！」

「行くぞ！」

開始と共に恭也が消える……だが

「遅い」

「なっ！」

俺は振り返り、恭也の小太刀を二刀とも弾き飛ばし剣先を喉元につきつけた。

「そこまで!!」

「コダイ君凄かったの!カッコよかったの!」

なのは……言っておくが負けたのは自分の兄だぞ?

「さっき何をしたの?全然見えなかったけど……」

「え?ただ恭也の小太刀を二刀とも弾き飛ばし剣先を喉元につきつけただけだか?」

「あの一瞬で?そうなのお父さん」

美由紀が審判をしていた士郎に聞いた。ちなみに恭也も美由紀と同じ事を聞いてきた。

「ああ、おそらくコダイ君は剣の速さ、身のこなしの速さ、先読み
の速さによつて常人を超えた速さで動けるようだ。しかもその大太
刀を高速で振るえる腕、力も相当あると見ていい」

「元々神を殺すために編み出された剣が人如きに負けてたまるか」

「君が小太刀を弾き飛ばしたのは君が言っていた流派の技かい?」

「龍顎刃りゅうかくじんだ、本来は腕を切り落としてから脳天に振り下ろす技だ」

「だが喰らった俺から見たら弾かれるのとつきつけられるのがほぼ
同時だったぞ?」

「まあな、俺の修めた剣術はまず肉体と精神のリミッターを無くさ
ないといけない、簡単に言うなら常に火事場の馬鹿力を出せないと
始まらない」

俺の言葉に二人は目を見開く。いつの間にか道場には俺と士郎と恭
也しかいなかった。

「そんな事をしたら体が先に壊れてしまうじゃないか」

「そう、だから何度も死にかけた…それに慣れるまで何度も何度も毒を刷り込み抗体を作るように……っともうこれ以上は言えないな。本来この剣術はお伽噺の眉唾物程度の物、表に出てはいけない代物だ、まあそれを知ってるとしても土台を作る段階で自滅するのは明白だ」

例えそれが出来たとしても技の習得の方法がその技を同じ技で完璧に返すまで何度も喰らう。たとえ死にかけでも……こんなのをやつてよく生き延びられたものだな俺……

「コダイ君………君は「お父さん！」ん？なのは？」

士郎が何か言おうとした時なのはがやって来た。

「お母さんがご飯が出来たから呼んで来てって、あとコダイ君も良かったら食べてきなさいって」

そうだな……断る理由もないし……

「じゃあお言葉に甘える」

「うん！じゃあこっちな」

なのはが俺の腕を組んで引張って行った。

そしてこの話は有耶無耶になった………あと恭也よ殺気を込めて睨むな。

高町家と普通に夕飯を食べる事になったのだが、何故か泊まる前提で話が進んでいた………特に明日も休みだし問題無いので二つ返事で返した。

それでまあ……入浴や寝る所がなのはと一緒に言う事で恭也と一緒に着があったが桃子のいい笑顔で大人しくなった、ちなみなのはと一緒に言ったのは桃子だ。

他にもいろいろあった、風呂場で体重計に乗ってみたらなのはが凄く落ち込んだり。寝るときにいつもの寝間着（Yシャツ）に着替え

たら桃子が悶絶したりとなどなどしている内に夜は更けていった。

後日、そのことをなのはから聞いたアリサやすずかがぜひ自分の家にもなどと言って今度の休みに二人の家に泊まることになった……

……

くおまけく

なのはの家に泊まった朝、早く起きて暇だったので桃子に許可を貰って朝食を作ったんだが……

「ん〜 私より美味しい〜これならなのはのお嫁さんにピッタリね！」

桃子、俺が嫁か？……………あと満面の笑みでサムズアップするな

……………

「コダイ君がお嫁さん……………／＼／＼」

なのは……………妄想するのはいいが声にしつかりと出てるぞ？

「将来、どちらがウエディングドレス着るんだろっ……………」

苦笑いをしている土郎……………多分、いや間違いなく桃子の策略で両方もな……………

何処へ行ってもシスコンはこんな扱いb yコダイ（後書き）

メガネ「実はさっきチラッと見たんだが……この小説がPV13000、ユニークが2000を突破した……こんなに見てくれる人がいたなんて本当にありがたいとございます」

コダイ「空気読まず悪いんだがPVとユニークとはどういう意味なんだ？」

メガネ「えっと、PVはページの総表示回数的事。二重アクセス防止はしていなくて、同一端末による同一秒のアクセスはカウントしていない。つまり何回呼んでくれたかって事かな？次にユニークだけど同じ人（同一端末）からのアクセスは1日1回のみカウントして。ページを移動した場合も同一端末と確認されればカウントしない。これは何人が呼んでいるかって事かな？」

コダイ「なるほど…後感想も届いたんだよな」

メガネ「マーボー様ありがとうございます！」

コダイ「確か『どうしてこうなった？！ 神による転生者の輪廻物語』の作者だったな……主人公の劉とは何故か気が合いそうな…

…（男の娘同士だから）」

メガネ「何かお礼しないと………何かある？」

コダイ「ん？俺が作ったショートケーキと翠屋初来店の時に桃子が見せた白ゴスを贈って来たぞ（徒歩で）」

メガネ「アレまだ持っていたんだ……」

コダイ「後、対桃子用の兵器も渡して置いた」

メガネ「おい……まさかそれって……」

コダイ「じゃあ、今日はアリサの家に泊まる日だから」（スタスタ）

メガネ「っっておい待て！……って行っちゃった。……えっと、皆様からの質問や感想を待っています。どうかよろしくお願いします」

「次回もお楽しみにしてください」

ナイフは瀟洒なメイドの証byコダイ(前書き)

次回から無印に行きます。

ナイフは瀟洒なメイドの証byコダイ

あれから色々あってもう二年生もあと少しって感じだな。

……ん？アリサとすずかのお泊りの件はどうなったって？…別に大した事ないが。

アリサの家ではまず………犬を抱きしめたな………小型大型問わず、その時に何故かアリサが真っ赤になってぶっ倒れたけど………何かあったのか？後はゲームとかして遊んだぞ？………勝敗？初回は負けたがそれ以降は殆ど勝ったぞ？

すずかの家では、その道中ですずかの専属メイドのファリンにあつた………荷物の雪崩と共に。無理やり荷物を運び（大丈夫と言って目と鼻の先でまた転んだ）すずかの家に向かった………その時ファリンが顔を赤くしてずつと俺の腕を掴んでいた………転ばないためか？。すずかの家の人に会ったが………ノエル本当にファリンの姉なのか？後、すずかの姉の忍、うん………気が合った。まさか初対面で無意識に桃子同様に握手を交わしていた。すずかがなのはと同じ反応をしてたよ………この家には猫がいた………勿論抱きしめた、そしたらアリサ同様、すずか達も真っ赤になったぶっ倒れた。

みんな復活後に談話していたがファリンによるドジで紅茶を被り着替える事に。忍が暴走したが、勿論血の海に（鼻時的な意味で）してやった………ちなみに今回言ったのは『ねーねー』だ。

………最後にこれは両家に共通する事だが。なのはの所で朝食を作ったのを言ったため、次の日の朝に作ったんだが………両家の感想は………

『娘の嫁にピッタリだ！』

………だそうだ………それでいいのか？

学校でもあんまり変わらないな…四人で登校して、暇な授業を聞いて、四人で弁当を食べて、男子から逃げた（フリをした）りと特別な行事以外は特に無かったぞ……………ん？いくらなんでも端折りすぎだ？…そんなのは作者^{アレ}に聞け。

んで……………俺は今何やってるかと言うと……………

「コダイ君、オーダーよろしくね」

「了解」

翠屋で接客をしている。服はメイド服だ勿論ロングスカートだ。なのはも同じメイド服を着ている。

「四番テーブル、シユークリームとブレンドコーヒーのセットだ」

「は、い、っとコダイ君そろそろ休憩しなさい、朝から働けばなしよ」

「そつだな……………分つた」

「そつだ！ついでにお使い頼めるかな？」

「ん？構わないぞ」

「じゃあコレ」

桃子がメモとお金を渡した。

「わかった、じゃあ行ってくる」

「気をつけてね」

「……………どうしてこうなる」

なるべく小声で呟いた。店で頼まれたものを買って帰ろうとした時、突然の爆発音と共に現れたのは銃を持った覆面の男が沢山……………うん、コレ強盗団だね。

全員縛られてる様だし……………白昼堂々と強盗とは……………ん？犯人の一人

が人質を連れて来たみたいだ……って、あの金髪と紫の髪ってもしかして……アリサとすずかだ……うん、間違いない。

何であの二人だけ？子供なら他にもたくさん……って……ああ、そういう事ね。

本当の狙いはアリサとすずかの親から金を取るため、人質は二人だけじゃなくここにいる客全員、要求に従わない時の見せしめにするつもりか……全くどんなに恨みを持つてるか知らんが過激すぎだぞ……

さて、これからどうするか……武器は……昨日ハンドガンの整備をしたままだから持ってない、代わりに投擲用のナイフを60本……それ以上あるかも。どうする？

- 1．犯人を殺す
- 2．犯人を完膚なきまでに殺す
- 3．犯人に生まれた事を後悔させて殺す

4の全部……って違う、まともな選択肢無いな……せめて人質を助けるって選択肢があっても………ないな、俺だし。よし……やるか………

まず、誰にもバレない様に関節を外し縄抜けを行う。そしてナイフを犯人の上にある照明めがけて投げる。

大きな割れる音が、この場にいる全員が視線を一つに向ける………今だ。

一番近くにいる犯人の一人を脳震盪狙いで顎先を殴り、呻く間も与えず意識を刈り取る。それを犯人のリーダー格らしき男の近くに投げ飛ばす。

「なっ！誰だお前は！」

仲間が倒された事にようやく気づいて俺に銃口を向ける犯人共……俺が倒したのも含め15人か。

ここで名前言うのも面白くないし……ん？そうだ、俺そのまま翠屋を出たんだ……メイド服を着ているから……

「通りすがりのメイドです」

メイドだから敬語にするか、後口調も女に変えて……うん、完璧に女だこれ。

「「あ……………」」

アリサとすずかが何か言いたそうだ、もしかして分った？念のために人差し指を口元に当てて首を傾げる、俗に言う『内緒にして？』

のポーズだ。二人はこの意味を正しく汲み取ったらしく小さく頷く。

「で、そのメイドさんがどうしたんだ？まさかこのガキ共のメイドか？」

「はあ……………全く関係は……………無いとは言えませんが、縁があると言っておきましょう。それに早く用事を済ませて、仕事に戻らないといけないので早くその二人を助けさせてもらいます」

って敬語疲れる……………ってそのリーダー格ニヤニヤした顔でこっちを見るな、気色悪い。

「分ってねえな……………こつちには銃があんだぜ」

手を挙げると犯人共が一斉に構え始めた……………遅すぎ。

俺はナイフを数本取り出し。

「銃って……………」

銃口に狙いを定め一斉に投げる！

ガガガガガガガガガガガガ！

一瞬の出来事で銃を落とす人、打つ直前で暴発して気絶するものが半々……………残り七人

「その玩具？」

挑発するようにナイフに軽いキスをする。

「お、お前は一体誰なんだ!？」

「さつきも仰った通りただのメイドですよ？」

「ただのメイドがそんな投げナイフが強いはずないだろ!？それよりナイフなんか持つか!」

「知らないんですか？投げナイフの腕は料理の腕に比例するって？後、ナイフは瀟洒なメイドの証ですよ？」

勿論嘘だ。

「ぐっ…………… やっちまえ!たかが一人だ!」

リーダー格が命令すると七人の内四人がナイフを出して突っ込んできた。

突っ込んでくる一番近い順に最初の犯人同様、顎先を殴り意識を刈り取る。念には念を入れ、右肩の関節を外し携帯している銃も分解しておく。

一人…二人……………三人……………残りの三人は……………大体考えてる事は分る、俺はいつでも投げられるようにナイフを三本持ち四人目を倒した。「おっと!動くなよ、これ以上動いたら人質が!知っていましたよ!ぎゃあっ!」

リーダー格の言葉に被せるように投げたナイフは三人のナイフの持つてる手に刺さった。

その隙を狙い、リーダー格の顎先を殴り、気絶させる。残りの二人は攻撃体勢に入っていたが顔面ギリギリにナイフを投げ意識を逸らし、同じように意識を刈り取った……………意識を取り戻したのは……………いないな。

「さて……………」

再びナイフを取り出し、アリサとすずかを縛ってるロープを切った。

「本当にコダイ君?……………」

「助けて……………くれたの?」

泣きそうになりながら聞いてくる二人を安心させるため、優しく頭を撫でた。

「もう大丈夫だ……………良く泣かなかつたな」

「う……………うわあああああああ！！……………恐かつたよお……………」

「ひっく……………ひっく……………グスツ……………」

安堵感からきたのか大声で泣きながらしがみ付いてきた二人の頭を優しく撫でた。

「……………ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！……………」

二人の泣き声に続いたのは人質だった人達の叫びだった。

あの後には人ごみに紛れて二人を連れだした、桃子にはあその後すぐ連絡をしたので問題はないだろう。頼まれた物もちゃんと持つてるし……………さっきからずっと二人が俺の腕を抱きしめてるのは仕方ないと思う。

そんな事があつて無事翠屋に着いた途端なのはに抱きつかれた。

桃子の話だとさっきの強盗事件が生中継にされていたらしく。なのはは大泣きで士郎は真剣持って飛び出しそうだったみたいだ。

しばらくは慌ただしかつたが、その後は普通に営業していた。

その営業中……………アリサとすずかが顔を赤くしてこつちをチラチラ見ていた……………メイド服が破けているのか？……………それは無いみたいだ……………

後日、学校にアリサが新聞を持ってきて、その見出しに『戦うメイドさん』として俺が大きく一面を飾っていたのは別の話。

くおまけ

「よし、出来た」

「何が出来たの？」

俺があるもの作っていたら桃子が覗き込んできた。

「最近、脳波で遊ぶゲームとかがあるだろ？それを応用して作った」
そして、俺が取り付けたのは、黒い猫耳と尻尾、それと鈴が付いた赤い首輪だ。

「これを全部着けると脳波を感知して、首輪がその脳波のパターンに合った指示を耳と尻尾に送る……つまり、こうすれば……」

ピコピコ フリフリ

「……………」

「こづつ風に動く……………桃子？」

ドシヤッ！

「気絶！？って血の海になってる……………ん？何か書いてる……………ネ
コミミ萌え？」

ちなみにこのネコセット（仮名）とメイド服を着て接客したら。
今年最高の売り上げになったとか。

ナイフは瀟洒なメイドの証byコダイ(後書き)

メガネ「今回、コダイが強盗犯に言ってセリフはあの某、鼻から忠誠心が出る人です」

コダイ「って誰だか分りそう……」(ピコピコ)

メガネ「あ、まだ付けてんだそれ…しかもメイド服」

コダイ「仕事の合間に来たんだ」

メガネ「あはは……っと遅れちゃいけない。マーボー様感想ありがとうございますー！」

コダイ「感想と共に写真が三枚送られたぞ。一枚目は……」

↳劉(白ゴスver)の「お、お…おねーちゃん／／／／／／／／」
(上目遣い+涙目)の写真。↳

メガネ「これはこれは……頬を赤らめるとは高等テクニクを……」

コダイ「桃子の視点はこんな感じだったのか……二枚目」

↳桃子さんが大量の鼻血で吹っ飛んでいる時の写真。↳

メガネ「なんていい笑顔……」

コダイ「俺も始めて『おねーちゃん』って言った時もこんな感じだったな。さて最後は」

「劉がコダイ君の自作ケーキを食べている時の写真。」

メガネ「美味しそうに食べてるね」

コダイ「そうだな」(ピコピコ フリフリ)

メガネ「(めっちゃ喜んでる……………)」

コダイ「お返しに、犬耳と尻尾に首輪を劉の髪の色に合わせた犬セツト(仮名)とメイド服一式、あとフィオネには劉とおそろいのメイド服とフィオネの髪の色に合わせたネコセツトを贈りに行く」

メガネ「また徒歩で?……………皆様からの質問や感想を待っています。どうかよろしくお願いします」

「次回もお楽しみにしてください」

不思議な生き物と出会つと碌な事がない(経験談) byコダイ(前書き)

PVが20000、ユニークが3000を突破しました！
無印に突入しました。

不思議な生き物と出会つと碌な事がない（経験談）byコダイ

三年生になつたある日の夜中、不意に目が覚めた……………

「……………声？」

声が聞こえた、声からして子供……………外から聞こえたのでは無くて、頭の中から聞こえてきた。

「誰かを……………呼んでる？」

意識を集中する……………もう声は聞こえなかった……………

「気のせいか？」

特に気にしない様に再び眠りに着こうとしたが……………

「2時…何か作るか」

ベットから降り弁当を作ることにした。

「アンタ、何時に起きた」

夜中から飛んで現在昼休み、いつも通りの屋上のベンチでいつもの三人娘と昼食をるんだが…何故睨むアリサ。

「2時だ…何でそんな事を聞く」

「アンタの弁当が凄く豪華だからよ！……………って早起きの新記録更新じゃないの！」

アリサの放つ拳をかわす。

「だから当たりなさいよ！」

「だから当てるよ」

コレ通算何回目？十から数えてないな……………

「あ、アリサちゃん落ち着いて！」

「そ、そうだよ落ち着くの！」

すずかとなのはが止める、これも定番。

誰か聞こえますか？…誰か助けてください

「ん？」

この声……夜中に聞いたあの声か？……どこから……

「どうしたの二人とも？」

すずかが聞いてくる、すずかには聞こえていないようだ…二人とも？

「うっん……何でもないの」

なのは？……もしかして聞こえたのか？

誰か………助けて…

「やっぱり聞こえる！」

「全くどういう事だ！」

なのはと俺が同時に同じ方向に走る。

「なのは、もしかして聞こえたのか？」

俺はなのはと並んで走りながら聞いた。

「うん。もしかしてコダイ君も？」

「ああ、全く夜中からだぞ」

それに血の臭いもするし…絶対碌な事しかおきないぞ。

「……ん？なのは！アレ！」

数メートル先に光る何かを見つけてそこに駆け寄る。そこには……

「フェレット？」

「みたいだな……」

赤い宝石のペンダントを首に提げてるフェレットが横たわっていた

………光ったのは宝石か………って！

「怪我してるぞー！」

「ふえ！どうしようー！」

「コラ〜ドコ行くのよ〜」

「待ってよ〜」

なのはが慌てるとアリサとすずかが追いついてきた。

「急に走らないでよ……ってそのフェレット怪我してるじゃない！」

「アリサ、近くに動物病院があったよな」

「私場所知ってるよ！」

「わずか案内してくれ。なのは、早く行くぞ！」

「うん！」

俺達は急いで動物病院に急いだ。

すずかに案内されやって来た動物病院に着いた俺達は受付に事情を説明して、フェレットを預け治療して貰った。獣医が言うには安静にしていれば良くなるらしい。

「フェレットにしては見た事ない種類だな……新種か？」

「先生、このフェレットなんですけど、どこかのペットなんですか？」

「そうね……私にもよく分らないわ……」

フェレットを囲んで話していると、そのフェレットが起き、あたりを見回すと俺となのはの所で止まった。

「えっと……」

なのははおそろおそろ指を近づけた。俺もそつと指を近づけた……するとフェレットはなのは、俺の順に指を舐めた……がまた気を失ってしまった。

一応この野良フェレットは獣医が預かる事になって、時間も遅いので俺たちは帰る事になった。

「フェレットか？アタシの家は無理かな？犬いるし」

「私も猫がいるから……」

帰り道、4人で誰がフェレットを飼う事にするか決めている……

「俺の家なら問題ないぞ？一人暮らしだし、餌代諸々払ってもお釣り来るし」

億は超えてるからな。

「あ、でも一人暮らしだから学校中置いて置く訳にはいかない……
…なのは、学校に行くときだけそっちの家で預かってくれるか？」

「ふえ？それはお父さんに聞いてみるね」

「まあ……… 桃子いる限り絶対の絶対にOKが貰えそうだが……」
「何で絶対を二回も……」

「ん？それはアリサ、確定事項だからだ」

桃子は可愛い物に弱い、それはあり得ない位。

以前なのはの髪の色に合わせた猫セット（仮）を付けさせて桃子に
合わせて見たら暴走したよ。娘にコスプレさせる始末。なのはは俺
に救いを求めて涙目で俺を見ていた…普通は、助けるのだが忘れて
はいけない…俺の設定は『桃子といろんな意味で息が合う』…桃子
側に行ったぞ？着替えは渡したが着替えは見えてないぞ？そのことで
恭也がキレたりしたが俺（物理的）と桃子（イイ笑顔）で一瞬で黙
らせた……その光景を見た土郎は『ホ、ホントに桃子が二人いるみ
たいだ……』と苦笑してた…何をいまさら。

「ねえコダイ君今度フェレットに餌あげてもいい？（これでコダイ
君の家に行く口実がノノノノ）」

「アンタじゃ飼育できるかどうか不安だし仕方ないから時々だけ
ど見に行つてあげるわ！（これで家に行く口実がノノノノ）」

「コダイ君がもしフェレットさんを忘れたら私が持つていくの！（
これでコダイ君のノノノノ）」

え？フェレットは俺が飼うで決定事項？つてか何か同じ事考えてる
よな気がするぞこの三人娘。

帰宅後、まずペットショップに行つてフェレットに必要な物買って。
獣医にフェレットを飼うと電話をした。色々準備をしていたらフェ
レットを迎えに行く頃にはもう暗くなつていた……

「……………」
目を覚ましたのかこちらを見てくるフェレット……………そう言えば
……………こいつ喋っていたよな？確か頭の中に響く感じで…
「君は……………お願いです！僕に少しだけ力を貸してください！」
そうそうこんな感じで……………は？
「おい、それはどういう」

グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
ツ……………

突如響いた咆哮に体を向けるとそこには見た事もない獣の様な化物
が……………

「何だアレは……………ここは猛獣も看病してるのか？」

「アレは忌まわしき力の元に生まれた思念体です」

すぐ横で声が聞こえる…横を見ると肩にフェレットが乗っていた……………

「思念体？それと誰？……………でいいのか？」

「はい！僕はユーノ・スクライアと言います」

「俺はトキガワコダイだ……………っと！」

化物が襲いかかって来たのでフェレット…ユーノを抱え横に跳んで
かわす。動きは遅いようだな……………

「お願いします！僕に少しだけ力を貸してください！「分った」…
へ？」

ユーノの言葉を被せるように即答した。

「どの道協力しないと助からないみたいだし……………あつちは見逃してく
れないし」

俺は顎で思念体を指す。

「で…俺はな「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオツ！！！」って黙れ！！！」

俺は懐からハンドガン（デザートイーグル）を取り出し思念体に向
かって2、3発撃ち込んだ。

ガウンガウンガウン！！

マグナムは『小柄な人間や女性、子供が撃つと肩の骨が外れる』という表現がされるが、実際は姿勢や扱いを注意すれば女でも撃てる代物だ。

弾は全部当たり思念体を決るが、すぐさま逆再生のように傷が回復した。

「ちツ……ダメージはあるが再生されたらキリが無いな………だったら」

俺はワイヤーとハンドグレネード取り出し安全装置のピンにワイヤーを結びつける。

「これでよし……後は……」

ガウンガウンガウンガウン！！！！

今度は同じ場所に数発撃ちこむ、傷はもはや穴とも呼べるほど深かった。

「ユーノ！今の内に耳塞いどけ！」

「え？えっ！？」

ハンドグレネードをその穴に向かって投げ入れる、穴に入った途端それごと取りこむように再生した。

俺はすぐユーノを抱え近くの倒れてるテーブルに飛び込んだ。

「な、何をするつもりですか！？」

「何……どんなに再生力が高くてもそれ以上の攻撃を喰らえば、死にはしないが動きは止まるだろ？…あと耳、塞げよ」

「あ、はい！」

ユーノはペタンと耳を塞いだ。

それを確認して、持っているワイヤーを手元に引っ張る。手元に戻ってきたのがピンだけと確認し、俺も耳を塞いだ。

……直後

ズカアアアアアアアアアアアアン！！

爆発音と共に衝撃がテーブル越しに襲いかかった。

「さすが思念体、血は出てないようだな」

「す、凄い」

目の前の光景に俺は平然とユーノは啞然としている。

あの思念体は上半身が丸ごと無くなったいた。俺も正直予想外だった……

「後はこれをどう処理するか……ん？」

思念体の中に青い宝石見たいのが埋め込まれていた。

「どうやら、あの宝石が騒ぎの原因か？……で俺は何をすればいい？」

「その通りです。それはこれを使って封印してください」

ユーノが渡したのはユーノが首に掛けていた赤い宝石だった……

不思議な生き物と出会つと碌な事がない(経験談) by コダイ(後書き)

メガネ「ユーノの淫獣フラグ阻止！そして次回からコダイがあ
のバリアジャケットを……」

コダイ「だがそれには問題がある」

メガネ「は？」

コダイ「バリアジャケットは使用者のイメージを媒介とする……つまり俺があ
のバリアジャケットをイメージしなければそれは着れない」

メガネ「そ、そんな……orz」

コダイ「落ち込むな、それと感想着てるんだろ？しかも今度は二人
に」

メガネ「マーボー様、ソラト様どうも有難うございます！」

コダイ「桃子と気が合うのがそんなに珍しいのか？」

メガネ「色んななのは二次創作を見ても、女顔の主人公は桃子に
弄られてるし」

コダイ「なるほど……あ、劉の写真が届いてるぞ」

メガネ「これって劉とフィオナだね」

コダイ「これ位で赤くなるなよ……少し慣れる」

メガネ「慣れたらダメだろ」

コダイ「女装はオシャレだろ」

メガネ「何度も言わせてもらうが…違つたる！！…つとそつ言え
ばマーボー様はコダイの前回のアレが見たいらしいぞ？」

コダイ「ん？そつか…写真でも送るか」

桃子「写真は私に任せて！！」（シュバツ！！）

メガネ「どつから来た！？」

コダイ「じゃあ頼む」

メガネ「スルー！？」

（美少女（？）撮影中）

コダイ「現像して送つたぞ」

メガネ「早いな…つと意見や感想など色々待っています！」

コダイ「……………（いつその事性転換する薬でも作つて劉に送ろうかな
…）」

（次回もお楽しみにしてください）

相棒なるのに一番重要なのは相性b_Yコタイ(前書き)

デバイスのセリフは

念話は「」にします。

相棒なるのに一番重要なのは相性b yコダイ

「えっとこれをどう使えばいいのか？」

あの青い宝石を封印するためには、ユーノから貰ったこの赤い宝石が必要らしい。

「はい、それはレイジングハートと言うデバイス…魔法の杖でこれを起動して封印してください」

「魔法？俺にそんな力があるわけ無いだろ」

魔法以外ならあるけど……

「大丈夫です、さっき僕の念話を聞きましたよね、あれも魔法の一種です。それが聞こえたって事は君に資質があるって事です。起動のためのパスワードを言いますから復唱してください」

「分った…復唱すればいいんだな。さっそく始めてくれ」

「はい。我、使命を受けし者なり」

「我、使命を受けし者なり」

「契約のもと、その力を解き放て」

「契約のもと、その力を解き放て」

「風は空に、星は天に、そして不屈の心はこの胸に」

「風は空に、星は天に、そして不屈の心はこの胸に」

「この手に魔法を！」

「レイジングハート！セットアップ！」

シ

ン……………

「……………」
「……………」

「え？何も無し？ユーノなんかキョトンとしてるし……………」

「パスワードは間違ってるよな……………」

「うん……………パスワードも間違ってるし、資質も十分……………もしかして……………」

「何か分ったのか？」

「えっと……………相性が悪いのかも」

「資質があっても、相性悪ければ意味無いな……………」

「そうだね。ごめんなさい」

ユーノがシユンと項垂れている。俺はそんなユーノの頭を撫でた。

「気にするな、起動できないのは俺が悪いだけだ。それに今はアレをどう封印するかだ」

「えっと……………僕が封印してみます……………出来るかどうか分かりませんが……………」

……………
今の所それが一番良さそうだな……………ん？何か後ろからヤバい気配が……………」

……………
「ユーノ……………俺……………今非常に後ろ向きたくないのだが……………」

「僕も同感だよ……………」

「でも確認しないと……………いつせーのーでで向くぞ」

「うん」

「……………いつせーのーで……………」

俺とユーノが同時に振り返ると。

何という事でしょう、あの半身が吹き飛んでいた思念体は元に戻り、今襲わんとばかりに威嚇してるじゃありませんか……………（某ビフォー・アフター風）

グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オツ!!!

「ふふふ復活したああああああ!!!」

「いくらなんでも早すぎるだろ!!!」

振り下ろされる腕を後ろに跳んでかわす……何か強くなつて無いか？

「こうなつたら、君と一緒にいた女の子に助けてもらうしか……」

「俺と……つてなのはの事か。今から行つても間に合わないだろ、

それにこんな化物外に出せつて言うのか!?」

「大丈夫！さつき言った念話を使えば離れても通じます!」

テレパシーみたいなもの？なのか………

「誰か！聞こえますか！僕に少しだけ力を貸して下さい!」

ユーノが念話を送る……この時間帯じゃなのは寝てるかもな……俺も送つて起こすかな……えつとこんな感じかな？

「今すぐこつちに来てくれ！時間が無いんだ!」

「お願いです！今すぐ僕のとこに、このままじゃ危険なんだ!」

襲いかかる腕を跳んでかわす。ハンドガンは足止めにもならないし手持ちの中で最強のハンドグレネードはアレーっしか持つてない……

「どうせなら刀ぐらい持つて来ればよかった……っ!!!」

再び振るわれる腕をかわす。速くは無いが範囲が広くずつとかわせる訳もなく壁際に追い詰められた。

グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!

動けないと分つたのか一気に跳び掛かつて来た。

「ユーノ、しっかり捕まってる!飛び降りるぞ!」

「へ？えつ！わ、分つた!!!」

近くに窓から思いつきり飛び降りた。着地点に異常なし。

「よつと」

「にゃあっ!」

ん？どつかで聞いた鳴き声の方を向くとそこには尻餅ついたのがいた。

「来てくれたんだ！」

「えっ？フェレットが喋った！？それよりどうしてコダイ君がこんな所に？何で周りの景色が変になってるし、それにあの怪物は何！？」

「質問が多い、落ち着け！　　ったく……ユーノ、なのはを頼んだ」

「　　うん…君はどうするの？」

「　　起動するための時間稼ぎ」

ユーノをなのはに渡し念話で話す。

「　　無茶だよ！危険すぎる」

「　　それはユーノにも言える事だ。安心しろ、さっきも見た通りそう簡単にやられはしない。どんな事があっても絶対死なせはしないし死ぬつもりもない……俺を信じろ」

「　　うん……分った」

ユーノとの念話を終えると、俺は近くにあった鉄パイプ（病院の壊れた壁の廃材）を取り化物と対峙した：

後ろではユーノがなのはにパスワードを教えていた。

グオオオオオオオオオオオオオオオオオオツ！！

襲いかかる腕、今度は跳ぶではなく独楽の用に回って紙一重でかわす。そして持っていた鉄パイプを逆手に持ちかえて、俺の横を通り過ぎた腕に回った遠心力を込め突き刺す。

グオオオオオオオオオオオオオオオオオオツ！！！！

攻撃の手は休ませない、突き刺した鉄パイプを持ったまま足元にあった先の尖った鉄パイプを足で持ち上げ槍の要領で投げ飛ばし、化物に刺さった。

ようやく熱さが引くと膝から崩れ落ちてしまった。数分と言う時間がとても長く感じた……うわ凄い汗。

「コダイ君！手首大丈夫？」

手首？あつ……無意識に手首を押さえていたんだ……あれ？何か変な感触が……服の袖を捲くってみる……

「えっ！？」

「嘘！？」

「何だよこれ……」

俺の右手首にはあの青い宝石が埋め込まれ、その周りに金色の蔦の様な物が伸びていた。（形状のイメージはTOSのコレットのクルシスの輝石）

「こんなの見たこと無い……」

ユーノが腕に飛び乗りそれを触っている……大丈夫なのか？

「とにかくここから離れるぞ」

「ふえ？何で？」

「こここの現状を見て良くそんなこと言えるな……」

「えっ？……あ……」

なのはが周りを見てようやく理解した、電柱や壁とか壊れてるし俺は銃使ったからかなりヤバイ。

「ここについては……凄くマズイのでは？……」

「疑問形にするな……実際サイレンの音が聞こえてるし」

「どどどどどどうしようー！」

「落ち着け、とにかく俺の家が近いから俺に家に行くぞ」

「うん！えっつと……ご、ごめんなさーいー！」

なのはがそんな事を言っ走り出す……って！

「おい！俺の家知らないだろ！」

俺はユーノを抱えなのはを追いかけた。

「始めまして、私は高町なのは、小学三年生、なのはって呼んで」
「僕はユーノ・スクライア、スクライアは部族名だからユーノが名前」

「トキガワコダイ…ってさっき言ったな」

あの後、暴走してるなのはをど突いて捕まえ、そのまま俺の家まで引きずった。……ん？それは誘拐だ？問題無い合法だし、それにバシなければいい。

今は少し落ち着いて紅茶と茶菓子を囲んで自己紹介をしてる。ちなみに俺は汗を大量に汗をかいたのでシャワーを浴びて今Yシャツを着ている。

なのはの事だが夜遅くに帰すのも危険だから、今日はここに泊めるとシャワーの前に桃子に言ったので、さっきシャワーを浴びたばかりで今俺と同じYシャツだ。その事になのはが『ペアルックなの／＼／＼』と呟いたが無視した。

「ユーノ君怪我は大丈夫？」

「はい、助けてくれたおかげで魔力を回復に回せましたから」

「にははははは…私は何もしてない…というか出来なかつたし」

まあ俺が引き千切あんなことつたりしなければな。

「心配なのは僕よりコダイの方です」

「俺？俺がどうかしたのか？」

「その宝石はジュエルシードって言うとても危険な物なんだ」

ユーノは真剣な顔で話し始めた……………

ジュエルシード全部で21個あり、それらはユーノが発掘したがそれを運んでる時に事故にあつてこの海鳴りに漂流。それに責任を感じて一人で集めようとしたらしい…無謀すぎる。

そのジュエルシードの特性は一つ一つが強大な魔力の結晶体で、周囲の生物が抱いた願望…自覚、無自覚問わず叶える…良くそんな物を素手で掴んだな…この性格治そう…いや無理だな…って

「今の話からすると。ジュエルシードの危険性が分つた…がそれに関してユーノが責任持つ理由が無い」

「え？でも僕がジュエルシードを運んでこんなこ、それは事故だろ？事故は事故、別にユーノが故意で落としたんじゃないだろ？」でも、さつきみたいに危険な事があるんだよ？」

「そんなのほっとけないよ、そんなのが街にあつたらみんなが危ないし…それに関わつちやつたし…」

「なのは…でも危険なんだもう二人を巻き込む訳には「もう手遅れだろ」うつ……」

俺の言葉にユーノは黙ってしまった。

「ジュエルシードの漂流はユーノの責任じゃないが。俺はジュエルシードの完璧な被害者だぞ？それなのに巻き込む訳にはいかないつて、既に完全に巻き込まれてるんだよ…なのはには魔法なんていうものに目覚めさせてさ…」

「それは……」

「コダイ君それは言い過ぎ」だから！「え？」

二人に反論させないため強く言う。

「責任を感じているなら…俺達にジュエルシードを集めさせる」

「…えっ？」

「コダイ君！……」

俺の言つた事にユーノは驚き、なのはは嬉しそうにした。

「その怪我であんな物を21個も集めようなんて無謀だろ？それにアレに対処できるのが現時点で俺達だけなんだろ？それに街のあちこちが願望だらけになつたらたまったもんじゃない…なのははどうする？つて…もう決まつてるか」

その目を見れば分るよ…絶対手伝う目だ……気張りすぎて倒れなきやいいけど

「うん！モチロン、ユーノ君の手伝いをするよ！だつて友達だもん！」

「え？友達？」

「悪いな、なのはの持論でな…お互いに名前を呼んだら友達つて…俺の持論は友達のなる条件に日数関係なし、だから俺もユーノとは

友達だ。だから友達の俺達を信じろ」

これは俺の前の世界で親友が言っていた言葉だ…最初の頃は馬鹿にしてたが、今なら何となくわかる。

「コダイ…なのは……………ありがとう!」

俺達3人に新しい『絆』が生まれた。

「でも、封印するためにはデバイスが必要なんだろう?俺はレイジングハートを起動できなかったし…………」

この際ユーノに材料とか色々聞いて自作するか?だとしたらどうするか……………

あの〜

なのはが三日月みたいな杖だったし……………こっちは日輪にするか……………バリアジャケットは……………

もしも〜し

なのはの正反対の黒にして……………ゴスロリにするか……………

むししないです

いや……………やっぱり…ん?

「なのは、何か言った?」

「え?言っていないよ?」

こっちだよ〜

ん?下から聞こえる…下を向くと右手首に埋め込まれてるジェルスードがあった。

やっときづいてくれた〜

ジェルシードが点滅しながら言った…意外と舌足らずなんだ……っ
ておいっ！……！

「ジェルシードが喋った!？」

「ええっ！ユーノ君！ジェルシードって喋るの!？」

「そんなわけ無い!なのは!レイジングハートに調べて貰って!」

「う、うん!レイジングハート、お願い!」

はい………結果が出ました…これはインテリジェントデバ
イスです………

え?これデバイス?………もしかして………

「レイジングハートを起動できなかったのが悔しくて無意識にデバ
イスを望んでいたのか?」

「多分それ……いやそれしかないと思う………願望をこんな完璧に叶
うなんて奇跡としか言えないよ………」

ユーノが呆れてる…俺も正直びっくりだ………

ねえねえ

「ん?」

おなまえは?

「名前?トキガワコダイだ…そっちは?」

わたし?…うん、わかんない…

「無いのか………じゃあ今から付けるか」

ホント!やったあ!

名前か…声からして女だしそれらしい名前がいいな………

確か強い光を発してこいつが生まれたから、レイ………じゃ寂しいな
…このデバイスの形状…金色の部分が血管みたいだな、レイ・ブラ
ット…は男っぽいな………もっと女の子っぽく………ピンク………桃
色………よし!

「名前は……レイ・モモ・ブラット、愛称はレイだ」

レイ・モモ・ブラットかあ…なんかカッコカワイイってかんじだ
ね

俺もそう思う。

相棒なるのに一番重要なのは相性b yコダイ（後書き）

メガネ&コダイ「「ですよね」」

メガネ「レイジングハートの相性によって起動不可能！さすが世界の修正力！」

コダイ「そんで俺のデバイスがジュエルシードって……大丈夫なのか？」

メガネ「その点は調整してるから問題なし！」

コダイ「そうか……早速だが感想を貰ったぞ」

メガネ「マーボー様ありがとうございます！」

コダイ「起動できなかった所を書いている時に着た感想だったけ？」

メガネ「うん、なんか……ごめんなさい」

コダイ「まあ、本編でも言った通り、なのはのバリアジャケットを作っているから次の機会に見せるとしよう……」

メガネ「結局、作ったんだ……」

コダイ「女装はオシヤレだろ？」

メガネ「（この際無視だ）意見や感想など色々待っています！」

コダイ「（劉の分も作るか？俺より少し大きくすればいいだけだから…）」

「次回もお楽しみにしてください！」

どんな時でも事前の確認は重要bYコダイ(前書き)

PV40000、ユニーク5000突破しました！

ありがとうございます！

どんなな時でも事前の確認は重要boyコダイ

俺となのはがユーノそしてレイに出会った次の日の朝、今日は少し早めに家を出る。

なのははあの時、飛び出したままで制服なんか持つてるわけ無いので一度家に帰らなければいけない。俺もユーノを預けたいので一緒に行く事にした。

「ねえ、これから会うなのははお母さんってどんな感じの人？」
俺の肩にいるユーノが念話で聞いてきた。

「ん？……まあ、俺と気が合うかな？」

「コダイに似てるって事？」

「ん」と。全然似てないんだけど……何か似てるって感じ？お母さんが何か企んでると必ずと言っていいほどコダイ君が絡んでるし……

「はあ……」
ため息を吐きながら被害者^{なのは}は語る。まあ一番の被害者は俺が絡んでると知り襲撃を掛けるも空しく桃子にどこかに引きずられる、憐れなシスコン、恭也だけだな。

「まさか、ユーノ預けるだけでこんなに体力使うとは」

「にははははは……」

苦笑いするなのは……何かあったかと言うと。簡潔に言うなら……

桃子が俺とユーノを見て暴走 俺が『おねーちゃん』で血の海。

なのはが泊まった事で恭也襲撃 俺（物理的に）と桃子（笑顔で）が止める。

って事があった。ちなみにユーノは美由紀の玩具にされてた、念話で助けを求められたが『諦める、それがペットの運命だ』^{さだめ}と言っておいた……今晚、美味しいの作ってやるか……

「それとレイ学校にいる時は念話で話してくれ
は〜い」

レイは俺の右手にくっ付いてるので包帯を巻いて隠すしかない。指摘されたら適当に嘘をつくさ。

教室に入ると、俺達に気付いたアリサとすずかが近づいてきた。どうやら今日は車だったらしい。

「昨日の話聞いた？」

「ふえ？何の事？」

アリサが突然聞いてくる…いきなり言われても分らないぞ。

「昨日言った病院で爆発事故が起こったらしくて、壁とかが壊れちゃったんだって」

「何か銃弾があつたらしくて…それでフェレットが心配で……」

すずかとアリサが詳しく教えてくれた…うん、間違いない昨日の事だ、さらに付け加えるなら爆発の犯人は俺だ。でも壁を壊したのは昨日の思念体だ。

「え〜と……それは…… どうしよう！コダイ君！」

「 貴様が慌ててどうする！ その事なんだがな……」

俺は多少脚色した事情を話した。

「へえ〜まさに間一髪って訳ね」

「それでコダイ君に懐いたんだ〜」

アリサとすずかは一先ずホッとしたようだ。

俺が言ったのは、フェレット…ユーノを引き取る時嫌な予感がしてユーノを抱えて病院から飛び出して、ギリギリ爆発を免れたと言った。ついでに俺が飼う事になった。

「そう言えばユーノって言ったけど…フェレットの名前？アンタが決めたの？」

「ん？まあ…そうなるな」

「へえ……可愛い名前ね」

「うん、可愛いよユーノ君」

「可愛かったし……ピッタリだね」

アリサ、なのは、さすがユーノに関して盛り上がってる……いって
おくがあいつオスだぞ？……ってペットに関係ないか。

そして、特に变りの無い授業をし……変った事と言えばユーノに魔法
の事を念話で教えてもらった事だ。今は昼休み、これはいつも通り。
あとユーノに念話してたけど途中で途切れた……まあ理由は分る。

桃子^{アイツ}だ……

「……ってアンタその手どうしたの！」

突然アリサが叫んだ、手？何言ってるんだ、特に何も……ってレイ
を隠すために包帯してるの忘れてた。

「これか？爆発から免れたが破片とかが色々刺さったんだ」

適当に嘘をつく……がこの嘘がとんでもない事になると気付いた時は
もう遅かった……

「ちよつと！何でそんなこと黙っていたの！」

「そつだよ！大丈夫なの！？」

アリサとすずかがこれでもかっというぐらい詰め寄ってくる……って
コレもう押し倒されてるぐらいだ。

落ち着かせようにも、全然話聞いてないし……なのはに助けてもらっ
か……

「コダイ君！他にどこか怪我してない！？」

貴様もか！！あの事だと分れよ！何で三人とも泣きそうなんだよ！？

「ああ……… 大事な部分には刺さって無いから問題はないが………
傷口はグロいからしばらくは包帯必須だな」

「……よかつたあゝ」「……」

何とか落ち着いてくれた……てかいい加減離れてくれ。

「まあ…心配してくれてありがとうと言っておくか……」
三人の頭を撫でる…最近癖だなコレ。

「……ノノノノノノノ」

この反応が面白いからやめられないんだよな……何でだろう？
（天然ドS）

「野郎ども聞いたか！！！！奴は手負いだ、今の内に仕留めるぞ！！！！！！！！」

「……オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオッ！！！！！！」

「ワンパターンは嫌われるぞ…正直飽きた」

いつもの狙ったのごとく現れる男子軍……こいつらにジェルシード
集めさせればいいんじゃないか？

なのはが頼めば草の根を分けて探すだろうな……あつ、でも願望で
発動するからあいつらが見つけたらどうなるんだろう……探しやす
いからいいか……

ちなみにこの事をなのはに言ったら真面目に却下された…やっぱりね

放課後、バスから降りるとユーノがやってきた、どうやらジュエル
シードの反応を見つけたらしい。

なので、二手に分かれて探すことにした。ユーノはなのはと一緒にだ
………大丈夫だと思うけど………

グルルルルルルルルルルルルル

こっちが大丈夫じゃない！何だアレ！？昨日の奴より数段ヤバそう

何だけど……ってあそこいるの人！？気絶してるみたいだし……もしかして……気絶中の奴の飼い犬？……でいいのか？その犬の願望を叶えたという事か？

「にしても大きいな……どんな願望だよ」

目とか四つあるし……幸いこつちに気付いてないから今の内になのはを呼んで これいぬ！？おつきい！！ この馬鹿！

ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！

「大声出すなよ！こつちに気付かれたじゃないか！！」

えっと、まて！おすわり！ふせ！

「言ってる場合か！」

獣の突進を横に跳んでかわす。

えっと……えくと……だったら……おて！

「アレにされたら殺される！」

もう一回突進をかわす。

「いい加減に……」

懐からデザートイーグルを取り出す……が

シュッ！

「なっ！」

後ろにも目があるのか！？獣は尻尾でデザートイーグルを弾き飛ばし、粉々に砕いた……あれかなり頑丈にカスタムしてるんだけど。

グルルルルルルルルルルルルルルルルル

もう一丁は昨日の連射のせいで壊れたし打つ手が……あつたな、一つだけ！

「レイ……使わせてもらっぞ」

うん…だつてわたしはコダイのために生まれたんだから
そうだよな…

袖を捲りレイを隠していた包帯を取り前に突きだす。
目を閉じ頭に浮かぶ言葉を詠う。

「この身は魔となるモノ」

「血は魔に体は力に、それは奇跡を知るモノ」

「このモノは、奇跡を掴むためにある……」

「奇跡をこの手に！」

拳を強く握り、目を見開く。

「レイ・モモ・ブラット………アクセス Access！」

ナウ Now ローディング Loading . . . コンプリート Complete

そして、俺の体は虹色の光に包まれた。

体で分かる…この溢れ出る力が魔力……これではより少し低い
？アイツはどんだけ凄いんだよ。

光は数秒間で収まった。そして次に見えたのは黒、そう…全身を黒
い中世の甲冑を全身にまとった黒騎士の様な姿だった。(イメージ
はWA2のナイトブレイザーのスカート無し)

「これは……魔法使いというより…魔人？」

え〜と、わたしもこうなるとはおもわなかった…

第一…杖っぽいのが無いし……あっレイとくっ付いてるからこの甲
冑がデバイスになるんだ……さてと。

ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！

！！

俺がレイを起動させた事で危険を感じたのか一気に仕掛けてくる獣

……

「さて…どんな性能が見せてもらっぞ」

突進してくるを真正面から受け止める！

「グツ……………つと、性能はかなり良いみたいだな」

後ろに数センチ下がるだけで、獣の突進を受け止めた。

さらに、顎を殴りかち上げ、ガラ空きになった腹にとび蹴りを放つ。

グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

！！！！

獣は数メートルも吹き飛び後ろの樹を2、3本へし折り倒れた。

「うわ……………結構手加減したつもりなんだけど……………まあいいか、レイ

！封印だ」

ふえ？ふういんってなに？

「……………」

え？こいつ今何て言った？

「封印だ、ジュエルシードを封印するんだよ」

どうやって？

「どうやって？ってデバイスで封印できるだろ？」

うまれたばかりだからわかんない

……………あつそういえばそうだ。こいつ産まれたたで。事前

に確認するの忘れていた……………

グルルルルルルルルルルルルルルルルルル

うわ…これ昨日もなかったっけ…あつたなこれ……………獣がもう傷が治
ってるし……………

「ユーノ！！…なのは！！…今どこにいる！！！！」

「うえっ！？コダイ！？今なのはと君の所に向かってるけど…」

「……………どうどうしたの！？」

「早く来い！！…こいつ封印ってなに？とか言い出しやがった！！

ユーノはもう一度パスワードを教える。これで………って！マズイ！

ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！！！

標的を完全にあつちに移した！？

スタンバイ、レディ、セットアップ

それに一番早く動いたのはレイジングハートだ。レイジングハートが光り、なのは手に杖として現れた。これなら………ってまだだ！
バリアジャケットを着ていない。

「なのは！はやく防護服を！」

「え！？」

獣はもうすぐそこだ………こうなったら！

一気に獣に向かって跳ぶ………間に合え！

バリアジャケット

バリアジャケットが展開すると同時、獣の腕がなのはに届く直前……

……俺は獣の尻尾を掴み動きを止めた。

「一つ忠告してやる………じゃれすぎは………怪我をさせるって
！！！！！！」

そのまま一本背負いのように投げ、地面に叩き付けた。

ガアアアアアアアアアアアッ！！！！

獣は悲鳴を上げて口から何かを吐きだした………あれは、ジュエル
シード！

「なのは、今だ！」

「うん！お願いレイジングハート！」

ユーノに呼ばれなのははレイジングハートを構える。

イエスマイマスター、シーリングモードセットアップ
レイジングハートから放たれた桜色のリボンがジェルシードを包み
込む。

「リリカルマジカル、ジェルシードシリアル16封印！」
シーリング

封印されたジェルシードはレイジングハートに吸い込まれていっ
た。

「おつ終わった〜」

なのははバリアジャケットを解除してその場でへたり込んだ。

「二人ともお疲れ様」

「ユーノもな」

俺はユーノの頭を撫でた。

「僕は何もしてないよ」

「なのはにアドバイスカしただろ？それにまだ怪我が治って無い
体で逃げなかつたんだ。俺が無事なのはユーノがいち早く俺の所に
気付いてなのはを案内してくれたからだ……もちろん逃げずに封
印してくれたなのはもな」

今度はなのはとユーノの頭を撫でる。

「えへへへ／＼／＼」

「コダイ・・・ありがとう」

二人は嬉しそうに笑う。

「っとそうだ俺も早く解除しないと」

この格好結構目立つし。

バリアジャケットを解除すると、一瞬視界が開けたが、すぐ元の視
界に戻った……ああ、バリアジャケットの時は髪が後ろに行ってる
んだ、だからか。

「／／／／／／／／／／／／／／／／」

って何でなのは顔が今まで見たこともないほど真っ赤になって
た……

「どうした？」

「ふえ！？ なんなな何でも無いの！（にやあく解除した瞬間、綺麗
な顔が全部見えて赤くなっただって言えないよう／＼／＼）」

まあ……見たところ……怪我はしてないから問題ないか。

「犬は飼い主の所に置いて……よし帰るか」

「あ、待ってよ」

こうして俺達のジュエルシード集め一日目は終わった。

くおまけ

その日の夜、ユーノに食べたい物を聞いたら、テレビでたこ焼きを
見て食べてみたいと言ったので今日の晩御飯はそれにした。

「熱いから気をつけるよ？」

「うん、フーフーフー……よし……アツチャアアアアアアア！」

！！！！

「一気にかぶりつく奴があるか！ほら氷だコレ舐めて冷やせ！」
必死で氷にしゃぶり付くユーノ……あまりにも面白かったので写真
を撮ってしまった。

その後は、俺が割って冷ましやすくした。

「おいしい」

結構好評だった。

どんな時でも事前の確認は重要b yコダイ（後書き）

メガネ「あゝ死ぬかと思った」（輸血中）

コダイ「おい、封印できないってどういう事だ！」

メガネ「考えても見るよ、例えお前がレベル100だとしてもレイはまだレベル1だ、魔法を使えないのはそのレベルにレイが達していないからだよ」

コダイ「なるほど……つまり俺次第で強くなるって事か」

メガネ「そゆこと。今回感想送ってください、マーボー様、ながもく様ありがとうございます！」

コダイ「今回送られた写真……劉（女）の写真詰め合わせが、作者の瀕死の原因だ」

メガネ「性転換は反則だって……」

コダイ「何々……一枚目、劉（女）がキョトンとしている顔。

二枚目、劉（女）が泣きそうになっている顔。

三枚目、劉（女）がタルトを食べて喜んでいる顔。

四枚目、劉（女）が思いつきり噛んだ時の「しまった」っていう顔。

……いつもの劉より丸くなった感じだな」

メガネ「（お前も人の事言えないだろうが……）ってお前何飲んでる？」

コダイ「ん？どうせならこっちも女で帰そうかなって…劉に送るつもりだった性転換の薬」（ボンツ！）

メガネ「いくらなんでも男捨てすぎだ！ってうわっ煙……って！」

コダイ（女）「う〜ん…ちょっと胸がきつい、ちょっと着替えてくる」（年不相応のナイスバディ）

メガネ「あ、いってら〜……って何あいつ！羞恥心無い設定にしたけどここまですっ飛んでいるなんて」

コダイ（女）「おまたせ〜」（セーラー服にダボダボセーター）

メガネ「何でこのチョイス!？」

コダイ（女）「面白そうだから あと私の事はコヨリって呼んで？
コダイ（女）って呼びづらいでしょ」

メガネ「まあそうだな」

コヨリ「カワイイ写真を送ってくれたマーボー様には私の写真詰め合わせでクロスカウンター!」（>ワ<）ノ

メガネ「（こいつテンションたけえ…）って！それはマズイだろ！劉が男の方でさえトリップしたんだぞ！今のお前の写真なんか見たら……壊れるぞ！」

「ヨリ」「えっと、意見や感想など色々待ってます!」

メガネ「ああ!セリフ取られた!」

「次回もお楽しみにしてください」

無印編主人公設定及びデバイス（仮）設定（前書き）

コダイのデバイス初起動って事で無印編の設定です。

1 2 / 1 3 修正しました。

無印編主人公設定及びデバイス(仮)設定

名前 時代ときがわ 古代こたい 本編ではカタカナで表記

妄想C.V. 柚木涼香(武装錬金の津村 斗貴子をイメージ)

年齢 8歳(誕生日が来ていない)

身長 なのは達より少し低い(あんまり伸びてない)

体重 なのは達より軽い

好き 料理、動物

嫌い 正義

特技 料理、声帯模写、瞬間記憶、完全記憶 e t c .

趣味 家事全般(料理の腕は桃子やはやて以上)

容姿

黒髪膝までの超ロングで前髪で殆ど顔を隠して、青い目(ハイライ
ト無し)が特徴。

端正な…と言うよりぶっちゃけ美女。(男だけど本人は気にしない)
肌は白く細い体格。(なのは曰くお人形さん)。

髪型、学校では二つ縛り、普段は基本ストレートだが服装によって
変わる。

性格

良く言えば天然ドS。女子供容赦なしの性格。
無口で無表情だが、面白そうと言う理由で桃子や忍と結託したりする。
性格を除けば完璧超人、だが天然で直球の言動で羞恥心がほとんど無い故にあり得ない位フラグビルダーである。
女装はオシャレとしか思っていない。

コダイ「前と変わって無いだろ」

メガネ「イヤ…身長がなのはよりさらに低くなってる」

コダイ「まあいいけど……で次はレイの紹介だな」

レイ「は〜い」

デバイス

名前 レイ・モモ・ブラット（愛称レイ）

声 榊原ゆい

形態 顔も隠れる全身甲冑（イメージはWA2のナイトブレイザーのスカート無し）

待機 右手首のジュエルシールド（形状はTOSのコレットのクルシスの輝石）

性格 舌足らず 幼女 天然

ジュエルシールドがコダイの願望を完璧に叶え、生まれ変わったデバイス。

産まれたたなので殆どひらがなとカタカナで喋る。

主と同じ天然なので放って置くとポケ合戦が始まる。(ツッコミ必須)

コダイ「性格と形態が正反対だな」

メガネ「くっ付いてるんだから、全身を覆うのがいいな」って後W A好きだし」

コダイ「まあ……そこは置いといて……魔法使えないってどう言う事だよ!!」

メガネ「その事についても書くから」

魔力ランクはAAA、なのはより少し少ない。

魔法はレイが産まれたばかりで使えないので、素手のみで戦う。

(それでも強さはチート並み)

デバイスは全身甲冑は身体強化はほとんど無いが頑丈さならなのはより上。

起動キーは「セットアップ」ではなく「アクセス」、これは起動するというより、レイと接続するため。

ちなみにバリアジャケットから戻ると大抵の女にフラグが立つ。(

敵つい甲冑姿からとんでもない美人のギャップで)

コダイ「おい……この起動キーって……それにフラグって……」

メガネ「俺の趣味だ！」

コダイ「はぁ………剣は使わないのか？」

メガネ「素手つてのが良い、むしろ剣はオプション。さらに言えば素手つて言うか生身の方が強い。俺の考えるチートは『あれ？この人魔法いらなくね？』って思われる事だ！」

コダイ「ネギまのラカンかよ！！………で？この後の展開も考えているのか？」

メガネ「大体ね」

レイ「ねえねえ！わたしは！まほつつかえるよつになるの？」

メガネ「それも考えてる」

レイ「やったあ！」

コダイ「じゃあ……頑張るとするか」

無印編主人公設定及びデバイス(仮)設定(後書き)

メガネ「今回はデバイス紹介と言う事でレイ・モモ・ブラットが後書きに登場」

レイ「レイです！よろしくおねがいます」

コダイ「早速だが感想だ、レイ」

レイ「えっと……マーボーさま。ありがとございます！」

メガネ「しかし前回は散々な目にあつたわ」(前回のコヨリの事です)

コダイ「俺は面白かつたけどな」(女装〓オシャレだから)

レイ「コダイ、カワイかった！」

メガネ「(まあ、こいつは性格を除けば完璧超人だしなあ……)マーボー様誤字報告有難うございます！修正しました。これからはもっと頑張ります！」

レイ「いけんや、かんそうをイロイロまっています！」

〈次回もお楽しみにしてください〉

ルール違反や犯罪はバレなきゃいいbYコダイ(前書き)

PV56000 ユニーク66000突破…マジ?

後、主人公キレます。

ルール違反や犯罪はバレなきゃいいboyコダイ

最初のジュエルシードを封印してから……数日後の日曜。今日は士郎がコーチをしているFC翠屋の試合だ。

まあ…俺は参加しないから適当に「何やってんのよアンタは!」!」
つと。

後ろからのアリサの攻撃をかわす。

「何って、応援だろ?何か問題でも?」

「だろ?ってその格好が問題なの!// // //」

何赤くなってる?

「そ、そうだよ。何でそんな格好なの// // //」

「うう// // //」

何で赤くなってるんだよ……ただのチアガールで髪型はツインテールの恰好で応援してるだけで……何が問題何だ?

「コダイ……良くそんな格好できるね」

なのはの肩に乗ってるにユーノが言ってきた。

「だって女装はオシヤレだろ?」

「違うから!」

でも、コダイかわいい!

「どうも」

こう言ってくれるの桃子を除いてレイだけだよ……

わたしもコダイみたいにキレイになるかな?

「デバイスも成長するんだな」

あれ?……どうやってデバイスってせいちょうするのかな?

「それはしっかり栄養を摂って……ってデバイスには無理か……」

うーん……おひさまいっぱい浴びればいいんだよ!

「成程……なら水分とかも必要だな」

あとは……なにひつようなのかな?

「うーん……やる気?」

そっかあっ！よし！がんばるぞ〜！

「 どう成長するのか……………せめて性格だけは俺に似ないでくれ…

……………」
そう、切に願う……………」

「 ねえ……………二人とも……………そろそろツツコンでもいい？ 」

突然、ユーノが震えながら言ってきた。

「 何を？ 」

なあに？

「 君達のボケ合戦だよ！ 」

「 何の事？ 」

さあ？

俺達にはさっぱり……………」

「 (天然！？タチが悪い。二人とも似た者同士で天然って事は飼われて分つてたけど、流石にここまで酷いとは思わなかったよ……………なのは達の言葉が今身に染みたよ……………)() 」
何か悶えてるユーノ……………どうしたんだ？

だ〜か〜ら〜……………」

「 どうしてこうなる！ 」

「 ど、どうしたんだい！？ 」

俺の叫びに士郎が驚く。

「 いや……………(今度女神にあつたらどうやって殺^{おか}そうかなと……………)() 」
本当に考えた方がいいかも……………え？何でそんなに荒れてるかって？

簡潔に言つと。チームの一人が負傷したんだが控えの選手がいないらしい……………そんなの想定して作れよ！！

それで俺が助っ人として協力^{おねがい}を強制された。というわけ、OK？

「 ったく……………何で俺が……………」

は？何でそんなに嫌なの？ってそれは……

「何だよ、助っ人って女かよ……」

そう、こんな事言う奴がいる……まあ別に女顔は自覚してるし、女とか言われても問題ない。

「大丈夫かよ？」

そう……

「女の蹴るボールなんてたかが知れてるし」

こんな奴が……女関連で馬鹿にされるのが一番嫌いなんだよ……！

「土郎、すれ違いざまにボディブロー入れるの反則？」

「そんなの反則に決まってる……！」

「ちっ……じゃあガゼルパンチで」

「もつと酷くなってるから！？ゴールに向かってボールを思いっきり蹴ればいだけだから！」

「……分ったボールを思いっきり蹴ればいいんだな……」
ふふふふふ……

そして試合再開、俺は……確かFWって言うポジションだ。味方から来るパスを受け取り……ゴール真正面に蹴る！

ボールはかなりの速さでゴールへと向かう。

「へへっ！これなら」

余裕の表情で構えるキーパーだが……

カクン

「は？」

ボールは下へ折れ…

キ

ン

「くあwsでf r g t ひゅじこ1 ; p . : @」

股間に直撃した。

この光景を見て大多数の男が股間を押さえたとか無かったとか…

……まあどうでもいいか……

これで済むと思うなよ……俺は『女だから』とかで悪口を言われるのが嫌いなんだよ！男に産まれた事を後悔させてやる。フフフフフフフ……

それからは一方的なワンサイドゲームだ、あの股間打ちが効いたのが変えのキーパーが役に立たず、一方的に入れ放題だった。

結果は25 - 0ちなみに全部俺が入れた点数だ。

ちなみに相手チームの帰り際に俺の性別を教えたら、同じリアクションした後、土下座で謝って来た。

スッキリしたから許したぞ？それほどねちっこくは無い。

それで今俺は祝勝会を行ってる翠屋で味方チームに揉みくちやにされてる。

え？何で歓迎されてるかって？実はあの股間打ち以降はプロ顔負けのプレーをしたからだ。

そして、祝勝会も終わり俺はある用事のために、俺とユーノは、なのはの部屋にいる。

「ジュエルシード、封印！」

用事とはあのチームのキーパーが持っていたジュエルシードを封印して貰うためだ。

いや、あの時は驚いた。まさか持っていて発動もしてないとか……マナージャーに渡そうとする所を寸前で止めて、それは友達の大変な落とし物と言って、俺の持っていた自作のペンダント（約200万円）と交換してもらった。

「なあユーノ、人がジュエルシードを発動させたらどうなるんだ？俺みたいになるのか？」

ふと、思った事を聞いてみた。

「いや、それは無い。コダイの場合は奇跡と言うしかないよ。人間の場合は想いとかが強くて、下手をすればこの街が壊れるかも知れない」

「それはシャレにならない……… 事前に見つけれただけでも良しとするか」

となると、こうのんびりとしてられないな、人が既に持っている仮定でもしておかないと………

「うん！決めたの！」

さつきまで黙っていたなのはが突然立ち上がった。

「今日の事、もしコダイ君が気付いてくれなかったら大変な事になっていたの、だからこれからはそんな事が二度と起こらない為に、軽い気持ちじゃなくて自分の意思で真剣にジュエルシードを集めるよ！」

なのはの目には炎の様な物が揺らめいていた。まさしくレイジングハートの起動パスワードにもあつた様に「不屈の心はこの胸に」……今のなのはにピッタリな言葉だ。

……俺も何とかしないと。前の実戦で十二分に戦えるのは分った、
だが唯一、決定的に欠けているのは……魔法が使えないという事、
これじゃあ単独で行動できないし、足止めか囮…封印は完璧になら
は任せだ。これを何とかしないと……

くオマケく

コダイの股間打ちが炸裂した時、観客席では……
「アリサちゃん、すずかちゃん ユーノ君 ……コダイ君を怒ら
すのは絶対にやめよう、死んじゃうかも……」

コクコクコクコクコクコクコク！ x3

なのはの言葉に頷くしかない二人と一匹であった。

ルール違反や犯罪はバレなきゃいいboyコダイ（後書き）

メガネ「今日はちょっと短め。そんでコダイがキレた」

コダイ「別に女顔で女扱いされるのは別にいいけど『女だから』とかで言われるのが嫌なだけなんだよ」

メガネ「普通の女顔の主人公は女扱いされるとキレルけど？」

コダイ「今さらだろ？別にこの顔はコンプレックスじゃないしな」

メガネ「へえ〜。マーボー様感想ありがとうございます！」

コダイ「作者…憐れだ……デバイスに弄ばれて」

メガネ「コダイはクリスみたいな性格はどう？」

コダイ「ん？ちようきよ……いや面白くていいかもな」

メガネ「今不穏な事を言いかけなかったか？」

レイ「あつあのつメガネ！」

メガネ「どうした？」

レイ「わたし！メガネのことぜつたいにイジメないから！」

メガネ「ありがとう（どっちかと言うとレイは虐めるより虐められる方だな）」

コダイ「よかったな（レイは虐められる方だな）」

メガネ「さて、マーボー様にはこのチップを！」

コダイ「何だそれは？」

メガネ「これをデバイスに組み込むと性格、言動がレイそっくりに
！」

コダイ「それは凄い（絶対クリス用だ）」

レイ「みなさまの、いけんやかんそう、イロイロまっています！」

〈次回もお楽しみにしてください〉

物事に集中するのはいいが本来の目的を忘れるな！b y n o t a i (前書き)

そして、ついにフェイトの登場。

物事に集中するのはいいが本来の目的を忘れるな！byコダイ

FC翠屋のキーパーが持っていたジェルシードを封印してから数日、色々あった……

今日もジュエルシードを封印して（貰って）、今はYシャツに着替え、ベットのの上に座っている。

「ユーノ、今日でジュエルシードはどれくらい集まった？」
俺は膝の上にいるユーノに聞いてみた。

「えっと……レイのを除外して5個かな？」

5個……あと15個か。

「だとしたらもうそろそろかな？」

「なにが？」

「敵だよ、ジュエルシード集める敵」

いくら何でもスムーズ過ぎるしな、それにジュエルシードは危険な反面、願望をかなえる特性がある。これを利用する奴らなんていくらでもいる。

「でも、なのはとコダイなら何とか「何とかじゃダメだ」えっ……

……」

「確かに、俺は戦えるし誰にも負けるつもりは無い。だがジュエルシードを封印となると話が別、封印できないから敵に勝っても意味がない。………なのはの場合は逆、実戦経験が全くといっていい程無い」

「でも、なのははジュエルシードの暴走体と何度も戦ってきたんだよ？」

「それでもたつたの3回だ。それと暴走体と人間とはかなり違いがある、理性もある、作戦をたてる知能もある……それに、才能が秀でたものを持ってても、技術や経験が浅ければ負ける。戦い何てそんなもんさ」

「そ、そんな………だったらどうすれば………」

「まあ……………もし相手が危険かどうかは俺が判断する」
危険なら、なのはには悪いが目の前で殺させてもらう。
「悪党かどうかは俺は目を見て判断できる、それについては全部俺に任せてくれ」

「……………うん、分ったよ。こう言ったコダイは裏切ったこと無いしね。でも本当に危険な物なんだよ？それだけは気を付けて」
分ってる……………何があってもジュエルシードを悪用させない……………

P i P i P i P i P i P i P i

突然、携帯が鳴った、着信は……………なのはか

「どうした？」

「あっコダイ君。明日暇？」

「ん？何かあるのか？」

「実は明日すずかちゃんの家でお茶会をするんだけど……………どう？」
確か学校サボった時に忍に会って誘われた様な……………

「ん、いいぞ」

「じゃあ一緒に行こう！」

「ん、分った」

「おやすみなな〜」

そう言っただけなのは電話を切った。

「さて、寝るか」

「おやすみ、コダイ」

おやすみ〜

「おやすみ」

それで次の日。なのはとの約束通り、一緒に行くため翠屋で待っている。ユーノ？もちろん肩に乗せてる。

「それでねコダイ君、これはどう？」

「成程……ならここはこっちの方がいいな」

「それ採用」

今は桃子と近々実行しようとする計画を立てていた。

「おまたせなの、コダイ君」

ちようど終わった頃になのはが来た。恭也も一緒だ。

「よし、行くとするか」

「あ、コダイ君」

店から出ようと、桃子に呼びとめられた。

「（任せたわよ！）」

満面の笑みでサムズアップして来た……

「（勿論だ！）」

俺も二人に見えない位置でサムズアップで返す。

「あ……聞くの忘れていたが、もしかして恭也もお茶会に参加するの？」

すずかの家に行く途中に気になっていた事を聞いてみた。

「俺は別の用事だ」

別の用事？それを考えているとなのはが耳打ちして来た。

「お兄ちゃんは恋人さんに会いに行くの」

「恋人？すずかの家にいるの？」

あつ……話が聞こえていたのか恭也の顔が赤い。

すずかはまずあり得ないとして………消去法でいくと……

「フアリンか？」

ズガッ！！

あ……恭也が近くの壁にめり込んだ。

「何でそうなる!?!」
シスコンだし妹っばいのがいいのかと……年齢的にも1年待てばセーフだし……
「忍さんだよ、すずかちゃんのお姉さんの」
「ああ……あいつか」
「知っているのか?」
「ああ……初対面で無意識に握手をした」
それを聞いた恭也は遠い目をした。
「確かに……忍と気が合いそうだよ(弄る側として)」
「にははははは……」
隣にいるなのはは苦笑していた。

すずかの家に着くと出迎えたノエルと軽く挨拶、案内された場所に行くと既に来ていたアリサとすずかと忍と一緒にお茶を飲んでいた。忍は恭也と一緒にどこかに行ってしまった。今はいつものメンバーでお茶を飲んでいた。

「しっかし本当にラブラブね、忍さんと恭也さん」

「だが会うたびに惚気話を聞かされる気にもなって欲しいものだよな?……すずか」

「あははははっ……ごめん」

しよげるすずか……全く忍と会う度にいつも惚気やら愚痴やらを言うってくるからな……」

でも、忍さんと会ってお兄ちゃん雰囲気優しくなったの」

なのはが嬉しそうに言ってる。

「まあ……近い将来、なのはとすずかがおばちゃんになる可能性があるらって事だな」

「うっ……」

俺の言葉に二人が引き攣る。

「言われてみればそうよね。忍さんと恭也さんに子供が出来ればなのは達はおばちゃんね」

「アリサちゃん、コダイくん」

「他人事みたいなく」

「まあ、その辺は心配するな。俺がしっかりと対策を立てておいた」
「対策？」

アリサが首を傾げる。まあこれはさつき行ったのでもう少ししたら効果が「コダイイイイイイイイイイイイッ！！！！」ほら来た。

ブンッ！！

「よっと」

襲撃した恭也の木刀をかわす。

「貴様！俺の懐に何を入れた！」

「そんなもの決まってるだろ明るい家族計画だよ。なのはやすずかをおばちゃんにしないための」

分らなくても親には聞くなよ！自分で調べることだ。

「何でそんなものを持っている！」

「なんでって……あつもしかしてサイズが「そんな事を聞いていない！」って詰め寄るな」

つたく一丁前に剣やつてるから殺気が強い……まあ使い方がなっていないけど。

「コダイ君！」

つと今度は忍か……っておいそのシスコン『ほらみる』的な顔をするな。あと言うておくが忍は俺と同じ弄る側だぞ？

「………まだある？」

「もちろん……何なら桃子直送のもありやすぜ旦那」

何ならから忍だけに聞こえるようにした。実はこの対策は桃子と士郎の案だ、まあまだ結婚もしてないしな。

「忍！？」

「ホラ行くわよ恭也！」

「ちよ！待て！」

恭也は忍に引きずられていた……………

「ねえねえコダイ、ユーノ触らせて」

「ん？ホラ、行ってこい」

「キユ！」

肩に乗ってたユーノがアリサの手の上に乗る。

「やっぱり毛並みがいいわ」

「キユウウウ！ た、助けてえ」

アリサに頬擦りされた。ユーノの念話は……………無視だ。

「しかし、本当にすずかは猫が好きなんだな」

「うん！」

以前俺のアレ（メイドでネコミミとシッポと首輪）を見たときの暴走は凄く印象的だ。

「にゃ」

ん？猫が膝の上に乗ってきた……………聞いてみるか

これから猫の鳴き声に（ ）がつかますがこの中のセリフはコダイが翻訳したものです。

「にゃ〜（いや〜ここはえ〜な〜。何が？つてそりゃあ居心地や。

皆優しいし、撫で方なんてホンマ癖になってしまっわ）」

すずかが聞いたら嬉しそうな言葉だな。

「にゃ〜（自分もなかなかやで。撫で方のツボを知っとる、最高のナデリストや！）」

ナデリストってなんだ？とりあえず撫でてみる。

「にゃにゃ〜（あ〜アカン、ホンマこれも癖になってまっ）」

「コダイ君に撫でられて嬉しそうだね」
「さすががまるで自分の事の様に聞いてくる。まあ俺は最高のナデリ
ストらしいからな。」
「この猫って大阪から拾ってきた？」
「え？なんで分かったの？」
「何となく」
「だってコイツ関西弁だもん。」

「ッ！」
しばらく猫を撫でまわしていると。ある気配を感じた……

「なのは、コダイ！ジュエルシードだ！」
この気配はジュエルシードなのか？ユーノが突然走り出した……お
そらく向かった先にあるのだろう。

「あっユーノ君！」
真っ先になのはが走り出した。

「おい待て。ったくなのは一人じゃ迷子になりそうだから行ってく
る」

「うん」
「気を付けなさいよ」
「さすがとアリサに言って。なのは達の元へ向かった。」

「えっ？」
「ふえ？」
ユーノとなのはが呆然としている……今ジュエルシードの反応
した所にいる。どうやら発動したらしく。ユーノが結界を張ったか
らすすか達にはバレない……が

「やああああああああああああああああああああ（デカッ！大きくなってる！）」

俺達の目の前には巨大な猫がいる……………

すごい……………おつきい

「さすが猫屋敷、こんな猫飼っているのか」

「どうやったたら、あんなにおつきくなるんだらう？」

「多分……………いや間違いないアレだらう」

俺が指を指した先、猫に額にジュエルシールドがくっ付いていた。

「もしかして、あの猫の大きくなりたいうって願いを正しく叶えたんだと思う」

「にしても限度つてもものがあるだろ……………」

猫は特に暴れると来なくのんびりしてる。

「今回は私一人で封印できるね」

そう言つて。猫に近づくなのは……………

「ごめんね……………」

……………後ろから、そう…聞こえた。

振り向くと金色の光が猫へ向かつて飛んで行く……………マズイ！このままじゃ当たる！

「くっ……………アクセス！」

ナウローディング……………コンプリート

レイを起動し、猫に当たるのを腕で防ぐ……………

「チッ……………」

コレかなり本気で撃つてる、まるで腕に電流を流してるみたい……………
つてホントに電流が流れてる！？」

「おいユーノ！何だコレ！？バッテリーでも仕込んでいるのか！
？」

「そんなわけ無いよ！それは魔力変換資質の電気だよ！」
魔力変換資質って持つてる資質に変換プロセスを踏まずに発生させる事だっけ？

「コダイ君、大丈夫!？」

「俺に構うな、後ろを見るなのは……」

なのはが後ろを向く、そこには。

「……………」

金色の髪をツインテールにして、漆黒のマントを纏い、黒い斧の様なデバイス持った……………魔導師の少女がいた。

「フォトンランサー……………ファイア」

少女の魔導師が放つ金色の無数の魔力弾が俺を襲う。

回避……………ダメだ猫に当たる、障壁なんて使えない……………なら！
体張って一発も後ろに行かせない。

ドガガガガガガガガガガガッ!!!!!!

迫りくる魔力弾を体で受け止め、届かなかったら腕や脚を伸ばして当てさせる……………が。

ヒュンヒュンヒュン!

その中の三発が俺の遙か横を通り過ぎた。

「間に合っ！まだあるのか!？」

プロテクション

間に合わないと思っただが。いつの間にか起動していたのはがそれを防いだ。

「コダイ君！ユーノ君！猫さんをお願い。私はあの子を！」

フライアーフィン

そう言っただのはは飛行魔法を使って飛び出した。

「魔導師？バルディッシュと同型のインテリジェントデバイス」

サイズフォーム、セツトアップ

デバイス、バルディッシュを鎌の形状に変えた。

「ロストロギア、ジュエルシード。申し訳ないけど……頂いていきます」

「ロストロギア？ジュエルシードは危険なんだよ！？何でこんな事をするの？」

「……答えても……意味がない」

なのはの声に耳を傾けず、なのはに向かう魔導師。かなり速い……主体は近距離か、遠距離オンリーなのはじゃあ相性悪いな。

……けど、あえてそっちの方が良かった。

「ッ！！」

魔導師の素早い斬撃をかわす。

はのがジュエルシードを真剣に集めると言った次の日、「強くなりたい、他の人を巻き込まないために」と言つて。ユーノ監修の元、俺（物凄く手加減して）と模擬戦？だっけ？それをやった。

魔法が使えない近接オンリーの俺しか相手がいなかったから、なのはは近距離の攻撃に対してかわせる実力は付いた。今の魔導師の攻撃もちゃんと見てるし……何とかなるかな？

「ユーノ、今の内にジュエルシードを」

「分つたよ」

とにかくこれ以上被害が出ないようにジュエルシードを……ん？急に暗く………

ジ

ッ

………猫が後ろ脚を伸ばして尻尾を振ってる………コレ跳びかかる寸前？

ニャアアアアアアアアアアアアアアアアア

「つて！俺は餌かよ！」

「早く逃げない！」

うわわわわわわっ！まで！おすわり！

それって猫に通じるのか？つて今は回避優先！

ドッシャアアアアアアアアアアアアッ！！

間一髪つて所かな？足に掠ったけど。

跳びかかった猫はそのまま壁に激突して気絶した。

「えっと……………とにかく回収つと」

猫の額のジュエルシード取ると、猫は元の大きさに戻りそのままどつかに行ってしまった。

「後はこれを封印して貰うか……………つとその前に」

俺はまだなのはと戦ってる魔導師を見る……………

「ユーノ……………あの魔導師は危険じゃない、ホントに危険な奴なら非殺傷に何かしない……………」

ごめんね……………か。それにあの目……………何であんな寂しそうな目をしてるんだ？

「それに？」

「いや、何でも無い。どっちでもいいから封印して貰うか。この後どう動こうとなのはは経験不足で負けるし俺は封印できないから戦力外だし」

「うん…分つたよ」

昨日、あらかじめ言ってた事だし、ユーノも納得してくれた。

さて……………そろそろ止めるか。

「お〜い！回収したから封印してくれ！」

（絶賛戦闘中……………）（魔力弾で地面やらが大変なことになっていま

す)

「……………」

……………やるか？

「コ、コダイ!？」

「チョットアノフタリニO S H I O K Iシテクル」

ジュエルシード無視してガチ戦闘か？あんな危険物の近くでやる事じゃないよな？

「ヒイツ!！」

ユーノ…安心しろ…貴様には被害は無いから……………

「貴様らが何やっていたのか分ってるのか？危険物の周りで暴れたんだぞ？二次災害が起こる事を想定出来なかったのか？本来の目的はジュエルシード、それを分かってやったのか？」

「ゴメンナサイ、ワタシタチガジュエルシードノコトヲワスレテイマシタ」

今俺の目の前には、なのはとあの魔導師がタンコブを作ってガタガタ震えて正座している。

あの後、なのはと魔導師の順にど突いてO S H I O K Iをした。

「戦うのは別にいいがそれは本来の目的を終えたからにしる、そのおかげで俺はあの猫の餌になりかけたし……………分ったな」

「ハイ、ワカリマシタモウシマセン」

「……………もういい」

「はっ！今まで何を!？」

凄い息ぴったりだな、何かあったのか？（O S H I O K I

の所為です)

少し落ち着いてから、お互いに自己紹介する事になった。

「高町なのはです……………お名前は？」

「フェイト……………フェイト・テストロッサ」

「フェイトちゃん？」

「フェイト……………運命か…いい名前だな」

「そ、そうかな？／／／／」

「うん！いい名前だよフェイトちゃん」

なのはの言葉に更に赤くなるフェイト……………褒め慣れて無いのか？

「あつ……………えつと……………」

フェイトが困った感じでこっちを見てくる……………あつ

「名前言って無かったな」

俺はバリアジャケットを解除する。

「つ／／／／／／／／／／／／／／／／」

「俺はトキガワコダイだ……………ってどうした？赤くなって」

突然真っ赤になって俯くフェイトを覗き込む。

「ふえ！？何でも無いよ！（素顔を見て赤くなったなんて言えない

！それにしても凄い綺麗な顔だったな……………／／／／／／／／／／／／」

本人がそう言ってるから問題ないか……………っとまだ問題残ってた

な。

「これをどちらか封印してくれ」

俺は二人の間にジュエルシードを放り投げた。

「「あつ！ふ、封印」」

二人同時に封印したが吸い込まれたのはバルデッシュの方だった。

「お疲れ様」

「……………何で？」

「ん？」

「何でジュエルシードを？コダイはなのはの味方でしょ？」

確かになのはの味方だけだな。

「経験上な、いい奴かそうじゃ無いかは目を見て判断できる。その

結果フェイトはいい奴、だから渡しても問題ないと思ったから」
「えっと……………その……………ありがとう／＼／＼／」
また赤くなるフェイト、ホントは風邪じゃないのか？

ピト

「ふえ！？／＼／＼／＼／」
額同士を合わせ、首元に手を添える……………特に高くは無いがまだ赤くなってる。

「高くは無いが今日は帰った方がいいぞ。体調管理を怠っては回収に響くぞ？」

「そ、そそそうだね！じゃ、じゃあさよなら！」
そう言つてフェイトは飛び去った。

「まっつて！まだお話聞いてないのに！」
「ちよつと待つて！何でジュエルシード集めてるか教え……………つていなくなつちやた」

「気を落とすな。互いに目的は同じなんだ、次に会う機会に話なり理由なり聞けばいいだろ？」

少し落ち込んで二人の頭を撫でる。

「フェイトちゃんの目……………コダイ君に似てた。色とかじゃなくて何か…凄く寂しそうな目をしてた」

「自分の目何か見る機会無いし…その事を含めて聞けばいいだろ？その為には戦う事になるけど……………」

「うん。だからもつと強くなってフェイトちゃんにお話を聞くの！なのはの目はあの時の真剣にジュエルシードを集める時のよりも強い決意が宿っていた。

「ユーノ、なのはがフェイトと戦う時手出しは一切無用だ分つたな」
「うん、だったら僕たちはなのはを強くする事だね」

「その通り。俺達は全力でサポートだ。さて、そろそろ戻ろうアリサガキれる頃だ」

俺達は再び決意を固め、ここを後にした。

くおまけく

戻る途中に偶然ファリンを見つけた。何故か膝を抱えてる…

「あのくどうしたんですか？」

恐る恐るなのはが聞いてみた。

「ま、迷子になっちゃいましたあく」

泣きながら俺にしがみ付いてきた……………

「……………仕えてる屋敷で迷子になるか？」

「にやはははは……………」

なのはは苦笑いするしかなかった。

物事に集中するのはいいが本来の目的を忘れるな！byコダイ（後書き）

メガネ「ついにフェイト登場！そしてコダイのO S H I O K I 発動！」

コダイ「何だよO S H I O K I って…」

メガネ「簡単に説明するな」

『O S H I O K I』

コダイの持つ技の中で一番凶悪な技。その内容は喰らった本人しか分からなく、しかもその人の人格を一時変貌させる程のトラウマを植え付ける。さらに二回目以降の場合は前回までのトラウマが再発し威力倍増。

メガネ「というわけ。要するにO H A N A S H I I のコダイ版
つて事」

コダイ「（ツツコム気も起きない……）早く感想言え」

メガネ「OK。仮面ライダーディケイド神様、マーボー様ありがとうございます
っございます」

コダイ「響き的にあっちの方があつてると思っていたんだよな？」

メガネ「仮面ライダーディケイド神様、誤字報告ありがとうございました
ます！」

コダイ「あ、そういえば劉が女になった時の名前決まった記念に写

真貰ったんだよな？」

メガネ「おう！早速見てみるか！」

～一枚目、瑠璃がキョトンとしている時の写真。～

メガネ「手堅くジャブか……やるな」

コダイ「何の話だよ。まさしく『ふえ？』とか言ってるぞだな」

～二枚目、瑠璃が顔を赤くして、むうと怒っている顔の写真。～

メガネ「これはマーボー様がほっぺをプニった時の反応かな？」

コダイ「次の瞬間、フィオネにボゴられる結末が……」

～三枚目、瑠璃が裸Yシャツ一枚で微笑んでいる時の写真。～

コダイ「やっと笑った写真が……ってどうした？」

メガネ「甘い！全部しめてどうする！そこは第三まで開けるんだよ
！」

コダイ「寝るわけじゃないから別にいいだろ（なんか違う）……」

～四枚目、瑠璃がほっぺにクリームをつけながら、ショートケーキを食べている時の写真。～

コダイ「本当においしそうに食べるな……」

メガネ「お前、劉がケーキをおいしそうに食べてる写真大事にするもんな」

コダイ「当たり前だ、料理人名利につきるといふ事だ」

〽五枚目、瑠璃が、丸まって寝ている時の写真。〽

メガネ「猫だ」(鼻血ポタポタ)

コダイ「俺も寝る時大体こうだぞ？」

メガネ「さて、たっぷり萌えさせて貰ったし。お返しに男が好きなアレを！」

コダイ「カツコイイのとカワイイのセットで送る」

メガネ「是非、劉に見せて悶えさせてくれ！」

コダイ「さて、そろそろ行くわ、桃子と打ち合わせがあるし」(スタスタ)

メガネ「(絶対良からぬ事だな)皆様から意見や感想色々待っています！」

〽次回もお楽しみにしてください〽

一番の酒の肴は塩か飲み仲間b yコダイ（前書き）

コダイは前髪で顔が殆ど隠れていて、顔を全部見た人は殆どいませ
ん。

一番の酒の肴は塩か飲み仲間byコダイ

もう一人の魔導師、フェイト・テスタロッサと会ってから数日があった。

今日も特訓何だが。前の模擬戦とは違い対フェイト用の訓練だ。その内容は……

「じゃあああああああああああああああ!!」

「もつと速く動け。フェイトに追いつかれるぞ」

「でもフェイトちゃんより速す」遅かったら意味がないだろ」にやあああああああああ!!」

簡単に言えば「死ぬ気で鬼ごっこ」だ、普通の鬼ごっここと違つのは。俺がフェイトと同じ速さで攻撃して、なのはが逃げて俺に攻撃を当てる。

なのはの攻撃魔法は砲撃魔法のデイバインバスターとホーミング性能を持つ多重魔力弾のデイバインシューターの二つ、つまりなのはにはフェイトの様な近距離攻撃がない。

だから手数を増やすんじゃなく、持っている武器で自分の性能を最大に生かす戦闘法を教え込むしかない。

「いいかなのは。貴様の取り得は遠距離からの砲撃、近距離の高速戦闘のフェイトと正反対だ。だからフェイトの攻撃をかわしつつ自分の得意な間合いを保って、自分の攻撃を必中させる事だ」

「でも！フェイトちゃん速くてどうやって当て」自分で考える」鬼iiiiiiiiiiiiiiiiiiii」

何の事だ？俺は前の世界じゃ鬼どころか、外道や悪魔、DSなど言われていたんだぞ？

「特訓」という名の虐め」中

「よし。今日は終わり」

「……………」

「返事がない、ただのしかば」コダイ!? まだなのは生きてるか
ら!」冗談だ」

俺とユーノの目の前には、いい感じで気絶してるのはがいる。初
日でへばると思いきやかなり根性あるな。それでなくては虐め……じ
やなくて訓練しがいがある。

「レイジングハート、タイムはどうだ?」

捕まる平均タイムが5.5秒延びました

「昨日より少し伸びたな。運動神経切れてるのに魔法に関してはま
さに『天才』だな」

「君だつてなのはと同じぐらい天才だよ?」

「この前ようやく空を飛べる事を知った俺がか?」

実はレイには飛行機能が備わっていて、ついこの前気付いた。

けど、なのはの様にきちんとした飛行魔法じゃなくて、背中と足の
裏から魔力を噴射して飛ぶ。

小回りも利くし微調整もできるが物凄い燃費が悪い。だがなのはと
同じぐらいの魔力量のおかげでそれは解消される。

「あははは……でも気を付けてよ。いくら君が頑丈でも大変な事に
なるんだから……」

「全く、変な体質だな……………」

そして、俺にはある特異体質らしい。それに気付いたのはフェイト
戦後、すずかの所に戻った時だ。

「回想始め」

「おかえり〜ってコダイ君!？」

「遅いわよ!……ってアンタその怪我!？」

「怪我?……あ」

良く見ると血まみれだ……

それからはまさに修羅場だった、なのはとすずかは気絶するわ、フアリンは泣き叫ぶわ、アリサは首を絞めに掛かるし……ノエルが来なかったらどうなったのやら……

怪我の理由はユーノが落ちる所を庇ってヤバい所から落ちたと言っておいた、なのはと念話で口裏を合わせて。

傷はもう殆ど治りかけていたが、一応すずかの家で一日様子を見る事になった。

その時、すずかとフアリンが付きっきりで看病していたと加えておく。

〜回想終わり〜

「歴史上、誰も見た事が無い体質だよ……」

俺の体質はユーノが推測するには、あらゆる魔法を殺傷設定で受けてしまうという体質だ。

あの時の傷は、フェイトのフォトンランサーの傷……あれだけ喰らって生きてるって……化物だな俺……って今に始まった事じゃないな……

「明日?もしかして温泉の事か?」

ユーノとしばらく話し合っているとなのはが目を覚ました。

「え?何で知ってるの?」

「桃子から聞いた、もちろん行くぞ」

第一暇だし、断っても無理やり連れてかれそうだし……アリサとかアリサとか。

それに……あの計画を実行できる!……楽しみだ……フフフフ

フッフッフ

「ひいっ！」

「コ、コダイ！落ち着いて！その黒いオーラしまって」
おっと、いけないいけない、バレる所だった……………

飛んで、温泉に行く日……………何だけど、何この状況？

なのはとアリサとすずかが何か凄い火花散ってるし、恭也は殺気が
滲み出てるし。

どうやら誰が俺の隣に座るか決めるらしいが……………どっちでもいいだ
ろ。

「おい三人娘時間無くなるぞ」

「そうね。だったらジャンケンで決めるわよ！」

「負けないの！」

「これだけは譲れない！」

流石アリサ、これで速くおわ「私はグーを出すわ」おい……………
時間無いのに何心理戦始めてるんだこの三バカは……………やるか。

ガシッ！x3

「チョット、O S H I O K I シテクル……………」

三バカの襟首を掴み物陰へ引きずる。

「逝つてらっしや〜い」

桃子はハンカチを振ってる……………桃子の了承も得たし、タップリト
O S H I O K I スルカ……………

「にゃあああ！ゴメンナサイゴメンナサイ！O S H I O K I
はやくめ〜て〜！」

「ちよっと！離しなさいよ！なのはのビビリ方シャレにならないわ
よ〜！」

「コダイ君！ごめんなさい！だから許して〜！」

〜三分後〜

「三人で仲良く乗れ、分ったか？」

「」「ハイ、ワカリマシタ。サンニンナカヨクノリマス」「」

「……………もういい」

「」「はっ！今まで何を」「」

「俺は忍の車に乗るから」

三人を無視して忍の車に乗る。

行く道中、隣にいるファリンが凄く嬉しそうだった。ユーノは勿論、定位置（俺の肩）だ。

目的地に着くと、あの三人はいつもの様子だった。

「桃子……………（準備は？）」「」

「（バッチリ）まずは部屋割りからね もうこっちで決めているからこれをお願いね」「」

桃子は満面の笑みで部屋割り表を出す……………

『部屋割り表』

301 桃子、士郎

302 忍、恭也

303 美由紀、ノエル、ファリン

304 コダイ、ユーノ、なのは、アリサ、すずか

「なっ……………何だこの部屋割りは!!」
予想通り恭也がキレた。

「……………何か問題でも？」
「当たり前だ！」

「……………あつこの部屋は壁かなり厚いから大丈夫だぞ？」
「そうじゃない!!」

「なぐんだ、恭也ったらうそう言ってくれば良いのに」
忍がわざとらしく、クネクネしだした。

「俺が決めたんだぞ？ありがたく思え」
「流石コダイ君ね」

桃子とハイタツチする。前回、桃子と話し合っていたのはこの事だ。
「今すぐ変えろ!!」

「どうしてもか？」
「どうしてもだ！」

恭也の殺気がかなり強くなる。
「分ったよ……………」

恭也がホツとする。だがこれで終わりと思うなよ？
「……………恭也の部屋にノエルを追加する。ったく若いな」

「そつちじゃない!!」
「えっ……………」

「じゃあやっぱりファリンか!？」
わざとらしく驚く。俺の近くにいたファリンが『ひえっ!!』と言いつつ腕にしがみ付いてきた。

「違う!なのはと同じ部屋になつて何が目的だ!？」
「は?何の事だ?」

「しらばっくれるなっ!!」
背中から取り出した木刀で俺に襲いかかる……………が。

ガシッ! x 2

士郎が木刀を桃子が肩を掴んでいた。

「宿で暴れるとは、マナー違反だぞ？」

「それにコダイ君の所の部屋割りを決めたのは私よ」

「あ……いや……その……」

恭也が遠くからでも分るぐらいに冷や汗をかいている。

「ちよつと、O H A N A S H I I しようか……」

「い、いやだあああああああ……！！！！」

高町夫妻に引きずられて行く恭也。

「……さて、荷物を下ろすか」

「とつても楽しかったよ コダイ君」

忍は俺とハイタッチして部屋に入った。

さて、俺達も………って

「……………」

顔を真っ赤にして固まってる三人がいた。

「ユーノ、三人はどうしたんだ？」

「部屋割り表を見た時からこんな感じだったよ？」

……………猫だましで起こすか。

三人を起こした後、夕食までは自由時間と言う事で温泉に向かう。

レイは包帯で隠しユーノはなのはに連れてかれそうな所を連れ戻した。

「ありがとうコダイ」

その時のユーノの声が物凄い泣きそうな声だった。

～入浴中～

「中々いい湯だな」

ん？何故省略したって？男の風呂何て見たくもないだろ？

でもアレから土郎と恭也を見かけなかったけど如何したんだ？

「まだ、時間があるな……」

浴衣に着替え、ユーノを肩に乗せ、濡れた髪の毛を後ろで団子の様にまとめて。なのは達を探していると道の真ん中でなのは達と赤い髪の毛の女性が……？人なのか？あの女……どうでもいいか。

とにかくあそこに行くしかないか。

「おいそこの三馬鹿とオマケ、道の真ん中で立ち止まるな」

「チョット！三馬鹿って誰っ／＼／＼／」

「あっコダイ君、じっ／＼／＼／」

「ふえっ！／＼／＼／」

「誰がオマケだっ／＼／＼／」

俺に気付いた途端、顔を赤くする四人……のぼせたのか？

「どうした？のぼせたのなら水分を補給しておいた方がいいぞ」

「だ、大丈夫よ！（いつも髪の毛で見えなかったけど何よあの反則的な顔は！／＼／＼／）」

「し、心配してくれて、あ、ありがとう（わぁ肌白いい、何か大人っぽい／＼／＼／）」

「に、にやあ（うう、いつまで経っても慣れないよ／＼／＼／）」
三人はいつも通りだが、反応が無いのが一人。

「／＼／＼／＼／＼／＼／（何だいアイツは……世の中にこんな綺麗な人間がいるのかい？／＼／＼／）」

「……どうした？」

声をかけてみる。

「……はっ！ちよつとよ、用事を思い出した！そ、それじゃ！／＼／＼／
／ちゅ、忠告しとくよ。これ以上私達に関わらない事。でないとかブツといくよ」

そう念話で残して走り去った。一瞬だけ犬っぽい耳が見えたのは気の所為にしておこう。

「コダイ君、今の人って……」

なのはが不安そうに聞いてくる。俺が来るまでに何か言われたのか？

「フェイトの仲間だろ。俺達を知ってる魔導師はフェイトぐらいだし」

「じゃあここにフェイトちゃんか？」

「ついでにジュエルシードもな。さっそく話す機会が出来たな」

「うん！今度こそ絶対フェイトちゃんとお話するの！」

ジュエルシードを忘れるなよ？

「そういえば、すぐそこにゲームセンターがあったから気晴らしに遊ぶか？」

今はこの事を考えても仕方ないな……………

「いいかも、確か卓球もあったよね？」

「コダイ！アタシと勝負しなさい！今日こそギャフンと言わせてやるんだからっ！」

「ギャフン」（超棒読み）

アリサがキレて殴りかかる。今度は避けないで受け止める……………旅館で暴れたらマナー違反だしな。

「バーニングを捕獲。これよりゲームセンターに連行する」

そのまま引きずって、ゲームセンターに向かう。

「バーニング言っつな！それよりはくなくしくなくさっい！」

無視してそのまま引きずる。後ろから二人の苦笑いの声が聞こえた

……………

時間になるまで卓球とゲームで時間をつぶした……………結果？俺の圧勝だけど？

夕食は山の幸と海の幸の豪華な盛り合わせだった。途中で三人娘との食べさせ合いがあった。

夕食後、のんびりとした時間を過ごしたが……………が、ある計画により一気に崩れる……………それは……………

「『カンパイ』」

飲み会だ。参加メンバーはノエルとファリンと三人娘を除く全員だ。俺は士郎に止められたが『バレなければいい』と押し切った。

最初は楽しく飲み始めたが、酒がまわり始めるとだんだんおもしろくなくなると、凄惨な状況になっていた。

まず、桃子と忍と俺が恭也に酒を飲ませて気絶させる。

上機嫌に飲んでる美由紀に俺がドンドン勧めて、飲ませてダウン。忍が酒を飲まない組を標的にしている時、桃子と桃子の声マネをした俺で、酒で前後不覚になってる士郎を弄ってダウンさせる。

最後に桃子と忍の三人で今後どうやって弄るかと飲みながら話し合った。(なのは達はノエルとファリンによって非難していた)

「桃子さん、こういうのはどうです？」

「あら いいわね」

「だったら、こうすれば更に弄れる」

「さっすがリーダー」

いつの間にかリーダーになっていた。

ちなみに、この話は二人が潰れるまで続いた。

……俺か？あんなのは酔った内に入らない、酔うのなら樽を二桁用意しないと。

「オマケ」

赤い髪の女がコダイ達と別れた直後の念話。

「あゝフェイト？こちらアルフ」

「どうしたの？」

「さっき見て来たよ。なのはって白い子とコダイって黒い子に」

「どうだった？」

「白い子は問題無いねえ、フェイトの敵じゃないよ」

「じゃあコダイはどう？」
「……………」
「アルフ？」
「フェイトく世の中にあんな綺麗な子っている？／／／／／／」
「ア、アルフも見たの？／／／／／」
「フェイトの言う通りだよ…………アレで惚れるなって言うのがおかしいよ／／／／／」
「はう…………思い出しちゃった…………／／／／」
本題…………ジュエルシードの話になったのは。これから十分後の事であった。

「一番の酒の肴は塩か飲み仲間b yコダイ（後書き）」

メガネ「これほど桃子と気が合う主人公はいるのかと思う」

コダイ「自分でそうしたんだろ」

メガネ「んで、コダイの体質の事だけ。それは今後話すかも」

コダイ「どうでもいいけどな。むしろ緊張感を保てるからちょうどいい」

メガネ「おいおい……。ソラト様、マーボー様。感想ありがとうございます！」

コダイ「シスコンだからつきり」

メガネ「てつきりって……。でもあの三人にリンディ加わったらどうなるんだろっ……」

コダイ「俺は……（弄れる）人が多い方がいいな」

メガネ「そうか……。……（コイツの場合桃子も弄る対象だからな……）」

コダイ「あと劉よ……一つ言っておくがコヨリは薬で女になった俺だからな？」

メガネ「スタイルと目つき以外全く変わって無いしな。」

レイ「ねえねえ」

コダイ「どうした？」

レイ「わたしも、りゅうちゃんにおれいしたい」

メガネ「じゃあ、次回までに考えておいてあげる」

レイ「うん！」

メガネ「皆様の意見や感想など色々待っています。PVが73000、ユニークが8300突破しました！本当にありがとうございます！」

「次回もお楽しみにしてください」

年齢制限は精神年齢は適応されないのか？b y n タイ（前書き）

今回は下ネタになりかけてかなり焦った。

年齢制限は精神年齢は適応されないのか？byコダイ

桃子と忍が潰れた後、一人で飲んでいるとユーノから念話が来た。

「コダイ、ジュエルシードだよ！」

「了解した」

「コダイ君、行こう！玄関で待ってるから」

さて……行くか。っとその前にノエルに連絡をしておくか。

ノエルに連絡した後、すぐに玄関にいたのはと合流して、ジュエルシードのある場所に向かった。

「どうやら、遅かったみたいだな」

デバイスを起動させて探っていくと、そこにはすでにフェイトとさつき会った赤い髪の女がいた。やっぱり仲間か……

「はいオチビちゃん達」

女が俺達に気づいた、つてか名前が分からんから面倒くさい。

「ジュエルシードは危険なんだ！それを集めてどうするつもりだ！」

「さあ？答える理由がな「貴様に聞いてない。フェイト、どうなんだ？」何だつて!？」

何かギャーギャー言ってるけど無視だ。

「えっと……」

「俺はユーノに……友達に頼まれたから」

「私も、ユーノ君の探し物だから、それに魔法に関係ない人達を巻き込みたくないから」

俺に続いてなのはが答えた。

「私は……」「フェイト！答えん」「はいはい、静かにしろ」「イダダダダダダ！」ア、アルフ!？」

フェイトの間に割って入った女の背後を取り、コブラツイストで締

め上げる。ってかアルフって言うのか。

「気にせず理由を言ってくれ」

「は、はい……………」

フェイトは苦笑いしている……………よく見ればなのはもだ、ユーノは…

……………溜息をついてる。

俺何かした？

コブラツイスト？

してるな、現在進行形で。

「私は…ある人に集めろって言われたから、あの人のためなら何でもするって決めたから」

なるほどね……………ただの子供がどうして集めるのが気になったが。誰かに命令されたか……………だが子供使うのはどうなんだ？自分で行けばいいだろう……………もしこれが家族だったら……………容赦なしに殴り飛ばしてやる。

「お互いに、譲れなものがあるんだね……………」

「だから……………戦う」

フェイトはバルディッシュを構える。

「うん……………だから賭けよう、お互いのジュエルシードを」

なのはレイジングハートを構える。

そして二人は、夜空へ飛び立った。

わあ〜キレ〜

見上げた夜空には、桜色の光と金色の光が競い合うようにぶつかっていた……………まあ戦ってるし、あの光はなのはとフェイトだしな。さて、これから如何するか……………ジュエルシードはあっちが回収したし実際俺が戦う理由が無いな。

「いい加減に……………しろおおおおおおお！…」

うおっと……………アルフ？だっけ、締め上げてるの忘れていた。し

かも力づくで解くとか凄いな……

「無視するとはいい度胸じゃないか、さっきは油断したけど次はもう無いよ！」

するとアルフは自身の体を人から赤い狼に変貌した。

それを見たユーノは俺の肩に乗って来た。

「やっぱりだ！アイツはあの子の使い魔だ！」

「道理で何か違和感があると思えば……」

「あたしは、フェイトに作ってもらった魔法生物、主の魔力で生きる代わりにその力と命を持って主を守る存在さ！」

…… ヤバイ…… アレが子犬サイズだったら抱きしめてるところだった。何か凄い毛並みとか良さそう…… 今度フェイトに頼んで子犬に出来るかどうか聞いてみよう。

「へっ、もしかしてこの姿にビビったのかい？」

ごめん…… 聞いてなかった。

わあ〜おつきいワンちゃんだ〜

ここにも聞いてないのが……

「アタシは狼だよ！」

アルフが吼える。

わわわっ、おすわり！ち「それだけは言わせないから！！！」

「だから狼だつて言ってるじゃないか！」

狼は犬科つて言ったら吼えるな…… 確かに。ユーノ、ナイス被せ。けどレイ、それ三回目じゃないか？後……

「レイ……… メスにはナニはついてないぞ」

あっ！そうだった！

ズシャアアアアアアツ！！×2

あれ？何でユーノとアルフがコケてるんだ？

でも、なんでそういうのかな？

「見せるからじゃないのか？」

でも、それはオスのときでしょ？メスはどうなるのかな？

あれ？……………なんだっけ？

「メスの場合は……………ユーノ、どう思う？」

「僕に聞かないですよ……………って！コダイ、前！」

あ、ヤバい。アルフが飛び掛かって来た。横に飛んでかわす。

「人が考えてる時に何するんだ」

「それはこっちのセリフだよ！アタシ達はアンタらのポケ合戦に付き合ってる暇なんか無いんだよ！」

「ポケ合戦？何の事だ？」

わたしたちは、しんけんにかんがえていたよっ！

実際、メスの場合どうなんだ？……………ってあれ？アルフがワナワナ震えてる。

「えっと……………同情するよ」

「ありがとよ……………アンタはいつもこの二人と付き合ってるのかい？」

「まあね、天然でSだけと言った事は破らないから信頼してるよ」

「あははは……………フェイトも天然っぽいところあるし……………お互い天然な主を持つと苦労するね」

「僕の場合はお世話になってる人だけ……………」

「はあ……………」

ため息を吐く二匹。どうしたんだ？……………ってアルフ、何で俺を睨む。

「あゝもう！このイライラをアンタで晴らさせて貰うよー！」

「全く、なにイライラしているんだ？」

「全部アンタの所為だあああああああー！！」
そう叫んで、爪を振るい襲い掛かってきた。

「コノオツ！当たれえっ！」

ブンッ！！

「よっと、だから何度も言っているけど当てるよ」
飛び掛かると見せかけて、回り込んだ背後からの攻撃を飛んでかわす。

「へっ掛かったね！空中じゃあそう身動きとれないだろう？」

「ところがかわせるんだこれが。レイ」

バーニア

真下からくるアルフの爪を背中 of バーニアの一つだけに魔力を噴出させ、独楽のように回ってギリギリの所をかわす。
そして、回った遠心力を乗せた裏拳を振るう。

キーン！！

だが、その裏拳は障壁によって防がれ、お互いに距離をとる。

「ったく、ちよこまかと動いて攻撃が当たりもしない」

「それはこつちのセリフだ、その障壁の所為で決定打が決まらない
俺が攻撃すれば、アルフが防ぎ。アルフが攻撃すれば、俺がかわす。
これが何十回も行われた。それでもお互い殆どダメージが無い。

「コダイ」

次はどうするかと、考えているとユーノから念話が入った。

「なのはが負けたみたい」

そっちは終わったのか……………今度から内容倍にしようかな……………

「フェイトが勝ったみたいだね！さっすがアタシのご主人さま！」

アルフにもフェイトから念話が来たみたいだ。

「もうこれ以上戦う必要はないみたいだな。戻るか」

「そうだね。いや〜アンタ強いね、今度は絶対勝ってやるからね！」
さっきまでとは違う雰囲気二人の所に戻った。

二人の所に戻ると嬉しそうなフェイトと落ち込んでるのは、これだけを見てもどっちが勝ったか一目瞭然だな。

「うゝコダイ君、ユーノ君負けちゃったよ」

なのはが俺に泣き付く。後でどんな感じだったかレイジングハートに聞いてみるか、それで内容を変える。

「次から頑張ろうよ！」

ユーノが気遣う。

「けど、前より強くなったよ」

「ホントに!? フェイトちゃん！」

「うゝ、うん」

敵に慰められてどうする、後詰め寄るなよフェイトが若干引いてるぞ……………つて!!

「おい……………ここに結界張ったか？」

「え?いきなりどうしたの？」

フェイトが首を傾げている。

「張ったのなら俺の気のせいでもいいが……………アレは何だと思っ」

俺はある場所を指をさす。

「……………あ……………」

深夜なのに明りが段々多くなってる宿……………

「もしかして……………結界張り忘れたあああああああっ!?!」

「にやああああああ!急いで戻らないと!」

「フェイト!アタシ達も速く!」

「うん!それじゃあまたね!」

俺達は急いでそこから離れた。

「それとなのは」

「どうしたの?コダイ君」

「フェイトに負けたから訓練内容倍な」

「お、鬼iiiiiiiiiiii!」

強くなりたいたと言ったのはそっちだろ？

宿に戻ると、なのはは自分の部屋に戻り寝てしまった。ユーノも眠そうなので三人に潰されない所に寝かせた。

「俺は……温泉入るかな？」

実は温泉じゃあんまりゆっくり出来なかった。理由は容姿……これだけで分るだろ？

受付に聞いたら片方は掃除中だからもう片方を使ってくれとの話。別にいいけどな。

「結構いい湯だったし、明日の朝も入ろうかな……「ふえ？コダイ？は？」

脱衣所の扉の前でバツタリ会ったのは………フェイトだった。

「フェイトも温泉か？」

「うん、アルフが入らないと損だった」

「それはそうだな………俺は後でいい、終わったら念話で教えてくれ」

俺は部屋に戻ろうとした。

「ま、待って！」

「ん？」

大声で呼ばれたから思わず振り返った。

「もし、もしもだよ。一緒に………入ってくれないかな？／／／／」

「えっと………理由を簡潔に求める」

「………から」

え？今コイツ何て言った？

「………すまない……もう一度頼む」

「一人じゃ……頭をつまく洗えない」

ゴンッ！

フェイトの頭をど突く…俺は悪くないよな？

「うう〜」

頭を押さえて涙目のフェイト。

「子供か貴様は…大体アルフはどうした？」

「先に寝ちゃった……」

はあ……仕方ない。

「分った、手伝ってやるけどいいのか？男の俺が一緒に？」

ピシッ！！

あ……この展開は……って今はマズイ！

急いでフェイトの口を塞ぐ。

「ここは宿、今は深夜、騒ぐと迷惑、OK？」

コクコクとフェイトは頷いた。

フェイトの要望通りに頭を洗ってやった、体？約束は頭だけだ、洗
うわけないだろ？

「気持ち〜ホントに疲れが取れる〜」

そしてフェイトは絶賛温泉満喫中だ。

「ふにゃ〜」

物凄い蕩けてる……溶けてないよな？

「そついえばさコダイ、あの時アルフと何話していたの？」

「ん？……あの事か。確か……」

俺はその事について話した。

「メスの場合はどうなるんだろうね？」

「そうなんだよ、さっき言った理由ではオスしか成立しなくなる」

「う〜ん…今度アルフに聞いてみよう！」

「その手があったな」

「うん！もし分つたら今度コダイに教えるね！」

「ありがとう、フェイト」

頭を撫でる。

「ん／＼／＼／」

……何か猫っぽいな。

「じゃあ、お休み」

「ああ、お休み」

その後は普通の子供同士の会話をし、ついでに髪を乾かしてやっ
てから、自分の部屋に戻り、そのまま寝る事にした……………が

「何これ？」

眠りに付いて数時間後、重い感触に目を覚ますと右腕になのは、左
腕にアリサ、腹の上にすずかがいた。

え？さっきまで三人固まっていたよな？しかも何でガッチリホール
ドしてるし……………朝起きてこのままなら縄抜けをするか。

年齢制限は精神年齢は適應されないのか？byコダイ（後書き）

メガネ「天然と天然は放っておくと凄くヤバイ」

コダイ「今回シモになりかけたしな。R - 15でも不味いだろ」

メガネ「ちなみにアレって、実は立っているじゃなくてお尻が着いてるから鎮座ちんざする、から取ったんだって」

コダイ「成程：だからか、それならメスでも成立するな」

メガネ「マーボー様、感想ありがとうございます！」

コダイ「あ、そういえばレイが劉にお礼するもの決まったのか？」

メガネ「おう！事前にレイと打ち合わせしたからバッチリ！さあレイ！」

レイ「わたしはデバイスでカラダがないから、なにかをつくってわたすなんてできないから、『がんばって』とかのおうえんのことばをおくります！」

メガネ「という事でレイの応援ボイスを何個か送ります！」

コダイ「そろそろ無印も半分くらいか？」

レイ「がんばろう！コダイ！」

メガネ「意見や感想、色々待っています！これからも『魔法少女リ

リカルなのは「ある転生者の新たな世界」をよろしくお願いしま
す！」

「次回もお楽しみにしてください」

こんな日もたまにはいいかもれないロンドンダイ（前書き）

ロ亭…と語りより修業風景です…

「こんな日もたまにはいいかもしれないb yコダイ

「やっぱり朝風呂はいいものだ」

翌日、結局ホールドしたままだったので縄抜けで脱出して。今、朝風呂から上がったところだ。

「コダイ様、お早いですね」

部屋に戻る途中に偶然にノエルの会った。

「弁当とか作る時は自然と早く起きるんだ。で、ノエル…その袋は何だ？」

俺はノエルが持っている大量の何かが入ってる袋を指した。

「これですか？二日酔いの薬です、皆様かなり盛り上がっていましたが…コダイ様もどうですか？」

「酔ってないけど…念のために一本もらおう」

ノエルから貰った、液状の薬を一気に飲む。ビンとキャップを分別してゴミ箱に放り入れた。

「ほかの連中は？」

「フアリンはまだ寝ています、忍お嬢様と桃子お嬢様はかなり魔されております、土郎様、恭也様、美由紀お嬢様は軽症でしたけど」
桃子と忍が俺に次いで飲んでいたしな……………

「お嬢様達の方はどうです？」

「まだ寝てる。今帰れる状況じゃないし、そのまましておく。じやあ俺は一度部屋に戻る」

「分かりました」

ノエルは頭を下げて桃子達の部屋に向かった。

一度部屋に戻るとユーノが目を覚ましたらしく、体をグーツと伸ばしてる。

「 あっ！おはよう、相変わらず早いね 」
「 そうか？ユーノもこれ位に起きるだろ？ 」
三人を起こさないために念話で話す。
「 コダイ、ケガの方はどう？ 」
「 問題ない、攻撃は全部かわしたからな 」
静かに着替えながら答える。
「 さて、桃子のところに行くぞ 」
「 え？何で？ 」
「 そこにいると寝ぼけたなのは達がユーノを玩具にするぞ？ 」
「 い、イキマス！ 」
今までの最速と思うほど素早く肩に乗った。

「 うわぁ…… 」
「 いい感じにくたばってるな 」
「 ううゝ 」
「 あたまがあゝ 」
部屋に行くと頭を押さえて、突っ伏してる桃子と忍がいた。他の三人はノエルが買ってきた薬を飲んだのか少し楽そうだ。
「 いくらなんでも飲みすぎだったしな 」
「 でも何でコダイ君は平気なのゝ 」
「 記憶が正しければ一番飲んでた筈なのに…… 」
「 正確には二人が潰れた後も勿体ないから残ってる酒全部飲んだぞ？ 」
そんなに強くなかったしな。前の世界では、スピリタス（アルコール度数96の世界最強の酒）で飲み会とかしていたし……
「 士郎はもう大丈夫なのか？運転手がいないと帰れないし 」
「 俺は鍛えてるからもう大丈夫だよ、君はどうなんだい？一番飲んでいたし 」

「俺をそこにいるうわばみやザルと一緒にするな、一応薬も飲んだし、その前に朝風呂に行ってきた」

「そ、その歳で酒豪はまずくないかい？」

「そうか？……あと、酒豪とうわばみやザルは意味が違うぞ？」

飲んで酔わないのが酒豪。飲むだけなのがうわばみやザルだ。

ちなみに桃子と忍が何とか回復して、家に戻れたのは夕方だった……

……………

翌朝、時刻は午前4時。

「……………今度は中華にするか」

これもいつも通りだ。

「ふぁ〜オハヨ〜」

みゃ〜おはよ〜

ユ〜ノもレイも起きたし早速作るか……………

「で……………結局、俺が魔法を使えないのはまだ分かって無いのか」

「うん、資質もちゃんとあるし、デバイスだってあるんだ。使えないのがおかしいくらいだよ」

うう〜わかんないよ〜

朝食を終えて、後片付けを終えてもまだ時間があったから、魔法関係について話し合った。

「後、何か足りないのか……………」

足りなければ補えばいい……………けどその何か分からない……………

「よし、この事は一時保留。今は、なのはをフェイトに勝たせる事を考えよう」

「そういえば、内容倍にするって言ってたけど、どんな感じなの？」

「ユーノ……内容倍っていうのは言葉通りの意味じゃないんだ……」

「い、一体どんな……」

「……とにかく死なせない程度に加減するから」

「何を考えたのおおおおっ！！！！」

「決まってるだろおもしろ……じゃなく凄いい特訓だよ？」

とんで、現在放課後。ん？飛ぶなよっていつも通りだったぞ？ユーノ預けて授業聞き流して。昼休みの屋上で男子の襲撃……連休明けだったから迫力が二割増しだったただけだぞ？

「さて……始めるか。ユーノ」
「分った」

ユーノが結界を張る。

「行くよ、レイジングハート」

スタンバイ、レディ、セットアップ

なのはがレイジングハートを構える。

「さて、今回は昨日言った通り、内容は倍だ……その前に、一つなのはにお願いがある」

俺はなのはの肩を掴む。

「ふえ！？……な、何？」

「……死なないでくれ！」

「一体どんな内容なのおおおおおおおおおっ！？」
秘密だ。

「虐め……もとい特訓中」

「にゃあ〜……………」

「よし、少し休憩だ」

「にゃあ〜……………」

なのはがいい感じに死にかけているので休憩することにした。

「ほら、さつさと起きろ、弁当が無駄になる」

実は一旦着替えてから集まる予定だったので仕込みは朝に済ませたので余った時間で仕上げたのだ。

「コダイ君の弁当！？食べるの！」

勢いよく立ちあがるなのは、さつきまで人語も話せなかったのに…

…まだ足りなかったか？

「用意するから待っている」

「はい」

「ごちそうさまなの」

「かなり多く作ったのによく食べたな…何処に入るんだ」

「コダイ君の料理美味しいもん」

それは嬉しい限りだ。

「さて、なのは……………アレからフェイトに攻撃を当てる方法を思いついたか？」

「ふえ？……………考えてるよ、モチロン！」

「コンッ！」

「今さつき思い出しただろ」

今の間何だ？

「だって、いくら速く撃つても、フェイトちゃんにかわされるの」

「だからそれをどうするかを考えるんだ、こうやってフェイトの動きをマネして戦ったんだぞ？」

「でも、フェイトちゃんとコダイ君、見た目全然似て無いなの！イメージ着かないよ！」

「俺にあの服を着ると？いくらなんでも露出が多い」

「……………もう少し露出を無くせば……………。ん？流石にやめろって？何度も言うのが女装はオシヤレだ。」

「そうだな…せめてフェイトと同じ魔法を使えば何とかなるんだが……………」

俺は手から虹色の魔力を出した。

「今更だが…何で俺の魔力光が虹色何だ？」

「ああ、確かに。魔力光がダブるのは聞いた事あるけど虹色は聞いたこと無いよ……………」

なのはが桜色、フェイトが金色、ユーノが緑色、アルフが橙色……………」

「魔法が使えないから不安定なのか？」

「それは無いと思うよ。魔力光は魔法を使うエネルギーの色だから……………」

「じゃあ、ジュエルシードに触ったから変色したとか……………」

「可能性は否定できない……………。けど。現にそのレイといっても異常が無いから可能性はかなり低いよ？」

じゃあ何なんだ、一体……………」

そうユーノと話し合っていると……………」

「分ったの！」

さつきまで黙っていたのはがビシッ！と手を上げた。

「コダイ君の魔力光はいろんな色に変えられるの！」

そんな事出来たら今頃フェイトの魔力光に変えてるって……………へ？

「魔力光は一人に一色なんだ…魔力光を変えられるなんてあり得ない

よ

「まあ……そうだよな……じゃあ……これは何？」

「ユーノ……これは何だと思う？」

「俺は魔力を出している手を指した。」

「へ？コレってな……へ？」

「ふえ？コレって……」

「ユーノとなのはが呆然としている……」

「俺の手は……『金色』の魔力光を放っていた……」

「コレ……フェイトちゃんの？」

「間違い無い……おまけに電気も出ているし……」

「コダイ……何かした？」

「いや何も……」

「何もしてないよな？……じゃあ何でフェイトの同じ魔力光になるんだ？」

「確かなのはがいろんな色に変えれるとか言った後だったよな？……」

「あ、もしかして……」

「試しになのはの魔力光の桃色をイメージする……」

「ふえ！？」

「えっ！？」

「やっぱり……」

「予想通り、俺の魔力光は桜色に変わった……」

「なのはの言った通り、俺はイメージすればその魔力光に色を変えられる見たいだ」

「も、もしかして……レアスキル稀少能力！？」

「レアスキル？何それ？」

「なのはが聞き慣れない単語に首を傾げる。稀少能力は以前、ユーノから少し聞いた事が……」

「確か、通常の魔法の他に保有する特殊な固有技能だっけ？ユーノ」

「その通り。ただ魔力光を変えられるだけじゃ無いかもしれないから色々調べてみよう」

その方がよさそうだな……………

（調査中）

「現段階じゃあこんな感じかな？」

「まだ分らない事があるが、この辺にしておこう」
今の所分ったのは……………

・変えられる魔力光は寸分変わらず変えられるが、一度見たモノ限定。

・総魔力量は俺のに依存する。

・変えた魔力光に魔力変換資質があればそれを含めて変える事が出来る。

（例：フェイトの魔力光に変えればフェイトの魔力変換資質の電気も使用できる）

これ位だ、使い道が良く分らないなこれ…………… 必要あるのか？…
でも……………

「これでなのはが特訓に身が入るって事だな……………」

「え？……………ふえ！？」

「レイ……………アクセス」

ナウローディング．．．コンプリート

俺はレイを起動させ、魔力光をフェイトのに変える。

「見た目がフェイトに似て無くても、フェイトと同じ魔力光で攻撃すれば嫌でもフェイトと思うだろ？」

「えっ！？……………えっと……………その……………」

「さて…俺のせいで時間食ったし、かなり飛ばしていくぞ」
最初に言っただろ？内容は倍だって

「に、にゃああああああああああああああああっ！！あ、

悪魔あああああああああ！！」

…何故かそれだけは貴様に言われてたくない……………

ちなみに、俺の稀少能力は『同調（チューニング）』と名付けて貰った。（ユーノ命名）

くオマケく

稀少能力を調べている時ある事を閃いた。

「なのは、レイジングハートを貸してくれ」

「え？いいけど…何をするの？」

面白い事だよ。俺は魔力光を桃色に変える…

「レイジングハート……………セットアップ」

スタンバイ、レディ、セットアップ

レイジングハートが起動され、なのはが纏っていたバリアジャケット

トを俺が纏っていた。（髪型は勿論ツインテール）

「か、かわいいの〜天使みたいなの〜／＼／＼」

いやいや、なのはが着てた奴だぞ？

「もし、コダイがレイジングハートを起動していたらこんな姿になるんだね……………」

それは流石に……………嫌でも無いか……………

後、いくら魔力光を変えても魔法が使え無かった……………コレが一番痛い……………

「こんな日もたまにはいいかもしれないb yコダイ（後書き）」

メガネ「はははははは………」

コダイ「笑い事じゃない！なんだアノふざけた稀少能力は！オシャレにしか使えないだろうが！」

メガネ「ツツコミ所そこ！？つかいい加減、女装〓オシャレの考え治せよ！」

コダイ「男物の服なんか、あり得ない位似合わないんだ！仕方ないだろ！？」

メガネ「何かスツゴクすいませんでしたあっ！」

コダイ「もういい……早く進めろ」

メガネ「マーボー様、感想ありがとうございます！」

レイ「リュウくん！おへんじありがとう！」

コダイ「コイツのテンション落ち着くまでかなり時間がかかったけどな」

メガネ「でも嬉しそうだったし結果オーライ？……ねえレイ、劉とコダイ……どっちが好き？」

レイ「ふえ？コダイとリュウくん？。ふたりともだあいすきだよ！みんなだあいすき！」

メガネ「そうか…（そういえばまだ赤ん坊だったな）」

コダイ「さて…俺の稀少能力についてだが、次回詳しく説明する後本編に出た俺の特技の数々もついでに」

メガネ「皆様の意見や感想、後誤字の報告など色々待っています」

「次回もお楽しみにしてください」

稀少能力などの追加設定。(前書き)

PV1000000、ユニーク100000

.....(。)

.....()ゴジゴジ

.....()

11/30 修正しました

稀少能力などの追加設定。

レアスキル
稀少能力

チューニング
『同調』

一度見た魔力光なら完全に変える事ができる、魔導師が持つてる魔力変換資質もその魔導師の魔力光に変えれば扱うことができる。

稀少能力は魔力と関係ないので使用できない。

自分より魔力量が多い魔導師に変えても魔力量はコダイに依存する。また、魔力光を完全に変える事が出来るので、人のデバイスを起動させる事が出来る。（現段階では魔法は使えない）

コダイの魔力光が虹色の理由はこの同調によるもので、周囲の魔力素に反応して変色してる。本来の魔力光は不明。

特異体質

『名称不明』

魔法を強制的に殺傷設定で受けてしまう体質。

『不死体質』

どんな事があっても死ねない体質。不死身というより、死≡気絶程度になる。

再生力は普通の人間並み。

直接は触れてないがコダイが『今に始まった事じゃない』っと思ってる限り。

この体質は前の世界でもあったようだ。

メガネ「まさに中二病！」

コダイ「貴様もな！」

メガネ「さて、次はコダイの特技についてだが……」

コダイ「ん？」

メガネ「メンドいのでやめた」

コダイ「……………」

（ O S H I O K I 中 ）

コダイ「だったら最初から言つな……………わかったか？」

メガネ「ハイ、ワカリマシタモウシマセン」

コダイ「もういい……………」

メガネ「ハッ！今まで何を！」

コダイ「…で。どうするんだ？」

メガネ「数え切れないほどある。という事で…だってお前『性格最悪の完璧超人』だから」

コダイ「その一言で終わってしまつような……………」

メガネ「その代わりにチョットした事をやりたいんだ…………… P V 1 0

0000とユニーク10000突破を記念して」

コダイ「おお……………で、何をやるんだ？」

メガネ「お前が着る服を募集しようかと……………」

コダイ「それは何か面白そうだな」

メガネ「読者の皆様！コダイに来て欲しい服を送ってください！もしかしたら本編で使うかもしれません！」

コダイ「女物でも勿論OKだ、だが露出が多いのはNGだ…」

メガネ「それではこれからも『魔法少女リリカルなのは』ある転生者の新たな世界』をお願いします！」

稀少能力などの追加設定。(後書き)

メガネ「……………」(返事が無い、ただの屍のようだ)

コダイ「今回は俺とレイで進行する」

レイ「わ〜い！コダイ！がんばろ！」

コダイ「分った。早速だが感想を頼む」

レイ「マーボーさま、ありがとうございます！」

コダイ「前は俺の作者がおもしろ〜じゃなくて馬鹿な事を本当にすまなかった。お詫びとして俺が前回なのはに作った弁当を量を多くして送る。(重箱五段)」

レイ「あ、マーボーさまから写真貰ったよ！」

〜劉ちゃんと瑠璃ちゃんのお風呂写真！！(涙目&顔真っ赤！)〜

コダイ「作者が死んだのはこれか…………この発想は無かった」

レイ「ふえ？」

コダイ「だったらこっちも写真を送ろう……………」

〜撮影中〜

コダイ「これで、劉やフィオネ、クリス、ゼロ、マーボーも卒倒だ

「！」

レイ「いけんやかんそうなどイロイロまっています！」

「次回もお楽しみにしてください」

馬鹿は死んでからでないと治らない…って俺死んでたb yコダイ(前書き)

コダイが変えられるのはあくまで魔力のみでレアスキルのような固有技能は使えません

馬鹿は死んでからでないと言らない……って俺死んでたよコダイ

「えっとさ……コダイさ……自分の体質分ってる？」

「分ってるぞ？」

「ごめんなさい……………」

うううしくびくた

只今俺はユーノに右腕を治して貰ってる。右腕だからレイが唸ってる。

理由は簡単、いつもの訓練でなのはが放った砲撃を素手で受け止めてしまった。

俺の体質の所為で受けた右腕は血まみれで骨が折れてる。

「コダイ君……痛くないの？」

なのはが涙眼で聞いてくる……………うん、少し……………いやかなり痛い。

「痛いって言っても痛みは引かないだろ？だったら我慢すればいいだろ」

今までそうだった、どんなに怪我をしても、痛いと言ってる暇は無かった……それを言ったら更に酷くなるばかりだ、だから我慢するしかなかった……………

「強いんだねコダイ君……」

そうだな……………強くなるしかなかったからな。

「はい、終わったよ。次からはホントに気を付けてよ？」

ユーノの治療が終わった。痛みはもう無い……流石だな。

「あとすら残って無い……凄いな」

「僕に出来るのはこれ位だし、怪我した時は治すからちゃんと言つてよね？」

嬉しそうに笑うユーノ。

「これなら、いくら怪我しても大丈夫だな」

うん！よろしくね。ユーノ！

「僕の話聞いてなかったの!？」
「きいてたよ?これであんしんしてコダイがケガできるんだよね?
「そうじゃなくて!そもそも怪我をしないでよ!」
「それは保障できない!」
「にはははははははは……」
「なのほも笑ってないで何とかしてよ!」
「そうだ、笑ってないで早速再開するぞ」
「ふえ?……」に、にやあああああああああああつ!」

次の日の学校にて……

「なのほちゃん、大丈夫?」

「にやあ〜」

「チヨット!聞いているの!？」

「にやにやあ〜」

「……やりすぎた?」

「みたいだね……」

俺達の目の前には垂れてるなのほがいた……とりあえず生きてるからいいか。

「なのほ!チヨット!」

「ア、アリサちゃん。落ち着いて」

「にやあ〜……」

アリサがなのほの肩を掴んで揺らして、すずかがオロオロしてる。そしてなのほは目を回している……もうちょっと見ている「コダイ君!一緒にアリサちゃんを止めて!でないとなのほちゃん死んじゃうよ!」え〜……こんな面白いのに?

「はあ……仕方ない」

アリサの襟首を掴み、なのほから離れた。

「何するのよ！」

「いや、俺もあんな面白い状況を眺めたいと思ったが。なのはが死にそうだから、止めたただけだ」

「あっ……………」

目を回しているなのはを見てようやく気付くアリサ……………

「にゃあ〜アリサちゃん……………」

なのはが初めて人語を話した。

「凄く早い相手に攻撃を当てるにはどうしたらいいの〜」

何言っているんだこの女！何魔法関連のこと話してるんだ！

なのは〜ストップ〜！

レイもかなり慌てている。いざとなったら物理的に黙らせるか……………

……………

「え？ゲームの事？だったらそんなの簡単よ」

「ふえ？」

どうやら、ゲームと勘違いしてくれたようだ……………

「相手より早く動いて攻撃するか、相手を動けなくして攻撃を当てるの二つよ。それでもダメなら相手の行動パターンを把握して隙の少ない攻撃を当てるしかないわ」

そうだよな、動きの速い敵にはそれしかないと思う。

「そうか！分ったなの！これでフェイトちゃんに勝てるの！」

わ〜！わ〜！

この馬鹿！

「フェイト……………？誰？」

「ふえ？フェイト「シッ！」にゃ？」

これ以上喋らせないために顎先を掠り気絶させる。

「どうした、なのは。何？ゲームのやり過ぎで疲れた？じゃあ保健室に行くか」

なのはを引きずって教室を出ていく。

「アンタ、今チヨッピングライト「気のせいだ」いやでも「アリサの気のせい、OK？」OK……………」

なのはが目を覚ました後しつかりと O S H I O K I をした。
当たり前だろ？危うく関係無い奴を巻き込む所だったからな。

「魔法の事バレたらどうするつもりだ！！」

「にゃあああああああああ！！！！！！」

放課後、ユーノからの念話でジュエルシードが発動したと聞き、なのはと共に急いで現場に向かう。フェイトとアルフが既にいた。

「こっちは学校があるんだ。少しハンデくれよ」

「え？えつと……………ごめんなさい」

「皮肉だから流せよ……………」

「え？そうだったの？……………ってあれ？なのはは？」

「ん？後ろにいるぞ？」

「ゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイ
イゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイ
イ」

俺が後ろを指すとフェイトが俺が引きずってるなのはに気づいた。

「な、何があったの……………？」

「O S H I O K I を少しって、どうしたフェイト？何かガタ
ガタ震えてるぞ？」

「ゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイ
イゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイ
イ」

「イ」
「……………起きる」

「パァン！」

猫だましで二人を起こす。

「「にゃっ！」」

「どうしたんだ？ガタガタ震えて」

「えっとね…コダイのあの言葉を聞くと何故か身に覚えの無い恐怖が蘇ってくるの……………」

「フェイトちゃんもなの？」

「なのも？……………」

「……………フェイトちゃん！」

「なのは……………！」

二人は強く抱き合った。つておーいジュエルシードはどうした？

「フェイト！なにやってるんだ！」

「なのは！今はジュエルシードの封印を！」

「「はっ！」」

アルフとユーノの声で正気に戻った二人…………

「コダイ君！ジュエルシードは！？」

「……………上だ！」

辺りを探していると、上空に光を見つけて俺が指した。

「「ッ！！」」

同時に二人は空へと飛んだ。

「うひゃゝあの子も早くなつたねゝアンタ達の協力かい？」

アルフが少し嬉しそうに驚いてる。

「まあ、なのはに足りなかったのは戦闘経験だからな。だから現段階で詰め込めるだけ詰め込んだのさ、ユーノと一緒に……………」

それにしても、何でそんなに嬉しそうなんだ？敵だぞ？」

「何か敵とは思えなくてね。アンタ達と会ってからフェイトがさ、

笑うようになったんだ。あの子に負けないように頑張るって特訓もしてるし……何も無い時はアンタの事で話題になってるよ」「俺の事で？……フェイトと直接戦った事は無いよな？

「っと……ご主人様が戦ってるのに私たちは立ち話をしてる暇は無いね！」

アルフが距離を取って構える。

「今日は狼じゃないんだな。ユーノ離れてろ」

「うん」

ユーノが俺の肩から離れる。

「まあね、アタシはコツチの方が得意でね」

アルフは自分の拳を叩き合わせる。

「ねえコダイ！いまおもいだしたんだけど。イヌのげいのチ「アタシは狼だよ！ってかまだそのネタ引つ張る気かい！」ってさいごまでいわせてよ」

アルフ、敵ながら天晴な被せ………つて！！

「そうだ！フェイトにアルフに聞いて貰う様に約束したんだ！」「すっかり忘れてた！

「何で敵とそんな約束をするんだよ！！」「

ユーノとアルフが同時に叫んだ。

「まあいい………後でフェイトに聞くか」

「くっそ！ポッコボコにしてやる！」

そして俺達の二度目の戦闘が始まった。

最初に来たのはアルフの拳、特に細工もしていない様だ………それを難なく左腕で防ぐ。

「甘いよ！本命はこっちだよ！」

防ぐと同時に反対側から上段蹴りがやって来る……………まあ

ブンッ！

「知っていた」

蹴りをしゃがんで避け、そのまま足払いを掛ける。

「おっと、前はこれでコケちまったからね」

アルフが小さく跳んでかわす。そしてそのまま空中で一回転して。

「二度目は無いよ！」

ゴオッ！

遠心力の乗ったかかと落としを振り落とす。

「勉強済みか…」

体を捻ってかわし、振り終わりの直後を狙って、下から顔を蹴り上げる。

キンッ！

蹴りは顔に届かず間に割った橙色の障壁が防ぎ、アルフは後ろに飛んで距離をとった。

「ったく、その細い体で良くそんなパワー出せるもんだよ。バリアを張ったのに衝撃で飛んじまったよ」

「全く、無駄に硬い障壁だな……………一撃では無理かもな……………」

「へっ！アタシは主を守る使い魔だよ！防御が硬くなきゃ話にならないよ」

「じゃあ……………その使い魔の壁……………壊させてもらおう」

「やってみな！」

俺とアルフは同時に突っ込み。

ガチイツー!!!

同時に組み合った。

「ぐっ!.....」

「.....」

お互いに力は互角、拮抗してる。こっからどう動くか.....

「言ってい置くけどね.....真正面での力比べは.....」

瞬間、俺の体が持ちあがる。

「アンタより大きいアタシが有利だよ!」

アルフがそのまま上へ放り投げる。

「じゃあ、その力を利用して貰う」

投げられる瞬間にアルフの腕を掴み、力に逆らわずに一本背負いの要領で投げ飛ばす。

ブンッ!!!

「あ、しまっ.....」

かなり遠くに投げてしまつて最後が聞き取れなかった。アルフはすぐに体勢を整え、こっちに突っ込んでくる。

「馬鹿の一つ覚えが.....」

突っ込んでくるアルフを紙一重で避けて、カウンターを.....

ガシッ!!!

「言っただろ?二度目は無いって.....」

紙一重が仇となって、アルフに腕を掴まれた。

「こんどはそつちが.....ぶっ飛ばっ!!!」

ブンッ!!!

力任せにブン投げられた。このままじゃ

「くっ……………レイ！」

バーニア

バーニアを展開して、体勢をなおす。

「レイ！バーニア最大噴出！」

バーニア

現段階で出せる最大出力でアルフに向かって飛ぶ。

「いくら加速付けたって無駄さ！」

アルフもこっちに突っ込んで組み合おうとする……………けど今度は違っ

スカッ！

組み合おうとしたアルフの腕が空を切る。

「なっ！どこだい！？」

俺を探すアルフ、教えてやるか……………

「ここだ」

「なっ！！」

俺がいるのはアルフの頭上、アルフの肩に手を置いて、逆立ちで立つてる。

「お邪魔します。そして……………」

体を後ろに反らして。

「お邪魔しましたぁ！！」

反動を利用してそのままアルフの顔に膝蹴りを打ち込む！

ギンッ！！！！

「って、これも障壁かよ！」

防がれた瞬間にアルフから離れる。

「へっ！つつつ詰めがああああ甘かったようだね！」

でも、精神的に効いてるみたいだ……………

「しっかし、よくあんな戦法考え付くね」

「俺はほかの人間と比べて体が小さいから、大きい相手を倒す方ははいくらでも知ってる」

実は殆ど力技で捻じ伏せているから、あんまり使った事ないけど。

「ユーノ、なのははどうだ？」

ユーノに念話で聞いてみる。一応アッチがメインだし。

「今の所善戦してるよ」

「そうか、分った。何かあつたら連絡してくれ」

そう言つて念話を切った。

「あつちもまだ続いてるみたいだし。まだ続けるか？」

「当たり前！」

同時に構える。そして……………

「ッ！！！」

同時に掛け出す……………だが。

「ああっ！！！」

「おい、コレって……………」

ぶつかり合う直前。それは光が天に昇つた事で中断された。

「大変だ！あの二人の魔力に反応してジュエルシールドが発動した

！

ユーノから念話が入った。じゃあさっきの光はジュエルシールドか。

「おい！この場合どうすればいい！」

「再度封印すれば収まると思う！」

「分った、今そっちに向かう アルフ！一時休戦だ、二人の所に

向かうぞ」

「当たり前！」

俺達は急いでなのは達の元へ向かった。

俺達が着いた頃にはなのはとフェイトは封印する所だ、つてか前に

俺言ったよな？ジュエルシードの周りで暴れるなって……………

「「きやあつ！！」」

二人のデバイスがぶつかり合った瞬間、二人はジュエルシードによって吹き飛ばされた。

「アルフ！」

「分ってるよ！」

俺が言う前にアルフはフェイトの方に向かった。俺もなのはの方に向かい、なのはを受け止めた。

「コダイ君！？」

「つたくだからジュエルシードの周りで暴れるなって言っただろ」

「ごめん……」

ってレイジングハートがボロボロだ、多分あつちのデバイスも同じぐらい酷いだろう……………

「ユーノ、アレを封印できなくても、黙らせる方法はあるか？」

「うん……………多分だけど……………大きな魔力を叩きこめば何とか分った」ちょ！分ったって！

魔力を叩きこむと言っても魔法が使えないから……………直接送りこむか。

暴走してるジュエルシードに近づき……………それを掴んだ。

「ぐっ！……………ああああああああ！！！！！！」

最初にジュエルシードを掴んだ時と比べて、痛みも熱さもそんなに無い……………これなら……………

魔力を大量に叩きこむ……………つく、全然収まらない！

くうううううううううう！！とまれええええええええええ！！！！

「止まれええええええええええええええええ！！！！」

ピシッ！

……………嫌な音を聞いた。右腕の装甲に罅が入った……………頑丈さならなのはに負けないんだが。

ビキビキビキッ！！！

罅が右腕全体に広がった……早く収めないと！

「止まれよ！このじゃじゃ馬！」

ありつただけの魔力を叩きこむ……っ！！

バキヤッ！！

右腕の装甲が壊れ、右腕から大量の血が吹き出た。折角治して貰ったばかりなのに……

「とま……れえ……！！！」

それでも右手は絶対離さない。

暴走はいまだに止まらない……このっ！こっちはかなりの量を叩きこんでるんだぞ！？

「くっ……っ！！！」

その時、右手が暖かい何かに包まれた……

「コダイ！私も手伝う！」

すぐ近くからフェイトの声が聞こえた。とすると右手を包んでいるのはフェイトの手か。

「俺が押さえるから、封印を頼む」

「うん！」

フェイトが金色の魔法陣を展開する。

「この……いい加減にしろ……」

「くろう！止まれ！」

おねがい！とまって！！

俺達の願いも空しく、ジユエルシードは暴走を増すばかり……って

「コイツ、さつきよりヤバいぞ！」

「何で！？二人掛かりでやってるのに……」

「……そうか！分ったぞ！二人のどちらかが手を離すんだ！」

ユーノが突然叫んだ。

「ユーノ君それどういう事？」

「二つの魔力がぶつかってるからさっきと同じ状況を作っているんだよ！このままじゃ二人とも怪我じゃ済まない！」

「フェイト、聞いてただろ。ここは俺一人でやる」

「ダメ！コダイがこんなに怪我してるのに一人に何かできないよ！どうすればいい！……せめて魔力を一つに出来れば………魔力？

………一つ？………出来るぞ！アレを使えば！

「フェイト！俺の魔力を貸すからそれを使って封印しろ！」

「え！？でも二つだとダメなんじゃ………」

「俺にはコレがある、こんな使い道があるとは思わなかったけどな

………チューニング同調！フェイト・テスタロツサ！」

同調で俺の魔力を虹色からフェイトと同じ金色に変える。

「え？コダイ………コレって………」

「そうか！その手があつたか！」

ユーノは分つたみたいだ。

「フェイト、いつも通りにすればいい………」

「うん………ジュエルシード封印！」

ジュエルシードが金色の光に包まれる、光が収まるとジュエルシードはもう沈黙していた………

「え？このジュエルシード貰っていいの？」

「ああ、だって封印したのはフェイトだからな」

封印の後、地上に降りてから、バリアジャケットを解除して、ジュエルシードをフェイトに渡した。

「問題無いだろ？」

俺は後ろにいる、なのはとユーノに聞いた。

「というより君が封印した様なものだから君の好きにしていよいよ」

「私はフェイトちゃんにあげてもいいと思うの、私は何も出来なかつたし……」

「ということだ。これはフェイトの物だ」

「で、でも……」

「いいから貰っとけ」

俺は無理やりジュエルシード握らせた。

「えっと………ありがとう／＼／＼／」

恥ずかしそうに礼を言うフェイト。

「あ、そうだアルフ。コダイの腕治してあげて」

突然、何か思いついた様にアルフに言ったフェイト。

「んゝあんまり自信無いけど………よっ！」

アルフが俺の足元に魔法陣を展開する。

「これ位ケガの内に入らない………」

「ジュエルシードのお礼として受け取って欲しいの………だめ？」

少し悲しそうにするフェイト………治してくれるのだから

別にかまわないからいいか。

「分った、ありがたく受け取る」

「うん！」

凄まじく嬉しそうにするフェイト。

「ほい。アタシにはこれぐらいしか出来ないけど」

そう話している内に治療は終わっていた。骨折などの大きな怪我は

治りかけの状態だった。

「いや、十分だ」

軽く腕を振って確かめる………痛い。

「じゃあこれで………」

「頑張つて怪我治しなよ」

二人はそう言つて去つて行った………

「……………君ってもしかして馬鹿？」

「頭はいい方だぞ？」

「うう〜つ〜か〜れ〜た〜」

フエイト達が去った後なのはを家に帰り、今自宅でユーノに治してもらってる。

「はあ……………けどよくあんな土壇場で考え付いたね。同調でフエイトチューニングの魔力に変換して使わせる何て」

「寸分変わらず変えられるのなら、その本人も使えない筈はないと思っただ。元は自分の魔力だし……………レイジングハートはどうなんだ？」

俺は罫の入ってる待機状態のレイジングハートに目を向けた。

「派手だけど、内部には特に傷は無いから自己修復で間に合うよ」

「あっちも同じ状況だし、今は一時休戦か……………」

「はい。骨折は治したけどまだ派手に動かしちゃダメだよ？」

「分った……………少し痛いな」
軽く腕を振る。

「明日は学校休むか……………」

そんな事を考えながら、寝る準備を始めた……………

馬鹿は死んでからでないと治らない……って俺死んでたb yコダイ(後書き)

メガネ「早速、稀少能力が大活躍！……ってアレ？コダイは」

コダイ「今帰ったぞ」(スタツ)

レイ「ただいま」

メガネ「どうだった？」

コダイ「面白かったぞ？また行きたい位だ、レイも喜んでるし」

レイ「えへへ」

メガネ「そうか。よし！今回の感想は大量だし気合い入れるぞ！……
……………ユタ様、ながも様、マーボー様、
によりほほ様、感想
ありがとうございます！」

レイ「マーボーさまからルリちゃんとかせいのシュークリームあり
がとう！」

メガネ「早速食べよう！」

コダイ「まあ待て、さっきゲストで貰った瑠璃手製のマカロンもある。
今紅茶を淹れるから一緒に食べよう」

メガネ「おお！それいい！」

レイ「そういえば、リクエストきたんだよね？」

メガネ「おおそうだった！リクエストしてくれた。ユタ様、によほほ様、ありがとうございます、近いうちにコダイに着せます！リクエストはまだ続けるのでドンドン送ってください！」

レイ「それといけんやかんそうもドンドン送ってください！」

コダイ「出来たぞ」（紅茶を運んでくる）

メガネ「では！いただきます！」

コダイ「そういえば、ゲストの際、返事遅れたんだよね？」

メガネ「あっ……………」

コダイ「チヨットO S H I O K I ショウカ……………」

「次回もお楽しみにしてください」

味見と言って食べる奴は本気で食べるb y n o d a i (前書き)

今回はほのぼのだけど。短めです。

味見と言って食べる奴は本気で食べるbyコダイ

右腕を怪我した翌日、学校を休んだ。

ユーノからは派手に動かさなきゃ問題無いと言われた。幸い利き手では無かったのがよかった…

「さて……………暇だ」

膝の上のユーノを撫でて呟いてみる…………

そっだね」

あの時の怪我はレイにはほとんど影響が無かったらしく普通に活動している。

P i P i P i P i P i P i

ん？電話か、こんな時間帯に誰だ？

「こちらトキガワ」

「コダイ君、みんなのアイドルの桃子です」

電話の相手は桃子だ。

「桃子か、どうした？」

「あららスル？でもそんなコダ「何かユーノ呼んでる気がするから切るか」ゴメン、切らないで！」

「いいから要件を話せ」

「今日コダイ君、怪我で休んでいるんですよ。だったらお昼こっちで食べない？」

「そっちつて、金取るのか」

「取らない取らない コダイ君にはいてくれるだけでいいから
いてくれるだけ？……………ああ。

「要するに客寄せ人形か」

「正解」

「分った……………ユーノも連れて行くから、ユーノの分も」

「了解、リーダー」
そう言って桃子は電話を切る……………つていつの間にかリーダーになっ
ていたな。
「行くぞ、ユーノ」
「うん」
ユーノを肩に乗せ家を出た。

「コダイ…何でそんな恰好できるの？」

「ん？女装はオシャレだろ？」

「違うって……………」

今、翠屋でユーノと一緒に昼食を取ってる。それと桃子が客寄せのために渡してきたのは黒ゴス、しかも包帯がどのとか言いだして眼帯が追加された。

「アム…このサンドウィッチ美味しい」

サンドウィッチをちぎってユーノに渡す。

「キュツ そうだね」

しばらくユーノと遊んでいると、デザートのカークを持ってきた桃子が来た。

「コダイ君、今来るお客さんの相席お願い出来るかしら？実は席が無いのよ」

「といっても。こっちは断れない身だし…」

「ペット同伴でもいいって言うなら構わないが……………」

「大丈夫よ さっき聞いたらOKだって」

「だったら呼んで来い」

「ありがとう、コダイ君」

桃子はケーキを置いて、恐らく待たせてる客の方へ行つた。
そういえばこの時間帯ピーク時だったな……

「あの……………」

もう来たのか早いな……………へ？

「ふえ？」

「アンタ……………」

俺の気のせいならいいが……………何でここにフェイトとアルフがいるんだよ……………

もう何度目か知らないが、何度も言つてやる……………

「どうしてこうなる……………」

「ん〜どうしたんだい？」

「ア、アルフ！次私ね！？／＼／＼」

何がって？只今俺はアルフの膝の上で人形の如く抱き締められてる…

「はあ〜こんな可愛いのに男つてのが信じられないよ」

「ん？フェイト、アルフに話したのか？」

「え？うん」

そういえば。アルフがいつも話題になっていると言つたな。

「で、その時の反応は？」

「……………耳が痛かった」

ああ、予想通りのリアクションをしたと……………

「ごめんよ〜フェイト、だってこんな美人が男だ何て詐欺にしか思えなくて」

「うん……………でも、何で男の子なのに女の子の服を着てるの？似合
うけど／＼／＼」

「え？女装はオシャレだろ？」

「「違うから！」」
流石、主と使い魔。息ピッタリだな。

「コダイ、あの……質問があるんだけど」

フェイトは俺に密着しながら効いてきた。何故密着？と言うと。フェイト曰く自分の番らしい……

後アルフはフェイト達がなのは俺の友達と知って桃子がサービスしてくれた物に文字通り喰い付いてる。

「ん？何だ？」

「あのさ……お母さんにあげたら喜ぶ物って知ってる？」

「喜ぶ物？」

「うん、実は……」

フェイトは母親と離れて暮らしていて、今度戻るらしく、その時のお土産を考えているようだ。

「良く分らないな、親に物を渡すという機会は無かった」

実際、物心ついた頃に死んだからな。プレゼントなんて親に貰った事もあげた事も記憶上無い。

「無かった？」

「いや、こつちの話だ。まあ……在り来りだが、心が籠ってればいいのではないか？」

「う、うん……でもそれが難しいんだよね……」

「……フェイトは何を渡すつもりだった？」

「えっと……ケーキかな？」

成程……よし。

「ならそれでいいだろ。ただし……それは買つので無く、作るんだ」

「え？……」

「よし…材料はこんな感じだな」

「だ、大丈夫かな？………」

「大丈夫だつて！フェイトなら出来るよ！」

「もしもの時はコダイがフォローしてくれるから、落ち着いて緊張してるフェイトを、アルフとユーノが落ち着かせる。

あの上に桃子に勘定をして、ケーキの材料を買いに行つて。（勿論着替えて）

今俺に家で、ケーキを作る準備をしている所だ。

ちなみにフェイトのバルディッシュは一応両者の警戒の為、待機状態のレイジングハートの隣に置いた。

「さて……今回は普通のショートケーキを作るのだが………アルフ、摘み食いをするなよ？」

「アタシが、まるで大食いキャラ見たいに言わないでくれ！」

だって、そうじゃ「せめて食うなら肉だよ！」まんまかよ………

（ケーキ製作中）

「えっと……薄力粉と砂糖と………」

まずは材料の分量を量る事から。俺は事前にバターと牛乳を湯煎した。

「ケーキ作りで分量は重要だからしっかり計るんだ」

「うん………」

「次に卵だがこうやって………」

小さめの容器に片手で割る。

「別の容器に割って、殻や異物が入って無いかを調べてから入れる。こうしないと味が落ちるから」

「うん、分った……」

「あ、でも卵は両手でな」

「うん………あっ」

卵はグシャッと潰れた……

「………まずは割り方を教える」

「はい………」

次に湯煎だが、これは俺がやって。人肌程度になってから、フェイトに渡した。

「ハンドミキサーで混ぜて、白っぽくなったら高速にして混ぜる。

後、あんまり変に角度にすると飛び散る「きゃあっ！」って遅かった」

服や顔に生地がべったりくっついてるフェイトが………

「………一応、あつちにYシャツあるから、脱衣所で着替えてこい。後、その服は水の入ったバケツあるからそこに入れておけ、その間これは俺がやるから」

「ごめん………」

フェイトが着替え終わり、調理再開。後、赤くなりながらYシャツの事を聞いたから。『俺の寝間着』と言ったら更に赤くなった。

「俺が薄力粉を入れるから。さっき言ったようにボールを回しながら、泡を潰さないそうにさっくり混ぜるんだ」

「うん………」

「……………そうだ、その調子だ」
「うん……よし……………」
ここは大きな失敗は無かった。

最初に湯煎したバターと牛乳、そしてバニラエッセンスを入れて混ぜ。その生地を型に流し込み、オーブンで焼く。その間にクリーム作りだ。

「うう〜腕が〜さっきの使わないの〜」

今、フェイトが使っているのは泡だて器だ。

「ハンドミキサーを使うほど混ぜる必要は無いし。それに……………また飛び散るぞ?」

「うっ……………それはやだ」

フェイトは慎重にクリームを混ぜる。

「出来た……………」

後は特に失敗も無く、盛りつけは基本を教えてフェイトに好きにやらせた。

「上出来だ。初めてにしては中々だ」

「おいしそ〜」

アルフがよだれを垂らしている……………

「これは、冷蔵庫に入れて、後でお土産用とここで食べるように分けるからな」

「え?ここでつて……………」

「今日は泊まっていけ。夕飯を御馳走するから」

もう夕方だしな。

「そんな、いいよ!そこまでしなくても」その格好で帰るのか?」

はっ！！！！／／／／／

今頃思い出したのか……………

「夕飯は何にするか考えてくれ。俺は後片付けをするから……………それと、顔……………拭いとけよ。面白い事になってる」

「ふえ？」

分っていないのか、首を傾げるフェイト……………

「くっ……………あははははははははははっ！！ゴメン！もう我慢出来ない！あはははははははははははははははっ！！」

最初にアルフが腹を抱えて爆笑した。

「あ、アルフ！？どうしたの！？」

「か、鏡が後ろにあるから見た方がいいよ……………」

冷静さを保っているユーノだが、明らかに笑いを堪えてる。

「え？……………あっ！！！！／／／／／」

鏡を見てようやく気付いてフェイト。その顔にはクリームやら粉などが付いていた。

「か、顔洗ってくる！！！！／／／／／」

フェイトは急いで洗面所に向かった。

フェイトが消えた後、我慢をやめたのか、ユーノもアルフと一緒に爆笑していた。

夕飯のリクエストはフェイトは何でもいいとアルフは肉と言ったので、焼き肉にすることにした。

うん…凄かったよ……………アルフが。かなり食べるだろうと、10人前ほど仕込んだんだが無くなりそうだったので、急遽5人前追加した位だ。フェイトもユーノもすっかり食っていたのでよしとしよう

……………俺？ちゃんと自分の分は確保したぞ？

フェイトの O S H I O K I 中の時、アルフとユーノは……

……

「フェイト……精神リンクはやめて……」
頭を抱えて悶絶してるアルフ……

「使い魔とその主は、潜在的に精神が繋がっている……この
状況から察したくないけど、どんな事が行われてるんだ……」

……

ユーノは冷静に分析しながら震えていた。

味見と言って食べる奴は本気で食べるb yコダイ（後書き）

メガネ「果たして！レイのお願いとは！」

レイ「ひみつです！」

コダイ「いいから、さっさと始める……」

メガネ「ほいほい。マーボー様、ユタ様、感想ありがとうございます御座います！そして今回の黒ゴスロリをリクエストしてくれたのはユタ様です！ありがとうございます！」

コダイ「今回の黒ゴスは前に一回着たから+ で何か付けようと思つて眼帯にした」

メガネ「今も着てるね……」

コダイ「女装はオシヤレだ」

メガネ「もう、ツツコム気にもなれない……」

ブン

？「お、ここか。コダイか……似合ってるな」

コダイ「ありがとう」

メガネ「おわあっ！誰！？」

コダイ「『なのはの世界から始まる最高神とその家族による異世界旅行』の主人公の優・Z・哭堵セーゲフレイヒトだよ。しかも今回のこの黒ゴスのリクエストした」

優「よろしく。後コレ、お土産のケーキ」

メガネ「ブツシュ・ド・ノエル！しかも優さん特製の！？」

コダイ「クリスマスも近いしな……成程、こういう方法があったのか…是非参考にしよう……」

優「コダイ、レイ。二人に渡したい物がある」

コダイ「ん？何だ？」

レイ「ほえ？」

優「自然治癒力を上げる術式だ、起動させるには大量の魔力が必要だが……」

コダイ「大量か……自信は無いが一応やってみる……」

レイ「よおし！がんばるぞー！」

（十分後）

メガネ「モグモグ……流石優さん、すっごく美味しい」

優「それは良かった」

メガネ「あれ？コダイは……まさか失敗？」

優「いや……魔力は十分足りた……だが、起動が出来なかった……で、自分の事を責めて泣いてるレイをコダイが落ち着かせている所だ」

メガネ「ああ………すいません、あんなキャラにして……」

優「大丈夫だ。もしもの場合にこの傷魔力回復剤を渡すつもりだったから」

メガネ「おお！………あ、でもこれを知ると無茶しまくるからな……隠すか」

優「もうそろそろ行く、あと、コダイとレイに頑張らせて伝えて置いてくれ」

メガネ「あ、はい。伝えておきます」

シュン

メガネ「あはは……結局できなかつたか……。皆様の意見や感想を色々待つてます！リクエストはまだまだ続いています！」

レイ「うわああああああああああああああああああああ
ん!!」(号泣)

コダイ「頼む！落ち着いてくれ！」

「次回もお楽しみにしてください」

この状況を打破するには命懸けの覚悟が必要bYコタイ(前書き)

今回、みんなの魔王様が降臨します……

この状況を打破するには命懸けの覚悟が必要byコダイ

フェイトのお菓子作りから数日、傷は丁度治り掛けの頃だ。ジュエルシードの反応があったが、なのはとユーノによって謹慎をくらった。

「なのは達どうかな…………… フェイト達はケーキ渡せたかな」
「なのはとフェイトならだいじょうぶだよ！」
「だといいのだが……………」

「コダイ！休ませて悪いんだけど今すぐ来て！！」
暇つぶしに台所の見えない所を磨いていたら、ユーノからかなり切羽詰まった念話 came……………

「どうした？」

「なのは達が大変なんだよ！君しかいないんだ！」

「そうなんだ！フェイトを止めれるのはアンタしかいないよ！」
「アルフ？……………じゃあなのは達はなのはとフェイトの事が……………」
「フェイトを止める？」

「ああ……………少し遅れるが待つてくれるか？」

今、頑固な焦げ付きと格闘中なんだ。

「来てくれるのならそれでいい！」

「出来れば早く来てくれよ！？」

二人の状況からかなりヤバそうだな…………… 早めに終わらせるか。

取り敢えず台所は一区切り着いたので。急いでユーノ達の元に向かったんだが……………

スガガガガガガガガガガガガガガガガガ！

ドオオオオオオオオオオオオオオオオ！

目の前に広がるのは金色の無数の閃光に桜色の極大の光だった……

……………

「は？何これ？」

「コダイ！やつと来てくれたよ」

「早くフェイト達を何とかしておくれよ」

ユーノとアルフが泣きついてくる……………

「あゝユーノとアルフ、状況の説明を頼む……………」

「えっと、ゴメン。実はなのは達がジユエルシードを封印した後フェイトがコダイがいない事を聞いたんだよ」

〈ユーノ&アルフ回想〉

「え？コダイ怪我が治って無いから来れないんだ……………」

「あ、でも！治り掛けだからもうすぐ治ると思うの！ね、ユーノ君……………」

「うん！そうだよ。コダイの頑丈さは知っているでしょ？」

なのはとユーノの言葉にホツとするフェイト。

「まだ死んだ訳じゃないし、お詫びは今度にすればいいだろ？」

「お詫び？それってなんなの？」

アルフの言葉に首を傾げるなのは。

「えっとね……………この前にコダイに会ってね、お母さんにあげてお土産を考えてくれてね。だったら作った方がいってコダイの家でケーキの作り方を教えて貰ってね。後、御馳走までして貰って……………」

フェイトが理由を話していると、だんだんなのはに黒いオーラが……………

……
「わ、私だって、コダイ君のおうちに泊まった事もあるもん！ご飯御馳走して貰ったもん！」

何やら対抗して胸を張るなのは………

「なら、私はコダイに髪拭いて貰ったもん！」

「にゃ！私は、コダイ君をおうちに泊めたりしたもん！」

「私は………無いけど………温泉の時コダイと一緒に入ったもん／＼／＼／＼」

「にゃあつ！！フェイトちゃん！！それどついう事なの！？」

フェイトの爆弾発言になのはのツインテールが逆立つ。

「だって………その時、夜遅くて片方清掃中だったから………
／＼／＼／＼」

「ずるいの！フェイトちゃん！私だってコダイ君と温泉一緒に入りたかったのに／＼／＼／＼」

なのはが両手を上下にブンブンと振っていると、今度はフェイトから黒いオーラが……

「………いのは………ずるいのはなのはだよ！いつつもコダイと一緒にいて、朝は学校でその後は特訓でしょ！？なのはの方がずるいよー！」

「にゃ！フェイトちゃんはアノ特訓の怖さを知らないから言えるの！だからフェイトちゃんのほうがずるいの！」

「いや！絶対なのはがずるい！」

「フェイトちゃんがずるいの！」

「むう~~~~~！！」

「うう~~~~~！！」

二人が頬を膨らまして睨み合う。

「なのは、落ち着いて！」

「フェイトもその辺に」

「二人は黙ってて！」

「は、ハイ！」

二人の黒いオーラに気圧される、ユーノとアルフだった。

「じゃあ、負けた方がずるいつて事でいい？フェイトちゃん」

「うん、絶対負けなない、なのはの方がずるいもん……………」

「…ついでにジュエルシードを賭けて！」

二人は、同時に飛び立った。『ジュエルシードはついで！？』と言う、ユーノとアルフのツツコミは二人には聞こえなかった……………

〈回想終了〉

「…………俺に止める理由は無いのでは？」

「止める理由云々じゃなくて止められるのはコダイだけだよ！」

いや、俺に死ねといってるのか？後俺の体質分ってるよな？あんなの喰らってみろ…………塵すら残らないぞ？

「まあ、暴れるだけ暴れたら落ち着くだろう」

その後、ジュエルシードの周りで暴れた事をすっかり O S H I

O K I しないと…………

「それまで、観戦してるか…お茶も茶菓子も無いけど…………」

「無いのかい？…ってそりゃあそうだね、アタシ達が呼び出したんだし……………」

「そついう問題かな？……………」

話し合いの結果。何も出来ないので観戦となった。

「うわ！あの子、フェイトのスピードに付いてってるよ…！」

急激な成長ぶりを見せたなのはに驚くアルフ。

「接近戦の対処法は色々死なない程度に叩き込んだ。だがフェイトもなのはの一瞬の隙を突いて接近してる……………ほら、なのはの態勢を崩した」

フェイトの奇襲攻撃で態勢を崩すなのは。だが、フェイトが止まった隙を付いてすかさず砲撃を放つ。

「お互いに才能は互角。経験は、俺がなのはに模擬戦をしているから差は無いと思う……………」

「つまり、どっちが勝つか分らないって事？」

「そういう事。まあ、気楽に待とう……………殺し合いでは無いのだから。むしろあの二人の間に入るのは馬鹿だ……………」

「命がいくつあっても足りないよ……………」

「あははは……………アタシも賛成……………」

わたしも

ユーノとアルフとレイが苦笑していた……………その時……………

「ストップだ！時空管理局執務官のクロノ・ハラオウンだ！此処での戦闘は危険だ！詳しい事情を聞かせてもらう！」

なのはとフェイトの間に黒い魔導師の少年が……………

「……………ば……………馬鹿が来たああああああああああ

あああああああ！？」

管理局？何だ？……………警察みたいなものか？って詮索よりもまず！

「俺！あの魔導師を助けに行く！」

はやくしないとしんじやうよ！

俺は、直ぐバーニアを展開する。

「アタシはフェイトを助けるよ！管理局に捕まったら色々マズイし……………」

管理局が警察みたいなものなら、ジュエルシードみたいな危険物を持つてる時点で事情徴収ものだな。

「とにかく、お互いに生きる事を考えよう」

「了解！」

俺とユーノは魔導師……………クロノの所、アルフはフェイトの所に向かった。

「このまま戦闘行為を続けるの「そんなこと言ってる場合か！」誰だ！」

俺はクロノを抱えその場から急いで逃げた。

「トキガワコダイだ、とにかく逃げるぞ」

「なっ何をするんだっ……………なっ！」

次の瞬間、俺たちのいた場所に桜色の砲撃が。

「フェイト！此処から逃げるよ！」

「いや！まだ決着付いてないもん！なのはの方がずるいのに！」

「あゝもう！強制転移！」

視界の端にアルフがフェイトを羽交い締めをして転移をしていた。

「すまない、助かった。」

「いや、そんな事よりアレを何とかしないと……………」

「あれ？」

俺が顎で指す方には……………俺と同じ目（ハイライト無し）をしたなのはがいた……………

「何で……………邪魔するの？……………折角コダイ君を手に入れられるのに……………」

いつの間にかジュエルシードの事は頭から消えているようだ…それに俺は物じゃない

「ちょっと、O H A N A S H I しようか……………」

「ヒイツー！！！」

あ、ユーノが気絶した……………

「よし、話すのはいいが、まず杖を構えるな、そして何かをチャージするな」

「デイベイイイイイイ……」

聞いてないな、この女……

「なんつーバカ魔力だ！」

「そんな事、言ってる場合か！？逃げるぞ！」

「バスタアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

間一髪の所をかわす。何か前より力増してないか？

「おい！あの子は君の関係者なんだろ！？何とかしろ！」

「元はといえば貴様が介入しなければ無事で終わったんだぞ！」

「なっ！僕は執務官の仕事をしただけだ！」

「職務を全うするのはいいがもっと周りを見てみたらどうだ。もっと穩便に済ます方法がいくらでもあるだろう。空気読めって言われた事無いか？」

「ぐっ………！」

凶星か………

「真面目なのはいいが、もっと心にゆとりを「バスタアアアアアアアア……」って説教してる場合じゃなかった！」

急いで射線上から離れる。

「くっ………動きは素人みたいだがあの砲撃は脅威だな……」
俺とクロノは飛びながら話し合った。止まると砲撃の餌食になるから。

「まあ………魔法に関しては天才とユーノに太鼓判押されていたしな………」

「ユーノ？もしかしてスクライア族の？」

「知っているのか？」

「搜索願いが出ていたんだ。それよりあの子をどうやって止めるかだ」

「そうだな………前なら近づいて物理的に黙らせる事も出来たが……

………あの中に突入するのはまさに自殺だ………」

「その点に関しては同意する。しかしどうすれば………」

「私にいい考えがあります」

突然前に現れたモニターには緑の髪の女がいた。それを見たクロノは驚いていた。

「かあさ、艦長!?!」

「かあさって……母親?」

「この子の上司であり母親のリンディ・ハラオウンです。初めまして、コダイ君」

俺の名前を知ってるってことは、一部始終見ていたのか……それよりもこのリンディっていう女がクロノの母親……

「……全然似てないな」

「よく言われる……それで艦長、考えとは?」

「簡単よ、そこにいるコダイ君が……って言えばいいのよ」

「そ……それだけですか?」

あまりにも簡単すぎて顔が引きつるクロノ……

「ええ、一部始終見ていて、コダイ君にしか出来なくて、コダイ君だから出来る事よ」

俺しか出来ないのか……仕方ない。

「やってみる……」

俺はなのはの方を向いた。はのは俺が止まったので、再びチャージを始めた……

「なのは……これ以上暴れると……当分口利かないぞ!」

「ごめんなさい!?!」

チャージをやめ、空中で器用に土下座した。

「ホントに止まった……」

「でしょ?」

隣に現れたモニターのリンディは嬉しそうに笑っていた。

「で?この後はどうするんだ?一応なのはが暴れた事は詫びを入れさせるつもりだが……」

「んゝそうね。ちょっとお話を聞きたいからこっちに来てもらえます?クロノ、案内をしてあげて」

「分かりました」

「ん、分った……………ほら行くぞなのは」

「ふえ！？許してくれるの？」

ずっと土下座していたなのはがガバツと顔を上げた。

「すぐやめたからな、許してやる」

「うう~~~~コダイく~~~~ん!!」

なのはが泣きながら抱きついてきた。

「分ったから落ち着け」

「うえくん」

「クロノ……………なのはが泣きやむまでいいか？」

「あ、ああ……………」

なのはが泣きやむまで5分位掛ったと追記しておく……………

この状況を打破するには命懸けの覚悟が必要byコダイ（後書き）

メガネ「魔王降臨しました！」

コダイ「テンション低いな……」

メガネ「だって怖いじゃん……」

コダイ「……で、クロノの位置は考えているのか？」

メガネ「うん、簡単に言えばTOVのユーリとフレンみたいな感じかな？コダイとクロノは。名コンビって感じで」

コダイ「珍しいな……」

メガネ「まあね。……マーボー様、ユタ様、感想ありがとうございます！」

コダイ「なあ……気になっていたがその大きな袋は？」

メガネ「これ？ユタ様からの贈り物でミラルーツの素材らしいよ？」

コダイ「らしいって？知らないのか？」

メガネ「待って今ググる……モンハンの敵らしいよ」

コダイ「おい、どうするんだよコレ？」

メガネ「モンハンは友達のをみてるだけだったし……」

コダイ「まあ、送った本人はデバイスの強化に当ててくれと言ったからこっそり使っさ」

メガネ「ユタ様本当にスイマセン！」

コダイ「あ、ショートケーキとショコラケーキがあるけど、これも？」

メガネ「うん」

コダイ「前は食べ損ねたし…俺、勝手に食うから先に進めとして（アムアム）」

メガネ「って早！………つと。リクエストはまで続いています！みなさんドンドン送ってください！」

メガネ「そういえばレイは？」

コダイ「……………不貞寝」（モグモグ）

〈次回もお楽しみにしてください〉

まあ…なんだ。お茶にミルクは紅茶位にするb yコタイ(前書き)

緑茶に砂糖を入れる習慣は実際にアメリカなどにあります。

俺達は大人しく付いて行った……………

クロノに艦長室に案内された……………艦長室？なのか？……………

「わぁ……………」

なのはが声を漏らす……………まあ無理もない。

何せそこは豊部屋に日本らしいインテリアを所々散りばめた部屋だった……………

「まるで、日本文化を覚えたての外国人の部屋だな……………」

小声で呟いてみた……………あ、なのはが頷いてる。

「わざわざ来ていただきありがとうございます。リンディ・ハラオウンで……………あら？」

リンディがこつちを見て……………ん？

「……………」

「……………」

無言で見つめ合う事数秒……………

ガシッ！

俺達は無意識に握手をしていた。

何故って、それは同じ匂い（弄る側）がしたからだ。

「うふふふ、よろしく」

「あぁ……………勿論だ」

何か色んな事で気が合いそう……………

「うわ〜、艦長が二人いるみたい……………つと、はじめまして！通信主任兼執務官補佐のエイミィ・リミエッタです。よろしくね！」
リンディの後ろからお茶と羊羹を持ってきた女が現れた。

「高町なのはです！」
「ユーノ・スクライアです」
「トキガワコダイだ……」
俺も一応、自己紹介をした。
「早速ですけどお話を聞いてもいいかしら？」
「あ、ハイ……」
ユーノはこれまでの事に付いて話し始めた……

「……というわけです」
ユーノがこれまでの事を話し終えた。ちなみにレイの事は話してないようだ。
「立派だわ」
「だが、無謀でもある」
「だから、俺達が手伝ったんだ」
「うん、ほっておくと街や大切な人達を巻き込んだら、そうしないために集めていました」
俺が続いてなのはが答えた。
「そうでしたか……では、つぎはこちらから」
リンディは時空管理局やロストロギア……ジュエルシードについて話し始めた。

「なるほどね……………」

管理局は簡単に言えば軍隊・警察・裁判所の3つを統合した、強大な組織……………何か物理的に消したくなってきた。

何その独裁組織？馬鹿だろ、管理というより支配の方が合っているぞ……………まあ組織は大体そんなモノだしな、人の数だけ思想がある。組織が大きければ大きいほどその闇も巨大だ。

これは今の内に釘でも刺しとくか……なのは達を利用するかもしれないしな。

「次元震というのはなのはとフェイト…あの黒衣の魔導師がぶつかった時に起きた振動の事か？」

「そう、たつた一つであれほどの次元震を起こすの…複数を特定の方法で起動すれば、いくつもの並行世界が消滅する次元断層が起きるわ……………」

世界の消滅……………ずいぶん話が派手だな…あんな小さい宝石で世界が何個も崩壊なんて、世界はかなり安く出来てるな。

「世界の……………崩壊……………」

なのはが真に受けている……………しかないか、次元震はなのはが身をもつて経験したものだしな。

「そんな悲劇を起こしてはいけないわ」

そう言つて、リンディは緑茶に砂糖を入れる。

「こ、コダイ君！アレ！」

なのはが小声で聞いてきた、別に念話でもいいだろ……………

「リンディがどうした？」

「おおお茶にお砂糖を……………」

「別に気にする事は無いだろ？緑茶に砂糖は実際アメリカにある習慣だ」（事実です）

でも、流石に入れすぎじゃないか？今度抹茶を教えようかな……………だつたら着物を着て野点をするのもいいかもな……………

「……………ん？お砂糖いる？」

ずつとこつちを見ていたのでそう言つたリンディ。

「じゃあ一つ」

俺は砂糖を一匙入れた。

「……貰うの（か）！？」「……」

なのは、ユーノ、クロノ、エイミィが同時に突っ込んだ。

「……甘い、けど悪くない」

基本的に嫌いな食べ物はないからな……

「でしょ？皆に勧めているのに誰もしてくれないのよ」

リンデイがメソメソと言いながら泣きマネをする……

「それは砂糖が顆粒だからじゃないか？コーヒーによくある、底に溶け残った砂糖が溜まるからだろ。シロップの様な液状なら問題無い」

「そうだったのね！今度勧めてみるわ！」

「か、艦長！話が脱線しています！」

「そ、そうだったわ。話がこんなに合う人の久しぶりだからつい

……………」
クロノの言葉に正気に戻る。

「オホン……………これより、ロストログア、ジュエル

シードの回収については、時空管理局が全権を持ちます」

咳払いをして、さつきとはまるで違う真剣な顔で言う。

「えっ！？でも！」

「次元干渉が関わっているんだ。民間人を出る話じゃない」

「まあ、クロノの言う通りだな。あんな危険な物を子供が持ち歩いていい様な物では無いしな……………」

「その通りだ」

俺の言葉にクロノが頷く。

「でも、急に言われても気持ちの整理がつかないでしょう？一度戻って、三人でゆっくり考えて。後日、改めてお話ししよう？」

……………は？

……………こいつ今何ていった？

……ああ。そういう事が……やっぱり組織と
いうものは……

俺は思わず拍手をしていた

「……………何かしら？」

リンディが俺の気配の変化に気づいて僅かに警戒している。

「いや、実にいい演出だと称賛しているんだ」

「おい、何を言っているんだ？」

「クロノ……………さっきのリンディの会話、何か気付かなかったのか
？」

「何の事だ？……………」

「……………『これより、ロストログア、ジュエルシードの回収について
は、時空管理局が全権を持ちます』」

「！？」

俺はリンディの声で先ほどリンディが言った事を復唱した。

「で、その後クロノは何て言った？」

「確か、次元干渉が関わっているんだ。民間人を出る話じゃないだ
つたな」

「その通り。だがリンディはその後こう言ったんだ：『でも、急に
言われても気持ちの整理がつかないでしょう？一度戻って、三人で
ゆっくり考えて。後日、改めてお話ししましょう？』と。そんな危険
な物が関わっているのに民間人の気持ちなんて関係ないだろ？矛盾
しているんだよ、貴様の言葉は」

俺はリンディだけに殺気を送った。

「コダイ君、私は「俺は言い訳を聞きたいんじゃない」ッ！！」

俺はリンディの胸倉を掴んでこっちに引き寄せた。

「な、何をしてい「動くな、動いたらこの女を殺す」っ！！」

俺は、銃を取り出してチラつかせる。

「流石その若さで艦長になった者だ、人の上に立つ能力がある。そ
して貴様は立派な詐欺師だ」

「……………」

リンディの顔が若干青ざめている。

「どうしたんだよ？俺は褒めているんだぞ？もう少し喜んだらどうだ？」

「コダイ！管理局の人に何やっているんだ！」

「ユーノが俺を引きはがそうとする。」

「黙っている。今こいつの化けの皮剥ぐ所だ」

「化けの皮って……………」

「さて……………質問に答えて貰おうか……………クロノ、今回の件何で一人で来た？増援とか呼べるだろ」

「そ、それは緊急で他の局員は別の任務で「俺が聞いた話ではロストロギアは最優先じゃ無かったか？」くっ！！」

と……………すると考えられる事は一つ。管理局はかなりの人手不足か。

「世界が崩壊なんて言っつて、その次はゆっくり考えろだと？おかしなこと言っつものだな……………そんな事をするより手を組んで片付けようと考えられないのか？……………答えてみる、リンディ」

「っ……………」

銃でリンディの頬を撫でる……………

「どうした？……………まさか竦んで喋れないのか？だったら俺が代わりに言っつてやる……………危機感を煽る事を言っつて、俺達に協力させるように仕向けて、使い勝手がいい道具にするつもりだったんだろ？」

凶星を突かれて目を見開くリンディ。

「母さん！！何黙っているんですか！？このままじゃ我々管理局が誤解されてしまいます！」

「言い返せないんだよ、誤解だったら直ぐに否定できるはずだ……………全く、素直に協力して欲しいと言っつてくれれば快く手を貸してやっつたのに……………」

俺はリンディの胸倉から手を離す。

「さて、クロノの言っつた通り俺達は民間人だもうジュエルシードとは一切関係ない。ここにおいても仕方ない…帰るぞ、なのは、ユーノ」

「え？え！？」

「チヨ、チヨット！」

状況がまだ飲み込めていないのはとユーノ。ジュエルシールドはまだあるから一応回収はしておくか……

「ま、待つてください！」

「あ？」

部屋を出ようとするリンディに引きとめられた……… かつた！

「ごめんなさい。あなたの言う通り、私の立場上協力の要請は出来ない。だからこんな形で協力させようとしたのは事実です。本当にごめんなさい」

リンディが頭を下げる。

「ど、どうしてですか！？」

「理由を聞かせてください！」

「俺が代わりに答えてやる。人手不足による戦力の不安だろ？」
クロノとエイミーに俺が答えるとリンディが頷いた。

「ええ、そんな時に観測された強力な魔力値。それも管理局にほんの僅かにしかいないAAAランクの魔導師が3人……… コダイ君となのはさんとフェイトさんの事です。正直に言つて、喉から手が出るほど貴方達が欲しいです………」

「で？………」

「お願いします！事件解決の為に私達に協力して下さい！」

再びリンディは頭を下げる………

「リンディ……… さっき言ったよな？素直に協力して欲しいと言つてくれれば快く手を貸すって」

「それじゃあ！」

「勿論、手を貸してやるさ。なのはもユーノもそれで構わないよな？」

「うん！フェイトちゃんとの決着も付いてないもん！」

「僕も構わないよ。管理局が協力してくれるなんて、こんな心強い

事なんて無いよ」

二人も快く承諾してくれた。

「だが、俺はさっきの事を忘れたとは言って無いからな。多少の独断行為は目を瞑ってもらうぞ。組織とかはあんまり信用できないでね」

「わかったわ、協力お願いします。コダイ君、なのはさん」

「はい！こちらこそよろしくお願いします！」

なのはが頭を下げる。これで落ち着いたか………って忘れてた
「後、上の奴らがこっちの周りの人間に手を出して俺達を従わせようとかしたら………」

「し、したら？」

「………個人情報やある事ない事流して、管理局を内部崩壊させるからそのつもりで」

釘は刺さないと。1日でもあればここにいる局員の個人情報は全部取れるし。

「あ、はい………」

リンデイが引きつった笑いを浮かべていた。

「ま、まあ………協力してくれる以上、僕達は全力で君達を守ろう。さっきも言った様にジュエルシードは危険な物だから」

「問題無いの！」

クロノの言葉に両手でガッツポーズをしたなのは………自信を持つのはいいけど、張り切りすぎないか？

「コダイ君の方がジュエルシードより危険なの！だからだいじょ」「いい度胸だ、その度胸に免じてかなり強くO S H I O K I シテヤル」に、にゃああああああああああああああああああああああああああああああ………」

なのはの襟首を掴み引きずる。危険なのは貴様の砲撃だろう………

………

くオマケく

コダイがなのはにO SHI O KI中の事。

「ねえエイミー？コダイ君のO SHI O KIって…」

「気になりますねえく艦長く」

「見に行きましようか？」

「はい」

二人はコダイが出て行った扉の隙間を覗いた。

「母さん！エイミー！何やって」にやあああああああああああああああああああああ
あああああああああ！」「って何だ！？」

クロノの注意はなのはの悲鳴でかき消された。

「どうした？リンディ、エイミー……あ、もしかしてO SHI

O KIされに来たのか？」

「ちょ、ちょっとした出来心なの！だからゆる」O SHI O

KI「いやあああああああああああああああああ！！」

エイミーが引きずられて行く。

「コ、コダイ君！ゴメンナサイ！でももしも良からぬ事が起きた場
合に「問答無用」「きゃあああああああああああああああああああ
あああああ！！」

リンディが引きずられて行く……………

く数分後く

「ゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメン
ナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメン
ナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメン

ナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメン
ナサイ」」」

なのは、リンディ、エイミイが艦長室の隅っこで抱き合ってガタガ
タ震えていた。

「一体何が……」

「聞かない方がいいよ。懇切丁寧に教えてくれそうだから……体に」
クロノとユーノはこの事は絶対に触れてはいけないと強く誓った。

まあ…なんだ。お茶にミルクは紅茶位にしるbyコダイ（後書き）

メガネ「まさかりンディさんやエイミィにもOSHIOKI
が掛かるとは……」

コダイ「まあ、すっかり脅しといたし大丈夫だろ？」

メガネ「つたく……。ユタ様、マーボー様、によほほ様、感
想ありがとうございます！」

コダイ「人から貰った物の名前を間違えるとは……」

メガネ「によほほ様、誤字報告ありがとうございます」

コダイ「ん？その今着ているコートは何だ？」

メガネ「コレ？ユタ様からのお土産。ミラボレアス、バルカン、ル
ーツの素材で作ったジャケットとコート（夏用、冬用）黒、赤、白
の三色。効果は、自然治癒能力上昇、破損部位自動回復、BJ展開
じBJにこれの能力を与える、周囲の魔力を自分の魔力に変換する。
らしいよ？ほら子供用もあるから」

コダイ「ん？…これは、中々」（黒を着ている）

メガネ「お前もコート持っていたよな？」

コダイ「ああ、一着しかないがな。これはコートを直してる時の合
間に着よう」

メガネ「ユタ様ありがとうございます！」

コダイ「お返しにアースラの隅っこに隠れていた何かモフモフしたくなる生物を送る」

メガネ「何だよそれ？」

コダイ「さあ？」

レイ「いけんやかんそうなどイロイロまっています！あと、リクエ
ストはまだまだつついてます！」

〈次回もお楽しみにしてください〉

少数対多数の喧嘩は、とにかく背中合わせロンドンタイ（前書き）

今回は、コダイとクロノの初タツクの話です。

少数対多数の喧嘩は、とにかく背中合わせboyコダイ

アースラと協力してジュエルシールドを回収して数日後。あれから一個封印して、今は反応を掴むまで待機だ。

俺はある場所に行くためにある人物を探している。

「……………つと。いた……………クロノ」

「コダイかどうした？」

そう、クロノだ……………最初はやや強く当たる所があったけど今は普通の男友達のような感じだ。ユーノは今までフェレットと思っていたからな…むしろ家族に近いかな？

「実は、魔法関連について調べたいんだ」

「魔法関連？」

「ああ、魔法の歴史とか論理とかをな。そういうのが置いてる場所とかが知らないのと、民間人が見てはいけない物を聞きに」

「それなら一般に公開されている、今デバイスに資料室と閲覧禁止リストを送る」

その直後、情報がレイに送られた。

じょうほうもらったよ！えつと……………ここからちかみたい

「分った。ありがとうクロノ」

「いや、構わないさ。それよりも……………」

クロノは俺の右手…正確にはレイを見ている。

ほえ？

「ジュエルシールドがただのデバイスに生まれ変わるとは……………まさに奇跡だな…」

「それ、ユーノにも言われた」

レイの事を教えてるのは協力した直後だ。その時はクロノがキレて、リンデイが物凄い表情で固まったりなど色々落ち着くまでに時間が掛った。

それと精密検査した所、どこにも異常は無く、ロストログリア反応は

全くないと言われた。おそらくこれは、レイが『ロストロギアのジュエルシード』じゃなく『ジュエルシードから生まれ変わったデバイス』と言う事だ。

後、レアスキルだがこれはジュエルシードの干渉する特性が俺に備わったかもと仮設された。体質に関しては今だ不明だ。

「奇跡は本当に起こるモノなんだな……」

「俺も身をもって痛感したよ………っと悪いな、長く引き止めて」

「いや、どうせまだ時間があつたし問題無い」

「そうか。じゃあなクロノ」

「がんばって」

俺は、早速資料室に向かった。

「ふむ………」

成程……魔法は大きく分けて二つ。なのは達が使っている遠近取り揃えたオールラウンドのミッドチルダ式、そして次元世界を二分する勢力を誇っていて、現在衰退している一対一の個人戦に特化したベルカ式……これらを総称、魔法体系と言う。

俺は、近接戦闘が主体だからベルカ式か？……いや、ベルカは血統やらで極少数。そんな大層な物を持っている筈がない……ただでさえデバイスを手に入れたのも奇跡だというのに………

「俺は一体何の魔法体系が使えるんだ？」

魔法が使えない事を言ったらクロノが『その資質で魔法が使えないのはおかしい』とかなり驚いていた。今までどう切り抜けたと聞かれて『状況に合わせた応用力と判断力を駆使して、素手で戦った』と言ったら感心された。

「ミッド………ベルカ………ミッド………ベルカ………」

ランクも十分、資質もある、魔法はデバイス無しでも出来るので何が俺に足りない……一体何だ？……

「……………今日のご飯何にしよう……………」
「アースラーの食堂はかなりレベルが高い、特に艦長の趣味か日本食に力を入れてる。」

「昨日は刺身定食だったし……………天井にしようか……………って！
！！何考えてるんだ！！」

いつも自分で作ってるから、感覚が狂う……………食堂の何時でも同じものが食べれると違って、その時ある材料を確認して、一からメニューを決めないといけないしそういう時間がかなりす……………

……………？
「いや待て、今何が引つかかったぞ？」

さかなのホネ？

「昨日取れた……………じゃなくて」

材料を確認して……………一から……………

「そうか！その手があった！」

俺は、ある一つの結論に辿り着いた。

「……………使えない物を使うのでなく使えるの使えばいいんだ！そうと決まれば此処の資料を片っ端から読みあさつ」「コダイ君、ジュエルシードの反応があったわ……………リンディ……………」

リンディからの通信で出鼻を挫かれた……………ジュエルシード……………

……………空気読めよ……………

「至急ブリッジに……………ってあら？機嫌悪そうね？」

「ああ……………まさにクシャミが出そうで出なかった気分だ……………」

「要するに物凄く機嫌が悪いのね、分るわその気持ち……………」

ストレス解消に暴走体を半殺しにするか……………

ブリッジに付くとクロノが既にバリアジャケットを着ていた。

「クロノ、場所は分つたのか？」

「ああ、とある廃棄工場だ……………でなのはとユーノは？」

「特訓で気絶、ユーノはそのお守」

「あの特訓か……………」

「アレね……………」

「なのはちゃん、よく生きていたね……………」

クロノ、リンディ、エイミーが苦笑していた。

アースラでなのはとの特訓をしようとした時、今後のためとか見物した三人だが『軽く人が死ぬる』と漏らしていた。

だが問題無い、死ぬ一歩手前で押さえてるから。

「今回は俺とクロノの二人か」

「ああ、よろしく頼む」

「コダイ君が可愛いからって襲わないでね」

「エイミー！」

「わ、私……………クロノなら……………」

と、わざと科しなを作る。

「コダイは乗るな！」

「あらあら」

「か、艦長！止めてください！」

「いいじゃない。コダイ君みたいな綺麗な子がお嫁さんでも」

「男だからお嫁は無理だけどな」

ピシッ！

そう呟くとクロノとリンディ以外のブリッジにいる人間が全員固まった……………

「あら そうであって欲しいと思っていたけど本当にそうだったの

「人形が動く」とロマンを感じるが、此処までだと返って不気味だ」
「そうだな……………恐らく思念体となつて操っているんだろ」
「全部壊せば本体が出てくるって事か？あれを？全部？」
壊しても動きそうだぞ？

なのはをつれてこなくてよかつたかも……………トラウマになつてるよあゝ

俺達はトラウマになつてもいいと？

コダイ……………こわくてバリアジャケットかいじよしたらゴメンね？

「おい何、危ない事言っているんだ」

「被害が広がる前に此処で封印するぞ」

「そうだな……………行くぞ」

ふえ！？まだこころのじゅんびがあゝ！！

レイの悲鳴を無視して俺達はマネキンの大群に飛び込んだ。

ひいいいっ！！ナムアミダブツ！ナムアミダブツ！

「ロストロギアに念仏が聞くか。こんな物は、頭を飛ばせばいい」

俺は助走を付けて跳び、一番近くのマネキンの頭を蹴り飛ばした。

バキヤツ！！

気味の悪い音を立てて頭は遠くへ飛んで行った。

ひ、ひとごろし！

いやいや、そもそも人じゃないし……………

「廃棄されてるだけあって、強度は脆いな。これなら……………」
その瞬間……………

カタカタカタカタカタカタカタカタカタカタカタカタ

首の無いマネキンが腕を振り回して襲ってきた！

「ってあれで動けるのかよ」

「こ、こわいよおおおおおおおおおおおおお！」

「なら、これならどうだ！」

バキヤツ！！！！

今度は上半身を蹴り飛ばす……………これなら

カタカタカタカタカタカタカタカタカタカタカタカタ

って！下半身だけでこっちに来た！

「この！もう動くな！」

下半身を蹴り倒し、粉々になるまで踏み潰した。

と、とまった？

「あ、ああ……………」

どうやら、粉々にしないとダメみたいだな。

「クロノ、こいつらバラバラにしないと動くぞ！」

「何！？道理で手応えが無いと……………」

クロノはスティングァースナイプでマネキンの胸や頭を的確に貫いていた。

それでもマネキンは襲ってくる。

「一体一体粉々にしないとダメとは……………骨が折れる」

近くのマネキンを掴み、他のマネキンに叩きつけ、粉々に砕く。

「一気に消し飛ばすぞ、S2U！ブレイズキャノン！」

クロノの水色の砲撃が射線上にいるマネキンを溶解する。

コダイ！うしろ！

「このっ……………っ！」

蹴り飛ばそうとしたが、足が動かない……………

「って、何時の間に!？」

マネキンの群れで見えていなかった、瓦礫から飛び出たマネキンが足を掴んでいた……………マズイ! 防御が間に合わない!

「ステインガースナイプ!」

次の瞬間、水色の魔力弾が何度もマネキンを貫き粉々に砕いた。

「クロノ!」

「よそ見をするな!」

「ああ、だが……………」

俺は足を掴んでいたマネキンを掴み。

「そのセリフはソツクリ返すぞ」

クロノに向かって投げ飛ばす。

「ツ!？」

マネキンはクロノの頭上を掠めすぐ後ろにいたマネキン数体巻き込んで壊れた。

「……………って! わざわざギリギリを狙う事無いだろ!？」

「それはこつちのセリフだ! どうせなら足を掴んでるマネキンを壊せ!」

「僕は君の体質を考えて足の方はやめようと判断したからだ!」

「そんな暇あったらおまけに2、3個壊していけ!」

「何だよそのおまけって! 大体前回の封印もそつだ、戦闘中ほとんどレイと話していただろ! 少しは黙って真面目に戦ったらどうだ!」

「俺が真面目に考えるのは弄る事だけだ!」

「威張るな!」

胸倉を掴みあつて睨みあう……………

コダイ〜クロノ〜にらみあつてるばあいじゃないよ〜

は?……………ああ……………物凄い数のマネキンが俺達を囲んでるよ……………

……………

「これ本体叩いた方が楽じゃないか？」

「その本体が分れば苦労しない！」

だな……………

「もう数とかどうでもいい……………何で在ろうと全て殺す！」

俺は近くにいる倒れてるマネキンを武器にして振り回す。

「こうなれば出し惜しみは無しだ！ステインガーブレイド・エクスキュージョンシフト！！」

クロノは無数の魔力刃を展開した。

「これで……………！」

「終わりっ！」

最後のマネキンを同時に粉碎する。

「これでマネキンは全部片づけたか？」

「ハアハア……………みたいだな……………」

クロノは大技を使ったからか肩で息をしている。俺は魔法が使えないから消費するモノはあまりないからな。

こうはんはマネキンより、コダイとクロノがこわかったよぉ〜

「ハア……………後は……………本体を封印だな……………」

「その肝心の本体がさつきから見当たらな……………ん？」

「どうした？」

「いや、あそこ」

俺が指したところには……………

トコロ

小さい妖精サイズの生き物が……………

ふえ？

「おい……………あれって……………」

「本体だ……………」

俺とクロノの答えが一致した……………

「どうやら、マネキンを操るために力の大半を使ったみたいだな」

「というよりクロノ、あんな小さい物体に俺達は振り回されたのか？」

「……………そのようだ」

ものすくすくくっ！こわかったんだから！！

俺とクロノとレイの殺気が膨れ上がる。

ピュッ

殺気に反応したか思念体は逃げ出した。

「逃がすかつ！！」

むう！バーニア！！

バーニアを展開して、思念体を握り潰す様に掴み上げる。

「俺に潰されて封印されるか……………」

クロノが魔力刃を思念体の周りに展開する。

「僕に切り刻まれてからか！」

すきなほうをえらんで！

え？他には？……………じゃあ切り刻まれて、潰されてから封印

「しかし、一体なんで思念体がマネキンを動かしたんだ？」

その後、思念体を叩きつけてから封印して。アースラでクロノとご飯を食べている時、クロノがそんな事を言い出した。

「恐らく…廃棄されたマネキンが自分が動けると思っていて、そこにジュエルシードが漂流して……」

「そこにあつたマネキン全部の願望を叶えたのか？確か地球には『物には魂が宿る』と言い伝えられるが……」

「まあ、無いとは言い切れない。『動く人体模型』、『歩く二宮金次郎像』、『髪が伸びる市松人形』が都市伝説になつているの様に、人の形をしている物は魂が宿りやすいと言われている。でも、もしかしたら物を大事にさせるために親が子供にそう言い聞かせたのかもしれない」

「随分と詳しいな……」

「まあ…… オカルトは俺の専売特許だつたし……」

「だつたし？」

この話は嫌だ…… オカルトじゃなくて、昔の話とか、そんな感じの話は何故か後悔しているんじゃないか？と考えが過る……最近になつて話す事が多くなった、もしかして後悔している？……
……それでも過去は何も変わらない。
話を切り替えよう……

「いや、コツチの話だ。ジュエルシードはこつちが二つでフェイトの方が一つ回収したんだよな？」

「そうだな、これでコツチは七つ、アツチノ数は分らないが君達の話しからすると4つ以上はある」

「レイを除いて、後9つか…… しかし何でフェイトは誰の為に集めているんだ？」

「そうね、あの位の年頃の子は親に甘えていた頃なのに……」

「……リンディ……何時から？」

いつの間にかクロノ隣にリンディがいた……気づけよクロノ。

「ジュエルシードについて話してる時よ」

「はあ………でどう思つっ？」

「ん〜そうね〜こればかりはフェイトさんに聞いてみないと分らないわね」

「その事なら、なのはに任せておけばいいだろう。クロノもなのはの砲撃喰らいたく無かったら割り込むなよあの時みたいに」

「ぐっ……………分った。あの砲撃は喰らいたくない……………」

「俺も嫌だよ……………塵すら残らない……………」

俺以外でも非殺傷設定でも死ぬるぞアレは……………

「うふふふ さっきの戦闘もそうだけどこうして見るとクロノとコダイ君って何か似た者同士ね」

クロノと同じタイミングで頭を押さえるとリンデイがそんな事を言い出した。

「どこが？」

「どこって！ププッ……………」

突然リンデイが腹を抱えてテーブルを叩いていた。

「……………」

俺達は顔を見合わせて同時に首を傾げた。

数秒後、食堂内にリンデイの笑い声が響いた。

少数対多数の喧嘩は、とにかく背中合わせboyコダイ（後書き）

メガネ「今回はかなり楽しく書けた」

レイ「ふええええええええええん！」

コダイ「レイがかなりのトラウマになっているが……」

メガネ「主なんだから慰めてやれ。マーボー様、ユタ様、感想ありがとうございます！」

コダイ「優から前回と同じ効果を持つパーカーを貰ったぞ」（早速着ている）

メガネ「ユタ様ありがとうございます！……ってサイズの萌え袖っぽくなっているな」

コダイ「……この長めの丈ならスカートに似合いそうだな……」

メガネ「またこいつは………そう言えば前にゲストに行ったマーボ様のとこの瑠璃ちゃんからお礼の返事が来てたぞ？」

レイ「ルリちゃんかわいかったね〜」

コダイ「そうだな」

メガネ「元が良いしな」

コダイ「その通りだ」

レイ「いけんやかんそう、リクエストなどドンドンおくってくださいー！」

メガネ「レイ、ユタ様とマーボー様に何か応援のメッセージを送ってやれ」

コダイ「レイ…（良からぬ事を吹き込む）だ分ったな？」

レイ「ふえ？うん！ユタおにーちゃん！マーボーおにーちゃん！がんばって！」

コダイ「さて、アースラに戻るか」（スタスタ）

メガネ「お前ってやつはあああああああああああああああああああああ
ああ！」（コダイを追いかける）

（次回もお楽しみにしてください）

雷をかわすとか現実的に無理だろ……やった事あるけどb y n o d a i (前書き)

こっからかなり急展開

雷をかわすとか現実的に無理だろ……やった事あるけどboyコダイ

「よし、これで台所は終わったな」

新品同様のキッチンを見て言う。

え？アースラーに居たんじゃなかったのか？実は、掃除していた事忘れてリンディに頼んで一時帰してもらったんだ。

「次はクローゼットを……」

〜2時間後〜

「……………これで全部掃除し終わったかな？」

にしても張り切りすぎた……………初めて来た時よりも綺麗になっている……………

「さて……………始めるか」

俺が取りだしたのは、リンディから許可を貰って、コピーした資料の数々……………

「まずはミッドとベルカを解析しないと……………」

〜三時間後〜

「…つたく……………何だよこの難解な暗号みたいなのは……………フェルマーの最終定理や7題難問の方がまだマシだぞ……………」

いや……………フェルマーに至っては『存在しない』を証明すればいい……………7題難問だって本当にそれが正解だなんて分らないんだ。……………ただ……………

……………

「アルステア理論にすればコルトルウの法則が否定されるし、かといつてその法則に合う理論だと始めからやり直しだし……………」

じゃあ、ゴリアル……………ダメだ！スレリアの実験で補完される……………！

「ミッドとベルカの共通点は分った……後はそれを無視して新しく証明出来る理論を……」

（1時間後）

「だ、ダメだ」

辺りには大量の紙くず……せっかく掃除したばっかなのに……

「もう一回掃除しよう」

幸い、紙くずだけだし……

「さて箒とチリトリは……ん？」

外を見ると、遠くに雷が見えた。

「おいおい、こっちに来ないだろうな……」

何か竜巻見たいのが……は？

視線を外そうとした、外を再び見る。

「何だあれ？……変だぞ」

変に固まってるし……っ！しまった、ジュエルシード！！

掛けてあったロングコートを手に取り、家を出た。

「そうだ、ユーノは海鳴に漂流したとは言っていない。海鳴の周辺の市を調べたが反応がなかった……だとしたら残る可能性は……海だ！」

アレはもう発動しているな……となるとあそこにいるのはフェイトとアルフか……

「フェイト達がいるかもしれない。レイ……アクセス！」

ナウローディング……コンプリート

「一気に行くぞ！飛べ！」

バーニア！

レイを起動してあの竜巻に向かって飛び立つ。

「レイ、なのはからの連絡は？」

ん〜と、まだないよ？

と言つ事は気づいてないな……

れんらくする？

「それでは間に合わない、俺達でやるぞ」

ふえっ！？そんなことないよ！ユーノがてんいしてくれるはずだよ！

「無理だ、なのは達が行こうとしてもリンディヤクロノが止める」
なんで？

「レイ……………もし、俺達が封印できるとして。発動したジュエルシードを無傷で始めから封印出来るか？」

ふえ？……………できないよそんなの〜せめてよわらせてから……………

…あっ！

ようやく気付いたか……………

「人や戦力が少ないんだ、被害を無くして利益を取るにはこういう犠牲が必要なんだよ」

でも！フェイトはなのはとおなじランクのAAAだよ？

「ジュエルシードは俺達は8つ、フェイトは最低5つ……………フェイトがもし俺に出会う前に集めていなかったら……………最高で7つのジュエルシードを発動し、封印しようとしてる」

ええっ！！そんないっぺんにはつどうしたら、まりよくなんてなくなるよぉ〜

「魔力だけの問題じゃない。封印が出来なければ、あの雷と竜巻の餌食だ」

い、いそげ〜！！

頼む、間に合ってくれ……………

コダイ！フェイトがいたよ。かなりヤバそう！

竜巻と雷に囲まれてるフェイトはかなり疲労している、アルフも雷で近づけない様だ……

「レイ、ジュエルシードの反応は？」

「……6こ！」

つまりフェイトは6つ持っているってことか……

「一気に魔力を送って鎮静化させるぞ！」

うん！バーニア！

魔力を噴出して、フェイトの後ろにある竜巻に一直線に突入する。

「がっ……………ああっ……！」

ジュエルシードで造られた竜巻は俺の体質にとっては巨大な回転鋸だな……………

「ジュエルシード……………そこか！」

暴風に切り刻まれるなか、下方にあったジュエルシードを掴み魔力を一気に送り鎮静させる。

「まず一つ……………次っ……！」

休む間もなく、今度はフェイトの前にある竜巻に突入する。

「っ……………次は……………そこ……！」

装甲が一部が剥がれるのを無視して、ジュエルシードを鎮静させる。

「次は……………そこだ！」

アルフの進行を妨害している雷に突撃する……………

「がっ

あああ

あっ……！」

雷を発生させているジュエルシードを掴む。雷を発生させているから触れると勿論感電する……

通常、雷の一回の放電量は約数十万アンペア、電圧は約10億ボルト、これを電力換算すると平均に約100ワットの電球の90億個に相当する……………

「大人しく……………しろっ……！」

飛びそうな意識を無理やり押さえこんで、ジュエルシードを鎮静させる。

「これで……………三つ」

後三つか……………かなり飛ぶのにも魔力を使っているから……………持つか？

「ちよつと……………アンタその怪我……………」

「これか？大したことはない、それよりほら」

俺はジュエルシードを全部アルフに渡す。

「えっ！？でもアンタ管理局の……………」

「俺、魔法使えないんだ……………だから持っけていても再発するだけだから封印よろしく」

俺は急いでフェイトの方へ向かう。

「レイ……………大丈夫か？」

わたしはへいきだよ。でもコダイが……………

両腕の装甲は全壊寸前、だけどまだ動く！

「このまま全部封印するっ……………！！」

今までフェイトに集中していた竜巻や雷が一気に俺に向かって来た……………好都合だ。

このまま、鎮静させる！

「うっ……………！！！」

竜巻にぶつかった瞬間、両腕の装甲が全壊した。

「くっ……………そこ……………か……………」

ジュエルシードは見つけたが、遠すぎて届かない……………

……………
「レイ！バーニアっ！！」

バーニアを展開する直前、落ちた雷によって胴体の装甲の一部が破損した。

コダイ！さっきのかみなりでバーニアのいちぶがこわれちゃったよ！

「なら残りのバーニアで近づくぞ！」

バーニアを展開するが、暴風と落雷によって完全に身動きが取れなくなっ……………

「とど……………けえっ……………」

どんなにもがいても、前には進まない……………その時。

「バスタアアアアアアアア！！！！！」

「レイジイイイイイイ！！！！！」

その声と共に桜色と金色の光がジュエルシールドにぶつかり、竜巻と雷を晴らした。

空には、三つのジュエルシールドが浮かんでいた……………

「コダイ君！」

なのは？じゃあさっきの光はなのはと……………

「コダイ！」

フェイトか……………

「だいじょ……………」

ヤバイ、かなり喰らったから意識が……………

「コダイ！」

「あのバカ！無茶するからだよ！」

「なのは！ユーノ！先にコダイの保護を！」

落ちていく意識の中、最後に見たのは。

紫色の光だった……………

雷をかわすとか現実的に無理だろ…やった事あるけどboyコダイ(後書き)

メガネ「さて、今回はコダイはいないので原作キャラをゲストに呼びました。どうぞ！」

ユーノ「どうも、ユーノ・スクライアです」

メガネ「今回はコダイのペットのユーノ「ちょっと待ってよ!?!?それじゃあ何か全然意味が違つように聞こえるから!?!」おお、流石コダイとレイのツッコミ役」

ユーノ「感心しないでよ…あの二人、みんなの知らない所で収集付かないほどのポケ合戦をしているんだよ…」

メガネ「あはは………っと感想っと。Rain様、ユタ様、感想ありがとうございます!」

ユーノ「コダイのあのシリアスブレイカーっぷりは一種のKYだね…」

メガネ「天然だしな、アイツ」

ユーノ「KYの事を話したらコダイが『俺は空気を読めないんでなく、読まないだけだ!』って…頼むから読んでよ……」

メガネ「あははは………えっと…意見や感想、コダイの服のリクエストなどドンドン送ってください!」

ユーノ「まだ続いてるんだ……」

メガネ「まあね、次回もお楽しみ！」

ユーノ「で、なんで僕がゲスト？普通はなのはとかじゃない？」

メガネ「いや、なのは達だとコダイがどうなったか
O H A N A
S H I されそうだから…」

ユーノ「ああ…」

「次回もお楽しみにしてください」

おい女…理由や事情はどうでもいい、取り敢えず一発殴らせるb yコダイ(前書

コダイのコートは某炎髪灼眼の討ち手のコートのごとく何でも収納
出来ます。

おい女…理由や事情はどうでもいい、取り敢えず一発殴らせるb y n o d a i

「ここは……知らない天井だ……」

ネタ？エヴァ？何の事だ？いや、本当にここどこ？

「お、目が覚めたのかい？」

扉が開く音を向くとそこにはアルフがいた。

「アルフ？」

「他に誰がいるって？」

「いや…そんな事より此処はどこなんだ？」

「此処は時の庭園って言つて、フェイトの実家みたいなものさ。ア
ンタあの鬼婆の魔法を喰らった後気を失つて此処に運んだんだよ」

あの紫の光は魔法だったのか、それより鬼婆とは誰？

「ちよつと待つてな、今治療するから」

「治療？……ああ」

自分の姿を見て気付く………全身に包帯が巻かれている、多分顔に
も巻かれている。それにその包帯が血でかなり滲んでいる………うん、
重傷だ。

「ん…重度の火傷と裂傷、右目は…火傷で一時的に失明、両腕の
大部分が骨折、その他数十ヶ所亀裂骨折…筋肉及び内臓は雷の影響
で機能低下か……」

体を動かして、自分の症状を確認する。

「……何でそんな重傷で平気でいられるのかね」

「俺は頑丈だし怪我慣れてるし」

「いや…慣れるという問題じゃ」

「そういうものか？」

慣れてしまつたら仕方ないだろ？

「はあ………今、包帯を変えるから」

何故溜息を吐く？

「ハイ、ヤバいのは気絶してる時に魔法で治しといたから」

「包帯を変えてもらっている時に自分の怪我を見たが……予想以上にグロかった。火傷に裂傷じゃ仕方ないか。」

「フェイトの用事が終わったら帰してやるからしばらくそこにいな」

「ああ……分つ……？」

偶然、視界の端に変な物を見つけた。

「アルフ……ここ最近この部屋を模様替えしたのか？」

「はあ？ここはフェイトの部屋だけどそんな事は無かったね、それがどうしたんだ？」

「いや……何でもない」

「ふくん……まあ大人しくしてるんだよ」

そう言っつて、アルフは出て行った……

「……よし」

ベットから降りて、隣に掛けてあったコートを着る。

そして、さっき見つけた変な物……一部違う色の床。

「アルフが言うにはここに物が置いてあった事は無い……となると……」

ガコンツッ！

床を叩くと違う色の床のが持ち上がった。

「何かを隠しているか……」

開けてみるとそこにあったのは……

「本？……いやこれは日記の様だな……」

フェイトの？

「こんな面倒くさい隠し方するか。ん？奥に何か……映像端末？」
「アースラーでみた結構古いタイプだ……何か記録しているのか？」

「これは後でもいいか、まずは日記だ」
端末をコートにしまい日記を開く。

「えっと……リニス？誰だ？……えっと……」

そこにはフェイトやアルフ、そしてフェイトの母親のプレシア・テスタロッサの事が書かれていた……

「フェイトの教育係としてプレシアと契約した山猫の使い魔……」

バルディッシュを作ったのもリニスか……」

今日はどんな魔法の勉強をしたのか、プレシアが研究室に籠りつきりだとか……

「特に変わった事は書かれてないな……っ！！」

ある文字が目に入り、思わず日記を落としてしまった。

「フェイトが？……おい！見間違えじゃ……！！！」

何度も読んで変わらなかった……

「フェイトが……クローン……」

フェイトは……『F計画』によって生み出されたプレシアの死んだ娘

……アリシア・テスタロッサのクローン。

アリシアは管理局でプレシアの実験……正確には上司の安全基準を無視した無謀な命令により、その時の事故で亡くなった……

……

「って事は、ジュエルシードを集めさせたのはプレシアでジュエルシードでアリシアを蘇生させるの気か！？」

いくら願望を叶える特性があると言っても正しく叶えられる可能性は少ないぞ！

「それより、クローンとは言え娘を顎で使うとはどういう神経をしているんだ……」

他にもっと分らないかと、ページを捲っているとまた日記を落としそうになった。

「はあっ！？一体どうなっているんだ！」

日記はここで終わっていた。後は一緒にあった端末を……

今では心地よく感じる……………

コツ コツ コツ……………

一定間隔で響く足音が催眠術の様に俺を前の世界の頃に戻していく

……………

奥の間に着くと奥にアルフ、その手前には後ろ姿でよく分らないが黒髪の女がいた・・・アレがプレシアか……………

無言で女に近づき、肩を掴む……………

「だ、誰っ！ガハッ！！」

そしてこっちを向いたと同時に、顔面を思いつきり殴った。

……………

吹き飛び、無様に倒れているプレシアがこっちを睨んでる。

「貴方…………… 一体誰よ……………」

……………

答えるつもりはない、無言でプレシアに近づく。

「くっ…………… 答えなさい！」

プレシアが放つ雷を素手で受け止める。

「なっ！私の魔法を素手で受け止めて平気だなんて……………！」

勿論平気なはずはない。ただ顔や態度に出さないように我慢しているだけだ。

……………

「答えなさいって言っているのよ！！」

プレシアは杖を鞭に変えて振り、俺の首に巻きつけた。

……………

俺は何事もないように鞭を掴み思いつきり引きよせ。こっちに来るのに合わせてカウンターを腹に打ち込む。

「グハッ！！」

プレシアの体がくの字に折れる、間髪いれずに顎をかち上げる。

「……………」

「さっきまで怯えていたプレシアが………嗤った？………何処を見てる？」

「………アルフ？………！」

「プレシアがアルフに雷を放つと同時にアルフに向かった。」

「くっ………え？………「コダイ！」」

「………間に合った」

「ヤバい、調子に乗って喰らいすぎた。」

「フフフフ、散々手間をかせさせて………」

「クリーンヒット一発でつけあがるな露出狂。何だよその襲って下
さいって言ってる様な服は歳を考えろよ」

「………口の減らない子供ね」

「少ししか喋って無いぞ？」

「……………」

「あ……………上げ足を取ったからイラついてる。」

「コ、コダイ……………」

「ん？アルフ、怪我は？」

「アタシの事はどうでもいい！「ん？フェイトの事か？それなら安
全な隅っこに寝かせたぞ？」そうじゃなくてアンタの事だよ！！」

「そんなにはしゃげるなら問題ないか。俺がプレシアを引き付ける
からフェイトと一緒に逃げろ」

「それじゃあアンタが！」

「俺の心配するより、自分のご主人様の心配をしろ」
「体は頑丈な方なんだよ。」

「所詮あの子の使い魔、余分な感情が多過ぎる。あの子、使い魔作
るの下手ね」

「人の事が言えるか？貴様の使い魔も余計な事をしてくれてたみた
いだな」

「俺はプレシアにリニスの日記を見せた。」

「これにはフェイトを教育していた事は勿論、貴様の秘密も………」

「俺なら偽物や本物と言う前に自分が本物で偽物ではない事を証明させようとするが？それなら、偽物と本物がある事を認めてしまっている……………いや、それが出来なかった……………だろ？」

「くっ！……………貴様あー！」

「おいおい、どういう事何だい？アタシにも分りやすく説明してくれよ」

置いてきぼりを喰らったアルフが困惑している。

「つまり、自分が本物かどうかを証明させようとする自分が偽物であると分ってしまう。だから問題を『本物かどうか』でなく『本物はどこか？』と逸らそうとした」

「何で、そんな事が分るんだい？」

「日記を見せた時のあの驚き様……………この日記が何かを知っている。

つまり、自分が偽物だって事を。さらに言えば日記と一緒にあったこの映像端末の中身も…おそらく自分が偽物と言う決定的な証拠もな」

確信は無かったが鎌を掛けたら見事にはまってくれた。

「……………反論はあるか？あっても全部論破してやるが？」

「……………」

プレシアが無言で杖を振るうと部屋を埋め尽くす程の大量のスフィアが出現した。

「って何だいこりゃ！？」

「追い詰められて、強硬手段に出たが」

つまり、口封じ……………」

「フフフ……………これで死になさい！フォトンランサー・ファランツ！！……………あああああああああああああああああああ……………あああああああああああああああ……………！！！！！！」

魔法を発動しようとした寸前、突然プレシアが頭を抱え叫び出した。その悲鳴に呼応する様にスフィアは暴れ狂った。

「一体何が……………」

「コダイ！今は逃げよう！」

アルフが俺の腕を掴んだ、あの隙に転移の準備をしていた。

「この状態ではフェイトの所には向かえないな……………」

あの子の事は私に任せて……………

「え？……………」

突然、念話が届いた…誰だ？

「おのれええええええつ！！！！おのれプレシアアアアアアアア
アアアアアアアアアアアアアッ！！！！」

「コダイ！何やってんだ！早く」

今、考えてる暇は無いな…俺はアルフと共に転移した。

シユン

「うわっ！…！」

「くっ……………」

転移の際、座標がズレたのか地面よりやや高い位置に転移された。

「アルフ……………ここは？」

「適当にやったけど、多分アンタの街だと思うよ」

だとすると…家からはそんなに遠くは無いな……………

「アルフ、俺が来る前にだいぶ痛めつけられたらろう？俺が家まで
運んでやるから寝てる」

「それはこっちのセリフだよ……………アンタなんてスタボロじゃない
か……………」

「治った」

嘘だ、本当は立っているのがやっとだ。だけどここで倒れる訳には
いかない。

「あははは……………そうかい、だったらお言葉に……………甘えて……………」

アルフが眠りに着くとアルフの姿が狼に変わっていく……………」

……………
コダイ……………さっきのウソだよな……………」

「何の事だ？」

キズがなおったことだよ！！わたしはコダイとつながってるから
わかるもん！ジュエールドのときとさっきのときでコダイのからだ
はもう、しにかけてるって！！

「それなら、安心しろ。俺は何があるうと絶対に死なない」

アルフを背負い、家に向かう……………だが

「ぐっ……………！！」

その重さで傷口から血が滲み出た。

「これは、失血覚悟でいかないと」

壁を伝って家に向かう……………」

「いや……………これは……………本当にまずいかも」

後ろを……………見なくてもいい。絶対大量の血の跡がある。

唯一見える左目も霞んできたし、足もほぼ引きずってる……………」

「転んだら、起き上がれないなコレ……………って」

確か、桃子から聞いたけど……………コレってフラグと言う奴では……………」

……………」

「ぐっ……………ガハッ」

道の僅かな出っ張りに足を引っ掛け転んでしまった。

「ヤバ……………一回死ぬか「チョット、アンタ……………」……………」

……………」

誰だ……………見憶えのある金髪……………アリサ？

「その犬どうしたのよ！それにアンタのそのケ……………ってコダイ

！？チョット……………」

久しぶりの友達の声を聞いてホッとしたのか、その声を聞きながら
俺は意識を失った……………」

おい女…理由や事情はどうでもいい、取り敢えず一発殴らせるb yコダイ（後書

メガネ「さて、コダイはどうなるのやら……」

シ
ン……………

メガネ「誰もいないとテンションあがんね〜な……………えっと、
ユタ様感想ありがとうございます！」

桃子「あら？ここは……………」（シユン！）

リンディ「どこかしら？」（シユン！）

メガネ「うええ！？何でここに！？」

桃子「だってここは」

リンディ「何でもアリの世界よ」

メガネ「（そういえば原作じゃこの頃に会ってるんだよな……………」

桃子「そういえばコダイ君は？」

メガネ「本編で絶賛死に掛け中」

桃子「残念、折角また写真とりたかったのに〜」

リンディ「写真？」

メガネ「ああ、コレ」（コダイが黒ゴスで『おねーちゃん』と言っている写真）

桃子「よりもよって……………」（鼻血ポタポタ）

リンディ「そ、それは……………」（鼻血ポタポタ）

ドシャ！×2

メガネ「あらら……………意見や感想など色々待っています！リクエス
トは無印編まで一旦しめ切ります」

（次回もお楽しみにしてください）

死でも慣れるとそんなに怖くない。ん？慣れるワケ無い？それもそうだがロンドン

プレシアとアリシアは助けます。

死でも慣れるとそんなに怖くない。ん？慣れるワケ無い？それもそうだとロンドン

「えっぐ……………ヒック……………うええええ〜ん……………」

あ……………どうしてこう……………いや、俺の所為か。

「ヒューヒュー……………」

おい、その犬……………

「アリサ……………一先ずはなれ……………」

ギョウウウウウウウウ！！

心配してくれるのは有難いが死ぬから……………一回死ぬから。

……………一回死ぬかもしれないから……………回想どうぞ。

〈回想〉

「ここは……………しらな……………いや、アリサの部屋か」

目を覚ますと俺はアリサの部屋で寝ていた。

「コダイ！！生きていたのかい！！」

「アルフ？というより殺すな」

ベットの傍には包帯を巻かれた狼状態のアルフが寝ていた。

えっと……………あの後は、アリサに見つかって運ばれたんだよな。それで治療されて現在に至るといふ訳か……………

「ところで怪我はどうだ？」

「いや〜あの時のアンタの友達のお陰でもうスッキリ。もう少しで全快するよ……………」

さすが犬好き。

「さて、これからどうするか」

まず、アースラに言ってこの映像端末を再生して……………

ガシャン！！

ん？……何だ今の音。

「……………アリサ？」

音の正体はアリサが何かを落とした音だった。

「アリサ、一体あの後どうな「バカアツ！！」なっ！」

ベットから身を起こそうとしたが、その前にアリサに押し倒された。

「ちよつと待てー先ずおちつ」この、バカ！死んだかと思ったじゃない！！」人の話を聞け！」

馬乗り状態で肩を揺すられる……

「どんな事をしたらそんな怪我するのよ！医者が普通なら死んでもおかしく無いって言ってたのよ！」

「揺するのやめろ！本当に死ぬから、頼むから落ち着け！」

「……………う」

「う？」

「……………うええええ〜んっ！！」

揺するのはやめたかと思うと今度は首に腕を回して抱きついて泣きだした……っていい加減怪我人から降りろよ……

〜回想終了〜

「ううっ……………グスッ……………ゴメン」

「いや、気にするな」

回想中に一回死にました。その所為で更にヒートアップしたアリサに無理やり起こされた。ちなみにまだ抱きつかれたままだ。

「ワン！モテモテだね〜色男^{ロメオ}」

「何が言いたいんだアルフ」

「いや〜何でも、こりゃあフェイトも大変だね」

何が大変なんだ？

「この犬に感謝しなさいよ。アンタが起きるまでずっと離れなかつ

「たんだから」

「そうか、ありがとう」

「ワン！ アンタも恩人だからね！これ位しないと！」

「これは今度、御馳走してやらないと……」

「それはそうとアリサ、そろそろ降りろ」

「は？何を言ってるの「お嬢様、そろそろ学校に……おや？」ふえ？」

何時の間にか鮫島が……ああ、アリサの顔がどんどん真っ赤に……

……面白いな。

「あ………にやああああああああああ……！」

／／／／／／／／／／

「これはこれは、今日はお休みした方が「行くわよ！！早く準備して！！」「畏まりました」

「アリサ、その「か、勘違いしないでよ！べ、別にアンタの為に寝ないで看病したわけじゃ無いんだからねっ！！／／／／」いや、いいから降りろ」

更に顔を真っ赤にする。後、自爆してるからな。

「とにかく！アンタのコートと替えの服は机に置いてあるから！／／／」

顔が赤いまま部屋を飛び出す。

「あれで赤くなるとはまだまだ子供だね……」

「アンタも子供だろーが！」

「そういえばそうだった。」

「さてと………もういないな。早速あの「チヨイ待った」「アルフ？」

机のコート取ろうとして起き上がると、アルフに止められた。

「アンタは絶対安静にさせる事と医者が言っていたから、アタシが取ってやるよ」

「そう言うところアルフは俺のコートを啜えて持って来た。」

「あいよ」

「ありがとう、アルフ」

頭を撫でる、犬だからね。

「はあ／＼／＼／＼」

撫でると、アルフが蕩けた。

「どうした？」

「なんか／＼アンタに撫でられると何か蕩けちまう／＼／＼」

そういえば、すずかの家の猫が俺の事をナデリストとか言っていたよな……………

今度は首元を撫でる……………

「ふあ／＼／＼／＼」

…………… つと今は日記と端末を調べないと。

「あつ……………」

手を離すとアルフが寂しそうだったが。まあ、フエイトが心配なのは俺も同じだ。

「日記は…………… うん、特にもう無いな。後はこの端末だけだな……………」

端末を再生させると、モニターが現れ、そこにはさっき見た時よりも若干若いプレシア…………… つまり本物のプレシア。そしてその隣にいるのは恐らくリニス。そして後ろにいるのは生体ポットに眠るフエイト……………

『生まれてくる貴女へ……………』

プレシアが話し始めた……………

『まず貴女には話しておくわ。貴女は私の死んだ本当の娘のアリシアから生まれたクローン…………… このプロジェクトFによって生まれた存在。クローニングした素体に記憶を定着させる事により、従来の技術では考えられない程の知識や行動力を最初から与える事が出来る。その最大の目的は、元となった人物の肉体と記憶の複製。』

つまり本物と寸分違う存在を産み出す事よ…………… でもそれは死んだ人間を蘇らせるに等しいわ。元となった人物の完全再現だけ

は不可能に近いのよ……………けど、それがどうであれ、娘のクローン…私の娘に代りは無いわ……………うっ……………ゴホッ!」

突然、プレシアは吐血して、崩れそうなところをリニスに支えられた。

「ハア……………見ての通り私はもうあまり長くない……………」

「……………だから……………」

モニターの視点がずれる。

「ハアッ!？」

モニターの先に映るモノにアルフが思わず驚いている。俺は納得した……………という感じた。

そこには、後ろのフェイトと同じように眠ってるプレシアと瓜二つの人間が……………」

「もしもの時のバックアップとして私の遺伝子をクローニングして作った私のクローン。もし、私が死んだ時これを貴女に渡すように頼んでいるわ……………って、そうね。娘なのに何時までも貴女って呼ぶのは不自然ね……………そうだわ、この計画の当初の名前はプロジェクトF・A・T・Eと呼ばれていたわね、だったら貴女の名前はフェイト……………フェイト・テストロツサよ……………フェイト良く聞いて。貴女の生まれ方がどうであれ貴女は私の娘……………」

だから私はフェイトを……………貴女を愛するわ……………」

映像はここで終わった。フェイトの名前を決めた頃からプレシアの表情が段々と母親の様な優しい顔になっていた……………」

「……………成程、やっぱりあのプレシアはプロジェクトFで生み出されたプレシアのバックアップか」

「つまり、アタシ達はあのニセ鬼婆にいい様に利用されていたって言うのかい!?!フェイトにもあんな事して!!」

「落ち着け、詳しい事はアースラで調べて貰う。フェイト達の罪を軽くする」

母親を人質に取られて無理やりやらされていたとなれば。無罪は無いと思うが被害者として扱われるはずだ。

P i P i P i P i P i P i P i

「ん？携帯……………なのはか。どうし『コダイ君！……………！！！！！！！！』」

「ッ！！」

「耳があゝ」

遠くにいるアルフにも被害が及ぶ程の大声……………

「コダイ君！コダイ君！」

「うえええええん……………」

「頼む……………死ぬから離れてくれ……………」

只今、さっきのアリサ同様になのはとすずかに抱き締められている

……………いや、こつち怪我人……………

「今まで何処行つてたの！？」

「見つかったと思つたらこんな怪我して！！」

「キュー！泣き喚くなのはを落ち着かせようとしたこつちの身にもなつてよ！！」

「……………何かイラツつと来たんだけど……………」

「キュー、俺が悪かったから止めてくれ……………。アルフ、俺に聞くな……………」

「チョットアンタ達！いい加減離れなさいよ。コダイは怪我人よ！止めてくれるのは良いが。人の事が言えるか？アリサ……………」

「にははははは……………／／／／」

「うう……………／／／／」

アリサに言われてようやく離れた二人…もう一回死ぬ所だった。

俺は死ねないが決して不死身とは少し違う。回復量は普通の人と変わらない、死ねないから文字通り死ぬ程痛い思いが出来る。俺にとつて死は軽い気絶と変わらない……………

「全く、コダイもその犬も怪我してるんだから、休ませなさいよ」

「ご、ごめんね。コダイ君、ワンちゃん……………」

「気にするな……………」

「ワン！ さつきは死ぬかと思ったよ」

「えっと……………私たちはリビングでお茶しているからね。ちゃんと怪我を治してね」

「分った。それとなのは、ユーノをこっちに渡してくれ」

頼みたい事もあるし……………

「え？うん、ユーノ君」

「分ったよ」

ユーノは俺の元へ跳び移った。

「じゃあね」

「元気出してね」

「さつさと怪我治しなさいよ！」

なのは、さすが、アリスが手を振り部屋を出た。

「……………ユーノ、早速だがアースラに転移してくれ」

ベットから起きて、コートを着ながらユーノに言った。

「はあっ！？何言ってるんだ！君は絶対あんせ！時間が欲しいんだ、頼む」うつ…分ったよ……………」

渋々といった感じで転移の準備をしてくれたユーノ。

「アルフ、フェイトの事は任せろ」

「分ったよ……………アンタを信じるよ。体を張ってアタシ達を守ってくれたアンタを……………」

アルフの言葉を後ろで聞いて、アースラに転移した。

アースラに戻って最初に待ち受けたのは。

「何であんな無茶な事をしたんだ！！！！」

クロノの怒声だった……………

「問題無い、もう治った。昔から体は頑丈な方だ」

「何が問題無いだ！君がフェイト・テストロツサと共に失踪する時のバイタルは死亡寸前だったんだぞ！良く見ればその時より怪我が多いじゃないか！？」

「まあまあ、クロノ君。コダイ君もこうして生きているんだからね？」

詰め寄ってくるクロノをエイミイが引き離す。

「くっ……………まあいい」

「そう怒るな、怪我の功名でプレシアについて良い物が手に入った」

「プレシア・テストロツサについてだと！？」

クロノの声でここにいる局員が全員こっちを見る。

「どうしたんだ？」

「実は今回の事件はプレシア・テストロツサが起こした可能性が高いとされるのよ。いまだんな些細な情報でも調査している所よ……………」

……………」

局員代表としてリンディが答えた……………」

「成程……………では、まずそっちが分った情報を教えてくれ……………」

「分ったわ、エイミイ」

エイミイはモニターに情報を表示させた。

「プレシア・テストロツサ。私達と同じミッドチルダの魔導師で。

昔、中央技術開発局の第三局長を勤めていて、当時彼女が研究してた次元航行エネルギー駆動炉実験の際、違法なことをしたらしくて失敗。結果的に中規模次元震を起こしたとか何とかで中央を追われて地方に左遷。それにしてもずいぶん揉めたみたいだよ？ 事故は結果に過ぎず、実験材料には違法性は無かったとか。辺境に異動後

も数年間技術開発に携わってみたいけど、しばらくして行方不明になってる」

「ここまでは日記で書いてあったな……………」

「その先は？」

「それが抹消されててさっぱり……………」

「そうか……………なら、俺の情報はその情報に一つ訂正とその先の話の様な」

俺はリニスの日記にを見せた。

「それは？」

「プレシアがいた……………時の庭園にあった。プレシアの使い魔のリニスの日記だ」

「何ですって!?!」

「リンディ、読んでみる。おそらく……………そっちが驚く事ばかりだぞ？」

俺はリンディに日記を渡した。この艦長なら説得力あるだろ……………

……………

「え、ええ……………」

リンディは日記を皆に聞こえるように朗読し始めた……………

「こ、こんな事って……………」

「あの、実験の事故はプレシアの元上司がプレシアに責任を擦り付けただけだ……………」

「嘘だ！管理局が情報の隠蔽だなんて！」

三人は驚きを隠せないようだ……………まあ、仕方ないよな。

「言っておくが。これは被害者の情報だ、娘が死んでいるのに嘘なんか付くか？」

「だが!」だったら証拠を見せてやる「え?」

俺はクロノにそう言うと。エイミーが向かっていて、モニターのコンソールを叩いた。

「なにしている？」

「実験が失敗した理由が違法なだけなのはおかしい。本当に実験に失敗したのならその原因、または材料の違法性の詳細を残して同じ事を繰り返させないはずなのに……ほら、どうやっても実験の失敗は材料の違法としか出てこない。警察と裁判所と軍隊が一緒になつてる管理局だ、黒いうわさの一つや二つ隠し通せて当然という事だ」

「確かに……管理局の力ならそれも可能でしょうね……」
リンディは納得した様子だ……

「さらに言えば当時の実験の時、そこにプレシアはいなかったはずだ……まあ、今はこの事は置いて、後でクロノが執務管として調べればわかるだろ……いまはプレシアのその先に着いてだ」

俺はあの映像端末を取り出しエイミーに投げ渡した。

「それを再生しろ。きつと面白い物が見れるぞ？」

「え？……うん」

エイミーが端末をモニターに再生させた……

「プレシア・テストロッサが二人！？」

映像がちょうどクロノのプレシアが移った所でクロノがかなり驚いた声を上げた。

「ちなみに、今回の事件はそのクロノが引き起こした事だ、会って鎌掛けたら見事に引っ掛かってそれを否定しなかったよ。それにクロノが言う限り、本物のプレシアもどこかにいるようだ……」

リンディこの場合どうなるんだ？」

「そうね……………本物のプレシア・テストロッサはクローン……………プレシア・クローンと言いましようか。プレシア・クローンに監禁されて、フェイトさん達はそれを人質に取られて命令させられた……………無罪にはならないけど、罪はかなり軽くなるわ……………でも問題は……………」

「プレシア・クローンの見分け方……………」
実はこれはいくら考えても分らない。

クローンはおそらくプロジェクトFの成功体……………一度会ってる俺なら分るが。他の人が分らないとフェイト達の罪が軽くならない……………

……………
「こうなったら意地でも探すぞ……………フェイトやプレシアも両方助ける、家族が失うのは誰だって悲しいんだ！何があるうと絶対助ける！」

「僕だって同じだ！エイミー、映像を再生してくれ！プレシア・クローンの所からだ！」

「了解！」

エイミーは再び再生を始めた……………

『もしもの時のバックアップとして私の遺伝子をクローニングして作った私のクローン……………』

これで約30回目の再生……………手掛かりは無し……………

「くっ……………もう少しって言う所で……………！」

手掛かりが見つけられず歯を食いしばっているクロノ……………

「プレシアの奴……………偽物と区別が付く様にマークぐらい付けている……………」

探すこっちの身にもなれって……
もう一度、クローンに目を凝らす。

………！あつた！

「エイミー！クローンの腕を拡大してくれ！」

「え！？うん！」

慌てて、映像を拡大するエイミー。その映像には。

クローンの腕にバーコードの様な模様があった。

「何だアレは？区別の為には派手すぎないか？」

「おそらく、定期的に状態をチェックするための者だろう。けどこれで……！」

俺の疑問にクロノが答えてくれた………よし。だったら………

………「クロノ、リンディ耳を貸せ………良い作戦がある」

こっちに来たクロノとリンディにある作戦を耳打ちした。

「とまあ、こんな感じだ。質問は？」

「「大アリだ（です）！」」

さすが親子息ピツタリ………

「それは君がすれば良い事だろうが！第一目撃者何だし」

「民間協力者の俺がやるより。執務管のクロノがやる方が都合がいんだよ」

「でも、今のあなたじゃ………武装隊に頼んで………」

「無理、アイツのランクは少なく見積もってもAAAランク以上束になっても敵わない」

クロノとリンディの意見を悉く切り捨てる。

「後、分らないのはジュエルシード何だよ………いくら願望を叶えるとしても前例を見た感じでは蘇生させるにはまさに俺の様に奇跡の

確立じゃないと……………」

それに次元干渉もある……………あんな物を十数個発動させたらどうなる事やら……………」

「とにかく、俺はこの作戦を変更させるつもりは無い。後、この事はなのはとフェイトに言わない事……………っとそろそろ戻るか……………こっさり抜け出したし」

「分ったわ、今転移してあげるわ」

リンディに頼んで俺は元のアリサの家に転移した……………」

「……………何処行つてたの(よ)!!!!」

その後三人娘に怒られた後、厳戒態勢で看病された……………」

……………俺は犯人か。

死でも慣れるとそんなに怖くない。ん？慣れるワケ無い？それもそうだがロンドン

コダイ「何か久しぶりに来たような……………」

メガネ「そりゃあ、二話連続で気絶したしね……………」

レイ「むう〜」

コダイ「レイ……………いい加減機嫌治せ」

レイ「プイッ！」

メガネ「レイ……………どうしたんだ？」

コダイ「俺が無茶して気絶したから拗ねたんだよ」

メガネ「だから、今回喋らなかつたんだ……………」

レイ「フーン」

コダイ「（少ししたら頭冷えるから先進めてくれ……………」

メガネ「（分った）……………ユタ様、マーボー様、感想ありがとうございます！」

コダイ「ユタからは久遠の写真（涙目&上目づかい）とテープだ」

メガネ「うわ〜……………可愛いな〜……………後、そのテープは何だ？」

コダイ「これは……………」(テープを再生する)

久遠「おにーちゃん」

メガネ「ぐはっ！」(吐血)

コダイ「オイ!どうした!?!」

メガネ「何でお前には効かないんだ……………」

コダイ「いや……………その『おにーちゃん』の事の発端は俺だし……………」

メガネ「そうだった……………なら仕返しにコレでも喰らえ!マーポー様から貰った瑠璃ちゃんの着替え(しかもパンツ一丁)を喰らえ!」

コダイ「……………白か」(まじまじと)

メガネ「しまったあ!コイツ羞恥心とか無かったんだ!」

コダイ「それはそうと、ここでのプレシア……………クローンの強さはどれくらいだ?」

メガネ「病気を患って無いプレシアだから……………大体SSクラスかな?後、本物のプレシアについてはちゃんと書くから。今の本編の話じゃ分りずらいと思うし……………」

コダイ「そうだな……………さて、今回はなのはのアレがついに発動……………」

メガネ「皆さんの意見や感想をドンドン待ってます！」

コダイ「さて、帰るぞ。レイ」

レイ「うん！」

メガネ「（ホントに機嫌が直ったよ……）」

「次回もお楽しみにしてください！」

うん…これは勝敗の心配より生命の安否が先だなロノタイ（前書き）

コダイの前の世界での能力が少し出てくるかもしれない。

うん……これは勝敗の心配より生命の安否が先だなbyコダイ

アースラーに情報を渡したその日の夜、クロノがアルフの証言と共になのはに話し（クロノの事は伏せて貰った）、それを聞いたなのは『フェイトちゃんを助けたい!』と言った。

その後クロノが『今回の事件はかなり難しい事になっていて、さつき君が話した作戦で勧める事になった』と俺だけに念話で伝えてくれた。

そして次の日の朝、ユーノはなのはに預けていて、アルフはなのは達と一緒にアースラに引き取られた。

……俺は絶対安静を言われていたが。また何時、プレシア・クロノが何かをしてくるか分からない。だから今、早朝にこっそり脱走をしている。

「よつと……バニングス家の警備も大した事無い。私が一時止めたんですよ」……… 鮫島

飛び降りた塀の近くにアリサの執事の鮫島が立っていた。

「で？何の様だ？」

「はい、実はこれを………」

鮫島が渡したのは小さいバスケットと温かいポットだった………

「何だ………これ？」

「空腹のままでは行けないだろうと思ひまして前日の夜に用意しました、ポットの中身は紅茶です」

「何でこんな物まで」アタシが言ったのよ………「アリサ？」

門の向こうにはパジャマで眠たそうなアリサがいた。

「アンタ、アタシ達が看病している時、時々上の空だったでしょ？」いや、聞かれてもそんなモノ分らないし………

「それに。アタシはアンタみたいな、つらい事も苦しい事も迷惑を掛けない為に自分で全部背負い込むバカを知ってんのよ………」アリサは眠たそうな眼を擦りながら話し始めた。

「そのバカは今も吹っ切れたけど今度はアンタがその前のバカと同じ状況になつていて……正直聞き出したけれど、アンタはそのバカと違つて性格上こう言うわね『貴様らでは、役立たずだ』つて。まあコレもアタシ達を傷付けさせないアンタの優しさかもしれないけど……それでもアタシ達は友達が傷付いてるのに黙つて見ているのが嫌なのよ……」

「……アリサ……何が言いたい？さっきから心情を吐露するばかりでこれとは全く関係ないぞ？」

「っ！／／／……あゝもう！それはアンタが勝手に出ていくと思つて鮫島に頼んだのよ！悪い！？／／／」

「凶星を突かれ、突然大声を出すアリサ……近所迷惑じゃないか？」

「いや、ありがとう。アリサ」

「フン！／／／礼を言うなら作つた鮫島に言いなさいよ！さあ早くそれ食べて、やる事全部解決しなさい！なのはと同じ時期に学校来なくなつたから、なのはも同じなんですよ！？さつさと終わらせて早く学校きなさいよ！アンタ達がいないと学校もつままないだからっ！！／／／」

そう言つてズカズカと家に戻つていくアリサ。

「では、お気を付けて」

鮫島は一礼して戻つて行つた……

もしかして……バレた？

「いや……でも、アリサもすずかも気づいてる筈だ。いつかきつと話す時が来る……」

その時は……俺の事も……

いこう、みんなのところに……

「そうだな……」

俺とレイは合流するために公園に向かった。

ねえねえ、はやくゴハンたべようよ！

公園につくといきなりレイがそう言いだした。

それもそうだな……………あそこのベンチでいいか。

なにかな、なにかな

物凄いご機嫌のレイ……………食べるのは俺なのに……………

「お……………サンドウィッチ」

バスケットの中身はハム、タマゴ、ツナ等のごく普通のサンドウィッチだ。

おいしそ

「でも、鮫島にしては素朴だな……………」

ハムサンドを食べる。

「アム……………っ！」

か、からい

レイが代弁した…繋がってるからか？

「これ…絶対アリサだ……………」

今度本当に料理教えようかな……………

あ、それ以外は特に問題無かった……………少し辛いけど。

「んっ……………流石お嬢様、紅茶は一級品だな」

そうだね……………ん？コダイ、まりよくはんのう……………なのはだよ

その様だな……………なのはがこっちに歩いてくる。ユーノとアルフを連れて……………

「……………ふえ？コ、コダイ君！？」

おい気づけよ……………距離にして2、3メートルだぞ？

「なに呆けているんだ？」

「コダイ！？何でここにいるの！？」

「アンタは絶対安静だろ！？」

「ユーノ、アルフとりあえず落ち着け……」

「治った」

「……嘘をつかない(の)！」

「息ピッタリだな……ん？丁度いいタイミングだ」

「まりよくはんのう、フェイトだよ」

「ほらな……」

「……で？何でこうなる？」

「フェイトちゃん、いい加減コダイ君から離れてほしいの……」
「俺の前には悪魔の如くハイライト無い目でレイジングハートをこっ
ちに構えてるなのは……」

「悪いけど……コダイは私が貰う……そしてこのジュー
エルシードも」

「そして後ろには俺を抱きしめて右手にあるレイを右手ごと掴んでる
フェイトが……あの時にプレシア・クローンに見られていたのか
……それにジェルシードはついなかよ？」

「フェイト、何であの女のいいなりに何てなっているんだよ！この
ままじゃフェイトはずっと不幸のままだよ！」

「アルフ、俺の事は無視？」

「それでも、私はあの人の娘だから……母さんから聞いたの、コダ
イの右手にジューエルシードがあるって……」

「えっと……レイです。よろしく！」

「おお……流石レイ、ズレている。」

「コダイ……このジューエルシード、私に渡してくれない？……」
「わたしもつジューエルシードじゃないもん！」

「悪いが、このジュエルシールド……レイは俺のモノだ。誰も渡すわけにはいかない」

っ……………

「ん？レイ？……………」

……………きゅ／／／／／

ボシユッ

「熱っ！」

急にレイが熱を帯び煙を噴きだした……………何があった……………

…！

「コダイ（君）？」

レイと逆になのはとフェイトから物凄い冷気が……………寒い。

「コダイ君、レイちゃんがコダイ君のモノってどういうことかな？（レイちゃん羨ましいの、私もコダイ君に『なのはは俺のモノだ』って言われたいの／／／／）」

「どうしてレイがコダイのモノなのか理由を教えて……………（いいなあ……………私も『フェイトは俺のモノ、絶対に渡さない』って言われたい……………／／／／／）」

いや……………レイは俺のだし……………

「フェイトちゃん……………」

「うん……………」

フェイトはなのはが何を言いたいのが分ったみたいだ……………念話なしに。

「賭けよう……………コダイ（君）とジュエルシールドを！」「いや何で俺？……………」

「ヒューヒュー色男！……………」

アルフ？……………何か声に怒気籠って無いか？

「行くよ!」
二人は力強く飛び立った……………
「ジユエルシールドは!?!」
ユーノのツツコミが空に響いた……………

「デイバインシューター!!」
「フォトンランサー!!ファイヤーツ!!」

ズドドドドドドドドドドド!

「うわ〜早朝の花火つて、こんな感じかな……………」
「コダイ……………現実逃避しないで、ホントに逃避した方がいいよ」
ユーノ上手い、座布団一枚。
「けど、大丈夫なの?なのはちゃんとフェイトちゃんを戦わせて……………」

……………
俺のすぐ横に現れたモニターにはエイミーがいた……………何か寝癖がついてる。

「フェイトの事はなのはに任せようと言ったし、俺達の出る幕では無い。この勝負事態にどちらに転んでも関係ないしそれに……………」

……………
「それに?」
エイミーが首を傾げる。その後ろでクロノがエイミーの寝癖をヘアスプレーとブラシで整えていた……………

「……………アレに手を出したら死ぬ、確実に……………」
「ああ……………コダイ君の『ファンタム・ペイン幻痛』ね……………うん死ぬるよ……………塵も残さ……………」

ず

『幻痛』と言うのは、俺の魔法及び異能の力を強制的に殺傷設定で受ける体質の名称だ。流石に名前が無いと面倒くさいだろうとリンデイが命名したものだ。

「俺達は、誰かが横槍を入れさせないためにいる様なものだ。そっちはフェイトの帰還先の追跡の準備、頼むぞ」

エイミイの後ろのクロノは寝癖を直して何やら満足げだ。

「まっかせなさい！」

「ピヨ」

「あれ？」

「あ……………」

エイミイのガッツポーズの拍子に寝癖が元に戻り。クロノが小さい声を漏らした……………『今度はもつと強力なのを……………』と呟いていたが……………この際無視だ。

「それでコダイ君、どっちが勝つと思う？」

エイミイの後ろから今度はリンデイが覗き込んだ……………

「なのはとフェイト。資質や才能を考えると5：5だが……………技術と実力を考えると4：6かな？」

「フェイトさんが有利と」

「いや、お互いの精神状態を考えると。フェイトは恐怖や何やらで追い込まれているのに対しなのは吹っ切れて……………そうなる。6：4になる可能性もある」

「つまり、どっちも勝つ事が出来る」

「そういう事だな……………」

後は運のみ。けど、最後の6：4は……………

「やるね！フェイトちゃん！」

「なのはも！初めて会った時よりすごく強くなってる！」

戦ってる内にそんな事は頭の隅に消えたか。溜め込んでるモノを吐き出せばフェイトも少しは吹っ切れるんじゃないか？

「ねえねえ、コダイ君」

リンデイの声がやや弾んでる。

「コダイ君はどっちが勝つと思う？」

「ん？それはわからな。今は不参加除いて私やエイミイも含めて27人中26人がフェイトさんよ」は？

こいつらまさか…… トトカルチヨしているのか……

「貴様ら……」

「コ、コダイ君……」

顔が引きつってるリンデイ……

「……… 何で俺のいない所で面白い事始めている！」

「……… そつち！？」

モニター先の全員が見事に八毛った。それ以外に何がある？

「……… で、そのなのはに賭けた一人は？」

「……… 僕だ」

「クロノ？何で？」

「……… 写真で……… 脅されて」

ああ……… 俺が寝ているクロノにコツソリ黒ゴスを着替えさせて、とつても少女らしいポーズを取らせてリンデイに撮らせたあれか。

一度は疑われたが俺は『そんな黒ゴスがあつたら着せる所か俺が着ている！』と言ってやった、ん？何か違うだろ？言っておくが女装はオ「で！コダイ君はどっち？」……… 最後まで言わせる。

「なのはに10万。ユーノもなのはに賭けるか？」

「僕？うん……… うん！なのはに賭けるよ！」

「じゃあ、ユーノの分も俺が払う」

「アンタ達何やってるのさ！二人が真面目に戦ってるのに」

「トトカルチヨ」

「トトカルチヨ」

リンデイとハモった。

「アルフも賭けるか？」

「賭けるわけないよ！」

アルフの毛が逆立つ……………なら。

「ほう…主が勝つのが信じられないとは不忠な使い魔だな……………」

……………」

「何だつて！？いいだろう！フェイトに賭けてやるうじゃないかっ
！！」

よし。乗って来た。

「じゃあいくらだ？」

「金なんて無い。だからもし賭けに負けたら、アンタの言う事一つ
だけ何でも聞いてやるよ！」

「その心意気乗った！」

「レッツ・トトカルチョ」

リンデイが開始の宣言をした。

「今の所、拮抗しているけど、そうなるかな……………ん？」

デバイスで罅迫り合っていたフェイトが離れた。近接戦闘重視の
フェイトが何故？

「アルカス・クルタス・エイギアス。疾風なりし天神、今導きのも
と撃ちかかれ。バルエル・ザルエル・ブラウゼル……………」

フェイトの詠唱と共に周囲に大量のスフィアが出現した…あれは！

「あれはプレシアが俺達を殺そうとした時に使った魔法だ…じゃあ
なのはは……………バインドで拘束されてる」

まあ元を正せば親子だし使えるのも当然か……………なのはもアレでは
動けないか……………」

「あれはライトニングバインド！マズイよフェイトの本気のアレは
マズイんだよ！！」

説明ありがとう、アルフ。つまりアレはフェイトの最大の攻撃力を

持つ切り札……………

「もし、これが決まればフェイトの勝ち。それを凌げればなのはの勝ち……………」

一応、教えた身として何処まで強くなったか見せて貰うぞ……………
………なのは。」

「フォトンランサー・フランクスシフト。撃ち碎け、ファイアー……………」

多量の金色の雨がなのはに降り注いだ……………つて！

「おい！流れ弾がこっちに来るぞ！？」

「コダイ下がって！」

「アタシ達が防ぐよ！」

ユーノとアルフが俺の前で障壁を張り流れ弾を防いだ。

煙と爆音が周りを包み、周囲を確認出来なくなった。

「クソツ……トトカルチョで罰があたったか？……………エイミイそっちはどうだ！」

「えっと。さっきの魔法がほとんどなのはちゃんに命中！なのはちゃんはやんは煙で隠れていてよく見えない！」

「いったあゝい！」

突然、煙の外からなのはの声が響いた……………「元気そうだな。煙が晴れるとそこにいたのは。」

「撃ち終わると、バインド、つてのも解けちゃうんだね」

比較的無事なのはの姿だ……………

「フェイトの切り札を凌いだ。フェイトにはもう魔力もあまり残って無い……………この勝負なのはの勝ちだ！」

よし、儲けた。

「今度はコツチの番だね！」

なのはは砲撃を放つ。フェイトは魔力弾一発で応戦するがそれも砲撃に飲み込まれ、フェイトは障壁で防ぎ何とか凌いだがもう満身創痍これは止めに入るか・・・勝ちは決まったモノだし。

「コダイ君！」

突然なのはに呼ばれて、そのほうを見ると……なのはが魔法陣を展開して何やらチャージしている。

「なんだアレ……………」

「恐らく…集束砲撃だと思う……………」

「集束！？そんなのSランク以上の技術だよ！？」

ユーノの言葉にアルフが驚いている…そんなに凄いのか？……………よく見ればフェイトをバインドで拘束している……………防御の隙に拘束したのか。

「見てて！これが答えだよ。ディバインバスターのバリエーション！」

だいぶ前にフェイトに攻撃を当てる方法を宿題にしたっけ？……………

…は？…おい待てこれ以上はオーバー「スターライトオオオオオオ！」

！…って！

「…ちよつと待った！！」「…」

「ブレイカアアアアアアアアアア！！！！！」

俺達の制止は轟音によってかき消された……………

「なんつークソバカ魔力」

「フェイトちゃん生きてるかな？」

モニターで驚いてるクロノの言うとおりだ、まさに星光……………流星
スターライト

の如くの威力。

それとエイミー……………もう生きてるかとかそのレベル？

「コレ……………フェイトさんトラウマにならないといいけど」

リンディ……………これはトラウマ確定だろう……………

「この、馬鹿！」

バゴンツ！

「にゃあ！」

あの後、海に落ちたフェイトを俺が泳いで助けて、今アルフ（人間形態）が膝枕をして、ユーノの魔法で治療中。

そして今はなのはに説教中だ。O S H I O K Iはしない、戦闘中に起きた事だから少し大目に見る。

「友達になりたいと言った奴に即死級の砲撃を撃つか普通！？その前の砲撃で勝負は決まっただろう！」

「う、ごめんなさい！！！」

「……………まあ、宿題に関しては合格点だな……………」

相手を拘束して至近距離の集束砲撃……………なのはらしいと言えばなのはらしいな……………

唯一の欠点はチャージに時間がかかるという事だな……………そこはユーノに任せるか。

「んっ……………」

治療がすんだのか、フェイトが目を覚ます……………確認しておくか。

「フェイト、大丈夫か？ここはどこだか分かるか？自分の名前は？今、膝枕をしている人は誰だか分かるか？」

「コダイ君、何か酷過ぎない!？」

いや……………後遺症が無いか確かめないと。

「え?……………コダイ!？」

「他に誰がいる?……………ホラ、立てるか？」

「う、うん」

フェイトの手を引いて立たせる。

「私……………負けちゃったね」

フェイトのバルディッシュからジュエルシードが6つ出てきた……………

「えっと……………」

なのはが困った様子でこつちを見て来た。

「反則スレスレだけど勝ちも勝ちだ、貰ってやれ」

そう促すと、なのはがゆっくりとジュエルシードに……………

「コダイ君!おとといと同じ魔力反応!」

モニターのエイミーが叫ぶと同時に空から紫の雷が降ってきた……………

もう……………この能力を使うしか無いか。

「……………消える」

雷は俺に触れる直前に四散した。

「……………エイミー、場所は掴めたな」

「え?うん……………けどジュエルシードが……………」

さっきのおそらく囿……………けどこれで居場所が掴めた。

「アースラに戻ろう……………なのは、フェイトとアルフを頼む……………」

さて、これからだ……………

「何なんださっきの能力は！」

「だから言っても理解できないから分らないって！」

「答えになって無い！」

「理解できないって答えが出てるだろうが！」

アースラに戻った直後クロノと口論がリンディが止めるまで続いたと追記しておく……………

うん…これは勝敗の心配より生命の安否が先だなboyコダイ(後書き)

メガネ「さて、ここでコダイが使った能力について…」

『名称不明』

正体も分らないが、中二病にふさわしい能力と言えます。

コダイ「だから何これ?…何この中二病」

メガネ「良いんだよ、お前の場合突き抜けてるから」

レイ「コダイ病気なの?」

メガネ「ああもう一生「いいから早く始めろ」おゝ恐……………ユタ様
感想ありがとうございます!」

コダイ「滅刃 雷と滅刃 転を貰った……………うん中々頑丈そうだな」
(素振り)

メガネ「壊すなよゝお前の馬鹿力は半端無いからな」

コダイ「よし!」(滅刃 雷と滅刃 転を構える)

メガネ「おい……………何をするつもりだ……………」

コダイ「試し殺し」

メガネ「退却!」(逃亡)

コダイ「逃がすか」(追跡)

レイ「いけんやかんそう！イロイロ待っています！」

メガネ「何でそんな楽しそう何だよ！？」(加速)

コダイ「待て〜」(加速)

レイ「キヤアアアアアアアアアアアアアアアア！」(巻き添え)

〜次回もお楽しみにしてください！〜

優しい言葉が本当に優しいとは限らないb yコダイ（前書き）

忘れていると思いますが。

海のジュエルシード封印の時とプレシア・クローンの時の傷はまだ
全然治ってません。

つまり死に掛け当然です。

優しい言葉が本当に優しいとは限らないboyコダイ

アースラのブリッジに着くと慌ただしい中リンディが迎えてくれた。
「貴女がフェイトさん？ コダイ君、何時でも行ける様に準備してください。後、フェイトさんを別の部屋へ案内して」

「準備は既に済んでる。なのは、フェイトにアースラを案内してくれ。話す事があるだろ？」

「うん。行こうフェイトちゃん」

なのはがフェイトの腕を引くが、フェイトはその場を動かない。

「……………母さん？」

フェイトが見据える先には武装局員とプレシア…のクローンが対峙しているのがモニターに映っていた。

「プリシア・テストロツサ！時空管理法違反、及び、管理局艦船への攻撃容疑であなたを逮捕します！武装を解除し、ご同行を願います」

本当はクローン何だけど、その事は伏せて貰ってる。この事はフェイト自身の目で確かめないとな…………

モニターに映る武装局員の一人が奥にあった隠し扉を開き、そこにあるモノを見つけた瞬間、プレシア・クローンの顔が怒りに歪む。

そこにあっただのは、生体ポッドに入ってるフェイトを幼くした子供が入っていた。

アレがアリシアか……………マズイ！クローンも本物のプレシア同様にアリシアの蘇生が目的、今の狂気染みたクローンの精神状態では…………

「リンディ！今すぐ局員をひか「私のアリシアに近寄らないで！！」遅かったか！」

プレシア・クローンは大量の雷を局員達に落とした。

「いけない！！早く彼らに戻して！！」

一人残らず倒れていた局員は転移魔法でアースラに運ばれた。

「もう時間が無いわ……………9個のジュエルシードでアルハザートに

辿り着けるかどうか……………」

クローンがアリシアの入った生体ポッドを背に話し始めた。

「アルハザート？」

「次元世界の狭間に存在し、今は失われた秘術の眠る地の事よ」

リンデイが説明してくれた。次元の狭間か……………」

「じゃあ、ジュエルシードを集めた理由は、その次元干渉能力を使つてアルハザートに行くという事か……」

「その通りよ……………」でも、もういいわ……………」

クローンが俺の問いに答えると今度はフェイトを嫌悪や侮蔑こめてフェイトを睨んだ。

「アリシアを亡くしてからの暗鬱な時間を身代わりの人形に記憶を与えて娘扱いをするのも…………… 貴女の事よフェイト…………… 貴女はやっぱりアリシアの偽物よ、折角アリシアの記憶もダメだった」

「ど、どういふ事なの!？」

なのはが驚きの声を上げる……………」

「プレシア・テストロッサとはある事故で実の娘のアリシア・テストロッサを亡くしている。そしてそいつが最後に研究していたのが対象の遺伝子をクローニングして対象を複製する、つまり死者蘇生の秘術。その時の開発コードがプロジェクトF・A・T・Eだろ？」

「ええ、そして私の目的はアリシアの蘇生…………… それだけよ。だけどダメね…………… ちっとも上手くいかなかった。所詮作り物は作り物。」

アリシアの代わりにはならない。ただの偽物、贋作でしかないわ」

そう、いくら記憶や肉体を複製しても性格や人格は複製できない。

つまりifの存在を作る事……………」

「アリシアを蘇らせるまでの間に、私が慰みに使っただけのお人形。だからアナタはもうイライナイわ。何処へなりと消えなさい!」

もしかしたら、本物のプレシアもこうなるかもしれない……………」

…………… けど

「イイ事を教えてあげるわ、フェイト…………… アナタを造りだしてか
らずつとね、私はアナタが…………… 大嫌いだったのよ!」

その言葉を聞いた瞬間、フェイトの目には光が無くなり、力無く崩れ落ち、なのはが慌てて抱き止めた。

「フェイトちゃん！」

「フェイト！」

なのはとアルフの呼びかけに全く反応しない、まさに人形だった……

……

「ハハハハハハ……！ハハ、ハハハハハハ……！フフフフ……！」

偽物と分つていても思わず能力で殺す所だった……

「そんな人形より……私はあなたに興味があるのよ」

クローンが俺を指す……

「あなたの右腕にあるジュエルシード……人体と完璧に癒着しているのに暴走が一切起きない……つまりあなたはロストロギアを完璧に制御できている。あなたを調べれば、確実にアルハザートに行けるわ……」

つまり、俺にジュエルシードを使わせるって事か……

「……貴様の顔は見たくもないが……貴様のその顔に5、

6発殴らないと気が済まない」

あの時は仕留めそこなっただけ……

「待っているわ……」

「庭園内に魔力反応多数！全部クラスはA。数は……100……

200……どんどん増えていきます！」

モニターが消えると同時にエイミィが魔力反応をキャッチした。

「ジュエルシードの発動を確認！」

「小規模ながら次元震の発生を確認！徐々に規模が大きくなっています！」

他のオペレーターも報告する。

「まさか本当にアルハザートに行くつもりか！あんなものはお伽噺だ！」

「クロノ！あの女が俺を直々に呼んだんだ！庭園へ転移してくれ！」

「待つて！私が現場に出て次元震を何とかして抑えるから、その間にクロノとコダイ君達は……あの事をフェイトさんに話しても……」

「分ったリンディ。行くぞなのは今は何を言っても無駄だ……自分の目で確かめさせる」

そう言つてブリッジから出ていく。

「……フェイト………待つている」

そうフェイトに言い残して。

「コダイ君！」

「何だ？」

ゲートに向かう途中、後ろから来たなのは腕を掴まれた。

「アレしか言う事無いの？」

「は？」

「フェイトちゃんに言う事、アレだけなの！？フェイトちゃんはお母さんに嫌われて一人ぼっち何だよ！？なのに何であんな事言うの？もっと他に言う事があると思うの！」

「一人つてアルフがいるだろ？」

「そ、それは……」

「今の、フェイトには俺達の言葉は届かない……それに、優しい言葉が本当に優しいと限らない」

フェイトに取つてあのクロノンは心の命綱の様なものだった。それ

が無い今本当にただのフェイトと言う人形だ。

「見せてやればいい……………戦えばいい……………一体俺達が……………誰の為に戦ってるかを……………」

「ふえ？……………うん！……………うん！！」

あ、そうだ……………今の内に。

「なのはすまないが……………を……………」

「え？それなら大丈夫だよ？」

準備は整った。さて……………行くか……………時の庭園へ

「何……………コレ……………」

時の庭園に着くとなのはが啞然としていた。

目の前には大量の傀儡兵が道を塞いでた……………

「クソツ！何て数だ！」

クロノが焦っている……………時間が残り少ない……………

「俺が道を開く。全員下がっている！」

傀儡兵に向かって走り出す。

「レイ！……………アクセス！」

ナウローディング……………コンプリート！！

レイを起動して、一番近い傀儡兵の足を掴んで持ち上げる。

「……………ひよつとして……………」

なのは、ユーノ、クロノ、アルフの四人は俺が何をするか分ったよ
うだ……………

「俺が用があるのはあの女だけだ……………ガラクタで遊んでる暇は
無い！」

傀儡兵の群れを駆け抜け抜けながら何度も傀儡兵を振り回す。

「……やっぱいいいいいい！！！！」
「……」
「何度も傀儡兵を傀儡兵で薙ぎ倒し、持っている傀儡兵が使い物にならなくなったら思いつきり前に投げ飛ばす。」
時々、聞き覚えのある逃げ惑う声が聞こえたけど。

ズガアアアアアアアアアアアン！！

遠くの傀儡兵や壁を打ち抜き道が開けた。

「にゃ……にゃははははは……」

「み、味方でよかつた……」

「以前なのが言っていたジュエルシードより危険って意味がよく分ったよ……」

「アタシは、こんなのと戦っていたのか……」

後ろからこんな声が聞こえるが無視だ。

庭園を傀儡兵倒しながら（その時傀儡兵の持っていた武器を拾った）
進んでいると、床の所々に穴があいている……

「クロノ、この穴は？」

「あの穴のようなものは虚数空間。次元断層によって引き起こされる次元空間に空いた穴だ。魔法は全てキャンセルされてしまうから、飛行魔法や転移魔法が使えない。だから落ちたら二度と上がってくることが出来ない。全員、落ちないように気を付けるんだ」

クロノが説明してくれた、俺でも助かるかどうか分からないな……

「コダイ君、怪我は大丈夫？」

「ん？問題無い」

なのはの心配を即答で返す。

「アンタ、確か死に掛けじゃなかった？」

「頑丈なんだ」

アルフの疑問も即答で返す。

「そんな理由で……………」

「まあまあ、コダイのこの性格は今に始まった事じゃないから」

クロノが頭を押さえ、ユーノがそれを宥める。

実は正直に言つと。右目の視力も戻って無いし、骨折もまだ治って無い……………」

コダイ！まえになにかあるよ！

ん？……………あそこにあるのは……………」

「階段か……………二手に分かれるか？」

「その方がいいな。皆、これから二手に分かれよう。君達はこの階段を上つて駆動炉を封印してくれ。僕とコダイはプレシアの方向に向かう」

クロノが階段を指し、なのは達を促せた。

「駆動炉を封印すれば少なくともこの庭園は完全に停止する」

「責任重大だな、逝つて来いなのは」

「煽らないでよ〜それに、字が違つて」

なのはは膨れながら階段を上り、ユーノとアルフもそれに続いた……………」

「コダイ、僕達も行こう」

「ああ……………」

なのは達と別れて走り続けると、そこには分かれ道があった……………」

「まさか……………君が作戦前に言っていた事が本当にあったなんて」

「言っただろ？悪党の考える事は同類だから分ると……………」

俺がクロノ達に作戦を告げる前に言った予想が的中した。

「他にも280通り考えていたが……………これで当初の作戦通りに行けるな」

「ああ、僕がプレシアを……………」

「そして俺が時間稼ぎ……………」

お互いに頷き合い、目的の場所に向かった。

「さてと、バリアジャケットを解除して……………」

バキヤツ！！

目的地に着いた俺はレイを解除して、目の前のドアを殴り壊した。

「おじやましますつと」

壊れた扉で煙が上がり周りが見えなくなった……………ちゃんと掃除しろよ。

「あら？……………最近の子供はノックも出来ないのかしら？」

煙の向こう側から声が聞こえた……………

「ちゃんと手で叩いたぞ？文句はその脆い扉に言えよな？」

「……………物に当たれって言うの？」

「貴様にピツタリだろ？いい年して今まで人形遊びをしていて、気に入らなかつたらそれに当たっていた貴様に……………なあ、プレシア・テストロツサ……………」

「……………相変わらず口の減らない子供ね」

煙が晴れると、ジュエルシード、アリシアの入った生体ポッドと共
にいた。プレシア・クローンだった……………

優しい言葉が本当に優しいとは限らないbyコダイ(後書き)

メガネ「PVが240000、ユニークが2300を突破しました。本当にありがとうございます」

コダイ「さて、後二回位で無印終わりか？」

メガネ「そんぐらいかな。さてレイ、感想を」

レイ「うん！ユタさま、ありがとうございます」

コダイ「今度は滅刃 回か……」

メガネ「また、俺を実験台にするなよ？」

コダイ「……。(。)?」

メガネ「何その『えっ!?!』みたいな顔は!!」

コダイ「(チツ)……で、この後も考えているんだろうな」

メガネ「ん？一応、無印までは細かく考えてる……」

コダイ「そうか、とにかく俺はアレを殴ればいい」

レイ「がんばるぞー!!」

〜次回もお楽しみにしてください〜

11の手を掴むもの……b y n d a i (前書き)

V S プレシア・クローンです。

戦闘描写が上手く書けるかどうか……

「この手に掴むもの…… byコダイ

「悪いな、あげ足を取ったり口八丁や口車は特技の一つだからな」
詫び何て入れるつもりは無いので軽く返す。

「碌でもない特技ね……」

「貴様の趣味の人形遊びよりマシだと思うが？」

別にフェイトを人形と思っただけではない。むしろ人形はこいつだろ
う、ジュエルシードとアルハザートに振り回される愚かなマリオネ
ット……

「後、凶星も突くのも得意でな……いくつか核心を突いてやる……」

……
俺は一本目の指を立てる。

「まずは、プロジェクトF・A・T・Eについてだ……これは貴
様オリジナルでは無い、恐らく誰かの基礎理論があつて、それを発
展させた。違うか？」

「ええ……その通りよ。よくあの日記だけで分つたわね……」

「オリジナルなら何度も実験をした筈……なのに確認されたの
は明らかに少ない……つまりある程度の確証があるから何度も
実験する必要はない。次に二つ目だ」

二本目の指を立てる。

「次にアルハザートについてだ。これは俺も分らないが、アルハザ
ートは実在していたのかもしれないという事。プロジェクトF・A
・T・Eは死者蘇生の秘術の基礎理論を貴様が発展させたもの……
…そしてある仮説が考え付く。この秘術の理論はアルハザートの人
間が考えたのでは……と」

「……」
無言の肯定と捉え、三本目の指を立てる……

「次……いや最後に。これはフェイトの事だ……」

「っ……!」

バク転で全てかわし、右腕に巻いてある包帯を取ると、右手に付いてる俺のデバイス・・・レイが輝いてた。

「こっちはまだ言いたい事があるのだが。それは貴様を殴ってからだ。レイ！」

もくおこった！ナウローディング・・・コンプリート！！！！

レイを起動して、全身に漆黒の装甲を纏う。

さあ・・・殺してやるよ・・・プレシア・クローン……………

俺はクローンに向かって、一気に走りだした。

「消えなさい！！フォトランサー！！」

フェイトとは比べ物にもなら無い程の魔力弾が部屋を埋め尽くし……

……………

「ファイア！！」

一気に降り注いだ！

「おいおいどうした？……………狙いが定まってないぞ？」

「しまっ！！」

さっきの精神攻撃が効いていたのか、狙いは殆ど逸れて簡単に近づけた。

「まずは一発！」

振った拳は……………

ギインッ！

障壁によって防がれた。

「だったらこうだ！」

ギインツ！！

さっきより強く殴る……………

ギインツ！！！！

さらに強く……………

ギインツ！！！！！！

もっと……………

ギインツ！！！！！！

「これで……………くっ！！！」

前方の殺気に反応して横に飛び退くと同時に紫の砲撃が放たれた。

「これは……………サンダーレイジ」

「ふっ……………あの人形が使えて、私が使えない筈ないでしょ？」

「それにしても外れたな……………」

更に煽ってみる。

「チツ……………でも貴方も人の事は言えないわよ？さっきから一撃

も「障壁をしてみる」？…っ！そんな馬鹿な！！！」

クローンの障壁には俺の殴った所に罅が入っていた……………

「これで……………！！！」

その隙を狙い、更に強く殴り……………

パライン！！

障壁を破壊して……………

「一発目！」

クローンの顔を殴り飛ばす。

「グハッ！！」

殴り飛ばされたクローンは数メートル後ろの地面に叩き付けられた。

「後4、5発、ついでに蹴りも追加だ！」

「コダイ、それはさすがにいじめっこだよ」

え？ そうなの？……………

「この……………！」

すぐ起き上がり、再び無数のフォトンランサーを放つ。

「だから……………」

一瞬で、頭上に移動して……………

パラインー！！

踵落として障壁を砕いて。

「狙いが……………」

着地と同時に蹴り上げて、クローンの体を浮かせ……………

「定まって……………」

蹴り上げたその足で、蹴り飛ばして。

「ない！」

吹き飛ばされるクローンに追いつき、頭掴んで地面へ叩きつけた。

「グッ……………ア……………」

クローンは二、三度痙攣して力無く倒れた。

「やり過ぎた……………わけ無いな、かなり手加減したし、息もしているから死んではいない……………？」

気絶したクローンが紫の光に包まれ光が消えるとそこには……………

「傀儡兵？……………しまった！これは変身魔法か！」

一体いつ……………俺が目を離れた時は……………一度目の障壁が壊

..... ああ、その通りだな.....

「文字通り、死ぬほど痛かったな」

「う、嘘よ... そんな... 確かに心臓を貫いたはず！なのに何で... 何で生きているのよ！...！！！」

「だから、頑丈何だよ。はあ... 胸の辺りの風通りが良いなこれ...」
まあ、風穴空いているからな。

「な、何でそんな姿になってまで立ち上げられるのよ！！一体何なのよ... この化物！！」

「そんなの決まってる...」
まけたくないから

レイが代わりに答えてくれた... ああ、その通りだ。

「誰にも絶対に... 例えそれが... 昨日までの自分でもだ！！！！」

わたしはもうまけたくない！... あんなかなしいきもち
はゼツタイやだ！！

「俺が勝つのが奇跡ならその奇跡を起こしてやる！俺とレイは奇跡をこの手で掴む！！」

..... デバイスとのシンク口率の初期設定を突破しました...
『エクステンド Extend』を起動します

突然レイの口調が変化した瞬間、俺は巨大な虹色の光に包まれた。

「くうっ！な、何が起こったのよ！」
『エクステンド Extend... 機能拡張...」

容量20%増加、装甲強度30%上昇、増加に伴い再構成機能と封印機能を追加しました。その他の能力全て15%上昇、形状変化...
完了。『エクステンド extend』を終了します

機械的な流暢な声が終わると、光も収まった...
ん..... ほえ？どうしたの？

口調はいつものレイに戻っている... けど。

「レイの形が変わってる……………」

右手首に付いてる様だったレイの形状が右手を覆う様に金の蔦が伸びていた……………」

「ふっ……………」何かと思えばデバイスが変わっただけじゃない、こけおどしもいい所ね……………」

クローンが何か言っているが聞いている暇は無い。

「レイ……………」再構成」

え？……………」あっ！リコール！

体が虹色の光に覆われると次の瞬間には傷一つない真新しい装甲が体を覆っていた。

「いくらやっても回復には時間が掛ったのにそれを一瞬で……………」

まさか封印の方は……………」レイ」

うん！シーリング！

レイから魔力波が発生した……………」

クローンは咄嗟に障壁を張った。

「……………」何も起きない……………」

クローンの障壁には何も変化は無かった。

「いや、そんな筈は……………」まさか！」

何かに気づいたクローン、だがもう遅い。クローンの後ろにあったジュエルシードは淡い光を放ちレイに吸い込まれるように取り込まれた。

「成程……………」特殊な波動で封印して同時に回収か……………」意外と便利だな……………」

「くっ……………」よくも私のジュエルシードを……………」！！」

「ああ、心配するな。それにチャンスだぞ？ほら」

俺が手を開くと20個のジュエルシードが現れた、実は庭園に来る前になのはからジュエルシードをくれるように頼んでおいた。クローンの標的を俺に集中するために。

「さて、全てのジュエルシードは全部俺が持っている。俺を殺せばジュエルシードは全て貴様の物。それに俺を調べればロストロギア

を制御出来るかも知れない、一石二鳥だろ？」

再びジュエルシードを収納する。

「あらら？仕事取られちゃった」

突如として現れたのは言葉とは裏腹に残念そうではないリンディが映っているモニターだった。

「そのつもりは無かったんだが……」

「いいのよ、ありがとうございます。さて、プレシア・テストロツサ。終わりですよ。駆動炉もじき封印、あなたの元には、執務官が向かっています。忘れられし都アルハザード。そしてそこに眠る秘術は、存在するかどうかすら曖昧な、ただの伝説です！」

「アルハザードは存在するわ！次元の狭間に……時間と空間が砕かれた時、道はそこに！」

「随分と分の悪い賭けだわ。アナタはソコに行つて、いったい何をするの？失つた時間と、犯した過ちを取り戻す？」

「そうよ。私は取り戻す。アリシアを、こんなはずじゃなかった世界の全てを……」

「失つた時間を取り戻す？世界はな……っ！！」

俺が言おうとした時、水色の砲撃が部屋の壁を貫き、そこから現れたのは頭から血を流しているクロノだった。

「世界はいつだって、こんな筈じゃない事ばかりだよ！ずっと昔からいつも、誰にだってそうだ！こんな筈じゃない現実から、逃げろか、それとも立ち向かうかは、個人の自由だ！だけど、自分の勝手な悲しみに、無関係な人間まで巻き込んでいい権利は……」

この誰にもありはしない！」

「はあ……俺の言いたい事殆ど言いやがって……どうだ？」

「今はそんな事を言ってる場合じゃないだろ！ 上手くいったよ。タイミングは任せてくれ」

「まあ……これで作戦は成功だな 分つた」

念話で確認をとっている、なのは、ユーノ、アルフ、そして……
……フェイトがやって来た。

「この手に掴むもの……byコダイ（後書き）」

メガネ「さあ、クライマックスだぜ！」

コダイ「と言っても大体予想は付くだろうな……」

レイ「わたし、パワーアップしたね！」

コダイ「封印出来るのは有難いな……」

メガネ「実は随分前にレイジングハートとバルディッシュに相談したのがこの封印、当時レイじゃ容量が足りなかったから使えなかったけどエクステンドで使用できるようになったんだ」

コダイ「成程……何でこんな風にしたんだ？」

メガネ「いやさ……くっ付いてるから普通のデバイスと違ってメンテナンスとか強化が出来ないからこんな形にしたんだよ……」

コダイ「そうだったな……さて、そろそろ感想を……」

レイ「うん！ユタさま、マーボーさま、感想をありがとうございませす！」

メガネ「ユタ様から架空戦闘装置を貰ったぞ。これで設定した相手と戦える代物だ！」

コダイ「早速試すか……えっと相手は……よし……行ってくる……」（消える）

メガネ「ふう……これで……ん？あつ！！」

対戦相手：「アーカード（ヘルシング）」

メガネ「V S ラスボス！？」

アカード「お嬢ちゃん……処女かい？」

コダイ「違う……」

「次回もお楽しみにしてください」

予想外の出来事が連続で起きると叫ぶしか無いなbYコダイ(前書き)

出来れば年内に無印を終わらせたい…

予想外の出来事が連続で起きると叫ぶしか無いなbyコダイ

前回のあらすじ……………
プレシ「か、母さんが二人!?」……………つて言わせてくれ。

「どういう事!?母さんが二人いるよ!?!」

「ふえ!?もしかして分身!?!」

現在、二人がパニック状態に陥っている……………

「な、成程……………何かコダイらしい作戦だね……………しかも管理局の人を使うだなんて……………」

取り敢えず一番最初に落ち着いたユーノに事情を説明した……………

「ああ、本物のプレシアを見つけ無実にする方法……………それは執務官のクロノが本物を見つけて俺達が今まで対峙していたプレシアが偽物だと証明させる事。俺が見つけるより発言力があるしな……………」

そのために俺が時間稼ぎに回った。封印の方は予想外だけど……………

「そうなると、プレシアは犯罪者では無く被害者で、フェイトは母親を人質に取られて無理やりやらされた事になるから罪は軽くなるだろう……………そうだろクロノ?」

「ああ、けど罪は無い様なものだ……………今回のケースで全てはプレシア・クローンが招いた事になる」

そうなればテストアロッツサ家は全員被害者となるな……………後は第三者にも偽物と区別させないと……………」

「コダイ……………でいいかしら?」

どうやってあの腕のコードを見せられるかを考えてると後ろからプ

レシア……………本物ね。俺は偽物の方はクローンって言っただろ？が声をかけて来た……………あれ？……………この声もしかして……………

「あの時、脱出する際に聞こえた念話の？」

「そうよ。あのクローンは私を完璧に複製してる……………だからパスの様な物が通っていたのよ。それでクローンがフェイトにしている事を嫌でも見せられて、死のうと思つた時に貴方を見たのよ。傷だらけになつてもフェイト達を守つたり、リニスの日記を見つけて正体を見破つたり……………もしかしたらフェイトを救ってくれるのかも知れないと思つて生きようと思つたの。でも、自分も助かるなんて思わなかつたけど……………」

「家族を失うのは誰だつて嫌だろ？……………それに、そういうのはそつちに言うものだ」

プレシアが俺の指した方を向くとフェイトが一人立っていた……………

「フェイト……………」

「っ！……………か、母さん……………」

…今まで自分を虐待していた母親を目の前に少し怯えているフェイト。二人もいるし頭が追いついていない様だ。

「……………フェイトっ！」

プレシアはフェイトを自分の胸に引き寄せ思い切り抱きしめた。

「ごめんなさい……………ごめんなさいフェイト！……………貴女の母親なのに何も出来なくて！全部私の所為よ……………本当にごめんなさい……………」

「えっ……………か、母さん？……………」

「そうよ！貴女は私のもう一人の娘のフェイトよ！貴女がどう生まれたか関係無い、貴女は私の娘だから。まだ言いたい事は沢山あるけどこれだけは言わせて……………私は貴女を……………愛してる……………」

「っ！……………母さん……………母さん！うわああああああああああああああああああああああああああ……………」

やっと伝えられたプレシアの言葉に母親の胸の中で泣くフェイト。

「フェイトお〜ホンドによがったよお〜」

「ああ〜もうこんなに泣いちゃって……………」

アルフは号泣して、リニスがそれを優しく頭を撫でていた。
なのはとユーノも誤差はある物の泣いていた……

「あれ？……クロノ？」

一人を除いて……クロノはずっと後ろを向いていた……
コッソリ前に回り込むと静かに泣いていた……

「別に隠す必要無いと思うが……」

「なっ！み、見るな！それに泣いてない！」

「泣いていただろ？ほら、涙の跡」

「何っ………はっ！」

目を擦っていたが、自爆した事に気づいてこっちを睨むクロノ……

…涙眼で迫力ない。

「大体君は泣かないのか？」

「皆が泣いているから俺の分が無くなったんだ……」

「そういうものじゃないだろ！？」

「ドウドウ、それより……後はアレを何とかしないと」

俺が指す方に泣いていた全員が見る。そこにいたのは……

……

「もう終わったかしら？その三文芝居……」

服の所々焦げ落ちたクローンが起き上がっていた。

「そ、そう言えば何でプレシアさんが二人いるの！？」

「あっ！そう言えば……」

クローンを見たなのはとフェイトが思い出したように言った……

……って忘れていたのか。

「あ……俺が説明していいか？」

「え？……いいわよ？別に」

プレシアの許可も貰った……

「フェイト、よく聞いておけ。あそこにいるフェイトが今まで母親
だと思っていたのは、プレシアがもしも時の為に作ったバックアップ

プレシアが不敵な笑みを浮かべた……………

「確かに貴女は私の完璧なクローン…………… だけど本物との区別を付かせないとも思ってるのかしら？…………… 腕を御覧なさい？」

「腕？…………… 何っ！？これは！！！」

クローンの袖が焦げ落ちて無くなって露わになった腕にはバーコードの様な模様が彫られていた。

「そう…………… それで定期的にチェックするための物よ…………… ほら私には無い」

プレシアがクローンと同じ所の袖を破ると、そこには何も模様が無い腕だった。

「これでいいかしら？執務官？」

「あ、ああ……………」

「ん？クローンが考えたのか？」

クローンに耳打ちをした。

「あ、いや…………… それを考えていたら『私に任せて！』と母さんの様な笑顔で答えたから……………」

「反射的に頷いたと……………」

無言で頷くクローン……………

「まあ…………… それでどうだ？」

「ああ…………… さっきの一部始終録画したよ。これで作戦通りだな……………」

……………
「そうか…………… 後は俺の自由にしていよいよな？」

俺はゆつくとクローンの向かって歩く……………

「まだ4発しか殴って無いんだ…………… 後一発殴らないと気が済まないんだ……………」

フェイトの為でもなく世界の為でも無い…………… 俺がただそうしたいから！

「この身は魔となるモノ」

一步……………

「血は魔に体は力に、それは奇跡を知るモノ」

また一步……………

「このモノは、奇跡を掴むためにある」

一步ずつ近づく……………

「奇跡をこの手に！」

この拳を入れるまで……………

「レイ・モモ・ブラット……………アクセス Access!」
ロードイング Now Loading……………コンプリート Complete

倒れる訳にはいかない！

虹色の光に包まれ纏うは漆黒の甲冑……………そしてクローンの目の前に
立つ……………

「くっ……………この死にぞこないがあああああああああああ
ああ……………」

技術とかそんなモノいらない……………ただ、思いつき……………
「殴る……………」

予想外の出来事が連続で起きると叫ぶしか無いなbyコダイ（後書き）

メガネ「次回で、多分無印が終わり！その後は日常などggdggdや
つてA・S編に行きたいと思います！」

コダイ「ただいま」（血まみれ）

メガネ「おい！やっと架空戦闘装置から帰って来たかと思っ
たらすげえ返り血……」

コダイ「いや、コレ全部俺の血」

メガネ「それで何で平気なの！？」

コダイ「頑丈なんだよ……」

メガネ「はあ……もいいいや。ユタ様、マーボー様、感想ありが
とうございます！」

コダイ「瑠璃から貰ったマフラーは大事に使っている」

メガネ「今は血まみれでしてないけど……」

コダイ「さて……何か庭園の崩壊の原因が俺になっ
ているんだが……」

メガネ「えつと……それは……」

コダイ「O S H I O K I ショウカ……」

レイ「コダイ」まずキレイにしたほづがいいんじゃない？」

「次回もお楽しみにしてください」

なまえをよ…っってもっ呼んでるし…っロノダイ(前書き)

コダイのあの能力は前の世界のものです。

なまえをよ……ってもう呼んでるし……by「ダイ

「と言う事でアリシアを蘇生させるので全員部屋を出ろ」

「……………何が!？」「……………」

今、アリシアを蘇生させるために医務室にいる。

「息ピッタリだな。俺の……あの時クローンの雷を消した能力を使つて。アリシアを蘇生させるんだ」

「そうだ!あの能力は何なんだ!？レアスキルなのか!？」

「あゝ言つても理解できないからノーコメント」

「答えになつて無い!」

「理解できないが答えなんだけど……………」

前にもあつたよな……これ。

「私もダメかしら?」

「プレシアでもダメだ。生き返らす以外にもしれないといけない事があるからな、一々騒がれるのも面倒だ。ほら出てった出てった」
皆を外に押しやる。

「三分位で終わるからカップラーメンを作つて待つている」
そう言つて医務室の扉を閉めてロックした……………

これで能力を思いっきり使える。

「さてと……………まずは……………ポットから出して」

俺がポット軽く撫でると中にいたアリシアが医務室のベッドに横になつていた。

「次は……………フェイトの姉何だからせめて同い年で無いと……………」

俺はアリシアにシーツを被せる。

「服は……………フェイトと同じでいいか」

シーツを捲るとそこにいたのは5歳前後のアリシアではなくフェイトと同じ私服を着た同い年ぐらいのアリシアになつていた。

「よし、起きろアリシア」

「……………あれ？あなたはだあれ？」

俺が頬を軽く叩くとさっきまで寝ていたようにアリシアが生き返った。は？何をしたらって……………能力で9歳前後の肉体にして服を着させて生き返らせたただけだぞ？

「俺はトキガワコダイだ自分が誰だかわかるか？」

「アリシア・テストロツサです。よろしくおねがいます」

「分る様だな……………早速だがプレシアに会いに行くぞ」

「え！母様いるの！」

アリシアは勢いよく起き上がるが……………

「はれ？」

バランスが崩れてベッドに倒れた。

無理もない今まで死んでいたんだ、筋力が衰えている筈……………しばらくはリハビリだな。

「いきなり起きるからだろ？車椅子用意するから待っている」

「はあ〜い」

アリシアを車椅子に乗せて、皆の元に戻った……………

「終わったぞ」

「母様〜」

「……………ブツ

「……………」

俺がアリシアの車椅子を押しして戻るとクロノ、プレシア、リニス以外の奴がカップラーメンを吹き出していた・・・本当に作っていたのか。

「エツホ！ケツホ！……まさか本当に3分位で終わると思っ
ていませんでしたから……………」

リンディが咽ながら答えた……………落ち着いてからでいいのに……………

……………

「アリシアなの？」

「どうしたの？母様？」

「ア……………アリシアアアアアアア！！！」

「うわぁ！？どうしたの母様！？」

涙を流しながらアリシアを抱きしめるプレシア。

「え、え〜つと……………あつ！あなたがフェイト？」

「ふえ！？わ、私！？」

突然、呼ばれて驚くフェイト。

実は戻る時に事前に話しておいた。自分が死んだ事も、フェイトという妹が出来た事……………それ以外はプレシアから直接聞いた方がいいだろ……………

「私の妹何だよね？初めまして！私はアリシア、よろしくねフェイト！」

「ね……………姉さああああああああああん！！！」

フェイトも泣きながらアリシアに抱きついた。

「わわわっ！！」

アリシアがかなり困ってる……………放っておこう面白そうだし……………
…ってダメだよまだ残っていた。

「よし、次はプレシアだ。前へ出る」

「え？……………私？」

突然呼ばれて驚いてるプレシア……………

「そう言えばリンディ、ジュエルシードはどうするんだ？」
総ツツコミを避けきって全員が落ち着いた頃に聞いてみた。

「そうね……コダイ君のデバイスのレイ以外をこっちが回収する事に……ま、待ってください！」エイミー？」

突然エイミーが叫んだ事で全員が目がエイミーに向く。

「えつとですな……ジュエルシードの事なんですけど……」
コダイ君、ちよつと出してくれない？」

言われた通りに20個のジュエルシードを取りだした……

「……やっぱり」

コンソールを叩いていたエイミーの顔がひきつった……

「そのジュエルシード……ロストログアの反応が全く無くなってる」

「……は？」

「……あゝ詳しい説明を頼む」

「そんなの分らないよ」コダイ君が最後に持っていたんだからコダイ君知らないの？」

「知らん。レイ、何だか分かるか？」

「ふえ？……えつと……ん？何だろこれ？……」

「……シード！」

次の瞬間、ジュエルシードは俺の周りを回り始め、次々とモニターの様な物が現れた……

「これは……」

そのモニターにはアースラの内部の詳細、今この場にいる人間の個人情報など……なんかヤバそうな情報まで色々現われた。

「何かコンピュータっぽくなってる……………ああ！」

もしかしてあの計画にもっと情報が欲しいと言う願望が叶ったのか？

「ゴメン……………これも俺の所為だ」

「……………はあ……………」

俺の事を知っているアースラ組は溜息を吐いた……………

翌日、俺はユーノを肩に乗せなのはとフェイト達に会ったため海鳴公園を歩いてきた。

今日フェイト達は自分の世界……ミッドチルダに旅立つ日だ。

リンデイが言うには。プレシアは被害者で本当の黒幕がプレシア・クローンの仕業、証拠も日記やら映像など大量にあるので、有罪になる事は無いだろう。フェイトはクロノが言った通り、形だけの裁判で罪は無い様な物らしい。アリシアはリハビリのためリニスの元フェイト達と過ごすようだ。まあ家族と一緒にいるのは当たり前のことだしな……………

ジュエルシードはクローンと共に虚数空間に落ちた事になり。ジュエルシードはシードと名を変えて俺の外部ツールの様な物になった。

「え……とえ……と……………」

どうしたの？なのは？

「ふえ！？レイちゃん！？」

歩きながら指折り数えてるなのはにレイが声掛けた。

「え……とね、フェイトちゃんに会ったらまず何を話そうかなって

「……………」

「そんなにあつたら日が暮れるな……………」

「あう〜」

そうやってなのはを久しぶりに弄っていると遠くにフェイトが見えた。

「なのは、あそこにいるのフェイトだぞ?」

「…………… ホントだフェイトちゃん!!」

なのはは手を振りながらフェイトの方へ駆けだした。

「俺達は向こうに行っているか」

「そうだね」

ユーノと一緒にクロノ達の方に向かった。

「コダイ、怪我は大丈夫なのか?」

「第一声がそれか…………… まあユーノに魔法をかけて貰って最低全治一カ月だな」

あの後、家に帰るやすぐにベッドに倒れてしまった。翌朝ベッドのシートが赤くなっていて軽く引いた。実際まだ心臓無いし……………

「あ、それとクロノに頼みたいんだが…………… と言うのはできるか?」

「それなら普通にできるぞ?」

よし、これである計画を続行できる……………

「ユーノも聞いていたよな? 頼んだぞ。ユーノの力も必要だから」

「え?…………… うん分った」

ユーノも納得してくれた。計画の事を後で話して置くか……………

「コダイくん!!」

「こつちに来て〜」

なのはとフェイトに呼ばれて行ってみると二人のある変化に気付いた。

「髪を下ろしたのか？」

「えつとね、フェイトちゃんとリボンを交換したの」

「絶対また会う約束として……」

「「ね」」

「……何か急激に近くなりすぎてないか？」

「あれ？そう言えばコダイ君、リボンはどうしたの？」

「リボン？……あれ？無い……」

自分の頭を触ってもそれらしい感触は返ってこなかった。

「コダイさん……もしかしてコレの事ですか？」

後ろからリニスに差し出してきたのは焦げて血が滲んでいる白とは言えないボロボロのリボンだ。

「コレ……一体どこに」

「庭園の隅で落ちていたのを合流する時に見つけました」

「ありがとう……リニス」

「いえ、では私はこれで……」

そう言っただけでリニスは離れた……

「交換するって……こんな物貰ったって嬉しくは無いだろ……」

捨てるか……結構気に入っていたんだが……

「フェイトちゃん」

「なのは」

「「えい！」」

「あつ、おい！」

突然二人が俺のボロボロのリボンを取ると後ろに回り込み髪を触り始めた。

「なのは、フェイト一体何を……」

「「……よし！はい」」

今度は前に回って何処から取り出したのか手鏡を俺に向けた……

そこには片方を薄いピンクのリボン、もう片方を黒いリボンで結ばれた俺がいた……

「これでコダイとも」

「友達だね」

「なんか今更という気が……」

「にゃ、にゃはははは……」

「そ、そうだね……あははは……」

苦笑いしてるなのはとフェイトは俺のリボンで髪を結んでいた……

……

「コダイ〜!!」

「なっ!!」

突然後ろからアルフが泣きながら抱きついてきた……正直傷

口開いたかも。

「アンタのおかげだよ〜フェイト達が笑顔になったのは〜!!」

ギユウウウウウウウウウウ!!

あ……………死ぬ……………

「ん……………あ?」

「気が付いたかしら?」

「コダイが目を覚ました〜」

意識が戻ると目の前にプレシアとアリシアが覗き込んでいた……

……

「確か意識を失って……」

「リニスがアルフを引きはがして説教中よ」

「成程……………でこの状況は何?」

「何って……………膝枕かしら?」

そう、今俺はプレシアに膝枕されてる……………言いたい何故？

「怪我人を床に寝かすのもどうかと思つて」

「コダイの寝顔カワイイ／＼／＼」

……………顔に出ていたのか？それにしてもアリシアはのんきだな。

「コダイ……………そろそろ時間だが大丈夫か？」

「もう大丈夫だ、クロノ」

起き上がると。リニスがアルフを正座の状態でバインドを掛けて説教をしていた。

「良いですか！コダイさんはこの中で一番重症なんですよ！それを止めを刺してどうするんですか！？」

「ううゝごめんよゝゝ」

……………面白いな。

リニスの説教はこの後も数十分も続いた……………それによりなのは達にリニスを怒らせてはいけないと心に刻む事になった……………

「いいのかこんな最後で……………」

「良いだろ、湿っぽいより」

頭を押さえるクロノに軽く言つてやる。

魔法少女リリカルなのはゝある転生者の新たな世界ゝ 無印編 完

なまえをよ…ってもう呼んでるし…b yコダイ（後書き）

メガネ「終わったあああああああああああああああああああああああ
あああ！！」

コダイ「次はほのぼの日常編だ」

メガネ「A・S編ではコダイが更にパワーアップ」

コダイ「俺のある計画の全貌が明らかに」

メガネ「乞うご期待！」

レイ「かんしゃコゝナゝ！ながもゝさま、マーボーさま、ユタさま、
かんそうをありがとうございます！」

メガネ「主人公設定にも書いてあった様に、ウチの主人公が目指す
チートはネギま！のラカンの様なバグキャラです！」

コダイ「実際、アレはあり得ない…適当にやったら出来たとか……」

メガネ「後、どんな能力！？とツツコミが来ると思いますが……何
でもありな能力です！」

コダイ「リスクがあるけどな」

レイ「こたえになってないよ」

メガネ「次回は久しぶりに学校で…！？」

く次回もお楽しみにしてください

待ち望んだ日常……はい、お約束bYコタイ（前書き）

ほのぼの日常編です！

待ち望んだ日常……はい、お約束byコダイ

「あ……帰りにホームセンターでシーツを買って。ついでに調理道具もヤバい物もあったから新調して……」

あの日から数日後の久しぶりの通学路をなのはと歩いていた。

「もしかして寝てないの？」

「ん？ああ……シーツが血まみれで使い物にならないし、調理中に力が入らなくて皿も落としたり、その掃除に手間取って……」

ユーノに治療して貰ってるが、即死レベルの重傷を何度も受けているから治るのに約一カ月らしい……全身に包帯が巻かれていて、右目もまだ治って無い。

「傷を治してる筈なのに傷が増える一方だ……」

今度、男子の襲撃があったら死ぬかも……

教室に入ると、一気に静かになった……まあ仕方ないよな包帯目立つし。

「……ってアンタまた傷増えてない？」

無視して席に着くとアリサが呆れた感じで聞いてきた……

「この前はあの犬を助けようとして怪我したんだよね？」

アリサとすずかにはなのはと口裏を合わせてそう言った。

「えっとね……コダイ君その犬の飼い主さんを助けようとしてました……」

「フラグ立てたのね……………」

「おいアリサそれはどういう事だ？」

「どういう事もないわよ！アンタは美少女助けるたびに、美少女にフラグ立てているんだから少しは自重しなさい！！」

本当にフラグってなんだよ？……………旗を立てた事無いぞ？

「ちょっと待て、なのはは美少女とは言っていないぞ？」

「アンタが助ける」美少女よ！」

いや何？その極論。

「と言う事はアリサもすずかもなのははも美少女と言う事だな」

「……ふえ！？……………」

「いやそうだろ？荷物とか運んだりテスト対策とか……………それも助けたの部類だから三人は美少女と言う事だるアリサが言うには……………」

……………それに元から美少女の三人に美少女と言って何が悪い？」

「…………………………
…………………………
…………………………
…………………………」

トマトに勝てるぐらい真っ赤になってる固まる三人……………」

……………面白いからこのまま眺めているか。

授業はかなり暇だった……いや、出来ない訳ではない。面白くないんだ……………面白ければ受けてやるのに。

それで今は昼休みの屋上。

弁当は力が入らない状態で何とか作り上げた物だ。

「コダイ君、それで怪我の具合はどういう感じ？」

隣にいるすずかが首を傾げて聞いてきた。

「えっと……………まず右目が一時的に失明、全身に重度の裂傷と火傷による筋力と内臓機能低下……………完治には一カ月ぐらいだ」

いや……………」

偶然に傷口に響いて落とすだけで大きくしやがって……………」

「そうなの！我慢は体に毒なの！」

「体は頑丈だ、問題無い」

「もうその姿で頑丈と言っても説得力が……………」

ホントに大丈夫何だが……………」痛いだけで。

「……………」

……………」これは、食べないと泣きそうだな。泣いたら恭也が襲ってきそうだからな……………」

「アム……………」

三人のスプーンを順番に啜えた。

勿論……………」それは一度で終わらず……………」

「……………」あゝん／＼／＼／＼……………」

時間いっぱい続いた……………」ちなみにユーノは……………」

「キュー！キュー！」

「コラ逃げるな」

美由紀の玩具にされていた……………」

「貴様！なのはに何を「恭也……………」と、父さん……………」

「コダイ君は怪我人だ、それを木刀持って一体何をするつもりだ？」

「いや……………」その……………」

「あらあら……………」

……………」うん無視だ無視。

遙か昔に二つもあつたんだ、現代の技術で出来ないはずが無い。それに……

「その方が面白いから」

「コダイらしい理由だね……うん、確かに面白そう！」

「まずは新しい理論を200通り考えたから、それに目を通してそれからこれからの事を考えよう」

「200って……そんなの一体いつ？」

それはもう時間の合間に。

「通して見たけど……使えそうなのは10個ぐらい」

「やっぱりな、よし早速ため「ダメだよ」何故？」

「試すのは怪我が治ってから」

……こっそりため「ダメだから」……心を読むな。

「今はこの資料で何処までいけるか調べる事」

「……分った」

よし……始めるか。

「あれ……………もう朝」

作業に没頭して気がつかなかった……………

「コダイ、学校は？」

「サボる……………がその前に……………」

ご飯作るっ……………

待ち望んだ日常……はい、お約束byコダイ（後書き）

メガネ「日常編！それでコダイの魔法デビュー間近！」

コダイ「そんでPV300000、ユニーク200000突破だ」

レイ「さっそくかんしゃコナ、ユタさま、ながもくさま、マーボーさまかんそうありがとございます！」

メガネ「今回は無印終了記念として……コダイ！コレを着ろ！」

コダイ「ん？分った」

（着替え中）

メガネ「って事で突破記念第一弾！」

コダイ「ん？」（ミニスカサントでツインテール）

メガネ「このコダイのミニスカサントでツインテールの写真を欲しい人に配布だあっ！！」

レイ「コダイカワイイ／／／／」

コダイ「そうか？」

メガネ「記念はまだ続きます！」

（次回もお楽しみにしてください）

創作はかなり……………いやとんでもなく前途多難だな……………byコダイ(前書き)

前回から一ヶ月後です……………スンマセン飛び過ぎて。

創作はかなり……………いやとんでもなく前途多難だな……………byコダイ

「ユーノ、準備は？」

「……………OK！何時でもいいよ」

家のある一室にあるのは転送ポート。

アレから一カ月、傷はもう全快してユーノと一緒にミッドチルダに行く事になった。

あ、勿論リンディから許可を貰ってる。

アレからフェイト達はどうしているか気になるけど……………

「これで本作業に取り掛かれる」

これまで机上の理論ばかりだから……………

「あんまり無茶しないでよ……………」

「分ってる……………行くぞ」

ミッドチルダに……………

「クロノ、早速だが訓練場を貸してくれ」

「本当に早速だなお前は！！」

ミッドに着いてすぐ待ち合わせ場所にいるクロノに出会い頭にそう言った。

「……………まあ、その事はちゃんと僕が取って置いた。付いて来てくれ」

大人しくクロノに付いて行く……………

「クロノ……気になる事が一つ……」

「何だ？」

「ここ……海鳴と変わらないだろ」

付いて行く内に気づいた事……ミッドの風景が地球とあんまり変わって無いと言う事……

「それはだな、コダイやなのは様な異世界からのミッドに移住した時に持ってきた物だと考えられてる、随分昔の話だからよく分らないけど……」

「成程……」

だから緑茶があったのか……

「ユーノ後で寄って……ってそうだ、俺ここの通貨無かった」

いくらなんでも日本円は使えないよな……

「ああ、その事なら。これを君にと母さんとプレシアさんから」

クロノから渡されたのは一つの封筒……結構厚い。

「何だろう？」

「案外、あの事件のお礼だったりして……」

ユーノと一緒に封を切って中身を見ると……

「あ……」

「コダイ……ここはハズそうよ……」

中身は『これは少しばかりのお礼です』と書かれた手紙と……かなり多い紙幣。

「それと、此処の通貨は日本と変わらないぞ」

「ありがとう……」

すると……約5000万？

「高すぎないか？」

「管理局の収入を舐めるなよ？これ位僕でも払ってもお釣りがくる」

「管理局スゴ……」

ユーノと呆れるしかなかった……

「数日後」

「……………」

「返事がないただの屍の「生きてるよ……………」「かろうじて突っ込める位にな……………」」

アレから数日……………進行は一切無く。爆発からの回避が上手くなってくるばかり……………」

今は食堂で休憩と軽食を取っている。

「おっはよ……………って、うわ……………此処だけ空気違う」

「隣大丈夫かしら？……………だ、大丈夫？」

資料から目を離すとエイミィとリンデイがトレーを持っていた。

「問題無い……………」

特に迷惑じゃないしな……………」

「どうも……………って何この難しい暗号……………」

エイミィが近くにある新魔法体系の理論が書いてある紙に気づいた。

「コダイ君、聞いて欲しい事があるのよ。プレシアさんの事で」

リンデイが真剣な声で聞いてきたので、姿勢を正してリンデイの顔を見た。

「プレシア……………と言う事は、プレシアクローン事件の」

「ええ、あの後その事件をP・C事件と呼ばれまして。コダイ君が見つけた日記のお陰である実験の捜査のしなおしが行われて、プレ

創作はかなり……………いやとんでもなく前途多難だな……………byコダイ（後書き）

メガネ「やべえ…プレシアさんを壊し過ぎた」

コダイ「良いんじゃないか？面白いし」

メガネ「いいのかよ」

レイ「かんしゃこ〜な〜。マーボーさま、ユタさま、Little
さま、かんそうありがとうございます！」

メガネ「マーボー様からは劉ちゃんの『こつそり一人でコスプレ会』
（男用サンタverとトナカイver）。ユタ様からは優の白コス
写真を貰いました！」

コダイ「無印終了記念第二段は……………俺のバリアジャケットのスイツ
を……………欲しい人に配布だ。勿論サイズは合わせる」

メガネ「レイの部分はデバイスを入れる事が出来ます！」

レイ「かつこいいよ〜」

コダイ「次回は意外な人物が？……………」

〜次回もお楽しみにしてください〜

これは流石に予想外を超えている……byコダイ（前書き）

コダイにとんでも無い協力者が出来ます……

これは流石に予想外を超えている…… byコダイ

「これで…これで人類は……フフフフ……アハハハハハハハ」何の研究をしている」「はっ！グハツ！！」

取り敢えず始めから暴走しているプレシアに踵落として目を覚まさせる。

「ハアハア……資料を目と通していたらつい……」

「『つい』で人類巻き込むなよ。ここが資料室だったらイタイ人扱いだぞ？」

前回から2週間ちよつと。相変わらず進まない……いや、爆発は無くなつたが、それでも維持は出来ない。

ここが資料室で無いのは。新魔法体系の事を知ったクロノとリンデイが『研究するならここの方が良い』と一室スペースを貸してくれた。

「はあ……資料が少ない、そう言っても一般に公開されてる資料はこれで全部か」

「この際管理局に入るのはどうかしら？ 囑託魔導師でもかなり強い権限を持っているわよ？」

「面倒くさいしそんなのに時間を割いてる暇は無い、故に断る」後、自分よりクズの下に着きたくないし。

「何としても一段階に到達しないと……」

実はなのは達には『何週間か用事で家を空ける』と言っておいたので大丈夫だが、流石に開けすぎは良く無いなと思ひ今月中に一回戻るつもりだ。

「囑託魔導師か……フェイトも受ける筈だよな？」

「そうよ、囑託魔導師になれば異世界の行動がかなり自由になれるから」

そうなれば、なのは達とも会えるしな。

「こうなったら局員脅してでも……」

俺は『DEATH NOTE』と書かれた手帳を開く……えっと近くの手ごろな駒は……

「やめなさい、貴方が言うと本気にしか聞こえない」

……本気なただけ。

「はぁ……………それにしてもあの子遅いわね」

「ユーノか……………何をしているんだ？」

ユーノは忘れ物をしたと言ってから戻って無い……………

「一応探してくるか……………」

迷子になって無いといいけど。

そう思いながら部屋を出ようと……………

「ゴメン！探すの間取った！」

扉に手を掛ける直前にユーノが戻って来た、そして……………

「あら〜？この子がそうなの？」

ユーノの後ろにいたのは……………

「……………誰だ？」

「私は唯のおばあちゃんよ」

自称おばあちゃんがいた……………

「ユーノ君が探し物をしていて私が手伝ったのよ。それでね……………」

……………初老の女は終始、微笑みながらこれまでの経緯を話していた……………

……………って。

「おい、ユーノ！何で話したんだよ」

「えっと……………あのおばあちゃんのペースに狂わされてっ……………」

い……………」
話してしまったと。

「それで……………」その新魔法体系の名前はな〜に？」

「確か……………」

名前は……………」あ

「決めてない……………」

「「そう言えば……………」」

作業の事で忘れていたが名前が無いと言わずらいしな、新魔法体系は……………」

「だったら今決めたらどう？」

自称おばあちゃんの言う通りだな。

でも名前か……………」どうせなら地球の言葉から取った方が良いな、魔

導師……………」魔法使い……………」魔女……………」魔女ベアトリーチエ……………」よし。

「魔女ベアトリーチエから取って『ベアトリス式』だ」

「ベアトリス式か……………」良い名前だね」

「センスはいいわね……………」魔女から取る所が」

「ベアトリス式ね〜カッコいいわ〜」

評価はいいみたいだ……………」

「で、そのベアトリス式は上手くいつてるの〜？」

「いや……………」情報が少ない。一般公開のだけでは少々難しい所だ」
バレてしまったなら隠す必要はないだろ……………」

「そうなの〜？一般公開の出なければ成功するの〜？」

「可能性は上がるだろう……………」

「ん〜ちよつと待ってね〜」

自称おばあちゃんは紙に何やら書いてそれを封筒にしまいこつちに渡した。

「これで、見える筈よ〜」

「こんなのですか？」

「勿論、これでも偉いのよ〜」

本当なのか？……………」

それから30分ぐらい世間話をして、自称おばあちゃんは去ってしまった。

「どどどどどどどどどぞご自由にご覧くださいー！」

あの封筒を資料室の管理人に見せたら血相変えて許可して貰った…

……

「本当に見れたよ……………」

「あのおばあちゃん一体……………」

「閲覧禁止の物が見れるのはいいけどこれは……………」

ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！

「……………でかい……………」

資料の量が嘗て無いほど多い。本局もアースラより多かったがこれ
は多すぎる。

「これで成功しなかったら洒落にならないぞ……………」

俺の呟きに、ユーノとプレシアが頷いた……………

「レイ、アクセス！」

ナウローディング・・・コンプリート

アレから更に2週間が過ぎた。

再び訓練場での実践。今回はユーノ、プレシアの他にクロノ、リン
デイ、エイミィ・・・さらにはあの自称おばあちゃんもいた。

「レイ……………行くぞ」

うん！

意識を集中し、六角形の魔法陣を展開する、それと同時に手の中に
虹色のスフィアが形成された。

ここまではいつも通り……………後は維持するだけ……………

一分……………

二分……………

五分……………

三提督の推薦じゃあ許可が下りない訳ないな……………
「でも、特許があれば無暗に悪用され……………」
プレシアが話している途中で倒れた……………
「大丈夫！？プレシアさ……………」
駆け寄ろうとしたユーノも途中で……………
「二人ともどうした……………」
あれ？……………意識が……………

倒れた原因は寝不足による過労だった……………

これは流石に予想外を超えている……byコダイ（後書き）

コダイ「オイ！作者あー！！」

メガネ「おい待て！とりあえずその滅刃シリーズしまえって！」

コダイ「何だよあのぶっ飛んだ展開は！三提督とかやりすぎだろ！？」

メガネ「いや……面白そうだからつい……」

コダイ「……もういい早く進めよう」

レイ「ユタさま、マーボーさま、かんそうをありがとうございます！」

メガネ「やっぱりプレシアさんはこんな感じだよね！」

コダイ「聞くな！」

レイ「これでわたしもまほうデビューー！！」

コダイ「嬉しそうだな」

レイ「うんー！！」

メガネ「A's開始前にはベアトリス式について書くと思います！」

〜次回もお楽しみにしてください〜

そう言えば無印終わる頃って…六月位だったけ？b y n o d a i (前書き)

今回は魔法を休んでほのぼのギャグかな？

そう言えば無印終わる頃って…六月位だっけ？byコダイ

俺の魔法『ベアトリス式』が完成した後、一回地球に戻る事になり
そのまま夏休みを過ごした……………

朝起きて魔法の研究 昼からなのは達と遊ぶ 深夜にミッドで研究
&実践。

これで一日を過ごしていた……………正直殆ど寝てない。

それは置いといて。一応夏らしいイベントもあったよ？

夏祭りとか花火とか海とか旅行とか、殆どあの温泉の時と同じメン
バーで行ってたし・・・そして一番忘れてはいけない物がある…………
それは……………

「……………」
「……………」
「……………」

なのは。アリサ、すずかがにらめっこしている白いノート……………夏休
みの宿題だ。

「いや、忘れてはいけないだろ？」

「何でコダイ君はそんなに余裕なの!？」

「初日で全部終わらせた」

「はあ!?!この大量の宿題を!?!」

「ああ、ほら」

「うわ……………本当に出来てる……………」

夏休みの最終日の朝、アリサ達の提案で俺の家でジュースとお菓子
で夏休みを締めくくるとか言いだした、何で俺の部屋？

まあ…何でこうなってかは……………回想どうぞ

〈回想〉

「ぷはあく！今年も有意義な夏休みだったわ！」

アリサ……………ジュースを一気飲みって、それ完璧おっさんだな。

「そうだね、夏祭りに行ったり」

「海にも行ったの」

「……………海でなのはが何も無い所で転んだり、アリサの水着が波にさらわれたり、さすががビーチバレーで顔面ブロックしたり…後」

「……………何でわざわざ恥ずかしいのを選ぶの！？／＼／＼」

いや、面白いし……………

「そういえばコダイ君がいない間になのはちゃんの所にビデオメールが届いてね……………」

「もしかしてフェイトとアリシアか？」

「え？知ってたの？」

プレシアから直接聞いた。

「だって、なのはと同じ頃に知り会ったから…で二人がどうした？」

「うん、なのはちゃんに紹介してもらって友達になったんだよ」

さすがが嬉しそうに笑う。

「そうか…で、これは少し前にも言ったが……………」

これは何回か言った事……………

「宿題は終わったのか？」

ピシッ！

何時も遊んでばかりだからさ……………気になって……………あ、固まった。

「……………忘れてたあああああああああ…！！」「……………」

馬鹿だ……………こいつら馬鹿だ。

〈回想終了〉

その後三人は急いで家に帰り宿題を持って戻って来た……………
それでかなり真っ白だったから冒頭に悲鳴が響いたと言う事。
「嘆いてないで早く始めろ、馬鹿共」

「「「鬼!」」」

「やって無い貴様らが悪い、分らない所があれば教えてやる」

「「「天使!」」」

どっちだよ……………

↓数時間後↓

「なんでこんなにおおいの」

「うわ〜ん!終わらないよ」

「ブツブツブツブツ……………」

三人が良い感じに壊れてるな……………

「……………少し休憩するか?」

ガバツ!! x 3

全員すごい勢いでこつちを見た……………

「軽食とコーヒー持ってくるから休憩してろ」

「「「はあ〜〜」」」

今度は蕩けた……………面白いな今日の三人。

「軽食は……………作り置きしたパンがあるしサンドウィッチするか

……………」

けど、その前に連絡っと……………」

「ハイ コダイ君？どうしたの？」

「桃子……………そっちの娘が宿題やって無いとかぬかしたから監禁してもいいか？」

「OK」

「分った、用件はそれだけだ」

「じゃあね〜」

よし、次はアリサとすずかの所にも……………」

〈更に数時間後〉

軽食を挟んで再び宿題に取りかかる三人。一旦脳がリセットされてさつきよりは進んでるが、間に合うかは分らない。

ちゃんと分らない所は教えてるぞ？頭は良い方だしなああの三人。

「そろそろ夕食の準備でもしておくか」

まだ明るいから時計を見ないと忘れる……………」

「あ、もうこんな時間なの」

「結局終わらなかつたね……………」

「後は各自家で取り組みま」何言ってるんだ？「へ？」

三人が帰りそうな所を止める。

「終わるまで帰すつもりは無いぞ？」

「「「ええっ！！」「」」

「勿論、親に監禁許可は貰った。だから座って早く終わらせる」

「「「鬼ii！！」「」」

「ここまでしてやるんだ。今日中に終わらなかつたらO S H I

O K Iだからな」

「「「分かりました！全力で終わらせます！！」「」」

三人は物凄いスピードで宿題を進める。

俺も夕食の準備でもするか……………

宿題が終わったのは翌日の3時だった……

「と言う事でO S H I O K Iな。後、これが終わったら保護者側の説教が待ってるから」

「「「にゃああああああああああああああああああああああああああああああ！！！！」」」

あゝなんか久々のO S H I O K Iだからやり過ぎるかも……
……まあ、いいか。

そう言えば無印終わる頃って…六月位だったけ？b y コダイ（後書き）

メガネ「良くねーよ！」

コダイ「え？」

メガネ「いや言ってみただけ……………レイ、進めて」

レイ「は〜い！マーボーさま、ユタさま、リュウガさま、かんそうをありがとうございます！」

メガネ「今年最後の更新かもしれないな」

コダイ「色々と用事あるしな……………」

レイ「みなさん、よいおとしを〜」

〜次回もお楽しみにしてください〜

発明の種は意外な所にあるb yコダイ(前書き)

はやて初登場です。

発明の種は意外な所にあるbyコダイ

「……………思い浮かばない」

いきなり何だつて？ベアトリス式の魔法に付いてだよ。

もう三個位出来てるが、まだ完成と言う訳ではない…だから材料を集めるために図書館でファンタジー関係の本を読み漁っていたが収穫無し……………

いや、三個でも十分通用する。以前腕試しに囑託魔導師の試験で使ったら、格上でも圧勝出来て。囑託魔導師になった位だ……………

え？そんな重要な事を軽く言うな？……………今重要なのはベアトリス式の事だ。

「これでファンタジー系は全滅。神話関係で探してみるか……………」

まずはこの本を元に戻してから……………ん？

「ん〜も、もうチヨイ……………」

車椅子に乗った少女が本を取ろうと必死で手を伸ばしていた……………

「も、もうチヨイヤのに……………」

微妙に届かない位置にあつて手を伸ばしてもギリギリ届かない様だ。

「こつなつたら関西人のど根性見せたるで〜！」

いや、関西関係ないから……………それでも届かない。

「う〜ん！」

……………十分面白かつたし助けるか。

「これか？」

俺は少女の取ろうとしていた本を取って渡す。

「あ、どうもすみま……………わあ〜／／／／／／／／」

あれ？この反応前にも無かつた？

「ウチ、八神はやてって言うんや。よろしくねコダイ君」
いくら待っても戻ってこないの、猫だまして起こして、お互いに自己紹介をした。

「コダイ君は何でここに？今日は平日やろ？」

「サボった」

正直、学校面倒臭い。

「あかんで、ちゃんと勉強しないと」

「問題ない、それ位の学力はもう身に着いた」

教科書を読めば全部分るし……え？分らない？

「凄いな、天才やな」

「そうでもない、俺でも分らない事がある。俺は少なくとも周りが分らないのを少し分るだけだ……」

実際、勉強は物心付く頃からやったから必要無い、別に勉強が嫌いではない。分らないのが分っていく過程が面白い。

「な、何か難しい話しやな」

あ、目が回ってる………

それから色々話したんだが、俺が男だつて言つたら『詐欺や、こんな美人顔、訴えられるレベルやで…』とか呟いていた……

「そう言えばコダイ君……」

「ん？」

「何でウチの事聞かんの？」

はやてが少し暗い顔で言つた。

「ほら、平日なのに学校も行ってへん事も。車椅子の事とか一切触れてへんやろ？」

「聞いて欲しかったのか？」

「いや、そうゆうわけじゃなくて……」

「別に……誰だつてそう言うの聞かれるの嫌だろ？」

俺だつて過去の話とか嫌いだし。

「はやてが言つてくれるまで待つ、そう思ったから触れなかつただけだ」

過去話は自分のだろうが相手のだろうか嫌いだ。今までの過去があるから今の自分がある、過去の自分を後悔したり悔んだりは一切しない。しても何が変わるのか？つて話だ。

「本当はそういう過去の話とかが大嫌いだから聞きたくないだけだしな」

「コダイ君……」

はやては一瞬キョトンとしていたがその後嬉しそうにほほ笑んだ。

「ありがとう／＼／＼」

頬を赤く染めて……何故？

「何も思いつかない……………」

アレから用事があると言ってはやてと分れて。直ぐミッドに行き、魔法の開発を再開した。

「大丈夫？あんまり根詰めるとクロノにまた説教させるよ？」

「コーノからコーヒーを受け取った……………」

「ん〜問題ない。今日まで大体一カ月だ」

「いい加減寝ようよ！プレシアさんも昨日やつと寝たんだよ!？」

「分った……………後一つ魔法考えてから」

「それが出来ないから地球で情報探して来たんでしょ!？」

まあそうだけど……………収穫？無かったよ。あつたら魔法が出来てる……………

……………

「おっつかれー！差し入れと共にエイミイさん参上！」

正直、半殺しにしたいぐらいのテンションでやってきた……………

「相変わらず無駄に元気だな……………差し入れ」

「ええ!？私は!？」

どうでもいい……………とりあえず休憩するか。

エイミイが持ってきたのはアイスだ。

「美味しい……………」

「ホントだ、甘さが上品だね」

「でしょ！なんせこれはミッドで評判のアイス専門店のアイス何だから！モグモグ」

自慢げに言つて、そのアイスを食べるエイミー……………
「あ、知つてる。何時もお客さんでいっぱいになつてる所でしょ？」
「うんうん！」
ユーノの言葉にエイミー頷く。
「しかしそこまでの人気なら良く買えたな」
「ふふ〜ん実は朝の内に予約してさつき取つて来たのだ〜」
成程、予約か……………ん？……………待てよ。
魔法でも予約とかそんなのが出来れば……………あ、いいかも。
もうベアトリス式の基礎は出来てるから魔法を作るのは簡単だ。今夜にでも取りかかろう……………

〜その夜〜

「よし……………完成」
完成した魔法は使い勝手が難しいが使えれば中々手ごわい魔法だ……………
「この魔法を利用すれば戦略に幅が広がる……………」
良く考えれば俺の魔法トリッキー過ぎるぞ……………よし、俺の魔法のコンセプトはこれで行こう。
「となると、拘束系の魔法も一つ欲しいな」
……………よし続けるか……………

その数日後に拘束魔法は完成した………不眠不休で。

発明の種は意外な所にあるbyコダイ（後書き）

コダイ「いい加減魔法を使わせろ」

メガネ「A・Sの初戦闘で使わせてやるよ……多分」

コダイ「おい……………」

メガネ「さつて感謝コーナーつと。ながも様、ユタ様、龍賀様、Little様、桜川リマ様、感想をありがとうございます！」

レイ「どんどんふえてきてるね」

メガネ「そうだね」

コダイ「次回からA・S編だっけ？」

メガネ「そう！A・S編ではかなりオリジナル展開があります！」

レイ「がんばるよ」

次回もお楽しみにしてください

中二的展開で始まるA・S編byコダイ(前書き)

A・S編ではコダイの前の世界に付いて出てきます…
そんで無印同様死に掛けます。

中二的展開で始まるA・S編b yコダイ

ああ……………最悪だ

周りには人だった肉塊が転がっている……………

斬り殺された死体、刺し殺された死体、焼き殺された死体……………様々な殺害方法で死んでいく人間……………

え？何で現代進行形かって？……………

……………目の前で人が殺されてるのを見ているからだよ。

次々に出来る死体の山、そこには男も女も関係ない……………死に掛けの老人や生まれたばかりの乳児も関係ない……………

立ち向かう者……………逃げる物……………それさえも関係無く死

んでいく

ん？何でそんな冷静でいられるのか？.....

.....簡単だよ

俺が.....殺してるから

ゴシヤッ！！！

「っ……………」

意識の覚醒と共に拳を自分の顔面に打ち込んだ……………」

「最悪だ……………自分の昔の夢とか最悪だ……………本当に最悪だ……………」

……………」

こういう時はユーノを撫でて癒されよう……………ってこないだからフ
エイトの証人のためミッドに行ったんだ……………」

まあその事で研究は一時中断している。ちなみに、ベアトリス式は
フェイトやアリシア、アルフ、リニス知らない。

「……………今は2時か……………」

ストレス解消の為に凝った物でも作るか……………

それからはいつもと変わらなかった。

勉強を聞き流して、屋上で男子から逃げるふりして特に変わった事は無かった。

放課後、すぐかは用事で図書館に行つてその他はなのはとアリサはそのまま帰宅。

俺は今朝凝った物を作つて食料が危ないので補充した……………筈だったが買い忘れがあり、家を出る時はもう夜になっていた。

「絶対あの夢の所為だ……………」
こうなつたら近くにいたチンピラに喧嘩売つて半殺しに……………ん？

「人の気配が……………ない」
冬の夜と言つても寝るには早すぎる……………それにこれは……………

けっかいだね……………
レイの言うとおりだ……………一体誰が……………

「コダイ！じょうくつからまりよくはんのう！
「はあ……………」

イラついてる時は碌な事が起きない……………
上から来る襲撃を後ろに跳んでかわす。

ドコオオオオオオオオオオオンッ！！

俺のいた所は轟音と共に煙が舞い上がった。

「かわしたか……………」

煙の中から声が聞こえる……………女の様だな。

「この結界は貴様がやったのか」

「ああ……………」

煙が晴れる……………

「我はヴォルケンリッターが将シグナムそして我が剣レヴァンティ

ン……………恨みは無いが貴様の魔力を貰うぞ……………」

ピンクの髪をポニーテールにしている女……………シグナムか？…

……………そいつが俺に剣型のデバイス…レヴァンティン突き付けてい

た。

ヴォルケンリッター……………雲の騎士？

「断る」

面倒くさいし……………

「なら……………力尽くで奪うまでだ」

実力行使かよ……………

コダイ……………あのひと

レイ？

……………なん

であんなにオツパイがおおきいの！？

は？……………

「なっ！！／／／／／／」

レイの言葉にシグナムが腕で胸を隠した……………

ぎゆうにゆう！？ぎゆうにゆうなの！？

「それ……………大豆じゃなかった？」

そうなんだ……………あっ！！このまえすきなひとに、もまれれば

おおきくなるってきいた！

「ん？……つまりシグナムは彼氏持ち？」

うん！

まあ美人だしな……

「で、どうなのシグナム？」

「私に聞くな！騎士が恋などに現を抜かすか！／＼／＼」
もったいな〜い！

「美人なのにな……」

「貴様が言うつと皮肉にしか聞こえないぞ！／＼／＼」

「え？俺男だし……」

「何い！？男だと！？」

シグナムは固まらず即座に反応した……流石騎士。

「何だ……この敗北感は……男？……ありえない……」

……

シグナムが現実逃避している……え？何コイツ……
面白い。

「まあ落ち着け……シグたん」

ここぞとばかりに弄る。

「そんなふ抜けた名で呼ぶな！！／＼／＼／＼」

生真面目だから凄じ弄りがいのある奴だ……

「最後に『ミ』を入れた方が良かったか？」

「なお悪い！クツ……このままじゃ埒が明かない、その口を力尽
くで縫いつける！」

シグナムがレヴァンティンを構え突っ込んできた……

「このパターン前にもあったよな」
あつたね」

中二的展開で始まるA・S編byコダイ(後書き)

メガネ「A・S編突入！そしてシグたんミ 登場！」

コダイ「一体その名前に何人反応するのか……それより冒頭のアレは何だ…中二病全開だな……」

メガネ「お前は突き抜けてるから問題ない！」

コダイ「(こいつ何時か締める)」

メガネ「感謝コーナー！龍賀様ありがとうございます！」

コダイ「A・S編は少しシリアス多めだ」

レイ「みなさまのいけんやかんそうをイロイロまっています！」

次回もお楽しみにしてください

いせれ...なのはのあねはれ...ありえないよね？ロマンタイ(前書き)

ベアトリス式での初戦闘です

いやさ…なのはのあれはさ…ありえないよね？ロノロダイ

前回のあらすじ……………

シグたんミ が「だからその名はやめる！」心読むなよ……………

「 ハッ！！！」

シグナムの突進と同時に振り下ろされる剣をバックステップでかわす……………

「まだだっ！！！」

息も付かせぬ連続の斬撃を慌てずかわす……………

……………早さも重さも悪く無い……………手数も多い……………けど……………

「おいしいな……………」

そう聞こえない様に呟いて。一旦下がった反動を利用した蹴りを放つが

「甘い！」

レヴァンティンで受け止められる……………

「少しはやる様だな……………なら！」

そう言うとシグナムは上空へ飛んだ。

レヴァンティンの刀身の一部がまたスライドし、空葉莖を吐き捨てた……これって……カートリッジシステムか。

「だが、ベルカの騎士に一对一で……」

言葉の途中でシグナムが離れた。

「スマナイ……急用が出来た。決着はいずれ付けよう」

シグナムの足元に三角形の魔法陣が展開して……転移した。

「……はあ？」

挑発するだけして途中退場か……

「まあいいか……」

……あ

「魔力を貰うって事は……なのにも来ている可能性が高いな……急ぐか。レイ！」

シードてんかい！

レイの中から20個の菱形の青い宝石が出て俺の周囲を飛び回る。

これがジュエルシードが生まれ変わった情報干渉機能『シード』。

これは対象を情報にして干渉する能力……

対象が正確にイメージ出来ない和使用できない……たとえば顔と

名前が一致しないとそれ以外の情報まで干渉してしまうという欠点

がある。

逆に一致していれば対象の深い所の情報まで引き出す事が出来る……

……便利なんだかそうで無いのか微妙な機能だ。

「検索ワード『高町なのは 現在地』」

シードけんさく……いつけんみつけた！あと、フェイトも！……

……あっ！？さっきのひともいる！

「他には？」

ん……ユーノとアルフがいはい……ふたり？さんにんかな

……？

「分った……」

フェイトも着てると言う事は、ユーノもアルフもいるのか……

……マズイな……今のフェイトではシグナムには勝てない……急

ぐか。

「レイ、最大出力だ」

うん！バーニア

さて……………これを試すいい機会だ。

「フェイトは……………見つけた……………ああやっぱり……………」

俺が見つけた時にはフェイトとシグナムが対峙している。けどフェイトのバルディッシュは大破している……………

「レイ、最大出力……………急降下だ！」

バーニア！

バーニアを一気に噴出して、その勢いでシグナムを蹴り飛ばす。

「久しぶり！」

「何っ！？グッ……………アアアアアアアアアア！！！」

あ……………勢い付け過ぎた？かなり煙上がって見えないけど……………まあいいか。

「コダイー？」

「ん？フェイト久しぶり」

「久しぶり……………じゃなくてどうやってここに！？結界がはってるのに……………」

「結界？ああ最初から巻き込まれたから」

対結界破壊用の魔法でも考えておくか……………

「ぐっ……………貴様」

あっ戻ってきた。やっぱり効いてないか……………

「コダイ…………あのデバイス」

「分ってる……………フェイト下がってるここは俺がやる」

「え！？一人じゃ危険だよ！私も「その壊れたデバイスでか？」それは……………」

「それもあるけど、本当はアレを試したいだけ何だけどね……………」

「と言う訳で選手交代だ」

何か言ってるフェイトを無視してシグナムの方に向く。

「貴様……………先ほども言い掛けたがベルカの騎士に一对一で挑むつもりか？」

「ん？それなら余裕で倒せるから却下。えっと……………あっちにいる赤い子供と青い狼と三人まとめてこい」

「…………何だと!?!」

俺が指名した二人と一匹が凄いい睨んでくる……………全然怖くないけど。

「と言う事だ、ユーノとアルフはフェイトを連れてなのはの所に行ってる……………アレを使う」

「アレ?……………アレってなんだい?……………まあアンタの事だから心配ないと思うけど」

「多人数相手は初めてじゃない?頑張ってね!」

アルフは首を傾げながら、ユーノは応援しながらなのはの元に向かった。フェイトも二人の後を追った。

……………さて。

俺の目の前には、かなり殺気を込めてこっちを睨んでる大人一人と子供一人と狼一匹……………

「ベルカの騎士三人相手に一人で挑むとかいい度胸じゃねーか……………」

…」

子供がハンマー型のデバイスを構えた。

「その傲慢が死を招くぞ！」

狼が吠える……………」

「じゃあ……………俺からも一つ」

足元に六角形の魔法陣を展開する……………」

「ベアトリスの魔導師に多勢も無勢も関係無い……………」

「舐めんなあああああああ！！！！！！」

子供が突っ込んでくる。

「まずは様子見だ」

スローナイフ

両手からナイフ状の魔力刃が四本現れて、それを指に挟むように両手に二本ずつ持つ。その内の二本を子供に向かって投げる。

「へっ！そんなモンぶっ壊して「じゃあその前に壊す」ッ！！」
バースト

レイの追加詠唱と共に投げた魔力刃は……………爆発した。

ドガアアアアアアアン！！

「ウワアッ！！」

「『ヴィータ！』」

仲間の二人が叫ぶ……ヴィータって言うのか……ついでにそっちの狼の名前も教え「このやるおおおおお……」あ、障壁で防がれた……

残った魔力刃を両手一本ずつに持ち替え、ヴィータの振り下ろしたハンマーを片手で防ぐ。

「大した威力だけどアタシには効かねーよ！」

まあ…試作段階だからね。

「じゃあ、ホイ」

残った一本の魔力刃をヴィータの目の前に放り投げる。

「ヤバツ！爆発」するわけ無いだろ「グハアツ！！」

避けるために体勢を崩した隙についてヴィータを蹴り飛ばす。

「あ……やり過ぎた？」

最近加減が聞かなくて……ん？

キイイーン！！

「何！？」

後ろからシグナムの奇襲攻撃は背後に交互に交差するように現れた魔力刃に防がれた。

「実はまだ試作段階でね…スローナイフはまだ射出出来ないんだ、だから投げて飛ばすけど設置の範囲は死角は無いぞ………ほら」

スローナイフ

シグナムの背後にも三本のスローナイフが設置された。

バースト

「しまっ………」

ドガガガガアアアアアアアアン！！

スローナイフは連鎖する様に爆発した、持っていたのも放り込んだ

……相手から遠ければ遠いほど逃げ場が無くなる。

あ……………コダイ、もうひとりいるよ

もう一人……………つまり仲間か、恐らく参謀的な役割か……………

「何処にいる？」

とおくにあるむかいのビル

「じゃあ……………砲撃だな」

体を半身にして右腕を引く……………空手の正拳突きに近い構え、砲撃に放つ魔力を込める。

「させるか！」

シュトルムハインデ

Sturmwind

ガンブレイズの弾幕から抜けたシグナムが衝撃波を放つ……………これ、撃つたら当たるな……………よし。

「レイ……………」

デイレイスペル

右手にあった砲撃のための魔力は消え、代わりに右腕に環状魔法陣が現れた。

「まずは……………動きを止めるか」

左手からガンブレイズと同じ大きさの魔力弾を放つ。

「同じ手は二度通用しない！」

「ぶっ壊す！」

ガンブレイズを警戒して突っ込んでくる三人……………けどそれ……………

…ガンブレイズではない……………

ウェブバインド

魔力弾はシグナム達の目の前で網状に展開して三人をまとめて拘束した。

「これは……………バインド!？」

「くっそ〜何処までふざけてんだ！」

さて……………三人がもがいている隙に……………

「デイレイスペル・アウト」

右腕の環状魔法陣が消えて、その直後に右拳に魔力が込められた……………

……そう、さつき撃ち損ねた魔力だ……

「レイ……」

バニシング……バスター……!

オォォォォォォォォォォォォォォォォォ
オォォォォォォォォォォォォォォォォ

右拳を突き出すと同時に放たれたのは螺旋を描く虹色の砲撃、それは一直線に進む……だが

「ヤバ……」

これも試作段階……実はコレまだちゃんと撃つた事ない、撃てたとし
ても途中で体勢が崩れて……ほら、狙いがずれた。

「コレ……どうしよう」

かいらりょうする？

「これだけでもう20回以上改良したんだけど……」

初めの頃は右腕のありとあらゆる骨があり得ない方向に折れ曲がる
と言う衝撃映像が起こったからな。

ズガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア

ふと後ろを見ると、桃色の光の柱が昇った……アレッ。

スターライトブレイカーだよな……

「半年前より凶悪になってないか？」

近くにいただけで蒸発しそうだな……あ、結界が壊れた。

これ……なのはだいじょうぶかな……

「なのはよりコレを放つレイジングハートが心配なんだが……」
アレで壊れてないよな？

ん……あっ！コダイ！あのさんにん！

ああ……そう言えば拘束したままだった……ってあ……

「いない…………… バインドブレイクされたか……………」
まあ三人がかりでバインドブレイクしたらな…………… 強度を改良する必要があるな……………」

「この事は後にして…………… なのはの所に向かうか」
そうだね

俺が皆の元に着くとそこにはポロポロのレイジングハートを杖にして立ってるのはが……………」

「さっきのか！さっきの砲撃でガタが来たのか！？」

「じゃあ！違うの！これは襲われた時に壊れたの！」

「成程…………… 正当防衛の砲撃でか……………」

「じゃああああああああああ！違うってば〜！」

いやさ…なのはのあれはさ……ありえないよね？b yコダイ（後書き）

メガネ「ベアトリス式での初戦闘！」

コダイ「やっと使えた…」

レイ「まほうデビュ〜！！やったあ〜！！」

コダイ「上機嫌だな…」

レイ「えへへ〜」

メガネ「ちなみになのはは蒐集されてません！コダイが砲撃をブチかましたから」

コダイ「おいどうするんだよ…」

メガネ「大丈夫！その辺はしっかり考えてる！」

コダイ「決定打は殆どなかったな…もつと修正しないと……」（ブツブツ）

メガネ「ブツブツ言ってるコダイは放置で感謝コーナー！ながも〜様、作者月詠様、龍賀様、ソラト様、マーボー様、桜川リマ様、感想をありがとうございます！」

レイ「さくしゃげつえいさま、プレゼントのしゃしんをありがとうございます〜」

メガネ「しかしこの……『ミニスカネコメイドになったシグナム（顔真つ赤）』の写真は……グボハアツ!!」（吐血）

コダイ「……ん？いつの間にか死んでる……ああ……このシグたんミの写真か……」

レイ「まだいつてるの？」

コダイ「次回は主人公設定とベアトリス式についてだ」

レイ「みなさまのいけんやかんそうをイロイロまっています!」

メガネ「……………」

コダイ「まだ死んでるよ……」

「次回もお楽しみにしてください」

A・S編主人公設定（前書き）

主人公とデバイスの設定とベアトリス式についてです！

1 / 19 修正して書き加えました

A・S編主人公設定

名前 時代ときがわ 古代こだい 本編ではカタカナで表記

コダイ・T・ベアトリストキガワ（これはミッドにいる時）

妄想C V・ 柚木涼香（武装錬金の津村 斗貴子をイメージ）

年齢 9歳（誕生日来ました）

身長 ヴィータより少し高め（伸びてない）

体重 なのは達より軽い（多分女の子でも持てる位）

好き 料理、動物

嫌い 正義、過去話

特技 料理、声帯模写、瞬間記憶、完全記憶 e t c .

趣味 家事全般（料理の腕は桃子やはやて以上）

容姿

黒髪膝までの超ロングで前髪で殆ど顔を隠して、青い目（ハイライ
ト無し）が特徴。

端正な…と言うよりぶっちゃんけ美女。肌は白く細い体格。

髪型、学校では二つ縛り、普段は基本ストレートだが服装によって
変わる。

……………無印の頃より若干色気が増したとか……………

性格

良く言えば天然ドS。女子供容赦なしの性格。無口で無表情だが、面白そうと言う理由で桃子や忍と結託したりする。

性格を除けば完璧超人、だが天然で直球の言動で羞恥心がほとんど無い故にあり得ない位フラグビルダーである。女装はオシャレとしか思っていない。

レアスキル
稀少能力

チューニング
同調

一度見た魔力光なら完全に変える事ができる、魔導師が持つてる魔力変換資質もその魔導師の魔力光に変えれば扱うことができる。稀少能力は魔力と関係ないので使用できない。

自分より魔力量が多い魔導師に変えても魔力量はコダイに依存する。また、魔力光を完全に変える事が出来るので、人のデバイスを起動させる事が出来る。

コダイの魔力光が虹色の理由はこの同調によるもので、周囲の魔力素に反応して変色してる。本来の魔力光は不明。

特異体質

ファントム・ペイン
幻痛

魔法を強制的に殺傷設定で受けてしまう体質。

不死体質

どんな事があっても死ねない体質。不死身というより、死〓気絶程度になる。

再生力は普通の人間並み。
コダイの前の世界にあった能力。

デバイス

名前 レイ・モモ・ブラット（愛称レイ）

声 榊原ゆい

形態 顔も隠れる全身甲冑（イメージはWA2のナイトブレイザーのスカーフ無し）

待機 右手首のジュエルシードを中心に右手首を覆う様に金の蔦が伸びてる

性格 舌足らず 幼女 天然

魔力光 虹色（レアスキルの為で変色していて、本来の魔力光は不明）

魔導師ランク A A A -

使用魔法体系 ベアトリス式（詳細は下記に）

機能

『バーニア』

背中と脚から魔力を噴射して空を飛ぶ機能。小回りやスピード微調

整に優れているが、魔力の燃費がとてつもなく悪い。

『リコール』

破壊された装甲を再構成する機能。けど破損具合によってかなりの魔力を使うが、完全に修復が可能。

『シーリング』

ロストロギアを封印して回収する能力。普通の封印と違って、特殊な波長を出してロストロギアを吸い寄せるように封印して回収する。

『シード』

対象を情報として検索することが出来るが。検索ワードが正確でないといと欲しい情報が無かったり余計な情報も入ったりする（用はググるって事）

普通のインテリジェントデバイスにしては思考が幼すぎるデバイス。入手当初は魔法が一切使えなかったが、コダイ達が開発した『ベアトリス式』のみ魔法が使えるようになった。

機能とはデバイスに備わっている物で魔力を使って使用するが、かなり燃費が悪いらしい。

性格は無印同様、放っておくとコダイとボケ合戦を始める。

レイ「これはかわらないんだね」

コダイ「まあ半年だしな……」

メガネ「さあ続いてはベアトリス式についてだ！」

『ベアトリス式』

無印後にコダイが考案した、コダイが唯一使える魔法体系。得意距離は中距離

どれも性能がトリッキーで使いにくいモノがあるが『デイレイスペル』を利用して複数の魔法を発動させる事で力を発揮する。一対多に対して有効なものが多い。

魔法内容

『ガンブレイズ』

広範囲に及ぶ無限分裂炸裂弾を放つ、操作は出来ないが無限に分裂するので、距離を置く相手はまず地獄を見る。けど遠いほど威力は軽減する。

『スローナイフ』

小型の魔力刃を展開する魔法。

射出は出来ないが、コダイは投げて使う、少し広い範囲に設置できる。『バースト』の追加詠唱で爆発する。持って戦う事も出来る。

設置した時はその場に固定されるので足場にも出来るなど汎用性が高いが威力は気絶させればいいところである。

『プラス・ブレイク』

自身の攻撃に一度のみ障壁破壊を付加する魔法。ただ付加するだけなので破壊するには使用者に力が無いと破壊できないし魔法にも付加出来ない。バインドや結界は破壊できない。

『バシニングバスター』

なのはの砲撃を見て見よう見まねでやった螺旋を描く砲撃魔法。口径は細いが飛距離はなのはの二倍はある。コダイは初めてコレを使

った時、内心ビビった。まだまだ改善が必要。

『ウエブバインド』

始めはスフィア状だが対象に接近すると網状に展開して拘束する拘束魔法。スフィア状なので魔力弾と勘違いしやすい。だが複数捉える事は出来ても強度は通常のバインドよりやや堅めなので、壊されやすい。

『デイレイスperl』

魔法を発動直前の状態でキープできて『デイレイスperl・アウト』の呪文でキープした魔法を発動できる。

キープするのに魔力を常に使うのでかなりの集中力がある。

(原理はネギまの遅延呪文と同じ)

他にもまだあるが、実戦投下には至らない……

コダイ「どれもこれも一心実戦で使えるがまだ試作段階だ……」

メガネ「どれも威力は弱いけどデイレイスperlを利用して戦うのが主流かな？」

コダイ「後は素手だな……」

メガネ「後、キープできる規模だけど現時点ではどんな魔法でも三回まで」

コダイ「キープ出来る魔法は一回ずつだ、これもまだ試作段階だからな」

メガネ「それと補足ね」

補足

ミゼットが『ベアトリス式を創ったって事を証明するために名前を変えたらどう？その方が分りやすいし』と言い。コダイはミッドではコダイ・T・ベアトリストキガワとなってる。

更に管理局の一部ではミッド、ベルカに次ぐ第三の魔法体系を創ったので『新代しんだいの魔導師』と呼ばれてる……

……がそれが後にとんでも無い事になるとはまだ知らない……

メガネ「まあ実際、悪用とかそんなのは無いけどね！」

コダイ「早速ネタばれかよ……」

A・S 編主人公設定（後書き）

レイ「まっほ〜うデビユ〜!!」

コダイ「何だよこのテンションは…」

メガネ「魔法使えた事が嬉しかったんじゃないかね？」

レイ「えへへ〜」

コダイ「……………続けてくれ」

メガネ「おk……………ながも〜様、龍賀様、田中伸宙様、感想をありがとうございます〜！」

コダイ「ベアトリス式について色んな案が来たな……………どれもこいつの頭じゃ考えつかない物ばかり……………」

メガネ「うっせ！大体あんな使い手を選びまくる魔法を考えるなよ〜！」

コダイ「仕方ないだろ……………早く本編書けよ」

メガネ「分ったよ……………意見や感想など色々待っています!」

レイ「えへへ〜」

〜次回もお楽しみにしてください〜

最近このサブタイトルを考えるのが難しくなってきたb yコダイ(前書き)

アリシアは資質はあるけど、リハビリとかでデバイスは貰ってませ
ん。

P V 4 6 0 0 0 0 ユニーク 4 0 0 0 0 突破しました!どうも
ありがとうございます!..

「……………嫌な予感」

予感は的中、壊れそうなほど扉が開かれた先には……

「アリシ「コダイ」！！」なっ！」

丁度腰を浮かせていた所にアリシアのタックルが胸に入りそのまま押し倒されてしまった。

「ん〜！久しぶりのコダイの匂い〜／＼／＼」

馬乗りの状態で腕を首に回され頬ずりされてる。

「アリシア？」

「ん〜／＼／＼」

「何故ここに？」

「あっそうだった！コダイに会うためにだよ！」

夢心地だったアリシアが我に返る……………その体勢のまま。

「本局にいるのにいつつもいつつもリハビリと被って逢えなかったからさ〜こうなったら一日でも早く歩けるようになって、こうやってスリスリ〜ってしてやるぞ〜って！」

その執念は見事と言いたいが……………不純じゃないか？…どうしてもいいけど。

「アリシア、急いで何ッ！！……………何をやっているんですか！？」

あ、リニスが来た……………これで……………何を羨ま……………いえ！破廉恥な事をしてんですか！？」最初本音言い掛けてたよな？この猫娘……………

取り敢えず、アリシアを引き剥がして皆でデバイスルームへ向かった。

「改めて久しぶりだなフェイト」

「コダイ！」

フェイトは俺を見つめるや抱き付いてきた、双子は行動パターンまで一緒だな。

「……………で、なのは怪我はどうだ？」

フェイトを引き剥がしながらなのはに聞いてみた。

「うん、私はチョット怪我をしただけ……………だけ……………」

なのはが悲しい顔をして、向こうを見た。

そこには罅割れている、待機モード状態のレイジングハートとバルディッシュだった。その前にはユーノがコンソールを叩いていた。

「ユーノ、状況は？」

ユーノの隣に近づいて聞いてみた。

「正直、あんまり良く無いよ……………今は自動修復をかけてるけど基礎構造の修復が済んだら一度再起動して部品交換しないと……………」

「修復の目安は？」

「部品とか取り寄せも考えて……………一週間ぐらいかな？」

しばらくは待機か……………ちょっと不味いな。

「ねえ、そう言えばさ……………あの連中の魔法って何か変じゃなかったか？」

「アレは多分ベルカ式だよ」

アルフの疑問にコンソールを叩きながらユーノが答えた。

「ベルカ式？」

「かつては、ミッド式と魔法勢力を二分した魔法体系だ」

俺が忙しそうにユーノの代わりに答えた。

「ミッド式を遠近に適した汎用性の高い魔法体系だとすると。ベルカ式は対人戦闘……………つまり一対一の戦闘スタイルを得意とする魔法体系。優れた術者はミッドで言う大魔導師と同じように騎士と呼ばれ

フェイトが俺の手を両手で握り締めた。

「なのはにした様に……………私にも訓練してください！」

「にゃっ!! フェイトちゃん!？」

フェイトの言葉になのはが過剰に反応する。

「まあ……………デバイスなしでも出来るのがあるから別に構わないぞ?」

「ホント! 私頑張るからね!」

「フェイトちゃん!!」

突然なのはがフェイトの腕を掴んで部屋の隅に移動する。

「今からでも遅く無いの! アノコダイ君の特訓を断るの!」

「え? 何で?」

「コダイ君の特訓はとん

でもなく厳しいの!」

「ありがとうなのは、心配してくれて。でも…強くなる為にはどん

な厳しい特訓にも耐えて見せる!」

「そういう次元じゃな」 ナノハ…………… O S H I O K I スル?

「何でもありません!」

聞こえていたので念話で黙らす……………対シグナムとしてはアレしかないな……………

「フェイト、意気込んでいる所悪いがそろそろ面接だ」

「え?……………うん、分った」

「なのは、君もちよつといいか?」

「?」

なのはと一緒に来てくれと伝えるクロノに対し、なのはは頭に?を浮かべていた。

「コダイ……………君はどうする?」

「パス、ベアトリス式を改良しとかないといけないしフェイトとの特訓を組み立てるから」

「そうか……………ならこれを先に渡しておく…………… 今回の魔導師襲撃事件についての資料だ」

「ん、確かに貰った……………第一級搜索指定ロストログニア『闇の書』？」
「じゃあ、また後で。フェイト、なのは着いて来てくれ。一応目を通してくれ。」
そう念話で伝えてクロノは部屋を出た、フェイトもなのはもその後続いた。
さて、フェイト達が面接の間どうするか……………

「そしたらアリシアったら、頭から突っ込んだじゃって……………」

「母様、その話はやめて……………」

特にやる事は終わっていたので、本局の休憩室で談話をしてる。

で、さつきプレシアがしていた話は、アリシアがお風呂ではしゃいで湯船に頭から突っ込んだと言うよくある話だ。

「それを言うならユーノもフェレットの時湯船で溺れた事があるぞ……………」

「コダイ！その話はやめてよ……………」

「あはははっ！ドジだね……………」

「アルフ、人の事が言えますか？シャンプーが目に入り転げ回って湯船の角に頭をぶつけて……………」

「リ、リニスだってお湯と水を間違えて……………」

「それは……………／／／／／」

何故かいつの間にか風呂ネタになっている……………

「やつほく、今暇？だったら私とお茶しない？」

使い古されたナンパのセリフに後ろを向くと書類を挟んでるボードを手にエイミーがやって来た。

「レイジングハートとバルディッシュの部品、発注しておいたよ。明日には届くみたい」

「ありがとうございます！」

ユーノが礼をする。

「でね、さっき正式に今回の件がウチの担当になったの」

「今回のと言つと…魔導師襲撃事件の？…しかし聞いた所によるとアースラは整備中の筈だと…」

「そうなんだよねえ…あ、そうだクロノくん知らない？」

「クロノだったらフェイトとなのはを連れて面接とやらに向かったぞ？」

「確か、フェイトの保護観察官つて言ったけど誰なんだろう？」
「アリシアは首を傾げる。」

「何か管理局の偉い人つて聞きましたけど……」

「ギル・グレアム提督よ……」

リニスの疑問にプレシアが答えた。

「ああ！」

エイミーは今思い出したのか、納得の声を上げる。

「グレアム提督はクロノくんの指導教官だった人なんだよ、歴戦の

勇士…一番出世してた時で艦隊指揮官、後に執務官長だったかなあ」

「めっちゃくちゃ偉い人じゃん！！」

「でも良い人だよお、優しいし」

「勇士ねえ…何か納得行かないんだよな、その英雄とか勇士とかさ…結局人殺してる事だろ？それなのに称えられるとか…まあ、どっ

かの誰かが言った『100人殺せば犯罪者だが1000人を殺せば英雄だ』…だったら世の殺人犯は英雄の卵だな。

俺だって人殺した事あるよ。何万回…いや億かな？それでも自分を英雄とか言ってる奴見ると殺したくなる……所詮人殺しなのにな。

ベコッ!!

持っていたスチール製の缶コーヒーが凹む……………

コダイ?

「レイ?」

レイに名前を呼ばれて意識を現実に戻す……………

コダイだよね?

「急にどうした?」

なんかね、コダイがちがうひとにみえた

……………全くコイツは……………

「半年も経つんだ少しは成長してるのだろう?」

そういうものかな?

「そう言う物だ」

そう言って、缶コーヒーを飲み干す……………そのコーヒーはやけに冷たかった。

最近このサブタイトルを考えるのが難しくなってきたb yコダイ(後書き)

メガネ「スイマセン、更新遅れました。ネタ補充の為になのは二次創作巡りをしていたらこんなに経ちました」

コダイ「最後の文は何か中二病満載だな」

メガネ「実はソレ、シグナムがはよてから渡されたホットミルクと「温かいな…」のセリフのオマージユみたいな感じ」

コダイ「ミルク(白) コーヒー(黒)で温かい 冷たいって事か？」

メガネ「そそ。ながもく様、龍賀様、感想ありがとうございます！」

コダイ「さて…これからどうなるのやら…」

メガネ「あ、ちなみにA・S編で最初にフラグ立つのは既に決まってる」

コダイ「は？」

メガネ「皆様からの質問や感想を待っています。これからも『魔法少女リリカルなのは』ある転生者の新たな世界』をお願いします！」

次回もお楽しみにしてください

実際さ…動物の子供って基本反則的に可愛いよねb yコダイ(前書き)

コダイは結構動物好きです。

P V 4 8 3 0 2 6 ユニーク 4 2 2 8 2突破しました！本当に

ありがとうございます！

実際さ…動物の子供って基本反則的に可愛いよねb yコダイ

時空管理局本局、ミーティングルーム。

現在、俺達はそこで今回の件について、リンディの説明を聞いていた。

「さて、私達アースラスタッフは今回ロストログア、闇の書の搜索及び魔導師襲撃事件の捜査を担当する事になりました…ただ肝心のアースラが暫く使えない都合上、事件発生時の近隣に臨時作戦本部を置く事になります」

リンディは全員を見回し言葉を続ける。

「分割は、観測スタッフのアレックスとランディ」

「はい」

「ギャレットをリーダーとした捜査スタッフ一同」

「はい！！」

「司令部は…私とクロノ執務官、エイミー執務官補佐、フェイトさんの以上三組に分かれて駐屯します。因みに司令部は…なのはさんの保護を兼ねて、なのはさんのおうちのすぐ近所になります」

「…あ…」

なのはとフェイトとアリシアが顔を見合わせる…

「…やったああああ！！」

三人が大喜びで抱き合う。

「プレシア達はどうするんだ？」

「勿論フェイトと一緒に、私達は管理局に入っていないもの
そうだよな、プレシアにとって管理局はあんまりいい思いが無いものな…」

「それに、今は貴方の元で研究してる方が良いと思ってるし…」

「そうか…」

「けどアノ笑いはフェイトの前ではやめた方が良いぞ？」

「何のことかしら？」

自覚なし?.....

翌日.....

「わあゝ 本当に近所だあ」

なのはの家の近所のマンションの玄関から外を見ながらなのはが言った。

「ホント?」

「うん。ホラ、あそこが私の家だよ」

なのはが自分の家を指さす.....

「後、なのはの家とこの挟んだ所のかなり大きい家が俺の家だ」

「ホントだ、二人とも近所だね」

「今度遊びに行くよ」

「分った.....さて、はしゃぐのはいいがそろそろ引越しの手伝いするか」

「うん!」「」

三人は嬉しそうに頷いた。

さて.....まずは何をすればいいか.....ん?リビングにいるのはエイミー.....聞いてみるか。

「エイミー引越しの手伝いをしたいんだが何をすればいい?」

「え?そうだね.....じゃあこの荷物を邪魔にならない所に運んでくれない?」

「分った」

さて、結構あるな……………ん？視界の端に何が……………

「ユーノ？」

「あ、コダイ」

ユーノは何故かフェレット状態だった。

「ユーノくんもフェレットモード久し振りい！」

「まあ……………なのは友達の前ではこの姿だったし……………」

俺の肩に乗ってくるユーノに気付いたなのはが駆け寄った。

「またよろしくなユーノ」

「うん」

ユーノの頭を撫でる。

「アルフちっちゃい！どうしたの！？」

「かわいい」

突然、フェイトとアリシアが黄色い声が聞こえて、なのはと同時に

その方を向いた……………

「あ……………」

なのはが声を漏らす……………そこには。

「ふふふん」

半年前とは違う……………子犬になってる……………アルフが……………

「お、コダイ、なのは、どうだいこの姿？」

「アルフさん！？かわいい」

「フフフフ…名付けて！新形態、子犬フォ……………」

その瞬間、アルフはなのは達の前から姿を消した……………

「アレ！？アルフは！？」

「ど、どこに！？」

「あ…っ…！」

三人は辺りを見まわして、アリシアが最初に気づき、指を指す。そ

こには……………

「うう……………コダイ…やめておくれ／＼／＼／＼」

俺が子犬のアルフを撫で回している。

「や……………アルフが可愛いのがいけない」

いやさ……………動物の赤ん坊とか子供とかさ……………反則だよね？後、小動物も……………

「うう／＼／／／」

「肉球ちっちゃい……………」

「ひゃうっ／＼／」

「……………モフモフ」

「あう／＼／／／」

凄くよさそうな毛並みに顔を埋める……………

「えっとさ……………コダイって動物好き？／／／」

「うん、ユーノ君の時もあんな感じだった／／／」

「あ、あの時ね……………家にいた時『暇だから』って言って撫で回されたよ……………／／／」

「アルフいいなあ……………／／／／」

フェイト、なのは、ユーノ、アリシアはこちらをチラチラ見ながら話していた……………聞こえてるぞ？

「四人とも、友達が来たぞ」

アルフをモフモフしているとクロノがやって来た。

どうやらアリサ達が来たようだ。

フェイトにアルフを渡して玄関に向かう……………

「ア、アルフ大丈夫？」

「な、何とか／＼／／／」

何か……………バレそうだな。（自分の所為）

「こんにちは」

「来たよ」

「アリサちゃん、すずかちゃん！」

玄關に行けばオシヤレ（女装じゃないぞ？）をしたアリサとすずかの姿がいて、なのはは笑顔で2人を出迎える。

アリサとすずかの2人はフェイトとアリシアの2人に目を向けた。

「初めまして、ってのも何か変かな？」

「ビデオメールでは何度も逢っているもんね」

「うん…でも逢えて嬉しいよ、アリサ、すずか／＼／＼」

「私も／＼／＼」

恥ずかしいのか少し顔が赤いフェイトとアリシア。

「フェイト、アリシア、お友達？」

「「こんにちは！」」

「こんにちは」

「こんにちは、アリサさんにすずかさん…よね？」

奥からプレシアとリンディがやって来て二人に挨拶をして、それに二人も返事を返した。

「はい…」

「私たちの事…」

「ビデオメールを見させて貰ったの」

「後、コダイから話を聞いてね」

「「そうですか！」」

疑問に思っていたアリサとすずかだがリンディとプレシアが理由を話した。

「よかつたらみんなでお茶でもしてらっしゅい」

「あっ！じゃあうちの店で！」

「そうね。せっかくだから私もなのはさんのご両親にご挨拶を…ちよっと待っててね？」

そう言くとリンディは自分の部屋に戻って行った……これは…面白

い予感！

「悪い、ちょっと忘れ物したから取ってくる」

そう言つて俺はリンディの部屋に向かった……

「リンディ……」

「な、何かしら？」

後ろから突然呼ばれたのか少し驚いてるリンディ……

「……何か企んでるな？」

「バレた？」

「……まずは勘、後その箱にフェイトとアリシアの名前が書かれてるのに二人の部屋に無いという事は、恐らくサプライズ的な物だろ？」

「ええ……実は……」

リンディのサプライズを聞いた瞬間……閃いた。

「成程……なら強力な助っ人を用意するか……」

「助っ人？」

「ああ……リンディも一度会っている人間だ……」

俺は携帯を出してある人物に掛ける……

助っ人からの返事は『OK』だった。

翠屋に着いた時、なのはが事前に桃子に連絡した為直ぐにジュース

を用意していた。

リンディとプレシアは桃子と士郎に引越しの挨拶を、なのは達は外でお茶会をしている。

ちなみに俺は挨拶側にいる、何故って？その方が面白そうだから。

「そんな訳で……これから近所になります、宜しくお願いします」

「私も……って家は同じなのですが、親子共々宜しくお願いします」

「ああ、いえいえ……こちらこそ」

「どうぞ、ご贔屓に……フェイトちゃん、アリシアちゃん、三年生ですよ？学校はどちらに？」

「はい、実は……」

リンディの言葉を遮り扉の開く音が聞こえた。そこにいたのはフェイトとアリシアだった。

「リンディてい……リンディさんコレ……」

「はい、なあに」

「コレ……もしかして」

フェイトとアリシアは開封された箱をリンディに見せた。そこには聖祥大付属小学校の制服だった……

「二人とも転入手続きは取ったから」

リンディのサプライズとはフェイトとアリシアの俺達と同じ学校への転入だった。

「明日からはコダイ達と同じクラスよ、フェイト、アリシア」

プレシアの言葉を聞いたフェイトとアリシアは……

「ああ……ありがとう……母さん、リンディさん／＼／＼」

と、赤くなりながらお礼を言って、箱を大事そうに抱きしめた。

その後、二人の声を聞いてやって来たなのは達に転入の事を話すと、物凄く喜び合っていた……

「フェイト、アリシア、どうせなら此処で制服に腕通してみたらどうだ？（桃子用意は？）」

「そうね 着る練習にもなるし、翌朝になってサイズが合わないなんて事になったら困るものね（バツチリよ、リーダー）」

「なのは達がこれから通う学校はどんな感じなのかをフェイトとアリシアに教えている時に、俺は桃子とアイコンタクトをしてみた。」

「いいわねそれ、私も二人の制服姿見たいわ コダイ…貴方もしかして何か企んでる？」

「ただ着るだけなんだ、問題無いだろ あ、バレた？」

「鋭いな……………」

「これでも、大魔導師よ」

……………もしかして、これから始まる事を分かって楽しんでないか？プレシア。

「じゃ……………じゃあ……………」

「着てみます……………」

「恥ずかしいのか照れてる二人。」

「私を手伝って上げるからから行きましようフェイトちゃん アリシアちゃん」

「すっごい嬉しそうに桃子が二人を引き連れる……………さてこっちも準備を……………」

〜数分後〜

「…………………………」

「…………………………」

数分後、俺達の目の前には。

顔を隠して俯いてる制服姿のフェイトと、こちらも顔は赤いものの嬉しそうに笑っているアリシアが出て来た。

「フェイトちゃん、アリシアちゃん、可愛いよ」

「うん とつても似合ってるよ」

「サイズも丁度いいじゃない」

三人娘は手放しに褒めている。

「あ……ありがとう／＼／＼／＼」

同時に真つ赤になってお礼を言うのは流石双子だな……………

「ん〜とつても可愛いわ じゃあ今度はこのメイド服（紺色のミニスカタイプ）を」

桃子は何処からか、メイド服（紺色のミニスカタイプ）を二着取りだした。

「ええっ！？制服の着る練習じゃなかったんですか！？」

「あっ！それカワイイ〜」

突然の事にフェイトは驚き、アリシアはメイド服を物欲しそうに見ていた。

「え？だつてその方が面白そうだから」

全く持つて桃子の言う通りだ。

「フェイト！着てみようよ！」

「ね、姉さん！？」

「そうよフェイトさんきつと似合うわよ？あつもしかして色が嫌いなのか？だつたらこの可愛いピンクのメイド服（これもミニスカタイプ）で」

「リンデイさん！？」

リンデイも何処からかピンクのメイド服を二着取りだした…やっぱり乗って来たか……………

「か、母さん助けて！」

「はあ……………全く二人とも……………」

フェイトはプレシアの反応に少しホツとする……………が

「フェイトとアリシアには黒色が似合うのよ！」

「プレシアもこれまた何処からか、黒のメイド服（当然ミニスカタイ
プ）を二着取りだした。」

「って、母さああああああああああん！？」

「流石、母様」

「お？フェイトがノリツツコミ。アリシアは嬉しそうだ……………」

「コダイ〜助けてよ〜」

「フェイトから念話が来た……………何でワザワザ？」

「別にいいだろ？似合いそうだし」

「コダイにそう言ってくれるのは嬉しいけど……………恥ずかしいよ
／／／／」

……………ああそういう事が。

「分った」

「そう言って、どれが似合うか言いあってる桃子、リンディ、プレシ
アに近寄る。」

「おい、桃子、リンディ、プレシア、貴様らは何をやっているんだ」

「コ、コダイ……………」

「あ、フェイトが涙目だ……………けど」

「……………ここはオーソドックスにロングスカートだろ？」

「……………さすが、リーダー……………」

「止めた訳じゃないんだよな。」

「これでいいだろ？フェイト」

「私の話聞いてた！？」

「勿論、ミニスカートだから恥ずかしかったんだろ？」

「何か違う意味で伝わってる！？それよりコダイってこづいのは
止めるキャラじゃない！？」

「何を言っている？止めない方が面白いに決まっているからだ」

「と言うかキャラって何だ？」

「なのは！アリサ！すずか！助けて！……………ごめんなさい！……………
即答！？」

まあ仕方ないだろ、この三人は常連だから本能的に気付いたんだろう、これが俺が仕組んだ事だって……

「コダイ君 ロングスカートタイプのあるの？」

「当然だ桃子、紺、ピンク、黒、全て取り揃えてある」

俺は、コートからロングスカートタイプのメイド服（紺、ピンク、黒の三色）を取りだした。

その後、フェイトとアリシアのコスプレ会が行われ……

「／／／／／」

「えへへ」

終始、フェイトは顔を赤くして俯き、アリシアは嬉しそうに乗っていた。

けどフェイト……あのバリアジャケットの方が恥ずかしいと思うが……え？それは言っではいけない？空気読め？……俺は空気を読めないのではなく読まないだけだ！

その日の夜…俺はフェイト達の家のリビングでクロノと宙に浮いてるいくつかのモニターを見ていた。

「ロストロギア『闇の書』の最大の特徴はそのエネルギー源にある。闇の書は魔導師の魔力と魔法資質を奪う為に、リンカーコアを喰うんだ」

「リンカーコアを喰われた魔導師はどうなるんだ？」

「個人差はあるモノの暫くは魔法が使えない、リンカ コアは僕達魔導師の力の源だから……………」

「そうか…資料によると闇の書はリンカーコアを喰うと蒐集した魔力や資質に応じて頁が増えていく。そして、最終頁まですべて埋めることで闇の書は完成する……………完成すると何が起るんだ？」

「少なくとも碌な事にはならないよ……………」

ジュエルシードの時の様に油断は禁物か……………」

「……………一応この資料以外にも情報あるか調べてみるか？」

「ああ、頼む」

「分った、レイ」

うん！シードてんかい！

レイから20個のシードが周囲を飛び回る。

「検索ワード『闇の書』」

シードけんさくちゆう…ふえっ！？いちまんけんいじょう！
？

って多すぎだろ……………って

「うわぁ…どれも資料と似た事しか書いてないしダブってるのもあるし……………ん？」

取り敢えず仕分けしていると、ある一人の男の映像に目に入った…

……………

「クロノ…この男に見覚えは？」

「何だ……………っ!？」

俺はその映像をクロノの前に持っていくと明らかに動揺を見せた。

「知っているのか？」

「知っているも何も……………彼はクライド・ハラオウン、11年前の闇の書の事件で死んだ…僕の父親だ」

クロノは静かに語った……………

11年前、『闇の書』の輸送中に、その闇の書にクライドが指揮していた艦……………エステリアの制御を奪われ、クルーは全員脱出したが

クライドだけが残り……………当時の上官のギル・グレアムに嘆願し
エステシアと運命を共にした。

「……………一応、もっと調べてみる」

「ああ…頼む」

父親か……………だから過去話は嫌いだ。

「もうそろそろ帰るか…あっ、ユーノは？」

そう言えば姿が……………

「エイミィの所だ、デバイスがどうか言っていたぞ？」

そう言えば、今日中に部品が届くって言っていたな……………

「ありがとう、クロノ」

俺は、礼を言っておいてエイミィの部屋に向かう……………

コンコン

「入るぞ」

「「うわっ!!」」

一応、ノックして入ったら驚かれた……………

「ユーノ、エイミィ……………どうした？」

「えっと、実はレイジングハートとバルディッシュにエラーが起き
ちゃった見たいで……………」

エイミィが落ち着きを取り戻して訳を聞いた。

「見たい？」

「うん、部品が足りないって……………」

「部品は足りてる筈だろ？」

二つとも珍しく無い部品を使ってる訳でもないし……

「そうなんだけどホラ……」

そう言っつてエイミィがモニターを見せてくれた……

そこに映っていた物を見た俺は……

「はぁ……主従揃って似た者同士だな……」

頭を抱えた。

『エラーコードE203、必要な部品が不足しています。エラー解決のための部品“CVK-792”を含むシステムを組み込んでください』

CVK-792……ベルカ式カートリッジシステムか……

『『おねがいます
Please』』

全く……人の話聞いていたか？

実際さ…動物の子供って基本反則的に可愛いよねロコダイ（後書き）

コダイ「そう言えば……………カートリッジシステムは俺も使えるようになるのか？」

メガネ「モチ！しかも男の子にとってかなり熱い展開で」

コダイ「俺のデバイスは強化できないのにか？」

メガネ「えっと……………レイ！進めちゃって！」

コダイ「（逃げた）」

レイ「マーボーさま！かんそうをありがとうございます！」

メガネ「次回はフェイトとアリシアの転入です！」

コダイ「……………絶対やな予感しかしない……」

く次回もお楽しみにしてくださいく

嫌な夢を見ると内容は忘れるのに何か訳もなくムカつくb yコダイ(前書き)

ウチの主人公は『お母さん』って感じにしてみようかと……ん？誰か来たようだ……

嫌な夢を見ると内容は忘れるのに何か訳もなくムカつくb yコタイ

何だよこれ…最悪だ

じめんなせい……

じめんせい……

じめんなせい……

じめんせい……

貴方を………して………

じめんせい……

グシャツ!!!

意識の覚醒と共に前回より強く殴った。

「っ…………あれ?ここは……………」

そう言えば、あの後自宅に帰らずにまた調べて…………

「ソファアで寝落ちか…………えっと今は」

携帯で時刻を見る…………5時…………

「30分も寝てないな。ん、よし」

ご飯でも作るか……………

ご飯を作り始めて、もう少しで終わる頃に皆が起きて来たけど…………

「コダイ…………これはちょっと…………」

「作り過ぎじゃないか?」

フェイトとクロノが引き攣った笑いを浮かべてる……………

「おいしそ〜」

「ジュルリ……………」

「二人とも涎が出てますよ?」

アリシアとアルフが涎を垂らして、リニスがそれを拭く……………

「うわ〜これ全部コダイ君が?」

「フェイトさんから聞いてたけど此処まで凄いとは……………」

エイミイとリンディは呆然としている。

「凄い気合い入ってるね……………」

「何かあったの?コダイ……………」

研究中に良く軽食を作っているのを知っている、ユーノとプレシアはあんまり驚いてない……………

テーブルには所狭しと並んでいる料理の数々……………

「いやさ……………嫌な夢みて忘れよう……………流石にやり過ぎたか……………」

……………あ、ユーノこれ運んで

「分ったよ」

「……………」
「……………」
「……………」
「……………」

ハモるフェイト、クロノ、リンディ、エイミイ、リニス……………

アリシアとアルフは料理に釘付け。ユーノとプレシアは慣れたのか
もしれない……………

「リニス、フェイトとアリシアの弁当は台所にあるから。それと昼
は冷蔵庫にあるから温めるだけでいい」

「あ、ハイ……………」

少し遅れて頷くりニス……

「そつだ、そろそろユーノを預けなきゃ……じゃあそつ言つ事で」

「……………ありがとう、お母さん」「……………」

おい、誰がお母さんだ、全員でハモルな。エイミィ位ならまだしも子持ちの娘を二人も持った覚えは無いぞ？

コダイはおかあさん？

違う……………

「……………つて事が今朝あつた」

「……………ブツ……………！！！！」「……………」

学校に着いた時に今朝の事を話したら思いっきり吹き出した3人娘

……………

「お、お母さん……………ブツ！！」

「流石に…そこまですと姉さんを超えてるよ……………」

「にははは……………でも！コダイ君の子供なら絶対いい子なの！

(怖すぎて悪い事出来ないの)」

「アリサは後で殴るとして、すずか…そこに『兄』と言つ選択肢は

……………ないな、後なのは……………それはフォローじゃない……………」

そんな風に話していると教師が入って来た……………

「さて皆さん！実は先週、急に決まったんですが今日から新しいお友達が2人、このクラスにやってきました」

「先生！女子ですか！？女子ですか！？」

即座に反応する男子……………って女だけかよ……………

「女の子よ。しかもとびつきりの美少女！ さらに双子！！」

「……………しゃあああああ！！ついに俺達に春がああああああ
ああっ！！」「……………」

歡喜の叫び声を上げる男子共……………

いまは、はるなの？

「いや……………冬だろ」

正確には1月から春だっけ？まあいいか……………

「二人とも海外からの転入生よ。どうぞ」

「失礼します」

声の後に扉が開かれ目の前に立ったのは……………

「えっと……………フェイト・テストロッサです／＼／＼」

半年前になのはと交換した薄いピンクのリボンでツインテールにしたフェイトと

「フェイトの双子の姉のアリシア・テストロッサです！よろしくね

」
フェイトと同じ髪型だがリボンが青いリボンで結んでいるアリシア
がいた……………

「あの子赤くなってる、可愛い〜」

「綺麗な金髪」

女子に大人気の様だ……

「では、二人の席ですけど……」

教師がそう言った瞬間、男子が物凄い勢いで隣の奴を退かそうとしている……面白いな……

でも、面倒なだけだし……お、丁度いいな。

「俺の両隣が開いてるぞ」

俺は両隣を指さした。

「じゃあ、トキガワ君の隣で」

まあこれならなのは達の近くだし問題無いだろ……

「よかった……なのは達が近くで……」

「やったあゝなのは達の近くだゝ！」

隣に座ったフェイトとアリシアは嬉しそうだ。

「これからよろしくね フェイトちゃん、アリシアちゃん」

「分らない事があったら遠慮なく聞いてね？」

「勉強に関しては任せなさい！」

「改めて、これからよろしく」

なのは、さすが、アリサ、俺の順で激励の言葉送った……

「「よろしく！」」

二人は満面の笑みで頷いた。

後、殺気を送るな男子……

一時間目はフェイトとアリシアへの質問会になったが……まあ予想通りと言うか。質問攻めになってる二人を助けるためアリサと俺（ア

リサに強制的に)が一人ずつ質問するように促した。

「向こうの学校って、どんな感じ？」

「えと…私たち、普通の学校には行ってなかったんだ。家庭教師と
言うか、そんな感じの人に教わってて…」

「リニスって言うの。」

そう言えば今もリニスに教えて貰ってるんだよね？

「前に住んでた所ってどんなところなの？」

「えと……水と森に囲まれたすごく綺麗な所…かな？」

時の庭園って確かミッドチルドルの境界のアルトセイム地方にあった
のをプレシアが買い取ったって言ったっけ？

「今はどこに住んでるの？」

「なのはの家の近くだよ。」

「コダイの家も近くでもあるよ。」

そうそう……何故か都合良く一つ開いていたんだよね……

「今日の下着の色をおし」何質問してんのよアンタア!!」「ギャア
アアアアス!!」

アリサが質問した男子を殴り飛ばす

「えっと……」「フェイト!? 答えなくていいわよ!!あのバカの質

問は「ふえ!?!」

「え？見た「くもないから黙ってる」にやっ！」
言おうとしていたフェイトをアリサが止め。暴走したアリシアを俺
がド突いた。

「得意な教科と苦手な教科は？」

「私は理数は得意だけど国語は苦手かな？……………コツチの言葉に慣
れてないのもあるけど……………」

「ううゝ私はダメっぽい」

まあアリシアは仕方ないな……………殆どリハビリばかりだったよう
だし……………

「貴女、私の妹にな」それは質問じゃないだろ「ゲブハアツ！！」
女子を蹴り飛ばす。

「ぶゝ私はお姉ちゃんですう！」

アリシア、そういう意味じゃないからブー垂れるな……………

昼休み、何時ものように屋上で弁当を食べるが、今回からはフェイ
トとアリシアも一緒だ。

…男子達が昼休みにフェイトとアリシアと一緒に弁当を食べようと

しつこく迫っていたので俺が『あ！風で女子のスカートが！？（能登麻美子の少年声で）』と言って、隙が出来た瞬間に二人を抱えて屋上に来たという訳だ。ん？誘拐？いや強制的だから拉致だ。

「アリシアちゃん、フェイトちゃん。初めての学校の感想はどう？」
「年の近い子がこんなにくさんいるの初めてだから、なんだかもうぐるぐる……」

「私も姉さんと一緒……」

「あははは」

「まあ、すぐに慣れるわよ、きつと」

「うん。だいいいな」

そう言いながら弁当を食べる……

「「「「「見つけたぞおおおおおおおおおおお！……」」」」」

「「「

扉が開く轟音と共に雪崩れ込んできたのは男子共だった……

「あのさ……いい加減パターン考えようよ……」

「「「「「うるさい！男子の敵め！……」」」」」

はぁ………逃げるフリもつまらなくなっただし………アレを使うか………

俺は、懐から一冊の黒い手帳を取り出す。そこには『DEATH NOTE Vol. 9』と書かれていた。

「アレは………DEATH NOTE!？」

「知っているのか松田!？」

「アレは……………」

そう……………『DEATH NOTE』とは名前の書かれた人は……………

「夜神……………」

「ヒイツ!…」

俺が名前を言つと松田?……………に話しかけていたやや顔立ちの良い男子がビビる……………

「……………貴様……………親の名義で(見せられないよ!)(や)(ここから先はR指定だ)とか(エロスも程々にな)などを取り寄せているらしいな……………」

「やめろおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
お!……………」

即死亡……………ではなく、下手すれば社会的に殺される情報がワンサカ載っている手帳なのだ……………

「更にその後ろにいる鹿島は(キン!キン!キン!キン!)でその隣の佐藤は(こどもこゝろのゆめ〜わ〜)!!」

「……………ぜ、全員退避イイイイイイイイイイ……………!!」
「……………」

悲鳴ともとれる叫び声と共に逃げていく男子共……………

「おい、後20人位暴露させろ!」

「「「チヨット待った(つの)その鬼畜!」「」」

ん?ずっと空気だった三人娘が叫んだ……………

「どっした?」

「どっしたも無いわよ!何よさっきのノート!」

「『DEATH NOTE』の事か?俺は名前と顔が分ればそいつの誰にも言つて無い秘密や個人情報を手帳にまとめるからそれを手帳にまとめてあるだけ……………後『DEATH NOTE VO 1.24』まである」

「「「「まだあるの!?!」「」」」」

ああ……………そろそろ25冊目も作らないと……………

放課後……………帰り支度をしているとクロノからメールが来た。

『捜査は順調に進んでいる、コダイとなのはとフェイトはこちらの要請があるまで自由に過してくれ。デバイス2機は修理中だ……………非常時は素直に避難するように。』

追伸1、2機のデバイスの修理は来週には終了するそうだ。

追伸2、フェイトとアリスには寄り道は自由だが夕食の時間には戻ってくるようにと伝えて欲しい。

追伸3、ご飯美味しかったよ お母さん by 貴女の可愛い娘より』

.....
最後のはリンディと見た
.....

嫌な夢を見ると内容は忘れるのに何か訳もなくムカつくb yコダイ（後書き）

メガネ「珍しくギャグ落ち」

コダイ「しかし、女に見られる主人公はあるけどお母さんって…」

メガネ「珍しいでしょ」

コダイ「そんなに老けて見えるのか？」

メガネ「そういう訳じゃなくて、全体的な雰囲気と行動がそうさせてる」

コダイ「つまり、俺の行動が悪いと」

メガネ「そう言う事。龍賀様、ながもく様、ソラト様、マーボー様、感想ありがとうございます！」

レイ「ます」

メガネ「龍賀様から龍斗のメイド服とセーラー服を着た写真を貰いました！」

レイ「カワイイ〜／／／／」

メガネ「可愛いな〜／／／／」

コダイ「じゃあお返しにコッチもメイド服姿とセーラー服を着た写真でも送るか…」

メガネ「何でそうやって女装が出来るんだよ…」

コダイ「ん？女装はオシャレだろ？」

メガネ「違っつて！！！」

く次回もお楽しみにしてくださいく

戦隊モノってさあ、顔は隠してるけど声でバレないの？b y n o t a i (前書き)

早速(?)、ヴォルケンズの一人にフラグ立てます。

結構重要な伏線ですw w

戦隊モノってさあ、顔は隠してるけど声でバレないの？byコダイ

「あ、あのさ…お前の名前を、教えてくれねーか？／／／／」

アレエ〜？（・3・）ちょっと待て。これ三年前にも似た様な事があつたよな？

久しぶりになるが言わせて貰おう。どうしてこうなる！

「ダ、ダメか？／／／／」

俺の目の前には赤い髪を三つ編みにした、俺より少し背が…と言っても俺は同年代より背がかなり低めなので一つ下だろうか……………ヴォルケンリッターの一人ヴィータが不安そうな顔を赤くして上目遣いでこつちを見ている……………取り敢えず回想どうぞ……………

〜回想中〜

フェイトとアリシアの転入から数日後、まだデバイスは戻って来ないで、何時もの様に過ごしてる…フェイトの特訓は転入で色々忙しいから落ち着いてからと言っておいた。もうそろそろいいな…

……………

「さて、午後までどうするか……………」

今日は休日、ユーノは用事があつていないし……あつそうだ。

「レイ、ちゃんとリミッター掛けてるか？」

うん、まりよく0にしてるよ

リミッターを掛けてる理由は近くにヴォルケンリッターに気付かれないため。魔導師襲撃事件は俺達の世界を中心で行われてる、つまり此処に闇の書の主が居ると言う事…油断は禁物だ。

空いた時間は……『DEATH NOTE』を増やすか…アレから『DEATH NOTE Vol.26』が終わりそうだし…ん？

「ねえ、これからお兄ちゃん達といい所行こう？」

「きつと君も気に入るからさ」

……えつと、少し前に俺と大して変わらない子を囲んでナンパしてる大人の男が二人……

ロリコン 犯罪者 要するに殺してもよし！

まずはどう殺す？（もう殺すのは確定）

- 1 . 肉体的に殺す
- 2 . 精神的に殺す
- 3 . 肉体と精神半々で殺す

…よし、全部だ。

「殺していいよな！答えは聞くつもりもない！」

キ

ン！！

「くぁwせdrftgyふじこlp;@:。」

一番近くにいた男の股間を蹴り上げる…半年ぶりの股間打ちだ。背が小さいとこれがやり易くていい。

「このチビ！よくもダチのエクスカリバー」「ロリコンの癖に何言っている、この爪楊枝！」ギヤアアアス！！」

もう一人の男の足を思いつ切り踏みつける。

足を踏まれて尻もちをついてる男に『DEATH NOTE VO
1.22』のあるページを見せる。

「なっ！何でテメーが知ってたんだ！」

「こんな事していたんだな……バレたら表に出れないな……」それはもう相手の見方が一気に変わる情報だ……

「今携帯の1と1と0を押して通話ボタンに指を置いてるんだ、もし力を入れたら…」「ヒイヒイヒイヒイヒイ！！スイマセンデシ
タアアアアアアアア！！」「チツ」

ナンパ男は俺が股間打ちした男を抱えて逃げて行った……

「あ、もしも警察ですか？」

逃がさないけどね。

「……つと、警察には知らせたし、これから「な、なあ……」
ん？」

声をした、方を見るとさっきナンパされた子がいた…って！！

「あ、あのさ……お前の名前を、教えてくれねーか？／／／／」

んで冒頭に戻る……………

〈回想終了〉

「コダイ…トキガワコダイだ」

「私はヴィータて言うんだ！よろしくなコダイ！」

さっきの表情と一変して満面の笑みを作るヴィータ。

「で…ヴィータは何でこんな朝から此処に？」

「え…えっと…散歩だ！散歩していたら変な奴らに絡まれたんだ！」

「気を付けた方が良くないぞ？朝と夜は変態が多いから（体験談）。

それにヴィータは綺麗だから尚更な」

「キ、キレイ！？私が！？／／／／」

「だって、顔もその赤い髪も綺麗じゃないか？」

「う…人の事言えるかよ！オメの方がメチャクチャ綺麗じゃない

か！／／／」

「俺は男だし関係無い」

「はあ！？男かよ！マジで！？嘘ついてんじゃねえ！！シグナムよ

り美人じゃねえかああああああああああ！！」

ヴィータが落ち着きを取り戻すのにそれから数分掛った……………

「ゲートボールをやってるのか？」

落ち着いた後適當のぶらつきながら話していた……………

「ああ！じーちゃんやばーちゃんに褒められるぐらい上手いぞ！」
「ダイは何かやってのか？」

「俺は家の事で忙しいから、主に家事とかで」
「本当はベアトリス式の研究だけだ。」

「かじ？」

「料理、洗濯、掃除や家でやる事総じて家事と言っんだ」

「へえ……………ようは、はやてがしている事と同じか…」

「はやて？」

「私達のある……………じゃなくて世話になつてる親戚だ。料理がギガウマだ！」

「ギガウマ？」

「ギガウマだ！」

はやて……………もしかして八神はやてか……………今は考える事じゃないな。

「それに優しいし！後……………あつ！」

突然、ヴィータは何かを見つけ走り出した……………その先にはゲームセンター前のUFOキャッチャーだ。

「このウサギのぬいぐるみをはやてがくれたんだ！」

「え？…『のろいウサギ』？」

UFOキャッチャーの中は何か死んだ魚の様な眼をして口が縫い付けられてるウサギのぬいぐるみが沢山あった……………しかも大人気シリズって……………うん、可愛い。

「可愛いだろ？」

「確かに…」

「お、新しいの出ているな……………」

ヴィータはそう呟くと無言のままのろいウサギに釘づけになっていった。

「……………」

「……………ヴィータ？」

「……………」

自分の世界に入ってるよ……………

「……………よし」

俺はある事を思いついた。

百円硬貨一枚入れてクレールを動かす。

「ん？何やってるんだ？」

「何となく欲しくなったから取る」

それでも動物は好きなんだ。特にウサギが……………あ、取れた……………

「すっげえ！二つ同時に取れた！」

「しかも……………色違い」

取れたぬいぐるみは同じのろいウサギだが、配色が正反対の青い目の黒ウサギだ……………

「二つともやる」

景品を取りだし二つともヴィータに渡す。

「え！？だつて欲しいからつやつたんだろ？」

「白いの欲しかったんだよ……………」

例え白いのが取れても上げるつもりだったし……………

「ん……………二つもない！だから一つやる！」

ヴィータが黒ウサギを一つ俺に渡した……………

「俺が上げたんだが……………」

「私が貰ったんだから、誰に上げようと勝手だろ？」

「そう来たか……………」

素直に受け取る事にした。

「はあ〜カワイイナ〜この『こだい』」

ヴィータが夢心地で黒ウサギを抱きしめる……………つて

「俺の名前？」

「うん！何かお前に似てるから！特に青い目！」

ああ……………確かに。

それから、お互い暇だったので時間まで一緒にいたんだが……

「えへへ〜コダイ〜／＼／＼」

え？何この状況？周りの大人の視線が生温かい……………

俺の腕を抱きしめてるヴィータ、勿論黒ウサギ大事にしている。

特に何もしてないぞ？特に……………頭撫でたりとか、アイス奢ったり食べさせたりとかしたただけだぞ？何故？

それは、フラグビルダーだからさ by 作者

ん？今殺したくなるようなセリフを聞いたんだが……

「あ…悪い、そろそろ帰らねーと……………」

何かに気付いた様に、寂しそうに腕から離れるヴィータ……

「あ、あのさ……………」

「ん？」

「また……………会えるよな？／＼／」

上目づかいに聞いてくるヴィータ……………上目遣いの必要あるか？

「此処の近くに住んでるし……………会えるだろ」

「そうだよな！じゃあまたな、コダイ！」

そう言つて元気に手を振つて走り去るヴィータ……………

「……………あの時会つたはやてが、今度の闇の書の主か……」

闇の書……………第一級搜索指定がされている、最上級に危険なロストロギア。

破壊、改竄を加えても即座に修復する『無限再生機能』とエース級魔導師の戦闘力を持つ『ヴォルケンリッター』を発生させて『闇の書』本体や所有者を守らせる『守護騎士システム』そして何よりも本体の消滅や所有者の死亡をトリガーにして新たな主たる資質を持

つ者の下に転移再生する『転生機能』がある為、完全破壊は不可能。
「今回の事件……プレシアの時よりも複雑そうだな……」
転生機能と言う事は、はやてが偶々資質があつたから選ばれただけ……
つまりはやても被害者になる。
……
良く分らないな……まあ何とかなるか……

海鳴市市街地ビル屋上。

「さて、今日から訓練だが……フェイト」

「？」

「ギャラリー多くない？」

屋上の隅っここでは、なのは、アリシア、リニス、子犬形態のアルフがいた……

「にはははは……フェイトちゃんが心配で（絶対碌な事が起きないの！）」

「私も（どんな訓練かな）」

「今後のアリシアのメニューの参考にと（たつた数カ月で魔法を知つて間も無いなのはさんをフェイトと互角に伸ばした実力を見せて貰います！）」

「アタシはフェイトの使い魔だから（なのはが言っていた怖い特訓って何だろう……）」

何か裏で考えていそうだな……（一名除き正解）

「さてフェイト、前回あの騎士に負けた理由は分るか？」

「え？……パワー？」

「馬鹿がスピード以外全部負けているんだよ」

「ウツ!!」

俺の言葉が刺さった様に胸を押さえるフェイト。

「力云々は新デバイスでどうにかなるのだから…問題は経験だ。フェイトあの日から自主練していたらしいがどんな内容だ？」

「鉄の棒で素振りを…」

成程…それならなのは以上にしてもいいか。

「フェイトまず最初に言っておく…自分の考える限りの一番つらい訓練を思い浮かべてくれ」

「うん…思い浮かべたよ？」

「……………そんなものは天国だ！」

「ふえ!?!」

「最後にフェイト……………死なないでくれ!!」

「い、一体どんな内容なのおおおおおおおおおおおおお
お!……………!!」

後に、一名除いたギャラリィはこう語った…『ああ…味方で良かった』…と。(一名はトラウマで気絶)

くおまけ

八神家で……………

「ボ……………」

どこか上の空でソファーに座っているヴィータ、膝の上にはコダイから貰った黒ウサギが…

「む?どうしたヴィータ、そのぬいぐるみは？」

シグナムがそれに気付き聞いてみたが……………

「えへへ／＼／＼」

「なっ!?!」

突然、ヴィータの頬が緩んで驚くシグナム……

「シグナムどしたん？……あれ？ヴィータそれ……」

その声にはやてもやって来て、ヴィータの表情のと膝の黒ウサギに気付き……理解した。

「これは……『恋』やな！ヴィータは好きな子が出来たんや！そしてそれはプレゼントや！」

「あ、主はやって……何故そうと……」

「それは……ウチも恋する乙女やから……（そう言えばコダイ君今頃何しとるのかな……）」

「えへへ／＼／＼（コダイ……また会えるかな／＼）」

「……（何だ……この状況は）」

このカオスな空気はしばらく続いたとか……

戦隊モノってさあ、顔は隠してるけど声でバレないの？byコダイ（後書き）

メガネ「ヴォルケンズの中で難航不落のヴィータを落とす！それがコダイクオリティー！」

コダイ「前書きにも複線って書いてあったけど一体何だ？」

コダイ「それはネタばれになるからノーコメント！。っと感謝コーナー！レイ！」

レイ「ながもくさま、ユタさま、マーボーさまかんそうをありがとうございます！」

メガネ「マーボー様からは劉ちゃん自作のエプロンを貰いました」

コダイ「ありがたく使わせてもらっ」

メガネ「流石劉ちゃん！センスいいな！流石男の娘「火龍連撃」！！」ギヤアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！」

コダイ「えっと…作者を殺害と同時にやってきたのは『どうしてこうなった？！ 神による転生者の輪廻物語』の主人公の…」

劉「天道劉てんどうりゅうです。言うておくけど『男』だから！」

フィオネ「劉ちゃんの妻のフィオネです」

クリス「劉ちゃんの正妻のクリスよ！」

キャス狐「マスターのお嫁さんのキャスターです」

アテナ「劉ちゃんの正室のアテネです」

ゼロ「…ゼロだ」

コダイ「以下、まともな奴一名とそうで無い奴四名だ」

まともで無い奴「……っつて、おい！」「」「」

レイ「りゅうクンはじめまして！レイです！」

劉「ああ、そう言えばこうやって顔を合わすのは初めてだったね、よろしくねレイ（レイは癒されるな）」「（ニコッ）

レイ「えへへヨロシク」

クリス「チョット、レイ！貴女何で速攻で私の劉ちゃんを口説いてるのよ！！」

レイ「ふえ？」

クリス「なにが『ふえ？』よ！このぶりっ子「クリス……」って何よ！？」

コダイ「…もし大人しくしてればこの写真を焼き増しし劉とゼロ以外に送るが？」（劉に見えない様にあの時の『白ゴスで上目遣い＋涙目＋赤面の劉』の写真を見せる）

劉とゼロ以外「……」サイイエッサー！！「」「」

レイ「あれ?……」

クリス「何でもないのでレイちゃん デバイス同士仲良くしましょ?」(写真の為に!)

レイ「うん!よろしくね!クリスおねーちゃん!」

劉「ク、クリスが……コダイ君何かした?」

コダイ「なにも?」

メガネ「あゝこれがギャグ補正つてやつか……ホントに治ってるよ」

フィオネ「コッチの作者もしぶといわね……」

コダイ「こいつだからだ」

キヤス孤「なるほど」

メガネ「納得しないでくれる!?!てかさッチのエロトよりマシだと思っけど!?!」

アテネ「エロト?そんなのいたかしら?」

ゼロ「そんなのは知らん!?!」

コダイ「……呼んでみた」

エロト「オリ主のタカトです」（キラッ）

劉達「……何で呼んだ!?!?」「」「」「」

コダイ「ん?面白そうだから?」

メガネ「でも、もう終わりだけどね」

エロト「ハアッ!?!『超極上のDSの子』に会えると聞いて飛んできたのに!?!?」

コダイ「目の前にいるだろ?」

エロト「何言ってるの?おまえは男だろ?」

〈劉達轉移〉

メガネ「よし！最後の締めだ…レイ」

レイ「みなさんのいけんやかんそうをイロイロ待っています！」

コダイ「今回の後書きは過去最長じゃないか？」

〈次回もお楽しみにしてください〉

瀕死 進化はお約束byコダイ(前書き)

二度目の守護騎士戦です。

熱い展開になりました……………かな？

連投します。

瀕死 進化はお約束byコダイ

アレから数日、なのはとフェイトのデバイスが治ったらしく二人は本局に、俺とクロノ、リンディはハラオウン家のリビングで闇の書について話していた。

「で、どうだコダイ、何か掴めたか？」

「いや、情報が少なすぎて…似たようなのしか」

闇の書、守護騎士、ヴォルケンリッター…これだけでは足りない。

「管理局に無いのか？もつと情報が」

「一応『無限書庫』があるが…中身のほぼ全てが未整理のままですぐ手つかずなんだ」

「ダメじゃん管理局」

「後で、フェレットもどきに頼もうと思ってる」

「フェレットもどき？……ああユーノね」

本人聞いたらキレルな……

「スクライアー族の本業は探索や調査だから」

「つまり望む所か……」

「後、君のベアトリス式にも役に立つと思うぞ」

それは、ありがたい……

「所でリンディ、なのはとフェイトのはどうなんだ？」

「なのはさんとフェイトさんは今、デバイス受け取って今コッチに戻ってるって。説明はコッチでするつもり……二人とも驚くと思うわ」

なんか楽しそうなりんディ。

二人のデバイスにはカートリッジシステムが積んでいるんだっけ？

いいな、わたしもきょうかとかできたらな

レイがむくれていた……

「レイにはエクステンドがあるだろ……」

「エクステンド？」

ふにゆ？なにそれ？

クロノとリンディが首を傾げている…ってレイ、当の本人が知らないのかよ。

「プレシア・クローンの時にレイとのシンクロ率が設定値を突破した時に発動したんだよ……そのお陰でジュエルシード封印出来たんだ」

「つまり、レイは進化するタイプのデバイスか…今まで見たこと無いな」

「使用者と共に成長するデバイス…まさに相棒って事ね」

よゝし！エクステンド！

シ

ン……

……………あれ？なんにもおきないよ！

「シンクロ率が設定値を超えないとダメだって……………ッ！！」

その直後警報が鳴り響いた。守護騎士か……………

「至近距離にて緊急事態！！」

警報と共にエイミィが映っているモニターが現れた。

「都市部上空にて、搜索指定2名の補足しました。現在、強壮結界内部にて待機中です！」

新しく現れたモニターには現場にいる魔導師だった。

「相手は強敵よ、交戦は避けて外部から結界の強化と維持を！！」

「はっ！！」

「現地には執務官とベアトリスさんを向かわせます」

流石提督、指示が冷静かつ的確だ……………俺の出番か。

「コダイ、行くぞ！」

「分った」

俺はクロノの転移魔法で現地へ向かった。

転移した先には、下方には武装局員がヴィータとザフィーラを囲んでいた……………

俺とクロノはデバイスを起動してそこに向かっていった。

「コダイ、下がってくれ」

言われた様にクロノの後ろに移動すると、クロノは魔法陣を展開して無数の魔力刃が出現させた。それと同時に局員が離れる……………

「ステインガーブレイド・エクスキュージョンシフト!!」

クロノが唱えると魔力刃はヴィータとザフィーラに降り注ぎ、着弾点は大量の煙が上がった。

「はあ…はあ…少しは、通ったか？」

「煙でよく分らないな…」

そう呟いていると煙が晴れる……………

そこには魔力刃が三本程腕に突き刺さってるザフィーラと無傷のヴィータがいた…本当に少し通ったな。

「ザフィーラ！」

「気にするな、この程度でどうにか成る程……………柔じゃない!!」

「上等!!」

ザフィーラは腕に力を込め、刺さっていた短剣を破壊する。たいした怪我を負っていないザフィーラを見てヴィータはほくそえむ……………

「クソッ……………」

クロノがS2Uを強く握りしめた。

「後は任せる！」

「頼んだ！」

俺はバーニアを最大にして二人に向かって突っ込む。

「出力は維持、轆くつもりでだ……………レイ!!」

プラス・ブレイク

「全力で行くぞ……レヴァンティン！」

ボーゲンフォーム
B o g e n f o r m

シグナムがカートリッジを一発ロードして、レヴァンティンの柄頭に鞘を差し込むとそれは大きな弓の形になった。

「アイゼン！こっちも出し惜しみは無しだ！全力でぶち抜く！」

ギガントフォーム
G i g a n t f o r m

何時間にかシグナムのそばに戻っていたヴィータがカートリッジを二発ロードして、アイゼンを巨大な大槌に変形させる……それ質量の法則無視してない？

マズいな……両方とも回避を……

「逃がすか！縛れ、鋼の軛くびき！」

ザフィーラが魔法陣を展開と同時に俺の足元から何本もの糸が俺の体突き刺した……

「抜けない……拘束魔法か……！！！」
刺さった所から激痛が走る。

「翔けよ、隼はやぶさ！！！」

「轟天爆碎！！！」

あつちは待つてくれない……なら。

「真正面から突破する！」

俺は現時点で込めれるだけ魔力を込める……………

バニシング……………

バニシングバスター……………反動で狙いがずれる欠点はまだ改善されてない、だが今なら関係無いだろ。

俺の体は今しつかりと固定されているから！

シュッルムファルケン
Sturmfalken

「ギガントシュラアアアアアアアアアアアアアアク！！！！！」

バスタアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！

シグナムの放った矢とヴィータの振り下ろされた大槌が俺の砲撃とぶつかり合う……………

だが、拮抗していたのは少しだけだった……………

砲撃はあっさり押し切られ……………

「ガハッ……………」

矢は胸に突き刺さり……………

ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！

振り下ろされた大槌でビルごと叩き潰された……………

ヒック…………ヒック…………

誰か…………泣いてる？

俺は……………そうか、あの時一回死んだんだ。

「アクセルシューター!!」

「プラズマランサー……………ファイヤー!!」

なのはとフェイトの声が聞こえる、戦っているのか?……………ああ……………
クソ。瓦礫の下敷きになって何も見えない。
体も殆ど瓦礫で潰れてもう一回死にそうだ……………

ヒック……………コダイイ……………

「レイ?」

さっきの鳴き声はレイか…？ と言えば何で泣いてるんだ？

「コダイ！？ いきてるの！？」

「一応な、こつから抜けてなのはとフェイトに合流するぞ」「ふえ！？ なにいつてるの！？ そんなケガじゃむりだよ…」

「体は頑丈な方だ」

うそ！ さっきからよんでもへんじなかったもん！

あ… そうだったんだ。

なんで？…

「ん？」

なんで、そんなになつてまでたたかうの？

……… そんな簡単だろ。

「強くなりたいからだな」

つよく？

「強くなれば… こんな悔しい思いをしなくても済むからな」

うん、くやし…… じゃあ、わたしもつよくなる！

「そうか」

わたしもつよくなる！ コダイがこんなめにあわないように……
いっしょに！

「じゃあ… 強くなるか……… 一緒に」

……… うん！

あ…… ヤバイ…… 意識が……

ク
ス
テ
ン
ド
...: デバイスとのシンク
ク
ロ
率
の
設
定
値
を
突
破
し
ま
し
た
...
...
E_エ

x
t
e
n
d
『 起動します』

瀕死 進化はお約束byコダイ（後書き）

メガネ「今回は連投なので感謝コーナー、マーボー様、ユタ様、ながもく様、龍賀様、杉並様、感想をありがとうございます！」

シ～ン…

メガネ「えっと……ユタ様からは『ユタの弱点情報』、龍賀様からは『龍斗の女装した写真』、杉並様からは『脇巫女コス』を貰いましたどうもありがとうございます！」

シ～ン……

メガネ「えっと……ゲストなんですけど連投の最後に紹介します
……一人は寂しいorz」

「次回もお楽しみにしてください」

新能力の初発動には暴走が付き物bYコダイ(前書き)

連投です

まだ続きます…

新能力の初発動には暴走が付き物b yコダイ

人殺し！

それがどうした？

何で…殺したの！？

貴様には関係ない

私の……………なんだよ！？何で？

殺すのに理由なんていらぬい…殺したいから殺したんだ

許さない……………殺してやる！！！！

……………殺^ヤつてみる……………

・・・・・・・・・・・・・・・・

「え？」

「コダイ（君）！！！！」

扉が開くと同時になのは、フェイト、アリシアが俺に向かって飛びこんで・・・・・・・・

はい、一回死にました。

「コウウウ」

そして、涙目になってる三人……なら抱きついてないで離れてくれ、顔に出ないけどすごい痛い……

「コダイが目を覚ましたって！」

「本当ですか!？」

次に飛びこんで来たのはアルフとリニス……そのままコッチに向かって……

その柱から一筋の光が走ると、その柱も消えてしまった。

そして映像が切り替わり、映っていたのは、本を持っている女……つまり四人目の守護騎士とその守護騎士にS2Uを突き付けてるクロノがいた。

だが、何処からか現れた仮面をつけた男のとび蹴りによってクロノはフェンスに叩き付けられた……

「貴方は……」

「使え」

「えっ……」

「闇の書の力を使って結界を破壊しろ」

「でもアレは！」

「使用して減った頁はまた増やせばいい……仲間がやられてからでは遅かるう……」

「……っ！」

仮面の男と守護騎士が何かを話し合っていると、上空からあの光が落ちて来た。

「っ！！……何者だ……」

仮面の男が光が落ちて煙が上がっている所に近づいた瞬間……

「グアッ……ガアッ……！！」

首を掴まれ持ち上げられた……そして煙が晴れるとそこには……

金色に輝いてる、装甲を纏った……俺がいた。

「……！！！」

男を投げ飛ばす……

「グアアアアアアアアアア！！！！！」

仮面の男はビルに激突、そのまま貫通してもう一つ向こう側のビルに激突した。
ちよっと待った、全力で投げ飛ばしても貫通はしないぞ？激突はするだろうけど…………

「この化け物が！」

叫び声と共に俺がバインドによって何重にも拘束された、その背後には仮面の男が…って、投げ飛ばされたんじゃ。

「

！！！！」

「何い！？」

仮面の男が驚愕の声を上げる……………バインドが突然煙をあげて……………溶解した。

「

！！！！」

「クツ……………」

俺が後ろの仮面の男に気付き、突っ込むが仮面の男は上空に逃げた…だが俺は更に上空にいた。

「クソッ！」

仮面の男は魔力弾を打つが、それも俺に触れた途端溶けて消えた。そのまま仮面の男の腕を掴み地面へ叩きつける……………

「ガアッ！！！」

休む間もなく、男を片手で掴み上げ、もう片方の手を男の眼前に翳

ケツトが灼熱を帯びた金色になりあらゆる魔法を溶解する」

「暴走……………オーバーロード」

「コダイ君、金輪際これを使用する事をやめてください」

「やめると言ってもやり方が分らないし……………レイ、どうなんだ？」

ん……………と、私にも分らないな

「そうか……………一応、今回の『エクステンExtend』で手に入った機能を

教えてくれ」

OK ……まずは総魔力量が上がったよ

「どれぐらい……………レイ」

ふにゅ？どうしたの

「……………少しだけ流暢になって無いか？」

え？…あ、本当だ

後、鳶が肘まで延びてる……………

新能力の初発動には暴走が付き物byコダイ（後書き）

メガネ「新能力の暴走は中二病のデフォ！」

コダイ「俺に言わせれば直ぐに使いこなせたなのは達の方がチートだと思うのだが……」

メガネ「仕方ない、そこは経験だから。そして！新生レイ・モモ・ブラッド誕生」

レイ「やつほ〜 少し上手く喋れる様になつたよ〜」

コダイ「それでも性格は変わらない……」

レイ「ふにゆ？」

メガネ「さて、今回は『エクステンend』などについてだ！」

〜次回もお楽しみにしてください〜

『エクステンド』などの追加設定（前書き）

追加設定です……

P V 5 0 0 0 0 0 ユニーク 4 0 0 0 0 0 突破しました！

『エクステンド』などの追加設定

メガネ「さて、今回は無印でもあった『エクステンド』についてです！」

コダイ「やっと紹介出来るな」

メガネ「実は素直に忘れていて、無印終了時にやる筈だったり……」

レイ「あう〜早く〜」

コダイ「これが『エクステンド』だ」

『エクステンド』
Extend

コダイとそのデバイスのレイのシンクロ率が規定以上を越すと、能力・性能・容量・形状が増える。

レイはコダイと疑似神経で、肉体と融合しているので普通のデバイスと違い強化が出来ないのでこの形で強化される。

コダイの初期値は147%

最初の『エクステンド』
Extend』二度目のプレシア・クローン戦の時、設定シンクロ率は200%

・再構成機能（破損のレベルに応じて魔力を使うが完全に修復出来る）がコダイの傷は治らない。

・封印機能（通常のシーリングモードと違って特殊な波長を出してロストロギアから吸い寄せられるように封印して回収する）

・形状変化（手首が覆われる感じになる）

コダイ「初期値が高い…」

メガネ「それはくっ付いてるからね、この位相性良く無いと！」

レイ「コダイと相性バツチリ」

メガネ「ちなみにA・S開始時のシンクロ率は250%」

コダイ「無駄に良すぎ」

メガネ「続いて二回目での『エクステンExtend』だ！」

二度目はヴォルケンリッターとの二度目の戦闘、設定シンクロ率は1300%

・カートリッジシステム搭載

・スタイル・イレイザー獲得。以後、通常の姿はスタイル・プレイザーと呼称。

・イレイザー限定機能『エアージュース』獲得

・総魔力上昇（AAA - S）

・形状変化（金色の蔦が肘まで延びてる）

・フルフラット機能追加（装填しているカートリッジを一度にロードする）

コダイ「軽く 6倍!？」

レイ「すげーい!」

メガネ「んで、能力の詳細ね」

『カートリッジシステム』

右腕の装甲の一部がスライドしてロードする。
手動装填式で最大装填数は5発。

『スタイル・イレイザー』

超高速戦闘形態。

フェイトのソニックフォームに似ているが、コッチの場合は防御は一切捨ててる。

速さはソニックフォーム以上で、先読みの速さで更にそれ以上に動ける。

この状態ではカートリッジシステムと『バーニア』は使用不可能。

（イメージは髪型、服装共にT.O.L.O.V.E.の金色の間）

『エアースューズ』

イレイザー限定の機能。『バーニア』の代わりでもある。

空飛ぶと言つより、空を走ると言つ感じが正しい。

『フルフラット機能』

装填しているカートリッジを一度に強制的に全てロードする機能。

コダイ「どれだけ詰め込んだんだよ……」

メガネ「取り敢えずそれは自覚している！」

コダイ「威張るな！」

メガネ「ちなみにスタイル・イレイザーの姿は可愛いです！」

コダイ「ネタばれかよ……」

メガネ「さてと、本編頑張るか」

コダイ「当たり前的事だろ？」

レイ「応援してください！」

『エクステンド』などの追加設定（後書き）

メガネ「さて！連投も終わり！って事で今回のゲストは「コダイはドコダアアアアアアアアアアアアアアアア！」ウワッ！！」

コダイ「どうした？」

メガネ「えつと…『異世界を渡る』の作者の……ユタ様です」

ユタ「コダイ！俺の情報はどこだ！」

コダイ「ん？もう書き加えたぞ？」

ユタ「orz」

レイ「大丈夫？ユタおにーちゃん？」

ユタ「グハアッ！？」

メガネ「ちょ！ユタ様死ぬから、レイストップ！！」

レイ「ふにゆ？」

ユタ「グ……何のこれしき……」

コダイ「おにーちゃん」

ユタ「グボハアッ！！！！」（吐血）

メガネ「うわぁ……取り敢えず元の場所に返すか……」（ユタを穴に落とす）

（ユタ転移）

レイ「皆さんの意見や感想など色々待っています」

コダイ「こいつは何があってもずれてるな……」

（次回もお楽しみにしてください！）

機種変更は大体二年ごとb yコダイ(前書き)

ちなみに作者の初ケータイは年明けと同時に壊れた事があります…
…

機種変更は大体二年ごとbyコダイ

あの後、フェイトの家に戻り、なのはとフェイトの新デバイスについての説明の後、闇の書について話していた。

守護者達は闇の書に内蔵されたプログラムが人の形を取ったもの、闇の書は転生と再生を繰り返すけどこの四人は闇の書と共に様々な主の下を渡り歩いている……過去の情報を調べても感情が表に出たと言う事は無かった。だが今回は感情がはつきりと現れてる。

シグたんミ……じゃなくてシグナムを弄って時も怒っていたりしたり、ヴィータの時だってあの感情は本物だ……

ちなみにフェイトがその事で自分が人間じゃないと抜かしたからOSHIOKIしてやった……

そして問題は仮面の男……一体何者なんだ？

映像を見ると二人組で戦闘能力はクロノを凌ぐ程……しかし知らない所は何で守護騎士でも無いのに闇の書を完成させたがるんだ？確か、闇の書は主にしか使えない筈。

もしかして闇の書について何か知っているのか？……今度捕まえて絞めて吐かせるか……

今回の件でしっかり体を治す事と言われてリンディが勝手に学校に俺が休むと連絡した。放課後にフェイトとアリシアの携帯を買っために後で店でおちあう予定だ。

なので俺は……

「所でコダイ君は何で怪我してるん？」

「不良と喧嘩した……」

図書館ではやたと話していた。

「流石男の娘！喧嘩もするんやな……で、勝敗は？」

「不意打ちで殴られ、縛られてリンチされた……」

というより男の子の字違くないか？

「わぁ……」

「その後全員半殺しにしたがな」

「うわぁ……………」

嘘だだけ。

「それで、はやては何の本を読んでるんだ？」

「料理のレパートリーを増やそうと思うてな……………これや！」

はやてが取ったのは『本格和食特集』だった……………

「ああ……………この程度なら二年前に全部作ったな」

「なんやて!？」

「ん？」

「こんな、難しそうな物を作ったんか？」

「いや、基本抑えていればこれより手軽に作れるぞ？大体本格とか言ってるけどただ食材を専門ものを使ってるだけで、スーパーで買えるモノでこれ以上のもの作れる」

「なんやコダイ君……………」

「何だ？」

「お母さんみたいやな」

……………他人にも言われました。

コダイはお母さん？

違っから……………

「どう見間違ったらそう見える……………」

自覚してるけど聞いてみる。

「顔、長髪、声、スタイル、雰囲気や」

「それ、全部と言えないか？」

「性格が抜け取る、頭も良いし運動も出来る、料理の腕が半端無い。顔も超が付く美人顔だし……………髪で分らんけど、髪綺麗やし、スタイルも細くてマニアにはたまらんし、纏う雰囲気は何処となく大人つて感じで完璧なのに……………何でそんな性格になっけしもうたのか……………」

……………」

「学校で俺は『性格最悪の完璧超人』と言われてるぐらい性格悪いぞ?」

「なんやそれ！的をド真ん中に射ぬいてるやる！？それしか考えられへん！しかも何でコダイ君はそんな不名誉を誇らしげに語つてるの！？」

「全く持つてその通りだからさ。情報提供して頭を上がらなくしたりとかなどを色々と…これで性格が最悪じゃないと言えるか？」

「情報提供だけ？それ位だったら………って言うるか　　！！」

ノリツツコミ………流石関西人。

「なんやねんその情報提供って！」

「………実際見せた方が良いか」

俺は『DEATH NOTE』を手にした………

「はやては昨日（ピ　　）を「何でしつとるん！？／／／／」

ん？俺は顔と名前が分れば知れない事は無い」

「そ、そうなんか………何か敵に回したら行けん様な気がする……」

「そうでも無いぞ？………味方でもコレで弄るし」

「性格悪！？そんな綺麗な顔してやる事黒！？………って髪で顔分らんかった！！大体何でそんな顔を隠す髪型なんや！前鬱陶しいやる！？貞子か！？」

「よくそんなに突っ込めるな……」

「それは、コダイ君が突っ込み所満載なんや！」

成程…別に隠してる訳じゃない…特に理由は無い、この髪型に慣れたから。

「そんなに見たいなら見るか？」

減るもんじゃないし………

「ホンマ！？チヨイ待ち、いま写真取るから………」

と言って慌てて携帯を取り出すはやて。

「ええで準備OKや」

「分った」

俺は前髪を避けて、顔が見れるようにした。

「！？／／／／」

あれ？固まった………

「はやて?」

「ひゃうつ!?!?!?!(ア、アカン……なんやあの美人。お人形さんみたいでござつう抱き締めたい。ウチより小さいと思うしノノノノノ)」

……………面白いな。

「で、写真は撮れたのか?」

「あつ!コダイ君もう一回お願い!」

「いや、撮れよ……………」

別にいいけど……………

はやてが写真を撮った頃。丁度いい時間なのではやてと別れ、携帯シヨップに向かった……………

なのは、アリサ、すずかにフェイト、アリシアが加わった五人娘と一緒に形態を探し、リンディとプレシアが後ろで楽しそうに見ていた。

「所で、二人は候補は決まっているのか?」

「うん、一応決めてるよ」

「これだよ」

そう言つて、フェイトとアリシアが取つたのは二人とも黒い機種だった……

「黒好きだな二人とも……」

「そ、そうかなノノノ」

「えへへ、コダイの色ノノノ」

確かに何時も黒づくめだけど……

「くっ……アタシは先月変えたばかり……」

「いいな〜フェイトちゃん、アリシアちゃん」

「私も今度は黒にしよ〜と」

何か後ろでブツブツ言ってるのは無視！

「コダイ君は変えないの？持つてる携帯ボロボロでしょ？」

リンデイが後ろから覗き込んできた……確かに前の世界で使っていたから。

「まあ……2年以上使ってるしな」

そろそろ変えるか……

「えっと……これでいいか」

適当に見て、一番惹かれた白い携帯を手にとつた……

その後プレシアも携帯を選び……と言うより、フェイトとアリシアが選んだのにして（フェイトとアリシアと同じ機種の紺色）一緒に購入、お互いにアドレスを交換して。

アリサとすずかは用事、リンデイも用事で本局、なのはとフェイトとアリシアは携帯の操作を覚えるために翠屋に。

俺はベアトリス式の新魔法開発の為にプレシアとフェイトの家に向かった。

「……よし、完成だ」

新たにもう一つの魔法を完成させた。

「はあ……相変わらず、ふざけた魔法ね……」

実際これも、図書館でケーキの本でミルフィーユを見て考えた魔法だし……

「コダイ、絶対安静って言われなかったけ？」

子犬フォームのアルフが近づいてきたので抱き上げた。

「ん？治ったぞ」

「ほんとに〜」

と言つて、鼻で胸をグリグリ押しつける。

「本当だ……：：：そう言えばユーノは無限書庫にいるんだっけ……」

今度、使わせて貰おう……ん？お前には『シード』があるだろ？いや、あれは実際使いづらいし……

「たつたいま〜」

「遅くなりました」

あ、エイミィとリニスが買い物から帰つて来た。

「あれ？艦長もう本局に出かけちゃった？」

「ああ、確かアースラの武装追加が済んだから試験航行らしい……：：：：：確か武装ってアルカンシエルだっけ？」

「アルカンシエルか……：：：ハア、あんな物騒な物最後まで使わずに済めばいいけど」

「確かにな……：：：」

闇の書を退ける力はあるが結局は解決していない……：：：：：闇の書を破壊するには何かが足りない。

「あのコダイさん、フェイトとアリシアは？」

「ああ、携帯の操作に慣れるために翠屋に、夕食前には帰るようにってリンデイが言い聞かせていたから問題ないだろ」

「そうですか、分かりました」

「後エイミイ、リンデイからの伝言『クロノもないから指揮代行よろしくおねがいします』だって」

リンデイの声で伝言を伝えた。

「せっきにんじゅくだしい」

アルフが煽る。

「物騒な事言わないでよ〜」

そう言いながらカボチャを掴む……………片手で。

「でも、そうそう非常事態なんて起こる筈が……………」

ビー！！ビー！！

「たしかコレってフラグって言う筈だよな？」

「うう……………トドメ刺さないでよ……………」

エイミイは掴んでいたカボチャを落とした……………それを済んででリナスがキャッチした。

モニター室に集まり、状況を確認する……………

「文化レベル0、人間は住んでいない砂漠の世界だね」

「となると……魔法生物からの蒐集か」
モニターにはシグナムとザフィーラが写しだされている。
「境界を張れる局員の集合まで最速で45分……マズいなあ」
エイミイはコンソールを操作しながら作戦を組み立てている。
「エイミイ、俺が出る」
「ちょ！何言ってるの！？コダイ君は絶対安静って言われたでしょ！？」
「時間が無いだろ？それに……」
自分の掌に拳を当てる……
「負けっぱなしは嫌なんだよ……」
誰にも負けるわけにはいかない……例え『自分』でも……
「……分った。けど三つ約束して」
「何だ？」
「まず一つ、あの金ぴかにはならない事」
金ぴかかって……それ以前にやり方知らないし……
「二つ目、最低二人で行く事」
まあ無茶させないためか……
「最後……ちゃんと生きて帰ってきてね」
「分った」
死ねないから問題ないだろ……
「コダイさん、私を連れてってください」
「リニス？……大丈夫なのか？」
「任せてください。そこら辺にいる魔導師には負けませんから」
胸を張るリニスの後ろで『維持するのも楽じゃないけど』とプレシアが愚痴を零していた。
「じゃあコダイ君、現場に送るから準備して」
「分った……」
OK Now Loading…
アクセサ
ロードイング
コンピュータ
Complete
レイを起動してバリアジャケットを纏う。
「進化しても右腕以外あんまり変わらないんだな……」

そう見たいだね

「準備完了だ、後プレシア念の為にフェイト達に連絡を入れてくれ」

「分ったわ」

「じゃあ、行くよ!」

俺とリニスは現場に転送された……………

機種変更は大体二年ごとbyコダイ（後書き）

メガネ「さて、次回はコダイ対シグナムです！」

コダイ「何故ここに？」

メガネ「（シグナムにも此処でフラグを…）」

コダイ「何か言ったか？」

メガネ「いえ！何も！レイ進めちゃって！」

レイ「うん！ユタ様、Little様、田中伸宙様、ソラト様、ながも〜様、感想をありがとうございます！」

メガネ「Little様から、某鍵作品に出てくる学校の女子の制服（ABは通常版とSSS版の両方）一式を貰いましたありがとうございます！」

レイ「わあ〜可愛い制服がいっぱい！」

コダイ「俺はリトバスの制服が良い」

メガネ「俺はABもいいな〜」

レイ「私はクラナド〜」

メガネ「次回は何とスタイル・イレイザーの初登場です！」

コダイ「登場前から可愛いとか言っていたな…」

レイ「皆様の意見や感想などイロイロ待っています！」

「次回もお楽しみにしてください」

何度も言おう…女装はオシャレだ！b y o d a i (前書き)

シグナム戦前です。イレイザーを出すならココで！と決めていました！

何度も言おう…女装はオシャレだ！byコダイ

砂漠の世界に到着してすぐにリニスと二手に分かれて辺りを探した。
「ホントに砂漠ばかりだな…………」

バリアジャケットの隙間に砂が入っちゃうよ

ああ…それは動きずらくなってやだな…………

「新しいスタイル・イレイザーはどうなんだ？」

防御を完全に無視した超高速戦闘形態。カートリッジシステムと
バーニアは使えない、その代わりに『エアージュズ』が使えるよ
「説明頼む……………」

『エアージュズ』は周囲の魔力素を利用して足の裏に足場を形
成して、まるで空を駆ける機能だよ。でも、これはスタイル・イレ
イザー限定みたい

バーニア同様に使い勝手の悪い機能だな…………あ。

コダイ！

「分ってる。シグナムだ…………」

ワームに襲われてる所か…よしこの距離なら問題ないだろ。

『チューニング同調』シグナム」

魔力光を虹色から紫に変える…………

「ガンブレイズ！」

放ったのは紫の散弾…………それは極小の炎となりワームを襲う。

グオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！

断末魔を上げながらワームはこんがりと焼けた…この表現美味しそ

うだな……

「焼きワーム一丁上がりつと」

美味しくなさそうだね……

「そうとも言えないぞ？人は動物や魚とか食べるんだ、虫位食べる所もあるだろう…それに逆に美味しいかも知れないぞ？」

ん…今度作って！

「作れるけど仕入れがな……」

そっかあ…

それよりお前デバイスだろ？……

「ちよつとコダイ君！助けてどうすんの！捕まえるんだよ！つてか何の話をしているの！？」

そんな事を言っているとモニターからエイミィが叫びだした。どうしたんだ？…あ、捕まえるんだった。

「助けないと捕まえられないだろうが…それとも何だ？エイミィはあの女のプレイを視姦してると…鬼畜だな」

「そこまで言っていないよ！」

「言っていないだろ、数秒前の自分の言葉も忘れたか……」

「うう……いじめるよ」

「ああ……エイミィには同情するよ……」

あ、アルフが人間状態でエイミィの頭を撫でてる……

「……礼は言わんぞ」

シグナムがいつの間にか俺と対峙していた……

「助けたのに？」

「蒐集対象が潰されてしまった……………」

「ごめんなさい……………」

突然レイが凄く落ち込んだ声で謝りだした……………」

「あ、いや……………助かったのは事実だが、邪魔をされてしまったから……………」

「そのお相こと言うか……………」

「まあ、落ち着けシグナム。レイはかなり天然で抜けた所があるから……………」

「天然は貴様も同じだ！それよりもその名で呼ぶなと言っているだろ……………」

突然、変な事を叫びだしたシグナム……………」

「……………電波？」

「念話だ！！戦闘位真面目にやれないのか！」

「私達は真剣だよ！」

「真剣に弄る事を考えてるんだ！」

「あ……………シグナムが震えだした……………」

「大体、真面目に戦って面白い所があるのか？」

「取り敢えず聞いてみる……………面白いと思えば行動に移すだけだし……………」

「あるぞ、それは……………」

「……………は？」

「ほえ？」

「強い力を持つ人間を目の当たりにすればどの騎士だって戦いたいと思うだろう……………」

「俺騎士じゃないし、それは多分シグナムだけだ……………」

「テストロッサの時もそうだ……………前回よりも格段に強くなっている……………」

「……………デバイスだけでなくテストロッサ本人も……………」

「……………あの短期間でだ……………」

「……………そうなのか……………まあ善戦してくれなければ鍛えた意味が無くなるし……………」

「……………何？お前がテストロッサを？」

「……………一応、強くなりたいって言ったから……………」

「フフフ……面白い、あの短期間でテストタロツサを飛躍的に強くしたその腕……ぜひともその実力を確かめたい……」

ああ……分った、コイツ……バトルジャンキー戦闘狂だ……しかもとびっきりの。

「実力って何度も手合わせしてるぞ？」

「ああ……だからその時は多対一の時だ……それに……これは憶測だが、貴様は剣をしているな……ついでに言わせて貰うと貴様は明らかに手を抜いている……」

「……流石騎士……ご名答。で何？本気を出せと……」

「その通りだ」

「悪いな、これはもう生まれた時からの癖でな……治そうとも治せないんだ……」

「成程……つまりこういう事か……」

するとシグナムはカートリッジを補充する。

「本気を出させてみると……」
なぜそうなる……

「まあ……コッチも新能力を試して見たかったし……乗ってやる……レイ」

OK 『スタイル・イレイザー』

レイがそう叫んだ瞬間、光に包まれ、直後に一瞬で消え去った……

「ほう……確かに動きやすい。髪型も変わってる……」

次に俺が纏っていた物はレザーの様な素材の黒い服だった。(服装、髪型ともにTOLOVERの金色の闇をイメージ)

「な……な……」

「ん？」

シグナムが俺を指さして震えている……

「貴様男だろう！？何だその女装染みたバリアジャケットは！」

「問題無い、スカートの下はホラ、シヨートパ「見せなくていい！
！／／／」そうか。それに……」

俺は一呼吸おいて叫んだ……これは何度でも言ってる……

……

「女装はオシャレだ!!」

「違う!!!!」

速攻で否定された………

くおまけく

一方リニスにはザフィーラと対峙していたが……

「ジグ……たんミ……………ククッ」

ザフィーラがコダイの「ジグたんミ」発言を聞いて笑いを堪えてた……………

「……………敵ながら同情します」

リニスは心の中で同情していた……………

何度も言おう…女装はオシャレだ！byコダイ（後書き）

メガネ「結局、ギャグ落ちで戦闘開始…」

コダイ「しかも更新遅かったな…」

メガネ「いやさ…親が二ノ国を買ってさ…」

コダイ「それで？」

メガネ「ムズイからやって、渡されて結局全クリする事になった…」

コダイ「…ハマったのか」

メガネ「仕方ないだろ！？映像とか音楽とか殆どジブリの関係だったんだぞ！？ハマるなって言うのが可らしい！」

コダイ「それは否定しない…」

メガネ「だろ？…さてレイ」

レイ「OK マーボー様、感想をありがとうございます！」

コダイ「次回はいよいよジグナム戦だ…」

メガネ「ギャグで落ちるかシリアスに落ちるか…」

レイ「皆様の意見や感想をイロイロ待っています！」

く次回もお楽しみにしてください

見て聞くより体で覚えるb y o d a i (前書き)

久しぶりの戦闘描写…ちゃんとできているかどうか…

見て聞くより体で覚えるb yコダイ

「さて……」

何も無い所踏んでみる……すると足は地面に砂地に降りる事無く空中で止まった。

「これが『エアースューズ』か……」

踏ん張りも利くし……

「……よし」

シグナムに向かって一気に駆けだす。

「何っ！？消えた！」

あ………見えないみたい、このままシグナムの背後に………って

「行き過ぎたあああああああああああああああああああ……!!」
(ドップラー効果)

背後に回ったはいいけどはるか遠くまで行ってしまった………加減
難しいなこれ

「このスピードはまだ無理………少し落として………」
スローナイフ

両手にスローナイフを逆手に持って、一気に切り返し勢いをつけて
シグナムに切りかかる。

「速い!………だが」

ギンッ!!

レヴァンティンで受け止められた。

「火力不足には変わらない!」

「まあ、そうだけど……じゃあ」

『エアースューズ』を使い、シグナムの周りをジグザグに移動する。

「……そこか!」

「はずれ」

背後からの攻撃を勘付かれ、反撃の突きがくるが、それをレヴァンティンの上に乗ることのでかわした。

「さて…これは何だ?」

と俺は何も無い両手を見せる……

「手?………ッ!」

少し遅れて気付く……もう遅い。

バースト

レイの追加詠唱でシグナムの足元に落としていたスローナイフが爆発する。

「クソッ………相変わらず読めない戦い方だ「そうしてるからな」

何っ!?!」

俺はシグナムが上空へ逃げ出し、その後に跳んでシグナムの背後に回り背に手を置いた……

「火力不足はもう解決した……レイ!」

ガンブレイズ

ドオン!!

「グッ………アアアアアアアアアア!」

ゼロ距離のガンブレイズを喰らったシグナムはそのまま地面に叩き付けられた。

「言っただろ？ベアトリスの魔導師に多勢も無勢も関係ないと…確かにミッドやベルカに比べて突飛した性能は無いけどこんな風に罠を張る様にして相手を誘い込んで一斉射撃…なんて事も出来る……いやこれが基本戦闘スタイルだ」
「そう言いながら『エアースューズ』で空中を階段の様に下りて着地する。」

「何だこれは……以前よりも遥かに威力が違う……」
シグナムが少しよるめきながら立ち上がる……

「当たり前だ、俺の魔力が上がったのもあるが、散弾と言うのは距離が遠ければ範囲は広いが威力は低い…だが逆に近ければ全ての散弾を一点に受ける事になる」

「成程……遠くても近くても厄介な魔法だな」

「トリッキーが主流の魔法だからな、それにこれが火力不足の解決方ではないがな…レイ」

スローナイフ

俺の目の前には魔力刃が三本現れた。

「更に新魔法」

ア・サンプル

レイが魔法を発動させるとスローナイフは一つに重なり通常のスローナイフの三倍の魔力刃になった。

「スローナイフ・トリオ」

「ナイフが剣に……」

「勘違いするなよ？これはスローナイフを三つ重ねがけしただけ……」

「つまり」

逆手に持ちかえる……

「文字通り投げて使うものだ！」

シグナムに向かって思いつ切り投げる！

「なら……陣風……！」

Sturmwind

「ストームウィンド」

「ハアッ!!!」

ヒュン!

「遅い!」

ブンッ!!

「フッ!」

ギンッ!!

「鞘!？」

「貰った!!!」

ブンッ!!!

「クッ……コノ!!!」

ドカツ!!!

「グッ……ガハッ!!!」

ザシュツ！！

「！！！」

何合目かの攻防、お互いの脇腹に一撃を与えた後に弾けるように離れた。

「流石、高速戦闘形態……俺じゃなかったら死んでいたかも」

俺は切られた脇腹から溢れ出る血を見ながら言った……内臓行ってるかも……

「ハア……ハア……」

シグナムは俺が蹴りを入れた脇腹を押えていた。シグナムの体には至るところから血が滴り落ちてるが……

さっきの脇腹に加えて右脚、左肩、頭部からの出血に比べたら軽すぎる……ん？それはお前の体質の所為だ？……

……その通りだ。

「その鞘……反則ではないか？」

「それを言うならトキガワも同じだ……何も無い空間を二次元に動かれては捕えようがない……」

「それはそうだったな……」

「フフフ……」

いつの間にかこんな軽口を言い合える位になっていた……つまりアレか？『拳は口ほどにモノを言う』と言うやつ？冗談じゃない、俺はそこまで脳筋じゃない……

「あ……」

マズイな……血を流し過ぎたか。一気に決着をつけるしかない見たいだ……行けるか？……バニシングバスターの零距离射撃……

「デイレイスペル」

右腕に環状魔法陣が一つ現れる……

「強いな……トキガワ……」

シグナムが呼吸を整え剣を構える……

「そろそろ決めるぞ……………トキガワ」

「そうだな……………」

お互いに静かに構える……………

「……………」

「……………」

同時に踏み込む……………だが

ズシヤツ！！

「があ…………あ…………」
「な……………！」

「さあ……………奪え」
後ろから胸を貫かれ、冷酷に言い放った仮面の男によって止められた……………

見て聞くより体で覚えるboyコダイ（後書き）

メガネ「さて、やっと更新できたけど…」

コダイ「何だこれは？」

メガネ「ゴメン、二ノ国や携帯の機種変で間隔が開いた所為でgdgd…」

レイ「感謝コ〜ナ〜　ながも〜様、龍賀様、ソラト様、感想ありがとうございます〜」

メガネ「感想の十割が女装はオシャレネタってどういう事!？」

コダイ「そうだ!女装はオシャレだ!」

メガネ「もうやめてくれない!?!もはやネタになり掛けてるから!?!感染してるから!?!」

コダイ「断る!?!」

メガネ「…………orz」

レイ「えっと…皆様の意見や感想などイロイロ待っています!」

〜次回もお楽しみにしてください〜

普段キレない奴がキレると怖いb yコダイ(前書き)

ソイのマジギコトあ...

普段キレない奴がキレると怖いbyコダイ

「さあ…奪え」

後ろから聞こえる冷たい声……………

ああ、リンカーコアを取り出されたのか。この前の瓦礫で心臓何て無いけどやっぱり痛いな。

「貴様！！」

シグナムが怒っている……………蒐集出来るのに何でだ？

「何をしている……………早く蒐集し……………何！？」

何……………驚いているんだ？

「な……………何なんだソレは……………」

シグナムも驚いてる…ソレってリンカーコアの事か？

「何故……………リンカーコアが半分割れている！？」

仮面の男が驚きの声を上げてる……………

俺のリンカーコアは球体が半分に分れている形だった……………

え？人によって形が違わないのか？

「（何だこのリンカーコアは！？）……………形はどうであれリンカーコ

アには変わらない……………奪え」

「ふざけるな！そんなモノを蒐集したら一体何が起こるか……………」

「闇の書を完成させるのが優先だ……………」

おいおい、そんなモノの持ち主の前で勝手に話を進めるな。

それよりもさつきから胸を貫かれてる俺は放置？

「シグナム……………」

「ト、トキガワ……………」

「良いから早く奪え、リンカーコアが割れようがリンカーコアには変わらないんだ」

「だが、お前の身に何かあったら「問題無い、俺は死ねない」ッ……………」

……………」

シグナムの言葉に被せるように言った……………」

「いいから……早くやれ……」

正直、この状態かなり痛い……

「……………」

「……………分った」

無言のまま見つめ合う事数秒、シグナムが折れた。

「もう、劇は終わったか？」

後ろにいる仮面の男は冷たく言い放つ。

「何だ……おひねりは無いのか？」

「ふん……」

お気に召さなかった？……まあいいか

「リニス、一旦戻れ」

「コダイさん！？どうして!？」

「相手側の目的は蒐集のみだ、もうここにいる必要は無いから」

一旦戻れ」

「しかし……」

「心配するな……俺は死ねない」

「……分かりました。けど、後でクロノ執務官の説教が待ってますよ

？」

「あ……忘れてた」

リニスに念話で伝え戻る様に言った。

「……すまないトキガワ」

「謝るなら早くしろ」

「くっ……!」

Sammlung (蒐集)

シグナムが目を背け、闇の書に命じると。闇の書は怪しく光り、俺の魔力を絞り取って行く………神経を引き千切られる様な激痛が奔る………

「フン……………」

蒐集が終わると仮面の男が腕を俺から引き抜く………それと同時にバリアジャケットが解除される。

「くっ……………」

よし……………まだ動けるな。

「……………待て」

そのまま立ち去ろうとする仮面の男を引き止める。

「何故……………闇の書を完成させ様とする」

さっきのシグナムの口振りからは味方とは考えられないな……………

「知る必要はない……………時を待て、それが正しいとすぐ分る」

「成程……………待てば分る……………訳無いだろ!？」

「グハッ!！」

力任せに仮面の男を殴り飛ばす。

後ろでシグナムが『ノリツッコミ?!』と言っていたが無視。

「……………貴様を絞めればもう一人出てきそうだしそいつも絞めて理由を聞いてやる……………」

「……………その必要はない」

その直後……………魔力弾が数発、俺の体を貫いた。

「クッ……………」

「手間を掛けさせるな」

「スマナイ……………」

いつの間にかもう一人の仮面の男が俺が殴り飛ばした仮面の男を起こしていた……………クソ!逃がすか!

「念には念だ」

「しまった!？」

俺が一步踏み出すとそこから魔法陣が現れてそこから何本の鎖が現れ俺を縛って行く……………設置型のバインド!……………クソツ固い!!

バインドが食い込むごとに貫かれた傷口から血が溢れ出す……………

ドクン！……！！

その時……自分の脈動とは全く違う脈動が聞こえた……

……やっぱり……たしに……

……ん？声……誰の？

いや………が………を持って……

「……………ん」

目を開けると………え？何これ？どうなってるの？

「目が覚めたか」

「シグナム………目が覚める云々よりこの状態は何だ………それとそこにいる女は誰だ」

俺は今シグナムに上半身だけ抱えられた………えっとこれは腕の中？
って言うのか？そんな態勢で、上からもう一人知らない金髪より少し薄いクリーム色のセミロングの女に覗き込まれている………なんなの？

「いや！それは………怪我人を砂地の上に寝かすはどうかと思っただし

………それに………／／／／」

何でそこで赤くなる………

「えっと、初めまして私はシャルといいます。どうしてこうなっただかと言つと………」

………シャルから聞く所によると。

あの後、気絶した俺をシグナムが抱えて治療にシャルを呼んだらしく応急処置が終わった頃に俺が目を覚ました………らしい。

「成程……あ」

レイは大丈夫だろうか？

右腕を見ようとすると、動かす度に激痛が奔るが何とか右腕を持ち上げる……

「あ……」

その右腕は酷いものだった……

シャマルが治療してくれから血は止まっているが、青い宝石と皮膚の間から血が流れ出ていた……

「レイ……」

……

「レイ……」

……

呼んでも返事は無い……

「レイ……」

……スカ〜……スピ〜……スピユ〜

「……へ?」

寝てる?

「デ、デバイスが……寝ている」

「あ、あははは……不思議なデバイスですね……」

シグナムとシャマルがかなり驚いてる。

無理もないか……あ……安心したから眠気が……

俺はそのまま眠りに着いた……

くオマケく

「ねえ……シグナム、この子なんなけど」

「トキガワがどうした?」

コダイが眠りについて少し後、コダイの寝顔を覗き込みながら話し合っていた……

「綺麗な寝顔ね〜」

「た、確かに……」

「お肌も白いし、顔も小さいし、お人形みたいね〜同性でもモテそうな感じね〜」

「……シャマル……トキガワは男だぞ」

「え?……嘘おっ!??」

シャマルは暫く『?』(っ。。(っ)の顔をしていた……

普段キレない奴がキレると怖いbyコダイ（後書き）

メガネ「はい、シグナムどころかシャマルにもフラグ立てました」

コダイ「早すぎないか？」

メガネ「んにゃ、ちゃんと複線があるから」

コダイ「だからその複線って何だよ」

レイ「感謝コ〜ナ〜！ながも〜様、ユタ様、龍賀様、真王様、マーボー様、感想をありがとうございます！」

メガネ「マーボー様の女性陣からチヨコを買いました！ありがとうございます！！」（ジャンピング土下座）

コダイ「それで今回は原作キャラのゲストだ」

なのは「高町なのはです」

フェイト「フェイト・テストアロツサです」

メガネ「さて、今回は真王様からいくつか質問を貰ってます！」

レイ「早速、行って見よ〜」

質問一『なのはとフェイトさんはコダイの訓練はどうでしたか？』

なのは&フェイト「ガクガクガクガクガク……」

メガネ「おわ！？震えてる!?!」

なのは「鬼が……………鬼が……………はっ」(気絶)

フェイト「ムリ……………アレを避ける何て絶対……………きゅ」
(気絶)

メガネ「答えはトラウマに残るほど恐ろしい でした」

レイ「続いて二問目!」

質問二『コダイ、もし女になれる且つ大人に慣れる薬があったらそれを使ってどうするんだ?』

メガネ「これはその薬とセット来てます。さて、コダイの回答は?」

コダイ「取り敢えず、クロノとユーノを弄って。桃子と忍に事前に話して士郎と恭也を弄る」

メガネ「鬼だな……………アレ?オシャレはしないの?何時も女装はオシャレだって言ってるのに」

コダイ「……………女になったら女装じゃなくなるだろう」

メガネ「あ……………」

レイ「最後の質問です！」

質問三『コダイ君はどの人と相性が合うの？次のうちを選んで』

1：坂田銀時（銀魂より）

2：モンキー・D・ルフィ（ワンピースより）

3：孫悟空
ドラゴンボールより

4：ネプテューヌ（超次元ゲームネプテューヌより）

5：神道勇斗（真王様のオリジナルより）

コダイ「で、どんな感じなんだ？」

メガネ「えつと銀さんかな？ポケ合戦とかやって新八を困らせそう
…後ネプテューヌも…二人でいたら危ない（色んな意味で）。神道
勇斗は……ダメだDS同士だから碌でもない事が起こる……」

レイ「詰まるところどうなの？」

メガネ「……誰と居ても碌な事が起きない」

コダイ「まあ、面白ければいいけど」

メガネ「ああ……レイ！絞めちゃって！」

レイ「OK 皆様からの意見や感想を色々待っています！」

なのは&フエイト」「きゅ〜」「」

コダイ「まだ気絶しているよ〜いっしょ」

メガネ「ホツ（O H A N A S H I I されなくてよかった〜）」

〜次回もお楽しみにしてください〜

誕生？b y コダイ（前書き）

こっから本格的に原作ブレイクです。

正直に言つとシヤマルの料理イベントを書きたくて仕方なかったですw

誕生？b yコダイ

えっと…何これ？

「シグナム……」

「何してたんですか……」

俺が見るからには……

「待て、落ち着け！テストロッサ、高町！」

シグたんミ がハイライトが消えた目のなのはとフェイトに睨まれてビビってる……

あれ？俺寝るまでシグナムに抱えられてたけど何で今はシャルなの？

「何でコダイを抱き抱えていたんですか？」

「それはだなテストロッサ。怪我人を砂地に寝かすのはどうかと思つてだな……」

「でも………凄く幸せそうな顔してましたよね？」

「そ、それはだな」

フェイトの尋問に冷静に答えるが、なのはの一言で一步後ずさる…

……

「どうなってるんだ？」

「コダイ君、目が覚めたんですか！？だったらあの子達を止めてください！！」

シャルマルが若干青ざめてる………

んみゃ〜…ふにゅ？………ふえ！？何でなのはとフェイトがここに！？

レイが起きた………と言つかのんきだな。

「コダイ君！？」

「目が覚めたの！？」

俺に気付いた瞬間、二人の目は元に戻っていた。

「もう大丈夫だ………シャルマル離してくれ」

「あ、はい……………」

体を確認しながらゆっくりと立ち上がる、しかし何でシャルは少し残念そうだったんだ？

「度々すまない……………」

「いや、今のはコツチが完璧に悪いからな。借りもある……………だが、礼は言わないからな？」

「それはさっきの仕返しか？」

「その通り」

「……………フッ」

俺がそう言つと、シグナムは軽く笑い、踵を返しシャルと共に転移しようとする。

「ま、待ってください。お願いです、お話を聞いてください！…」
それをなのはが止めようとするが……………

「すまない……………我等には止まる事は許されぬ」

「本当にごめんなさい」

そう言い残し、シグナムとシャルは転移してしまった。

「……………こんなところかな？次に気付いたら、なのはとフェイトがシグナムを睨んでた」

「ありがとうございます。なのはさんとフェイトさんとも話がかみ合っていますね」

その後、転移した俺達はアースラのミーティングルームで今回の事についてリンディに報告をしていた。

ちなみに怪我何だが、シヤマルが殆ど治してくれたおかげで説教は無かったが出血が多かったので、現在包帯だらけです。

「すまなかった…連絡を取ろうと思ったが何者かにクラッキングされてしまった」

「…クロノ、それはさっきエイミイに聞いたから。でさ、何で俺の後ろに隠れるんだ？…それと今まさに襲い掛かるうとしているあの猫女は誰だ」

「……あれがクロスケの言っていた…ジュルリ」

「彼女はリーゼロッテ、そして隣にるのがリーゼアリア。グレアム提督の使い魔で僕の師でもあった。今回、闇の書の探索に協力してくれる事になったんだ」

「へえ……もしかして俺の事話した？」

「ああ、一応な……」

成程……あれがクロノの師匠（？）か……

「君は誰？もしかしてクロスケのコレ？」

「と言ってロッテは小指を立てた…古いな。」

「ロッテ!!何を言っているんだ!!」

「おゝこの反応……凶星か!？」

「違う!!……ってアリアも何納得した様な顔をしているんだ!？」

「いや……お似合いだぞ？」

「何言ってるんだ!コダイは男だぞ!!」

ピシッ!!

あ……これは久しぶりに耳でも塞ぐか。

「でもおかしいわね、向こうの機材は管理局で使ってるものと同じシステムなのに……それを外部からクラッキングできる人間なんて居る物なのかしら」

「弄った後はリンデイがすぐに空気を戻した。さすが提督……それで今話し合っているのは通信がジャミングされた事についてだ。」

「そうなんですよ、防壁も警報も全部素道りでいきなりシステムをダウンさせるなんて……」

「リンデイは首を傾げる、エイミーもその時の事を思い出し、気が付いた事を話す」

「ちよつと、ありえないですよね」

「ユニットの組換えはしてるけど、もっと強力なブロックを考えなきゃ……」

「それだけ凄い技術者が居るって事ですか？」

「うん……もしかして組織だってやってんのかもね？」
「なのはの質問にロツテが応える。」

「後……もう一つ選択肢がある」

「俺の言葉に全員が一斉にこつちを向く。」

「この中に……仮面の男がいる」

「その一言で室内が一気にざわついた……」

「待って!!それじゃあコダイ君は此処に内通者がいると言ってるの!?!」

「落ちて着けエイミー。管理局並みの技術力を持った人間なんてそう簡単に居ない、組織だってそうだ……だとするとこう考えた方が簡単だろ?」

「確かにそうですけど……それには問題点があります」

「ああ……闇の書に対して何らかの感情を持っている局員が多すぎる」

「その言葉にリンデイが頷く。まあ確かにそうになると特定は難しい……」
「でも、一応怪しい人物がいらないか確認してみます」

是非そうしてくれ……

「アレックス、アースラの航行に問題は無いわね？」

「ありません」

「ん、では予定より少し早いですがこれより司令部をアースラに戻します、各位は所定の位置に」

「……はい!!」「」

「後、なのはさんはおうちに戻らないとね」

「はい!!」

その後は何も変化は無く終了した……

俺の予想が正しければ恐らく仮面の男は……確かめてみるか。

「えつと……たしか此処を曲がると」

地球に帰り、適当に準備を整えて、以前はやてから貰った地図を頼りに進んでる。

「かなり大きめのバリアフリーの一軒家がウチやで……ってコレか」

確かに大きいな、ちゃんと八神って書いてあるし……

ピーンポーン

インターホンを鳴らす……………が反応が無かった？
るす？

「かもな……………」

さて、これは予想外だ……………どうしよう。

「……………トキガワか？」

ふと聞こえた念話……………庭の方を見ると。そこには青い毛並みの大型
犬が……………もしかして……………

「ザフィーラ？」

「そうだ」

いたのは盾の守護獣のザフィーラだった。

「よく俺と分ったな……………」

「この家一帯にはシャマルの結界が張ってある」

それで気付いたと……………だがそれにしては警戒心がない……………

「一応……………敵だぞ？」

「今のお前は蒐集されて魔力は無い。それに蒐集は一人につき一
回だ」

つまり歯牙にもかけないって事ね……………まあいいか。それなら……………

「……………はやては？」

「主は入院した……………」

入院？どこか怪我でもしたのか？
病院行く？

「いや、このまま待とう」

入れ違いになったら困るし……………

「所でザフィーラ……………」

「何だ？」

「何で犬なの？」

「狼だ……………これは主が犬を飼いたいと言ったからだ」
それだけの為に……………漢（いん）だな……………それはそうと。

「ザフィーラ、お手」

ポン

「ハッ！」

やった後で気付くザフィーラ……面白……今度アルフの子犬
フォームを教えさせよう……とにかくザフィーラで遊んでよう。

「何をやっているんだ？ザフィーラ」

「ハッ！！」

「あ、さっきぶりですね」

「コダイ〜 久しぶり〜！！」

シグナム達が来るのはそんなに時間が掛らなかった……もっと遊びた
かったなあ……

「なんだコレは……」

「まさかヴィータが……」

まあ、シグナムとザフィーラが驚くのも無理は無いよな……

「えへへ〜コダイ〜」

今、はやての家のリビングでくつろいでるのだが……さっきから隣にいるヴィータが腕にくっ付いてる。

「あのヴィータが主はやて以外に心を開くとは……」

「信じられん……」

「コダイは特別だ!」

何か胸を張るヴィータ何が特別何だ?

「何かはやてといると暖かくなるけど、コダイといると、えっと……

……懐かしい感じになるんだ!」

「懐かしい?」

以前にも会ったか?

「そう考えると不思議だな……」

「そうだな……敵同士であるのにな……」

シグナムとザフィーラが真剣に考えてる……俺は何も感じないけどな

……

「ん〜……あれ?そう言えばシヤマルは?」

夢心地で抱きついてたヴィータがシヤマルが居ない事に気付いた。

「シヤマルなら、そろそろご飯の支度をつて台所に」「何だつて

!?!」「え?」

何だ……この驚きよう。

「やべえ!止めねえと!コダイにシヤマルの料理を食わせてたまるか!」

「どんだけヤバいの?」

「クソ!どれぐらい時間がたった……」

「そんなに経ってはいない筈だ！今の内に止めるぞ
おいおい……………何デバイス起動してるんだよ。」

「お待たせしました〜 よかったらコダイ君も食べてってください」

「……………お、遅かったあああああああ！……………」

三人が嘆く中、ご機嫌に料理を並べるシヤマル……………がこの色彩は料理で合っているのか？

紫の何かや、スカイブルーの何かとか、小豆色の液体とか……………

三人が慌てた理由が分った。

「さ、コダイ君どうぞ」

「コダイ食うな！お前を死なせたくねえ！……………」

ヴィータが俺にしがみついてくる。

「ザフィーラ……………薬箱を……………」

「気休め程度にしかないぞ？」

「……………それでもいい！」

「皆さん酷いです……………！」

シグナムやザフィーラにまで酷い言われよう……………

成程……………シヤマルは料理が下手だと。

「……………アム……………」

取り敢えず、近くにあった虹色の何かを一口。

「……………ああっ！……………」

だから、一々驚くなよ三人……………ん？

「味は変だけど食べれない訳ではないな……………」

不味が特に……………これ位で何で驚く？

「「何だと!?」「」
「本当ですか!?!」

驚いてる三人と正反対に凄く嬉しそうなシャマルが印象的だった。

「アム…料理は経験が物を言うからさ…アム…………次に期待…………
「ごちそうさま」

近くにあった虹色の何かを平らげてから。率直な感想を言った…え
?味?始めから美味しい物を簡単に作れる訳無いだろ……

「…………勇者だ!勇者が此処にいるぞ!」

「やっばお前スゲエ!!!」

シグナムとヴィータの歓喜と…………

「酷いですっっっっっっっっっっ!!!」

シャマルの泣きそうな声が

…………何か面白そうだな。

シャマルの料理は流石に万人向け(そもそも『人』向けでは無いが)
では無いので俺が台所を借りて、シャマルの料理をアレンジして)

勿体ないので。まともな味にした所……

「天使だ！天使が此処にいるぞ！」

「お前メチャクチャスゲエ！！」

「救世主は此処にいた……」

シグナム、ヴィータ、ザフィーラは凄く嬉しそうだった……

「どうせ私なんか……」

「まあ、料理は経験だから。何度も挑戦していけば何とかなるな……

……よしよし」

「うう……コダイくん」

取り敢えず俺は隅っこでイジケているシャマルを慰める事にした……

……

くおまけく

「すう……すう……」

えっと……どうしよう。

食事も終わり、本当に敵同士なの？って言いたい位に普通の世間話とかをして、空が暗くなる頃に帰ろうと思っただら……腕にしがみついたヴィータがそのまま寝てて動けない……

「すまない……トキガワ、今日は……」
「あゝ言いたい事は分った……」
泊まる事になりました……

誕生？b yコダイ（後書き）

メガネ「久々のギャグ落ち！」

コダイ「まさか泊まる事になるとは…」

メガネ「そんな問題じゃねえ！！何でシャマルの料理を食って平気なんだよ！」

コダイ「へ？別に…不味いけど食べれない訳でもないし…」

メガネ「お前の胃袋は何なの！？そしてあえて聞くけどお前が食べれない物は何！？」

コダイ「プラスチックとかガラスとか色々…あと…」

メガネ「もういい！もう言わなくていいから！レイ、進めて！」

レイ「OK 感謝コゝナゝ ながもゝ様、龍賀様、マーボー様、感想をありがとうございます！」

コダイ「もう片方のリンカーコアは何処だ？」

メガネ「まあA・S中に出てくるから安心しろ」

コダイ「そうか…」

メガネ「前はレイがマジギレしたが、今回はコダイがマジギレ？」

次回もお楽しみにしてください

ノイズbyコダイ(前書き)

コダイのマジギレ...

ノイズbyコダイ

kムjnYhbtgrvフエccvftbg船fijwd

今日はそんな感じだよ？

sfへうsvbmzぶそbcsgphわbねrmjsp

ああ……それはやって置いたよ。

xkすい09kん30sばk・ぢあkii；pwba

ん？ああ……そろそろ変わるか。

……ありがとう。

「あゝ……最悪なのかよく分らなくなった」

「よりも寄って『トモダチ』の夢を見るとか……」

「別に……死ななくてもよかったのになあ……」

「仕方ないよね……あの時は子供だったし精神的にも死に掛けたし……」

「……何か出来たのかな？」

『トモダチ』は優しすぎた……優しすぎたから狂いすぎた。

世界は『トモダチ』を棄てた……………

その先がどんなに底抜けで滅茶苦茶になっていようと……………

悲鳴を上げて逃げ回るなどと言う選択肢も無く……………

いつか積み重なった狂気の重さに理性が屈する、その日まで。

それが…………『トモダチ』に唯一残された選択肢だった……………

どんなに汚れようと……………

狂気に染まり…………スガタを変えても……………

「何で……………生きているんだろう」

そう、小さく……………誰にも聞こえない様に呟く……………
ん？何でかって？それはだな……………

「すう……………すう……………」

甘えん坊ヴァイターがしがみついて離れられない……………

「むにう……………コダイ」

ギユ！

前回から離れなくてこのままヴァイターの部屋で寝ましたよ？

それよりも寝る前にチラッとみた棚の上に呪いの白ウサギと黒ウサギが仲よさそうに寄り添っていた……………何なの？

「ん〜コダイの匂いがする〜／／／／」

「うぐっ……ヒック……コダイがあゝ」

「落ちて着けヴィータ！トキガワはまだ死んでない！」

「だって！だって頭が……グシャツ！って！……うわ〜ん！！」

「まさか……二度も助けられるとは……」

「喋っちゃだめです！直ぐ治しますから！ザフィーラ、タオルを出るだけ沢山持ってきて！」

「分った！！」

ヴィータの早朝殺人未遂事件により八神家の朝は賑やか（？）だった……

「何事かと思つたぞ、悲鳴が聞こえた直後にヴィータが血まみれで部屋から出て来た時は……」

「アハハ………シーツを買い替えないと」

治療から数分後、何とか動けるようになったが未だにクラクラする。

ザフィーラとシャマルがかなり疲れた顔をしている………

ヴィータはシグナムと一緒に部屋の血の処理だ。

「けど、どうしてコダイ君は死に掛けたんでしょう……ヴィータちゃん是非殺傷設定にしたって言ったのに………」

これは、言っておいた方が良いかな？

「それは俺の『幻痛』フアントム・ペイン………強制殺傷設定体質の所為だ」

「強制殺傷設定体質？」

「簡単に言えばどんな魔法も非殺傷設定にしても俺が受ければ強制的に殺傷設定になる体質だ」

「ちょ、ちょっと待って！？そしたらコダイ君は……」

「その点は問題無い、俺は死ねないからな」

「死ねないって……」

「さて、この話は終わり。朝食作りたから台所借りるぞ」

「え、ちょっと！」

シヤマルの制止を無視して台所に向かう……

今日は特に過去には触れて欲しく無い……あの夢を見た所為かもしれない……

頭に

ノイズガ……

ヤマナイ……

朝食の後、シヤマルははやてのお見舞い。シグナムとヴィータとザフィーラは蒐集活動をすると言ったので弁当を渡した。

「うう……良い匂い……」

「ヴィータ、我慢するんだ……昼まで我慢するんだ」

「すまない……」

何かに耐える様なヴィータとシグナムと普通に礼を返したザフィーラ……

「何時の間にそんなのを作ったんですか……」

「ん？朝食と同時進行で作った昼食を弁当に詰めただけ、決して残り物ではない」

いざとなれば、夕食の下拵えも同時に出来るぞ？まあ余程凝った物を作らない限りやらないけど……

「あゝ何て言いますかコダイ君……」

「ん？」

シヤマルが頬を掻いて乾いた笑みを浮かべる……

「お母さん見たいですね」

「……………」

言われた……………また言われた……………

「それだー!!」

突然、ヴィータが叫びだした……………

「何がそれなんだ？」

「シグナム、『お母さん』だ！コダイの懐かしい感じは『お母さん』なんだ！」

「何？……………確かに、思い返してみれば母親といた様な気分だった……………」

「あの二人とも、そんなにお母さん連呼しちゃうとコダイ君が……………」

いや、いいですよ？……………慣れてるから。

そんな事があつて、多少慌ただしく三人は転移して行った……………

「それで…はやての見舞いは何時頃行くんだ？」

「えっと、後片付けをしてはやてちゃんの着替えとか」

）

シヤマルが指折り数えているとシヤマルのポケットから携帯の着信音が……………

「あ、すずかちゃんからメールだわ」

「すずか？……………そう言えばこの前友達出来たって言ったけどすずかの事だったんだ……………」

「すずかちゃん、いい子ね……………え?!」

「どうした？」

「コダイ君……どうしよう!」
何か慌ててる……

「待て、一体何をどうすればいいかわからない、理由を教えてください」

「あ、そうだった!コレ!」

シヤマルが突き付けた携帯にはさすがのメールが表示されていた……

『シヤマルさんへ

こんにちわ、月村すずかです。

今日の放課後、友達と一緒にはやてちゃんのお見舞いに行きたいんですが行っても大丈夫でしょうか?』

「何だ見舞いのメールじゃないか……」

「その添付の写真を見てください!……」

「写真?」

言われた通りに添付ファイルを開く……

「あ……」

『もしご都合が悪いようでしたら、この写真をはやてちゃんに見せてあげてください』

そこには、なのは、フェイト、アリシア、アリサ、すずか……そして俺が映っている写真だった……

「ああ……成程。大丈夫だろ?別に戦う訳ではないのだから……」

キング・オブ・お人よしの二人が速攻ではやてを捕まえる訳無いし、第一闇の書の主ははやてと知らないしな。

「うーん、顔を見られちゃったのは失敗だったわ……出撃した時変身魔法でも使ってればよかったわ……」

「鉢合わせなければいいだろ……それかその時は席を外すとか……」

「うーん……石田先生が何て言うか……」

「事前に説明しとけ、名前を出さない様にとか」

「はやてちゃん、変に思わないかしら……」

「他に何かあるとでも?」

「……ないです」

シヤマルの準備が済んだ後、俺達は病院へ向かった……

「って事があつたんですよ」

「ブツ!!」

シヤマルはさつき家であつた『お母さん』の話をしている。

見舞いに来た時はかなり驚いていたが、その後凄く嬉しそうにして
いた…そんなに嬉しいのか?

「お母さん…お母さん…ブツ!!…アカン!ツボツ…ツボ
ツ入った!アハハハハハハハハハ!!」

最初は笑いをこらえていたが、耐え切れず大爆笑するはやて……

「…なア、もう一カ月ほど入院期間延びてもいいよなア」(某アク
セルロリータ張りのドスの利いた声)

椅子を持ち上げる……

「ゴメンナサイイイイイイイ!!」

「待つて!ストップ!落ち着いて!」

器用にベツトの上で光速で土下座するはやて……まあいいか

「冗談だよ……」

「いや、目がマジでしたよ?」

「だったらバインドとかで拘束すればいいだろ?」

拘束目的なら、縛られた跡だけ残るし……

「ん?コダイ君も騎士なんか?」

「俺は魔導師だが？」

「へえ〜……ウチの子以外の魔導師は見たこと無いんや〜どんな事出来るんや？」

「そうだな……一応稀少^{レアスキル}能力持ちだしな……」

…………… そうだ。

「シヤマル、デバイス貸してくれ」

「え？何をするんですか？」

「レアスキルを見せるから……」

「えっと、どうぞ」

シヤマルから首に掛けてた鎖を通した4つの金の輪を貸して貰う。

「えっと……このデバイスの名前は？」

「クラー^{チューニング}ルヴィントです」

「分った……『同調』シヤマル」

俺の魔力光がシヤマルの緑に変わる……いやコレは青磁色^{せいじいろ}だな。

「クラー^{チューニング}ルヴィント……セットアップ」

光りに一瞬だけ包まれ、俺はシヤマルのバリアジャケットを纏い、

髪型は三つ編みにして前に流している姿になった。

「コレが俺のレアスキルの『同調』^{チューニング}だ、一度見た魔力なら完璧に変えられるし、そいつが物質変換資質持ちならソレごと変えられる。それを応用すればこんな感じに他の魔導師のデバイスも起動出来るって所だ」

「凄^{すごい}いんか？」

「凄^{すごい}いと言っか反則」

「だが……これには決定的な欠点がある……」

そう……重大で、決定的な欠点が……

「……俺、ミッドもベルカも使えないから、これだけの能力何だよ

……………」

「「ええっー！」」

「コレのいい所は物質変換が出来る事だけ…返す」

シヤマルにクラーヴイントを返す。

「えっと…ごめんなさい……」

「ウチも…こういう時、どんな顔すればいいか分らん……」

「俺が知るか……でも、とにかく笑うなと言っておこう……」

何故かそう言えと何かが働いた……

アタマノ

ノイズガ……

フエテイク……

その後、シヤマルはなのは達に鉢合わせしない様に先に帰った。

なのは達が来るのはそれから数分も掛からなかった。

アリサには『なんで携帯に出ないのよ!』って殴りかかって来た所をなのは達に止められるが、俺が煽り暴走させて遊んでいた…

終始はやての顔がコロコロ変っているのと……

扉から覗いてるシヤマルの恰好が面白かったと追記しておく……

ノイズガ………キエナイ

「」

はやての見舞いも終わりなのは達と別れて、俺は一人公園にいる……

……

マダ……

キエナイ……

「……………で、何時まで隠れてるんだ？」

瞬間、空の色が変わる……………結界だ。

「……………何時から気付いていた？」

「家を出る時から……………やっぱり監視していたか？」

思った通り……………俺がはやてに近づけば何らかのアクションを起こす。

振り返ると、これまで幾度も邪魔をしてきた仮面の男が二人立って

いた……………

「警告だ……………これ以上アレに深く関わるな」

「こちらの邪魔をしないで貰おうか」

ノ

イ

ズ

ガ

キ

エ

ナ

イ

「うるさいなあ……………」

「口死夕苦ナルホ怒……………」

「ふう……………」

気持ちを落ち着かせるために深呼吸を一つ……………」

「関わるなど言うのは…闇の書について何か知っているのか？」

「それを答えると「思ってるわけ無いだろ」…ではなぜ聞く」

「ワザとだよ。」

「だから俺がある仮説を話す貴様はそれに嘘をついても良い…『はい』か『yes』で答える」

「いいだ……………いや待て！それでは肯定だけだろう！！」

「古臭いお約束を……………」

少し遅れての仮面の男達のツツコミが入った……………」

「良く分ったな……………だがツツコミのが少し遅いな、ノリツツコミにしても勢いが無い」

「まさかのダメだし！？」

「貴様と漫才をするために来たのでは無い！真面目にやれ！！」

「真面目にやっている……………真面目にふざけている」

よし……………調子戻った。

「さて、最初の質問だが……………」

「待て！このぶち壊しの空気を何とかしろ！！」

「あ？俺は空気を読まないから、無理」

「「性質が悪い！！」」

「全く、コレ飲んで少し落ち着けよ……………」

コートからお茶のペットボトルを二人に渡す。

「……………どういっつもりだ」

アレ？怒ってる……………あ！

「ゴメン仮面じゃあ飲みづらいよな、このストローで……こう……仮面との間から」

「そういう問題じゃない！お前も何か言ったら……」

「チュー……ん？」

もう一人の仮面の男は仮面と顔の隙間からストロー通して飲んでい
た。

「飲むなああああああああ……！」

「まず……闇の書を完成させる理由についてだ」
落ち着かせるのに数分掛かったが。さつさと始める……

「これは『闇の書の力を自分の物にする』か『この世界を破壊する』
の二択になる……だが、貴様らにはその選択肢に矛盾が生じる」

「……………」
仮面の男達は黙って聞いている。

「まず『この世界を破壊する』はその行動が問題だ、敵でも味方でも無いような行動を取る必要が無い。そして次に『闇の書の力を自分の物にする』も同じ理由。それに加え闇の書は主以外使えない……自分の物とするなら主を洗脳するしか無い………となる。新たな
に出た選択肢はこうだ………『アルカンシエル以外での対処法を持っている』だ」

「……！」

仮面で分らないが、どうやら凶星の様だ。

「闇の書は完成前だと主以外干渉できない……だとすると完成を見計らって主ごと縛ってブラックホールの的な物に捨てる……と言うのが対処法か？」

「……………その通りだ」

「おい！」

「もうバレたんだ…黙っていても仕方ない」

「此処までする理由は……………復讐か」

「復讐と言えば復讐だな…闇の書は多くの命を奪ってきた、今まではアルカンシエルで消していたがそれもただの先延ばしに過ぎない…だが我らは見つけた、闇の書を封印する方法とその主を……」

「それで、体も不自由な子を闇の書ごと封印してポイツか…それを誰もが望んでいると思っているのか？」

「思わない……………それを偽善と言われても甘んじて受けよう……………だが！このまま放っておくと更に多くの命をあんなものに奪われてしま……う……！」

「貴様のは偽善じゃない……………偽善と言うのは……『人の為の善』だ貴様のは……ただの復讐……いや、八つ当たりだ」

「コノツ……！……………大切な物を奪われる悲しみを……子供の何が分る……！」

黙っていたもう一人の男が拳を強く握り叫んだ……………

「貴様の悲しみなんか知らない……………大切な物が無くなって悲しいのは誰だ……って同じだ、悲劇の主人公ぶるな……………」

仮面の男たちを見下すような目で見る……………

「くだらない……………どんな理由を並べても殺せば唯の殺人だ……それ人の為とか世界の為とか聞くと……正気の沙汰とは思えないね……………」

そつ……………だから俺は殺す時の理由はない……………強いて言うなら『殺したいから』だ……………」

「さて……………俺の話はもう終わりだ。そろそろ出してくれないか？……今日は特に疲れた……………」

「いや、知ってしまった以上帰らすわけには行かない……！」

「残念だが消えて貰うぞ！」

「はあ……………」

ど突いて気絶させれば、結界も解けるか…

「さつきから言いたい放題言いやがって……………そう言う貴様は何だ！
！正義の味方でも言うのか！！」

ブチッ

あ？……………コイツナンテイツタ？セイギ？……………

「クッ……………」

あア……………折角調子が戻ったってのに……………

「クカキケコカカキクケキキコカカキクコクケケケコキクカクケ
ケコカクケキカコケキクククキカキクコクケケクカキクコケク
ケクキクキクキコキカカカカカカカカカカカカカカカカカカ

！……………！！」

今日は唯でさえ機嫌が悪くて、キレかけてのに『セイギ』とか
一番ムカつくセリフを吐きやがって人間のくせによオ……………

「' & % \$ # ” () ’ ” ’ 「

『幻想』が……………

『現実』を犯す……………

「何だ、これは！？」

地面はひび割れ。

遊具は壊れ。

噴水は暴発し、人工的な雨を降らす……

「魔法………違う！魔力なんてかけらも感じない！それにアイツは魔力を………」

あ？何か言ッてる見ただけど………

「まあ………」

ゼン コロ カク テイ………

ノイズbyコダイ（後書き）

メガネ「て、てな訳でコダイのマジギレでした…」（ガクガクブルブル）

レイ「ガクガクブルブル」

メガネ「えつと…ちなみにお茶を飲んでいた男はロツテです…」

コダイ「おい…何であんなキレ方になっているんだ？」

メガネ「いや〜本当は普通のキレ方にしようと思ったけど。これはコダイらしくないなあ〜と思って。とある魔術の禁書目録のアクセラレーターのキレ方にしたらもうピッタリ…ってかその口調やめてください…」（ジャンピング土下座）

コダイ「いいからさっさと始める…」

メガネ「ハイ！レイ、お願い」

レイ「かかかかか感謝コ〜ナ〜。ユタ様、龍賀様、田中伸宙様、ソラト様、ながも〜様、真王様、感想ありがとうございます」（ガクガクブルブル）

メガネ「そして真王様からまた質問を預かっています！」

質問一「コダイは大人になっても女装をしますか？」

コダイ「当たり前だ、女装はオシヤレだ」

メガネ「違うつて……」

質問二『コダイ君はポケモンは好きなの？』

コダイ「ポケモン？」

メガネ「それはカクカクシカジカ……」

コダイ「あ、チラッと見た事がある……えっと小判を額に付けた……」

メガネ「ニヤース？」

コダイ「それだ」

メガネ「なんで？」

コダイ「何か……面白そう」

メガネ「つかポケモン分らないってどついつ事？」

コダイ「知るかよ」

メガネ「……プツ」

コダイ「貴様ア……覚悟出来てンだろつなア……」

口論中……

レイ「えっと……皆様からの意見や感想などイロイロ待っています
」!

〜次回もお楽しみにしてください〜

前回のあの笑いは完璧悪役だった……いいけどb yコダイ(前書き)

前回に引き続きマジギレ& a m p・チート能力披露です。まだ詳しく話せませんが…

前回のあの笑いは完璧悪役だった……いいけどb y o d a i

『セイギ』……俺の一番嫌いな言葉だ。

吐くのも聞くのも嫌いだ……一回だけ『セイギ』と言うか一年中
ミニスカートで過ごすかと言われるれば間違いない即答で後者だ。

『セイギ』はただの行動の正当化だ、自分の中にあるモノ？キチガイ
ですかア？と笑えないのに笑いたくなる。

『セイギ』も『エイユウ』も『キュウセイシユ』も『ユウシ』も何
もかもコロ死タ苦ナル……

そいつをよオ、目の前で俺に吐きやがッて……

誘ってんのかア……？

ザアアアアアアアアアアアアアアアア……

噴水の水が暴発して降り注ぐ人工の雨が辺りを濡らす。

「クソッ………何だコレは！？公園がまるで廃墟に」

「落ち着け！例えソレがコイツの力でも、こいつには今は魔力は無
い！」

あア………そうだった。

「哀れだなア、オイ………本気で言ッてるンなら、抱き締めてキスし
たくなるぐらい哀れだなア」

あ、仮面じゃあキス出来ないか……

「確かに俺は貴様らの所為で魔力が殆ど無い……それに」
レイに視線を送る。

すう……すう……すか

「デバイスもお昼寝中で使えない…けどなア……………」

雨粒が空中で止まる……

「いくら俺が弱くなっても、別に貴様らが強くなった訳じゃあああ
あねええええだろおおおがよおおおおおオオ！あア！？」
雨粒は仮面の男達に降り注ぐ。

ズガガガガガガガガガガガガガツ！！

「クツ！！」

「こんな物っ！！」

仮面の男が一人接近して来た……

「おいおい、何やってんだよ……………」

ジャララララララララララ！！

足を強く踏むと地面から突然鎖が生え、接近した仮面の男を絡め捕る。

「鎖！？一体何処から…………ぐうつ！！」

鎖の一本を引き、仮面の男を眼前へ引き寄せる。

「此処は俺の殺戮何だよ…………観客はとっとと舞台から降りやがれエ
！！」

ゴシヤツ！！！！！！

鎖で宙づり状態の仮面の男の顔面にテレフォンパンチ、ただ力任せの拳を受けた仮面の男は鎖を引き千切りもう一人の男に向かって吹き飛んだ。

「ガハッ！！」

「まったくよオ…この俺がワザワザ前の世界的能力をフルに使って殺してやってんのによオ…もうちょっとこの世界の根性らしきものを見せてくれよなア」

「前の世界？」

「一体何の事を……」

ゆっくりと立ち上がる二人、まあ拳一発じゃあダメージは期待……お？

「良かったじゃねエか、仮面にカツコいい印がついて見分けがついてよオ」

俺が殴った男の仮面には罅が入っていた……

「まア……俺にはどうでもいいけど……だって死体になれば見分ける必要もねえええだろおおおおおお？！?!」

犯せ……犯せ……『現実』を犯せ！！

また鎖が……

いや今度は何も無い空間から突き破るように鎖が大量に現れ。

雨は時が停止したかの様に空中に留まり。

雨で濡れ泥になった土は一定の間隔を持って集まり泥の獣を数十匹創りだした……

「な……何だこれは、レアスキル？」

「コレが仮にレアスキルだとしても……強力な力にはリスクや条件がある筈……なのにあいつは無動作で発動している……」

「ああ〜O H A N A S H I 終わッた？それよりさア……俺を殺すんだろ？だったらよオ……本気で死ぬ気でやる気出せやア！！
あア！？」

ジャラララララララララララ！！

ズガガガガガガガガガガ！！

オオオオオオオオオオオン！！

鎖が、雨が、獣が一斉に襲い掛かる……

「ああ……」

次の瞬間俺が居たのは壊れた遊具の中で比較的無事なジャングルジムの頂上に立っていた。

「何だ何だよ何なんですかア！？俺はまだ0・1%も使っていないだよ、せめて0・4%は使わせるよ三下ア！！」

犯せ！！『現実』を『幻想』で犯せ！！！！

「だったら使わせてやるっ……」

「ああ？」

後ろから来た声に振り返ると仮面の男達が立っていた。

「はっ！！何だよその思わせぶりな登場はア？『それは残像でした』かア？！」

「喰らえっ！！！」

罅なしの仮面の男は巨大な魔力弾を投げつけた。

ドオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！

その爆発で辺りを煙が包む……

「へエ……何だよ、しっかり俺の敵やってンじゃねエか！？」

爆発は周囲の空間に巻き付けた鎖の壁で防いだ。

「……………いねエ」

辺りには人影所が気配すら無かった……………逃げてはいない、それだつたらこの結界は消えてる、となると。隠れて認識阻害か？

「鬼ごつこの次はかくれンぼですかア？童心に帰ったンですかア？俺だけ鬼ツて言うのは虐めですかア？虐めはイケないツてセンセーに教えて貰ツて無いンですかアアアアア！？」

ジャングルジムから降りる……………

グラッ

「……………チッ」

立ち眩みがし、よろめいた。

この能力はただでさえリスクが大きい、それにこの能力で戦うのは何年ぶりだ？正直この能力は使いたくない……………

「面倒臭い……散らすか……」

『幻想』が…『現実』を……

「ガア！！……」

背中に激痛と共に血が噴き出した……

「アアアアア……」

ブシャツ！！メキメキツ！！ゴキヤツ！！

背中を突き破って出来たのは…『刃物』……刃が背中から羽の様に大量に数十条にも及び背中から生え、一対の鉄の羽になった。

ギイイイイイイイイツ！！

金属同士が擦れる特有の嫌な音を立てながら上空へ飛ぶ。

そこには自分が創りだした廃墟があった……

「アア……デジカメでも持つてくれば良かったなア」「

自分の声が重なっている……簡単に言えば扇風機の前でやるアレと似た感じ声質になっている。

「まア……どのみち散らすから良いかア」「

右手で左手首を掴み……

グチャツ！！

肩ごと引き抜き、それを掲げる……

メキメキツ！！ボコボコツ！！

左腕が不気味な音を立てて変異する……

『現実』を犯し、『幻想』を成す……

左腕だったモノは赤黒く肥大し、十メートルを超す巨大な剣に成った。だが…これは剣と言えるだろうか？

風貌はまるで剣に血の滴る肉片が張り付いた様な物で、所々に目玉や口があり口からは不気味な笑い声が出ている…

その剣を無造作に投げる……その剣は一度空中で止まり

アヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤ！！

不気味な笑い声を上げながら、茂みの方に突っ込んだ。

「……へエ」

強烈な爆風から飛び出る二つの影……俺はその近くに降りて行った。

「……みいいいいいいいつけたああああああ……！！」「」
影の正体は当然の如く仮面の男達だ…所々血が滲んでいて多少ダメージを与えたようだ。実際の所そうなる様に加減した、こんなのを殺すのに『秒』もいらない…が。

「……そろそろ殺すかア……っとその前に」

ジャラララララララララララララ！！！！

男達の周りに鎖が生え全身を縛りつける。カードを使って魔法を使ったのを見たから手を重点的に……

その後茂みに突き刺さった剣を見上げると、それと同時に剣のにある口の一つが俺に向かって何か吐きだし、受け取る。それは俺の左腕で、千切った左肩に断面を押し当てると、簡単にくっ付きすぐに動かす事が出来た。

「クソツ！何だこのバインドは！？」

「いくら魔力を流してもバインドブレイク出来ない!?」
「出来る訳ねエだろ…それは真正銘の本物の鎖なんだから」
「ついでに言えば個の羽の刃も本物だ…」
「何だと!? ふざけるな! そんな強大な能力をリスクそんな簡単に
出せるはず無いだろ!？」
「何当たり前を… リスクの無い『力』何てある訳ねエだろ…
…リスクはあるよオ? しっかりあるよオ?」
今もしっかり払ってる。
「クソツ!!! 我らを如何するつもりだ! この化け物!!!」
「おいおい、化け物がやる事はたった一つしかないだろ?」
ゆっくりと近づく……
「人は化け物を殺すのが仕事……化け物は……人を喰うのが
本能」
そして二人の前に立つ……
「さアて………終わりにするか………」
鎖で動けない二人に手を伸ばす………

「……チッ」

が、寸でのところでやめた。

誰かが此処に向かっている……恐らくエイミィ辺りがこの結界を見つけ
たんだろう……

「貴様が逃げた所為で此処がバレた様だな……」
地を強く踏む……

『幻想』が『現実』を犯す……

次の瞬間、公園は何事もなく元に戻った……あの剣も無い……
男を縛っていた鎖も無い。

「ひよっとしたら世界初だぞ？この俺の能力で生き残ったのは、
せいぜい管理局に感謝するんだな」

白けたし……殺してもいいけど面倒臭いからいいか。

仮面の男達はいつの間にか消えてるし、結界も無いし……

「帰るか」

刃は俺の手元から消える度に塵気楼のように消えて行く。

ブチブチッ！！グチャッ！！メキョッ！！！！

「ったく……………これで全部だな」

死ぬ事は慣れてもこれだけは慣れないな…足元には致死量ともとれる血溜りが……………

）

携帯の着信音が鳴った……………えっと相手は…クロノ？珍しいな、いつもは念話なのに。

「クロノ？」

「コダイか？実は頼みがあるんだが……………直ぐ家に来れるか？」

「ん？まあ5分もあれば…どうしたんだ？」

「……………仮面の男の正体が分った」

「……………分った、すぐそっちに向かう」

電話を切る……………

「仮面の男の正体が……………」

俺の予想が合っていれば、あの二人は……………

「クロノ所に急ごう……………」

とりあえず、この血まみれ状態では街を歩けないので屋根やらを伝って向かう事にした……………

ふみや〜…………おはよ〜

「もう夕方だ……………」

ふえ！？

目的地に着く頃にレイは目を覚ました。

前回のあの笑いは完璧悪役だった……いいけどboyコダイ（後書き）

メガネ「はい！コダイのマジギレ回でした」

レイ「した〜」

コダイ「何か疲れた…」

メガネ「んじゃあ今回の後書きは少し短めで」

レイ「感謝コ〜ナ〜 真王様、感想をありがとうございます！」

メガネ「真王様から質問が出てるから張り切って答えよう！」

質問一『作者はStrikerSまでやりますか？』

メガネ「モチロンやりますとも！…けどstsとはかなりかけ離れてるかも知れないけど…」

質問二『コダイ、オメエ甘いもん好きか？』

コダイ「ん？好きだぞ？特にチヨコ系」

質問三『コダイ殿、そばは好きか？』

コダイ「えつと……ザル蕎麦とかけ蕎麦かと言えばかけ蕎麦だな」

メガネ「俺は…どっちも好き、特に天そばかな？基本天ぷらとか好き、特に大葉」

コダイ「俺もだ…片方だけに衣を付けるのが一番いい」

メガネ&mp;コダイ「付けるのは勿論、抹茶塩だ!」「」

レイ「えっと……皆さんの意見や感想などイロイロ待っています
!」

「次回もお楽しみにしてください」

夜天の魔導書 by コダイ (前書き)

闇の書関連について、ここから急展開になるかもしれません

夜天の魔導書byコダイ

家に入る前に怪我の事バレないように包帯を服の下に巻いて、血の処理をしてから入った。

「来たか……早かったな」

「場所が場所だったから少し飛ばした」

「そうか……コッチだついで来てくれ」

リビングにいたクロノの後について行く……

クロノに連れられてやってきたのは変哲もないアースラの一室だった。そこにはユーノがいた。

「久しぶりだね」

「確かに、最近すれ違っていたな……で、クロノ「待ってくれ今認識
阻害の結界を張る」？」

「一体なんだ？クロノに言われたとおりに待つ事にした。」

「……よし、もういいぞ」

「クロノ、仮面の男の正体が分つたって言ったよな？」

「ああ………仮面の男の正体は………リーゼアリアとリーゼ
ロツテだ……」

クロノが苦しそうに言った……

「ちょっと待ってよクロノ！何かの間違いじゃ」

「僕もそう思った……けど調べれば調べるほどその線が強くなった」
「でも………一体何で」

「復讐だ」

ユーノが俺の言葉に首を傾げた。

「リーゼアリアとリーゼロッテの主、ギル・グレアムは11年前の闇の書の暴走で当時の部下………クロノの父親のクライドを死なせてしまった。恐らくそんな所だろ………」

復讐何て……失うだけなのにな………

「クロノ……何時から気付いた？」

「………コダイが仮面の男はこの中にいるって言った時………薄々勘付いていたけどその後本格的に調べてみた」

クロノの表情は未だに重い……仕方ないか。

「ん？そう言えば何でユーノが居るんだ？何も聞いてないぞ？」

「あ、ああそうだった……実は一つ頼みがあるんだ。ユーノ」

「あの情報だね、コダイ」

ユーノに渡された情報にはこう書かれていた………

「………『夜天の魔導書』？」

「うん、今のところ分かってるのは。闇の書つてのは本来の名前じゃない、古い資料によれば正式名称は『夜天の魔導書』本来の目的は各地の偉大な魔導師の技術を蒐集して研究する為に作られた『主と共に旅する魔導書』だったんだ」

つまり………今まで『闇の書』と検索したから駄目だったんだ。

「いや待て、じゃあ何でヴォルケンリッターはその魔導書の事を『闇の書』って言ったんだ？」

「破壊の力を振るうようになったのは、歴代の持ち主の誰かがプログラムを改変したからだと思う、多分ヴォルケンリッターもその時記憶をすり替えられたからだと思う」

結局、人間の考える事は今も昔も変わらないな………

ユーノの言葉を聞いて心の中で愚痴る。

「一番最悪なのが。持ち主に対する性質の変化、一定期間蒐集が無

いと持ち主自身の魔力や資質を侵食し始めるし、完成したら持ち主の魔力を際限なく使わせる、無差別破壊の為にだから………これまでの主は完成してすぐに………」

はやての病気はその浸食か………だとすると時間が無いな。

「頼み事とは『夜天の魔導書』についてシードで調べて欲しい」

「確かに『夜天の魔導書』と調べれば上手く出るかもな……」

よし！久々のシード展開！

「検索ワードは『夜天の魔導書』」

ん〜と………ふえ！？5万件以上！？

「似た様な物は削除、歴史と性能などが載っている物を重点的にだ」

うん！……よし。2000位に絞れたよ！

「全部出せ、こっからはシラミ潰しで探す」

気が遠くなりそうだな………

「どうだ？」

「さっぱり」

「こっちもだ………」

情報をユーノとクロノと分担して端から端まで見てみたが、コッチには当たりが無く二人に聞いてみると同時に首を横に振る………

うう〜ゴメン………

「レイの所為じゃないだろ……………」

「こうやって情報を出せるだけでも有難い……………」

「……………頼みの綱は無限書庫だな」

「うん、もうちょっと頑張って知らべて見るよ」

「俺も別方向から調べてみる」

「ありがとうユーノ、コダイ、レイ。後、あの二人には気を付ける事」

「うん」

「勿論」

俺とユーノは頷く。

「そう言えば……………」

あの後、すぐ家に帰った…と言うより。怪我がばれて強制送還された。

「家に居るのって凄い久しぶりな気が……………」

ん？それは言っではいけない？大丈夫だ、問題無い。

「研究は……………無理だな」

怪我の事は絶対プレシア達に伝わってるし、無理だな。

「……………何か作ろうかな」

少し家を空けてるから冷蔵庫の中身が心配……………危なそうなのは全部使うか。

「野菜は刻んでソースとか常備菜にするか」
野菜を適当に刻む。

リズムカルな包丁の音だけが響く……………

『コノツッ！……………大切な物を奪われる悲しみを……………子供の何が分る！！』

ふと、頭に思い浮かんだのは仮面の男の言葉だった……………

「俺にも大切な物ぐらいあつたさ……………」

目の前で大切なモノを失ったあの気持ちは忘れたくても忘れられな
い……………

「……………ツッ！」

指先に小さい痛み、指を切った様だ……………

『貴様の悲しみなんか知らない……………大切な物が無くなって悲しいのは誰だって同じだ、悲劇の主人公ぶるな……………』

「なんだよ……………俺の方が悲劇の主人公じゃないか」

自分で言った言葉に自己嫌悪。

傷口を洗い流し再び作業を再開した……………

ソースと常備菜を作り終えて、『夜天の魔導書』について情報を整理していると、携帯が鳴った……

携帯を開くと『はやて』と書かれてる、はやては入院中だから恐らくシャマルだろう……

「どうした？」

「コダイか！？頼む、すぐ家に来てくれ！！」

電話の主はヴィータだった……何か凄く慌てている。

「蒐集から帰ってきたらシャマルが料理してんだよ！今シグナムが止めてんだけどよ……お前だけが頼りなんだよ！お前だけがシャマルのアレを平然と食べるし料理もギガウマだし……私達を助けてくれ！！ザフィーラは毒見させられて気を失っているんだよ！！」

ザフィーラ………生きてるのか？

「料理は経験が物を言う………シャマルの腕を上げて欲しければ大人しく実験台になれ」

「そこを何とか」

ヤバイ………涙声になっている

「………分った、今手土産と一緒にそっちに向かうから、それまで生きてる」

「うう………コダイ」

もうちょっと聞きたかったけど、死なれたらはやてが何て言うか……

………先ほど作った常備菜を鞆に入れて、はやての家へ向かった。

くおまけ

はやての家に着くともう手遅れだったらしく、シャマルの料理は完成されていた。

「アム……前より少し良くなった」

シャマルが作った泡が立った緑色の何か食べて一言。

「本当ですか!？」

「分るのか!？」

「後、味付けは少し薄めにして火は弱火で煮込んだ方がいい。その方がより美味しくなるぞ?……このシチュー」

「シチューだったのか!？」

だって僅かにホワイトソースの臭いが……

ちなみにこのシチューは俺が手を加え、普通のドリアにした。

後、ザフィーラは家に来た直後に全部吐かせて治療した。

夜天の魔導書byコダイ（後書き）

メガネ「久しぶりのギャグ落ち!!」

コダイ「しかし…いよいよ大詰めだな」

メガネ「闇の意志との対戦はA・S編が始まる前からかなり考えてる！勿論リインフォース達も生存させるよ」

コダイ「まあハーレムって書いてあったし…ん？達？他にいるのか？」

メガネ「それはお楽しみつて事で…レイ！」

レイ「感謝コ〜ナ〜。龍賀様、ながも〜様、マーボー様、感想をありがとうございます！」

メガネ「マーボー様からタマモ特製のきつねそばと天ぷらのセットを貰いました！」

コダイ「後、ゲストの時のお土産のミックスフルータルトも貰った。これは最後に食べるか」

レイ「いったただきま〜す」（ズルズル）

コダイ「大葉美味しい…」（サクサク）

メガネ「カボチャも良いな」（ホクホク）

レイ「ナス甘い」（アムアム）

メガネ「モグモグ……………」

コダイ「アムアム……………」

レイ「アムアム……………」

メガネ「何か喋れよ!?!」

コダイ「そろそろデザートと行くか……………レイ、最後締める」

レイ「OK 皆様の意見や感想を色々待っています!」

「次回もお楽しみにしてください」

その空気をぶち殺す！！b y r o d a i (前書き)

闇の書発動前ですね…頑張ります！

その空気をぶち殺す!! byコダイ

「……………ハア」

溜息を付きシードが映しているモニターをすべて消す。

「手がかり無し……………か」

アレから数日、あらゆる方向で検索して見ても手掛かり無し。ユーノもまだ見つかって無い様だ……………

いくらシードでも歴史の長い『夜天の魔導書』と『闇の書』の情報は絞れなかったか……………最低でも5桁の情報数から探せって言うのは無理がある。

「そう言えば、今どれくらい進んでいるんだ？」

って流石にそこまでは教えてくれないか……………

「クロノは大丈夫かな……………」

一応バレて無いけど……………

闇の書の浸食具合だと今すぐと言う訳じゃないが油断は禁物だな……………

……………

「誰かを救うなんて、到底無理なんだよ……………」

目の前のたった一つの命も救えなかった『私』に……………

）

ん？メール……………すずかから？

『明日の終業式の帰りの件、みんな大丈夫ですか？』

明日？……………ああ確かはやてにサプライズで会いに行くと言っていたな。

『大丈夫だ』

と返信した。

「プレゼントは……………ん、アレで良いな」
「アレなら盛り上がるし……………」

「さて、もう一度再開するか……………レイ」

OK シード展開！

絶対ある筈だ……………諦めてたまるか。後悔はしたくない……………

翌日、終業式が終わり病院に向かっている最中こんな会話が合った。

「そう言えばアンタはクリスマスとか予定とかあるの？」

「ん？俺か」

「そう、なのはやフェイトとアリシアはもう決まってるって言うってたけどアンタは何も聞いてないわ」

アリサが突然話しだした。

「何も無ければ、今年も翠屋の手伝いだな」

去年はミニスカサンの格好で接客したな。

「へえ〜いつも思うけどアンタの親って何してるの？見た事無いけど」

「あ、私も気になる。遊びに行く時も見た事無いし」

「きつとコダイ君みたいに美人なの」

「うん、それに料理も上手そう……」

「お父さんも男の娘？」

喰いつくなよ五人娘……最後のアリシア、その言葉はリンディかプレシアか？どっちにしる後で締める……

「いない……… 両親は元からない」

「………え………」

やっぱりその反応か………別にいいけど。

俺の両親は………いや、始めから家族なんてものは俺には無い。

「えっと………ゴメンナサイ」

「気にするな、俺が勝手に答えただけだ………」

だから嫌なんだよ過去話は………

病院………はやての病室前。

「皆行くわよ」

アリサの言葉に全員が無言で頷く。

「すずか」

「うん」

「さすが扉をノックする。」

「こんにちは」

……はい、どうぞ……！

「……………こんにちは……………」

「……………ツ……………」

え？……………ヴォルケンリッター（ザフィーラ以外）集合！？

ヤバい、ヴィータは俺は何度もあつてるけど人見知りか激しいし、シグナムも表情は隠れているけど警戒心丸出しだし、シャマルは何か慌ててる様だ……………こうなったら……………

「相変わらず無愛想だな……………シグたんミ」

そう……………シグナムを見てしっかりと……………皆に聞こえる様に言った。

「無愛想なのはお互い様……………って……………だからその名で呼ぶなど言っただろう……………！！……………」

よし！釣れた……………後は……………

「何だ……………シグナム……………シ、シグたんミ って呼ばれてんのか……………」

ヴィータが腹抱えて笑いを堪えている……………

「シ……………シグたんミ……………ブツ……………」

後ろでフェイトが吹き出しそうだった……………

「アハハハハハハハハハッ……………アカン……………ツボやツボ……………コダイ君 ナイスやで……………シグたんミ……………カワエエやん……………」

「あ、主はやて……………？……………」

「良いじゃないですか……………似合ってますよ……………シグたんミ……………」

「シャマル……………！！……………」

「シグナム……………病院では静かにしろ……………」

ジト目でシグたんミを見る……

「誰の所為でこうなったとっ！」

俺だよ？

はやて達に釣られてなのは達も笑った……よし、空気が軽くなった……ん？はやてがこつちを見てる。

「(コダイ君……グッジョブや！)」

サムズアップ……

「(どうも)」

俺もサムズアップで返す……これなら問題ないだろ。

暫く、シグナムを弄ってそっから全範囲に渡って弄ったのは言ってもない……

空気が暖まって、皆でプレゼントを渡した。ちなみに俺は子供でも飲めるシャンパンをプレゼントした。

「……………」

「……………」

……暖まったんだよな？じゃあ何で俺の左腕に抱きついてるヴィータとなのはの間が絶対零度の空間が！？新手の魔導師か！？

「何でヴィータちゃんはコダイ君に抱きついてるの？……………」

なのは……目が怖い、俺も言えた義理じゃないが怖い……

「私が誰に抱きつこうが私の勝手だろノノノ」

睨み返すヴィータ……だが俺からすれば……凄腕が震えている。

「じゃあ、私は反対側からコダイ分補給ノノノ」

右腕に抱きついてくるアリシア……コダイ分って何だ？そんな栄養素あったか？

「「「「あぁっ！？ずるい！」「」「」

「へっへっくん 早いもの勝ちく / / / /」
ちよっと待った！コダイ分は量が限られてるのか！？（突っ込み
所が違う）

ポフッ

ん？後ろから柔らかい感触が……………

「ほな、ウチは後ろからや / / /」

俺の立ち位置がベットの傍だったからはやてが体を起こせば足が不
自由でも抱きつけるよな…………… って何が『ほな』？

「クツ……………こうなったら、なのは！すすか！フェイト！コツチも
応戦よ！！」

何に対しての応戦だよ……………

「「「「オーッ！！」「」「」

え？何でコツチに向かって……………

「貴方達、病院では静かにするものだって言われなかったのかしら？」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！

「ゴメンナサイ！！」

その後、はやての担当医の石川医師のイイ笑顔に絞られたバカ娘共……ちなみに俺は。

「大丈夫か……トキガワ」

「シグナム……コレが大丈夫に見えるなら是非とも管理局の医療スタッフに見て貰うと良い……」

死に掛けども治るから。

「アレがはやてちゃんの言っていた押し競饅頭おしくまんじゅうかしら？」

「いや……ただのリンチだろ……女子に埋もれて圧死とか……」

…笑えないぞ」

ちやっかりシグナムに助けられて無傷だったり。

「こ、怖かったよ」

「自業自得だ……」

抱きついてくるアリシアをかわす。

騒ぎが治まった後、はやて達と別れて帰ったが、なのはとフェイトが忘れ物をしたとか行って病院に戻ってしまった。恐らく闇の書関

連だろ

俺達はそのまま家に帰る事に……まあアリサが半ば強引に引つ張られただけだが……念話で直ぐ行くと言っていたから大丈夫だろ。

「全く二人もドジね」

「あはは……でも二人らしいんじゃない？」

「ん〜そう言えばそうね！」

なのは！フェイト！知らぬ間にバカ認定されてるぞ！？

「あゝ先に言っておくが……宿題は今度こそ絶対ヤレヨ？」

「は、ハイ！！！」

前回（日常編）の様な事は面白いけどゴメンだからな？

「アリシアもだ……もし締め切りまで出来なかったらO S H I O

K Iだからな？」

「はい！！」（ガクガク）

よし、後はなのはとフェイトにも釘を刺さないと……あ、それにリンデイとプレシアとリニスにも言っておこう。その方が俺より効果ありそう……

「ん？………」

視界の端に何かが……アレは？ザフィーラ？………何で慌てているんだ？

「悪い………忘れ物をした」

そう言っつて、ザフィーラの向かった先に駆けだした。

「ザファイラ！」

「む、コダイか……！」

シードを使ってザファイラの位置を検索して、先回りをしてザファイラと並走した。

「何があった」

「通信が取れない」

「通信が？……レイ！」

うん……アレ？なのはとフェイトも連絡が取れないよ！？妨害されてる？一体誰？……行って見るしかないか。

「もしかして、ヴィータがなのはぶっ飛ばしてそのまま交戦……」

……とか

アハハ……まさかね？……ふえ！？

「レイ？」

シグナムとシャマルの反応が……消えた

「何だと！？」

「おいレイ！他の奴の反応は！？」

えっと……なのはとフェイトは魔力の反応が小さいけどあるよ

……ヴィータもまだ無事！後…仮面の男の反応が

仮面の男が……ちよつと待て！何で闇の書を完成させる為に動いてるアイツらが居るのにシグナムとシャマルが消えないといけないんだ！？

なのはとフェイトの魔力が小さいのは蒐集されるから分るが………まさか。

仮面の男が……………シグナムとシャマルも蒐集した？

くおまけく

コダイ逃亡後？のアリサ達……………

「全く！何であいつは何時も何時もいきなり消えるのよ！」

「アリサちゃん、落ち着いて！」

暴れるアリサを落ち着かせるすずか。

「フェイト達……………大丈夫かな」

ピクッ！x2

上の空で呟いたアリシアの言葉に二人は反応した……………

「アリシアちゃん……………何が大丈夫なのか教えて欲しいな」

「す、すずか？」

「そのセリフ……何か知ってそうよね？もしかして忘れ物とかは別で他に用事があるんじゃないの？」

流石天才児……

「え……えっと……ゴ、ゴメンナサアアアアアアアアアアアア
イ……！」

ピュ〜

アリシア逃亡。

「ちよっと待ちなさい……！」

ピュ〜

アリサ追跡。

「二人とも〜そんなに走ると滑っちゃうよ〜……！」

ピュ〜

すずか追跡。

その空気をぶち殺す！！byコダイ（後書き）

メガネ「何かggggdっぽいな…」

コダイ「いつもの事だろ…」

レイ「グダグダ〜」

メガネ「いいよもう別に…」orz

コダイ「さて無視して、レイ」

メガネ「ひどっ！？」

レイ「感謝コ〜ナ〜 ながも〜様、真王様、龍賀様、感想をありがとうございます〜！」

コダイ「シードは確かに欲しい情報が手に入るけど余計な物まで引つ掛かるから面倒臭いんだ」

メガネ「お土産に真王様の所にいるヴァルバトーゼ特製イワシケーキと質問貰いました！」

コダイ「イワシケーキか………」

メガネ「何か喰うのに勇気いる………」

コダイ「何でも美味しく食べれる方法あるぞ？」

メガネ「マジ!？」

コダイ「手順は以下の通りだ……」

1・シャマルの料理を一口でも食べる。

2・その直後にその料理を食べる。

コダイ「こうすれば何でも美味しく感じる!」（ガッツポーズ）

メガネ「一番最初に挫折したんだけど……つか喰ったら死ぬ、それが出来るのはお前だけだと思う」

コダイ「ふうん……………アム……………あ、美味しい」

メガネ「普通に喰ってるし……………次、質問だから早めにね」

コダイ「ん」（モグモグゴックン!）

質問一『コダイ、あんた野球は出来るの?』

コダイ「出来るぞ?学校でアリサやすずかとかに誘われる」

メガネ「ちなみに変化球主体のトリッキーな投手です!」

質問二『もし神に願いを叶えるならどんな願いがいいですか?』

コダイ「神様何て信じて無いが、しいて言うなら殺^ヤラセロ……」（ダーク化）

メガネ「えつと！次！次の質問速く！！！」

質問三『コダイに称号が付くならどんな感じの称号が想像つくんだ？』

コダイ「どうなんだ？」

メガネ「俺は……………『黒い子供』かな？初期設定な感じで」

コダイ「まあ基本黒づくめだしな」

メガネ「（色んな意味での黒だけどな）」

レイ「私は『綺麗なお母さん』！」

コダイ「レイちょっと待て、誰がお母さんだ」

メガネ「コレはA・S編の冒頭辺りかな？」

コダイ「納得するな駄メガネ」

メガネ「テメエ！！strikersで『管理局のお母さん』って二つ名にするぞ！！」

コダイ「小学生か！？」

～口論中～

レイ「皆様からの意見や感想、色々待っています！」

「次回もお楽しみにしてください」

今までで一番喋った様な気がする…b yコダイ(前書き)

闇の意志戦前?ですかね……猫姉妹がどうなるかはコダイの手に掛
っている……はず

前回までの小説を編集して見やすくしてみます。

今までで一番喋った様な気がする…byコダイ

「ザファイラ、居たぞ！」

病院に付き辺りを捜すと真下の辺りに仮面の男達がいた。

「コダイ此処は我に任せろ。お前は仲間を」

「ありがとう」

急降下して行くザファイラ……つと俺も急がないと。

「飛ばすぞ」

OK 『スタイル・イレイザー』

装甲のバリアジャケットがレーザーの様な黒い服に変わる…

イレイザー限定機能『エアースューズ』を使い、空中を思い切り蹴り、なのはとフェイトに向かって突っ込み。

ぶつかる寸前で体勢を変えてなのはとフェイトを脇に抱え近くのビルへ駆ける。

「よし此処までくれば大丈夫だろう…」

病院の近くにあるビルの屋上の病院から影になる位置に二人を寝かせる…

「レイ、二人の状態は？」

ん〜と…大丈夫、魔力を蒐集されただけ

「そうか…でもこのまま放置も危険だな。魔力を回復させないと」

「ただ俺にそんな器用な魔法は覚えて無いし、出来る事は魔力光を変えられるだけ……」

「あ………」

その時、俺が思い出しのはジュエルシードをフェイトと封印した時の事だった…

「そつだ…その手があった」

アレが出来るんなら問題は無い。

『同調』高町なのは

魔力光を桃色に変える……そしてそのまま、なのはに翳して魔力を

送り込んだ。

「くっ……」

さすがAAA…ごっそり持つてかれた…次はフェイトだ。

「『チューニング同調』フェイト・テストロツサ」

今度は金色にしてフェイトに魔力を送る。

「くっ……」

送り終わると魔力が残り少なくなっていた。

「まあこれだけ送れば魔法は使えるだろう……!!」

「うあああああああああああああ!!」

はやての悲鳴と共に闇色の光の柱が登る…

「コレが闇の書の魔力……」

コダイ…ヴィータの反応も…

ふざけるにも程がある…俺の総魔力量よりはるかに超えてるぞ。

「もう完成されたか……!誰か来る」

急いで身を隠し気付かれない様に覗き込む…仮面の男が転移して来た。高みの見物って所か…

「よし、結界は張れた…デュランダルの準備は？」

足元に魔法陣を展開し、結界を張った仮面の男はもう一人の仮面の男に尋ねる。

「出来ている」

もう一人は指に間に挟んだカードを見せた…あれか。

「レイ…」

ディレイスペル

両腕に一つずつ環状魔法が現れる…

「後は暴走開始まで待つて封印「させるか」っ!!」

一瞬…一瞬あればスタイル・イレイザーは十分動ける。

男の一人が持つてるカード…デュランダルの奪い、それを口に啜えて両手を男達の胸に手を添える…これも一瞬があれば可能だ。

「ディレイスペル・アウト」

ガンブレイズ!!

「ぐあぁっ!!」

零距离の砲撃クラスの衝撃を受けた仮面の男達はフェンスに激突する。

「…これがデュランダルね…確かフランスの叙事詩の『ローランの歌』に出てくるローランが持ったとされる聖剣か…闇を討つのは聖なる力って所か？」

口に啜えてたデュランダルを手に持ち替えプラプラさせる。

「それを…返せ!!」

「やだ」

即答で返した。

「と言うより前に俺言ったよな？貴様らのやっている事はただの八つ当たりだつて」

まあ分つててやっただろうけど……

「まあ本心はムカついたから色々邪魔してやるうでいいか」

実際そうだし、何か面白く無さそうだったし……

「そんな小さい理由で……！」

「ふざけるな……！」

二人が駆けだそうとするが……

「ぬっ！？」

「はっ、あっ！？」

周囲に魔力の粒子が現れその直後、バインドで拘束される二人。

「……相変わらずタイミング計った様な登場だな……クロノ」

俺の隣にバインドを掛けた張本人のクロノが下りて来た。

「すまない、僕は空気を読めないらしいから」

「まあ良いけど」

「……ストラグルバインドか」

俺はクロノが使ったバインド見てそう呟いた。

「ああ……相手を拘束して強化魔法を無効化する。使い所はあんまり

無いけど……こう言った局面では役に立つ」

「そっか、魔法を無効化するから変身魔法も解除できるんだ」

「ぐっ……ああああああああ！！！」

仮面の男達は光に包まれ変身が解除される…

そこにいたのは仮面の男では無く……

「クロノ！このおっ！！」

「こんな魔法、教えて無かったよ……」

「一人でも精進しろと言ったのは君達だろ？……アリア、ロツテ
リーゼ姉妹だった……」

「はぁ……見ているんだろ、ギル・グレアム」

俺がそう呟くと上空にギル・グレアムが映っているモニターが現れた……

「リーゼ達の行動は貴方の指示ですね……グレアム提督」

目を伏せ、感情を押し殺しながらクロノは言った。

「違う！クロノ！！」

「アタシ達の独断だ！父様には関係ない！！」

「ロツテ、アリア……良いんだよ」

クロノに反論するロツテとアリアを優しく諫めるグレアム。

「クロノと……トキガワコダイ君だったね、二人はあらかたの事はもう掴んでいる、違うかい？」

「その通りだ」

クロノに変わって俺が答えた。

「11年前の闇の書の事件の後、貴様は独自に転生先を探し出し……そして見つけた。闇の書の主……八神はやてを」

グレアムは黙って聞いている。

「だが、完成前の闇の書と主を抑えても意味が無い、どっちを抑え

ても結局は転生されるだけ……だが、それが完成していれば話は別だ。闇の書は完成すると蒐集活動を行う必要が無いから自ら動く事は無い、その隙に闇の書ごと主を封印する……それがこのデュランダルだな」

デュランダルをグラムに見せる。少し伏せた後、静かに話し始めた。「……両親に死なれ、身体を悪くしていたあの子を見て心は痛んだが、運命だと思った……孤独な子であれば、それだけ悲しむ人は少なくなる」

「……はやてに父親の友人を偽って援助していたのも貴様か？」

「永遠の眠りにつく前ぐらいせめて、幸せにしてやりたかった……偽善だな」

「はあ……」

あまりにも詭えた言葉に頭を抱える……

「封印の方法は……コダイの言った通り、闇の書を主事凍結させて次元の狭間か、氷結世界に閉じ込める……そんな所ですね」

俺が頭を抱えてるのに変わって今度はクロノが話し始めた……

「そうだ……それならば転生機能は働かない」

「これまでの闇の書の主だつてアルカンシエルで蒸発させたりだつてしてんだ！それと何にも変ない！！」

「クロノ、今からでも遅くない、アタシ達を解放して、凍結がかけられるのは暴走が始まる瞬間の数分だけなんだ」

要するに俺が来たのはギリギリだったのか……

「その時点ではまだ闇の書の主は永久凍結をされるような犯罪者じゃない……違法だ」

「その所為で！そんな決まりの所為で悲劇が繰り返されてんだ！クライドくんだつて……アンタの父さんだつてそれで！！」

「………で？それで何か？」

俺がそう呟くと辺りは一気に静まった。クロノには悪いがな……

「さっきから聞いていれば、何だ？『例え悪だと言われても世界を救う』つもりなのか？世界よりまず自分の頭を救ったらどうだ？」

モニターのグラムを見て言った：

「11年もあったのにその間何をしていた、主見つけて凍結封印考えた後は主を覗き見か？歳を考えろ、もっとやるべき事があっただろ」

自分の言ってる事は綺麗事なのは分っている…だけど言わせて貰う。

「大体誰にだって大切な物があるのは当たり前だろ。それが何かを決めるのは個人だし、他人から思えば下らない物もあるのは当然だろ」

俺だって守りたかった物があつたんだ…： たつた一人の『トモダチ』を…

「俺からすれば…貴様らのやっている事は物凄く下らない」

復讐何てただ失うだけ…その所為で俺の『トモダチ』は…

「ヴォルケンリッターがプログラムだろうがはやてにとつては家族なんだ、それを目の前で消しておいて心が痛むやら悲しむ人が少なくなるとか、そんな軽い事をよく言えたものだ…」

何度も…何度も…見た。自分のナニカガ壊れる…

「11年前…クライドが死んだのは…： 闇の書の所為だけじゃない…貴様らが弱かった所為だ」

誰にも負けない力があつたら、誰でも救えると思つてた…

「幸せにしてやりたかったか…はあ、ここまで来るとおめでたい言うか…何か怒る気も失せる…結局は自分が自分で背負った物から楽になりたいだけだろ？それを平和など因縁など響きのいい言葉で被せてどうなる」

でも結局は…力はただ奪うだけだった…

「それに…運命とかで勝手に人を殺すなよ、例えどんな理由があっても人を殺した時点でもう人殺しだ…復讐は何も得られないじゃない、復讐は自分さえも殺してしまう事なんだよ…」

コワレタサキハ…シヨリモオソロシイキヨウキニノマレル…

「お前！！訂正しろ！！」

「これ以上の父様への暴言は許さない！！」

「それにな…これだけは言っておく。貴様らのやった事は…目の前で大切な物を奪った…そう、貴様らの言う『闇の書』と全く変わらないんだよ」

「…っ！！あ…ああ…」

リーゼ姉妹は自分のした事に気付いて震えている…

「……………クロノ」

俺はデュランダルを渡す…

「あそこの影になのはとフェイトがいる…魔力は俺が同調チューニングで送り込んだから、目を覚ましたら普通に魔法使えるだろう」

「そうか…そっちの魔力は大丈夫なのか？」

「問題無い」

バリアジャケットを維持できるぐらいは何とか……

「アリア、ロツテ……二人に一つ謝る事がある」

「「え？」」

二人が声を揃えて言う……

「俺にも大切なものがあつた……いや、それが唯一俺にあるモノだつた。命だろつか何だろつか全てを賭けて守りたいと思つた……」

産まれて初めての気持ちだつた……

「けど守れなかつた……目と鼻の先にあつたのに、俺には手を伸ばす『強さ』も救う『力』も無かつた……だから強くなつた、力になるなら何でも鍛えた。頭も血反吐を吐いても良くしたさ、完全記憶とか瞬間記憶とか……あらゆる才能と呼ばれるのモノを努力で手に入れたよ」

誰にも負けたくないから……負けない強さがあればどんな物でも救えると思つてたから。

「でも……そんな力も……奪う事でしか活かされない。気付くのが遅すぎたんだよ……『力はどう使おうと奪うだけ』つて事を……」

もうその時には俺はただ殺すだけの化け物になっていた……

「俺の方が……悲劇の主人公だつたよ……ゴメン」

可笑しいな……過去話は嫌いだったのに。

「じゃあ……行つてくる」

フェンスを飛び越え、完成された闇の書の元へ向かう。

病院の屋上に……はやてだったモノが一人立っていた。

「また……全てが終わってしまった……一体幾度こんな悲しみを繰り返せばいい……」

「それは貴様次第だ……」

俺の声にはやてだったモノは振り向く……

それにははやての面影は一切無い、体は大人に、髪は銀の長髪に……そして赤い瞳からは涙が溢れ出ていた……

「お前か……」

闇の書に完璧に支配されてる……闇の意志って所か。

「ああ……はやてはその中にいるのか？」

「主は……永遠に覚めぬ安らぎの夢を見ている」

「そうか……なら話は早い……叩き起こして何時外泊出来るか聞かないと」

「……………その必要はない、この世界ももうすぐ滅びる……」
闇の意志が手を掲げる……

デアボリック・エミッション

闇の書が光り、頭上に黒い巨大な黒い魔法球が現れた……

「そんな面白くない事……させる訳にはいかない」
つと言つてもどう戦う？もう魔力はバリアジャケットを維持するぐ
らいしか残ってないし、仮に全快だったとしても、アレに決定打を
負わせる程の魔法何て無いし……
「闇に……」

んゝ……………よし！

「そま……………ッ！！」
まずは全力で闇の意志を殴る……が障壁に防がれた。
「……………殴り倒す」
これしかないな……

今までで一番喋った様な気がする……byコダイ（後書き）

メガネ「今回は…かなり疲れました……」

コダイ「あんな無駄に長い台詞は初めてだ……」

メガネ「それにコダイの過去も少し分って来たしね」

コダイ「まあ…それは良いとして最後のセリフはモロ脳筋じゃないか？」

メガネ「プレシア・クローンの時もそうだったし、別にいいだろ？」

レイ「感謝コ〜ナ〜 ながも〜様、龍賀様、感想をありがとうございます！」

メガネ「さて……いよいよ闇の意志戦ですが……やっぱり無印同様にコダイがボロボロになります……！」

コダイ「威張るなよ……」

レイ「皆様の意見や感想イロイロ待っています……！」

〜次回もお楽しみにしてください〜

壊れた物は殴って直す……ってコレはテレビかbYコタイ(前書き)

未だに余震がありますけど。

皆さんは大丈夫ですか？

壊れた物は殴って直す……ってコレはテレビかb yコダイ

「……………殴り倒す」

って言ったものは良いけど……………この後どうする。

魔力はバリアジャケットを維持出来るくらい……………唯一幸いなのは一番魔力の消費が少ない『エアースユーズ』を使えるスタイル・イレイザーだって事だ。この状態で『バーニア』何か使ったら5分も持たない…

それにまだはやて達を救う方法も思いついて無いし……………え〜と……………

……………あ〜もう!!!

「取り敢えずはやてを殴り起こす!!!」

闇の意志の腕を掴みそのまま……………

「……………!!!」

頭上にあるデアボリック・エミッションに向かって投げ飛ばした。

「魔法が使えなければ相手のも利用すれば良いだけ……………あ」

これ……………俺も巻き込まれるんじゃ……………

死ぬよな……………コレ当たったら間違いなく死ぬよな？

そう思った瞬間、イレイザーの高速移動で病院から一気に離れた……………

「……………撒いたか？」

ビルの影からコツソリと覗く……………そこには傷一つ無い闇の意志が……
……ってアレで無傷かよ……

「魔導師ランクにしたらどの位なんだ？……………」

この前、シグナムに聞いたら俺を蒐集したら90頁だったらしいから、それが666……………

「推定ランク……………SSS+以上……………」

うわ……………凄〜い

「凄いな……………」

どれぐらい凄いのかな？

「……………なのはが逆上がりが出来るとかクロノが空気を読んだりとか
シヤマルの料理とかそれ位凄……………」

すっご〜い！！

「……………俺はレイの方が凄〜いと思う……………」

ふえ？

「え？自覚なし？」

「……………一番凄〜いのはコダイ(さん)だ(です)……………！！……………」

後ろから聞きなれた突っ込みに振り返ると、ユーノとアルフとリニス
がいた……………

「……………いや、一番凄〜いのはなのはの砲撃だろ……………」

此処だけは訂正させて貰……………

「いやいや！なのはの砲撃とコダイはいい勝負だから！」

「て言うかアンタは何で一々ボケ合戦しないと戦えないんだ……………」

「コダイさん！もうチョツとシリアスな空気を保ってください……………！！……………」

「仕方ないだろ？……俺は空気を読まないんだから」

「……なら読んで（下さい）！！」「」「」

注文多いな……………！！

いきなり、周囲が変化した……………何だコレは…

「前と同じ……………閉じ込める結界だ！！」

「完璧に閉じ込められましたね……………」

アルフの言葉にリニスが呟く……………

「そうだ、なのは達はどうしたの？」

「蒐集されて気を失ってる……………魔力は俺が送ったから問題ない。今はクロノが守っている」

確かりーゼ姉妹は暴走が始まってとか言っていたし……………時間が無いな……………

「こうなったら困んで四人でボコるか……………」

なのは達はクロノが居るから問題無いか……………

「その表現はチョット……………」

「モロ悪党のセリフじゃんソレ」

ユーノ、アルフ……………じゃあ他にどう表現しろと？

「でも……………間違っではいけませんよ」

リニスが空を見上げる……………そこには空に飛んでいる闇の意志が……………

「四人掛かりで無いと止められないと思います……………」

そうみたいだな……………

「じゃあ、軽く作戦を練るか……………」

俺の伝えた作戦はこうだ。ユーノ、アルフ、リニスで闇の意志の動きを封じて、俺が全力で殴り倒すと言う、実にシンプルな作戦だ。だが……

「……はあ!!」「」「」

ユーノ、アルフ、リニスがバインドで闇の意志を拘束、その隙に俺が殴りかかるが………

「砕け……」

ブレイクアップ

闇の意志はいとも簡単にバインドを破壊した………三人がかりのバインドだぞ？

「……構わんそのまま殴る!!」「」

「盾」

パンツァーシルト

自由になった片手を前に翳し、現れた障壁によって俺の拳が塞がれた。

「これでも結構本気何だけど……」

目の前の障壁を蹴り、近くの電柱の上に着地した………飛ばない理由は単に魔力の節約の為。

「刃を以て……血に染まれ」

ブルーティガードルヒ

闇の意志の周りに血の様に赤い短剣が現れた……

「穿て……………ブラッディダガー」

その場にいる全員に放たれた……

「規模が多すぎる……………？」

俺達に向かって放たれる赤い短剣……………行ける。

そう思った瞬間、俺はブラッディダガーに向かって突っ込んだ……

一番近くの短剣を踏む……

爆発する直前……………別の短剣に跳び移る……

それがまた爆発する直前に更に違う短剣に跳び移る……

『スタイル・イレイザー』は一瞬でもあれば十二分に動ける……

高速で射出されるブラッディダガーを更に高速で跳び移り……

「一瞬で闇の意志の懐に潜り込んだ。」

「……」

「まずは一発!!」
ブラッディダガーの爆発を背に闇の意志の顔面目掛けて思いっ切り拳を振るい……

ゴシヤツ!!

闇の意志を数メートル先まで殴り飛ばした。

「これなら……」

近くの電柱の上に着地する。

「コダイ!!」

ユーノ達が慌てて近づいてくる……

「無事か?」

「一応は……ってそうじゃ無くてさっき何をしたの!?!」

「ああ……この形態は物凄く速く動けるから、あの魔力刃に跳び移りながら近づいたんだ」

「僕達が防ぐのに精一杯だったのに……」

あ、ユーノが呆れてる……

「と言うか偽婆の時もそうだったけどさあ……実は馬鹿なんじゃ……」

アルフ、それはお前には言われたくない……

「えっと……自分を大切にしてください!!」

いや、無理に参加しなくて良いからリニス……

「でもコレで少しは目を……」

俺が闇の意志に目を向けると……

「咎人達に……滅びの光を……」

え?…効き目無し?と言うより展開してるミッド式の魔法陣に見慣

れた桃色の魔力が集束されている……………

「まさか!?!」

「あれは!?!」

ユーノとアルフが驚いてる……………

「星を集え……………全てを打ち抜く光となれ」

ミッド式、なのはの魔力光、集束とくれば……………はあ!?!

「スターライトブレイカー魔王式超極悪集束砲撃」

酷い当て字だと思うが誰もが納得すると思う。アレを至近で喰らうたら俺、塵も残らない自信ある……………ってそんな事より!!

「リニス!ユーノとアルフを連れてなるべく遠くに行け!俺ならギリギリ引き付けてもかわせる!急げ!!」

「は、はい!!」

リニスはあの魔力に危機を感じて、ユーノとアルフを掴んでその場から全力で逃げる。

俺も『エアースューズ』を使って、リニスとは別の方向に全力で逃げる……………この際節約を考えてる暇は無い。

でも何で、なのはの魔法を使えたの?

「多分…蒐集だ……………本来、夜の魔導書は魔導師の技術を収集し、研究するために作られた収集蓄積型の巨大ストレージだ……………その機能によって蒐集した魔導師の魔法を扱えるんだ」

だとしたら不味いな……………ミッドやベルカなら対処法はあるけど俺のベアトリス式は使い手次第だからな……………我ながら厄介な物を作ったな……………

「今は、射程内から出て、対策を考えないと……………」

「コダイ!コダイ!大変だよ!」

「レイ、どうした?」

近くに魔力反応、多分アリシアでその近くに生命反応が二つ……多分アリサとすずかだよ!!

「あいつら帰ったんじゃないのかよ!? 位置は!?!」

え〜と、え〜と……300ヤードぐらい!!

「300ヤード……274・32メートル」

完璧に射程範囲じゃないか?

後……

「後なんだ? ……嫌な予感しかしないんだが……」

それに……コッチに近づいてるっぽい……

はぁ……

「探して逃がすぞ、ナビ頼む」

OK!

さて……間に合うかな。

壊れた物は殴って直す……ってコレはテレビかb yコダイ（後書き）

メガネ「さて、コダイは間に合うのか！」

コダイ「それは貴様次第だろうが……」

レイ「アリシア達大丈夫かな……」

コダイ「それはともかく……なんだ？スターライトブレイカー魔王式超極悪集束砲撃って……」

メガネ「いやさ……某動画サイトで映画版のSLBの威力を計算動
画を見てさ……思わず……戦略核5 / 5個分とか」

コダイ「それを言うならスターライトブレイカー超極悪無差別集束砲撃で良いだろ」

メガネ「いや、個人的には魔王が付いてないと……」

レイ「ん……スターライトブレイカー魔王なのは交渉術？」

コダイ&メガネ「それだ!!」

なのは魔王「酷いの！？って何か変な当て字があー!？」

メガネ「あれ？何か聞こえた？」

コダイ「空耳だろ……レイ先に進めろ」

レイ「OK ながもく様、龍賀様、感想をありがとうございます！」

コダイ「……よし、希望に答えてアレを物理的な意味で泣かす」

メガネ「その前にお前が死ぬかも知れないぞ？」

レイ「皆様の意見や感想、イロイロ待っています!!！」

く次回もお楽しみにしてくださいく

俺が動く理由……byコダイ（前書き）

後半戦、相変わらずコダイがボロ雑巾に……

俺が動く理由……byコダイ

「この近くか？」

うん、距離18……コッチに近づいてる

レイをナビを頼りに、降りると同時にビルの隙間からアリシア達が

……

「あっコダイ！？………？」

「コダイ！アンタも此処に………」

「大変なの！町の人達が突然………」

アレ？………何で三人固まって………

「……なにその可愛い服！？//////」

「え？ああ………」

そう言えば、イレイザーのままだった……

「どこか変だったか？」

自分的には凄く気に入っているんだが……

「変じゃないよ……変じゃ無くて……太もも////」

「と云うか何でそんなコスプレみたいなを着ているのよ……太ももとか脇////」

「えっと……似合ってるよ！すごく………な、生足////」
えっと……最後の辺りは聞こえなかったけど、評判は良いみたいだな……

「っとそうだった、此処は危険だから今すぐ離れる。質問も意見も反論も意義も許さない」

今は此処から避難させるか……

「ちょっと待った！なのは達は何処にいるの!？」

アリサが突然詰め寄って来た。質問も意見も反論も意義も許さないと云った筈なのに……

「少し落ち着け、さっき安全な場所に避難させたか「スターライト

……………「ブレイカー」!!」

しまった!こうなったら三人を運んでなのは達の所へ……………

ピキピキピキピキ……………パリンッ!!

「バ、バリアジャケットが……………」

バリアジャケットに突然罅が入ると瞬く間に全身に広がりバリアジャケットが解除された……………砲撃はもうすぐそこまで来ている。

「アリシア!確か魔法の訓練しているよな。だったらデバイス無しで障壁張れるか!？」

「え!?!確かに張れるけどアレを受け止める程強く何か無いよ……………」

「じゃあ余波だけは?」

「……………何とかなると思う」

「じゃあ、それでアリサとすずかを頼む」

俺は砲撃に向かって駆け出す……………

「レイ!残りの魔力で右腕だけを起動…出来るか?」

やってみる……………出来た!!!

右腕だけに黒い装甲に覆われる。

「スターライトブレイカーは……………此处で止める!!」

『フルフラット』!!

右腕の装甲の一部がスライドして、カートリッジをロード……………装甲が灼熱を帯びた金色こんじきに変わる。

だな。

「コダイ……アンタその腕……っ！！急いで病院に！！！」

アリサとすずかが急いで携帯を開くが……

「アリサちゃん！圏外になってる！！！」

「嘘！？そんな……！！速くしないと……！」

アリサとすずかが慌てているのをアリシアが落ち着かせようとするが本人も慌てているから、逆効果だった……そんな時。

「皆さん！！大丈夫でしたか！？」

リニスが空から降りて来た。

「え！？あなたは確かアリシアちゃんが言っていたリニスさん？……

……それよりも空から」

「話は後です！今は此処から貴方達を避難させます！」

リニスは急いで三人の足元に転移魔法を展開する。

「ちょ、ちよつと待って！コダイ君が！！！」

「動かすと危険なのでこの場で治療します！後……この事は事態が落ち着き次第必ず話します！」

そう早口で言ったりリニスは三人を安全な場所まで転送した……

「リニス、ユーノとアルフは？」

「二人はフェイト達の所へ……それよりも今は傷を治しますからじつとしていてください！」

リニスは俺に回復魔法をかけるが……

「思った以上に傷が深くて回復が追いつかない……」
「だろうな……此処までの深いと治せないよな。」

すう……すう……

やっぱり、オーバーロードを使うとレイが眠るのか。魔力はもう搾りかす位しかないから意味が無いけど……

「……！」

全身の力を入れてみるが微動だにしない体……動けなければ……動かせばいい……

「お前……その姿は」

空でただ涙を流している、闇の意志と対峙した。

「何でこの世界を滅ぼそうとする……はやてが居る世界だぞ……」
喋れないので念話で話す……

「我が主は、この世界が自分の愛する者達を奪った世界が悪い夢であつてほしいと願つた……我はただ……それを叶えるのみ 主には穏やかな夢の内とわで永久とわの眠りを……そして、愛する騎士達を奪つた者には……永久とわの闇を」

闇の意志の足元に魔法陣が現れた……

「おいおい……まさに闇の書だな」

「お前も……その名で呼ぶんだな……」

いや、さっき自分で闇って言ったじゃん……

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！

突如、大地が揺れ魔力を蒐集した魔法生物の触手らしきものが地面を割り出現した……

ああ、魔法生物を取り込んだらこうなるのか……もう夜天とか言ってる場合じゃないな……

「それでもいい……」

Absorption (吸収)

その言葉と共に自分の体が徐々に光りになって行く……………力が……
…入らない!!クソッ!!

「主はお前を慕っていた……………出来ればお前を殺したくは無い」

突然……………何を言っ……………

「だからせめて……………」

もう意識が……………

くおまけ

なのは達は目を覚ました後、クロノから事情を聞いて。(アリサ達の事も後で来たりニスに聞いた)
急いでコダイの元へ向かった……………

「なのは!あそこ!」

「あ!本当だ、コダイく……………」

ピシッ!!

なのは達が固まった……………

二人の視線の席には、血まみれのコダイを優しく抱き止めてる銀髪の美人が……………

「……………主と共に、我の中で眠るといい」

と言って光りになって消えていくコダイを抱き締める……………が遠くから見たらキスしてる様にも見える訳で……………

「フフフ……………レイジングハート、あの人とチョットOHANA
SHIしようか」

オーライ、エクセリオンモード

なのはの考えを汲んでか最強形態になるレイジングハート……

「チョット待った!! レイジングハート、それはエイミーさんに止められるでしょ!?!」

「フフフフ……バルディッシュ……ザンバーフォーム行けるよね?」
イエッサー、ザンバーフォーム

こちらと同じく最強形態になるバルディッシュ……

「フェイト!? 落ち着いて! 目がコダイみたいに単色になってる! バルディッシュも止めてくれよ!」

問題ありません

「問題大アリだ!!!」

「フフフフフフ……すこし、O H A N A S H I I ヲ
うか?」

俺が動く理由……byコダイ（後書き）

メガネ「シリアス？ギャグ落ちにするのが俺クオリティ！！」

コダイ「魔王と死神の降臨だな……しかし何で怒っているんだ？」

メガネ「（お前の所為だよ！！）さあてレイ、進めて進めて！」

レイ「OK 感謝コ〜ナ〜、龍賀様、ソラト様、マーボー様感想をありがとうございます！」

メガネ「マーボー様から『瑠璃&雫の二人のお風呂に入っている写真（湯気？そんなものはないッ！！）』を貰いました」（ポタポタポタ……）

コダイ「鼻血出すな気持ち悪い……」

メガネ「コレを見て真顔で居られるお前が不思議でならない……」

レイ「えへへ〜オイシイ〜」（アムアム）

メガネ「レイは何を食っているんだ？」

コダイ「劉からのホワイトデーでチョコクッキー貰ったんだよ」

レイ「劉くん！ありがとう」

コダイ「そうか？……さて、闇の書に取り込まれたが……」

メガネ「まあ、どうなるかは俺次第だ」

レイ「頑張るぞ〜」

〜次回もお楽しみにしてください〜

トンネルを抜けると雪国と聞いた事があるがコレは全くの予想外……byコダ

闇の書の内部です……チヨット違う感じにします……

トンネルを抜けると雪国と聞いた事があるがコレは全くの予想外…… b y コ タ ン

「……………」

「コ……ドコ？」

確か……吸収されて……え？生きてる？

「……………」

痛いと言う事は生きているって事か……鎖も羽も無くなった穴から血が溢れ出ている……

「う……あ……あ？」

あれ？喉が戻ってる……って事は結構な時間気絶していたのか……

「取り敢えず……動かないと……」

立てないので這う様に暗闇の中を進む。

「真っ暗だから進んでるだけ分らないな……………レイ」

すう……………すう……………」

「ってまだ寝ているか……」

それはただの夢や！

声？……一体誰の……………と体を引きずりながら考えると該当者が一人浮かんだ。

「はやて……………」

今俺以外に闇の書の内部に居るとすれば、はやて位しか思い浮かばなかった……

こんな望んでない！あなたもおんなじハズや、違うか？

声を頼りに体を引きずる……

私の心は騎士達の感情と深くリンクしています　だから騎士達と同じように私も貴女を愛おしく思います　…だからこそ貴女を殺してしまう自分自身が許せない…

この声…闇の意志？……いや闇の意志は外に居る、とすると恐らく闇の書のシステムの一つだろう……さっきより声が聞こえた、近づいている。

自分ではどうにもならない力の暴走、あなたを浸食する事も、暴走してあなたを喰らい尽くしてしまう事も止められない……

クソッ……近づいてるのは分るがこつ暗闇だと正確な位置が分らない。
せめて明りが一瞬でもあれば……

マスターの言う事はちゃんと聞かなあかん……

そう言うはやての声と共に少し先に白い光が……これなら。
もう崩壊寸前の体を再び鎖を巻き付け無理やり動かす、そしてあの光に向かって走り……

「無理です、自動防御プログラムが止まりません。管理局の魔導師が戦っています、それも……見つけたあ……へ？」
間の抜けた声でコツチに振り返った闇の意志を手加減したが割と本気で殴った……

ドコツッ！！

「止まって……ちょ！？ええっ！？吹っ飛んだ！？それに何でコダイ君が此処におるん？！って言うか何でそんなにスタボ口なん！？」
「理由はそこの根暗で駄々っ子な奴に聞け。俺はもう一発殴れたから終わった……」

うん、気が晴れた。

「何故……ここに」

「何故と言われても……気付いたら此処にいた」
それを聞くと闇の意志はかなり驚いた。

「馬鹿な……あれは覚める事無い眠りの内に終わり無き夢を見る、生と死の……狭間の夢、それは永遠………なのに何故此処に………！！」

話しの途中で闇の意志は突然、目を見開いた……

「何だコレは………お前には………幸せだと思う『過去』が無いのか！？」

「そんなモノ在ってもそれは過去だ、ソレがあるから今があるのに、それに固執してどうする……過去話はアレの次に嫌いだからな」
アレとは勿論セイギの事だ……ヤバイ……またキレそうだ。

「コダイ君………それって……」

はやてが何か言おうとしたが手で制した。

「今は………コレを止めるのは先だ」

「あ………うん！」

少し、寂しそうな表情をしたが直ぐに無くなった。

「外の方……えつと管理局の方!!」

あつ!!

この空間に響く様に声が聞こえる……なのはとフェイトか。

「こちら……えと……そこにいる子の保護者の八神はやてです!!」

はやてちゃん!?

「え?なのはちゃんフェイトちゃん!?ホンマに?!」

はやてもなのは達の声に驚いてる……

うん!私達だよ。色々あって、闇の書さんと戦っているの!

もしかして動きが鈍くなったのって……

「ウチが魔導書本体からはコントロールを切り離れたんや……切り離れたんはええけどその子が走ってる和管理者権限が使える、今そっちに出ているのは自動行動の防御プログラムだけやから!」

え?えつ!!?どう言う事?フェイトちゃん!

え〜とつまりね、はやてがここにいる防御プログラムとのリンクを切ってこれ以上強くならなくなったけど、防御プログラムがここにいる限りはやて達が出られないんだよ

じゃ、じゃあどうすればいいの!?

アレを止めれば良いんだけど……

何か悩んでるみたいだな……………

なのは！フェイト！

今度は違う声……………ユーノだ……………ユーノなら分り易く教えてくれそうだな。

なのは、フェイト！解りやすく伝えるよ、今から言つ事をなのはが出来ればはやてちゃんもコダイも外に出られる

うん

分つた

どんな方法でも良い、目の前の子を魔力ダメージでぶっ飛ばして！！全力全開、手加減無しで！！

さっすがユーノ君、わっかかりやすい！！

うん！！

……………ホント分り易いな。

「夜天の主の名において、汝に新たな名前を贈る…強く支える者、幸運の追い風、祝福のエール……………リインフォース」
振り返るとはやてが闇の意志……………リインフォースの頬に手を添えて、微笑みながら優しく言った……………

「……………っ」

らす太陽……そして俺がもたれ掛かっている大樹……

「……………ああ」

とうとうヤバくなって頭がアレになったか……………まあ良いか。このまま俺がどうなるのが関係ないし……………このまま人知れず消えるのも悪く無い……………

「ねえ、どうしたの？」

……………一瞬、何だか分らなかった……………人の気配すら無かった俺の目の前に、膝まである黒い長髪に雪の様に白い肌、黒いワンピース、目を隠す様に黒い包帯を巻いた少女がいた。

「……………」

「ねえねえ、どうしたの？」

「……………誰だ」

ようやく言えた……………

「ボク？ボクはね……………」

嬉しそうにその場でクルリと回り……………

「マテリアルK……『災厄を孕むモノ』だよ」
そう、楽しそうに言った……

「オマケ」

闇の書から隔離、はやてとヴォルケンリッターが戻り、ヴィータが
はやてに抱きつき泣きだしたりなど色々あり、少し落ち着きを取り
戻した所にクロノがやって来た。

「すまないな…水を指してしまっんだが、時空管理きよ……」

「……」

クロノは言葉の途中で固まった……

「どうしたの？」

近くにいたフェイトが恐る恐る聞いてみる……

「……………コダイはどうした？」

クロノの言葉に皆が辺りを見回す……………そして。

ビシッ！！

全員固まった……

「もしかして……………闇の書の中に置き去りにしてもったあああああ
あああああ……」

はやてが絶叫する……

「だっつてずっと傍にいたしてつきりついて来たとはかりに……………よ
し！今から助けに行くで！！」

はやてが闇色のドームに向かって飛ぶ……………がシグナムによって止め
られた。

「やめてください主はやて！このままでは危険です！！」

「コダイ君の方が危険や！血まみれでスタボロで体中に傷があつて、シヨックで気を失いそうになつたんやで！？」

「何だつて！？よし、私が行くからはやては此処で「やめる！！」

つて離せザフィーラ！！」

今度はヴィータが行きそうなのをザフィーラが止める…

「はやてちゃん、ヴィータちゃんも落ち着いて！！！」

羽交い絞めされてる二人に落ち着く様に言うシャマル……………

一方、なのは達の所でも同じやりとりがあつた……………

トンネルを抜けると雪国と聞いた事があるがコレは全くの予想外……byコダイ

メガネ「マテリアル登場！！けど戦闘はありません！」

コダイ「ネタばれかよ早速……てか何故置き去り？」

メガネ「いやお前さ、前回に防御プログラムの腕引き千切って自分にくっつけて腕にしただろ？だからさ」

コダイ「成程……考えてるんだな」

メガネ「当たり前だ！」

レイ「感謝コ〜ナ〜、龍賀様、感想をありがとうございます！！」

メガネ「龍賀様から苺のケーキを買いました！有難うございます！！」

コダイ「甘い物は好きだぞ？」

メガネ「つかシャマルのアレを食べる以上コダイの嫌いな食べ物って無いんじゃないか？」

コダイ「ん？」

メガネ「次回は……多分コダイの過去がついに……」

コダイ「多分って何だよ……」

レイ「皆様の意見や感想、色々待っています!」

「次回もお楽しみにしてください」

キオクboyコダイ（前書き）

コダイの過去です……かなりヤバい描写になりかねない……

後、もう少しで PV100万を突破するんで何か記念にやりたいですね……

キオクboyコダイ

「……………マテリアルK？」

「そ。闇の書が蒐集した魔導師の過去を再現した物……………2Pみたいなものだよ」

「闇の書って言うのはホント一筋縄ではいかないな……………」
2Pって何だよ……………」

「えっへん！……………ってそうだ君の名前聞いてなかった……………お名前は？」

胸を張ったり、首傾げたり忙しい奴だな…

「トキガワコダイだ……………」
「ホント!?」
「っ!!」

名前を言った瞬間、一気にコツチに詰め寄って来た。

「君がボクのオリジナルなんだ……………へえ〜キレイな顔〜」

マテリアルKが顔を触ってくる……………」

「見えるのか？」

「え?……………ああ、この包帯は見たくない物隠してるだけだし、見たい物は見えるよ?」

自分の目を覆っている包帯を指して言う……………」

「ねえ……………もつと見せてよ」

マテリアルKが腕を引っ張る。

「こんな日陰にいないでさ、もつと明るい場所で見せてよ!」

「ちよつと待て……………」

俺怪我人だぞ?……………そんなのを無視して日の当たる場所まで引っ張る……………」

ドクン!!!!

「ゲ……ガ……ア……」

突然、激痛が全身を奔り、その場で倒れこんだ。

「う……あ……」

しまった……こんな傷を放って置いたらヤバいのは当たり前だろうが

……

「ん……アレ？」

……もしかしてまた、死んだのか？流石に死に過ぎだろう……まあ意味無いけど。

「わあ〜ビツクリした〜……いきなり血が吹き出たと思ったら倒れてさ。ナニゴト〜！？っと思つてたら気絶してさ……」

「聞いてもいないのに状況報告どうも……」

上から聞こえたマテリアルクの声に……上？

「何だ？この状況……」

「ん？……膝枕の事？怪我人をそのまま寝かすのはどうかなって
思っ……後、怪我の手当も……」

手当？……ああ……

上の服は既に無く代わりに黒い包帯が全身に巻かれていた……

「手当と言っても血を止める程度だから、暴れたら開くよバツクリ
と……後、包帯これしか思い浮かばなくてさ、これしか作れなかつ
た」

「……作れなかつた？」

「うん、私の能力でね。記憶にある物を引き出して作っちゃう能力
……まあボクの記憶はあやふやでこんなのしか作れなかつたけど……」

……ああ、成程……

「それは、少し違う……」

俺が手を上げると、手のひらには、白、黄、青、緑と色鮮やかな蝶
の群れが突然現れ、飛び立った……

「わあ……！君もこの能力使えるんだ……ん？あれれ？……あんな
羽の色の蝶なんかいたかな？」

「いた……ではなく『創った』んだ……」

「え？……」

マテリアルクは首を傾げている……

「お前も使ってる能力はな……『想像を創造する能力』なんだよ。
名前は無い……ただ思った事をそのまま形にする事が出来る、まあ
……形にするには正確にイメージしないとダメだがその代わり制限
も副作用もない……誰かを生き返らそうが、生かさず殺さず苦しめ
るのも自分の思いのままだ……」

「そんな能力だったんだ……」

「俺の場合は何故が大怪我してないと使えなかつたがな……」

「全然知らなかつた……」

「ん？待てよ……確か俺を蒐集して、その過去から生み出されたんだ

よな？…だつたら何で知らない？」

「ああ……言われてみれば……何でだろう？」

「知らないのかよ……まあ見た目も違うし……」

「それは違うよ。いくら再現してもマテリアルはオリジナルとほんの少し変わるもんだよ」「そうじゃない」「ふえ？」

「確かに見た目の細部が違ってもおおしくは無いが、肉体年齢が違うのはどう言う事なんだ？」

俺を再現しているのなら、俺と同じ9歳位になってないとおかしい…なのにこのマテリアルKは5歳前後だ……

「そう言えば……」

「ん？……」

「チョット不思議なんだよね……確かにボクは君から再現されたマテリアルなのに……何故か君の記憶が全く無いんだよ」

全く無い？……蒐集失敗？…な訳は無いか、だつたらこのマテリアルは産まれてこない……

「何故かボクの記憶ではえっと……『トモダチ』？って人と話していた所しかないんだよ」

「ッ！……！！！」

ああ……そうか……そうだったんだ……だからリンカーコアも……

「闇の書が……吸収したのは俺じゃ無かったんだ……お前が再現されたオリジナルは……」

「時乃月人^{ときのみづきと}……………お前も持っている『想像を創造する能力』
の本当の持ち主で……………」
俺が守りたくて守れなかった唯一大切な『トモダチ』……………」

「俺は……ツキトの能力で創られた……ツキトの中のみ
生きていた『想像体』……アイツの唯一の『トモダチ』だった……」

「壊れる『トモダチ』を止める事が出来なかった……ただのモノ……」

「ねえ……………教えて？……………君の事も……………ツキトって子の事も……………」

「過去話は嫌いなんだが……………」

こいつになら良いだろ……………ある意味自分の事だからな……………」

キオクbyコダイ（後書き）

メガネ「次回から過去編……っと言っても分り易く駆けるかどうか不安です……」

コダイ「じゃあ何故そんな風にした……」

メガネ「仕方ないだろ！？中二病何だから！！」

コダイ「威張るな……」

レイ「感謝コ〜ナ〜、ながも〜様、龍賀様、感想ありがとうございます！！」

メガネ「過去編は恐らく2、3話になると思います！」

レイ「皆様の意見や感想など色々待っています！！」

メガネ「いよいよA・S編も大詰め！」

レイ「頑張るぞ〜！！」

〜次回もお楽しみにしてください〜

追憶……………白い子供（前書き）

コダイの過去前編です……………

かなりヤバい描写になっています……………スイマセン中二病で。

追憶……………白い子供

ある暑い夏の日だった……………

トキノツキトは何処にでもいる普通の子供だった、ただ違う所があるとするれば白髪に青い目と言うアルビノと言う事だけ……………

両親も普通……………とは少し違った。

母親は主成分が天然100%と言った感じの何をしでかすか分らない、よくツキトや父親に女装させる母親で。

父親はどこかの萌えアニメから飛びだした男の娘って感じで女装を『似合うから良いでしょ』って言っている父親だった……………実際にうだから困る。

ツキトは父親の遺伝子を9割で母親の遺伝子1割と言った感じで将来有望な美少年だった。

その日はツキトにとって特別な日……………誕生日だ。その日は朝からワクワクしっぱなしだった……………

両親の親戚はお祝い事で盛り上がるのが大好きな性質で祝い事がある度に親戚が沢山来て祝うのである。ツキトも楽しいのも面白いのも大好きだ。

ツキトは待ちきれなくなって外に飛び出して遊びに行った……………

いつも遊んでる公園で終始大喜びで遊び、昏頃に帰路につく。もう
親戚の人たちが来ているだろうと思ひ玄関を開けると……

そこは一面……赤で塗りたくられた。

ツキトは急いで土足で玄関を上がりリビングに向かう……………
…そこにいたのは……………

肉塊になっている両親や親戚……

……
その中心に立っている、今まで見たことも無い白い化け物だった……

ツキトはその場で意識を失い、気付いた時は薄暗い牢屋の中で拘束されていた……

此処ではある実験が行われていた…

それは人間が『不老不死』になる実験だった……ツキトは……
実験台にされた。

その日からツキトは壊れ始めてた……

最初の実験は最も不老不死に近い『天使』を作る実験……
…投薬により細胞を変異され天使と同じ両性にする事だった……

実験は失敗………両性どころか完璧に女性になってしまった………

次の実験は地球上に存在する不老不死、または長寿の生物を人間サ
イズまでに活性化させ、前の実験で使われた実験体と強制的に交わ
らせる事によって、『不老不死』の生物を産み出す実験………

だが産み出されるのは、この世とは思えないほど醜い生物ばかり……
……何度も産まされて、産めなくなったら研究者の欲を吐き出させる
為だけのただの人形……

その頃からツキトはある事し始めた……それは現実逃避……
自分の殻に閉じこもり、自分の世界にすることでツキトの精神はギリギリ保てた……研究者が来ても現実逃避を行う事で何をされてい
るのか分らない振りをして生きていた……

ツキトの自分の世界は閉じこもる程に徐々に広がり……いつの間にか
自分の周り以外にも広がった……その広がった世界に虚無感を覚え
たツキトは……

『トモダチ』が欲しい……………と願った……………。

あの日から丁度一年……………自分の世界が自分の周り以外にも広がった
事により発現したツキトの能力『想像を創造する能力』が初めて発
動して……………『トモダチ』が産まれた。

追憶……………白い子供（後書き）

メガネ「ハイ……………と言う事で前編です」

コダイ「テンション低いな……………」

メガネ「仕方ねえだろ！？コレ書いてる時、軽く鬱になり掛けたわ
！！」

レイ「まあまあ……………」

メガネ「はあ……………しかも後1、2話続くと考えると……………もつ
と軽めにしとけばよかった」

コダイ「諦めろ、中二病」

メガネ「お前に言われたくねえ！！」

レイ「落ち着いてえ〜！」

コダイ「……………ん？感謝は？」

メガネ「ああ……………今回は連投だから最後にしよつと」

コダイ「はあ……………」

〜次回もお楽しみにしてください〜

追憶……………真っ白な『トモダチ』（前書き）

過去編です……………まだ続きます……………

追憶……………真っ白な『トモダチ』

ある日、 が産まれた……………名前はまだ無い……………だけどあの子は
を『トモダチ』と言ってくれる……………は『トモダチ』という存在
なんだ。

『トモダチ』って何？って聞いたら…

とても……………とても大切なモノ

と答えてくれた……………じゃあ は君の大切なモノなんだね。と言っ
たら『そうだよ』と言ってくれた……………何故か知らないけどソレが
凄く嬉しくてフワフワする。

はあの子と話す時間が大好き、その時間だけ は生きているんだ
……………と分るから。

でも、毎日がそうとは限ら無い……………あの子と話せない時がある、
その時は『外』で何かあったんだ。『外』で何かあるのかをあの子
は教えてくれない……………

はあの子の中にいるだけのただそこに『在る』と言うだけの存在
……話したり聞いたたり出来るけど、触れたり出来ない… には
肉体と言う物が無い。

話せない時はいつもあの子が話してくれるのを待っている……その
時が一番辛い。 が本当に此処にいるのか分らなくなる……あの子
がいなくて消えてしまいそうで怖い……… 確かあの子がこの前
言ってた… 『ウサギは寂しいと死ぬ』と……
だったら はウサギだ、あの子がいなくて寂しくてどうにかなって
しまいそうだ………

そんな変わらない毎日が続いて欲しいと思った………

……… ねえ

いつもの様に始まったあの子とのお話……けど、今日は違った……

もし……ボクが……し……ても……『トモダチ』で……いて
……くれる？

いつもと違う……虚ろで……咳く感じだった……だから……は……
『は君のトモダチだ……何かあっても』そう答えた……

今、思えば……こんな選択しなければどうなるんだらう……あの
子は……いや、今更何を言っているんだらう……

アノ子ハモウ……………壊レテイルンダカラ……………

あの子は人を殺した……………沢山殺した。自分の中のナニかが壊れて、
自分の狂気のままに人を殺した……………殺して……………狂って……………殺して……………殺
す度に狂い、その狂気のままに更に人を殺し狂う……………何度も繰り返
した。

……………は何も出来なかった……………止める事も……………救う事も。それで
もあの子が生きていればそれで良いと思っている は……………

ああ……………壊れているんだなと思った…

あ後の事は覚えていない……………けど、誰かに保護されて看病せれて
いた……………
汚れて、壊れたあの子の体は跡も無く綺麗になっていた……………だ
けど

d v b o o n j k b j v h ……

なんだと思う？……これはあの子から聞こえた『人間の声』なんだ。

世界は……あの子を拒絶した……

見る『景色』は血肉が張り付いた醜い『地獄絵図』……聞こえる『

音や声』は耳も塞ぎたくなる『不快音』……『人間』はおぞましい

『肉塊』に見え……触れたモノの感触も尋常では無くなって……

もう……心が完璧に壊れてしまった……

幸いかどうか分らないけど、は普通に聞こえたのでその日から、

通訳の様な事していた……

時が経てば……もしかしたら治るだろうと……

だけど……そんなんじゃ無かった……あの子の心は……もう

治らない程、狂気に吞まれていた……

アレから数日後……保護して貰った人の所属しているとある組織に入る事となった……その組織はあの研究をしていた組織と敵対していた……あの子にとってコレほど都合のいいモノは無かった……

追憶……………真っ白な『トモダチ』（後書き）

メガネ「コダイはこの頃は歳とか性別とか名前が無く『トモダチ』
と言われていた……………と言っても話し相手がツキトしかいないから二
人称で十分成立けど……………」

コダイ「ゴメン……………ゴメン……………」

メガネ「ああ……………コッチは鬱モードに入ってる」

レイ「コダイ〜元気出して〜」

コダイ「ゴメンナサイ……………ゴメンナサイ……………」

メガネ「あっちゃ〜敬語まで使うとか…悪化している……………」

〜次回もお楽しみにしてください……………〜

追憶……………白い（前書き）

後編です……………コレが書くのが辛かった。

追憶……………白い

あの子が組織に入ってから一年……………肉体は『能力』で男に戻したが、薬の影響で特徴は男だが体系やら骨格が女性寄りになっている……………短かった白い髪は膝まで伸び、着ている服は白一色の全身白づくめ、全てが完璧な黄金比で整えられた人形の様な美しさを持つまでに成長したが。目と耳と鼻を覆う様に顔に巻いてある包帯が異質を放っている……………

あの子の狂気は目を追うことに重く、大きくなっていった……………

誰かに教わった訳でもない……………覚えた訳でもない……………あの子は『殺す』事に関しては物凄い力を発揮する。

武器何かいらぬ……………あの『能力』もいらぬ……………全部素手で殺して来た……………

あの子にとって人間はだたの醜い肉塊なだけ……………躊躇も容赦も微塵の無く劈り殺せる……………

けど……………それだけじゃまだ普通だ……………あの子の狂気は此処からだ……………

グシャ…パキヤ…グチュ…ボリッ…

あの子が壊れていると言っても と違ってまだ生物だ… 飢えもある… けど世界に拒絶されたあの子がまとな物を口に出るはずが無い…
だからあの子は… 自分が殺した人間を『喰らう』…

肉や臓物を齧り… 骨をかみ砕き… 血を啜る… 残るのはただの血だ
まり… あの子はこの一年こつやって生き延びた… 殺して… 喰らう…
人間だけじゃない… 敵対している組織が産み出した生物兵器も例外無く喰らった…
僅か一年の間に1000以上喰らい続けたあの子は不死身と言うに
相応しい化物になっていた… 頭が潰れようと、心臓が指されようと、そんなのを気にせず再び人を殺して喰らう…

あの子が化物と言われてもそれでも良かった……あの子はまだ生きて
いる。それだけで の生きている意味だったから……

……けど……やっぱり世界は できさえも拒絶した……

その日はよく覚えてる……ある戦争に参加して、何時もの様に殺し
て食っていた……

……ただど、なぜかその時……あの子の目がまともにもモノを見ていた……視線に先には……

かつて、親戚と両親を殺した……あの白い化け物……

あの子の行動は早かった、見つけた瞬間……殺しに掛った……
……ただど相手も化物……そう簡単には行かなかった……
……何度も死のうが立ち上がり何度も殺しに掛り……ついに心
臓を貫いて殺した……

あの子は……完璧に壊れた……壊れていくのを止められなかった……
誰よりも近くににいるのに手を伸ばして触れる事も出来なかった……
今日と言つ日ほど体が無い　を恨んだ覚えは無かった……
世界は『トモダチ』を棄てた……その先がどんなに底抜けで滅茶苦茶
になっていようと……悲鳴を上げて逃げ回るなどと言つ選択肢も無
く……

いつか積み重なった狂気の重さに理性が屈する、その日まで。それ
が……『トモダチ』に唯一残された選択肢だった……
どんなに汚れようと……狂気に染まり……スガタを変えても……

名前をあげる……

先ほどの狂った笑いは何処へ行ったのか分らない程落ち着いた声だ
った……

『古代……ボクの父さんと……母さんの名前を合わせたんだ……』そ
う嬉しそうに言った……

あの子の母親の名前は確か古町……父親は真代……
でも何でそんな事を今？……と思っただらもう遅かった……

コダイ……ゴメンね……

その言葉と同時に 意識を失った……

次に目が覚めると……何故かその場で倒れていた……状況を確認するために起き上がる……『起き上がったのだ』……
体の無いのに何故？……と下を見下ろすと……

その体は……あの子の体だった……それと同時に……

あの子……ツキトが死んでその代わりに私がこの体を動かしている
と分ってしまった……今まで私がいた所がポツカリ穴が開いた
様な感覚がした……

その後の事は、あまり覚えて無い……ただ人を殺して……

追憶……………白い（後書き）

メガネ「ハイ、過去編終了…詳しい事はA・S編終了後に書きます……………」

コダイ「ゴメン……………私をもっと強かったら……………」

メガネ「コダイのこの口調も理由を書きます、その後に本編再開です」

レイ「感謝コ〜ナ〜、龍賀様、ながも〜様、ソラト様、山義 芳原様、マーボー様、真王様、感想をありがとうございます!!」

メガネ「山義 芳原様から饅頭と、蕎麦と、玉露を貰いましたありがとうございます!!」

レイ「ます」

メガネ「コレは後で頂くとして、真王様の質問に答えようか」

質問一『弱みを握るコダイですが、弱みを握られたことはあるか?』

コダイ「そんなへまはしないよ」

メガネ「まあコイツの場合、逆に弱みを利用しそう…」

コダイ「そう言おうと思ったんだけど……………」

メガネ「おい!?!」

質問二『我が小説、『リリカル銀魂 Strikers 銀の侍と4人の女神』の感想をお聞かせください』

メガネ「凄く面白いです！自分にはあんなに沢山クロスさせる脳なんかありません！ギャグが銀魂っぽいのが個人的にツボです！」

コダイ「銀魂で一番好きなのは紅蜘蛛編」

メガネ「俺はベタに紅桜編」

レイ「後、サチコって人からお菓子貰ったよ」

メガネ「真王様ありがとうございます！」

コダイ「ついに本編に戻るね」

メガネ「さて、恐らく防衛プログラムと戦う訳だけど…自信は？」

コダイ「私は、何で在ろうと殺して見せる」

（次回もお楽しみにしてください……）

脱出……byコダイ(前書き)

闇の書の内部からの脱出です…

脱出……byコダイ

「……………そう……だったんだ」

「ああ……………」

隣に座りマテリアルク……いや、ツキトにツキトの過去を話した……

「それで、コダイはどうしたの？」

「……………力を手に入れた。筋力、知力、学力……………力になるモノは何でも取り込んだ……」

剣術も保護して貰った奴に教えて貰った……

「力が欲しかった……………誰にも負けない強い力……………誰にも負けない強さがあればどんなモノでも救えると思った……………死んだ奴……………ツキトでさえ……」

「……………コダイは……………ボクが死んでからも、ずっとボクを守ってくれたんだね」

「けど……………結局はこの様……………他人どころか、自分の身一つも守れない……………どんなに強い『力』や誰にも負けない『強さ』があっても結局は何も救えない……………私はただ『殺す』だけの化物……………」

死ぬ直前に気付いたよ……………『力』は誰がどう使おうと……………殺す事しか出来ない……………誰かを守るうと……………誰かを救おうと……………結局は殺しにつながる……

ポフッ！

……………一瞬、何か起こったのか分らなかった……………だが、時間が経つにつれ再起動し、理解した……

「アリガトウ……………今まで守ってくれて……」

ツキトが私の足を跨いで真正面から抱きしめていた……

「ゴメンネ…ボク、あの時自分の事しか考えれなくて…コダイがこんなにもボクを思ってくれてたなんて気付かなかった…」
抱きしめているツキトの腕が震えている…

「ボクは今までこんな風にした人間達を皆殺しする事で一杯だったのに…コダイはずっとボクの心を守ってくれた…アリガトウ…
アリガトウ、コダイ…」

「守ってなんかない…私はあの時までただ話す事しか出来なかった…触れられたら止めたかった…壊れる君を抱き締めたかった…それを出来なかったのは…私が弱いからだ…」

「守るよ」

ツキトが小さく呟いた…

「今度はボクが守るよ…ボクのこの体で…
私の体に手を添えるツキト…」

「君を傷付けたり、苦しめたりするモノ…全部何もかも…例えばボクを忘れても…ボクが身代わりになって君を守るよ」
ツキトが純白に光り、その粒子が私の体に入ってくる…

「ボクの全てを賭けて…絶対守るよ…」
ツキトは頭に巻いてある包帯を解く…そこには俺と同じような青い瞳があった…

「私は「ダメ」っ!!」

言おうとした時、ツキトに指で口を塞がれた…

「ボクが…こうしたいだけだから…君にボクの全部を上げたいんだ…君の為になるかどうかは分らないけど…とにかく全部上げたいんだ」

そう言つて、優しく微笑む…

「ボクの『体』が『キミ』を守るから…だから君は…生きて」

そのままツキトは光りの粒子になり私の体に全て入っていった…目の前に残っていたのは純白に光る半分に割れたリンカーコアだった…

それに反応してか私の体からも半分に分れたリンカーコアが出てき
て……………その二つが空中で重なり……………一つになった……

「純白の……………魔力」

これが……………私の本当の魔力光……………

……………んみゃ……………おはよ……………

さつきまで、静かだったのはレイが寝ていたからか……………それよりも
アレからずつと寝ていたの？

ん……………ふえ！？ここドコ！？

……………相変わらずズレているレイ……………まあレイらしいか。

「さてレイ……………寝起きの所悪いけど此処から脱出するよ」

ふえ？……………うん！！

全身に力を入れて立ち上がる……………痛みは殆どなく難なく立ち上がれ
た。

「……………とは言ったモノの……………此処に出口何て在るのかな？」

そう言つて辺りを見回すと……………遠くに何かが光つた……………

何だろう……………

「行つてみるか……………」

遠くと言つてもそんなに距離はそんなに無く、歩いて2、3分で着
いた……………

「これは……………」

キレイ……………

光っていた正体は、刀だった……………

私の身長よりも長く……………刀にしては頼りない細さで……………白く、美しい
刀身が特徴的な刀だった……………

「コレは……………」

その刀を引き抜く……………うん、間違い無い……………コレは。

私が……………前の世界で使っていた刀だ……………

「レイ……………此処から出られる」

ええ！？どうやって！？

「……………すれば……………」

此処から抜け出すのを想像して……私は思いつ切り刀を振り下ろし
……この世界を切り裂き、全てが暗闇に染まると同時に……脱出
した……

頑張っ
てね……

……当り前だ、ツキトが残してくれたこの命がある限り……

くオマケく

「暴走まで後10分！」

「クソツッ……！……一体どうすれば！」

エイミイのカウンントで焦るクロノ……未だにコダイの反応が確認されてない。

「このままプラン通り進めてアルカンシエルを放てば、防衛プログラムは消滅するけどコダイがどうなるか……」

「かと言って、コダイさんを助けようとするれば防衛プログラムが暴走して被害が……」

「それに、はやてちゃんが言うとおりだとコダイ君が無事かどうか……」

ユーノとリニスとシャマルが頭を押さえ必死に考えてる……

その周りでは今まさに飛びだそうとしているのはとフェイトをアルフが、はやてをシグナム……ヴィータをザフィーラが止めていた。

ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

突然、闇色のドームから純白の光の柱が登った…

「な、何だアレは!？」

「クロノ君!あの光の柱からコダイ君の魔力反応が!」

「何だと!コダイが!？」

光の柱から一筋の光が飛び皆の中央で止まる……

「……………戻った?」

普段と変わり無い声で、コダイが戻って来たかと確信した。

そして光が消えると同時に……………

ピシッ!!

全員固まった…

今、そこに居るのはコダイで間違いない……………あの、単色の青い瞳はコダイしかあり得ない……………

だが今日の前に居るのは、コダイの黒ずくめと全く正反対の白ずくめに白い髪……………そして今までウィータより少し高いぐらいだったコダイの身長は160弱に成長していた…

脱出……byコダイ（後書き）

メガネ「次回はお待ちかねのフルボッコです」

コダイ「いや、ちょっと待って。何で私が成長しているの？160弱って言ったら前の世界の死ぬ前の身長だよ……」

レイ「あれ？アレレレ？コダイが大人に……きゅん」

コダイ「急激な展開でオーバーヒートしてる……」

メガネ「レイがダウンしたんで俺が……感謝コーナー。龍賀様、感想をありがとうございます！！」

コダイ「防衛プログラムを倒したとしてもリインフォースが……何も考えて無い」

メガネ「大丈夫、もう考えてるから！」

コダイ「ホントに？……なら良いけど」

メガネ「皆様の意見や感想などイロイロ送ってください！！」

「次回もお楽しみにしてください」

取り敢えず、平和的解決……と言つ名のフルボッコロボコダイ（前書き）

お待ちかねのフルボッコです……ってかエイミーさん…アレを並みの攻撃って……

取り敢えず、平和的解決……と言つ名のフルボツコボロコダイ

「……お、大人になつてる……」
「!?!?!?」「」「」「」

……え?大人に?……

「えっと……誰か鏡持つてない?」

「あ、私持つてます……」

なのはが何故か敬語で手鏡を差し出した……なんか顔赤いな。

「あ……」

鏡を見るとそこに映つていたのは間違いなく私だ……『この世界に
来る前の私』だった……その時は白く無かつたが間違いない……と
なると肉体年齢は大体20前後かな?……いや、成人にはなつてい
なかつた筈……

……ボクの『体』が『キミ』を守るから……

ツキト……もしかしてその意味ってコレ?いくらなんでも大人に
しなくてもさあ……

「ありがとう……」

「は、はい……」

なのはに手鏡を返す……さつきから顔が赤いな……

「ほ、本当にコダイなのか?……」

「ん、真正正銘のトキガワコダイだよ……」

クロノもかなり驚いてる……まあ仕方ないよね、私自身も付いてい
けないし……

「……女装は「オシャレ」……コダイで間違い無いな……」
それで確認取られてもなあ……まあ女装はオシャレだけど……ア
レ？これ久しぶりに言った様な……
「な、なんやあのエロっぽい姉ちゃん、コダイ君か！？ホンマにコ
ダイ君なんか！？……ア、アカン鼻血が……／＼／＼」
はやてが顔を押しさえる……
「あうう……／＼／＼」
グイータは俯いてる……
「凄く綺麗ですね／＼／＼」
「そ、そうだな……白も似合っているな……／＼／＼」
「元が良いからかもしれないな……」
シヤマル、シグナム、ザフィーラから称賛の音が……いや、何でシ
ヤマルとシグナムは顔赤いのさ……
「何か……お人形みたいだね……／＼／＼」
「た、確かに将来有望だとは思いましたけど……／＼／＼」
「これは……反則じゃないか？／＼／＼」
フェイト、リニス、アルフがこつちをチラチラ見ている……
「子供の頃が女の子っぽくても大人になれば男らしくなるって聞い
たけど……見事に美女だよな……」
「そうだな……コレであの性格が無ければ……」
なんかクーノとクロノは溜息ついてるし……
「えつとさ……取り敢えず状況だけでも報告して欲しいんだけど
……」
「そ、そうだった！実は……」
クロノが慌てて教えてくれた……

「ん……大体分った」

つまり作戦はこうだ…

防衛プログラムのバリアは魔力と物理の複合四層式、分担してそれを破壊、本体を一齐に攻撃してコアを露出して、アース前に強制転移して後はアルカンシエルで蒸発…

「面白い作戦だね」

「コダイならそう言うと思ったよ……でコダイはバリアを全部破壊した瞬間に本体への一齐攻撃の先陣を切って欲しい」

「分った……それならピッタリの新魔法があるよ。時間が掛るのがネックだけど……」

だから実戦で一回も使ってないけど……

「その点はしっかりとサポートする……それと『アレ』はどうなんだ？」

クロノが後半、皆に聞こえない様に聞いて来た…

「ああ……『アレ』かぁ……半分まで出来ているけど、打つ分には問題無いよ」

え？……アレで完成じゃなかったんだ……

レイが苦笑いしている……

「どうした？」

いや、だって計算上、今の状態でもなのはスターライトブレイカーを力押し出来るんだよ？……それで未完成って…

「ベアトリス式は『多勢も無勢も関係ない』、トリッキーなのが基

本だよ、あんなのは誰でも出来るよ」

完成形を想像するとかかなり危ない……

「まあ、タイミングはそっちに合わせるから当初の作戦通りに進めて良いよ」

「分った………グレアム提督、見えますか？」

「ああ、良く見えてるよ」

クロノはモニターを展開してグレアムと通信していた……

「闇の書は呪われた魔導書でした、その呪いは幾つもの人生を喰らい、それに関わった多くの人生を狂わせてきました。アレのお陰で僕の母さんも、他の多くの被害者遺族もこんな筈じゃ無い人生を進まなきゃならなかった、それはきつと貴方も……リーゼ達も……失くしてしまった過去は変える事は出来ない」

クロノは持っていたデュランダル投げ、目の前で起動させる……

スタートアップ
Start up

「だから……今を戦って未来を変えます!!」

クロノはデュランダルを掴んだ……

「クロノ」

「お〜い」

「誰だ？」

遠くから聞こえてくる声に思わず私も振り向いた。

「アリアに……ロツテ？」

やって来たのはリーゼ姉妹だった。

「お〜いつて誰だ！？そこにいるEXランク級の美人は!？」

「まさか、クロノのほんめ……いや待てどこかで見た事が……」

リーゼ姉妹が一気にコッチに来て、私の顔を触れるか触れないか位

の距離で凝視してくる……

「もしかして……」

「コダイ？」

その問いに頷いた……今、驚かれても面倒臭いな……

「大人になったのはコレが終わった後で話すからさ、そっちの用件を先に……」

今、驚かれたら後が面倒だ……

「そうだった…実は」

「その作戦に私達も手伝わせて!!」

「アリア、ロツテ……一体どうして？」

リーゼ姉妹の言葉に驚くクロノ……

「コダイに言われてさ、アレからずっと考えたんだ……」

「別にそれで償えるとは思わない……だけど闇の書を如何にかしたいのは変わらない……だからお願いだ!!」

二人が深く頭を下げる……

クロノは暫く考え……

「……防衛プログラムは強力だ……この作戦もギャンブルに近い……

……だから、少しでも勝率を上げるために手伝って欲しい!」

二人にそう言った……

その後、二人の事皆に話した……仮面の男の正体だと言ったらヴイータとシグナムが襲い掛かろうとしたがはやてに止められ説教された……

話し合いの結果リーゼ姉妹はサポート側に回る事になった……

「縛れ、鋼の軛！でええええや！！」

ザフィーラが藍白あいしろのベルカ式魔法陣を目の前に展開、そこから現れた魔力の鞭が前方の触手を薙ぎ払う……いや、コレ前に喰らった事あるけど縛ってないよね？薙ぎ払ってるよね？俺の時は刺したよね？

アアアアアアアアアアアアアアアアアアツ！！

防衛プログラムは再びあの声を上げる……どうやら効いてはいる様だ。

「ちゃんと合わせるよ、高町なのは！」

「ヴィータちゃんもね！！」

次は物理と魔法の複合バリアを破壊する作業……最初はヴィータとなのはだ。

「鉄槌の騎士ヴィータと鉄の伯爵グラーファイゼン！！」
ギガントフォーム

アイゼンのカートリッジをロードして大槌のギガントフォームの變形させる……

「轟天……爆碎！！」

「翔けよ、隼はやぶさ!!!」

シュツルムファルケン

限界まで魔力を込めた矢が放たれ、バリアに当たると同時に大爆発を起こし三層目のバリアを破壊した。

「フェイト・テストロッサ、バルディッシュザンバー……行きます!!!」

足元に魔法陣を展開させ、カートリッジを2発ロードさせる。そして身の丈を超える大剣となったバルディッシュを回転させながら振り抜いた。

「ハアツ!!!」

振り抜かれた刃から真空波が触手を切り裂き、闇の書の闇を包み込む。

フェイトがバルディッシュを天高く掲げるとその刃に紫の雷が落ちた。

「撃ち抜け、雷神」

ジェットザンバー

フェイトが振り下ろすと魔力刃は防衛プログラムに向かって伸びバリアを粉碎、そのまま本体を切り裂いた………私いらんじやないの？

アアアアアアアアアアアアアアアアアアツ!!!!!!

防衛プログラムは悲鳴を上げながらも新たな触手を生やし、その先に魔力を溜め砲撃を撃とうとする……

「盾の守護獣ザフィーラ、砲撃なんぞ……撃たせん!!」
それにいち早く気付いたザフィーラは魔法陣を展開、今度は海中から何本もの条が突き出て触手を切り裂き、本体を串刺しにした……
だが

「しまった!!」

触手の一本が切られる前に砲撃を放った……狙いは……私だった。

「マズイ……もう完成してるけど間に合わない……こうなったら相撃ち覚悟で……っ!!」

その後、誰かに抱えられて、上空に飛んで砲撃は足元を通り過ぎた……

「フィジカル担当のリーゼロッテ、この位は朝飯前だよ!」
助けてくれたのはロッテだった。

「デカイの撃つんでしょ? だったら派手に行こう!!」

「勿論そのつもり……レイ」

準備OK 何時でもいいよ!

抱きかかえられたロッテから離れ、即座に魔法を発動させる。

「新代の魔導師、コダイ・T・ベアトリスと……」

え、え……と……奇跡の証、レイ・モモ・ブラッド!

足元に超巨大なベアトリス式の魔法陣を展開する。

「刃の要塞……統べてを以て無に還せ……」

「行くぞ、デュランダル」

OK Boss

「悠久なる凍土……凍てつく棺の内にて、永遠の眠りを与えよ……」
足元に水色の魔法陣を展開、クロノから冷気が発せられる、その冷気は防衛プログラムを中心に海も凍らせた……

「凍てつけ!!」

エターナルコフィン

デュランダルを突きつけると、防衛プログラムは凍りついた……
……だけど、まだ諦め悪く抵抗する防衛プログラム……氷を砕き再び再生を始めようとする……

「いくよ、フェイトちゃん、はやてちゃん」

「うん!!」

「レイ、『アレ』を使うよ!!」

OK

スターライトブレイカー

「全力全開……スターライトオオオオ!!」
なのはは魔法陣を展開し、環状魔法陣が取り巻き先端には魔力球が出現した。

「雷神一閃……プラズマザンバアアアア!!」
フェイトはバルディツシュザンバーを振りかざす、すると魔力刃に再び紫の雷が込められる。

「続くよ……レイ」

「ちょ、ちょっと待ってまだ名前が…」

「そうだった……じゃあ…」

「見敵全殺……ジエノサイドオオオオ!!」

両手を右腰辺りに添え、両手の間から純白の……私の本来の魔力光が集束される。(要するにかめめ波)

初めてオーバードが発動した時、仮面の男に使ったあの未完成の集束砲撃だ。

「ごめんな……お休みな……」

はやては涙ぐみながら防衛プログラムに別れの言葉を告げる……

「響け、終末の笛……ラグナロク」

杖を振りかざしその先端に魔力が集まり、そして……

「……ブレイカアアアアアアアアアアアアアアアアア!!……!!」

「」

「う、上手くいったんかな？」
コアが飛ばされた空を見上げながら呟くはやて…
「プラン通り進んだんだ…後はアルカンシエルに頼むしかない…」
クロノも同じ様に空を見上げる…
「後はアースラから報告が来るのを…」
途中で言葉が止まった…
……ふえ？どうしたのコダイ？
「いや…少し左腕が…」

くオマケく

「コアの転送……来ます！！」
「アルカンシエル、バレル展開っ！！」
エイミイはアースラの前方に魔力砲のバレルを展開する、艦首には
環状魔法陣が取り巻き魔力球が出現する。
「ファイアリングロックシステム……オープン！命中確認後、反応
前に安全距離まで退避します……準備を！！」

「了解！！」

リンディの目の前に鍵穴が出現する、そして真剣な面持ちで指令を出す。目標の闇の書のコアが視認出来る距離まで見える、艦内の緊張感是否が応でも増してくる…

「アルカンシエル、発射！！！！」

防衛プログラムが目標に到達すると同時に、リンディは鍵穴に鍵を差込んで回す、艦首の魔力魔力球は閃光となって防衛プログラムに着弾した……

リンディは身じろぎ一つせず、着弾地点をモニター越しに見つめていた……

「艦長、再生反応アリ！防衛プログラム…未だに健在です！！」

エイミイの言葉にアースラーの局員全員がモニターを見た、そこに居たのは……

アアアアアアアアアアアアアアアア！！

防衛プログラムの頭頂部にあった女性が闇の意志のバリアジャケット纏っている姿だった……

「魔力反応……想定不能！？」

「そんな……EXランク！？」

魔導師の最高ランクはSSS+……EXはそれをはるかに超えると
言う事……

「艦長、地球から生命反応！こちらに高速で向かって来ます！！」
「こんな時に……今すぐに後退、下がりながらチャージをしてもう一度アルカンシエルを撃ちます！エイミイはこちらに向かってくる反応を解析してください！！」

「了解！！」

こんな絶望的な状況でも冷静に指示を出すリンディ。

「生命反応解析出来ました！……これは……」

「コ？」

「……コダイ君！？」

「え！？」

エイミイの言葉に再びモニターに目を向けると……

アアアアアアアアアアアアアアアア！！

大量の剣を重ね、一对の鉄の羽を広げたコダイが、白く細い刀で防衛プログラムの脇腹を貫いていた……

取り敢えず、平和的解決……と言つ名のフルボツコボユコダイ（後書き）

メガネ「ついに最終決戦！！」

コダイ「私の『能力』の見せどころだね」

レイ「コダイ！ふぁいと！」

メガネ「A・S編が終わつたら何回か日常編をやつてオリジナルを1つか2つ挟んでstrickers編に行こうと思います」

コダイ「長すぎない？」

メガネ「仕方ないだろ！？A・Sからstrickersまで10年位あるんだぞ！？色々思い浮かぶわ！！」

コダイ「そう…頑張つてね」

レイ「感謝コゝナゝ、ユタ様、龍賀様、Mushiba様、感想をありがとうございます！！」

メガネ「もう少してA・Sも終わります！」

レイ「皆様の意見や感想イロイロ送ってください！！」

〜次回もお楽しみにしてください〜

大気圏突破はかなり無茶した…byコダイ（前書き）

最終決戦です…と言ってもコダイのチートを振舞う回ですけど…
…

大気圏突破はかなり無茶した…byコダイ

前回のあらすじ

防衛プログラムのコアを宇宙へ転送。

嫌な予感がしたから、取り敢えず大気圏突破。

予感的中、防衛プログラムがいたから、取り敢えず脇腹をブスリと刺した。

以上……

三行！？

レイにも心の中を突っ込まれた……

「正直……当たって欲しく無かったんだけど」
脇腹を刺した防衛プログラムを蹴って、距離を取る。

すっごくいい何で分ったの？

「詳しくは分らないけど……多分、あの時が原因だと思う」
闇の意志との戦いの時に左腕が紛失した……だからお返しとばかりに闇の意志の左腕を千切って自分の腕にした……

「恐らくその時に、闇の書との特殊なパスが繋がったんだ……だから感覚で分ったんだ……」

まだ、防衛プログラムは生きています……

「でも……此処までしぶといと逆に褒めなくなっちゃうなあ……」

「コダイ君！コダイ君聞こえますか!？」

目の前にモニターが現れ、そこにはリンディが映っていた……

「あ、リンディ久しぶり」

「あ……はい、お久………では無くて、何で此処に!？」

「いや、何となく嫌な予感してさ……大気圏突破して来て見たら案の定……」

「大気圏突破って………大丈夫なんですか？」

「そんな訳無いでしょう。摩擦熱で10回位死んだし………その内の2回は飛行機に当たって轢死……で良いのかな？良いよね乗り物だもの……」

「いや、私に聞かれても………それに口調も何か変わって………」

「それに関しては後で話すよ、今はあの防衛プログラムを何とかするから」

そう言っって一方的に通信を切った。

「さて………」

アアアアアアアアアアアアアア!!

うわ…コッチ睨んでるよ、殺気飛ばしてるよ…全然怖くないけど。
…ふえ!? ランク測定不能!?

「ランクにしてEXか…まあどうでもいいけど」
細長い刀を片手で縦横と軽く1回ずつ振る…うん、性能は問題なし。

「何で在ろうと殺して見せる…」

アアアアアアアアアアアア!!

防衛プログラムの周囲に現れたのは大量の魔法陣と魔力弾…今まで蒐集した魔導師の射撃魔法と砲撃魔法のオンパレードだろう…

「うわ…宇宙からだ」と星見えないうて聞いたんだけど…綺麗な星が沢山…」

軽く現実逃避して見る…前言撤回、無理…アレを防ぐとか避けるのとか絶対無理だよ…

ズドドドドドドドドドドドドドドドドッ!!!

防衛プログラムが私を指すと同時に魔力弾やら砲撃が一斉に発射された。

「…避けるのも防ぐのも無理なら…消すしかないか」

次の瞬間アレだけあった魔法が一瞬にして消えた……いや、私が消したんだ。

「私を……いや、『あの子』を取り込んだから理解できるでしょ？
……これは私が『思った』から消えたんだって……」

パスを通して分る……いま防衛プログラムは驚いてる……この隙を逃す気はない……

鉄の羽を広げて加速……防衛プログラムの目の前に一気に近づいた。

アアアアアアアアアアアア！！

……流石に早いな……もう障壁張ったよ……しかもかなり頑丈そうなもの……でも。

ヒューン！

無造作に振り下ろされた刀は障壁を簡単に切り壊した。

「言っておくけどコレは『思っ』て『いないよ。この刀の能力さ……」

右手を防衛プログラムに向けると防衛プログラムから鎖が数本現れて、私の手元まで延びた…これはこっちから出して障壁を張られるのを防ぐため。

「そらっ」

鎖を引っ張りこちらに引き寄せ、左手に持った刀で連続で切り刻んで、蹴り飛ばす。

アアアアアアアアアアアアアアアア!!

また鎖を引っ張り、切り刻み、今度は違う方向に蹴り飛ばす。

アアアアアアアアアアアアアアアア!!

何度も……何度も……飽きるまで繰り返す……

アアアアアアアアアアアアアアアア!!

「もういいか」

鎖を振り上げ、一気に下に引っ張る、勢いよく落ちてくるアレを……

……

ブンー！

カウンターの要領で、両断した……

アアア……アアアア……

うわぁ……悲惨……まだ生きてるよ……

左右に分れたボロ雑巾の様な防衛プログラムを見てレイが感想を漏

らす……

「……再生能力がある所為でしぶといなあ……」
しかし、どうする？……もう気分晴れたしコレを痛めつける必要は無いけどこのまま放置したらどうなる事やら………そうだ。

「この手で行こう……」

刀を右手に持ち替え、左腕を掲げると……

ポコポコ！メキメキツ！！グシャツ！！！！

左腕があり得ない方向に折れ曲がったり、肥大したり、変色したりを繰り返し……

オオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！

左腕は……サイズは小さい物のなのは達と戦っていた時の防衛プログラムの頭になった……

「貴様は生きながら溶かし殺す……今まで歴代の主達を喰ったんだ……食べられる側になるのもいいかもしれないよ？」

そう言つて左腕は防衛プログラムを……

ゴクン……

丸ごと飲み込んだ……

「消化するように溶かせば時間は掛るけど確実に殺せるだろう……」
役目を終えた左腕は元の左腕に戻った……

どれくらい掛るの？

「さあ……早くても一年……遅くて五年かな？……」
さて…戻るか……

「エイミー、悪いけど私をそっちに転移して欲しいんだけど」
モニターを展開してエイミーに連絡を取る。

「OK！もうちょっと待ってね…後、なのはちゃん達ははやてちゃん
が倒れたから少し前にコッチに運んだよ」

「分った」

はやてが倒れたか……まあ無理もないか、今まで車椅子で生活して
いたはやてが行き成りあんなでかい魔法を使ったんだ…体力も魔力
も使いきったって感じかな？

ブシャツッ！！

……ブシャッ？……ちょっと待って、今どっから音がした？かなり近い……

ブシャアアアアアアアアア……

二回目で原因判明………コレ私の体から血が吹き出る音だ……

「エイミイ………出来れば今すぐ戻して………」

「え！？チヨットコダイ君！？ええ！？バイタルが死亡寸前を指してる！急いで転移するから死なないで〜！！」

手当と言っても血を止める程度だから、暴れたら開くよバック
りと……

意識が薄れていく中……ツキトのある言葉を思い出した……

大気圏突破はかなり無茶した…byコダイ（後書き）

メガネ「どんなに格好良く絞めても最後はギャグに落ちる…これが俺クオリティ!!!」

コダイ「威張らないでよ……宇宙空間で血が吹き出るってどういう事が分ってるの?」

メガネ「つか、生身で宇宙空間に居る奴に言われたくない…」

コダイ「それを言われると……言い返せないよお……」

メガネ「んじゃまあ…感謝コーナー行つとくか……レイ」

レイ「OK 感謝コ〜ナ〜、ユタ様、Little様、感想をありがとうございます!」

メガネ「Little様から、誤字の報告と、作戦メンバー全員にフルツタルトを貰いましたありがとうございます!」

作戦メンバー全員「……ありがとうございます!」「」「」

コダイ「あ……リインフォース……」

メガネ「その点は問題無い、それにA、S編の最初辺りに張った伏線も回収するよ!……多分」

コダイ「自信ないのね？」

レイ「皆様からの意見や感想などイロイロ待っています!!」

「次回もお楽しみにしてください」

拾い食いはいけないってまさにこの事だよね……b y n o d a i (前書き)

あり得ない方法でリインフォースを生存させました……コダイ……
……恐ろしい娘！……おや？誰か来たようだ……

拾い食いはいけないってまさにこの事だよね……byコダイ

「もう一度、死ぬかと思った……」

「イヤイヤ、死を数えないでよ……」

向かいに居る、ユーノの呆れた感じの突っ込みが入った……

あの後直ぐに転移され、何とか死なずに済んだ……

「けどコダイ……どうして大人になったの？」

「それは皆が集まってから言うから少し待ってくれ……」

確かはやては医務室、ヴォルケンリッターその付き添い。クロノは

用事があると言ってどこかに行った……

今、私たちは食堂で待機している……

なのは達は、さっきからソワソワしている……

はやて、大丈夫かな……

「ただの疲労だろ……寝てれば治るよ」

そうだけだよ……

レイもソワソワしている……そんな時。

「待たせたね、提督に報告があったから遅れたけどはやての様子を見て来た」

クロノが食堂に戻って来た。

クロノが言うには、もうはやてが呪いに浸食される事は無い……普通

にリハビリをすれば、歩けるようになる……

それを聞いたなのは達は大喜びではしゃいでいるけど……

「だが…良い話ばかりではない……」

この一言で一気に静まり返った……

「彼女……リインフォースは防衛プログラムの分離の際に力の大半を失ってしまった。もって後、数カ月で消滅してしまつらしい……」

「そんな……そしたらシグナム達も消えるんじゃない……!!」

フェイトは思わず立ち上がる。

「ヴォルケンリッターは防衛プログラムと共に本体から解放したそうだ……消えるのはリインフォースだけらしい」

ヴォルケンリッターは守護騎士プログラムだから管理者権限で分離も出来るのは当たり前か……

「治したりは出来ないの？」

なのはが恐る恐る手を上げる。

「ああ…夜天の魔導書の闇の書になる前のデータが無いから修復できない……それに、コレが一番の原因らしい……」

「一番の原因？」

アリシアが首を傾げた。

「防衛プログラムは……夜天の魔導書の本体がすぐにプログラムを再生させるそうだ。今後はやてが浸食される可能性が高い…夜天の魔導書が破壊されない限りその危険性が消えない……だから」
終始辛そうに話していたクロノは一呼吸おいてこう言った……

「夜天の書を破壊して欲しい……そう、リインフォースたつての願いだ……」

その言葉に誰もが黙った……

「そ、そうだ！コダイ、私を生き返らせたり、母様の病気を治したりした様にすれば「無理だ」ええ！？」

アリシアの案を一言で切り捨てた……

「あの時は『どうやって生き返らすか』と『どうしたら治るのか』が分っていたから出来たけど。今回は『どうやって治すのか』が分らない……夜天の書の元のデータがあればすぐに治せるけど……」

私の『能力』の源はイメージ……はつきりイメージしないとちゃんとしたものにならない……
打つ手なし……

「失礼……ここにトキガワはいるか？」

静寂を破って入って来たのは、リインフォースだった……

「私がどうかしたの？」

「すまないが、ついて来て欲しい……話したい事がある」

「……分った、じゃあ行ってくるよ」

皆にそう言っ、リインフォースの後について行く……

着いた場所は医務室、そこにはヴォルケンリッターと目を覚ましたはやてがいた…

「はやてはもう大丈夫なの？」

「もう平気や、この通り！」

力瘤を作ってアピールするはやて…

「本当に元気そうだね…そうだ、話があるって言ってたけど…」

「ああ…実はさっき気になる事を見つけてな…」

ラインフォースは私に夜天の書を差し出した…

「コレを持って見てくれ…」

「うん…」

夜天の書に触れた…その時。

「……………！！」「……………」

「やはり……………」

ラインフォースが納得した表情をしていて、ヴォルケンリッターは驚いた表情で固まっていた…

「なんやそれ？…夜天の書が光つとる…」

はやての言う通り…私が触れた途端、夜天の書は呼応するように光った…

「トキガワ、一つ質問していいか？」

「うん…」

「お前は闇の意志と戦ってる時…何かを手に入れたか？」

何かを手に入れたって……………あ。

「え〜と…これしか思い浮かばないけど……………闇の意志との戦いで左腕吹き飛ばされたから、その仕返しに左腕を引き千切って自分に

「ヴィータちゃん……それはどう言う意味？」
コッチもコッチで散々な言われようだった……

「あ、コダイ君が主になったらプログラムがコダイ君を浸食しちゃ
うんじゃない？」

「その筈だ……その筈なんだが……」
なのは疑問に齒切れが悪いリインフォース……

「実際の所まだ防衛プログラムは生きている……その筈なのに強ま
るところか徐々に僅かながら弱って来ている……一体なぜ？」

「もしかして、私が防衛プログラムをコアごと取り込んだからかな
？」

ピシッ！！

あ、固まった………コレ言ったらまた絶対総ツツコミが来るだ
ろうな……

「ああ……まあ、いつか」

予想通り総ツツコミが来た……

「えっと、コダイ君が防衛プログラムを消してくれるからもうリイ
ンフォースは消える心配はないんやね」

総ツツコミの後、時間も時間らしくなのは達は地球に戻り、医務室に居るのは八神家と私だけだった……

「その通りだよ、はやてとはもう融合出来ないけど、ヴォルケンリッター同様に普通に生きていられるよ」

まあ……防衛プログラムが完璧に消えたらもしかしたら、再びはやてと融合出来るかも知れない……もうちょっと夜天の書を読んで調べてみるか……

「よかったなあ〜リインフォース、これからもずっと一緒だな」

「ハイ……そうですね」

そう答えた……リインフォースはどこか暗い。

「我らは……今まで『闇の書』として多くの人間を苦しめて来た……完成させるまで主を蝕み、完成させたら主を取り込み破壊の限りを尽くす……そんな我らが幸せになっていい者か……」

ヴォルケンリッターはその言葉に顔を伏せる……

「何を言うとするんや！誰かを傷付けたかて、自分が幸せになっちゃいけへん理由は無い！皆平等に幸せになれる権利を持つとするんや！リインフォースや皆はそれをようやく手に入れたんや！」

「しかし、現に我らは主ははやてを今まで蝕んで来た……」

「でもそれは歴代の主が改変した所為やる！？だったら皆も同じ位苦しんで来たんや！皆ウチにとつて大事な家族や！『幸せになっちゃいけない』何て言うたら許さへんで！！」

「家族か……」

……この会話は入れそうにないな……家族がいない私には家族と言うものがどんなモノかが分らない……ただ……決して失ってはいけないモノ……そう『あの子』に教えられた……

「……ん？」

家族と言う単語が離れず、そのままページをめくっていると在るデータを見つけた……そこには『Family』と書かれていた……

……もしかして……

データを起動する、すると夜天の書が宙に浮き大きなモニターを出現した。

「な、何や!？」

はやての言葉に皆がモニターを見た……そこに映っていたのは……

『あゝ……映ってる?』

「コ、コダイ?!……いや胸があるからコダイじゃない……」

ヴィータの言う通り……映っていたのは私に瓜二つな女性だった……
声ははやてに似ている……

800

『えゝ……オホン、コレを見てるって事は、この夜天の書を完成させたって事だよね……有難うございます』
ペコリと頭を下げる女性……

『私はこの夜天の書を創った者です』

夜天の書を創った者……夜天の創設者か……

『守護騎士たちは元気になっていますか?』

その言葉にヴォルケンリッターがピクリと反応した。

『シグナムは真面目で固いけど、常に主を守ろうとする子だから無茶はさせないでね？…………… ヴィータは人見知りが激しいけど、根は良い子だから優しく接してあげてください…………… シヤマルは優しく大人しく皆を癒してくれる子、だけどキッチンには立たせないでね、料理が私並みに下手だから…………… ザフィーラは無口だけど盾の守護獣として皆を守ってくれるしっかりとした子…もし主が男だったら相談相手になってくれるかもしれませぬ……………』

夜天の創設者は想い出話しの様に微笑みながら語った……………

『あと、この夜天の書にはもう一人眠っています……………』

夜天の創設者は夜天の書を優しく抱き締めた。

『その子の名前は…………… どんな悲しい涙も吹き飛ばし…………… 幸福を運んでくる…祝福の風…………… リインフォースと言います』

リインフォースはじつとモニターを見ていた…

『では、最後に…シグナム、ヴィータ、シヤマル、ザフィーラ、リインフォース…………… そして夜天の主よ…………… どうか、幸せになつてください……………』

夜天の創設者は手を組み祈るように言った……………

『…………ふう、も〜何でこんなに固い言葉を使わなきゃだめなの？
あの子たちは、言わば私の子供だよ！？何で敬語何か…………え？ま
だ撮ってる？…………何やってんの！早くけ』
そこで映像が終わり夜天の書はポスリと地に落ちた…………

最後、締まらなかったな…………そう思いながら夜天の書を拾った。
「…………」…………………………………………………………………………
ヴォルケンリッターはずっとモニターがあつた場所を見ていた…………

「よかったなあ…………皆…幸せになつてええつて…………」
はやてが泣きそうになりながら呟いた………………………………
コレは出てった方が良いかもな……………………ゆっくりと誰にも気づかれ
ない様に医務室を出た…………
その直後、ヴィータ達の泣き声が聞こえた…………

ねえ……コダイ

廊下を歩いているとレイが訪ねて来た…

家族つて……何だろうね

「……………私にも分らない」

コダイにも分らない物があるんだね

「当たり前だよ……………持ってない物を分ろうとするのが無理なんだよ……………」

魔法少女リリカルなのは〜ある転生者の新たな世界〜 A・S編

完

拾い食いはいけないってまさにこの事だよね……b yコダイ（後書き）

メガネ「つてことでA・S編終了!」

コダイ「今回はギャグでは終わらなかったね」

メガネ「そこでギャグにするセンスは俺には無い!」

コダイ「威張らないでよ……」

メガネ「さて、ちょっと解説な……『ヴィータがコダイといて懐かしいって思った理由』について」

コダイ「ああ……伏線回収ね」

メガネ「そ。まず本編見て分るように、夜天の書を創った人がコダイにそっくりだったから、ヴィータが懐いた。コレが理由ね…他のヴォルケンスも似た様な事を言ってたし…」

コダイ「それだけ?…だったらシグナム達もあり得るんじゃない…」

メガネ「いや、ヴィータにしたのは。ヴィータが唯一『闇の書の完成によるはやての治療』に関して疑問を感じたから、こういうのに鋭いのかなって……後、子供だからこそ感情を逆らわずに、コダイに懐いた……て感じ」

コダイ「…意外と考えてるんだ……」

メガネ「後、お前からにじみ出る母性」

コダイ「結局そこにもっていくんだ……………」

メガネ「それが俺クオリティ!!」

コダイ「はあ……………レイ」

レイ「感謝コゝナゝ、ユタ様、龍賀様、感想をありがとうございます!」

コダイ「ねえねえ、この服は何?」

メガネ「それは龍賀様からのお土産で　×××HOLICの吉原侑子さんが着ていた服全種類……………」

コダイ「早速着て見たよ」(赤い和服っぽい物)

メガネ「躊躇なしに着やがって……………つか、大人になった方が似合ってるって……………」

コダイ「ありがとう」

メガネ「お礼は龍賀様に言っただな……………」

コダイ「可愛い服をありがとう!私、とっても嬉しい!」(にぱ)

メガネ「またお前はあああああああああ!」

コダイ「女装はオシヤレだよ!」(逃亡)

追加設定 『トキノツキト』(前書き)

PV100万アクセス突破しました！

本当にありがとうございます…！

追加設定 『トキノツキト』

名前 時乃^{トキノ} 月人^{ツキト} 本編ではカタカナで表記

妄想C.V. 榊原ゆい

好き 家族、親戚、甘い物等……

嫌い 苦い物……

容姿 白い髪に青い目の中世的な美少年。よく母親に女装させられる……

性格 大人しくて優しい、母親の血が天然が少し入ってる。（コダイよりはマシ）

コダイの『想像を創造する能力』の本当の持ち主でコダイを産み出した人間。

幼少の頃、家族を殺されて、ある研究所で実験材料にされる。度重なる非道な行為（月姫で言うところの琥珀。Fateで言うところの間桐桜の様な事）によって精神崩壊が起こったが、自分の世界に逃げる事でギリギリ保っていた。

それを長い間行っていた為、想像と現実の区別がつかなくなり『想像を創造する能力』を発現した。

それで産まれたのが後にコダイとよばれる『トモダチ』だ。その後何とか平静を保てたが、長くは続かず発狂、研究所にいる奴らを全

員皆殺しにした後、ある組織に拾われ、人間に復讐がてら暗殺をしていた。

その頃に五感が知覚障害を起こす。（簡単に言えば沙耶の唄の郁紀）暗殺にツキトは素手のみで殺す、その戦闘センスは半端無く強い。殺した人間を食べて生きていた。1000以上もの命を喰らった事によつて、肉体を不死そのものに変える…

ある戦争の時、自分の家族を殺した化物を見つけて、それを殺したが、その化物が人に変わつてゆくのを見た瞬間、人を殺したと自覚してさらに発狂、最後にコダイに名前を与えて、『想像を創造する能力で』自分を殺した。

その後、コダイはツキトの体を使って活動している。

ツキトの『想像を創造する能力』はその名の通り頭にイメージした事がそのまま現実になる能力。条件、制限、副作用などは全く無く何時でも無限に使用できる。

想像と現実の区別がつけられないツキトだから使える能力で。他の奴が使おうとすれば必ず死ぬ。

それはこの能力で起こる事は全部『当たり前の事』だと思っているからで。それを『能力』と思つている時点で死ぬ。（コダイは他人にも分り易く『能力』と言つてるだけ）

思えば発動出来るので回避は不可能に近いが……発動するにはしっかりとイメージしないといけない。

コダイも同じ能力が使えるが。コダイにのみ瀕死時のみと条件が付いてるが、それ以外はツキトと変わらない。

また、ツキトとコダイがいた世界はなのと同じ地球だが、科学や技術が凄い発達している。

メガネ「さて、お次は大人コダイですよ」

コダイ「よろしくね」

名前 時代 ときがわ 古代 こたい 本編ではカタカナで表記

妄想CV・ 柚木涼香（武装錬金の津村 斗貴子をイメージ）

年齢 約19歳

身長 158cm

体重 45kg前後

容姿 白い髪に白ずくめ、単色の青い瞳が特徴。

十人に十人が振り向く程の美人（美形では無い！！）で普段は前髪で顔を隠れている…コダイ曰く「相手に視線で先読みされない為」

チヨット力を入れれば折れそうな華奢な体つきの様な本来女性に使う筈の表現が出来る位細い。無表情も相変わらず…

色気も子供時よりも数倍まして、はやくに『エロっぽい姉ちゃん』と言わせたほど……………

性格 天然DSなのは相変わらず。だけど口調の所為や主婦染みた言動が『弄るのが楽しいお母さん（つまり桃子）』的な性格になっている。

女装はオシャレなのは変わらない。したらしたで男女問わず弄るので手がつけれない……………

ちなみにフラグ建築能力はコダイの素である…

コダイは性別も年齢も無く、ただツキトの体にいるだけの存在で、性別はツキトの体と同じ男にしている。なので本来の一人称は『私』で口調は中性的なものになってる。

ツキトと違い知覚障害が無く、人はその気にならなければ喰わない。…………… 人物像のモデルはツキトの両親らしい…（多分どこかで歪んだ）戦闘は何でも使っていたが基本は刀を使っていた。

魔導師としては未熟だが、純粋な戦闘力なら身体強化など無しでE Xを遥かに超える。

コダイは簡単に言えば『架空の人物』の様な者で、時間、事象等の概念は無く。それらを操る能力等はあまり効かない。（一応肉体はあるから無効化は出来ない）

メガネ「ってな感じのまさに『性格最悪の完璧超人』な大人コダイでした！」

レイ「わ〜」（パチパチ）

コダイ「それは良いんだけどさ、ちょっと聞きたい事があるんだけど」

メガネ「何？」

コダイ「ほら、私さ…上記に書かれている様に反則的なスペックでしょ？だからどの位強いのか効きたくて」

メガネ「えつとなあ……………魔導師としては……………現時点でかなり弱い方、だけど戦士系統なら間違いなく最強かな？」

コダイ「ああ…前に言ってたね。私がLv100だとしてレイはLv1だつて…」

メガネ「現に最初の守護騎士戦では押ししていた……………まあトリッキーキャラだからこんなもんかと」

コダイ「だから勝率悪いんだ……………まともには勝てたのってプレシア・クローンの時だけだし……………」

メガネ「だつてそうじゃないと面白く無いじゃん……………」

コダイ「なら仕方ないね」

レイ「ねえ、それでいいの？ホントにいいの？」

コダイ「でさ……………あの子は？」

メガネ「ツキトはチートとバグを足して2でかけた奴」

コダイ「割らないの？」

メガネ「思えばどんなものでも消せるし、創れるしで戦闘センスは半端無い……………ぶっちゃけた話し……………EXランクが束になって掛ろうと秒殺出来る……………」

コダイ「凄いね……………」

メガネ「まあ、もう本編には出さないけどね」

コダイ「なら良いよ」

レイ「いいの！？それで本当にいいの！？？」

追加設定 『トキノツキト』（後書き）

メガネ「以上！ツキトと大人コダイでした！」

レイ「早速感謝コ〜ナ〜、ユタ様、龍賀様、マーボー様、感想をありがとうございます！！」

メガネ「ユタ様からモンハンのキリン装備（女）を頂きました、ありがとうございます！！」

コダイ「結構動きやすいねコレ」

メガネ「そりゃあハンターの着る装備だし……ってもう着ている！？」

コダイ「女装はオシャレだよ」

メガネ「今回は突っ込まん……なぜなら今回は……」

メガネ「PV100万アクセス突破しました!!」

レイ「おお〜!!」

メガネ「記念として番外編として何かを書くのでもし、リクエストがあつたらドンドン送ってください!!」

コダイ「締め切りは4月10日まで受け付けます!!」

レイ「皆様の意見や感想などイロイロ待っています!!」

メガネ「これからも『魔法少女リリカルなのは』ある転生者の新たな世界』をよろしく願います!!」

〜次回もお楽しみにしてください!!〜

新しい家族boyコダイ（前書き）

リインフォースとマテリアルズの回です！
こっから少しggggになるかも知れません

新しい家族byコダイ

闇の書事件から数日……色々忙しかったのも落ち着いた頃……え？
何が忙しかったかって？簡単に言つと…

なのはが家族とアリサとすずかに魔法の事を話し、魔導師を続けた
いと言つた。私の事は魔導師になった事を話した、大人になった理
由もロストロギアを取り込んだ事に……過去話は嫌いだからね。

ヴォルケンリッターは保護観察が決まり管理局への従事が決まった
……と言つてもクロノやグラムが手回ししたおかげで形だけにな
っている……はやてはリハビリして魔導師になるそうだ…

後、グラム何だけど。辞職してはやてが大人になったら話すとか
言いだしたから、『DEATH NOTE』で辞職を阻止して、は
やての所へ無理やり連れてつた……人に酷い事をしたら謝るのが
普通でしょ？

今まで自分がした事を話したグラムにはやては『今まで援助して
くれてありがとうございました』と微笑んだ。その事もあつてか今
じゃ爺さんと孫みたいない感じらしい。リーゼ姉妹も時々遊びに言っ
てるらしい。

最後、リインフォースの事……私は今の闇の書（はやては夜天の書
なので区別化）の主なので一緒に暮らすことにした……その時のリ
インフォースは『私の全ては主の物です……あ、貴方の望むよう
にノノノノ』とか言つたら、なのは達が暴走……更にレイが『私が
コダイのモノだよ〜！』と言つて更に悪化。

なのは達にはやてが加わつた六人娘、ヴィータ、シグナム、シヤマ
ル、リインフォース、アルフ、リニス……何故かリーゼ姉妹も

暴徒化していた……何でだろう？

「ねえリインフォース、そう言えば私が主になってから一回も起動してないよね？」

リインフォースが使う部屋を掃除しながらふと思いついた事を言った……

「そう言えばそうですね……一区切り着いてから起動して見ましよう」

「そうだね」

そう返して、黙々と掃除を続けた……

そして、私の部屋で起動させる……って

「どう起動させればいいの？」

「普通のデバイスと同じです」

「分った……起動」

闇の書が光り、ひとりでに浮いた……本が開き、ページがパラパラとめくれて、その直後に部屋を埋め尽くすほどの光を放ち、思わず目をつぶってしまった。

「……………治まつ……………た？」

光が徐々に弱くなるのを感じ目を開けると……………

「此処は何処ですか？」

「何だここは!?!」

「なかなかいい所だな……」

なのは似の短髪の子、フェイト似の青い髪の子、はやて似の白っぽい髪の子、いた……

「リインフォース……誰?この子」

「私に聞かれましたも……」

取り敢えず聞いてみるか……

「えつと……誰なの?」

「気安く我に話しかけるなっ……」

はやて似の子が振り返ると突然固まった……

「おおお……おおおおおお……!」
そのまま私の元へ向かい、手をとり跪いて……

「姫よ!」

……つと言った。

「え?姫?……私?」

「はい、貴方の様な美しさ……我が姫に相応しい！」
えっとコレは……褒めてくれたんだよね？
「うん……取り敢えず落ち着こう……色々話を聞きたいし」
「勿論だ！姫の為なら我の全てを曝けだ」お・ち・つ・い・て・？
「はい」
話を聞く為にリビングに移動することにした……

リビングのソファーに私とリインフォース、三人が向かいあう様に座る、紅茶も出して……

「つまり、闇の書の闇を封印した際に残った存在で、三人はそのマテリアルって存在なんだ……」

なのは似の子が星光シュテル・ザ・デストラクターの殲滅者……マテリアルS

フェイト似の子が雷刃レイ・ザ・スラッシュヤーの襲撃者……マテリアルL

はやて似の子が闇ロード・ディアーチェを統べる王……マテリアルD

……ふと『あの子』の……マテリアルKを思い出した。

「どうだ！カッコいいだろ！えっへん！」

立ち上がって、胸を張る雷刃の襲撃者……

カッコイイ……！！

何かテンションあがっているレイ……

「カッコいいけど、座って大人しくしてくれたらもっとカッコいい

よ？」

「え？そ、そう？だったら座って大人しくする……／＼／＼／＼顔を赤くして、座る……今更恥ずかしくなった？」

「闇の書って事は……何か目的があるの？」

「私たちの目的は、『砕け得ぬ闇』を復活させる事です」

星光の襲撃者が静かに言った。

「砕け得ぬ闇？」

闇の書の闇見たいなモノかな？

「ですが……その必要はありませんね……すでに『砕け得ぬ闇』は近くにありません……」

「な、何だと！？それは何処にある……！」

驚きのあまりに立ち上がるリインフォース……

「そこに……目の前にあります」

星光の襲撃者の視線の先には……

「え……私？」

何故か私が見つめられていた。

「私がどうして『砕け得ぬ闇』なの？」

別に闇の書には……あ

「もしかして防衛プログラム？」

そう聞くと、星光の襲撃者はコクンと頷いた。

「闇の書の闇を取り込み、消滅させるどころか力として吸収している……そんな人……を『砕け得ぬ闇』の他に何と言えはいいでしょうか……」

え？……吸収しちゃってるの？と言うか人？って疑問形だったよね？別にいいけど。

「それって……危ないんじゃない？」

「いえ、あなたの方が力が上なので暴走することは一切ないでしょう……」

それなら良いけど……

「じゃあ、これからどうするの？『砕け得ぬ闇』が私ならもう目的

を果たしたんじゃ」

「はい…ですからこれからは貴方に仕え、身も心も捧げます／＼／」

はい？………何て言ったこの子？何で顔が赤いの？

「待ったあつ！！ぼ、僕だって身も心も捧げ……捧げ／＼／」

「寝言は寝て言え！！姫に全てを捧げるのは我だ！！そして……／＼／」

立ち上がって抗議するマテリアルズ……

「何を言っているんだ！！私が最初に捧げると主に言ったんだ！！／＼／」

何かリインフォースも参戦！？

「順番は関係ありません……」

「そーだ！！ふこーへーだあ！！」

「姫には王たる我が相応しい！！」

「私と主は既に繋がっている！」

捧げる捧げないはどうでもいいからデバイスを起動しないで……後、リインフォース……それはパスの事だよね？

「こうなったら、勝負だー！！」

「全力全壊で迎え撃ちます……」

「フン！我に屈しろ塵芥ア！！」

「主の為に……闇に沈め……」

.....よし

（OSHIOKI中）

「騒ぐのは勝手だけどデバイスを起動しちゃだめだよ？」

「ゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメン
ナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメン
ナサイゴメンナサイゴメンナサイ」

「ゴメンナサイゴメンナサイ！！殺気を抑えてください！！背後に
防衛プログラムがあああああ！！！」

抱き合っただけ泣きそうになっただけマテリアルズ。と土下座して怯えているリインフォース……久しぶりだからやり過ぎちゃった

「えっと……この事をクロノとリンディに連絡するから静かにね？」
「……ハイ！シズカニシテイマス！！」「」「」

クロノとリンディにこの状況を連絡した所、特に何もしていないので私が面倒みれば問題無いらしい……更に、囑託魔導師になれば誰も文句を言わないとの事……囑託魔導師は後にして……今は……

「まあ……これから一緒に住むからにはちゃんと名前を上げないと……」

星光の殲滅者……まんまなのはだしね……よし。

「星光の殲滅者は『サクラ』……雷刃の襲撃者は『エル』……闇を統べる王は『アンズ』……コレが今日から三人の名前ね」

「サクラ……ですか、ありがとうございます」

「エルかぁ……えへへ、何かカツコイイ」

「アンズ……よし、我はこれからはアンズと名乗ろう！」

「私の名前はトキガワコダイ……名前がいいよ」

「分かりましたコダイ様」

「よろしくねコダイ」

「よろしく頼むぞ、姫」

呼び捨てで良いんだけど……あ、忘れてた。

「新しい守護騎士も出て来たことだし、闇の書から卒業しないと……」

確か、リインフォース…は祝福の風だったよね？……だったら。

「どんな不幸も吹き飛ばし、あらゆる幸福を運ぶ風……今日からこの魔導書は『祝風の書』だ」

祝風の書を撫で、皮表紙の部分が白く染めると。祝風の書が完成した…

「さて、新しい家族が4人も増えたから派手に……ああ！！大事なことを忘れていた！」

私は慌てて携帯電話にある人物達に連絡をとった……

「ねえねえ！この子達本当に好きにしているのー!？」

「ホントにフェイトさんそっくりね……」

「中身はアリシアに似ているわね……」

「こんだけ、可愛いと腕が鳴るわね」

その夜、ヒエラルキー経由でマテリアルズの事が伝わり総出で盛り上がる事になったと追記して置こう

新しい家族b yコダイ（後書き）

メガネ「マテリアルズの登場でしたー!!」

コダイ「何かギャグ落ち多く無い？」

メガネ「ソレが俺さー!!」

コダイ「マテリアルズの名前だけどさ…何でマテリアルDはアンズなの？他のは大体予想つくけど…」

メガネ「闇ってアンとも呼ぶじゃん、だからアンズって…」

コダイ「安易だね…………」

メガネ「うっせ！」

レイ「感謝コゝナゝ ユタ様、タマゴ様、龍賀様感想をありがとう
ございますー!!」

メガネ「ユタ様から、モンハンのアクラ装備（女）龍賀様からはP
SPのとある魔術の禁書目録のサーシャ（魔法少女版）の衣装を貰
いました！」

レイ「カナミンだあゝ」

コダイ「どっちにしよう…………どっちも着たい」

メガネ「そこで悩むか普通…」

コダイ「女装はオシャレだよ！」

メガネ「コイツ普通じゃ無かったな……」

レイ「皆様からの意見や感想など色々待っていますー!」

メガネ「リクエストはまだ有効ですから、こちらもドンドン送ってください!」

コダイ「作者の頭的にはコラボは無理だと思いますけど……」

メガネ「orz」

コダイ「あ、落ち込んだ……」

「次回もお楽しみにしてください!」

だからフラグって何？b y コタイ（前書き）

某幻想殺し並みのフラグ能力でついにあの人も…！！

だからフラグって何？byコダイ

ある日、プレシアに呼ばれて、ハラオウン&テストタロットサ家に来て
みたら、プレシア一人だった。

リビングに案内されて一息着くとプレシアは…

「コダイ……………私の恋人にならない？」
と言って来た。

ガタガタドタドタドガシャン！！

すると、突然激しい物音が。

「お母さんどう言う事!？」

「母様!恋人ってどういう事!？」

「プレシア……アンタ、バツイチだからって子供にはしる気かい!？」

「少しは年齢を考えてください!!！」

なだれ込んで来たのはテストタロツサ家……後半の使い魔、Sはプレシアの怒りが落ちて黒焦げにされた……

「……ストーカー?」

私、フェイト、アリシアが首を傾げる。まだ使い魔達は黒焦げ状態。

「そうなのよ……」

プレシアが溜息をつく……

この前、ある男性に告白された、俗に言う一目ぼれらしい……プレシアはそれを断った……だがその男はしつこく迫って来ると。

「け、警察とかは？」

「警察は当てにならないよ、例え捕まっても軽く済むし」

私の答えにシユンと落ち込むフェイト……

「此処がミッドだったら、サンダーレイジで何とかするんだけど……」

……

チラリと黒焦げの使い魔を見る……非殺傷設定だから生きてるよね？

「つまり、私が恋人役になってそのストーカーに見せつけるって事

？」

「話が早くて助かるわ……」

私も前の世界であつたし……あ、恋人役じゃ無くて被害者ね。

「それで、何時にする？なるべく早い方がいいし」

「明日は祝日だからその日に」

「分ったよ」

「待ってるわね」

そう言ったプレシアは嬉しそうだった……と言っか。

「「……………」」

生きてるよね？……本当に。

家に帰ってから、その事をリインフォース達に伝えると『演技ですからね！演技ですよ！！』と凄い剣幕でリインフォースに言われた……当たり前なのに。

そして翌日……

「少し早く来たかな？」

朝。なるべく男っぽく見える服に着替えて迎えに行く。
マンション前に差し掛かるとそこにはもう既にプレシアが居た。

「あら？早かったわね」

えっと、時間あつてるよね？……うん、時計も見ても約束の10分
前だ。

「待たせるのもどうかと思って……」

「結構時間にはルーズかと思つたわ」

そんな風に見られてたんだ……否定できないけど。

「それはそうと、今日はどうするの？」

プランは後で話すって聞いたから……

「そうね……まだ、いないようだし」

「適当に街を歩いてストーカーに見つかり次第行動に出ると言つのは？」

「それしか無いみたいね……」

と言つ事で、街をぶらつく事になった……

「そう言えば、買い物の時、何時もここに居るけどあなたを見かけた事は無かったわ……何処で買い物をしているの？」

「普段は朝早くに市場とかに行ったり、少し遠いけど業務用スーパーで買ったりしている」

「業務用スーパー？」

「うん、ほら……私の家、かなり大人数になったからさ、少しでも抑えないと……結構助かってるんだよね。冷凍肉とかキロ単位で売られてるし野菜とかも大袋で売られてるし……一升瓶見たいなマヨネーズを見た時は引いたね」

安くても美味しい料理はいくらでも作れるし。

「良い事聞いたわ……今度場所教えてくれないかしら？」

「いいよ……ん？」

人の視線が……もしかして……

「どうしたの？」

「いた……」

携帯のカメラ機能を使い自分の背後を映し、ズームする。

「この人？」

画面に映っている物陰に隠れてこちらを見ている男……

「そうよ……」

少しだけ後ろを振り返ると、視線で殺せそうなくらいにこつちを睨んでいる……

「ちよつと『DEATH NOTE』を使って脅してきて良い？」

「やめなさい、そんな事が出来たら私がとっくにしているわよ……」

確かにそうだよね……サンダーレイジとか言ってたし。

「……作戦実行ね」

そう言つて突然腕を絡めてくるプレシア。

「プレシア？」

「恋人同士に見せるためよ」

そう言えば恋人役だっけ？

「それは分つたけど……どうすればそんな風に見えるのかな？」

「二人で仲良くこうくつついてれば遠目からはそう見えるわ」

「ん〜……何となくだけでもいつも通りにやればいいかな？」

「あなたの場合はその方が良いわね……さて、デートを楽しみま

しょうか……ダーリン」

「……出来れば名前で呼んで」

殺気を含んだ視線が増えました……

最初にやって来たのは雑貨店……と言つてもただ店の中を回るだけの冷やかしてみたいなもの。

「へえ〜色んなモノが置いてあるわね」

「此処なら当たり外れも少ないかなって……」

此処は以前、なのは達に引っ張られて連れられた店だった。

「ねえ……まだいるの？」

「いるよ……しつこく」

この状態でも諦めないのかな？……え？この状態って？プレシアが腕を絡めている状態の事ですが？

「……しつこい奴は嫌われるのに……ん？何だろっコレ？」

手に取って見ると、それは地味でも無く派手でも無い、綺麗な髪飾りだった……………

「…………ただ見て回るのも中々良いものね」
その後も適当に回って昼近くに店を出た。

「そうだね…………そうだ、プレシア…はい」
私は小さな紙袋を渡す。

「コレは？」
「開けて見て？」

「何かしら…………コレ、髪飾り？」
プレシアに渡したのはさつき手に取った髪飾り…後でこっそり買った奴だ。

「どうして私に？」
「プレシアに似合うかなと思って」
プレシアの黒髪にも邪魔にならないし…………

ボンッ！！！！

「……………！！／／／／／」
「え！？」

突然、プレシアが爆発した…………どうした！？

「プレシア大丈夫？風邪ならもう…………」
「だ、大丈夫よ／／／／／（迂闊だったわ…大人になっても彼が天

然だつて事を忘れていたわ／＼／＼」

だが…コダイの天然フラグ能力はここで終わらなかつた…（b
Y作者）

「（はっ……今、嫌な予感しかしないセリフが……）」
本当に大丈夫かな？……プレシア（聞こえて無い）

「プレシア…此処で良いの？」
昼も近くなつたので昼食に何処が良いと聞くとプレシアが答えたの
は、ファーストフード店だった。

「食べた事が無いから挑戦よ……それに、こつゆつ時でも無いとリ
ニスがね」

「仕方ないよ…半年前まで重病人だったんだから…」
店に入って注文を取る事に私はホットドックとアイスコーヒー、プ
レシアも同じのを頼んだ。

開いてある席に座り早速頂くことにした。

「アム……うん、美味しい」
たまに食べるからファーストフードって美味しんだよね。

「結構、ケチャップが掛っているわね……服に落ちない様に気を付けないと……」

そう言つて、慎重に食べる……確かに服には落ちなかったけど、代わりに頬についた……

「確かにコレは何度でも食べたくなるわね……」
「気付いて無い?……」

「ほら……ケチャップついてる」

備え付きの紙ナプキンでプレシアの頬を拭く。

「~~~~~っノノノノノノ」

今度はプレシアがケツチャップ見たいになった……

その後は訳も無く街を歩いていた。

途中、転びそうになった、プレシアを抱き止めたり。『休日のカッブル』などのテレビの放送になし崩しに出演したりとされていて、気付いたらストーカーはもういなかった……諦めたのかな?……一応念には念を入れといて、その男のある情報と共に警察に連絡した……ある情報って?それは一発で社会的に殺さそうな情報と云つておこう。

もうストーカーは居なくなつたのでプレシアを家にまで送つて、帰

る事にした。

翌日……なのは達に物凄い尋問を受ける事になった……どうやらあの放送は『生放送』だったらしい。

くオマケく

プレシアが帰宅後……

「プレシア聞いたわよ、大変だったそうじゃない……」

リンディがリンディが少し心配そうに聞いて来た。

「ええ……でも、最後辺りは全然気にしていなかったわね……コダイも『念には念を入れておいた』って言っていたし、もう大丈夫だと思っ
うわ」

「それで、デート中にコダイ君の色気にメロメロになっちゃったっ
て訳ね」

リンディが冗談半分で言った……だが

「……………／／／／／」

プレシアはただ顔を赤くしているだけだった……

その反応にいち早く反応したのは……

「お母さん……」

「チヨットO H A N A S H Iを……」

「聞かせて……」

「貰えませんか？」

テストタロツサ家だった……

「あらあら さすが『性格最悪の完璧超人』、フラグ立ても完璧ね
……… あ、これでテストタロツサ家全員攻略ね。ん〜コダイ君が何処
までフラグを立ててるか楽しみだわ〜」

修羅場な空気をよそにのどかにリンディ茶を啜っているリンディで
あった……

だからフラグって何？byコダイ（後書き）

メガネ「プレシアもハーレム！今後さらに増える！某幻想殺しも借金執事もびっくりなフラグ能力！！」

コダイ「何か無性に殺したくなって来た……」

メガネ「おっとドウドウ……コダイがキレル前に感謝コーナーだレイ」

レイ「OK 感謝コーナー、ユタ様、龍賀様、心の剣様、ソラト様、マーボー様、感想をありがとうございます！！」

メガネ「龍賀様からはマーボーカーレーを、心の剣様からFF？？の主人公ライトニングの服（ディシディアデオデシムでのアヤコスプレの服）を貰いました」

コダイ「コレじゃあレイが見えるから外では着れないな」

メガネ「基準それなの！？………っと実はもう一つ龍賀様からのお土産だほれ」

コダイ「え？何？あのいかにもラスボス臭が漂ってる団体は」

メガネ「龍賀様の所の龍斗から送られたアーカード（ロリと通常にダンディ版）とアンデルセン神父（通常と心臓に杭を刺して化物になったやつ）とウォルター（老と若いバージョン両方）だ……頑張れ」

コダイ「……………アレ、殺してもいんだよね？いや殺す、そして龍斗も……………」（ヘルシング勢に突っ込む）

メガネ「何する気だよ……」

レイ「皆様からの意見や感想など色々待っています！」

メガネ「次回からはリクエスト番外編です……………コダイが生きていれば……………」

アーカード「さあ夜はこれからだ!! お楽しみはこれからだ!! ハ
リー!! ハリーハリー!! ハリーハリーハリー!!」

ロリカード「さあ、おいで糞餓鬼!!」

伯爵「どうする、どうするんだ? 化け物はここにいるぞ!! 殺人姫
!! 倒すんだろ? 勝機はいくらだ千に1つか万に1つか? 億か? 兆
か? それとも京か?」

アンデルセン神父「エ` エエイ` イメン` ツツ!」

アンデルセン(化物)「そうあれかし(アーメン)」

ウォルター(老)「小便はすませたか? 神様にお祈りは? 部屋のス
ミでガタガタふるえて命ごいをする心の準備はOK?」

ウォルター（若）「コレよりアンタを地獄へ送る！！」

コダイ「あの世で伍長に鉄十字章アイアンクロスをもらつといひ……」

「次回もお楽しみにしてください」

番外編 『普段と変わらない非日常』 (前書き)

100万アクセス突破記念第一弾！

たまご様のリクエストです！

番外編 『普段と変わらない非日常』

「あ、女になってる……」

いつもの様に迎えた朝、今日は何を作ろうと献立を考えながら起き上がると……違和感があった……

「何でそんなに冷静で居られるんですか!!」

リビングで皆に状況を説明した後、テーブルを叩いたリインフォースの第一声。

「なってしまったのは仕方ないし……一日大人しくしてれば治るでしょ?」

「風邪と一緒にしないでください!!性別変わったんですよ!?唯でさえ女性にしか見えないのに!!何でそんなに落ち着いていられるんですか!?!」

「リインフォース、落ち着いてください……今は元に戻るべき方法を……」

「そ、そうだった……」

暴走仕掛けるリインフォースを宥めるサクラ……朝から元気だね
「その前にまずは服ですね」

「服?別にこのままでも……」

今の服装は、何時も寝巻に使っているYシャツに長ズボン……ただ胸が苦しいからボタンを3つほど外している。先ほど触診して見たが特に胸以外にスタイルは変わってない様だ。

「ダメです！……と言っても此処にはサイズが……」
リンフォースが自分と私を見て溜息を着いた……

「で……どうするの？」

私はこのままで良いけど……

「そうですね…シヤマルに診て貰いましょうか……」

そう言ってリンフォースははやての所に連絡した…

ジ〜〜〜

ん？……視線？

「……………」

視線の元を辿ると、エルがこっちを……正確にはコッチの胸を見ている。

「どうしたの？」

「……………えい」

プニユ

「「「なっ！」「」「」

「や……………柔らかい！指が沈む！」

瞬間、リンフォースとサクラとアンズが固まった……………何をしたか
って？

……………エルが私の胸を指で突いたからだ。

少しして、シャマル…と言つか八神家が全員来た…（ちなみにザ
フィーラは小狼フォーム）

「な……………なんじゃこりゃあああああああああ！！！」
状況説明した後のはやてのセリフである……………私の胸を揉みなが
ら。

「何やねん！これ、シグナムよりもデカイ！！張りも物凄いで！…
…シャマルより背が小さいのに巨乳とかなんやの！？ロリか？！口
リ巨乳狙つとんのか！？」
「……………」

「コンッ！！」

「きゅ〜」
そう言つて更に揉むペースを上げる……………取り敢えずド突いて
黙らせた。

「シヤマル…………原因分る？」

「多分…………もしかしたら何ですけど…………ロストログアを取り込んだ
のが原因かと…………」

「危険性は？」

「無いですね…………性別が変わっただけですので一日経てば元に戻り
ます」

それならいいや…………

「さて…一日どうしようかな」

正直、良く動けないだろう…………重くて肩が凝る。

「こーして見ると本当にお前つてアイツに似てるよな」
突然、ヴィータが呟いた。

「アイツ？とは誰だ」

「ほら、シグナムアイツだよ夜天の…………」

ヴィータの言っていたアイツは夜天の創設者の事だった。

「確かにそうですね…………夜天の創設者…………つまり私たちのお母さん
的な存在ですよな」

「ああ…シヤマルの言う通りだな…………」

ザフィーラが頷く…………むっちゃ抱き締めたいんですけどあの子狼
…………

「えっと…………アイツがコダイに似ていて、アイツが私らのお母さん
だから…………コダイは私らのお母さん？」

「ヴィータ、何言ってるか分からないから落ち着いて？」
「接点無いよ？瓜二つなだけで…………」

「ん…………えい！」

ムニツ

行き成りヴィータが抱き付いて来て、顔を私の胸に埋めて来た…

「はぁ……………何か懐かしい、お母さんに抱き付いてるみたいだ」と、夢心地で頬ずりをする……………胸元がかなり開いてるから髪の毛の感触がくすぐつたい…

「ヴィータ何しとんねん！」

「ずるいです！」

「今すぐトキガワから離れろ！！！」

「そして今度は僕が！」

「貴方は触ったから良いでしょう！！！」

「サクラの言う通りだ！姫の胸を自由にしているのは王たる我だけだ！！！」

「何を言っているんですか！！そんな羨ま……………じゃなくてノクターンな事はさせません！！！」

「何言ってるんだ！早いもの勝ちだ！」

ギャー！ギャー！……………

「元気だね」

「トキガワ……………何時の間に」

「アンスのセリフの辺りかな？」

ザフィーラの横に座る…

「で、どうなんだ？女になって不具合とかは」

「ん〜……チヨット肩が凝りそうだね……後は服………あっ!!」
「ヤバイ……………超重要な事を思い出した……………」
「ど、どうした!?何か異変でも……………」
「うん……………とてもヤバイ事だ」
「こんな事に気付かないなんて……………」

「……………今、女装しても女だから女装じゃない！オシヤレじゃ無くなる！！」
なんて事だ……

「はぁ……………」

「ちょっと、ザフィーラ。何その呆れた顔は、コッチは死活問題だよ！」

「そこまでは「問答無用！そう言う奴はこつだ！！」言つてなモガッ！！」

ザフィーラを抱きあげ撫でまわす……………アルフとはまた違った手触り……

「み、身動きが……………やめろ！埋まる！体が埋まる！！」
ザフィーラが小動物だからいけない……………

ギヤーギヤー騒いでいたら暗くなっていたので夕食を御馳走した所……

「……………ありがとう、お母さん」「……………」

全員でハモった……………あれ？これって前にもあったよね？

そんなこんなで一日が終わり次の日の朝には元に戻っていた……………

くおまけ

数日後……

「お母さ……コダイ!!!」

暫くウィータがコダイの事を『お母さん』と呼ぶのが抜けなかった
とか……

番外編 『普段と変わらない非日常』（後書き）

メガネ「今回のリクエストは、たまご様から頂きました！有難うございます！」

コダイ「シグナムより大きいって……やり過ぎじゃない？と言うか戻ってないし……」

メガネ「いや、実際はシグナムと同じ何だけど、腕や腰とかが細いから大きく見えるだけ……」

コダイ「やり過ぎじゃない？」

メガネ「でかく無いと面白くないしナイチチだとそのまま一日過ごすだろうがお前の場合……」

コダイ「それもそうだね」

メガネ「納得スナ……」

レイ「感謝コナ、杉並様、龍賀様、山義、芳原様、心の剣様、感想をありがとうございました……」

メガネ「杉並様から某幻想郷の吸血鬼姉妹と紫モヤシのコス。山義、芳原様からは黒い飴玉（種類はブドウ。メロン。イチゴ。リンゴ。レモン。半日だけ、世界の修正だろうが何だろうが幸運になる飴）を貰いました……ありがとうございます」

コダイ「早速、紫モヤシの服を着て見た……」

メガネ「はえよ……」

レイ「カワイイ〜!!」

コダイ「……………むきゅ〜」

メガネ「リクエストの順番は特に決まっています」

コダイ「むきゅ〜」

レイ「皆様の意見や感想などイロイロ待っています!!」

コダイ「むきゅ〜」

メガネ「おい、どうしたんだ？」

コダイ「むきゅ？」

〜次回もお楽しみにしてください!!〜

番外編 『おねーちゃんパニック』 (前書き)

100万アクセス突破記念第二弾!

龍賀様のリクエストです!!

番外編 『おねーちゃんパニック』

「元に戻った？」

女から戻って数日後……体がやけに軽く感じて起き上がると子供に戻っていた……いやむしろ。

「戻り過ぎた……」

今の体は本来の9歳前後じゃなくて転生時の6歳前後だ……

「着る服が……そうだな……レイ」

OK 『スタイル・イレイザー』

思った通りだ……バリアジャケットは今の俺に合わせて纏われた。

「……特に異常は無いな」

さて、今日は何を作るのか……

「リインフォース……離してくれ」

「ダメです！／＼／」

この前の様に状況を説明した後に朝食を作る為に台所に向かう所でリインフォースに抱きあげられた……

「いや、早く朝食を作らないと……」

「その体で作ろうと言うのですか！？危険すぎます！！／＼／」
「いや……元はこの体で作ってるし……」

「どうしてもか？」

「どうしてもです！！首を傾げないでください可愛いから！！／＼／
／＼」

このままでは離してくれそうに無いな……こうなったら……

「……………てよ」

「主？」

「離してよ……おねーちゃん」

上目遣いで言っで見ろ。

「……………」

ブシャアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！

リインフォースが鼻血を吹き出して気絶した……やはりこの殲滅兵
器の威力は絶大だな……

「今から作るから大人しくな」

「……はい……／＼／＼／＼／」

マテリアルズが真っ赤になって俯いていたのは……無視だ。

朝食の後、暇なのでなのは達の所へ向かった……………今日は休みだから翠屋だったよな？

「コダイ君！ぜひこのゴスロリを！！」

「いえ、この巫女服を！！」

「なら私はウエディングドレスを！！」

誰もが予想する…桃子とリンディとプレシアの暴走だった……………さらけ。

「コダイ君！一緒にお昼寝するの！！！！」

「ねえコダイ、私と一緒に寝よ？！！」

「コダイ！私の抱き枕になれ！！！！」

「アンタ達下心丸出しよ！！取り敢えずそんな恰好じゃ寒いからアタシの家で着替えを……………！！」

「アリサちゃんが一番下心丸出しだよ！コダイ君、この前猫が子供を産んだんだけど見に来ない？！！」

いつもの様に五人娘が暴走……………後すずか、それはその当日俺も立ち会っただろう……………

「何で皆テンション高いんだろう……………」

ななな何でだろう？

コレはまた、随分古いネタを……………」

「皆さんチョット待ってください！！」

この中で唯一まともそうでもともで無いシャマルが突然立ち上がった……

「今のコダイ君と一緒に寝たいと言う気持ちは分りますが……」
分るんだ……

「今はそんな事より、コダイ君が小さくなった原因を探らないと……」

「……………」
何だろう……オチが読めた様な……………」

「だから、最も治療が得意な私が面倒を見ます！！／／／／」

……………ホラな？

「待つんだシャマル、もし今のトキガワが襲われたらどうする……」

……だからここは私が／／／」

シグナム……………言っておくけどこの状態でも此処に居る全員に全力で襲われてもボコボコに出来るぞ？殺人姫を舐めるなよ？

「待つのはオメ　らだ！お前らの今の状態じゃ危ない人と勘違いされるだろーが！！ここは一番見た目が近い私が面倒みる！！／／／／」

ヴィータ……………貴様も同類だ。

「あかんなく此処は家主であるウチが役目やる？コダイ君……………後でギョッとしてええ？／／／」

八神家暴走……………唯一の良心のザフィーラは……

「　諦める……………あれは止められん　」

と念話で言われた……………後で撫でまわすぞこの子犬が……

「待つてください！此処は主コダイと同じ家に住んでいる私が！！」
お前は家事能力が無いだろ……

「コ……コダイ様、一度でいいですから私を『おねーちゃん』と呼んで頂けませんか？／／／／」

さっき言った……ってそれはリインフォースにか。

「ズルイよサクラ！！僕も……ダメだあゝ！あの破壊力に耐えられない！」

アレは俺の様な男の娘に与えられた攻撃……いや、口撃だ……

「姫よ……全てはこの王である我に任せよ！全力を以て奉仕する……
……もちろん……／／／／」

勿論の次は何なのか今度じっくりお話する必要があるそうだな。

しかし此処まで暴走すると収拾がつかないな……… ヒエラルキー
共も初めから壊れて役立たずだからな………

ここで『おねーちゃん』と言えばどうなるか………

「コダイ君………ハアハア／／／／」

チラリと野獣と化したのはを見た……言ったら、襲われるな。
暴走を収めて突き放す感じ……これだ!!

「こわい………」

「「「「「え?」「」「」「」

喰いついた!

「こわいおねーちゃんなんか……だいつきらい!」(上目遣
い+涙目)

ビキィッ！！

何かが壊れる音がした……………

「にゃあああああああ！！嫌われたよう！！」

「もう生きていけない。もう生きていけない。もう生きていけない。
もう生きていけない。もう生きていけない。もう生きていけない。
もう生きていけない……」

「お父さん、お母さん、お姉ちゃん、ノエル、ファリン……………先立
つ不孝をお許してください……」

ヤバイ……

「効き過ぎた……」

俺の目の前の光景はまさに自殺寸前の人が沢山……特にシグナムがヤバイ……

「……介錯を頼む、テストロツサ」

何かレヴァンティンで切腹をしようとするシグナムと

「はい……」

虚ろな表情でハーケンフォームを構えるフェイト……

他はシグナム程ヤバく無いが……明らかに自殺寸前だ……

「今後コレは使わないでおこう……」
おねーちゃん
おねーちゃん
穢滅兵器より恐ろしい死の宣告が誕生してしまった……

「何を悠長なこと言ってるんだ！早く止めるぞ！！フェイトが振りかぶってる！！」

「ああ！！なのはが自分に向けてレイジングハートを！？」

クロノとユーノの言うとおりだな……ん？はやてが両手を上に伸ばしてる……

「お父さん、お母さん……今からそっちに行くで〜」

「はやて……落ち着け！何？『歩けるようになったんやで？今からソツチの川渡るから』って待て！その川は俺も渡り掛けた事が何度もあるから分る！それを渡るな！！」

基本放置の俺でも流石に急いで皆を落ち着かせる事になった……

「ゴメン……クロノ、ユーノ………凄くゴメン」

「今後アレは二度と使うな！」

「と言うかコダイしか使えないよねアレは……」

コレを日に『やり過ぎも程々に』と言う事を学んだ……『おねーちゃん』限定で。

翌日……何事も無かったように元の……9歳前後の体に戻った……

番外編 『おねーちゃんパニック』（後書き）

メガネ「はい、コダイが元に戻りました！！リクエストは龍賀様です、ありがとうございます！！」

コダイ「今回はやり過ぎた……かなり反省している……」

メガネ「あ、口調戻った……」

レイ「感謝コ〜ナ〜、ユタ様、真王様、龍賀様、感想をありがとうございます……」

メガネ「真王様から、質問と、東方シリーズの星熊勇儀の服とデイスガイア4の風祭フーカの服を頂きました！有難うございます！」

コダイ「何か酒が飲みたくなったぞ」（勇儀の服）

メガネ「東方の鬼は酒飲みだからね〜…っと、質問に答えないと……」

質問一 『なのはちゃんたちの結婚相手は誰？』

なのは達「……」（主）コダイ（君）（さん）（様）……！！……！！」

「……」

コダイ「どっから湧いて出た……」

メガネ「まあそう言うなって………続いての質問は……」

質問二『コダイは学園アニメ・ゲーム系でどんなキャラだと思う？』

メガネ「真王様はリトバスの理樹だって、男の娘だし……………」

コダイ「……………お前はどなんだ？」

メガネ「おとボクの瑞穂。あの完璧超人だし、天然Sな所もあるし……………男の娘だし」

コダイ「結局男の娘には変わらないのか……………別に良いが」

メガネ「最後の質問は？」

質問三『はやてちゃんはコダイの胸はどんな感じだった？あとその他も』

メガネ「コレははやてご本人に答えて貰いましょう！！」

はやて「おつきくて張りがあってな？指に力を入れると『フニツ』って指が沈むんや……………後、腰やら腕やらが細くて、チヨツト力を入れたら折れてしまいそうなくらい細いんや！最後に背や。シヤマルより小さいのにシグナム並みとか……………もうロリ巨乳としか言えへん」

メガネ「以上、おっぱい星人からでした」

はやて「チヨイ待ちい！誰がおっぱい星人や！」はやて……少しO
SHIOKIするか「い、いやあああああああああ
あ……」(コダイに引きずられる)

メガネ「えっと……皆様からの意見や感想などイロイロ待っています！！」

「次回もお楽しみにしてください」

世の中知らない事があっても良いかもしれないb y n o d a i (前書き)

はやて、転入編です。

4月10日にリクエストは締めきりました。

4月16日までに送られたリクエストは、一区切り着いたら書こう
と思います……

世の中知らない事があっても良いかもしれないboyコダイ

「そう言えば明日か……」

家のリビングで軽く伸びをする……

明日……はやてが複学する。

「そう言えば、まだ車椅子か？」

向かいに居るリインフォースに聞いてみる……

「いえ……もう普通に歩けるようです」

はやては石川医師やヴォルケンス……なのは達の支えがあつてか短期間で歩けるまでに回復した……

「……何だろっ？」

とても嫌な予感しかない………

「はい皆さん、八神はやてさんが今日からこのクラスに復帰します

「！」

「みんな、改めてよろしゅうな」

「」「」「」「」つっしやああああああああああああああああああ

「！……」「」「」

はやてが微笑むと、男子の大半が歡喜に吠えた。

「コレで六大美少女の誕生だ!!」

「今回はかりはアイツの魔の手から守らねば!」

「あの美女限定人間磁石に近づけさせるな!!」

「「「「「おおおおおおおおおおおおおおおおおお
お!!!!!!」」」」」

凄いな……………此処まで息の揃った男子を見た事……………あるな、フェイトとアリシアの転入の際に……………

「全く…男子は何でこう騒げるのかしらねえ……………」

「俺も一応男子だが、分らん」

俺の隣にいるアリサは溜息を吐く……………

今年の席もなのは達の近くになっている……………もう一種の呪いだろコレ?

主人公だからです by 作者

……………無視だ、幻聴が聞こえたけど無視だ。

「では、八神さんの席はトキガワ君の席が空いているのでそこに座ってください」

ブン！

アリサの拳を……

「まだよ！」

つて二連打！？……………それでもかわす。

ブン！

「いい加減、当たりなさいよ！」

「あてるツンデレ……………ああこのやり取り久しぶりだな……………」

「そうね……………つて誤魔化すなー！！ツンデレ言うなー！！！」

さて、何のことやら？

「アリサちゃん、落ち着いて！このままじゃ昼休み終わっちゃうよ……………」

「そ、そうね……………すずかに感謝しなさい！」

ビシッ！と俺を指すアリサ。なんか一人で暴れて忙しい奴だな……………」

偶々開いていたはやての隣に座り、弁当を広げる……………今回は魚中心の弁当だ、

「コダイ君のお弁当美味しそうやな……………むむっ！」

キュピーン

突然はやての目が光る……………」

「コダイ君、そのエビフライちょっとええか？」

「エビフライ？別に良いが……………あーん」

はやてにエビフライを差し出す……………」

「ふえ？！／＼／＼／」

突然、顔を赤くするはやて……………」

「どうした？……………食べたいのだろうっ？」

「そ……そうやけど……うう／＼／＼／＼」
本当にどうしたんだ？

「食べるなら早くしてくれ……箸で挟んだまは流石に疲れる……」
「う、うん……あ、あ〜ん……／＼／＼／」

差し出したエビフライを食べるはやて……弁当用に冷めても美味し
くなる様に一手間を加えた自信作だ。

「どうだ？」

「お、美味しい／＼／」

何で赤くなっているんだろう……風邪か？

「…………コダイ（君）！！私もあ〜んって……………」

なのは達が何かを言い掛けたその時……

「…………ふざけんな、女ったらしがああああ！！……………」

お決まりの様に男子が来た……

「あ〜いい加減パターン変えろよ……一発屋は消えるのが運命だぞ
？」

「それはコツチのセリフだ！！」

「美少女が転入して来たと思ったら全部お前にフラグ立ってるって
よお……！！」

「そう言えば俺。この前赤い髪の年下の美少女とこいつが仲よさそ
うに歩いているの見たぞ……！！」

なのは達が居ない……………まあいいか。

「教室戻ろう……」

まだ、時間あるけど……………

昼休み終了間際になのは達が戻って来た……………何か晴れた表情で……………

「なのは、どうしたんだ？屋上に居なかったし……………」

早速なのはに聞いてみる。

「な、何でも無いよ！ただちょっと皆で男子とO H A N A S

H Iしてただけなの」

「そうか……………」

これ以上は触れないでおこう……………

午後の授業に男子はこなかった……………教師が探した所、廊下の隅でガタガタ震えていたとか……………

世の中知らない事があっても良いかもしれないbyコダイ（後書き）

メガネ「望み通りにパターンを変えてやったぞ!!」

コダイ「もう突っ込まないぞ……突っ込んだら死ぬ」

メガネ「男子……登校拒否になって無ければいいけど……」

コダイ「アレらは全身ギャグ補正で出来てるから問題ないだろう……」

メガネ「否定はしないで無いと面白く無い!!」

レイ「感謝コ〜ナ〜、龍賀様、ユタ様、月野様、心の剣様、ながも〜様、たまご様、山義 芳原様、感想をありがとうございます!!」

メガネ「龍賀様から全員にホットケーキを、心の剣様からはテイルズオブシンフォニアのコレットの服と遊戯王のブラックマジシャンガールの服を、山義 芳原様からは某人形師が錬金術で造った人形姉妹の服と、某幻想にいるパパラッチの服（着ると自動的にその人に合わせて着れる特殊な服）と玉露と煎餅とついでに1時間だけ浴びると人になる瓶（200ミリリットル）を貰いました!!ありがとうございます!!」

レイ「ます」

コダイ「コレって構造は意外とシンプル……ふにゅ!?」（コレットの服）

メガネ「こけた！？ドジっ子まで移った！？」

コダイ「で…今回はどんな予定だ？」（何事も無く立ち上がる）

メガネ「次回はライン？を予定…：…そこからオリジナルに」

コダイ「まあ、期待しないで待つておく…：」

レイ「皆様からの意見や感想などイロイロ待っています！」

〈次回もお楽しみにしてください〉

天然とピュアは危険な組み合わせbYコダイ(前書き)

リンン?登場回です!

それとついにアイツが……

天然とピュアは危険な組み合わせbyコダイ

はやてが複学してきて数日、4月の半分も過ぎた所……

「……………よし、出来た」

俺の目の前にあるのは一冊の魔導書……

「ようやく完成しましたね……………」

「色々あつてコレには時間を割けなかつたからな……………」

番外編とか番外編とか……………」

「来月には間に合つたから良しとするか」

色々苦労した……………微調整とか何とかで……………リインフォースが居なければどうなっていたか……………」

「では、早速連絡しますね」

「分つた……………確か今日はヴォルケンスは仕事だつたよな？」

「そう聞いています……………」

「だったらついでに泊まらせるか、その方が安心だろ……………特にシグたんミが」

マテリアルズは囑託魔導師の試験で今は居ないし……

「まだ、使つてるんですか？」

「まだまだ使つよ？」

「コレがウチの夜天の書か？」

はやてが家に着て、理由は分らないが、テンションが高かったが何とか落ち着かせて、魔導書を渡した……

「ああ……と言つても管制人格？が無いから、後は……何だっけ？」

「コダイ君も分らんかい！？」

いや、だって俺はリインフォースに言われた通りに作っただけだし……

「なんも知識や技術が無いのに私が口を出しただけでコレを完成させたのは驚きです……」

「まあ……コダイ君は非常識に対しても非常識やから」

また、酷い言われようだ……コレでも手先は器用なんだよ……魔法以外。

「で、リインフォース……その管制人格はどう作るんや？」

「リンカーコアを……」

リインフォースがはやてに説名をしている……

どんな子が出るんだろっね〜

邪魔をしない為に少し離れてレイと話す。

「リインフォースの妹だから……容姿はリインフォース似だろう……」

たのしみだな〜

「さあな……」

お、始まったみたいだ……

無事に管制人格が完成……容姿は何処となくリインフォースの面影はあるがほぼ正反対の推定年齢10歳前後の少女だ。

名前は『リインフォース？』^{ツヴァイ}…はやてとリインフォースで決めたら
しい。同じ名前が二人も居るとややこしいのではやての提案で、俺
の所のリインフォースを『リインフォース？』^{アイン}…アインと呼ぶ事にな
り。『リインフォース？』^{ツヴァイ}はリインと呼ぶ事になった。
……………^{ツヴァイ}だけだ。

「……………かーさま？」
おい……………俺を見るなり何だ…

はやてのユニゾンデバイスだよな……何故？母親？

「俺は男だ……」

「じゃあ、とーさまですか？」

「まあ正解」

「正解ですう」

リインはしゃいでる……何か、俺の方が背が高いのは不思議な感じがする……（ 未だに背は変わらない）

ねえねえ、はやて！リインを作る時ってどんな感じだった？

「レイちゃん？……ん〜と、リンカーコアを『ギユツ』として『キユーツ』と絞って『ガチツ』と固めれば…あ、『キユーツ』じゃなく『ミユーツ』やな」

分るかよ……

えっと……『ギユツ』として……

本当に実行したよ……そんなんで……え？

「出来たー!!」

皆の中心には。黒髪で青眼……推定年齢6歳前後の少女が……
(イメージはT.O.L.O.V.E.るの黒髪青眼の金色の闇のロリバージョン)

「アイン！ユニゾンデバイスってあんなに簡単に……しかもはやてのバカ丸出しの説明で出来るのか!？」

「チョイ待ち!!何やそのバカ丸出しの説明って!!」

「あんな擬音の九割の説明で分るのはバカしかない」と言っかレイがユニゾンデバイスになった……

「それより本当にレイなんですか？」

「間違い無いだろう……アイン。その証拠にホラ」

右袖をまくと青い宝石の部分が光を失っている……

「しかし何でユニゾンデバイスに……………」
「体には異常は無いんですか？」
「今の所……………」スローナイフ」
うん……………魔法も使える……………」
「中身が出てるって感じだな」
「とすると、起動は不可能だな……………」

「お名前は何ですか？」
「レイ・モモ・ブラットだよ！」
「レイちゃんですか、リインはリインフォース^{リヴァイ}？です！」
「リイン？」
「はいですっ！」
「……………リイン」
「レイちゃん」

ぎゅ〜

「わ〜い！わ〜い！」

何かコッチをそっちのけではしゃいでる、レイとリイン……………」
「何か和むなあ〜」
「そうですね……………」
「—先ずお茶にするか……………」

一息ついた後、アインがリインとレイを調べて見た結果……

「リインとユニゾン出来るのは。はやてとヴォルケンス……そして俺」

まさか俺ともユニゾン出来るとは……

「魔法はアインが使える魔法は使用可能見たいやな」

「はい！……けど、とーさまのベアトリス式はミッド式やベルカ式とは勝手が違って使えません……」

しゅん……と落ち込むリイン……まあ、ミッドとベルカが使えないから作った物だからな……

「使えたら恐ろしいけどな……」

ディレイスペルで沢山の魔法をキープして、一斉に放つ………第

二の魔王なのはが産まれる……

「逆にレイはベアトリス式しか使えないようです……」

「アハハハ……残念」

がっくり肩を落とすレイ。

「でも、ユニゾン適性が反則です！みんなとユニゾン出来るなんて反則です……！」

リインの言う通り。レイはレアスキルチューニングの『同調』の所為かほぼ全員とユニゾン出来るらしい……

ほぼ言うのは、俺の場合はユニゾンでは無く『戻る』なので、ユニゾンでは無い。

後、融合時の恩恵が……

・ベアトリス式の一部使用可能（リインが言った様に、勝手に違うので全部は使えない）

・魔力量増加

・俺の技術と経験を継承（肉体強化は無い為、死ねない訳では無い）

聞いた限りだとトリツキー過ぎる…

「後、一番反則なのがある…」

はやてが真剣な顔で言った……

「何が反則なんだ？」

「それは……………」

はやてがレイの後ろに移動する……

「これやあつ！……！」

ムニユ

「ほえっ！？」

後ろから抱き付き胸を掴む……

「コレや！何やねんこの胸……………成長期を無視しとるやん！」

「キヤハハハハハ！……くすぐったいよ〜！」

はやての言う通り……………レイの胸は小学生にしては大き過ぎる……

「羨ましいです……」

ラインが指を咥えている……

「もしかして、レイの願望が形になったとか……」

シグナムに初めて会ったときなんか胸の話していたしな……

「そう言えばアインは誰とユニゾン出来るんだ？」

「主コダイとマテリアルズだけですね……でも今はしない方が良く
と思います」

「もしかして防衛プログラム？」

アインが頷く。確かに……まだ防衛プログラムは残っているからな。

「まあ、詳しい事はマリーに聞いてみるか……」

ユニゾンデバイスは言うなれば、ミッドチルダ式のインテリジェン
トデバイスを極端化したものだから何とかなるだろう……

ぐうぐう × 2

何だ？この音……

「お腹空いたです」

「私も」

二人の腹の虫だった……時計を見ると結構時間が経っている。

「じゃあ、今日は二人の誕生日を祝うか」

「「わーいー!!」」

「コダイ君、ウチも手伝うで」

「私も微力ながら……」

「ありがとう……」

さて、何を………嫌いな物とかあるのかな？

くおまけく

「とーさま。何でアインさんはリインと同じ名前なんですか？」
唐突にリインが聞いて来た。

「それは、アインはリインの姉だからだ」

「そうですか……………という事はアインさんはリインのねーさまです
すね!？」

「そういう事だな」

「えっと…アインとリインが姉妹でリインとコダイが親子で……………」

?…………?」(プシユ)

「あ…レイ、深く考えるな」

煙を出しているレイに冷えピタを貼る…

天然とピュアは危険な組み合わせbyコダイ（後書き）

メガネ「やはりコダイはお母さん!!」

コダイ「テンションが気持ち悪い」

メガネ「リアルに風邪ひいて変なテンションになっています!!」

コダイ「レイもユニゾンデバイス化か……」

メガネ「原因は簡単！コダイが闇の書を取り込んだからで済む」

コダイ「この先、まだロストロギアを取り込みそうな気が……」

メガネ「安心しろ、その通りだから」

コダイ「……………」

レイ「感謝コ〜ナ〜 龍賀様、ながも〜様、紅舞姫様、杉並様、心の剣様、感想をありがとうございます!!」

メガネ「龍賀様からは新品のノート一年分。杉並様からは某幻想郷の妖怪の山の神様の服（x3）。心の剣様からはひぐらしのなく頃にの羽入の巫女服&リユーンの民の服を頂きましたありがとうございます!!」

コダイ「あうあう」（羽入の服）

レイ「カワイイ〜!!」

コダイ「ありがとうございます！」

メガネ「つかお前アニメとかしらんだろ……半生が半生に……」

コダイ「自然とこうなってしまったのですよ」

メガネ「流石『性格最悪の完璧超人』と言ったところか……」

レイ「皆様からの意見や感想などイロイロ待っています！」

コダイ「なのです」

〈次回もお楽しみにしてください！〉

魔法は容量、用法を守って正しく使おうbYコダイ(前書き)

久々の戦闘です。

魔法は容量、用法を守って正しく使おうboyコダイ

アースラー訓練所にて…

「コダイ！いつくよ〜！」

今俺の向かいに居るのはアリシア……何でこうなったかと言つと数時間前に遡る…

〈回想〉

「模擬戦？アリシアと？」

「はい…」

久しぶりの魔法開発をして。（怪我で止められていた）

二つほど完成したので、クロノ……は仕事だったなと考えているとリニスから通信が入った。

「アリシアのデバイスが完成したのですが、生憎フェイト達が用事で……」

「そう言う事なら丁度いい、俺も新魔法の試運転をしたかったから本当にいいタイミングだな…」

「では1時間後に、アースラーの訓練所で」

〈回想終了〉

「まあ、準備はもう出来てるけど……」

俺は訓練所の外を見る……そこには用事でいない筈なのは達が……それにグラムやミゼットも……管理局つて暇なの？

「そう言えばアリシアのデバイスは？」

「コレだよ！名前は『ハルバード・フォルテス』だよ」

初めまして。以後お見知り置きを

アリシアの手には銀色の台座に乗った四角形の銀色の宝石型。バル
ディッシュと似ているな……製作者が同じリニスだから兄弟機か？

「じゃあ早速始めよう！」

何かソワソワして待ちきれない様子のアリシア……戦闘狂は此処から来たのか？

「分った……レイ、ブレイザーだ」

久々に行くよー！！ナウローディングコンプリート！！

全身甲冑の『スタイルブレイザー』を纏う。

「私も……ハルバード……セーット・アープ……」

スタンバイレディ、セットアップ

アリシアが山吹色の魔力光に包まれる……光が晴れると、銀色のバル
ディッシュの斧を両刃にしたハルバードを持ち。バリアジャケット
はフェイトと同じ黒いレオタードを着ているが、マントは無く背中
が露出していて、スカートは長い、手甲は二の腕まであり、靴は膝
までのグリーブになっている。

(バリアジャケットのモデルは fate のセイバーリイ)

「……流石……露出狂の血は争えないようだな……」

「露出狂じゃないよ！本当だよ！？／＼／」

いやいや……プレシアもフェイトもな？……アレを露出狂だった
ら一体何だつて言うんだ？……観客サイドでフェイトが何か言っ
てるみたいだけど無視だ。

「行くよ！ハルバード！！」

フォトンスピアー

アリシアがハルバードを掲げ、魔力弾を10発程、発射する……アリシアはプレシアの魔力資質をフェイトほど濃く受け継いでいないので魔力変換資質はないから、電気は無いけどコレはプラズマランサーみたいなのか？

「フェイトのよりは若干遅いな……」

バーニア

バーニアを展開させて、ホバリングの要領で蛇行して交わす。

ヒュン！ヒュン！ヒュン！ヒュン！

弾は俺に当たらず地面に『ズゴンッ！！』………え？

魔力弾があたった地面を見る………何か大き目のクレーターが出来てる……

「ソレ射撃魔法なのか？フェイトやなのはより洒落にならん……」

「フェイトがスピードなら私はパワーだ〜！」

ふざけんな、お前らエース級は全員パワーでごり押し出来るだろう

が……

「魔法はパワーだ〜!!」

フォトンスピアー

再び魔力弾を放つ。

「防ぐのは無理か……なら……デイレイスペル」

右腕に環状魔法陣を3つ展開する。

「……潰すまでだ」

バニシングバスター!!

右拳を付きだすと同時に砲撃を放ち、アリシアのフォトンスピアーを飲み込んでアリシアに向かって真っすぐに伸びた。

「ウワツ! ずれて無い!？」

アリシアは慌てているが砲撃はかわされて向こう側の壁にぶつかった。

「変わったのは新魔法だけだと思うなよ? あの事件からどれだけ間隔開いているか……3ヶ月もあれば調整位いくらでも出来る」

調整したのはスローナイフ系以外の魔法、アレはもう完成して様なモノだしな……

「だったら……ハルバード、カートリッジロード!」

ロードカートリッジ

ハルバードがカートリッジをロードする……何かする前に潰すか。

「デイレイスペル・アウト」

バニシングバスター!!

始めからキープしていた砲撃が放たれ、アリシアに向かい真っ直ぐに伸びていく……

ズバァッ!!

だがそれはアリシアの目の前で枝の様に二つに分かれた……

ジャベリンフォーム

「間に合った」

ハルバードは柄が伸び、斧の刃の部分を上下逆になっており、上に少しズレてその間から魔力刃を形成している……名前通り槍だな……でも確かジャベリンって投げ用の短槍はず……

「今度はコッチの番だよ!!」

ソニック・ジャベリン

ゴウツ!!

ハルバードの穂先の魔力刃が高速で打ち出された。

「速い……ッ!!」

バキヤツ！！

肩を掠るだけで済んだが、その肩の装甲が丸ごと持っていかれた。それに後ろにぶつかつた結界に罅が入っていた……。恐らく結界破壊が付加されているのか。

「直撃だつたら死んでいたぞ……」

「死ぬのは一回だけでしょ？」

「分つてるじゃないか……」

妹みたいに真に受けないか……

「じゃあ俺も……一つ目の新魔法だ」

ナイトフェンサー

周囲の魔力素を両手に集束し大き目のスフィアを形成……。更に自分の魔力を併用して圧縮、デイレイスペルの『行使寸前の魔力を限定的に封印』を応用してある一部を除き限定的に魔力を封印する……すると……

ギイイイイイイイイイイン！！

まるでチェンソーの様に音を立て魔力がある一部から噴出し中型の魔力刃に変質した……

「うわ……。何それ？集束したかと思うと魔力刃？……」

「集束した魔力を自分の魔力で圧縮する……。だけど圧縮した魔力が多いほど暴発の危険がある……。だから事前に小さな逃げ道を作つてやるところなる……。まあ分類別に名称するなら……。集束魔力刃だな」

アリシアに簡単に説明してやった……。簡単に言うけどコレって噴射した魔力を集束 噴射 集束……。を繰り返しているからこんな形になる訳でかなり調整が難しい……

「何かヤバそう……先手必勝!!」

ソニック・ジャベリン

アリシアは再びハルバードの魔力刃を撃ち出す。

「いくら速くても、動きが直線なら銃弾と同じく読める」

ギイイーン!!

タイミングを計り撃ち出された魔力刃を上へ弾く。

「今度は俺の番だ」

バーニア

ナイトフェンサーを維持したまま一気に近づく。

ブンッ!!

「ハルバ……キヤアアアアアアア!!」

両手のナイトフェンサーで斬りかかりアリシアを吹き飛ばした。

「レイ!今の内に新魔法の準備だ……アレはかなり時間が掛る」

OK!

俺は魔力を集中させる。

「聞いた?ハルバード、あの魔法を発動前に潰すよ!……ハルバード、クリティカルフォーム!!……ドライブ」

イグニッション

ハルバードがカートリッジを一発ロードする…柄はジャベリンフォームよりも長くなり斧の部分は山吹色の光を放ち巨大な魔力刃を形成。

それはまさに巨大な斧だった……

「……今度は掠るだけでもただでは済みそうに無いな」

「そうだよ、見た所まだ魔法は出来て無いけどどうする?」

防ぐ術は無い……かわすにもあの大きさではかわしきれない……

「なら……当てさせないまでだ」

右腕を前に出す……そこには環状魔法陣が一つ……

「え！？何時の間に……そんな余裕無かったはず」

「あつた……最初のデイレイスペルの時に砲撃の他にもう一つ仕込ませてもらった……デイレイスペル・アウト」

スローナイフ・フォートレスシフト！

地面に訓練所を敷き詰める様な巨大な魔法陣を展開してその上に地面に刺さるようスローナイフが敷き詰められた。

「ベアトリス式は多勢も無勢も関係ない……トリッキーが基本なのを覚えておくべきだな」

刺さっているナイフの一つを蹴ると他のスローナイフが連動して一斉に爆発した。

「わっぷ……アレ？コダイは？！どこ！？」

爆風と共に砂煙が巻き上がり、俺達の視界を潰した……

「レイ…アリシアは？」

煙で視界が効かない中レイに聞いてみる。

まだ探している見たい…

チャンスはこの一度きりだ…最初にキープしたスローナイフ・フ
オートレスシフトも、新魔法をわざと『時間が掛る』と言った事も

……

この魔法を成功させるために……

「始めるぞ……」

両手を掲げる……

OK カウント開始…… 10 … 9 … 8 … 7 …

「くっ……」

やっぱりコレは結構キツイ……時間は掛るし、魔力の消費も激しい
し、その間動けないし、これにディレイスペルは使えないし……
範囲は……何処居るか分らない……面倒臭い、様は当たればいいん
だ……範囲設定完了……後は……

ゴオウツ！！

次の瞬間、とてつもない突風により煙が晴れた……

「はぁ…やっと見つけた」

上からアリシアの声がした…恐らく上空に上がりハルバードで煙を
吹き飛ばしたのか……

「まさかあの魔法を目隠しに使う何て……」

「此処は防衛プログラム程大きくは無いからな……この位ならすぐ
出来る……」

…… 4 ……

「見るからにギリギリって感じだね」
「デイレイスペルはかなりの魔力を使うからな……それも長時間となると結構疲れる……」

……3……

「今回の新魔法つてもしかして……」
「そう、シグナムに指摘された火力不足だ……それは一応『ア・サンプル』があるがそれでも低いからな。だから集束の様に周りから集めて、多少のネックは無視した高威力の魔法を作った……」

……2……

「もう一つの魔法も見なかったな……」
「そうか………なら………」

……1……

「見せてやる………とっておきのをな」
カウント0

上空にはあり得ない位の巨大なスフィアが落ちてくる……

「何アレ！？アレがコダイの魔法！？私よりも洒落になってないよ！！！」

「当てれば良いと思っていたから……正直やり過ぎた……」
ありったけの魔力を注いだから……

「ハルバード、全弾カードリッジロード！アレを壊せば私達の勝ちだよ！」

ロードカードリッジ

「一撃……必殺！……クリティカルウウウウウ！！！」
アリシアはハルバードを構えて……

「ブレイカアアアアアアアアア！！！！！」

ディ・レント・フォールに向かって振った。

ギイイイイイイイイ！！！！

拮抗してるよ……アレ、結構威力上げつないんだよ？……

「こ……ノオオオオオオオオオオ！！！」

あ……押されてるよ……アリシア勝ってる……まあ無駄なんだが……

「えっ……ちよつと待って！？魔力刃が小さくなって……」
今回投入した新魔法は集束の様に周りから集めて、多少のネックは無視した高威力の魔法……

つまりディ・レント・フォールは遠隔操作で集束した魔法で、さら

にスファイアに触れた魔法を更に集束する能力もある……

つまり……集束した魔力+俺の魔力+周囲に散らばった魔力+アリシアが使っている魔法=ディ・レント・フォールの威力と言う計算が成り立つ……

障壁で防ごうにも、迎え撃とうにも、魔法を使ったら。水を得た魚と言っか……ニンジンぶら下げた馬と言っか…薬を得たヤの付く人と言っ感じになる……

「きゃああああああああああああああああああああああああああああ……」

スファイアに呑みこまれるアリシア……まあ初期の設定はなのはのSLB並みだけどアリシアの魔法が加算されているからな……
「やっぱりコレも要改良かな？」

コダイ…そんなこと言っでないで逃げたら？ディ・レント・フォールの射程内だよ？

「レイ……その前に一つ言っでおきたい事がある」
ふえ？

「魔法は容量、用法を守って正しく使おう」

何で？……っでもしかして……

魔力が空で動けない……

ばかあああああああああああああああああああああああ
あ！！

ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
ン！！！！！！！！

結局、こう言うオチか……………

くオマケく

報告

『アースラー訓練所半壊』

囑託魔導師二名が一方は新魔法の実験、もう一方はデバイスの試運
転を目的に模擬戦。

ランクは一人がSでもう一人がAAA。

結果、訓練所が半壊。観客には日に日に強力になる（理由はあえて
言わない）結界で被害は無かった…

被害を受けたのは模擬戦をしていた魔導師二名。

AAAランクの魔導師は模擬戦に負けたものの比較的軽症で三日
で完治するとの事。

Sリンクの魔導師は模擬戦に勝ったはずなのにとある事情で相手より重症、全治半月となった……

クロノ・ハラオウン

魔法は容量、用法を守って正しく使おうboyコダイ（後書き）

メガネ「いつさびさの更新!!」

コダイ「理由を言え、今すぐだ」（銃を付き付ける）

メガネ「ディシディアデュオデシムをやってました!!」

コダイ「デイ・レント・フォール!!」

メガネ「ちよつと待て!!それは死ぬほど時間を喰うんじゃ…」

コダイ「此処は何でもアリの空間だ!!」

チユドオオオオオオオオオオオオオオオオ!!

レイ「えつと……コダイは自分の放った魔法に巻き込まれて気絶しました…」

コダイ（だった物体）「……………」

メガネ（非殺傷設定で原形はある）「……………」

レイ「感謝コナ」 Rain様、龍賀様、ながもく様、ソラト様、杉並様、田中伸宙様、感想をありがとうございます！！」

メガネ「Rain様からは所有者の肉体ダメージが一定以上になった時あるいは、変態的な目で見られたとき（男限定）に自動でデイドロゼロ（直射砲で、おそらくあつたもののエネルギーを消す）を自動で発射する指輪を、龍賀様からはクレープ全種、杉並様からは幻想郷の某ダウザーとスキマババアの洋服（レイ、コダイ、メガネさんの体型にジャストフィットするサイズ。各1着ずつ）を頂きましたありがとうございます！！」（復活）

コダイ「服が汚れた……」（スキマババアの服を）

レイ「見て見て〜ネズミさん」（某ダウザーの服）

メガネ「本来ならネズミとか女の子は嫌う方なのに……」

コダイ「ハムスターがいい例だろ」

メガネ「ああ〜」

レイ「ハハツボクム「それはネズミ違いだ！！」」「それは不味いから色々と待て！！」「ふえ！？」

メガネ「危なかった……」

コダイ「実体化した分テンションが高い……」

レイ「ふえ？どくしたの？」

コダイ「何でも無い……」

メガネ「皆様からの意見や感想など色々待っています！！」

レイ「ます」（ネズミ耳をピコピコ）

コダイ「ババアって言ったら女装とオシヤレの境界を弄る」

メガネ「地味に怖いのはやめてください」

次回もお楽しみにしてください

灯台もと暗し……チョット首吊って一回死んで来るb yコダイ(前書き)

オリジナル〜と言うかA・sとオリジナルの間って感じかもしれま
せん……

灯台もと暗し……チョット首吊って一回死んで来るbyコダイ

「え〜っと、何で俺はここに居る？」

普段どうでもいいで流すが場所が場所だ……

「君にどうしてもお礼がしたいと事らしい……」

とクロノが言う……今俺が居る場所は……

「この後、なのは達の訓練があるんだが……ミゼット」

ミゼット・クローベル統幕議長の執務室だ……しかもレオーネ・

フィリス法務顧問相談役、ラルゴ・キール武装隊荣誉元師までいる

……なにこのオールスターズ？

同じくこの部屋に居る、クロノ、ユーノ、リーゼ姉妹、グレアム提

督がオマケに見える……

「ふふふつ…手短に済ますわ」

「この子があの『新代の魔導師』……」

「ミッド、ベルカに次ぐ第三の魔法体系『ベアトリス式』を作った

と言う……」

レオーネとラルゴは興味津津とコツチを見ている……

「コダイ・T・ベアトリスさん、1年前の『P・C事件』解決及び

ヒュウドラの暴走事故の真相。そして前回の『闇の書事件』の闇の

書の完全浄化……管理局を代表して、私達が感謝の言葉を送ります」

三提督は深く頭を下げる……

「は？……クロノ一体どういう事だ？」

「スマン……全部話してしまった……」

あの二つの事件はなのはやクロノ達の手柄にした筈なのに……

「闇の書に関しては俺は何も出来なかった……」

解決方法も見つけられなかったし……魔力は蒐集されるわ取り込ま

れるわ……あれ？俺足ばつか引つ張ってる？

「そんな事は無い。君のおかげではやて達やお父様も救われたんだ

……それは君が私達を止めてくれたからだ」

「そうだよ、それにコダイは闇の書その物も救ったじゃない……」
「君はそう思うが、此処にいる人間全てが君に感謝しているんだ」
「アリア、ロツテ、グレアムの順に言う……」
「はあ……俺はただ自分がそうしたいと思ったからただだけだ、別にはやてや貴様らの為でも無い、あくまで自分で思ったからだ。勘違いするな」

「ツンデレ？」

「ツンデレ……萌える！」

そこうるさいぞ猫姉妹。

「だが……完全浄化とまでは行かないんだよな……」
俺の言葉に一気に視線がコツチに向く。

「防衛プログラムは確かに消滅はする。だけど、最低でも後4年は掛る……此処まで複雑なプログラムをあの夜天の書に組み込むとすると相当の技術力が必要なんだ」

「あ、そうか…元はストレージとは言え、守護騎士やら管制プログラムとかかなり特殊だから下手に弄って暴発って事も考えらるよね」
「事件の後も闇の書に関して調べて見たけど、改変されたとか無かったな……」

「整理した無限書庫で調べて見たけど、目新しい物はなかったなあ……」

ロツテの言葉にアリアとユーノが頭を抑える……

「無限書庫でもダメか……夜天の書を治すことで『シード』を使っただけで見つからなかったから無駄だし……」

考える……考えるんだ、きっかけさえあれば後は芋づる方式で分るんだ……視野を広げる、闇の書と夜天の書の事は一先ず置いておくんだ……

「無限書庫でも改変されたとしたか情報が無い……探せば見つかるはずの無限書庫で何で改変されたとしたか……！」

クロノも同じく考えてたが、突如顔色が変わった……

「コダイ、こんな事1年前にも無かったか!？」

「一年前? P・C事件の……」

P・C事件……そんな改変された物何て……

改変………された?

「おいおい……何だよそれ」

無言で『シード』を発動する……

「誰かこの執務室に認識阻害の結果を……全員腹を括れ」
そして俺はあるキーワードで検索した……

「ああ……」

面倒臭い事になった……

「コダイさん…これは一体……」

「先に言っておくが、コレに嘘は無い。先程違う事を検索したが故障は無い……つまりこれは真実だ………闇の書を改変したのは………」

……管理局」

それだけじゃない、『シード』で出て来たのは数々の違法実験や横領などの管理局が行っていた不正だった………

「管理局ならロストログアの二つや二つ弄るのは簡単だな………怒りとかイラつきとかじゃなくて『良く出来ました』って褒めたいくらいだな……」

始めから怪しいとは思っていたけどな…俺に来なければどうでもよかったが………巻き込まれたら仕方ないか。

「闇の書だけだは無く、プロジェクトFも管理局が始めた物………」

「過去の事件と照らし合わせても嘘偽りは無いようだ……」

「どうやらワシらは管理局を勘違いしていた様じゃ……」

三提督は真剣な顔で話し合っていた………

「クソツ………こうなったらすぐに不正をしている上層部を！」

「クロノ、私も行くぞ！」

怒りで我を忘れていているクロノとグラムは部屋を出ていくが………

「お待ちなさい！……！」

ミゼットの声で止まってしまった………

「しかしクローベル統幕議長、このままでは……」

「分っています、でも此処までの事を今まで知られていないと言う事は上層部にはかなりの大きなバックボーンがあると言う事………下手に動けば周りを巻き込むことになります」

「あ………」

「すみませんでした、お見苦しい所を見せてしまって……」

ミゼットの言葉で徐々に冷静さを取り戻したクロノとグレアム。

「クリーンな局員だけ避難させて本局ごと俺がディ・レント・フォールで潰していいか？」

あれなら魔力を根こそぎ吸い取って肥大化するから結果も意味を成さないし…………

「怪しまれるだろ！」

クロノ突っ込みが来る。

「じゃあコッソリと……」

「本局を潰すほどのデカイのをコッソリと言えるか……！」

「大丈夫だ、バレない様に人を殺すのは大得意だ」

「それを局員の前で良く言えるな……！」

「そうだった……と言うよりクロノ……最近突っ込みに切れが増したな」

「お前の所為だ……！」

「褒めても料理しか出ないぞ？」

「それは……良いが、そんな事を言ってる場合じゃないだろ……！」

おお……ノリツツコミまで……成長しておねーさんは嬉しいよ。(

決しておにーさんでは無い)

「まあ、他にも方法はあるが……」

「だったらそれを先に言え！」

「……………言っても良いが……………面倒臭いぞ？」

全員が静かに俺を見る…………

「……………グレアム達がやった事をすればいいだけだ……」

「私達がやった事……………まさか……！」

「正解、目には目を違法には違法を。どんな悪い事もバレなければいい……管理局のやっている不正行為をある事無い事言いふらし表に

出してそこで潰す」

「言いふらして……」

「コダイらしいな……」

クロノとユーノが頭を抱えていた……

「秘密裏ではダメなんですか？」

「別にコツソリやるモノいいが、ちゃんとした理由がある」

俺は三提督に指を一本立てて見せた。

「まず一つ。管理局が裏で何をやっているかを第三者にも分からせる事、浮き彫りになり言い逃れが出来ない状況にする」

次に二本目の指を立てる。

「次に違法実験についてだ。違法と言っても実験は実験、付きつめれば立派な技術だ……それらを使わない手は無い。例えばクローン技術も応用すれば、失った部位を再生させる医療技術にもなる」

最後に三本目の指を立てる。

「最後に……これは重大な事だ………その方が面白い
と思っただからだ……！」

「……結局そっち!?」「」「」「」

三提督以外が突っ込んだ。

「少し真面目な話をするが……何で光と闇が出来たと思う?偶然か?どちらか片方を嫌う思考の持ち主が居たからか?それとも最初からあって人間がそう名付けたからか?……人間と言うのは相反する物が無いとダメなんだ」

「相反するもの？」

「そう……たとえばクロノ……上と下、強いと弱い、美しいと醜いのようにお互いに反対の意味を持っている、光と闇も同じだ………」
「コシは片方が欠けると存在を維持できなくなってしまっ、反対の意味を持つモノがあつてこそ意味が出来る。いくら闇に光を当ててもその後ろに闇が出来る……つまり」
「これからやることは………」

「闇を更なる闇で葬り去る………コレが闇を消し去る効果的な手段だ」

「つまり犯罪に見て見ぬ振りをしろと？」

「その通りだ。こんなになるまで放って置けるんだ、簡単だろ？」
俺と三提督が見合う事数分………

「フッ………そうですね」

ミゼットが微笑んだ………

「正直言つて、もう年だし隠居したいのよね」

「ほら、情報も無限書庫と『シード』を併用すれば結構役に立つし……」

「良いぞ？始めからそのつもりだし……」

それに無限書庫だけじゃなくてもコイツ頭が切れるからな。

「後は人手だな……」

マテリアルズは囑託だけで良いと言っていたから確定だが……

「資質が高く管理局にも知られてない魔導師や騎士はいないものかな？」

「そんな人が居たら管理局が真っ先に手を出す筈だ、人手不足だからな……」

「俺達は顔とかが知られているから派手に動けない……もっと派手に動ける奴を2名ぐらい欲しい」

「ただどさつきクロノが言った通り、そんな奴が居たら管理局が知らない筈は無い……どうするか……」

「あの……コダイ君？此处で話すのは良いけど……約束があったんじゃない？」

約束？……あ。

「やばい……クロノ、転移頼む」

「分った、僕も付いてって良いか？」

「良いぞ？」

クロノの転移魔法でなのはの下に向かった……

「特訓は割愛」

今回の訓練はいつもと変わらないデバイスなしの訓練……だが人数が半端無く増えた。

なのは、フェイト、アリシア、はやて、シグナム、ヴィータ、アイン、サクラ、エル、アンズと言ったメンバーだ……シャルは治療、ザフィーラは結界担当な為不参加だった。

「……………」

全員ただの屍となり、口からは何かが出ていた。

「どんだけ辛いかと言うと、シャルの料理を一气食いする以上に辛いと表現しよう……」

「相変わらず容赦ないな……」

「クロノも参加するか？」

「君との模擬戦で十分だよ……死んでないよな？」

「さあ？」

「おい！ー！」

「冗談だ……1割り」

「殆ど本気かよ!？」

「心配するな……一応策は打つてある」

「あんな戦場の方が楽しそうな訓練に一体何の策が……」

「特にあの4人にはかなり重要だからな……」

まあ…間に合えばの話だけどな？

灯台もと暗し……チョット首吊って一回死んで来るbyコダイ(後書き)

メガネ「まあ……何と言うか……」

コダイ「超展開だろうが……」

メガネ「問題無い、どこかのカードゲームのアニメの超展開だらけだから!!」

コダイ「いいのか? クロノに教えても」

メガネ「問題無いだろ。クロノは真面目だけど自分の理に反すると突っぱねるから問題ないかと。ぶっちゃけクロノとかユーノはコダイの親友ポジションだから」

レイ「感謝コナ」 杉並様、龍賀様、ながもく様、真王様、竜様、ARFIN様、感想をありがとうございます!!」

メガネ「杉並様からは幻想郷の月の姫さまと座薬ウサギのコス(前回同様に、レイ、コダイ、メガネさんの体型にジャストフィットするサイズ。各1着ずつ)を、真王様からは質問とフェアリーテイルのエルザ(私服Ver)をプレゼント。おまけに鎧はノーマル・騎士^{ナイト}・炎帝を貰いました。ありがとうございます!!」

レイ「ぴよん ぴよん うさぎさ〜ん」(座薬ウサギのコス)

コダイ「あ…この耳ボタン式だ」(座薬ウサギのコス)

メガネ「チョピングライトを喰らったと思ったたらこれかよ」orz

(月の姫様のコス)

コダイ「流石に和服なら問題ないな」

メガネ「もういいや………真王様の質問が来てるから答えるよ？」

質問1『コダイは女装する服が違つと性格も変わる？』

コダイ「コレは演技だ、前の世界では悪い事散々やって来たから身に付いたものだ……その気になれば男は3分で落とす自信はある」

メガネ「お前は男としてのプライドは無いのか!?!」

コダイ「俺に性別なんて元々無いが？」

メガネ「あ、すみません。次の質問行つてください」

質問2『コダイは苦手なモンスターっているか？次の欄から選んでくれ』

触手魔族・モルボル

屍族・ゾンビキング

死骨族・スカルキング

妖霊族・フアントム

毒虫族・ベノムワーム

邪龍族・バハムート

魔道巨人族・マスターゴーレム

夜魔族・リリス

猫娘族・バステト

死告族・デス

殺人機族・キラーマシン

メガネ「で、どうなんだ？」

コダイ「美味しくなさそうだな……」

メガネ「食う前提かよ！！ってか殺人機族ってモロ機械だろ！？」

コダイ「そうだ、金属は嫌いだった……」

メガネ「はあ……どうしてこうなったんだ？」

レイ「皆様からの意見や感想などイロイロ待っています！！」

コダイ「座薬って言うな〜！！」

メガネ「つか何で俺まで着る羽目に……」

コダイ「女装はオシヤレだ」

メガネ「もう突っ込むのも疲れたよ……」

〜次回もお楽しみにしてください〜

「いつも予想通りだとやらされてる感があったてムカつくb y n o たい（前書き）

なのは墜落……………何てウチの主人公がやらせる筈はありません……………

「いつも予想通りだとやらされてる感があったらムカつくよコダイ

アレから1年位か？

なのは、フェイト、アリシア、はやては正式に入局した……

マテリアルズとアインはクロノの部隊（仮）に引き込んだのでまだ
囑託魔導師だ。

なのはは武装隊…フェイトとアリシアは執務官…はやては特別捜査
官らしい……

俺がやった事と言えば……研究所をコツソリ破壊したり、その研究
所にあつた技術を頂いたり、『DEATH NOTE』である事無
い事を流して不正している上層部の社会的に殺したりなどしている

……

この光景にミゼットが『管理局より黒過ぎる……』と言われた。何
を当然なことを？

正直、派手に動けないのはツライ……やっぱり欲しいな……

「何ボーっとしてんだ！！任務中だぞ！！」

「ん？そうだった。ディレイスペルアウト」

スローナイフ・フォートレスシフト！！

そう言えばアリア、ロツテはマテリアルズを鍛えるとか言っていたな……直接協力できない代わりに。『クロスケの元師匠の力を見せてあげるよ』とか言っていたし。

「まさか……双子？」

「これ以上ボケるとギガントするからな」
死ぬから……一回。

「少し考えれば分る事だ……まだ体の成長しきって無いのはがあんな砲撃を撃つんだ……負担はかなりある、それに加えこの1年ハイペースで仕事しているから何時壊れてもおかしく無いな……」

「それヤベーだろ……！」

「心配するな、既に策は打ってある……それに」

「それに？」

「アイツには少し自業自得と言う物を知ってもらわないとな……手を出すなよ？」

その後、辺りを搜索して何もなかったから帰還する事に………その時。

「なのは!!!後ろ!!!!!!」

「え?」

ヴィータの声に振り返ると、銀色の爪の様な物がなのはに襲い掛かろうとしていた……普段のなのはなら避けられる……普段ならな?

「あれ?……」

突然なのはの動きが鈍る……腹を括るか。

「レイ:フルフラット ヴィータはなのはと逃げる。後、シャマルに見せるのモナ?」

OK!フルフラット!!!

右腕の装甲の一部がスライドすると……

ゴオオオオオオオツ!!!

体の中にあり得ないほどの魔力が暴れまわるのを感じると、装甲は灼熱を帯びた金色になった。

ジユウウウウウウウウ！！！！

一瞬でなのはと爪の間に割り込み。それを掴んで一気に溶解した……

「……………コダイ君？」

「何やってんだよ！！速く逃げろぞ！」

「でもコダイ君が……！！！」

「今のコダイといても巻き込まれるだけだ……！」

「ヴィータがなのはを引っ張って行く。」

「……………」

アンソウン 未確認物体が見えない………確か魔法でも引っ掛からないステルス機

能だっ たな……………

キイイイン……………

「……………」

「そこか……………」

音のする方に飛びかかり、何も無い空間を殴る。何も無い筈なのに何かを突き破った手応えがすると共に、未確認物体アンソウンの正体が現れた……多脚型タイプの機械……研究所にあるのと一致したな。

キイイイン…

キイイイン…

キイイイン…

キイイイン…

一斉攻撃か………なら近い順に潰すま………

ピキピキピキピキ…

装甲に罅が……

パリンッー！

「あ………しまったー!?」

ザシュザシュザシュザシュザシュ！

「あ……………ぐっ……………」

全身に爪が刺さる……………

コダイ！？

「レイ、暫く寝ている…オーバーロード後は疲れるんだろ？」
爪が引き抜かれようとする……………

「そうはいくか……………」

グシュツ！！

抜けようとする爪を更に深く突き刺さるように押し込んだ。

「っ……………どうだ？抜けないだらう？」

これなら正確な位置が分る……………

「覚悟しろ……………」

一番近くに居るであろう未確認物体アンソウを殴る、姿が現れると同時に隙間に貫手で駆動部の突いてそのまま突き刺した両手を左右逆に引いて……………

グシャアッ！！！！

一気に引き千切った。

「……次」

すぐ近くの未確認物体アンノウンに飛び乗って……

ゴシヤツ！！！！！

脚を振り下ろして踏み潰した……

「後………5」

俺はまた一番近い未確認物体アンノウンに近づいた………

「コレで………」

最後の未確認物体アンノウンを持ち上げ……

「最後だ」

グシャツ！！

地面へ叩き潰した……………

「はぁ……………」

体中に刺さっている爪を引き抜く。

「コレで全部……………だな」

コダイ〜！！

あ……………ヴィータの声だ。

「コダイ、大変だ！なのはが……………ってコツチも大変だー！！」

ん？……………ああ、血まみれだしな、おまけにオーバードの副作用で何か痛いし熱いし……………もう慣れたけど慣れたくは無かったな……………

「なのはがどうした？」

「帰還した途端倒れたんだよ、今シヤマルが見て……………ってそんな事言ってる場合じゃねえ！！さっさと医務室に行くぞー！！」

ヴィータに引つ張られて帰還する事になった…

その後、血相を変えたシヤマルにより治療されて止血程度には回復……………逃がさない為にと傷を深くし過ぎたか……………現在、包帯グルグ

ル巻きの状態でなのはの所に向かった。

「入るぞ……」

ノックしてから入るとそこにはフェイト、アリシア、はやて、ヴィー
ータ、シグナム、リインもいた……

「なのは、目が覚めたのか」

「コダイ君……」

なのはは一度俺を見た後、顔を伏せギョツと拳を握っていた……

「ゴメンね……コダイ君……私の所為だよね」

「そうだな……貴様があそこで避けていれば、こんな事にはならな
かったな……」

「っ……！！」

なのはの肩が震える……

「コダイ！てめえ！！」

「そんな言い方は「少し黙れ」っ！！」

ヴィータとフェイトを軽く睨み黙らせる……

「怒られると思ったか？恨まれると思ったか？」

コクンとなのはが頷く……

「じゃあ、怒ってやる……」

俺は指でなのはの額を押して無理やり顔を上げさせる。

「……」

その顔には恐怖しか無かった……

「なのは……」

肩が震える……

「もつと周りを見る」

「……………え？」

恐怖から一瞬、キョトンとした顔になった。

「はい、怒るの終了」

「え？……………え？」

「ん？どうした？」

「だって……………怒るって」

「怒っただろ？説教しただろ？」

「でも「でもじゃない」にや！？」

なのはの両頬を引っ張る。

「お、伸びる伸びる」

「にやにやにやにやにや〜！！」

両腕をバタつかせる……………面白い。

「大方、友達に迷惑を掛けたくないから、一人で頑張ろうと思ったんだろぅが……………一人で出来る事なんてそんなに多くはないだろぅ」
引っ張るのをやめて手を頬に添えてこつちを見させる。

なのはの性格上こういうのは全部背負う癖があるってアリサも言うていたし……………

「今回の任務だってなのは一人でやった訳では無い……………それに、ヴィー
ータや俺が居たから無事で居られたんだ。俺達はそれを迷惑だと思
っていない……………それに、損得考えないで行動するのが友達では無か
ったのか？」

「あ……」

「要するにアレだ……どのみち迷惑になるのなら最初の方が負担は少なくなる……一人では無いんだ、『もつと周りを見る』と言う事だ」

頬から両手を離すと、なのはは周りを見始めた。

そこに居たのはなのはが寝ているベットを囲んでいる。フェイト、アリシア、はやて、ヴィータ、シグナム、リンだった……

「なのは、何で言ってくれなかったの？」

「言ってくれたら、力になれたのに……」

「でも、フェイトちゃんとアリシアちゃんは執務官の試験が……」

「別に試験は一生に一度つて訳じゃないし、半年に一度なんだから」

「言ってくれなきゃ、寂しいよ」

「フェイトちゃん……アリシアちゃん」

「なのは……何で同じ武装隊の私を頼らねーんだ！おめーに何かあったらはやても悲しむだろうが……」

「ヴィータちゃん……みんな……ゴ」待てこら「みにゅ……」

なのはの鼻をつまむ。

「いいか、今なのはは謝らなくて良い……皆に助けてもらうのだからここは言つべき事が違うだろ？」

「みんな……ありがと……うう……ひっく」

なのははポロポロ泣き始めた。

「怖かった……魔法が使えなくなると……ひっく……みんな離れて……グスツ……また一人になるんじゃないかって……そう考えると……」

……怖くて……」

「まあ……よく言ったな、なのは」

頭を撫でる……」

「コダイ君……う……うええええええええええええん……」

なのはが抱き付いて……って……！

ギョウウウウウウウウウウウウウウウウウウ！……！

ああ……………何だろう、三年前位のアレを思い出す……………

「なのは！今すぐコダイから離れる！！怪我してんだぞ！？」

「うえええええええええん！！！！」

「ダメや！！耳に入っくらん」

「ト、トキガワがダランと力なく……………口から何かが！？」

「なのは落ち着いて！！！！」

「コダイが死んじゃうよ！！！！」

「とーさま！！死んじゃ嫌ですっ！！！！」

薄れゆく意識の中……………

最近、こうゆづの多いな〜と思った。

「……………えっ!?!」「……………」

意識が回復した頃にシャルルが検査結果を発表した時……………皆の目が点になった。

「シャルル…どう言う事や?」

「ですかからなのはちゃんの検査結果が『過労』なんですよ」

「ちゃんと調べたのか!? ヤバい倒れ方だったぞ!?!」

「そうなんですよ!?! どう調べても何処にも異常は無くただの過労の症状しか出ていないんです!?!」

「まさか……………コダイに散々魔王って言われた事で知らぬ間に魔王の身体に……………」

「グイータちゃん酷いの!?!」

「大丈夫だよなのは! 例え魔王になっても友達だよ!」

「フェイト…そう言う意味じゃないと思うけど……………」

「フェイトちゃんもひどいの〜」

なのはが魔王は今に始まった事じゃないけど……………コレはそろそろ言っておいた方が良いか。

「その事なんだが……………やったのは俺だ」

「……………えっ!?!」「……………」

「俺が何のために訓練したと思っているんだ? なのは、フェイト、アリシア、はやて……………この四人は性格上、誰がどう言おうと絶対無茶するだろうと思ったから、ある程度無茶が効く体に改造したんだ」

「そ……そう何か？コダイ君」

「ミッドやベル力を使えない俺が魔導師の訓練何か出来るかよ。これは俺もやった訓練法、名付けて………」
『死んで元々肉体改造計画』だ！！」

「何度もお母さんやお父さんに会ったあの訓練が……」

はやてがorzになっっている………と云うかフェイトとアリシアも同じ体勢だ。

「それとなのは………今のソレが限界だ。このまま暫く休めば支障なく飛べる………もしかた無茶をしたら」

「………したら？」

「俺がまたなのは庇って死ぬ………コレがどう言う意味か分るよな？」

なのはが頷く。コイツは自分が傷つくより近い奴が傷つかないと分らなさそうだしな………

「いつも予想通りだとやらされてる感があつてムカつくb y コダイ（後書き）」

メガネ「なのは墜落イベントでした。この話はコダイの周りに『お母さん』と言われるほどの母性を存分に発揮しようと思いました」

コダイ「別に悪い事では無いからそんなに怒る必要は無いからな。

間違いは誰だつてある、今後なのはが無茶をしなければいいだけだ」

メガネ「つてな感じで、説教とは違う感じにしてみました。つか『死んで元々肉体改造計画』つて」

コダイ「まあ2年位しか無かつたけど、全快状態のなのはならディ
バインバスター30連発しても全く問題ないぞ？」

メガネ「すげえ……………」

レイ「感謝コゝナゝ、龍賀様、ながもゝ様、R a i N様、心の剣
様、ソラト様、感想をありがとうございます！！」

メガネ「龍賀様からは質問を、心の剣様からは質問とがんばれゴエ
モンシリーズのヤエの忍び装束（人魚変化機能付き）を貰いました
！有難うございます！！」

レイ「まずは龍賀様からの質問だよ！！」

質問『コダイが女装はオシャレと豪語し始めたのはいつだ？ただし
本編より昔で』

コダイ「覚えていないが…………作られてから遅くは無かつたような…

…」

メガネ「まあ産まれてすぐと言う事です…次は心の剣様から……
ってその前にコダイはあっちに行っておいて」

コダイ「ん？分った……」

〜コダイ退場中〜

メガネ「コレはラバースの皆さんに答えて頂きます！」

質問『コダイラバースに質問だけどコダイとR・指定のアレをする
時にはどんなのを希望ですか？』

1 強姦風味（同意した上です）

2 SM風味（レザー装備なコダイ）

3 バンパイア風味

ラバース「……………/……………/……………/……………/……………/……………」

メガネ「あ、妄想中だ……」

ラバース「……………ボソボソ……………/……………/……………」

ソレが犯罪だろつが違法だろつがバレ無ければいいb yコタイ(前書き)

原作崩壊まっしぐら……………

ソレが犯罪だろうが違法だろうがバレ無ければいいb yコダイ

前回から数日後……

「遅かったか……」

「クソツ……」

俺とクロノの目の前に広がるのはある施設だった跡地……

なのはや俺を襲った未確認物体アンソウについて調べると以前管理局が使っていた施設が廃墟なのに稼働している事を見つけ早速クロノと急行したが……

「勘付かれたか？」

「いや……地上と本局の溝は深い……恐らく地上独自の行動だろう」

「最近後手に回り過ぎだな……仕方ない、データとかを探して調べ……」

ボコッ……！

「へ？」

踏み出した地面に穴が空き、それが広がり大きな穴になった。

「畏か？」

「いや……」

穴から吹いてくる僅かな風と血の臭い。

「階段だ……」

その穴は地下へと続く階段だった……

「稼働している……廃墟はカモフラージュだったか」

廃墟の地下は何かを実験していた様だ……

「気を付けて進もう、また未確認物体アンソウンが居るかもしれない」

「分っている……レイ、生命反応はあるか？」

ん……妨害されて分らないよ

「仕方ない、足で探すか」

地下を慎重に進む…基本一本道だったので迷う事は無かった……しばらく進むと開けた場所に着いた。

「静かだ……」

「撤収した後なのか？」

「恐らく……局員が来る前に急ぐぞクロノ」

「分った」

探索を始めようとしたその時……

ドコン！！

「何だ？」

音のした方を向くと、瓦礫の隙間から煙が……

「まさか生存者が？」

「急いで救出だ！！」

瓦礫をどかすとそこには女の騎士が所々血を流して倒れていた。

「息もしているし脈もある……が危険な状態だな。ここで応急処置をして急いで運んだ方が良い」

女には意識は無く両腕両足のデバイスが大破して煙を上げている……

……さっきの煙はコレか。

「治療は僕がやる……君は辺りを警戒してくれ」

「ああ……念の為に結界を貼って置け」

そうクロノに言って、探索を初めた……

「コレもだめ……コレもダメだな……」

探索中に倒れている局員を発見したがどれも死んでいた……

「これまで見た死体の数からして一個小隊規模だな……」

しかもどれも陸戦……

「これだけの規模が死んで応援一つ寄越していないのは妨害されたか秘匿任務か……」

もう一つ不可解な点……局員の殺され方。魔法で殺されたのと物理的に殺されたのが半々ぐらい……

「質量兵器……では無いな、そんな物を使っていたら俺が分からない筈が無い……」

となると後はあの時とは違う未確認物体……あ

「あのデータベース……まだ生きているみたいだな」

かろうじて稼働しているデータベースを操作するが……

「『パスワードを入力してください』か……よし」

（30秒後）

「大した事無かったな」

解錠されたデータベースを操作してレイとは違う個人端末にコピーする。

「しかし数字12桁って……もつと難しい暗号用意しろよ管理局」
データを開いて行くうちに徐々に此処で何をやっていたのが分つて来た……

「戦闘機人……」

人の身体と機械を融合させ、常人を超える能力を得た存在。

鋼の骨格と人工筋肉を持ち、遺伝子調整やリンカーコアに干渉するプログラムユニットの埋め込みにより高い戦闘力を持つ。

天賦の才や地道な訓練に頼る『魔導師』とは異なり、誕生に人為的な力を介在させることで安定した数の武力を揃えられる技術である。元は旧暦の頃より幾度も開発が試みられた人型兵器である。もつとも完成の域に達したものはほとんど存在しないという難技術であった。

身体機能の代わりに務める人工骨格や人造臓器は珍しい存在ではなかったが、それを『身体機能の強化』目的で用いる場合、様々な問題があった……

「……『拒絶反応』や『長期使用における機械部分のメンテナンス』といった問題………全く、いかにも面白そうな事をやっているな……加担すればよかったかな？」

そんな事言ったら執務官エタナルコリンのマジギレが来るのでやめておこう……

この施設を壊したと言う事は、戦闘機人は完成している……

「この二つの問題をどうやって解決したかだな……」

臓器移植と似た様な物で、免疫とかが働いて拒絶反応を起こす……それを通過したとしても長期間におけるメンテが必要………個々に適応する物を作るとコストが掛る……考えられるのは……

「素体の人間から作れば丸く収まる………ん？」

コピーが終わった端末抜き、振り返る……

「成程……生物と機械を融合させれば良いだけだからこんな事も可

能なのか……」

ゲルルルルルル……

目の前に居るのは所々機械で出来ている犬だった………生体部分が若干腐敗している………恐らく死骸を直して無理やり機械部分で動かしているのか。

「しかしコレは人工筋肉と言うより……あの未確認物体アンノウンに似ているな……」

「コダイ！」

クロノからの通信入った。

「前とは違う未確認物体アンノウンを確認した、気を付ける……！」

「気を付けると言われても………既にエンカウントしたんだが」

「何だと!？」

本当にタイミングがな……ある意味空気を読んでいるのか？

「そいつの張っているフィールドは、並みの魔法は効かない………せめてナイトフェンサー級の魔法なら何とかなるだろう」

「それ、数少ない上級魔法何だが………ん？確認したと言う事はそつちは倒したのか？」

「ああ……一体だったからな」

「コツチも一体だ………必要な事は終わったから破壊次第ここから逃げる」

「気を付けてくれ」

クロノからの通信が切れた。

「確か並みの魔法は効かないと言っていたな………なら」

オオオオオオオオオオオオ！！！！

考えなしに飛び掛ってくる犬……

「はい」

飛び掛かって来た犬にハンドグレネードを啜えさせる。

「あんまり吠えたら飼い主に怒られるぞ？」

ピンに指を引つ掛け、犬を向こう側に蹴り飛ばしながらピンを抜く。

ドオオオオオオオオオオオオ！！！！

向こう側の壁にぶつかった瞬間に爆発、犬は跡形もなく吹き飛んだ

……

「戻るか……」

そこを軽く一瞥してクロノの所へ向かった。

「コダイ、大丈夫だったか？」

「問題無い……データもコピーしたから逃げるぞ」

「管理局に見つからない様にランダムで中継して……」

そう言い掛けたクロノは固まった……

「どうした？」

「いや……している事が犯罪染みていてされに、それに慣れた自分が居ると思っ……」

「あゝ少し前の闇の書の事件を思い出すな」

確かヴォルケンスもこうやって攪乱していたよな……

「最後の仕上げだ……」

ポチ

コートからテレビやアニメに出てくるような……起爆スイッチを躊躇無く押す。

ドオオオオオオオン！！ドオオオオオオオオオオン！！ドオオオオオオオオオオン！！
オオオオオオオオオオオオオオオオン！！

所狭しと爆音とオレンジ色の閃光が広がる……

「何仕掛けたあああああ！！」

「何言っている？C - 4（ご存じプラスチック爆弾）だ……証拠隠滅に最適」

「その『何当たり前な事を？』って言ってる感じやめろ！！唯でさえお前の行動に何時も肝を冷やしているんだぞ！？」

「それはともかく速く転移しろ」

「誰の所為だあああああああああ！！」

撤収後……局員達を巻いた後は、あの騎士はユーノとアリアが治療している。クロノは本局で調べ物：俺は軽い用事の後コピーしたデータを調べていた。

「めばしいのは施設で見た奴だけか？」

モニターを消して伸びをする……ん？どこか教える？ここは三提督が割り当ててくれた一室で、一般の局員は知られていない。

「戦闘機人とこの前襲撃されたのと施設でみた二つの未確認物体アンソウ」
データは戦闘機人についてと次元犯罪者のプロフィール……管理局だからあるのは当たり前か。

そんな事を考えていると、クロノが戻って来た。

「どうだった？」

「ああ……」

壊滅したのは、ゼスト・グライガイツ率いるゼスト隊……

「ゼストと言えば、首都防衛隊のストライカー級の魔導師……」

「ああ……彼ほどの魔導師が率いる部隊が全滅……それほど管理局は恐ろしい言う事だな」

「そうだな……それともう一つ気になる事がある。それは、ゼストとその部下メガーヌ・アルピーノの死体が無い」

探索していた時もそれらしい死体は見つからなかった。

「ただ瓦礫で見えなかったからじゃないのか？」

「そういう可能性もあったが違った、さっきある病院に言って来た……そこにはメガーヌの娘が居るらしいが、だいぶ前に管理局の誰かが預かったって……その時間帯は俺達が探索をしていた時間。偶

然にしては出来過ぎてる」
「つまり……君が言いたいのは」
「ゼストとメガー又は恐らくまだ生きている可能性が高い……」
そして次元犯罪者のリスト……アレは恐らく。
「コダイ、クロノ、あの人が目を覚ましたよ」
ユーノとアリアが部屋から出て来た……どうやら意識を取り戻したらしい。

「い……今の話しは本当なの？」
「ああ……あの施設は管理局が使用していたものだ」
軽く自己紹介を済ませた後、何があつたのかを全て話した。
「ゼスト隊長は？！メガー又は！？」
「あつちは死亡と決めつけている見たいだが、死体がないから生きている可能性もある……残念だが貴様を含めゼスト隊は全滅したとされている……」
それにIDも抹消されているとも伝えた……
「………何で君みたいな子供がそんな事を知っているの？」
俯いていたが暫くすると俺をみてそう言った。

「コダイ…さっきの話なんだが」

「さっきって？」

クイントとの話が終わった後、クロノと廊下で歩きながら話していた…

「デバイスを作るって…出来るのか？」

「ん？デバイスマイスターの資格は取っているぞ？S級」

「はあ！？何時だ！！」

「えっと…なのはが倒れる少し前かな？」

以外に簡単だったな筆記も専門知識を並べれば済んだし、俺が創ったはやての夜天の書を見せたら即マリエルにOKを貰った…

「君ってホント完璧超人だな…性格以外は」

「褒めてくれてありがとう」

くおまけ

デバイスマイスターの資格を持つてると言った後の事

「まあ…お前は頭は良いから、教官でも執務官でも余裕でとれるだろう」

「ああ…実は全部の資格を手当たり次第受けたんだけど…落ちた」
「落ちた？実力はかなりの物の筈なのに…」

「自業自得だが…筆記とかは満点でいけたけどムカつく局員がいて、半殺しにしたら『性格に問題あり』『協調性に欠ける』とかで不合格になった」

「全く持ってお前らしいよ…」

ソレが犯罪だろうが違法だろうがバレ無ければいいboyコダイ（後書き）

メガネ「クイント救出!!!」

コダイ「ちなみに施設は全壊して死体を判別出来なくした、デバイスはバレ無い為と死亡させたとするために置いてきた」

メガネ「此処まで用意周到とは……」

コダイ「完全犯罪は得意中の得意………つてあの犬は何だよ」

メガネ「まあ……最後の敵への伏線？次回はどうするか………」

レイ「感謝コ〜ナ〜、Rain様、心の剣様、ながも〜様、AR FIN様、感想をありがとうございます!!」

メガネ「心の剣様から新世紀エヴァンゲリオンのプラグスーツ（レイカラー&アスカカラー&マリカラー）セットを頂きました、ありがとうございます!!」

コダイ「動きやすいし、頑丈だし言う事無いな」（綾波レイカラー）

レイ「私はこれ〜」（アスカカラー）

メガネ「コダイなら単身で使徒を倒せるかも………初号機と同じ事に（暴走）」

コダイ「出来なくはない」

メガネ「やめてくださいマジで」

レイ「皆様からの意見や感想などイロイロ待っています!!」

メガネ「此処でコダイの一言!!」

コダイ「あなたは死なない……私が守るから」(CV・綾波レイ)

次回もお楽しみにしてください

悪党は全てを敵に回し、全てを味方にするロンドンダイ（前書き）

原作とキャラの崩壊はまだまだ進む……………

久々のコダイのマジギレ

下手をすればコダイが管理局を潰す寸前でした……………

悪党は全てを敵に回し、全てを味方にするboyコダイ

アレから数週間後……俺はある場所に来ていた……

「貴様……一体何のつもりだ」

一人の局員が俺を睨みつける。

「言いたい事を言っただけだ……このゼスト隊の壊滅も研究施設も、照らし合わせれば全て貴様に辿り着く、自分で分っている筈だ

……レジアス・ゲイズ」

俺は証拠にデータを出してレジアスにつき付けた……

「貴様は地上の人不足に悩んでいた……そこで目を付けたのがあの研究施設で行われていた戦闘機人だ、だがゼストは戦闘機人の事件を追っていた……貴様にとっては邪魔だったから殺す様に命じた

……」

それに、殺される前にゼストと言い争ったのを見た局員もいる……

「下手な事を考えるなよ？……認識阻害の結界は発動済みだ、それに……」

俺はコートから銃を取り出す。

「俺と一緒に居るこいつは陸戦AAだ……こいつに拘束させて絞めて吐かせるだけ吐かせた後に殺すことだって出来る、そうするに『詰み』だ」

後ろに居る俺と同じ黒いコートを着てフードを深く被って顔をかくしている奴を顎で指す……

「脅迫のつもりか……」

「脅迫？コレは『お願い』だ、脅迫するならもっと面白い方法を考えるよ」

娘をダシにするとか……

「流石と言うべきか……刃向かう者を容赦なく消すやら、質量兵器を大量所持しているなど黒い噂が絶えない奴だったがまさか本当だったとは」

そんな噂が流れているのか……… 本当の事だけど。

「そんな事はどうでもいい……… 吐いて貰うぞ」
銃を突きつける………

「……… 儂は地上を守る為に全て捨てた………」
レジアスは観念したのか話し始めた。

「自分の正義は全てを救える……… その為なら殉しても構わない………
そうゼストと語り合ったのは少なくとも無い………」

「………」

我慢しろ……… 我慢しろ……… アレは語っているだけだ、俺には言っ
て無い……… 我慢するんだ………

「だが現状は違った！！人手不足！海との戦力差！増加する犯罪！
衰退する地上本部！地上を守るには……… 正義示すには必要な犠牲だ
つたんだ！！その為になら悪魔に魂を売ってでもだ！！！」

俺には言っ
て無い俺には言っ
て無い俺には言っ
て無い俺には言っ
て

無い俺には言って無い俺には言って無い俺には言って無い俺には言
って無い俺には言って無い俺には言って無い俺には言って無い俺に
は言って無い俺には言って無い俺には言って無い俺には言って無い
俺には言って無い俺には言って無い俺には言って無い俺には言って
無い俺には言って無い俺には言って無い俺には言って無い俺には言
って無い俺には言って無い俺には言って無い俺には言って無い俺に
は言って無い俺には言って無い俺には言って無い俺には言って無い
俺には言って無い俺には言って無い俺には言って無い俺には言って
無い俺には言って無い俺には言って無い俺には言って無い俺には言
って無い俺には言って無い俺には言って無い俺には言って無い俺に
は言って無い俺には言って無い俺には言って無い俺には言って無い
俺には言って無い俺には言って無い俺には言って無い俺には言って
無い俺には言って無い俺には言って無い俺には言って無い俺には言
って無い

「それで？……………その犠牲は何かを得たのか？」

「それは……………」

「平和とか言ってそれで誰かを傷付けたら意味が無いだろ……………本
気で守る気があるのか？人間ごときが地上を？是非ともその物語が
載っている本屋を紹介して欲しいものだ」

「此処で殺したら意味が無い…恐らくレジアスは黒幕と繋がりがあ
る……………殺したらずぐバれて水の泡なんだ……………我慢しろ……………！！！！！！」

「貴様の様な小僧に何が分る！！」

「大人は二言目にはソレだ……………コレだから大人はワンパターンで困
る」

「貴様！！」

「まだまだ言ってる。自らを犠牲にして守る英雄気取りもいい加

滅にしろ……それに、悪魔がまともな交渉する訳無いだろうが……
貴様のやった事はただの自滅だ」
「それがどうしたと言っただの……！ リスクのないものなどおこがましい……！ 真の平和は正義は犠牲の先に……！」

プチン

……もう良いよね？ もういいや……うん
レジアスの胸倉を『右手』で掴んで、思いつ切り引っ張り、鼻に頭
突きを喰らわした。

「ガッ！！」
「さつきからセイギセイギセイギセイギ……！ そんなにセイギが
いいの！？」

殺気を全開にして睨む……！ コレでも前の世界では世界の人口の
四分の一を殺した事のあるんだ……！ たかが数十年生きた人間が

ふざけた事を……

「そんなもので守れるんなら苦労なんかない！セイギなんてものは所詮言葉！幻想！夢！悪の反語！本当に意味何て無い……要は言つたもの勝ちの言葉にすぎない！！」

よく耐えた、良く耐えた私！！三回も聞いて殺さなかった！！良く出来た私！！だからご褒美いいよね！？じゃあ………

「……本当にしたかった事は何？戦力を増やす事？セイギの名の元に悪を裁く事？」

アリアとロツテに猫になって貰って撫で回そう……

「僕は……世界に真の平和を作りたかった……だが人には限界がある……だから人以上の力を求めて……道を踏み外した……」

「確かに……一人で世界は守れない、ソレが現実……でも結局、それは奪うだけの力……」

「そうだな……気付くのが遅すぎた……それで「あゝ実は少し違う」何？」

俺は胸倉を掴んでいた右手を離して後ろにいる奴に念話で伝えた。

「もう良いぞ」

頷くと、被っていたフードを取った……

「お……お前は!？」

「お久しぶりです……レジアス中将」

クイントだった……本当は中継するつもりだったけど、予想以上の回復力で全快した……まだデバイス出来て無いのに……まあ、10人前を超える食事を余裕で完食してたらずぐ治るな。

「重傷だったのを保護したんだ……その時ゼストとメガーヌの姿だけの無かったそれに同時刻にメガーヌの娘が引き取られた……も

しかしたらずエスト達は死んでいない可能性はあるな」

「生きている……二人が……」

「全く……人間と言うのは良く分らないな……力を欲すれば力を忌み嫌う、たった一人で出来る事は少ないのに欲張る……今まで沢山見て来たけど人間のここが一番分らない」

本当によく分らないよ……人間って。

「そうだな……たかが一人出来る事は少ない……まさか子供に説教されるとはな……」

レジアスは申し訳なさそうに肩を落とす……

「じゃあ、今度は複数人でやってみるか？」

「何だと？」

「だから、一人では出来ないのなら人数を増やしてやればいいだろ？」

なに当然な事を……

「さっきの口振りからてつきり管理局を潰すのかと……」

「確かに……裏でやっている事を知った時は潰したくなった……だけれどそれでは面白くない。面白いと思つた事をしている」

「面白いだと？……それだけか？」

「当然」

それが俺が動く理由……全部自分の為、他人がどうなるうが関係ないし

「……ハハハハハハハハハハッ！！これまた凄い理由だ！！」

突然、レジアスが豪快に笑い飛ばした……何事？

「あ、あの……キャラ違いますか？」

クイントも若干引いてる……

「アレは演技だ」

「ひどくぶつちやけましたね」

「娘には『凄いのは顔だけだ』と言われてな……正直四六時中は肩が凝る」

あ……眉間の皺が無くなっている……確かにコレが素なら信頼も厚いな。

「さて、ベアトリスよ……儂にこんな話をしたと言う事は儂にも協力させる気だな？」

「正解、話が速くて助かる」

「自分のケツは自分で拭くさ」

「じゃあ早速……このまま行動してくれ」

「は？」

レジアスが間抜けな声を上げる。

「つまり何事もなかったようにそのままやってくれ。ただし、条件を二つ追加する……一つは『俺のタイミングで全面的にコツチ側になる事』二つ目は『俺がそつち側に有益な情報を渡すからそつちも情報を俺達側に渡してくる事』の二つだ」

「それを聞くにそつちはかなり不利じゃないか？」

「不利？違うな……俺は世界とか人々を救う使者では無いからな……」

「……」

死者ではあるが……

「俺は……悪党だ」

さてと……どうなるか楽しみだ

くオマケく

コダイの後ろに居たクイントは見た……

「だが現状は違った！！人手不足！海との戦力差！増加する犯罪！衰退する地上本部！地上を守るには……正義示すには必要な犠牲だ

「つたんだ！！その為になら悪魔に魂を売ってでもだ！！！」
レジアスが話している最中……
「……………」

メキグシャ！！ボキバキッ！！グチブチッ！！

背中で自分の左手を容赦なく握りつぶしているコダイを……………
コダイの地雷を踏んだ人間がどうなるか……………良くて星になる……………
悪くて根も葉もない噂に掛けられ社会的に殺される……………そう聞か
されている。

「（レジアス中将……………せめて骨は残っていてください）」
そう内心震えていたクイントだった……………

悪党は全てを敵に回し、全てを味方にするboyコダイ（後書き）

メガネ「レジアスをキャラ崩壊！！やってみたかった！！good good
だが気にしない！！」

レイ「ふにゆ？コダイは？」

メガネ「今、猫姉妹をモフモフしている」

レイ「そっかあゝ」

メガネ「ぶつちやけなのはの世界って完全な悪って少ないからね…
∴コダイは完璧『悪』の部類ね、やる事は自分の為とか強くなる為
とかムカついたとかだけだし∴それ以外だと巻き込まれたとか位だ
から」

レイ「でもレジアスって人良く生きていたね」（ガクガクブルブル）

メガネ「正直マジで殺されるんじゃないかと思った……………」

〜5分後〜

メガネ「何故……」 or z (某幻想郷の薬師のコス)

コダイ「女装はオシャレ」(フィリアの服)

レイ「キュっとしてどか〜ん」(幻想郷の吸血鬼の妹のコス)

メガネ「次回は中学に……の前に主人公設定と行きたいと思いま
す!」

レイ「わ〜い」

コダイ「A・sから三年位経っているからそろそろ必要だな」

レイ「皆様の意見や感想などイロイロ待っています!」

〜次回もお楽しみにしてください!〜

Criminal編主人公設定(前書き)

挿絵はRain様にもらいました。ありがとうございます!!

Criminal編主人公設定

中学1年時です

名前 ときがわ 時代 こだい 古代 トキガワ 本編ではカタカナで表記
コダイ・T・ベアトリス（これはミッドにいる時）

性別 男の娘（え？ダメ？じゃあ一応男）

妄想C.V. 柚木涼香（武装錬金の津村 斗貴子をイメージ）

年齢 12歳

身長 なのは達よりかなり低い（なのは達が成長期に来た為か？）

体重 なのは達よりかなり軽い（多分女の子でも持てる位）

好き 料理、動物、面白い事

嫌い 正義、過去話、面白く無い事

特技 料理、声帯模写、瞬間記憶、完全記憶 e t c .

趣味 家事全般（料理の腕は桃子やはやて以上）

容姿

黒髪膝までの超ロングで前髪で殆ど顔を隠して、青い目（ハイライ

ト無し)が特徴。

端正な…と言うよりぶっちゃんけ美女。肌は白く細い体格。髪型、学校では二つ縛り、普段は基本ストリートだが服装によって変わる。

身長も殆ど変わっていないのに更に色気が増している…

性格

良く言えば天然ドS。女子供容赦なしの性格。

無表情だが、面白そうと言う理由で桃子や忍と結託したりする。

性格を除けば完璧超人、だが天然で直球の言動で羞恥心がほとんど無い故にあり得ない位フラグビルダーである。

女装はオシヤレとしか思っていない。

『正義』という言葉を聞くとキレて、口調が中性的になる(コダイ曰くコレが本来の口調)

前の世界の出来事の所為か人を殺すのを当たり前のことだと思っている……

レアスキル
稀少能力

チューニング
同調

一度見た魔力光なら完全に変える事ができる、魔導師が持つてる魔力変換資質もその魔導師の魔力光に変えれば扱うことができる。

稀少能力は魔力と関係ないので使用できない。

自分より魔力量が多い魔導師に変えても魔力量はコダイに依存する。また、魔力光を完全に変える事が出来るので、人のデバイスを起動させる事が出来る。

コダイの魔力光が虹色の理由はこの同調によるもので、周囲の魔力素に反応して変色してる。本来の魔力光は不明。

特異体質

ファンタム・ペイン
『幻痛』

魔法を強制的に殺傷設定で受けてしまう体質。

『不死体質』

どんな事があっても死ねない体質。不死身というより、死〃気絶程度になる。

再生力は普通の人間並み。

コダイの前の世界にあった能力。

『想像を創造する能力』

コダイの前の世界で使っていた能力。

詳しい事は『トキノツキト』に載っている…

名前の通りイメージさえしっかり出来ていれば何でも出来る能力。

ただし、コダイは重傷にならないと発動出来ない様になっている…

コダイ「まあ……………あんまり変わらん……………」

メガネ「むしろ急成長したら引く……………」

コダイ「12つて言ったら成長期なのに何でだろう……………」

メガネ「心配するな、ぶつちやけるとs t sでスバルよりほんの少し大きいだけだ」

コダイ「まあいいか…」

メガネ「安心するのはまだ早い！！今回は挿絵もあるんだ……………」
レがコダイのイメージだ！！」

> i 2 3 6 4 1 — 2 2 9 6 <

メガネ「って何でスカート?!!」

コダイ「女装はオシャレだ!!!」

メガネ「埒があかない……………次はレイだ」

レイ「は〜い」

デバイス

名前 レイ・モモ・ブラット（愛称レイ）

声 榊原ゆい

形態 顔も隠れる全身甲冑（イメージはWA2のナイトブレイザーのスカート無し）

待機 右手首のジュエルシードを中心に右肘まで金の鳶が伸びてる

性格 舌足らず 幼女 天然

魔力光 虹色（レアスキルの所為で変色していて、本来の魔力光は純白）

魔導師ランク S

使用魔法体系 ベアトリス式

機能

『バーニア』
背中と脚から魔力を噴射して空を飛ぶ機能。小回りやスピード微調整に優れているが、魔力の燃費がとてつもなく悪い。

『リコール』
破壊された装甲を再構成する機能。けど破損具合によってかなりの魔力を使うが、完全に修復が可能。

『シーリング』
ロストロギアを封印して回収する能力。普通の封印と違って、特殊な波長を出してロストロギアを吸い寄せるように封印して回収する。

『シード』

対象を情報として検索することが出来るが。検索ワードが正確でない
いと欲しい情報が無かったり余計な情報も入ったりする（用はググ
るって事）

『エクステンド
Extend』

コダイとそのデバイスのレイのシンクロ率が規定以上を越すと、能
力・性能・容量・形状が増える。レイはコダイと疑似神経で、肉体
と融合しているので普通のデバイスと違い強化が出来ないのでこの
形で強化される。

現在のシンクロ率は1700%

『カートリッジシステム』

右腕の装甲の一部がスライドしてロードする。

手動装填式で最大装填数は5発。

『スタイル・レイザー』

超高速戦闘形態。

フェイトのソニックフォームに似ているが、コッチの場合は防御は
一切捨ててる。速さはソニックフォーム以上で、先読みの速さで更
にそれ以上に動ける。

この状態ではカートリッジシステムと『バーニア』は使用不可能。

（イメージは髪型、服装共にT.O.L.O.V.Eの金色の闇）

『エアージュース』

レイザー限定の機能。『バーニア』の代わりでもある。

空飛ぶと言うより、空を走ると言う感じが正しい。

『フルフラット』

装填しているカートリッジを一度に強制的に全てロードする機能。

普通のインテリジェントデバイスにしては思考が幼すぎるデバイス。入手当初は魔法が一切使えなかったが、コダイ達が開発した『ベアトリス式』のみ魔法が使えるようになった。

機能とはデバイスに備わっている物で魔力を使って使用するが、かなり燃費が悪いらしい。

性格は無印同様、放っておくとコダイとポケ合戦を始める。

二度目の『エクステンExtend』により少しだけセリフに漢字が出て来た。闇の書事件の後にリインフォース？（ツヴァイ）が創られた直後にはやてのバカ丸出しの説明によってユニゾンデバイス化した。（イメージはT.O.L.O.V.Eの黒髪青眼の金色の闇のロリバージョン）

メガネ「ベアトリス式はもうちょっとしたら載せます」

コダイ「後忘れているであろう、『祝風の書』についてもまだ使っていないから紹介出来ない……」

メガネ「Criminal編は普通より短めです、その後にもう一つオリジナルを入れてsts編に行きます……こうでもしないと伏線が」

コダイ「まあ……普通にやるさ」

メガネ「（コイツの普通は碌でもないからな）」

Criminal編主人公設定（後書き）

メガネ「主人公設定！！Rain様挿絵ありがとうございます！！」

コダイ「今回は短め」

レイ「早速感謝コナ」 龍賀様、ARFIN様、ながもく様、山義 芳原様、スペリオルス様、感想をありがとうございます！！」

メガネ「龍賀様からは東方の嫉妬姫パルシイの服をレイちゃんに！そして某猫又（橙）の服をコダイに！メガネ様に九尾の狐（藍）の服を、スペリオルス様からは糖分控えめのレアチーズケーキと『ハリー・ポッター』のハーマイオニーら女学生が着ていた衣装を貰いましたありがとうございます、それと……ん？」

ヒヨオオオオオオオオオオオオオオ！！

メガネ「くあせdrfgtひゅじじip:@w」（何かに潰される）

コダイ「何だ？」（橙のコス）

レイ「えつと……メガネ様達へだって」（パルシイのコス）

コダイ「………あ、輸送機………C-130だ」（もう遠くに飛んでいて、此処からでは米粒にしか見えません）

レイ「えっと……ゆっくり人形とプーアル茶、C4爆薬にカップ麺に」

コダイ「リポビタミンD十本入り箱、五十箱か……」

メガネ「最後に山義 芳原様……ありがとうございます……ガクッ」

コダイ「レイ、先に進めろ」（メガネに藍のコスを着させる）

レイ「皆様の意見や感想など色々待っています……！」

メガネ「ちええええええええええええええええええええええん……！」

「次回もお楽しみにしてください……！」

最高才に飛んじまったぞクソ野郎！！byコダイ（前書き）

コダイ達が中学生になりました。

そして転生モノで良くあるアレをやってみたいと思います。

まあ、コダイのチートを再確認する自分のリハビリの様なものです。
（負けっぱなしだし）

要するにsad sad覚悟です！！

最高才に飛んじまったぞクソ野郎！！byコダイ

アレから、俺が暗躍している間に色々あった。なのはとフェイトとアリシアがSランク試験を合格したりとか。はやてが上級キャリア試験に合格とか……………

小学校を卒業して、春休みを順調に過ごしていたが……………

）

「誰だ？」

入学式前日、もうすでに準備は終わった所で携帯が鳴った。

「誰「は」い コダイ君、久しぶりの女神さ」只今電話に出る事が出来ません。ピーっとなってもメッセージを入れないください」
電話を切る……………

）

……………出るまで掛けそうだな。近所迷惑も良い所だ……………

「で、用件は何だ？」

電源を切る手段もあったがあの女神だから家に押し掛ける可能性が高いので諦めた。

「実はそつちの世界に転生者が送られたのよ」

「それがどうした……」

「君って本当にブレないわね……理由を説明するから聞いて」

「……聞くだけなら」

「えつとね。君ってさ、前の世界じゃとんでもない極悪人だったでしょ？そしたら周りの頭の固い神が『極悪人を転生させるとは何事か！』って怒ってさ、その神達が君を消すためにあらゆる手を尽くしたけど、君の中にあるバグが上手い具合に働いて回避出来たのよ。『コレでは埒が明かない』と言う事で正しい心を持ったチート転生者を送ったのよ」

「何処にも面倒臭い奴はいるモノだな……」

「でしょ〜！」

「で……そいつは俺の好きにしているのか？」

「能力は聞かないの？……って君はアニメとかゲームとか知らないんだっけ」

「聞かない方が面白そうだからな……それで質問の答えは？」

「ん〜本当はダメだけど……あの神嫌ツジイいだからおk！！誤魔化すよ！〜！」

良い事聞いた

「それとだな……その神共の顔と名前を送れるか？」

「良いけど……何に使うつもり？」

「面白い事に」

さて……どうなるか……

翌日、何時もの六人娘と私立聖祥大附属中学校へと登校していた…

「今日から中学生なの」

「何か…実感湧かないね」

「ついこの前まで小学生だったしね」

「まあこの面子やと実感が湧かへんな…制服以外」

なのは達の制服は小学生の白を基調とした制服から一辺。茶色のブレザーに濃い茶色のスカートに赤いリボンだ。

「て言うかまたアンタは制服着ないのね…」

「ん？」

「今日ぐらいはちゃんと着た方が良いと思うよ？」

「男物は似合わないからな」

今の俺の服は、なのは達と同じ濃い茶色のズボンにブラウス（Yシャツは寝巻の為）にブレザーと同じ色のカーディガンを着ている。「先生に怒られるで？」

「そんなに着て欲しかったら『女子制服』を着てやる……女装はオシヤレだ」

「か、変わらんな」

はやてが引きつつている……

「あ……」

「どうしたの？コダイ君？」

なのはが首を傾げた。

「……………忘れ物をした」

「……………はあ……………」

溜息をつかれた……

「速く取りに行きなさい。時間もまだあるし……」

「アリサ達は先に行ってくれ。この距離なら全力で走れば間に合うから」

そう言っつて、先に行かせるように促せた……

「さて………も〜い〜よ〜」

皆の姿が見えなくなった頃、そう上に向かって言つと一瞬にして境界が張られた……

「お前が、神の言っていた転生者か……」

「貴様が女神の言っていた後輩か」

後ろを振り返ると、銀色の髪の大体なのは達と同じ位の少年だった。

一瞬で確信した……………コイツ、俺の一番キライな奴だ。

「一応……………何の用だと聞いておくか」

「何を言ってるやがる！！お前は沢山の人間を殺したんだ、なのに何で転生何かしているんだよ！！」

「人を殺したら転生出来ないってルールは無いだろ？第一悪いのは俺の目の前にいたのが悪い」

人を殺して何が悪い？

「自分は悪く無いって思っているのか？」

「当然」

人を殺すのは、俺にしては呼吸と同じだから……………別にしなくても良いけど、した方が良いという感じだな。

「チツ……………最低の屑野郎だな……………コレを見る！！」

少年が出したのは大きなモニター……………そこには俺について書かれていた。

「トキガワコダイ。享年約19歳……………罪状は大量殺人、詐欺、拷問……………数え切れない程の悪事をして、更にはこの世界でも同じ事をしている……………何が目的だ！！」

「自分のやりたい事をしているだけだ、世界だろうが他人だろうが

や無いだろ……ただ『より力を手にれる為』とかだろ？ただやり過ぎなだけで。

「……………今ので確信した……………お前はここで消す！！お前が居るとなのは達が不幸になる！！」

「どうでもいい……………さっさとここから出せ」

「クソツ……………お前みたいな奴を此処で生かす訳にはいかない……………！！！！」

一瞬にして相手が消えた……………後ろか。

「何ッ！？」

しゃがむと相手が何時のまにか出した剣が頭上を通り過ぎた。取り敢えず腕を掴み適当に放り投げた。

「クソツ！！」

だがすぐ体勢を立て直した。

「……………消すと吐くだけあってやるものだな」

「当たり前だ……………ただチート能力を得たって使いこなさなければ意

味がない……神に頼んで何万年も修行して来たんだ!!」
今度は白と黒の双剣を出して向かって来た。
「ハアツ!!」

ヒュンヒュンヒュンヒュンヒュン!!

速さも重さも申し分ない……的確に急所を狙っている……体術との
組み合わせも良い……それに振りに迷いが無い……だがソレ
だけだな。

ガツ!!

よそ見のをして、意識をそっちに寄せた後、横に移動して足を掛け
転ばせた。

「どうしたんだ？何万年も修行してきたチート（笑）君？」
顔を踏みつけながら見下す。

「コノ……舐めるなアツ!!」

相手は地面から何かをかき集めて創った剣を俺に突き放った…

「よつと、危ない」

脚を頭から離して避ける。

何だあの黒い剣は……地面からかき集めていたようだし……こ
こはアスファルトだ、考えられるのは……

「その剣……砂鉄か？」

「それを知って何になる!!喰らえ」

黒い剣が鞭のようにしなり襲い掛かる……

を取る。

「今度はコツチの番だ!!」

アイツは足元の石を蹴る……

ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!

軽く蹴られたはずの意志は物凄い速度で俺の横を掠めた……

「今のは……電気では無いな」

「ああ……後こんな事も出来るぜ?」

アイツは傍にあった電柱を掴む、掴んだ指が電柱にめり込み持ち上げる。

「ラアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」
「!!」

ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!

それを俺に向かって投げて来た。電気を発せさせる能力では無い……
……怪力と言う訳じゃない…… それよりも石の飛び方と電柱の持ち
上がり方が不自然だ、まるで自分から動いた…… 『動いた
?』…… 成程。

「そう言う事か」

飛んでくる電柱の下をくぐりアイツに向かって拳を振りかぶる。

「……」

アイツは微動だにしない…… やっぱりか。なら問題ない……

拳は真っ直ぐ……

ゴシャー!!

アイツの顔に突き刺さった。

「グハアツ!!!」

そんなに力も入れて無いのに数メートルも吹き飛んだ。

「なっ!? 反射が効いて無い!?」

「どうした? 今はどっちの番だ?」

ゴスツ!!

「ガアツ!!!」

ドスツ!!

「ゴハアツ!!!」

バキヤアツ!!!

「グハアツ!!!」

再び顔面を殴り、よろけた所に鳩尾を殴る、体がくの字に折れた所

で顎を拳でかち上げる。

「どうやら今度はエネルギーの方向性の操作……つまり『ベクトル変換』だったみたいだな。さっきの攻撃を弾いたのは反射か？」

「お前……一体何の能力を」

「能力？そんなモノ貴様に使うと必要が無い。向かってくるベクトルの向きを反対に変える……なら話は簡単だ、直撃の寸前に拳を引き戻せばいい、寸止めの要領だ」

アイツの元へゆっくりと近づく……

「引き戻す事に『反射』が作用して拳を引き寄せる。つまり貴様は自分から殴られに言っている様なものだ。分ったか？マゾヒスト君

┌

顔を何度も踏みつける、勿論直前に引き戻している。

「残念だったな。ご自慢の能力は悉く潰されてる、あの剣を出す能力も使っても良いが俺は剣同士の戦いなら負けた事は無いからな？」
あの双剣の攻撃も目と耳を隠しても十分に避けれる……

「どうしたんだよマゾ太君？俺を消すのだから？こんな所で地面のシミになってどうするんだ？まあ貴様にはお似合いだろうがな」

顔から脚を離す。

「さてと……これからどうするか……」

結界破壊の魔法は今だ出来ていないし……不便だからこの際創るか？いや、やめておこう……今は実戦に投下出来るように攻撃魔法を徹底しないと……

「まだ……だ」

か？それにしてもアレはもはや上位の雷の精霊だろ。

「……………いくぞ」

マゾ太君（確定）がそう呟くと姿を消した……………気配がない何処だ？しかも何かヤバい空気だな……………今にも雷が落ちてきそうだ。

バチッ！！

「……………ッ」

直後、右腕が痺れる感覚が……………ヤバい！！

ゴウッ！！

前に転ぶと同時に右からマゾ太君が襲い掛かるの何とかかわした。

「速い……………え？」

目視できたのは一瞬……………すぐに消えた……………

「何処だ？……………ッ」

また痺れる感覚今度は背中か。

ゴウッ！！

再び前に転びかわす。

「全く……………攻撃の瞬間の気配でかわせるのがやっとな……………何だそれ」

「雷化だ！！」

今度は左か。

ゴウッー！

銃弾なら避けられるけど雷は完璧に勘で避けただけだ……雷化とか言っていたな……打撃とかは直前にかわされるはず……ッ……今度は上か。

ドオオオオオオオンー！！

さすがの俺でも雷は知覚できないぞ、プレシアの時も完全に勘で動いていたし……ってそれとはまた別か……

パリッ！

「……ッ」

またこれか……何だコレは？季節外れの静電気か？まあ……雷の塊と戦っているから電気も溜まる……雷？……そうか、雷なんだ。

「今度こそ終わりだー！！」

また消えた……ッ……そこか。

俺は『ある位置』に向かって拳を振りだす……すると……

ゴシヤッ！……！

「な……………」

拳はマゾ太君の腹部にめり込んだ。

「ガフツ！！…………クソツ」

血を吐きまた消える……………今度は後ろに回り込むか。

「遅い」

「何ツ?!」

ドカアツ！！！！

今度は蹴り飛ばす。

「まだだ！！」

また消える……………そこか。

ガツ！！

マゾ太君の拳を片手で防ぐ。

「ちっ……………ならば」

また姿が消える今度は俺の周りを光の如く動き回る……………

パリッ

……………やっぱりか。

どんなチートかと思えばただ能力をプラスしただけかよ……………

「……………何だよ！！何でそんな力あるのに自分の為にしか使わないんだ！！」

は？……………コイツついに壊れたか？

「自分の力を自分の為に使って何が悪い」

「ソレが管理局や犯罪者に利用されてもか」

「その時はその時だ、仕方ないで済ます」

もう、使われているかもな？

「どうでもいいからさ、速くこの結界を消してくれないか？もう負けは決まっているんだ」

「俺は……………お前を必ず殺す！お前のやっている事はイレギュラーを発生させて更に大きな争いが起こるんだぞ！！」

「あのな……………この世に人間が居る限り争いは日常茶飯事だぞ？それをどうしる言うんだ？」

「そんな事は無い！話し合えば必ず争いは回避できる！！」

「はあ何だよそのテンプレートなセリフ……………英雄気取りはテレビでやれ。それならまだイタイ奴で済む」

「ふざけるな！！ヒーローって言うのはな！！自分を省みず誰かを助ける存在何だよ！！そこに見返りも正義も無い……………自分の『守りたい』と『助きたい』という信念なんだよ！！」

ゴシヤツ！！！！

「ガハツ！！！！」

次の瞬間、俺はマゾ太君の首を掴み壁に全力で押しつけた……………

「今ので確信した……………貴様は最低の屑野郎だ」

壁から離し、もう一度全力で屑野郎を叩き付ける。

「ゴハアツ！！！！」

学校へ着くと、屑を食った時の返り血で六人娘が大騒ぎして、保健室に引き込まれた。

くオマケく

その夜…

「コダイ君…」

女神からまた電話が来た。

「君が送ってくれた情報を見ずに最高神に渡したら転生者を送った神達が速攻で地獄送りになっただけど……………」

「良かったな？これでもう転生者はこないだろう」

あんなマズイものを食いたくもないし…

「よく、そんな情報引き出せたね…」

「俺は顔と名前が分れば大抵の情報は引き出せる」

女神の乾いた笑いが聞こえた……………

最高才に飛んじまったぞクソ野郎！！byコダイ（後書き）

メガネ「えっとコダイのチートは良くあるチートとかじゃなくて、ネギまのラカンの様な素手の方が強いと言っ感じに仕上がりましたか？」

コダイ「聞いてどうする……」

メガネ「だって心配だから」

コダイ「そうか……俺には関係ないから良いか……レイ」

メガネ「酷っ!?!」

レイ「感謝コ〜ナ〜、Rain様、響様、スペリオルス様、感想をありがとうございます!!」

コダイ「あと作者……何か言う事はあるよな？」

メガネ「Rain様。挿絵挿入をミスって申し訳ありませんでした！……」

コダイ「ホントだな………で、本編に出てた転生者ってどの位強い？」

メガネ「まあ良くある魔力EXでアニメ、ゲーム、ラノベなどで見た事ある能力を使えるって奴。かなり良い奴だけだね」

コダイ「そうなのか？かなり弱かったけど」

メガネ「それはお前が悉く能力を潰していたから力を発揮できなかったんだよ……」

コダイ「結局は雑魚か……」

メガネ「ひでえ……」

レイ「皆様からの意見や感想などイロイロ待っています!!」

く次回もお楽しみにしてくださいく

ここから先はR指定だ……おもにグロでb yコダイ(前書き)

更に原作崩壊……コダイでもストレスは溜まります。

コダイは囑託魔導師ですが『新代の魔導師』してなのは達エース同様に有名です。(黒い噂も含め)

「ここから先はR指定だ……おもにグロでboyコダイ

来る日も来る日も違法研究所の破壊……それだけならまだいい、
だけど。

「き、貴様！一体何をやっているのか分っているのか！？この研
究所は管理局の物だぞ！！」

「ん？うん」

怒鳴って来た局員に即答する。ちなみに顔が分らない様にいつもと
は違うコートを着ている。(KHの？機関の着ているコート)

「良い事をしているのを邪魔するのが仕事だ。さて、もうここは仲
間が困んだ…逃げられないぞ」

「こんな事をしてどうなるか分っていない様だな……いずれ貴様ら
は管理局に追われるのだ」

「へえ……所で、アレは何だ？」

俺が指を指す……そこには子供の死体が山になって放置された。

「アレはただの失敗作だ」

「失敗作ね……もう少し弔い方を学んだらどうだ？」

「ふん、管理局の役にも立たない屑を弔ってどうする……」

「流星管理局、言う事が違うな……」

「当たり前だ！管理局は正義の組織だ、役に立たないなど悪も同然
！……まあ……正義の為の実験になったんだ、子供達も幸せ
だろう？」

……

「……クロノ、ここはもうダメだ即破壊する」

モニターに居るクロノに報告する。

「分った、皆にも伝えとく」

モニターが消える。

「…………… 皮肉だな…………… 屑の方が味がしつかりしている」

そう言つて最後の骨を噛み砕き研究所を後にした……………

仕事を終えて地上本部、クロノとアインと歩いていた…

「クロノ、管理局潰している？」

「氷像になりたければやつても良いが？」

「…………… 流石の俺も一回死ぬから止めとく」

「主コダイ…………… コレで4回目ですよ？」

「最初に僕は『今現在進行形でやっているだろう』と突っ込みを入れたな」

「最近の主はストレスが溜まりがちですね」

「あんな腐つた連中の相手をしていればな…………… コダイはそんな事気にしないと思つたが……………」

「恐らく…………… その人たちが地雷を踏んだと……………」

「アレか……………」

「この前もその地雷でテレビに砲撃を放ちましたし……………」

「筋金入りだな……………」

クロノとアインが何か話しているけど無視だ……………

それが管理局の正義だと言っんですか!!

すぐ近くの扉から声が……よし

「見敵全殺……ジェノサイドオオオ」「バインドオツ!!」「な
っ」

集束砲撃を撃とうとしたらクロノとアインに止められた。

「落ち着けコダイアレはお前には言って無い。言って無いからな？」

「だからそのチャージしないでください!!それと後ろに防衛プロ
グラムが!!」

折角完成したんだ……イマツカワナイドイツツカウ?

バインドを力づくで壊し扉に向かう……

「取り敢えず死体けって「失礼しました!!」って……うわぁっ!?!
え?」

ゴン

「うきゅっ……」

飛び掛かった体勢だったからそのまま頭どっしがぶつかりそのまま
意識を失った……

「本当に済みませんでした!!」

場所が変わって食堂……俺の目の前にはさっきぶつかった男性局員が……

「いや、貴方の行動は世界を救った」

「本当にありがとうございます」

「え?え!?!」

クロノとアインはその局員の手を取ってなんか言ってるし………相手戸惑っているだろう。

「その辺にしとけ……もれなく固まっているぞ?」

「誰の所為だと思っている(んですか)!?!」

「俺だろ?」

あ……orzになった……

「えっと……君は」

「ん?ああ……コダイ・T・ベアトリスだ」

「コダイ・T・ベアトリス!?ミッド、ベルカに次ぐ第三の魔法体系を創ったあの新代の魔導師ですか!?!」

「まあ、その通りだ。で、そっちは?」

「はい。ティーダ・ランスター一等空尉です」

「ティーダね……では、早速効きたい事があるんだが……さっき何を口論していたんだ?」

「え?……ああ……あそこにいたって事は聞こえてましたよね。じつは相談があるんですが………」

「……………成程、確かにそれは妙だな」

ティードが口論していたのは、上司が不正を行っていた事についてだ……………

「実験に身寄りのない子供が使われている……………それを『管理局の未来の為だ』って言ってましたけど納得出来ません……………確かに近年犯罪は増える一方で、より強固にするのも頷けますが、それを子供の未来を奪ってまでする事でしょうか」

「確かに……………人造魔導師よりもコストは遥かに抑えられるがその分リスクが跳ね上がる……………普通に出来る様な実験では無い……………間違いないく局が絡んでるな」

そうなるにあの研究所の元締めはその上司か……………

「ベアトリスさんの噂……………特に黒い部分は良く耳にします。何でも顔と名前が分れば分らない情報でも手に入れられるという噂を……………

「それ事実」え?!」

ティードの顔が『?』(っ。っ)っ』になっていた……………

「まあ正確にはどんな情報もだけだな?」

「あ…あはははっ」

「そいつの事はこちらで独自に調べて見る……………幸いに地上にも強い繋がりがああるから……………」

「本当ですか!?あ、もし必要とあれば俺にも手伝わせてください……………!」

いや、こっちで独自にやるって……………ん?視界の端に奇妙な行動をしている局員が……………

「クロノ、アイン……………いまの局員って……………」

「恐らく、ランスター一等空尉が言っていた上司の……………」

「となると、このままでは彼が危険ですね……………」

「クロノは今の事をレジアスに報告、アインはグレラムにだ。他……………」

にも研究所があるかも知れないから徹底的に探させる」
二人に念話で伝えた……

「あの……どうかしたんですか？」

「ん？いや、それよりもこの後大丈夫か？」

「え？はい……大丈夫です」

「それなら、さっきの詫びを兼ねてだが……実は飲み屋のクーポンが今日限りなんだ、俺以外に今暇な奴はいないらしいから……一緒に行かないか？」

「良いんですか？」

「勿論、まあ男二人だけと言うのは勘弁してくれ」

「はい……… って男おおおおおおおおっ！？」

うん、このリアクション久しぶりだ……

夜……… 首都ラグナガン

「今日はごちそうさまです」

「いや、こつちもクーポンが消費出来て助かった……」

はじめの頃は一歩引いていたが、飲み屋で話に盛り上がって、いつの間にか普通に話していた、ついでに敬語も無くしてくれれば……

「いや、それでもホント不思議ですね……… まさかあの有名な『新代の魔導師』にごちそうになるなんて……」

「俺ってそんなに有名？」

「色んな意味で有名です」

「はしゃぎ過ぎたか……自重しようか……いや、それだったら俺じゃない。」

「目立つのは嫌いなんだけど……」

「いや、上司を問答無用で半殺しにしたりする人が言えないと思います……」

「仕方ないか……ん？来たか。」

「ティーダ、構えろ」

「え？……っ！」

次の瞬間、結界が覆われ、それと同時に魔導師が数人現れた……局員では無いとすると、雇われた犯罪者か……

「何だお前たちは！！」

「話す必要は無い……今日ここで貴様には死んで貰う……」

魔導師達がデバイスを構えた。

「うわ……聞きそうで聞かない犯罪者の常套句」

「いや、のんきに言っている場合ですか！？」

「修羅場はもう慣れたから」

「すっごい嫌な慣れですね……」

死にかけない日は無かったな。

「そんなに話してて良いの「うるさい黙っている」何っ！？」

ガンブレイズ

極小の魔力弾の弾幕が魔導師を数人飲み込んだ……まだ結構いるな。

「ティーダ、こいつらは間違いなく俺達を殺す気だ。気を抜くな」

「はい！」

ティーダもデバイスを構えて戦闘体勢に入っていた……

数日後……

例の一室でニュースを見ると。ティードが死んだ事が公表された……

「うわぁ……」

と一人の男が声を漏らす。

「どうした？」

「いや、何か微妙な気分ですね……」

「仕方ないだろ？こうでもしないと何をするか分らないから……」

用心だよ、ティード」

あの後、魔導師を倒した後に色々事情を話したら協力してくれる事になった……犯罪者と交戦して、クイント同様に死んだ事とした。襲って来た魔導師はクロノが呼んだ部隊に引き取ってもらった。

「そうですね……もしあのまま生きていたら妹にも被害が及ぶかもしれない……けどびっくりしましたよ。いきなり『ティード、死んでみるか？』って……」

「いや……手短かに話そうと思ったらそうだった……」

「意外と天然なんですね」

「そうなのか？」

あ、溜息つかれた……

「それと、ティードの妹の様子はティードの葬儀のついでにクロノと見に行く」

その他についてはレジアスが色々してくれた……流石中将。

「ありがとうございます」
さて……………準備するか。

葬儀は地球とあんまり変わらなかった……

生きている奴の葬儀に参加して……………何か変な感じだな。

「コダイ……………その、元気出せ」

「いや……………ただ驚いただけだから」

葬儀の際にティーダの妹にあっただけ、初対面で……………

あの……………お兄ちゃんの恋人さんですか？

と言われた……………兄を犯罪者にする気か？（年齢と性別的な意味で）

「女顔は知っているし、大人っぽいと言われた事もあるから良いけど恋人って……………正直びっくりだよ」

「口調変わってるぞ？」

ホントだ、最近アレを吐く馬鹿が多くて素になり易くなっている……

……………ある程度殺したり、食ったりで解消していたけど。割に合わない……………

今日はストレス解消の為に沢山料理でも「違う！！お兄ちゃんは無能じゃない！！」……………ん？何だ？

「何を言う、犯罪者を捕えられなかった時点で無能だ。死んでも捕まえるべきだったと言うのに……………」

確かアイツは……………ティーダと言いつ争っていた上司？

「しかも犯人を他の部隊に取られるとは……面汚しめが」
「いやいや、捕まったんだから別に良いだろう……」

「……自分の保身しか考えない馬鹿は何処にでもいるモノだな」

「……問題は起こすなよ？」

「分っている……少し話すだけだ」

俺はあの上司の元へ向かう……

「子供相手に言い過ぎじゃないか？」

「何だと？」

男が俺を睨む……

「アイツの知り合いか……」

「一応……それよりも遺族を更に泣かせてどうするんだ……貴様はアレか？馬鹿なのか？」

「フン、流石無能の知り合いだけあって礼儀がなっていないようだな」

「礼儀つて……ああ『ご苦労様でした』……で良いのか？」

「ッ……貴様……！」

ご苦労様は丁寧だが目下に使う言葉だから、気を付けよう。

「第一俺は局員でも無いのに何で貴様見たいな座っているだけの奴に礼儀なんか使わなければいけないんだ？」

「何だと!？」

おお、怒っている。

「ティーダのランクはAAだがランク上でも十分戦える実力もある……それを犯罪者を捕まえられなかっただけで無能呼ばわりは無いだろう……」

「何も知らない子供が……いいか！管理局は正義だ！悪である犯罪者を捕えられない時点で悪以下のもの」

その後はよく覚えて無かった……………かすかに覚えていたのは。

モザイクになっていた男と……………

クロノがデュランダルを起動していたのと。

ティーダの妹が目を回して気絶していた事だけだった……………

次に目を覚ましたのはクロノに氷漬けにされて3日後だった……………

「ここから先はR指定だ……おもにグロでb yコダイ（後書き）」

メガネ「ティアナイイベントでした……ちなみにティアナはこの事をシヨックで忘れていきます。他の人も同様にコダイの殺気で気絶しています」

レイ「何でそうしたの？」

メガネ「その方が後に面白くなるから……」

レイ「へえ」

メガネ「あ、レイ……そろそろ」

レイ「うん！感謝コ〜ナ〜 Rain様、スペリオルス様、ARF IN様、ソラト様、ながも〜様、龍賀様、心の剣様、山義 芳原様、感想をありがとうございます！！」

メガネ「スペリオルス様からは『BLEACH』の主人公・黒崎一護の斬魄刀『天鎖斬月』と檜佐木修兵の斬魄刀『風死』にその中で出てくる高校の制服を、ARF IN様からはセイバリーリーの服を、心の剣様からはカプコンゲームでのヴァンパイアシリーズのリガンのサキユバス風な服レイには、リリスのサキユバス風な服装を、山義 芳原様からはそんな君に欲しいものを願えば五秒以内に時速500光年で飛べ、次元航行& amp ;平行世界を跳ぶ事が出来る大型輸送機による空中輸送で、お荷物を運送してくれるサイコロ（ポピュラー品でお一つ500円の量産品）と鳩麦茶二年分を海路で頂きましたありがとうございます！！」

レイ「ねえねえ！コダイは？」（リリースのサクユバス風）

メガネ「アイツならあそこに……」

（コダイお食事中……）

メガネ「えっと……龍賀様から送られた少佐の死体です……てかマジで食ってる……」

コダイ「……脂は十分に載っているが鉄の味が濃いな……」

メガネ「それは半分機械だからだろ？」

コダイ「でも、前の転生者よりは美味しかった」

メガネ「救えねエな…転生者」

コダイ「所でコレって鎧の意味あるの？」（セイバーリリーの服）

メガネ「何時の間に!？」

レイ「しえなか!？」

ブシャアアアアアアアアアア!（鼻血噴出）

コダイ「あ、レイが気絶した」

メガネ「背中だけでどれだけ威力あるんだよ……」

コダイ「で…今後の予定は？」

メガネ「えっと、criminal編を終わらせたら、番外編の様な暗躍以外の日常編を書こうと思います!!」

コダイ「レイ、最後の締めだ。起きろ」

レイ「えへへしえなか／＼／＼」

コダイ「ダメだなコレは…」

メガネ「えっと……皆様からの意見や感想など色々待っています!!」

コダイ「よし、ショック療法で起こすか」(モリガンのサキュバス風)

メガネ「それはトドメだ!!」

ブシャアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!!

次回もお楽しみにしてください

ついに結成……でも隠蔽しないとboyコダイ(前書き)

少し短め……そしてギャグ……そしてCriminai編は終了
です。

ついに結成……でも隠蔽しないとboyコダイ

「今思っただが………」

クロノの部隊（仮）の執務室での事……今日は特に暗躍が無く殆どのメンバーが此処に居た。（クロノとユーノは仕事のため不在）

「この部隊……名前決めて無い」

「……………え？」「……………」

アイン、サクラ、エル、アンズ、クイント、ティード……そして実体化しているレイが固まった……

「と言っ事で今回はこの舞台の名前を決めようと思っ……意見は

「？」

「はい」

「サクラ」

「今まで決めていなかったんですか？」

「敵は見つけ次第潰していたから名乗る事も無かった……次」

「はい」

「アイン」

「この隊の権利は主が持っているので主が決めた物でいいと思います」

「俺が持っている権利は隊員の権利のみでそこまでは無いから多数決で決める。次」

「ハイ！」

「エル」

「今日の晩御飯は！？」

「天ぷら…蕎麦とご飯もセット……次」

「ウム」

「アンス……」

「姫よ……最近我らの出番が少ない様だが……」

「名前すら出てこないシスコに謝れ……次」

「はい」

「クイント」

「私も一緒にいい？」

「今日は泊まると皆に伝えたからここで作るつもりだ……………次」

「……………はい」

「ティータ」

「天ぷらの具材は何ですか？」

「ごく一般的な具材だ……………変わり種にジンギスカンとか……………次」

「はいッ！」

「レイ……………」

「デザートは何!？」

「翠屋の桃子の新作ケーキ……………サクラ、アイン障壁……………『チューニング』同調」

……………

「……何をやっているんだ？」

「えっと……相変わらずだね」

「クロノ、ユーノおかえり」

数十分後、クロノとユーノがやって来た。

「もう終わったのか？」

「一区切りな」

「僕は徹夜だけど……はあ」

ユーノが溜息を付く……まあ無限書庫はな。

「で……この黒焦げの山は何だ」

クロノが指を指す……そこには黒焦げの山が一つ……

「えっと……あそこから、エル、アンズ、クイント、ティード、レイだが？」

「一体何をした……いや、大体想像つく……」

「流石執務官……」

何をしたかと言つと……

何をしたかと言つと……

レアスキル『チューニング同調』でプレシアの魔力に変える。

ディレイスペルでウェブバインドとスローナイフ・フォートレスシフトを発動

こんがり焼けました

と言っ感じだ……
「さて……そろそろ作るか……」

「部隊の名前？」

「そう、まだ決めていなかったなと」

夕食中、クロノとユーノに当初の目的を話した……

「ああ……そう言えばまだ決まっていなかったね」

「流石に名無しはマズいな……コダイ、塩を取ってくれ」

「はい……で、皆に話したけどあの五人が馬鹿な事を言ったから……挫折した……」

「……で、何時までに決めるんだ？」

「期限は特にないからゆっくりと」あゝ……エル……私のかぼちゃ……
……っではあ……」

また始まった……

「ふふ〜ん レイはまだまだだね……っで、あー……アンズ！ボクのエビ取るな〜！！」

「フン！早い者勝ちだ……ってサクラア……！我のアナゴを……！」

「言いませんでしたか？早い者勝ちだと」

「どつやら王の我が上だと分らせる必要があるな……」（ゴゴゴゴゴゴ）

「ゴゴ……」
「全力全壊で返り討ちです……」（ゴゴゴゴゴゴゴゴ……）
「クソー！エビのカタキだー！！」（ゴゴゴゴゴゴゴゴ……）
「かぼちゃ〜！〜」（ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ……）

………こいつらは………

「い、良いのか？」

「ん……もう問題無い」
もうね………

ゴーン……！！

「………きゅっ」「………」

「ご飯食べている時は静かにね？あと他の人の分は取らないの。ただ自分のあるでしょ？」（ゴオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！）

「クイントが代理をしてくれるから、少し楽になった………」

「な、何故か母さんを思い出してしまった………」

「ん？クイントはリンデイとまでは行かないが同種だぞ？」

「この前もマテリアルズや俺を着せかえ様としたからな………」

「こんな部隊に引つ張り込まれて君も大変だね………」

「ええ……でも慣れましたし……何か騒いでないとこの部隊では無い
と言っか………」

「君も十分染まったね………僕もだけど」

「……あはははははははっ………」

ユーノとティータが乾いた笑いを浮かべている………

「あ…天ぷらが無くなりそうだな。アイン、追加を手伝ってくれ」
「はい、主……………後、蕎麦も無くなりそうですけど…」
「あ…蕎麦は打ち止めでいいよ、ご飯は残しても冷凍できるけど蕎麦は香りが飛ぶから…」
えつとまだあるな……………

「けど…こうしていると本当に私達って日蔭者なの？」
夕食後にくつろいでいるとクイントが突然言い出した。

「ああ…確かに、俺も初めは戸惑いましたよ」
ティータも頷いている……………

「そう言いながら、逃亡ルートも犯罪者染みているよな？」

「あははははははっ……………」

やっている事は犯罪者と変わり無い……………けどコレが最善策だ、時間が掛るがゆっくりを毒を擦りこむように……………覚悟しろよ管理局、俺は完全犯罪は大得意なんだ。

「……………あ」

閃いた……………

「どうしたのですか？主……………」

「部隊名思いついた……………」

うん……これならしっくりくる。

「俺達がやっている事は『闇を更なる闇で葬り去る』事だ……これは簡単に言えば管理局のやっている不正に不正で押し潰す事だ……俺達は『犯罪者』だ……だから自分自身を戒める為にこの部隊の名前は『クリミナルCriminal』だ」

三提督公認の犯罪集団『クリミナル』……この部隊に綺麗な名前は似合わないからな……

くオマケ

「クリミナル……良い名前ね」

名前が決まったので早速ミゼットに報告するが……

「でもく流石にそのままは不味いわよくだって犯罪者だもの」

ピシッ!!

全員が固まった……

その後、話し合いをしたが結局決まる事は無かった……

魔法少女リリカルなのはくある転生者の新たな世界く Crimi

ついに結成……でも隠蔽しないとbyコダイ（後書き）

メガネ「……えっとCriminal編は部隊結成までを描いたストーリーで部隊について詳しい事は次回に描きます……」

コダイ「何か本当にgggdだよなコレって……」

メガネ「自覚してるから……」

コダイ「それと……言う事があるだろ？」

メガネ「えっと……前はあの様な不快なキャラを書いてしまい申し訳ございませんでした……」

コダイ「感想に様々な処刑方法が送られてきたしな……」

メガネ「あの上司はコダイが社会的に抹殺したので許してください……」

コダイ「と言う事で感想だ」

レイ「感謝コナ」 SILVER様、RAIN様、スペリオルス様、真王様、親父様、龍賀様、ヒロアキ141様、ARFIN様、マーボー様、感想をありがとうございます!!」

メガネ「SILVER様からはブレイブルーのラクナの装備一式を、スペリオルス様からは『STAR WARS』のライトセイバー2本（色は青と緑）とダイナマイト（爆発タイミング調整可能なタイマーつき）と劇場版のなのはの私服とフェイトのバリアジャケット

と抹茶味の『ういろう』とひつまぶしを、真王様からは3人分のプリニースーツを、ヒロアキ141様からは次元航行艦に改造した超巨大ドリル戦艦ハラハバキとその同型艦、アマテラス、あら葉巻？、アマテラス？の艦隊とモバイレーツとレンジャーキーとデスノート、龍賀様からは東方の『小傘のコスをした龍斗』と同じく『鶴のコスをしたリオン・マグナス様の所の悠』の写真を、ARFIN様からは生ユツケを頂きましたありがとうございます！！」

レイ「プリニーっす」(プリニースーツを着用)

コダイ「このダイナマイトは良いな……今度ム力つく奴の口に突っ込んで爆発させるか……」

メガネ「なにホラーな事言っているの!？」

コダイ「落ち着け……ユツケでも食べる」

メガネ「それ色々と問題になっている奴だよね?! 比較的安全なひつまぶしを食べようよ!？」

コダイ「ちっ……」

メガネ「(舌打ち!?)」

レイ「皆様の意見や感想などイロイロ待っています!!」

コダイ「まあ……ユツケは俺が何とかするから、ひつまぶしを食べるか……」

メガネ&レイ「いただきます!!」

レイ「うゆゝ手が届かないよ」(ジタバタ)

コダイ「そのプレニースーツを脱げよ」

「次回もお楽しみにしてください」

追加設定『クリミナル』について（前書き）

『クリミナル』のメンバーなどについてです

追加設定『クリミナル』について

クリミナルは管理局の不正や違法実験を非合法な方法で潰す組織で、曰く三提督公認の犯罪組織である。

表向きはクロノの部隊として普通に活動しているが、コダイが殆ど裏で暗躍している。

この組織を知っているのはメンバーを除き、三提督、グレアム提督、リーゼ姉妹、レジアス中将だけである。

犯罪組織なので拘束とか逮捕などの生易しくは無く、ほぼ施設の破壊とか局員の暗殺が基本であり、コダイの場合は独自の情報網で局員などを社会的に抹殺したりしている。

メンバーは以下。ちなみにコードは無い。

コダイ・T・ベアトリス

レイ・モモ・ブラッド

クロノ・ハラオウン

ユート・スクライアー

ラインフォース・?
アイン

サクラ

エル

アンズ

クイント・ナカジマ（表では非公式）

ティード・ランスター（表では非公式）

普段は特殊な認識阻害の魔法が掛けられている執務室が拠点で、そこから色々動いている。

前回クイントが言った様にする事が無い日は執務室でアットホームに過ごしている……

コダイ「短いな……」

メガネ「ああ……こつも簡単に終わるとは」

レイ「何か付けたしたら？」

メガネ「そうだな……アットホームな雰囲気だから……これならどうだ」

基本的なポジション

コダイ、クイント 母親

ティーダ 父親（男の中で一番年上なので自動的）

クロノ、ユーノ 兄

アイン 姉

サクラ、エル、アンズ 妹

レイ 娘

メガネ「つてお前父親は!？」

コダイ「俺は父親つて言うガラでは無いからな」

メガネ「まあ……お前の性格上兄貴分とか父性とかはなさそうだし」

コダイ「不正^{ふせい}はやった事あるのにな」

メガネ「誰が上手い事を言えと!？」

コダイ「それに比べて母性は………うん」

メガネ「無理にボケンな」

コダイ「ボケていない、俺はどんな面白い事を言うか考えていただ

けだ」

メガネ「それをボケているって言うんだ!!」

コダイ「更におまけでクリミナルの基本的なボケと突っ込みの割合だ」

『ボケ』

コダイ、レイ、エル、アンズ、クイント、

『ツツコミ』

クロノ、ユーノ、アイン、サクラ、ティータ

メガネ「おい待てやゴルア!!クロノとユーノは仕事でないのは殆どだから実質ツツコミ役は3人!？」

コダイ「稀に俺もツツコミだ」

メガネ「もうダメだ……この部隊」

コダイ「何を今さら……」

メガネ「orz」

コダイ「次回からは暗躍以外の日常編を予定している」

メガネ「中学校での出来事や管理局での出来事……など基本ほのぼのなパートでお送りします」

コダイ「この中二病の事だから突発的に何を書くか分からないが……」

追加設定『クリミナル』について（後書き）

レイ「以上、クリミナルでした」

コダイ「今回はかなり短いな」

メガネ「ゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイ」（土下座）

コダイ「この馬鹿は放って置いて感想だ」

レイ「感謝ござす」 龍賀様、スペリオルス様、Rain様、なごも〜様、心の剣様、真王様、ARFIN様、感想をありがとうございます！
います！！」

メガネ「龍賀様からはバールのようなものを、スペリオルス様からは『ボンバーマン』シリーズのリモートボムと『恋姫夢想』の関羽雲長の衣装とカステラを、Rain様からリリーのエンゲージスーツを模した服とトーマの第二形態の防護服を模した服とトーマ&リリーの自由借用権を、心の剣様からはチビマリオ化状態（FFのミニマムでも良い）機能のゴルディオンハンマーを、真王様からはデイスガイアのフロン服（天使見習い、墮天使、天使長の三種類）を、ARFIN様からは某子供探偵の変声機と麻酔時計を頂きました
ありがとうございます！！」

コダイ「……………何かリインの様な感じだな」（リリーのエンゲージスーツを模した服）

レイ「お〜！！かっこいい」（トーマの第二形態の防護服）

コダイ「間一髪かわさなかつたら、一回死んでいたぞ」

レイ「うう〜……」

コダイ「カステラあるから、泣きやめ」

レイ「ひっく……コダイ〜」（抱きつく）

コダイ「はいはい」（頭をなでる）

メガネ「……………お母さんだ」

コダイ「速く締めたらどうだ？」

メガネ「えっと……………皆さんの意見や感想など色々待っています!!
後、今回感想をくれた方にはコレを送ります!!」

『コダイ（リリーのエンゲージスーツ着用）がレイ（トーマの第二形態の防護服着用）を膝に乗せてカステラを食べさせている写真』
（どつ見ても母と子）

メガネ「誰だよこのお母さん………なコダイでししね（バールの
ようなものでゴン！！）」ぎゃあああああああああああああ
あああああ！！！！！」

（次回もお楽しみにしてください）

■最近まとも学校行ってる描写無かったよな？b yコダイ（前書き）

コダイの中学ライフです！

特に無いコダイの中学生生活をどうぞー！

最近まとも学校行ってる描写無かったよな？b yコダイ

「ん……………」

午前4時起床……………」

「さて……………」

いつの間にか、実体化して抱きついていているレイの拘束を縄抜けて脱出して、キッチンに向かう……………」今日は何にしようか。

制服（といっても改造）に着替えて、エプロンと髪が落ちない様にポニーテールにして三角錦を被り調理開始。

「えっと……………」朝食下準備と昼食の弁当のおかずはこれで完成」
確か今日は全員出勤だったしな……………」

「さて、そろそろ……………」ああ、もうこんな時間か」

……………

「申し訳ありません!!寝坊してしまいました!!」
扉を豪快に開け、飛び込んで来たのはアインだった。

「主コダイ……今日は何時に起きられました?」

「4時」

「あの……次回からは私が「アイン、弁当のおかずはもう出来ているから」あ、はい……」

譲れないよ?コレは唯一の趣味だから……

「…何か手伝えることはありませんか?」

「じゃあ、弁当のおかずを詰めといて」

「わかりました!」

嬉しそうにおかずを詰めるアイン。一応小分けしているから量を間違える事は無い……あ。

「〜」

「……また俺の弁当に桜でんぷで『LOVE』とかハートマークを描いたら殺すぞ?」

「!!!!!!……イヤ、ナンノコトデシヨウカ?」

ばればれだし、棒読みだし、カタコトだし……

前回それでM・D・O(魔王式ダークネス鬼ごっこ)が勃発した事がある……

M・D・Oとは魔王になったなのは達六人娘と嫉妬に狂った男子達がオニの過酷な鬼ごっこである……ちなみにコダイは全戦全勝である。

あれは思い出したくもない……まさに魔王軍勢。死神や破壊神や殲滅者や暴君や魔女等が特に……

男子軍は怖く無い………けどあの六人は脅威だ。ご丁寧に結界を張って転移したりとかアレは本当にヤバかった。けど最終的には結

界でクロノが駆けつけ拘束、そして説教タイムだ。

クロノの説教は長い……冷たい床に正座、更に脚をバンドで固定、そのまま最低一時間説教をする………それならまだ良し。それがリンディなら………まあいいか。

「おはようございます」

「おはようサクラ……」

次にやって来たのはその名の通り桜色のパジャマを着ているサクラだった。

「相変わらず規則正しいな」

「コダイ様は早く起き過ぎです……もう少し遅くても良いですよ？」

「そしたら手の込んだ物が作れない」

ソレだけは絶対嫌だ、自分だけが食べるならまだしも他人も食べるなら絶対妥協はしない………決して、家事をやってないと落ち着かないとかそういう訳では無い！！

「それはそうとサクラ、あの二人を起こしてくれ」

早くしないと学校に遅れる………

「はい………それではアレを」

サクラが差し出した手に円錐状の頂点に紐が付いた物を手渡した………

………

「では」

そう言っただけでサクラが部屋に戻る………数分後大きな破裂音と変な悲鳴が響いた………

「うっ……」

「サ、サクラア……」

「ふぁ……」

リビングにようやく現れたエルとアンズが唸っていた……それとさっきの悲鳴でレイも起きて来た。

「全く、自業自得です。夜更かしをするなんて……」

サクラが溜息を吐いた。さっき渡したのはクラッカーだ……あの二人は目覚ましでも起きない……以前に面倒臭くなって俺がチェンソーで起こそうとしてアインとサクラに止められた……

だからこの二人を起こすのはサクラとなっている……サクラがこの家で一番の比較的にもただからだ。

「もうちよつと優しく起こしてよ」

「出来れば姫に耳元で優しく囁かれて起きたいぞ……」

「それで起きなかつたらチェンソーですよ？」

「うっ……」

いつもの食事風景だ……

「おかわり……」

「そう言えば今日は夜までか？……はい」

エルから貰った茶碗にごはんを盛ってエルに渡してから、アインに聞いた。

「はい、なるべく早く戻ります」

……今日の夕飯は何にするか。

「おかわり……」

「エル……ちゃんと噛んで食べているか？」

「育ち盛り……」

「そう言う意味じゃない……」

朝食後、食器を洗った後に皆を見送り学校に向かった。

中学校に入っても勉強は全然面白く無いので聞きながした。指名されても普通に答えるし、何か言おう物なら言葉で叩き伏せる。(灼眼のシャナのように…)

それで、昼休み……………まあ屋上で昼食しか無いけど。

「アンタ達、仕事は大丈夫なの？」

アリサが聞いてきたのは管理局の仕事の事だろう…

「うん、リンディさんが落ち着くまでは仕事は殆ど無いって」

「『一生に一度何だから青春を送りなさい』って」

「青春以前に勉強が……………」

「まあそこは皆で力を合わせれば大丈夫やろ……………」

段々と落ち込むのは、フェイト、アリシア、はやて…ここはフォ……………いや、追い打ちを掛けるか。

「そう言うがもう少してテストだぞ？」

「……………あはははははは……………はあ……………」

この四人が落ち込むのも無理は無い……………中学に上がるまで管理局の方を優先しすぎて……………何か色々と大変な事になっている。

「まあ、その時はアタシとすずかとコダイに任せなさい!!」

おいアリサ……………勝手に俺を入れるな。手伝うけど。

「コダイ君、コダイ君」
「ん？どうした？」
「さすが手招きしたのでそこに向かうと……………」

むにゅ

抱きしめられた……………しかも身長差により胸に顔が埋まった。背は、
アリシア「フエイト>すずか>アリサ」なのは>はやて>>>>>
俺だ

「うゝん、コダイ君分の補給ゝ／／／／」
だからコダイ分ってなんだ？……………ここ最近まで『クリミナル』結成
で殆どミッドに居ただけ。

「ちよつとすずか！アタシと変わりなさい！！／／／／」

「そや！抜け駆けやで！？ウチもコダイ君をギュってしたい／／／／」

「私もコダイ分補給したいゝ／／／／」

「わ、私も…あう／／／／」

「う、埋まってるの…／／／／」

「先手必勝だもん／／／／」

コダイ分って何なんだ一体？……………まあそんな事より。

「にーげよつと」

いつの間にか拘束が解けたので逃亡……………勿論フリ。

「……………いつぺん死に去らせ天然フラグメイカアアアアアアアア
アア……………！！！！」

後ろから更に凶暴化した男子の叫び声が……
フラグって何だよ……

午後の授業も聞きながし……あ、男子は戻って来てないよ？

下校時……

「今日は……牛肉使い切りたいから……ビーフシチューにしよう
かな？後……」

と献立を考えていた……

「ホンマお母さんやな〜」

「はやて……誰がお母さんだ」

「でも娘リインがおるで？」

それは父親だろ……

「でもビックリしたの……まさかコダイ君が『とーさま』って言わ
れた時は……」

ああ……思い出したくもない。

なのはとすずかとサクラは泣きそうになるわ、アリサとヴィータとアンスはキレて、フェイトとアリシアとエルは何を想像したのか真っ赤になっていて、はやてはリインに『かーさま』と呼ばせようとしていた……

更に事態を悪化したのはプレシアの発言だ……

『コダイ…今から子供を作りましょう』

それで大人組み……つまり、アルフ、リニス、シグナム、シャマル、アイン、リーゼアリア、リーゼロッテが大暴走……最終的にはリンディの不可視の実力行使で止められた……アレだけは俺でも喰らいたくない、むしろリンディは一体何者だ？……この前に冗談半分で『シード』で調べたけど年齢だけ分らなかった……弄れるネタは充分あるけど。

「ねえコダイ君、今日レイちゃんは？」

「ん？確か昼過ぎからリインと俺の家で遊ぶ約束をしているみたいだが？」

レイとリインは子供同士なのか波長が合い、凄い仲良く遊んでいる事が多い……会ったびに。

『リイン』

『レイちゃん』

わー

『わーい わーい』

と抱き合ってはしゃぐ位だ……

「で、何でそんな事を聞くんだ？なのは」
「よし……………待っててねコダイ君！！」
と言ってレイジングハートを起動するのは、そして……………

「レイちゃんのお母さんになっってくるから！！」
と言い残し飛び出した……………は？

「どう言う事だ？」
「……………はっ！もしかしてなのは……………レイに『お母さん』って呼ばせて既成事実を作る気じゃ……………」

「……………な、なんだって……………！……………」

成程……………流石執務官。

「こうしちゃいられない……………私も……………」
フェイトはバルディッシュを起動して飛んだ。

「あゝズルイよ……………！！」
アリシアもハルバードを起動した。

「レイちゃんのお母さんになればウチとコダイ君は名実共に夫婦や……………」

はやても騎士甲冑を纏った……

「チヨット!!飛ぶのは反則!!」

「まっつてよ」

「と言っつ魔法を使うなよ……」

取り敢えず、アリサとすずかを抱えてなのは達を追った。

その後……レイは六人娘の事をお母さんと呼ぶようになった……ん？冷静だな？まあ……呼ばせるのは構わないがそれには欠点があるからな……

くオマケ

数日後……

「ねえレイちゃん」

「ふにゆ？どうしたの？なのは」

「え？……」

レイは肉体年齢は（一部を除き）6歳だがデバイスになってから約3年……つまり精神年齢が3歳以下に加え凄く天然だから、忘れやすいのだ……

その日…役6名がorzになったとか……

最近まとも学校行ってる描写無かったよな？byコダイ（後書き）

メガネ「久々のギャグオンリーの日常編！！」

コダイ「何か色々とgdgdだな…」

メガネ「それはわかっている！！」

コダイ「はあ……………」

レイ「感謝コ〜ナ〜、ヒロアキ141様、スペリオルス様、Ra
iN様、龍賀様、感想をありがとうございます！！」

メガネ「ヒロアキ141様からは伝説の超サイヤ人とかしたブロリ
ーと完全体セルと石仮面装備して人間辞めちゃったDIOとサンタ
ナ、カーズ、ワムウの柱の男三人衆を、スペリオルス様からは『真・
三国無双4』の大喬・小喬姉妹の服とさくらんぼのフルーツタルト
を、龍賀様からは鬼巫女のスペルと巫女服（勿論霊夢の）頂きまし
たありがとうございます！！」

コダイ「ん？…………おい、アレは何だ」（物凄い光を指さし）

メガネ「えつと…………龍賀様のもう一つのお土産で…………俺のには永
遠『レクイエム』改を5時間、コダイには絶望『鮮血の結末』を…
…………」

コダイ「…………確かそれって今貰った鬼巫女のスペルだよな……………
…………」

く次回もお楽しみにしてください…く

コレが祝風の書の方……祝って無いよね？コレ……b y コダイ（前書き）

コダイとアインの初ユニゾンです……あまり出ないと思いますけど……
やっほりばさささす……！

コレが祝風の書の方……祝って無いよね？コレ……b y コダイ

「あ……………」

それはある日起こった。

「どうしたのですか、主コダイ？」

「……………防衛プログラムが完璧に消えた」

集中しても気配が無い……………完全に取り込んだか。

「かなり掛りましたね……………何年でしようか」

「軽く5年位だな……………よし、無人世界に転移して性能を確かめるか」

勿論クロノに許可を貰ってから……………

「よし、始めようか」

「はい」

今いるのは砂漠の無人世界、魔法生物がかなりいるけど……………まあいいか。

「早速……………」

……………あれ？

「……………どうしたのですか？」

「アイン……………」

忘れていた……………物凄く重要な事を……………

「ユニゾンするにはどうすればいい？」

「……………あ」

はやてと仕事をした事はあるけどその時は運悪く、ユニゾンしてないか既にユニゾンしてたから……………

「えつとですね……………私と一緒に『ユニゾン・イン』と唱えればいいですよ」

「……………よし」

祝風の書持ち……………

「『ユニゾン・イン！』」

アインとユニゾンした俺は黒髪が銀髪に青い瞳が赤く、バリアジャケットは闇の意志と変わらないが、顔や腕にあった紋様も……………それでいて女体化している……………完璧に背が低いアインだなコレ……………特に支障は無いから良いか。

「かなり良い感じなのか？」

……………はい／／／／

「ん？アイン……………どうした？」

何か不備でも……………

ああ！……………ついに……………ついに主と身も心も一つにッ！！／／／／

/

.....よし。

「ユニゾン・アウ スミマセン！スミマセン！真面目にしますから！だから私を捨てないでください！！（涙目） 捨てるつもりは無いんだが……」

大げさすぎ……

あゝ！！アインだゝ！！

レ、レイ！？何故ここに……ってあ……そう言えばレイは普段は主の中に……（羨ましい）

最後の所が聞こえなかったけど……良いか。

今日はどうしたの？チョット待っててね、おやつ持ってくるからチョット待ってください！！ここは主の中ですよ！？あるんですか！？

うゆ？……えっとね、正確にはコダイの中に作った私の部屋？みたいな所にあるよ。コッチコッチ

人の体の中に何ゆとり空間を作っているんだ。

お……お邪魔します……ってレイ！！何ですかこの部屋は！！もう少し片付けなさい！！

ふえ！？でも皆必要なモノだし……

例え必要だとしてもそのまま放置とは何ですか！！主コダイ、すみませんがレイの部屋を片付けるのに少しお時間を……

「それは別に構わないが………」

むしろ助かる………」

〜一時間後〜

お、終わりました

ふにゃ〜

「お疲れ……………今日はやめるか？」

いえ、このまま構いません

わ、私は疲れたから眠る〜……………おやすみ〜

おやすみなさい、ちゃんと布団を掛けて寝てください

は〜い…

そう言うとレイは寝てしまった。

「さて…行くぞアイン」

分りました主コダイ！

ユニゾン中は蒐集した魔法+俺が今まで見た事ある魔法が祝風の書を利用して使える、ミッドとベルカを使えない俺にはかなり役に立つ。コレはアイン、祝風の書のどちらかが欠けると使えない

更に総魔力量が俺とリインフォースを足した量だからかなりの量だ

……………だから…

「ディレイスペル・アウト！！」

アクセルシューター、ステインガースナイプ、プラズマランサー、シユワルベフリーゲン、ブラッディダガー、ガンブレイズ……………

「ディレイスペル・アウト」
ストラグルバインド、鋼の軛、ウェブバインド、ステインガース
ナイプ・エクスキュージョンシフト、エアボリック・エミツション、
スローナイフ・フォートレスシフト……………
突っ込んで来る大群に、拘束魔法をかけて、後ろがつかえた所に
広範囲魔法を叩き込む。

ドガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガ！！！！

ルオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！

だが、それでも突っ込んでくる魔法生物がいる…

スレイプニール

背中に生えてある羽を羽ばたかせて上空へ移動する。

「いくらなんでも多すぎだろ……………」

そうですね………… 防衛プログラムに最後に放ったあの魔法はどうで
すか？

「確かにそれは有効だが集束は空气中に四散した魔力を使うからデ
イレイスペルは使えない…………… それにやり過ぎて魔力が……………」

調子に乗り過ぎたか？何か有効な手は……祝風の書の頁を捲って
いると……

白い祝風の書に今まで見た事が無い黒い頁が…

「コレは………召喚魔法？」

しかし、こんな魔法は蒐集した記録が……

「とにかく、コレに賭けるか………アイン、準備を」

大群から少し離れて着地する………

準備完了、何時でもいけます！

「行くぞ………」

俺は黒い頁に描かれた文字を詠唱する。

「絶望に沈め……」

咎人を喰らえ…

「星は消え……」

光りも届かぬ…

「……闇に吞まれよ」

ミッド、ベルカ、ベアトリス式の魔法陣が重なるように展開され、魔法陣の周りを闇色の柱が登る……………

「ロード・オブ・ブレイザー」

俺とアインの声が重なる。魔法陣から現れたのは……………

オオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！

「コレって……………俺の所為？」

恐らく……………取り込んだのが不味かったのでは？

召喚されたのは……………まさにあの時戦った『防衛プログラム』だ

……………頭頂部にあった女の上半身は今は無く代わりに俺が乗っている

……………

どうやら、私達の制御下にあるようです

「じゃあ……………早速」

大群に指を指すとロード・オブ・ブレイザーは鉤爪の様な触手を伸ばし大群を一つにまとめにした……………そして

オオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！

口から闇色の砲撃を放った……………

「アイン……」

何でしょう……

「これ……使うのやめようか」

そ、そうですね

俺の目の前に広がる光景は、さっきまでの大群は塵一つすら残っておらず、地面はあり得ないほど抉り取られて……推定数万年前の化石を掘り起こすほど深い溝……

「今回は魔力が限界ギリギリだから良かったものの……」

全快状態だと星が滅びますね……

「……帰ろうか」

はい……

翌日、コレをクリミナルのメンバーに見せたら『ロード・オブ・ブレイザー』はやっぱり即行で禁止が言い渡された……

くおまけ

「アイン、アイン」

「レイ?.....」

「この前お片づけ手伝ってくれたよね?だからそのお礼」
レイはあるデータをアインに渡した。

「コレは?」

「お片付けの時に見つかった子供になった時のコダイがお風呂入っている時の動画」(子供になった経由は番外編『おねーちゃんパニック』参照)

「なん.....だと!?ありがとうございます!!では今夜一緒に.....」

／／／

「えへへへ／／／」

その後二人はコダイに O S H I O K I された...

コレが祝風の書の方……祝って無いよね？コレ……byコダイ（後書き）

メガネ「えっと………初ユニゾンです」

コダイ「何で防衛プログラムを召喚させた」

メガネ「いや、お前防衛プログラムを取り込んだら？だから少し……ぶつちゃけネタ技です。多分もう出るかも分りません。使いだころが分りません」（土下座）

コダイ「ダメだこの作者」

レイ「感謝コナ、ソラト様、龍賀様、山義 芳原様、RAIN様、やまだろう様、感想をありがとうございます！！」

メガネ「RAIN様からは、ケーキ詰め合わせとあんみつを頂きましたありがとうございます！！」

コダイ「作者、上…上」

メガネ「え？」

グシャ………！！！！！！

コダイ「悲鳴を上げる間もなく死んだか………今回はC・52か？にしても大きさが化物だな………」

レイ「えつと……超簡易レーション（オリジナルで粉製。水を一適かけると栄養たっぷり&旨さが一流のシェフすらも舌を巻くほど）一ヶ月分と、赤い狐と緑の狸（カップ麺）一ヶ月分と、長さ260m、幅80mで、素材が世界一重い鉱石5000kg分で1gのとりんでもない鉱石のみで作った大剣二千本を、貰いました！！」

メガネ「山義 芳原様……ありがとうございます……」（ガクッ）

コダイ「次回については何も考えて無い。つまりg d g dの確率大だ」

メガネ「俺の作品はg d g dだ！！」

コダイ「威張るなよ……」

レイ「皆様からの意見や感想などイロイロ待っています！！」

（次回もお楽しみにしてください！！）

追加設定『祝風の書』等について（前書き）

祝風の書とベアトリス式についての紹介です

追加設定『祝風の書』等について

『祝風の書』

使用者：コダイ、管制人格リインフォース・アイン

魔導書型のストレージデバイス。表紙の色は白色で、剣十字の紋章がついている。

元はロストギア『闇の書』だったが、コダイが闇の書の意志の左腕と防衛プログラムを取り込んだことで魔導書と特別なパスが出来て新たな『闇の書』の主になった。

(闇の書の元は夜天の書だが夜天の書の持ち主がはやての為、『闇の書』『夜天の書』と区別化している)

その後はコダイにより表紙を白にして『祝風の書』と名付けられた。

闇の書のバグを消したのでは無くてコダイの制御下に置いていただけなので機能は闇の書のままである。

普段はアインが所持しているが、ユニゾン時に自動的にコダイの手元に来る。

夜天の書と同様に蒐集した術者の使う魔法を使えるが、コダイが闇の書の一部を取り込んでいる為、コダイが見たもしくは受けた魔法も使用できるようになった。

ユニゾン状態も取り込んでいる為、容姿は背の低い闇の書の意志になっっている。

アインのバリアジャケットとは腕と脚のベルトや顔や腕にある紋様など細部が異なる。

コダイはアインとユニゾン時のみ、ミッド、ベルカの魔法が使えるようになる。

アインはユニゾンしなくてもベアトリス式を使えるが、『使いどころが難しすぎる』らしくあんまり使わない。

防衛プログラムを召喚する『ロード・オブ・ブレイザー』はコダイとアインがユニゾンすることで初めて使える召喚魔法で。召喚された『ロード・オブ・ブレイザー』はユニゾンしたコダイの意志に従い対象を殲滅する。（勿論非殺傷設定も出来る）詠唱は

『絶望に沈め…咎人を喰らえ…星は消え…光りも届かぬ……闇に呑まれよ』

下手をすれば周囲の次元世界を破壊出来るので、クリミナルに使用禁止令が出されているので出るかどうかはわからない…

ちなみにレイは祝風の書は使えない。

メガネ「以上祝風の書でした!」

コダイ「短すぎだろ……」

メガネ「そう言うと思ってベアトリス式についてもまとめて見た」

魔法内容

『ガンブレイズ』

広範囲に及ぶ無限分裂炸裂弾を放つ、操作は出来ないが無限に分裂するので、距離を置く相手はまず地獄を見る。けど遠いほど威力は軽減する。

『スローナイフ』

小型の魔力刃を展開する魔法。

射出は出来ないが、コダイは投げて使う、少し広い範囲に設置できる。『バースト』の追加詠唱で爆発する。持って戦う事も出来る。

設置した時はその場に固定されるので足場にも出来るなど汎用性が高いが威力は気絶させればいいところである。

『プラス・ブレイク』

自身の攻撃に一度のみ障壁破壊を付加する魔法。ただ付加するだけなので破壊するには使用者に力が無いと破壊できないし魔法にも付加出来ない。バインドや結界は破壊できない。

『バッシングバスター』
螺旋を描く砲撃魔法。口径は細いが飛距離はなののは二倍はある。
当初は軌道がズレル事があったが今は改善された。

『ウェブバインド』

始めはスフィア状だが対象に接近すると網状に展開して拘束する拘束魔法。スフィア状なので魔力弾と勘違いしやすい。複数捉える事は出来て強度は通常のバインドよりやや堅めで、壊れやすかったが今は改善されて、問題は無いらしい。

『デイリースペル』

魔法を発動直前の状態でキープできて『デイリースペル・アウト』の呪文でキープした魔法を発動できる。

キープするのに魔力を常に使うのでかなりの集中力がある。
さらに空気中に四散している魔力をかき集めて発動する集束魔法はキープ出来ない。

『ジェノサイドブレイカー』

防衛プログラム戦で放ったのはまだ未完成で、今はもう完成しているらしい。

詠唱は『見敵全殺』

『スローナイフ・フォートレスシフト』

範囲殲滅魔法。

魔力の調整で小々大規模まで変わり、無数のスローナイフを展開して、一つでも触れたら全てのスローナイフが連動して爆発する…
だが、大規模にするにはかなりの時間が必要や、魔法陣上にしか展開できないので気付かれる可能性が高い…
などと弱点が多い…

『ア・サンプル』

同種の魔法を重ねがけする魔法。ディレイスペルと同種の魔法。同じ魔法同士は可能だがそれ以外には使用できない。

重ねた魔法に応じて『デュオ（使用魔法）・二重デクダットから十重』まである

これは火力不足を補うためとカードリッジを『オーバーロード』に残す為に作った魔法である。

『デイ・レント・フォール』

集束砲弾魔法

四散した魔力と自分の魔力を上空で圧縮、超巨大のスフィアにして落とす魔法。

威力が一番強いが、発動するまでが一番遅くて、集束に集中するので動けない。発動後は早いですが、自分を巻き込む可能性が高すぎる。

『ナイトフェンサー』

集束で手からスフィアを作り、それを刃の様に形成する、集束魔力刃魔法。スローナイフの上位版

常に噴射と集束を連続で繰り返しているので、刃はチェンソーの様になっている。スローナイフ同様『バースト』で爆発するが

高い攻撃力と魔法破壊があるが魔力の消費がかなりあるので連続では使えない。

コダイ「……ちょっと待て『オーバーロード』は何処だ？」

メガネ「いや……アレ正確には魔法じゃないし簡単に言えば魔力暴走？だから」

コダイ「アレも時々使っているが……アレで殆ど役に立った事が無いぞ？」

メガネ「まあね……まあちゃんと考えているから大丈夫だ……多分」

コダイ「自信ないんだな……」

メガネ「ggdgdがモットーだしね」

コダイ「後……アインが行っていた部屋って何だ？」

メガネ「ほら、レイの本体の宝石ってコダイの右腕にあるだろ？その中って事。こうでもしないとコダイがレイとアインを同時にユニゾンしているって事になるから。つまりレイのマイルーム」

コダイ「成程……」

メガネ「後『オーバーロード』についてはオリジナル編で詳しくやるつもり……当分先だけだ」

コダイ「それまでにこの作者が飽きなければいいんだが」

メガネ「大丈夫……かな？」

コダイ「結局疑問形かよ……」

追加設定『祝風の書』等について（後書き）

メガネ「そろそろネタが切れかけているメガネです！！」

コダイ「女装はオシャレ、それを何故分らない？コダイだ」

レイ「天然じゃないもん！レイです！」

コダイ「乗ったはいいが何だこのノリは？」

メガネ「いやさ……聞いたただだから興味無い、先に進めろ……レイ
おいしい！！」

レイ「感謝コ〜ナ〜、真王様、ながも〜様、Rain様、龍賀様、
スペリオルス様、ARFIN様、ポワソ様、感想ありがとうございます
ます！！」

メガネ「龍賀様からはわざマシン（内容はみねうち）と武装錬金の
斗貴子さんの制服を、スペリオルス様からは『冷やし中華』とるろ
うに剣心の『巻町操』の忍び装束と無限刃を、ARFIN様からは
某幻想郷の新聞記者の服上下+カメラをプレゼントを頂きましたあ
りがとございます！！」

コダイ「臍物をブチ撒ける！！」（斗貴子さんの制服）

メガネ「おお……長髪だから前の斗貴子さんだ……」

レイ「ねえねえ、真王様から質問があるよ？」

質問一『アインさんはコダイの中どうでした？』

メガネ「さて、ここはご本人にどうぞ!!」

アイン「…………… 凄かったです…………… きゅ／＼／＼／＼」(気絶)

レイ「何が凄かったの？」(意味が分らず)

コダイ「次の質問だ」(アインが何を考えているのか分ったが無視)

質問二『コダイは映画見るならSF？ファンタジー？それともドラマ？』

コダイ「ホラーやスプラッタだ」

メガネ「バイオはアポカリプスを見て物凄くつまらなくなつた件……………ぶつちやけるなら初代を再現して欲しかった」

コダイ「まあ……………ジルはかなり似ていたけどな」

メガネ「アレだけは認める」

質問三『コダイちゃんはコスプレするなら女性のコスプレする？』

コダイ「当然だ、女装はオシャレだ」

メガネ「いい加減にしる似た者同士」

メガネ「今度は龍賀様の所の龍斗の月落とし!？」

ズガアアアアアアン!!!

レイ「えっと……………皆様からの意見や感想などイロイロ待っています!」「(どうかコダイが怒りませんように!!)」

コダイ「……………」(血文字で『モウオソイ』と書いている)

次回もお楽しみにしてください

上には上が居るモノだな……b yコダイ(前書き)

コダイのお母さん回です

上には上が居るモノだな…… byコダイ

アインと初ユニゾンをして数日後のある日、フェイトとアリシアから連絡があつて、呼び出された。

「時空管理局本局保護施設は………ここか？」

目的地に向かうとそこには見知った顔がいた。

「リンディ？」

「あら 久しぶりね、コダイ君」

「リンディ」

レイが実体化してリンディの所に走っていった。

「レイちゃんも久しぶりね」

「うん！リンディも呼ばれたの？」

「大事な話があるって聞いたのよ………あ、来た来た」

振り向くとフェイトとアリシアが手を振ってやって来た………

間に赤い髪の子供を引き連れて……………

「チヨット準備に手間取っちゃって……………」

「それは良いんだがフェイト……………その子供は」

ピキーン!!

「……………」

俺とリンディの目が合った。

「リンディお母さん、実は大事な話って言うのは、何も言わなくていいわ……………フェイト、アリシア」え……………」

リンディがフェイトとアリシアの肩に手を置いた……………と云うかそう呼んでいたのか……………あ、子供がオロオロしてて面白い。

「今ならまだ間に合うわ……………自首しましょう」

「……………ふえ!?!」

と、リンディは『超真顔』で言った。

「大丈夫よ、例え幼児誘拐でも初犯なら……」

「ちよつと! 幼児誘拐って!?! してないよ? 私してないからね!?!」

「コ、コダイ! リンディ母様を止めて!?!」

俺は……………無言で携帯を取り出し……………

「クロノ? お前の所の義妹が幼児誘拐したぞ? (超棒読み)」

クロノに掛けた……………リンディの事を母親と呼んでいるから問題ない

だろう……………

「ええ!?! お兄ちゃん!! 私してないからね!?! ホントだよ!?!」

「何だと、今すぐ行く(超棒読み)」

「お兄ちゃん!?!」

流石のクロノも分つて来たな……………今度はパターンを変えよう。

その後、10分位リンディと一緒に二人を弄った。

「私、レイ・モモ・ブラッドって言うの。あなたのお名前は？」
「エ……エリオ・モンディアルです……」
「よろしくね！エリオ」
「よろしくお願いします……レイさん」
「さんはいららないよ」『レイ』か『レイちゃん』って呼んで？
「でも……年上だし……」
「ダイジョーブ！せいしんねんれい？は3歳だから！」
「えっと……じゃあ、レイ」
「うん」

弄っている最中にこんな会話が聞こえた。

「大体、話は分った」
フェイト達を落ち着かせた後、話を聞いた……
あの子供……エリオの保護者になりたいからリンディに後見人になつて欲しいと言う事と『ある事情』により人見知りが激しいので、俺の家に一時的に住まわせて慣れさせようと言う事らしい。
「何で俺？」
「お母さんっぱいから」
「誰がお母さんだ……」

まあ……人見知りを虚数空間に捨てた奴らの人外魔境だからな……慣れないのはおかしい。

「と言う事だエリオ」

俺はエリオと視線を合わせるようにしゃがんだ。

「コダイ・Ｔ・ベアトリスだ、出来れば名前で呼んでくれ」

「コダイさんですか？」

「そうだ……さて、そろそろ行くか」

「いっくぞ〜」

「えっ！？ちよっとレイ!？」

レイがエリオの腕を引っ張っていく……

「はあ……あ、荷物忘れてる。しばらく預かるぞ?」

「」「よろしくね、お母さん」「」

今度はリンデイもハモった……

海鳴に着いて軽く案内をした後に家に着いた。

「ここが暫くエリオが住む家だ」

「お……大きいですね」

「まあ、普通と比べたらな？でも住んでいる人数が多いから気にならないぞ?」

そういって、扉を開ける……

「おかえりー！！&スペシャルサンダーキークー！！（ただのとび蹴り）」

「甘い」

帰って来て早々にとび蹴りを繰り出したエルを踵落として沈める。

「うぐう！！！」

「さて、家の奴紹介するから上がってくれ」

「え！？で、でも」

エリオは沈んでいるエルを見ていた。

「大丈夫だしばらくすればまた騒がしくなる」

エリオが引きつっている……………

少しして、エルが復活したので全員に紹介した。ここは特に変わり映えの無い所なので省略だ。

「所でエリオ」

「はい？何ですか？」

エリオの自己紹介の後、少ししてある事を聞いた。

「好きな食べ物は何か？」

「え？」

「好きな食べ物だよ、あるだろ？パスタにカレーにハンバーグとか……………」

「あ、それ全部好きです……………と言うより嫌いなモノは特に……………」

「へえ……………偉いなエリオは……………」

「あ……………ありがとうございます／＼／＼／＼」

嫌いなモノは特にないか……………よし。

「沢山の取り皿を用意してバイキング形式に……………パスタにカレーにハンバーグ、フライドチキンにフライドポテト、野菜にサラダとミネストローネに……………」

「そ、そんなに作るんですか！？」

「ああ……エリオの歓迎会を兼ねてな、だが心配するな。ここに人の何倍も食う奴が居る」
俺は、サクラとエルとアンズとレイを指した……コイツら小さい癖にかなり食べるからな……よし。

「主……」

特にトラブルは無く料理は完成した……だが。

「何も言つな……アイン」

「いえ、ここは言わせてもらいます……作り過ぎです!!何ですか30人前つて」

「だって、冷蔵庫の中身をそろそろ変えないといけなかったから……」

「それを分つてて業務用スーパーであんな大量購入したんですか!？」

「仕方ないだろ、あんなに安く売っているのはかなり珍しいんだ……」

……

「何ですかその主婦思考!？」

「良いだろ別に?冷めない内に食べるぞ」

「はぁ……そうですね」

「「「「「いただきまーす!」「」「」「」

子供組は元気に手を合わせて言った……

数十分後……

「「「ちそうさまでした!」「」

「「「「「ええ!?!」「」「」「」

「エリオ……足りなかったか?」

「いえ?お腹いっぱいですよ?」

アレだけあった料理は完食……その半分はエリオの胃に収まっていたのはまた別な話。

くおまけく

「ねえねえ、エリオ」

「エルさん？どうしたんですか？」

「さっき自己紹介の時、人見知りが激しいって聞いたけど、コダイの時はどうだったの？」

「えっと……何故が分らないんですが『コダイさんは安全』と無意識に思ってた……」

「そうなんだ〜どんな感じだった？」

「凄く懐かしいと言うか、暖かいと言うか……うん」

「……もしかしてお母さん？」

「っ！！そう、ソレです！！お母さんです！！」

「コダイ様は周りからお母さんと言われていますからね……」

「流石我が姫だ！初対面の少年に母親と思わせるとは！！」

「コダイはお母さん？」

コダイの料理中、こんな話があったのはコダイと手伝っていたアインは知らない……

上には上が居るモノだな……byコダイ（後書き）

メガネ「やっぱりコダイはお母さん!!お兄ちゃんとかお父さんでは無くお母さん!!」

レイ「お母さん」

コダイ「今回もgodgodだったな」（無視）

メガネ「それは当たり前前の事!!早速感謝コーナーだ!レイ」

レイ「感謝コナ」 Rain様、スペリオルス様、ながもく様、龍賀様、ポワソ様、感想をありがとうございます!!」

メガネ「Rain様からは麻帆良学園女子中等部の制服とアスナ（姫子時代）の服と麻帆良名物超包子のゴマ団子箱詰めと超包子の飲茶詰め合わせを、スペリオルス様からは『ONE PIECE』のジュラルキン・ミホークの刀『夜』とロビンの新世界編の衣装を、ながもく様からはトライピースのナナミの服とナナコの服を、龍賀様からは大嘘憑きが使えるようになる札を頂きました。ありがとうございます!!」

コダイ「見た目の割に動きやすいな」（麻帆良中等部の制服）

レイ「お姫様」（姫子時代のアスカの服）

メガネ「ちなみに髪型はコダイはアスナ、レイは姫子時代のアスカになっていきます!!」

コダイ「さて、次回だが「何も考えていない!!」「おい」

メガネ「と言うのは冗談で、少し案がある」

コダイ「何だ？」

メガネ「コダイ以外の視点での話とか、定番のヒロインとデート編などを書くことと思っている」

コダイ「デート？誰が？」

メガネ「お前がなのは達と」

コダイ「……………あり得ないな」

メガネ「んだとこのフラグビルダー!!」

コダイ「だからフラグって何だよ……………」

〜口論中〜

レイ「皆様からの意見や感想などイロイロ待っています!!」

〜次回もお楽しみにしてください〜

特別編『コダイ君の弱点!?!』(前書き)

今回は短めです。

デート編はもう少しシナリオが固まったら投稿します。

この回は視点がコロコロ変わります。

ちなみにコダイはいません。

特別編『コダイ君の弱点!?!』

「…………コダイ(君)の弱点?」「…………」

事の発端ははやての一言で始まった。

「そや!顔も良いし、頭も良いし、運動神経は抜群だし、何かと器用やし、色んな特技あるし、家事何かも出来るしオマケにスタイルええし、可愛いしで良い所てんこ盛りなコダイ君の弱点や!!!」

「弱点つて……………アイツの弱点つて言えば性格の悪さ?つてコレは弱点とは言えないわね」

アリサの言葉にはやて以外が頷く。

「そやで!周りでは『性格最悪の完璧超人』と言われるコダイ君の弱点を暴くんや!」

はやての背後に炎がメラメラと燃え上がった。

「で、でも何でそんなにコダイ君の弱点を知りたいの?」

「それはな?なのはちゃん……………」

〈回想中〉

ある日八神家で…………

「今日はレイちゃんと遊ぶですう」

元気に飛び回りながら服を選ぶリイン。

「えらいご機嫌やな〜……ん？コレカワイエヤン」

はやてが取ったのは（妖精サイズなので摘まんだ？）背中のおおき目のリボンが特徴な白いワンピース、派手でも無く地味でも無い丁度いい感じのものだった。

「はやてちゃんもそう思いますか？コレはリインのお気に入りです！！」

「そうなんか……アレ？こんなのウチ買ったかな？」

「いえ、コレはとーさまが作ってくださったんです！！」

ピキッ！！

「……………は？」

リインの言葉に思わず固まるはやて。

「この前レイちゃんが可愛い服を着ていたんですよ、何処で買ったのか聞いたらとーさまに作って貰ったらしくリインもお願いしたらコレを作ってくれました」

「ああ〜確かこの前そんな事言っとな、ちゃんとお礼したんか？」

「はい！そしたらとーさまは『自分の服を作るついでだ』と言ってました」

「はあ！？コダイ君自分の服を自分で作っとるんか！？」

「とーさまが言うには『自分のサイズの服を頼むより作った方が速い』と」

「た、確かに……コダイ君の私服、まるで誂えたかの様にピッタリしていたし。それにあんな服は雑誌でも見つからなかったし……」

〈回想終了〉

「あの時『どんだけ完璧超人やねん!!』って心の中で突っ込んでもった」

「流石お母さん……」

「そう言えばお母さん達から聞いたんだけど、私と姉さんが転入前に着せられたメイド服……アレもコダイの手作り見たかったし」
それを聞いて何か納得と言った感じのアリシアとフェイト。

「そう言われると……確かに気になるわね」

「アリサちゃん?どうしたの?」

「ずずか……コダイって授業中全く何もやってないわよね?」

「え?……そう言えば上の空って感じだったね」

「なのに………なのは何でいつもテストで一位しか取ってないのよアイツはあああああああ!!!!」

「落ち着いてアリサちゃん!!」

暴走寸前のアリサを抑えるずずか。

「にはははは……でも確かに私達より細いのに力持ちだし、身体強化魔法無しでソニックフォームのフェイトちゃんに追いつけるし、魔法も削っちゃうし、ロストロギアも取り込んでうし……」

段々となのはの声のトーンが下がる。

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

全員暫くの沈黙、そして……

「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

六人の声が重なった。

「でもどうやって探すのよ？コダイってかなり隙が無いから……」

「うーん………コダイ君って自分の過去とか話したからないし……」

アリサとすずかが腕を組んで唸っている。

「…そや！あの二人なら分るかもしれん」

はやては五人を引き連れある場所に向かう………そこは………

「コダイ（君）の弱点？」
場所はハラウン&テストロッサ家、はやての言うあの二人とはリンディとプレシアの事である。

リンディとプレシア：それになのはの母親の桃子は、面白い事を優先して行動するタイプでコレはコダイにもあてはまる。似た者同士だから何か知っているんじゃないか？と言う根拠を元にはやては二人に聞いた。

「コダイ君の弱点ねえ…性格の悪さ？」

「あの、それ以外で何か……」

考え込むリンディとプレシア……

「家事は私から見ても一流だし……」

「しかも手際とかやりくりが凄く良いから隙が無いわよ……教わりたくないわ」

「男の娘特有の女扱いされるのを嫌がってないし」

「それで女装して逆襲された事があつたわね」

「女子供にも容赦とか無いし……」

「かなり昔だけど……アレは思い出したいくないわ」（ガクガクブルブル）

次々と語られるコダイの超人っぷりに落ち込んで行くのは達……

「……そうだわ……」

暫く考え……ポンと両手を合わせて、何かを思いついたリンディ。

「女の色香何てどう？コダイ君ってあんな感じでもクロノに似ている所あるからきつと効果てきめんよ……ってあら？フェイトとアリシア達は？」

「話の途中で『よし！色香か！』と言って出てったわよ？」

「成程……コダイ君ってモテモテね……でそのコダイ君にメロメロなプレシアは行かなかったの？」

「はぁ………リンディ……」

プレシアは溜息を吐き………

「コダイに色気で勝てるはず無いわよ」

「………あぁ」

思い出したのか、凄いい納得と言った声を漏らすリンディだった………

特別編『コダイ君の弱点！？』（後書き）

メガネ「今回はコダイ無し这回でした！！」

レイ「した！！」

コダイ「で、今回いなかった俺が何でここに？」

メガネ「ノリだ！！」

コダイ「はぁ……」

レイ「感謝コナ、ながもく様、ヒロアキ141様、Rain様、真王様、龍賀様、スペリオルス様、ソラト様、杉並様、ポワソ様、黒一文字様、感想をありがとうございます！！」

メガネ「ヒロアキ141様からはSDF-1マクロス、マクロスクオーター、バトルギヤラクシー、バトルセブン、に艦載機として無人機X-9とAIF-7SとAIF-9Vを各10個航空師団、シエリルとランカのライブ衣装一式を人数分を、真王様からはAngelbeats!のSSS団の女性制服を、龍賀様からは涼宮ハルヒの女子制服を、スペリオルス様からは焼きドーナツ×10を、杉並様からは幻想郷の某紅魔館の門番とメイド長と某？な氷の妖精のコスを、黒一文字様からは『BLAZBLUE』のプラチナ・ザ・トリニティが着ている服と使っている杖を、頂きましたありがとうございます！！」

コダイ「えい」（チョップングライト）

レイ「皆様からの意見や感想などイロイロ待っています!!」

「次回もお楽しみにしてください!!」

特別編『コダイの弱点!?!』パート2 (こま んよつ風) (前書き)

今回もコダイは出ません。

八神家ですがはやては出てきません。

特別編『コダイの弱点!？』パート2（ごきんよう風）

八神家で……

「なあ、はやて達が言ってたけど……コダイの弱点って何だ？」

「……………え?」「……………」

とヴィータの言葉に反応したのは、はやて不在の八神家と遊びに来ていたリーゼ姉妹だった。

「この前な、はやて達がコダイの弱点を知らないかって聞いて来たんだよ、私も考えたんだけど見つからなくてさ」

「トキガワの弱点か……………シャマル、ザフィーラはどうだ？」

「確かに気になりますね……………」

「性格……………いやコレは弱点では無いな……………」

「とーさまの弱点ですか? うん……………リインもしらないですう。お二人はどうですか?」

リインがアリア、ロツテに視線を向ける……

「弱点か……………」

「あ、色仕掛けとかどうかにゃ?」

ロツテが笑いながら『意外にクロスケと似ているしね』と付け加えた。

「それも考えたらしいけど、途中でコダイに色気で勝てねーって気付いたらしくいて、すげー落ち込んでいた」

「……………あゝ……………」

全員納得の声を上げる。

「はやての言う通り、美人だし、頭良いし、料理はギガウマだし、更に言えばあのシヤマルの料理？を平気で平らげるし……」

「さらに言えばそれを我らでも危険が無い様に改善も出来る……」

「始め見た時は勇者か救世主が現れたようだった……」

「みなさん酷いです……コレでも少しは良くなって「それでも食えるのはコダイだけだ」しゅん……」

部屋の隅っこで落ち込みだしたシヤマル。

「確かにコレと言った弱点は無いわね……」

「エロネタも余裕で返してきたし……と言っかアイツ自身良い意味でエロいし……」

「お酒にも強かったっけ？」

「ああ〜それほとんどでも無く強いよね。私達でも飲めない位強いお酒をストレートで何本も開けちゃうし、それに一切酔わないし」

「考えれば考えるほど完璧超人だにゃ〜」

「本当に弱点何てあるの？」

暫く考え込むリーゼ姉妹。その他も考え込んでいた……

「……………生活面では優秀と分った…なら戦闘面ではどうだ？もし分れば我らもフォローが出来る」

暫く考えたザファイーラがある提案を出した。

「おおっ ナイスザッファイー！」

「リーゼロット？……………ザ、ザッファイーとは？」

小狼の状態で器用に顔を引きつらせるザファイーラ。

「戦闘面か……………勝率は高くは無いがコレは私達と模擬戦の場合だ、トキガワのベアトリス式はトリッキーな魔法が多く初見の魔導師には勝率は高いだろう、さらに状況に合わせた応用力と判断力も非常に高く、私達でも苦戦を強いられる。特に魔法をキープする『デイレイスperl』だ」

口元に手をあてながら、話すシグナム。

「確かに予めキープして好きなタイミングですぐ使えるってのはスゲーけど、それだけじゃないのか？」

「そうだな……………ヴィータ、今トキガワと模擬戦をしていると仮定しよう。トキガワは一瞬の隙を付いてヴィータの後ろを取った、デイレイスperlを発動してキープ数は一個…この状況をどうする？」

「そりゃあ防御で防ぐ」

「障壁破壊の『プラス・ブレイク』があるぞ？その後すかさずキープされた砲撃が打ちこまれる」

「ぐっ…ソレがあつた……………だったら遠くに逃げる！」

「キープされた『ガンブレイズ』が襲い掛かるぞ」

「ちよつと待てシグナム！！さっきは砲撃だっただろうが！！」

「トキガワがワンパターンで終わる奴か？私はキープした魔法は一つとしか言っていないぞ」

「ズリイぞ！！それじゃあ何が来るか分らねえだろ！！」

「それだヴィータ『何が来るか分らない』から危ないんだ。キープされた魔法の状態はどれも同じだから何をキープしたのが判別しづらい」

「流石バトルマニアだ……伊達にコダイの新魔法の模擬戦を率先して引き受け居るだけの事はある」

ヴィータの言葉に勝ち誇った笑みを浮かべるシグナム。

「フツ……トキガワの戦闘面について知らないことなど無い」

「なんかスツゲームカック……」

アイゼンを起動しようとするヴィータ……

「……それで、結局コダイ君の弱点は？」

「……」
先ほど復活したシャマルの言葉に固まるシグナム。

「以前は圧倒的な火力不足だったが、それは既に改善されている……」

……頭の回転が速く、行動の裏を掛れる事が多い……それに長期戦ともなるとトキガワの土壇場だ、アイツのスタミナは計り知れない」

「結局、無いつて事ね」

「……ああ」

シャマルの問いに力無く頷くシグナム。

その後も、議論は続いたが……弱点は見つからなかった。

「……………トキガワの弱点は主はやてを始め沢山の女性に好意を寄せられても『気の所為』で済ます天然な所では……………コレは言わない方が良いだろう」

と、一人（一匹？）空気を呼んだ小狼^{ザファイラ}であった。

特別編『コダイの弱点!?』パート2(ごきんよう風)(後書き)

メガネ「流石ザフィーラ!!」

コダイ「誰が天然だ」

レイ「天然じゃないもん!!」

メガネ「さて、天然×2は無視して。特別編第二弾です!暫くはこんな感じの特別編が続くと思います!!」

レイ「ぶ〜!!」(- 3 -)

メガネ「ザフィーラが言う様にコダイは鈍感では無く天然と言う事で一つ」

レイ「感謝コ〜ナ〜、ながも〜様、ユタ様、心の剣様、龍賀様、杉並様、スペリオルス様、山義 芳原様、黒一文字様、俊様、ポワソ様、感想をありがとうございます!!」(ペコリ)

メガネ「ユタ様からは東方幻想郷EXボスの夢月の幻月の服装と東方紅魔郷EXボスもフランの服装を、心の剣様からは美少女戦士セーラーMoonシリーズのセーラー戦士全種を、龍賀様からはコダイにはどんな服にも変化する服とレイにはエーテライトと俺にはキング・クリムゾン(スタンド)を、杉並様からは幻想郷の某地霊殿のゴスロリ猫と某桶のなかの幼女のコスと某春の妖精のコスを、スペリオルス様からはガンダムで使われた『ハイパーハンマー』とフラウが着ていた連邦軍改造制服を、山義芳原様からは正規クラス空母二千隻とその護衛艦一万六千隻と第二世代(第二次世界大戦初期

（中期）の航空機90億機（戦闘機、爆撃機、雷撃機、偵察機、飛行艇全て）と第三世代（第二次世界大戦末期～1960年代）の航空機80億機と第四世代（現代における戦闘機等、代表的な機体はF-15、通称イーグルやF/A-18、通称ホーネット等）の航空機12兆機とスカレット姉妹の服一式とTHE地球防衛軍2に出るペイルウイングの服と本物と大差ないPADを、俊様からはフエイトノホロウアタラクシアのカレンオルテンシアの礼服とマグダラの聖骸布とBLACK CATのハーデイスとセイレーンとダイの大冒険の鎧の魔槍（最終決戦仕様）とシャハルの鏡を、頂きましたありがとうございます！！」

コダイ「ちなみにお土産の中にある航空機などは目測4000？の輸送船で運ばれたぞ？さてこのどんな服にでも変化する服で……」

レイ「わっ！！糸が出て来た！？」（エーテルライトで遊んでいる）

メガネ「キングクリムゾン！！スタンドは中二心を擦られます」

コダイ「中々良いわね」（プリシアのバリアジャケット、アインとユニゾン済み、CV・五十嵐麗）

メガネ「何でその格好！？」

コダイ「本当にバリアジャケットとして機能しているか確かめたくて……」（CV・五十嵐麗）

メガネ「わざわざユニゾンまでして着るか普通！？」

コダイ「妥協はしないわ」（CV・五十嵐麗）

メガネ「してくださいお願いします!!レイを見る!!」

レイ「……………／／／／」(血の海に沈み、血で『たにま』へ
そ『ふともも』と書かれている)

コダイ「あらあら、子供には刺激が強かったかしら?」(CV・五十嵐麗)

メガネ「皆様からの意見や感想などイロイロ待っています!!」

アイン「……………／／／／」(絶賛気絶中)

〜次回もお楽しみにしてください!〜

特別編『アイン頑張ります!』(前書き)

アインメインの話です。衝動的にやった、反省していない。

特別編『アイン頑張ります!!』

「ふう……………」

トキガワ家のリビングでお茶を飲み一息つくアイン……………」

「主は学校、マテリアルズはアリアとロツテの所で訓練で暫くはない、エリオはレイに連れてかれてリインと遊びに行った……………」今日
は仕事も無いですしのんびりと……………」

そう言いながら伸びをして……………」固まった。

「……………」何をやっているんだ私は!!」

ガタツ!ガン!!!

「っ……………」

勢いよく立ちあがり、テーブルに脚を思い切りぶつけるお約束した
アイン。

「……………」前々から思っていたが、私は主の役に立っているのか!
?戦闘面では申し分ないが他に何かあるだろう!!主の所有物とし
て!!」

と言って考え込むアイン。

家事 主に敵う訳が無い。

デバイス 主はデバイス無しで竜種を素手で倒した事がある。

女 女装した主の方が色気があると言われ軽く落ち込んだ事が……………」

「か、勝てない」
崩れ落ちるておorzになるアイン。
「ほ、他にきつと何かあるはず……………」

無理だと思っけどね〜by作者

「黙れ！！闇に沈めるぞ！！……………はあ、こんな作者と話してい暇
は無い……………何か無いのか？」
再び考え込むアイン……………
「主を知っていてなおかつ主以上の人となると……………あの人
しかない！！」
何かを思いついたのか、アインは早速ある場所に向かう……

「つまりリーダーじゃ無くて、コダイ君の役に立ちたいと？」
「はい！！」
アインが向かった場所は翠屋、そして相談相手は高町家のヒエラル
キーの桃子だった。

……………ある意味一番相談してはいけない人の「何か言った？（黒笑）」

「イエナニモ。」

「でもコダイ君は強敵よ？特に家事何てもう何処のお嫁に行っても
恥ずかしく無いくらい凄いし……………」

「やはりそうですか……………」

「コダイ君を喜ばすのは……………アレしかないわね」（キュピーン）
桃子の目が怪しく光る。

「ア、アレとは!？」

「フフフフ…それはね〜」

アインに耳打ちをする桃子、話を聞いて行くとアインの顔が段々赤
く……………

「それを主にやれば……………／／／／／」

「そうよ〜 コダイ君だって男の子何だからきつと悦ぶ（誤字にあ
らず）わよ〜」

「喜ぶ……………主が喜ぶ……………やります!!やらせてください!!」

「勿論 専用の衣装も着れば効果倍増よ。今あるけど着て見る？」

「はい!!お願いします!!」

「りょうか〜い 今すぐ持ってくるわね。それにしても……………」

「?」

突然桃子がニコニコとニヤニヤが混ざった笑みを浮かべているのに
首を傾げるアイン。

「本当にアインちゃんってコダイ君の事が大大好きなのね〜」

ボンッ!!

「っ／／／／／」

その言葉に爆発したアインだった。

）数時間後）

「衣装も完璧…ポーズも覚えた……………セリフも…教わった通り……………
も、もしもの時の夜用のセリフも／／／／」
と玄関の前でウロウロしながら呟くアイン……………

「しかし……………専用の衣装とはいえ少し……………／／／／」
アインが来ているのはいつもの服では無く、エプロンドレスにフリルの付いたカチューシャ……………そう、オーソドックスなメイド服だった。

コダイ君にコレを着てお迎えすれば悦ぶわよ　それにアイン
ちゃんは素材は最高級だからもうこれで完璧よ！

「とは言っていた物の……………本当に大丈夫だろうか……………」
頭を抱えながら『唯でさえあの人は主に似ているから…………』と呟いて
いると……………

ガチャガチャ

「すまないが俺の家は使用人を雇うほど広くは無いんだ、どうやら道を間違えたらしい、もう一回学校から歩いて行く」
「大丈夫です!!ここが主の家ですから落ち着いてください!!」
「落ち着いているし、大丈夫じゃ無い格好の奴に言われたくは無い」
「主もたまに着ているじゃないですかあ!!」
「女装はオシヤレだ」

不毛な戦いは30分続いた……………

「で……………一体何なんだ？」

「えっと……………」

リビングで、『自主的に』正座をするアイン…

「いや、まずは正座はいい…別に説教する気はない」

「そ、そうですか……………」

アインはゆっくりと立ち上がる。

「すみません」

「……………で、何故アインはメイド服を着ているんだ？」

「実は……………」

アインはさっきの事を話した…

「俺の役に立ちたいから桃子に相談して、そのメイド服を着て迎えばいいと、いう事になったからそれを実行したと……………」

「はい……………」

「何でよりもよって一番相談してはいけない奴に持ちかける……」

……」
頭を押さえて溜息を吐くコダイ……………」

アインは少し俯いている……………」

「俺の役に立ちたいか……………」丁度良かったな」

「え？」

「ほら」

コダイは持っていた買い物袋をアインに渡す、そこには人参、ジャガイモ等の野菜のほか、この家では見慣れない物が……………」

「カレールウ？」

トキガワ家のカレーはコダイがルウまで一から作る。理由は「カレーは様々な漢方を使うから、より体に良い物を作るだけだ」とまさに母親らしい理由である。

「何故コレを買ったのですか？」

「今日は俺とレイとエリオとアインだけだろ？今日のカレーはアインに作って貰おうとな」

「わ、私が!？」

「心配するな、俺が口出しをする。それに材料を切ったり昼食を温めたりは出来るんだろ？」

「で、出来ますけど……何故行き成り？」

「行き成りも何も……最近俺が料理する所ガン見していたし、料理番組を真剣に見ていたしな……行き成りやらせて失敗するより、アインが自分からやるうとした時にしようと思っとな」

「あ、あるじい〜」

自分の為に此処まで考えていたのかと、思わず泣きそうになるアイン。

「泣くのはタマネギを切った時にしろ、折角エプロンを着ているから早速取りかかるか？」

「ぐすつ……ハイ!!頑張ります!!」

涙を拭い、意気込むアインだった。

調理自体にトラブルは殆どなく、被害はアインの指だったが……

「少し見せる……ん」（アインの指を啜える）

「っ／＼／＼」

などと言っお約束展開があった。

「おいしい」

子供二人には好評だった。

くおまけく

夕食後……

「そう言えば……何でまだメイド服を着ているんだ？」

「家事する時に便利ですし、動きやすいので……」

「それなら普通にエプロンでいいだろ」

「うっ」

「ああ……気に入ったのか……ソレ」

コダイがメイド服を指す。

「主！？違いますよ！？／／／」

「ん？そうなのか？…………でもさっき桃子から聞いた話ではその他にも多種多様のメイド服を着たと……………」

「それはですね…………／／／」

「気に入ったのだから？」

「……………はい／／／／」

終始コダイが弄ったのは当然のことである。

特別編『アイン頑張ります!!』（後書き）

メガネ「何でアイツを此処まで完璧にしたんだろう……弱点は性格しかない」

コダイ「アレで、性格も良かったら胡散臭いだろ……今、性格の良い自分を想像して吐き気がした」

メガネ「性格の良いコダイ……なにその胡散臭い物体」

コダイ「な？」

メガネ「性格悪くて本当に良かった……」

レイ「感謝コ〜ナ〜、スペリオルス様、心の剣様、ポワソ様、感想をありがとうございます!!」

メガネ「スペリオルス様からは『なのはvivid』のアインハルトの水着と高級ハーブティーの茶葉を、心の剣様からはFF6のティナの服（ハーフ幻獣トランス機能付き）を、ポワソ様からはスクラ大戦の大神少尉が着ていた戦闘服とサモンナイトの主人公新藤勇人と深崎藤矢のリンバウムでの衣装を頂きましたありがとうございます!!」

コダイ「……よし」（ティナの服）

メガネ「お前って本当に躊躇無いよな？」

コダイ「体にフィットして動きやすいと思っていたが……」

メガネ「？」

コダイ「ウエストがブカブカして動きづらい」

ビシッ！！！

メガネ「あ……………ラバーズがアップし始めた」

コダイ「逃げるか……………後は頼む」(逃亡)

メガネ「逃げ足速いな……………アレ？レイは良いのか？」

レイ「ほえ？うえすって何？」

メガネ「……………皆さんの意見や感想など色々待っています！
！」

レイ「ねえ！！うえすって何なの！？」

メガネ「ここで言ったら殺されるからまた後で！！」(逃亡)

レイ「うえすって何なのおおおおおおおおおお！！！！！！」

(追跡)

〈次回もお楽しみにしてください！！〉

特別編『どんなに強くても怖い物は怖い』（前書き）

エリオとマテリアルズメインって言うか子供組メイン

特別編『どんなに強くても怖い物は怖い』

「では……………始めるぞ」

真剣な顔で此処に居る皆に告げるアンズ。

それに頷くのはレイ、サクラ、エル、エリオの四人。五人の中央にあるのは……………

『恐怖、百物語』と書かれたケース……………

全ては数十分前に遡る……………

「あづ〜」

床に寝そべって半分溶けかけているエル。

「確かに……………コレは暑いですね……………」

「だらしがないぞお……………我はへいきだあ……………」

サクラやアンズもエル程では無いが溶けかけている、アンズに至っては語尾に説得力が無い……………

この日はかなりの猛暑。部屋は蒸し風呂状態、エアコンは先日壊れていて動かない。

「それに……………レイとエリオは平気なんですか？」

「ふにゆ？」

「え？」

サクラはレイとエリオを見る。

レイの来ている服は黒のノースリーブのミニスカートタイプのワン

ピース、エリオは黒いTシャツに半ズボンだった。

「黒は一番熱を吸収するんですよ？暑く無いんですか？」

「ぜんぜんあつく無いよ？」

「そんなに熱くありません」

同じように汗は掻いているが未だに元気だ。

「そう言ったらコダイはどうなの？」

「コダイさんって殆ど黒ばっかり来てますよね。しかも長袖の」

「そう言えば何でコダイ様はあんなに平然としているんでしょう…

……」

「そんな事よりあ〜づ〜い〜!!」

「そつだ！この暑さは何とかならないのか!!」

あまりの暑さに苛立っているエルとアンズだが………

「『心頭滅却すれば火もまた涼し』と言いますから心臓と頭を消せば涼しくなりますよ？手伝ってあげましょうか？」（ガチャ）
一番苛立っていたのはサクラだった。

「うわあっ！？冷えた!!今ので十分冷えた!!」

「と言うかサクラ!!家の中のデバイスは姫に禁止されているだろっが!!」

「大丈夫です……『死人に口無し』とも言いますから……」

「『殺る気!?!』」

「サクラストップー!!」

「そうですね!落ち着いてください!!」

レイとエリオがサクラと止めに掛る。

「フフフ…大丈夫ですよ?貴方達二人にはオリジナルなのはから教えて貰ったO H A N A S H Iをするだけですから……………」

もはや暑さで朦朧としているサクラだった……

「マズイ!サクラが壊れた!?!」

「アンズ、ここは私に任せて!!」

そう言っているとレイはサクラに……

「サクラが家でデバイス使ったってコダイに言うよ!!」

「ゴメンナサイユルシテクダサイコダイサマニハイワナイデクダサイオネガイシマス」(ガタガタガタガタ)

光の速さで土下座した。

「さ……流石姫の影響力は恐ろしい」(ガタガタガタ)

「しょうがないよ……………僕らは『アレ』の恐ろしさを知っているから……………」(ガタガタ)

勿論『アレ』= O S H I O K Iの事である。

「あれ?エルさん、アンズさん大丈夫ですか?」

「あ〜うん!むしろさっきのでかなし涼しくなっただけで言うか……
ってあ〜そんな話をしたらまた暑くなりそう……」

「涼しく……………そうだこの手があった!!」

アンズは何かに閃くと部屋に戻り、数秒で戻ってきた。手には何かを持っている。

「以前、姫が貰ったと言う物を思い出したんだ」

そう言っただけで全員の前にソレを出した。

「あの時のサクラで体が冷えたから、怖い物を見れば皆涼しくなる
筈だ!！」

そして冒頭に戻る……

「あの……アンズさん？」

「うむ?どうしたエリオ？」

「何で部屋のカーテンを閉めて暗くしないといけないんですか?」
テレビの前のソファで五人仲良く座っていて、目の前には飲み
物とお菓子、何故か部屋を暗くしている……

「その方が臨場感が出るだろう?」

「そう言う物なんですか……」

「エエエエエエリオ?こここ怖くなったら僕に抱きついてても良い
んだよ!？」

「エルさん、まだ始まっていません」

「安心して下さいエリオ、どんな怪談だろうと一撃(?)ですか
ら」

「サクラさん意味が分りません……」

「フッフ安心しろエリオ、王たる我に掛れば会談など塵芥だ(意味
不明)……流石に喉が渴く……む?さつき汲んだ筈なのだがもう空
か?」

「アンズさん、それリモコンです」

そして、恐怖を誘うBGMと共に『恐怖、百物語』が始まった……

エリオはこの時『本当に大丈夫だろうか?』と思った……

「ひいひいひいひいひいひい!!!ねこおおおおおおおおおお
おおお!……!」

「ひゃあ……っ!」

「コレハツクリバナシコレハツクリバナシコレハツクリバナシ……」
エルのオーバーアクション、それに驚くアーンズ、そしてサクラの自
己暗示。

これは『恐怖、百物語』が終わるまで続いた……

↳二時間後↳

「終わりましたよ?」

ディスクをケースにしまいながら言うエリオ……

「エ、エリオは……怖く無かったの?」

「え、ええ……そんなに」

「うむ……エリオは強いな……」

「あははは……(三人の反応が面白くて集中できなかったのは口が
裂けても言えない……)」

「コレハツクリバナシ、コレハツクリバヤシ、コレハクリバヤシ……」

「あのサクラさん、終わりましたよ?」

「バナッ!……そ、そうですね。大した事無かったですね」

「そ、そうですね……そう言えばレイはずっと静かだった様な

……」
エリオはレイの方を見ると……

「……………」
座ったままのレイが居た。

「微動だにしないとは……………流石姫のデバイスだ!!」

「スゴイぞ!強いぞ!カッコいい!!」

「……………」

アңызとエルから拍手を送られたが、それでも微動だにしないレイ

……………

「あれ?……………レイ?」

エリオがレイの目の前で手を振って見る……………反応なし。

「レイ?……………終わりましたよ?」

サクラがレイの方に手を乗せると……………

トサツ!

そのままソファーに倒れた……………

「気絶している!?!」

「一体いつからですか!?!」

「ヤバイ、テレビに夢中で見て無かった!!!」

「こうゆう時は……………まず姫に連絡をし「ただいま」帰って来たア

アアアアア!?!?!」

その後、コダイの的確な処置により意識を取り戻したレイ。

その日の夜は全員でリビングで布団と敷いて寝たらしい……………

くオマケく

数日後アインがマテリアルズの部屋を掃除中の時。

「ん？これは……たしかあの五人が見ていた……全く、怖い目なら
何度も会っていると云うのに………どれほど怖いもか見て見
るか……」

その日、コダイから離れないアインがいたとか………

特別編『どんなに強くても怖い物は怖い』（後書き）

メガネ「夏らしく怪談ネタです！」

コダイ「更に落ちがまたアイン……」

メガネ「ソレが俺クオリティ!!」

レイ「感謝コナ、ユタ様、龍賀様、スペリオルス様、黒一文様、Little様、ながも様、ソラト様、ポワソ様、感想ありがとうございます!!」

メガネ「ユタ様からは東方のミスティアの服装を、黒一文様は『性別＋性格変換薬』とテイルズオブジァビスのナタリアの称号『マルクトの星』の服を、ポワソ様からはハムスターの着ぐるみ頂きましたありがとうございます!!」

レイ「ハム太郎」（ハムスターの着ぐるみ）

メガネ「これまた懐かしいのを……」

コダイ「お、この羽動く」（ミスティアの服）

メガネ「何だろうな……もはやコスプレが当たり前になったな」

コダイ「良いだろ？面白いから」

メガネ「まあね」

レイ「皆様からの意見や感想などイロイロ待っています!!」

「次回もお楽しみにしてください!!」

事の発端……byコダイ(前書き)

デート直前回です。

そして久しぶりのコダイ視点。

そして短めです。

事の発端…… byコダイ

「ん？どう言う事だ？」

いつもの様に学校をサボ……じゃなくて仕事が午前にあつたのでそれを終わらせ。今、翠屋で暇を潰している所だが……

「あの子達の事をどう思っているかって事よ」

「それと何処まで行っているかよ」

向かいにいるリンデイと桃子が酔っ払いの様に絡んで来た。それより桃子仕事はどうした……

「あの子達とは？」

「フェイトやアリシア達の事よ」

六人娘の事か……

「別に、普通だが？」

「皆あんなにスキスキ光線を出しているのに？」

「桃子……何だそれは……」

そんな光線出していたのか？

「だって用事が無い限り殆ど一緒に登下校しているし」

「通学路が同じなだけだ」

「お弁当だつて一緒に食べているし」

「席が近いから」

「あーんとかしているんでしょ？」

「貴様にもやっただろ」

「抱きつかれたりしているんでしょ」

「栄養補給らしいが？」

「コダイ分とか言っていたからな……」

「……………」

「……………」

アレ？リンディと桃子が固まっている。

「どうした？」

「な、何でもないわ（この子……天然すぎる、流石レイちゃんのマイスターなだけあるわね）」

「あははは……（強敵ねこの子……）」

何でもないなら良いか……

「だが何で行き成りこんな話を？」

「だってコダイ君は幼女から人妻までを落としちゃうフラグビルダーだもん」

「だからフラグとは何だ、桃子」

幼女から人妻？……一体誰の事を。

「レイちゃんを始め、なのは、フェイトちゃん、アリシアちゃん、アリサちゃん、すずかちゃん、はやてちゃん、アルフ、リニス、プレシアさんでしょ？、シグナムさん、ヴィータちゃん、シヤマルさん、後、はやてちゃんの知り合いのリーゼアリアちゃんとロツテちゃん。それと一緒に住んでいるアインちゃん、サクラちゃん、エルちゃん、アンズちゃん……合計19人ね」

「しかも全員美女よ？」

「まあ、それは認めるが……それと何の関係があるんだ？リンディ」

「だってもう皆と知りあつて四年位よね？もう好きな人が一人や二人出来たんじゃないの？」

「……ただ四年間一緒に居ただけだろう」

さつきから桃子とリンディの言ってる事が分らない……

「ええー」

「ど、どうやって説明していいのやら……」

何で二人とも苦笑い？

「えっと……コダイ君、簡単な質問するから答えてくれる？」

「ん？分つた」
「一体何があるんだ？……」

「彼女とか出来た事ある？」
「ある訳が無い」

「好きな女の子のタイプは？」
「考えた事もない」

「巨乳派？貧乳派？」
「どつでもいい」

「男の子がベツトの下に隠す様な本は？」
「何の事だ？本なら本棚だろう」

「異性の一番好きな体の部位は？」
「考えた事もない……」

意味の分らない質問はまだまだ続く……一体何なんだ？

「……………」

質問に答えていくと段々二人が変な顔になってきて、最終的には頭を抱えていた。

「ねえ……………コダイ君…コレが最後の質問何だけれども…」

「ようやくか……………で、最後の質問とは？」

やっと帰れる……………今日の晩御飯何にしようかな……………」

「…あの子たちの事を女として見て無い？」

桃子とリンディが同時に言った質問に……………」

「当たり前だろ？」
即答した……

「おまけ」

「……………」
ここはテストロッサ&ハラウン家の一室。
そこにはあるモニターの前でorzになっている『19人』……………

『さつきから質問の意味が分らない』

モニターからはコダイの声、実は今までのコダイの会話は全て中継されていた。

事の発端……byコダイ（後書き）

メガネ「デート編直前回!!」

コダイ「なあ、桃子とリンディは何であんな質問を……」

メガネ「うるせえ天然!!コレでも飲め!!」（前回、黒一文字様から貰った『性別＋性格変換薬』）

コダイ「!?!」

PON

コダイ（女）「イエーイ 久々にコヨリちゃん参上」（いつの間にかセーラー服＋ダボダボセーター）

レイ「可愛い〜!!」

コヨリ「うおっ!!レイちゃん!?!」

メガネ「もうお前誰だよ……」

コヨリ「良いじゃん別に?面白ければ」

メガネ「根っこ変わんね〜。んじゃあ今回はお前な?」

コヨリ「OK 感謝コ〜ナ〜、龍賀様、スペリオルス様、黒一文

字様、ながもく様、ヒロアキ141様、ポワソ様、感想ありがとうございます
「
」

メガネ「スペリオルス様からは『そうめん』、ヒロアキ141様からはモンスターボール（ポケモンの奴に非ず）とゴッドシグマとマジンカイザーとランスロット・アルビオンとグレートマジンガーを、ポワソ様からはレイにはオバケのQ太郎の着ぐるみをコダイには東方Projectより幽々子の衣装を、頂きましたありがとうございます！」

コヨリ「あ、コレ結構良いかも」（幽々子コス）

レイ「わ〜！おばけだぞ〜！」（オバケのQ太郎の着ぐるみ）

メガネ「何だよこのカオス」

コヨリ「次回からデート編？」

メガネ「オリジナルがだいぶ纏まったからね……あつデートの後にも少し話を挟んでからオリジナルです」

コヨリ&レイ「皆様からの意見や感想など色々待っています！！」

メガネ「ちなみにデートは一人ずつやりません。じゃないと死ぬから」

「次回もお楽しみにしてください！！」

デート・はやて編(前書き)

ついにデート回です!!

コダイ視点で進みます。勿論ggdggdです。

またの名をコダイの……オヤ? ダレカキタヨウダ

デート・はやて編

夏休み前日の夜、突然はやてから電話が掛った。

「はやて、どうした？」

「コダイ君……えっと、明日暇？」

明日？……まあこの前の暗躍の後特に何も無かったからしばらく休みのはず。

「暇になった」

「じゃあ明日ウチと遊びに行かへん？」

「構わない」

「ホンマ！それじゃあ時間とか後でメールで連絡するで〜」
そう言っただけ電話はやて……何で嬉しそうなんだ？

翌日……

「はやての言われた場所は……此处で良いんだよな？」

あの電話の後着たメールに書いてあった場所に着く所だ……

「……あ、コダイ君やお〜い！！」

ん？はやて？……あそこか、思いつ切り手を振ってこっちを見る。

「……ゴメン、10分前に着くつもりが5分も遅刻した」

「ええって、別に……ってそれモロ5分前って事やる!？」

「ああ……そう言えばそうだな」

「素で言っただんか!？」

本当に5分前に着くつもりだったけど……

「そんな事は置いといて、今日はどうするんだ？予定はそっちが決めるって……」

「そつやな……最近出来たデパートや、ウィンドウショッピング
や」

「分った」

「ほな行くで」

とはやては腕を絡めてくる。

「動きづらくないか？」

俺とはやての身長差はかなりある。勿論はやて>>俺だが。

「全然」

「それなら良いか」

この状態のままデパートに向かった。

「流石新しく出来たデパートやな〜スゴイ綺麗やん」

「結構広いな……」

「こつゆつ所着た事無いんか？」

「殆ど無い……と言つか」

「なんや？」

「こんな場所に来ると必ずと言っていいほど迷子になる奴が一人い
る」

「……………あゝ」

多分、今の俺とはやての脳内には髪の毛の青いアホの子が浮かんでいる
はずだ。

「ま、まあ今日はいないんだし、そう言つのは忘れてデートをエン
ジョイヤで」

「そうだったな…そう言えばコレはデートだな」

「デート……そうやった／＼」

あれ？……何か赤くなつて無いか？

「大丈夫か？」

「ふえ？うん！大丈夫や！！（アカン、意識したら顔が熱くなつてもうた／＼／＼）」

「気を付けるよ？最近熱中症で倒れる奴多いから」

「心配してくれてありがとうコダイ君……／＼／」

……本当に大丈夫なのか？

「そや！コダイ君。そろそろお腹すかへん？」

「ん？」

そう言われて、携帯で時間を見るともう昼になる頃だった。

「時間的には丁度いいかもな」

「実は良い所知ってるんや、コッチやで」

はやては腕を絡めたまま俺を引っ張っていった……

「ここや」

俺達が付いた場所はお好み焼き屋だった。昼前だったので簡単に席に座れた。

「コダイ君は何か決まった？」

「そうだな……」

メニューを見て見ると……面白いものが目に入った。

「決まった」

「じゃあ呼ぶで？店員さん」

店員呼んで注文して、少しするとメニューが運ばれた。

はやてはモチーズ（実際にあるメニューです）、俺はアメリカンドッグお好み焼き（コレも実際にあります）だった。

「なんやアメリカンドッグお好み焼きって、一体どつちや!？」

「面白そうだから頼んだ」

「あはははは！流石コダイ君やな」

早速タネを混ぜて焼き始める……失敗？するはず無いだろ。

「もう良い頃だな…」あ、ちよつと待って追加注文来るから「え？」

何時の間に？と思っていたら店員が来て運ばれたのは……

「ご飯？」

「ご飯や」

茶碗に盛られた白いご飯だった。

「お好み焼きはおかずやろ？」

「そうだったのか……」

知らなかった……（天然）

「合つのか？想像がつかない」

「騙されたと思うて食うてみ」

俺は出来たアメリカンドッグお好み焼きを小さく切り、少し冷まして食べて、ご飯も食べた……

「……美味しい」

「そうやろ？炭水化物と炭水化物は相性が良いんや」

焼きそばパンみたいなものか？

「分つてくれる人が居て良かったわ〜ウチでお好み焼きやる時にコレやると皆微妙な顔するんや」

「まあ……そこは仕方ない。好みとかの問題だから」

コレは初めて食べるには勇気が居るかもしれない……

「ん〜モチとチーズのトロトロが美味しい〜……はい、コダイ君」

「ん？」

「あ〜ん」

はやてがモチーズを一口サイズにして差し出してきた。

「あーん……………ん美味しい」

たしかに、モチとチーズのトロトロが凄く美味しい。

「そっちにすれば良かったかな……………ん、このアメリカンドッグお好み焼きも……………アメリカンドッグだ」

「なんやそれ？」

「いや、見てくれはお好み焼きなのに何故かアメリカンドッグ何だよ……………」

「へえ……………一口くれへん？」

「ん？ああ」

アメリカンドッグお好み焼きを一口サイズに切って……………

「ってこのままでは熱いか……………フー、フー」

息を吹きかけ少し冷ます。

「コレ位だな……………ほら、あーん」

「……………」

そう言っただけだが、はやては何故か固まっている。

「どうした？早くしないと冷めるぞ？」

「……………ふえ！？そ、そうやったな！あ、あーん……………（伝説の『フー、フー』やと！？反則や……………）……………」

覚醒したはやてはようやく差し出したお好み焼きを口に入れた。

「どうだ？」

「……………アメリカンドッグや！」

「なんだよソレ」

さっき言われた事言い返す。

「何やこれ！？お好み焼きなのにアメリカンドッグや！」

「な？アメリカンドッグだろ？」

「あははははは！アメリカンドッグやアメリカンドッグ！！」

はやてが終始笑いながら一枚ずつ完食。さらに面白そうな物が無いかとはやてともう一枚ずつ別のを追加した。（ご飯付き）

食べ終えて会計を済ませる。勿論俺が払った。

その後は特に考えて無いらしく家までの道をゆっくり歩き事にした。

「いや〜あそこ面白かったな、今度皆誘おうか？」

「それも良いかもな……まずアメリカンドッグを食べさせる」

「勿論や！」

今、俺達は腕を組んでいない。手にはビニール袋……今夜の夕食の材料だ。

「まさか、買い出し忘れるとわな〜」

「それだけ楽しかったって事だろ？」

「そやな」

「しかし結構買ったな……今日の夕食はもしかして……カレー？」

「正解や、流石やな。ライン聞いたで？オムライスとかケッチャッ

プでリクエストした絵を描いているんやろ？完璧お母さんや」

「誰がお母さんだ……」

全く。何処をどう見たら俺がお母さんなんだよ

何処をどう見てもお母さんです by 作者

……何か異常に殺意が湧いてきた……

「どうしたん？」

「……何でも無い……あ」

そう話しているともうはやての家に着いた。

「今日はありがとな、コダイ君」

「ああ、俺も楽しかった」

「そうなんか？コダイ君って表情に出ないから分らん時があるしな〜」

「まあ無表情なのは認めるが。だが俺は好きでも無い奴と一緒に居られるほど優しくは無いからな」

基本はどうでもいいが特に バカは躊躇無く殺す、視界にも入れたくないし……ってえ？

「……好き……好き……」

何か俯いてブツブツ言ってる……

「ああ……そろそろ俺も夕食の作らないといけないから……またな、はやて」

「うん……バイバイ」

はやてにそう言っつて、俺は自分の家に向かった……

くオマケく

はやて帰宅直後……

「うう……好きって言われてもうた／＼／」

実際には『好きでも無い奴』としか言っつてません。

「あくん、なんかもされたし、したし……／＼／」

時々やっています……

「もう……コダイ君のお嫁さんになるしかあらへん／＼／」

早すぎです……

「コダイ君のお嫁さん……」

(妄想中……………)

「ぷしゅ／＼／＼／」(気絶)

その後、気絶したはやてをリインが見つけて八神家は大騒ぎになっ
たとか……

デート・はやて編（後書き）

メガネ「デートの話なんて俺には無理だ!!」

レイ「コレってくだぐだ？」

メガネ「何かレイに言われるとスゴい凹む……」orz

レイ「ふにゅ？」

メガネ「気にしないで良いから……先進めて」

レイ「感謝コナ、龍賀様、ながもく様、黒一文字様、山義
芳原様、スペリオルス様、真王様、ポワソ様、ソラト様、感想をあ
りがとうございます!!」

メガネ「ながもく様からは靴下と手袋を、黒一文字様からは『根っ
こから変わる性別＋性格変換薬』を、山義 芳原様からはパラレル
ワールドinnミッドチルダ行き往復切符二十枚とアンドロイド50
0億隊と第二次世界大戦、現代の戦車一式と魂魄妖夢の服を、真王
様からはコダイに『女装禁止令』と『シャーマンキングのアンナの
服』を、ポワソ様からはドラゴンクエストの『みずのはごろも』を、
レイにはコレットの衣装を、頂きましたありがとうございます!!」

レイ「ねえねえ!! さっきおっきいお船があっちに走ってたよ!!」

（コレットの服）

メガネ「山義 芳原様のお土産を運んだ船だろう？あははは……
かなり遠くに居るのにデケェ……………」

レイ「あれれ？コダイは？」

メガネ「コダイは黒一文字様のお土産『根っこから変わる性別＋性格変換薬』を飲ませた所だ」

コヨリ「おまたせ…しました」(『みずのはごろも』着用)

メガネ「誰だよお前」

コヨリ「コヨリ…です」(CV・SHUFFLE!のネリネ)

メガネ「何で声まで変わっている？」

コヨリ「わたしにも…わかりません」

レイ「アレ？確か今はコレがあるんだよね？」(『女装禁止令』を出す)

メガネ「ん？それは今はコヨリだから問題無いだろ…それにドラクエやっている人は分ると思うが『みずのはごろも』は男でも装備できるから、女装って言う訳でもないからな」

コヨリ「そうだったんですか……………」

メガネ「知らないで着たのかよ」

コヨリ「はい……………」

メガネ「あ、それはそうとデート編終わるまで暫くそのままな？」

（理由、ここにコダイを置くと天然発言が連発しそうだから）

コヨリ「はい……わかりました」

メガネ「（……何か調子狂う）」

レイ「皆様からの意見や感想などイロイロ待っています!!」

コヨリ「え……え〜っと……まっています」「ペ」

〜次回もお楽しみにしてください!〜

デート・すずか編(前書き)

デートの順番は思いついた順で書いています。

デート・すずか編

今日はすずかと約束したが…………

「すずか、俺時間合っているよな？」

前回の事を踏まえ10前に着いたが、すずかが先に居た……

「う、うん」

「で……………すずかは何時からいた？」

「……………10分ちよつと前」

「ダウト、すずかは嘘を付くと目を左右に動かす」

「うそっ?!」

「嘘だ」

だってコイツ俺に気付くまでやたらと時計を気にしていたし……

「で……………本当は？」

「……………30分前」

「早すぎだろ……」

「だって、待ち切れなかったんだもん」

そう言つて頬を膨らませるすずか……………

「まあ……………最近、仕事で遊べなかったものな」

今は、クイントとティードが居るから少し楽になっているが……

「そ、そう言う意味じゃないんだけどなあ……………」

「何か言つたか？」

「う、ううん！何でもないよ？」

「そうか……………で、今日の予定は「動物園!」……………動物園？」

俺の言葉に割って入り、詰め寄ってくる……………

「あのね！実はね！その動物園で「分つた、落ち着け、それと詰

め寄るな」あ、ゴメンノノノ」

顔を少し赤くして少し下がる……………

「じゃあ行くか」

「うん」

そう言っただけの腕に抱きついてくるはずか……
「……………何か逆な感じがしないか？身長的に」
はやての時より身長差がモロに出てくる。
「うーん……………そこは男女って事で気にしない方向でね」
「……………分った」
すずかに連れられ動物園に向かう事にした……………

特に問題は無く動物園に着き、チケットを買い入園した……………

「……………ここって確か最近出来た動物園……………」

その動物園はかなり大きい動物園で有名だった。CMとかでやって
いたレイ達が食い入るように見ていた……………

「行きたければ言えば良いのにな……………ん？『期間限定、動物の赤
ちゃんふれあいコーナー！ライオンの赤ちゃんも触れます』？」

……………コレが目的か？流星は無類の猫好き。

「……………いくら猫好きだからってはくれるなよ、すず……………」

振り向くがそこにすずかはいない……………コレは……………アレだ……………は
ぐれた。

「はあ……………仕方ない」

近くに建つてある電灯に登りすずかを探る……………下で警備員が何か
言っているけど無視。

「えっと……………猫科のエリアは……………早速いた、と言っかナンパされて
る」

腕も掴まれているし、走っていくにも人ごみで見えないから……………

……………よし。

タンッ!!

電灯から飛び……

ガシャン!!

近くの檻に捕まる……これなら最短で行ける。

次々と跳び移り……すずかの元に降り、取り敢えず掴まれてる男の腕を払いのける。

「あ、ありがとうコダ」「コノ、バカが」「ええっ!?!」

ゴンッ

「うう〜」

俺はすずかをかなり強めにゲンコツを落とす。

「開始早々はくれるなよ……俺が一緒なのを忘れるなよ……」

「ゴメンね?コダイ君……」

涙目で謝るすずか……強くやり過ぎたか?

「おいテメエ!何か「黙れ、このまま大人しく去るか、肉食動物の餌になるか、俺のエサになるかどれかにしろ」「ヒイヒイヒイ!!」

「スイマセエエエエン!!!!」

泣きなが逃げていくナンパ男。

「ビビる位ならナンパなんかするなよ……」

「あははは……コダイ君の眼力でそんな事言われたら誰でも怖がると思うよ」

う〜ん……まあ、本当にやるつもりだったけど。

「それとすずか、なんかテンションおかしくないか?」

普段ならあんな事しないのに……

「そ、それは……だって／＼／」
そう聞いた途端、すずかが俯き顔を赤くしてモジモジして、小さな声で……

「コ、コダイ君と………一緒だから／＼／」

「俺と？」

「うん………だって、こうゆうのあまり無かったから／＼／」

まあ………今思えば、殆ど六人娘の誰かとセットだったしな……

「だったら尚更はくれたらダメだろうが」

すずかの手を取り、指同士が絡み合う様に握りこむ。

「っ／＼／＼／」

「ほら、あつちにお望みのふれあいコーナーがあつたぞ？」

「コココココダイ君！？手！」

「ん？ああ、この方が腕に抱きつくより離れないだろ？」

「そ、そうだけど／＼／＼（だってコレ………恋人握りだよ）／＼／」

「ほら、ライオンの赤ちゃんが待ってるぞ？」

「うん／＼／」

すずかの手を引っ張って行く………

その時は大人しかつたが、ふれあいコーナーのライオンの子供を見ると………

「可愛い〜」

速攻でライオンの子供（アリー・）を抱きしめた、他にも目もくれず………

「コダイ君！コダイ君！見て見て、可愛いよ！」

「可愛いのは分つたから落ち着け」

「可愛いなく持って帰っちゃダメかな〜」

「窃盗は犯罪だ………」

俺なら、完全犯罪出来るけど……

「あつ！」

スル…

「ん？」

突然、さすがが抱きしめていた力が緩みアリーが落ちそうになったのを素早く抱き止める。

「ゴメン！怪我とか…」

「大丈夫だ無傷だ」

そう言つて、アリーを撫でると『グルルルル』と甘えたように喉を鳴らした。

「ん？お前人懐っこいな……ここはどうだ？」

腹の部分を撫でる…

「グルルルルル」

「なら此処は？」

他にも喉とか肉球などを触る……

「クルルルルルル」

コレも好評の用だ……

「わく／＼（気持ち良さそう、私もあんな風にコダイ君に……
つて！何を考えてるの私／＼／＼）」

……何かすずかが頭を抱えて身もだえてる……

「どうしたんだらうな？」

「グルルル」

ん？『そんな事いいから、もっと撫でなさいよ……！』だって？何か
どっかのツンデレを彷彿とさせるライオンだな……

その後すずかは『家族にお土産を買いたい』と言ったのでふれあいコーナーを後にし、お土産屋に向かった。

「うーん……ぬいぐるみ……だと猫の噛みつき人形になっちゃうし、お饅頭……は猫が間違つて食べちゃうから、マグカップや身につけるアクセサリー系がいいかな……」

と、ブツブツ呟いているすずか。

「俺も何か買うか……」

動物饅頭（様々な動物の形をした饅頭）を5、6箱買っておく……
…ん？

『アニマルシリーズ・猫』

「……何だコレ？」

俺の目の前にあつたのはカチューシャに猫の耳を付けた、俗に言う『ネコミミ』と言う物だ。それもかなりリアルに作られている……

「……………」
思わず付けて見る、近くに鏡は……あつた……髪の毛で本物の耳が隠れているし、猫耳が黒いから本当に生えている見たいだ……
「コダイ君、何かあつた……………」

ピシッ！！

あ、固まった……………どうする？

- 1 猫耳を取る。
- 2 声を掛けて揺する。
- 3 取り敢えず『にゃん』と言って見る

「……………にゃん」
手も猫らしくポーズも取って見る。

「……………」
え？反応なし？

「……………にゃ／／／／」（気絶）
「すずか？」

顔を真っ赤にして煙を上げて気絶してしまった……………

「どうするか……………」
取り敢えず会計を済ませよう……………

「この時間帯になると客も少ないな……………」

会計を済ませた後、すずかを近くのベンチに運び頭を脚に……………まあ膝
枕をして、起きるのを待った。

「にゃ／……………／／／／」
未だに気絶しているよコイツ……………ノリで買った猫耳でもつけるか？
「……………えへへ、だめだよコダイくん……………そんな所舐めちゃ／／／
／」

……………もう一発殴って置くか。

「はっ！……！」

突然、すずかが起き上がった……………殺気に気付いたか……………命拾いし

たな。

「コダイ君！？耳が無い!？」

「いや、偽物だから」

と言つて猫耳を見せる。

「そっかあ〜……………てっきり私の願いがなかったのかと

後半が聞こえなかったけど、殴つて置くべきか？

「所で、調子はどうだ？」

「えっと……………うん、全然平気」

そつ言つてほほ笑むが……………

くう〜

「あ／＼／＼／」

腹の虫がなつたようだ……………

「お土産の動物饅頭食べるか？」

多めに7箱買つているから問題ないしな……………

「い、頂きます／＼／＼／」

その場で、饅頭を1箱食べてから、動物園を後にした……………

帰る時、何故かすすかの要望であの時の様に手を握つて（恋人握り）
帰る事となつた……………

〜おまけ〜

すずか帰宅後…

「えへへ……今日は楽しかったなあ〜助けてくれたし、アリーちゃん可愛かったし、猫耳コダイ君可愛かったし、その後気絶して……
……っ!」

ボン!!!

「そそそそうだ!!今気付いたけどあの時膝枕されていたんだっ
!!!うう〜……コダイ君に私達を女として意識して貰うつもりが余
計コダイ君の事を意識しちゃったよう//////」

すずかはファリンに呼ばれるまで身もだえていた……

デート・すずか編（後書き）

メガネ「すずかは動物園ってイメージで決まっていたよ！！」

レイ「コヨリ！これ動物お饅頭だよ！」

コヨリ「ウサギ……かわいいです。たべるのもったいないです……」

レイ「食べない方が勿体ないよ？食べた方がウサギさんも喜ぶよ」

コヨリ「それでは……いただきます。モムモム……おいしいです」

メガネ「これは天然？無垢？どっちだ？どっちにしる可愛いけど」

コヨリ「かわいいは……せいぎ？」

メガネ「誰から聞いた!？」

レイ「感謝コ〜ナ〜、龍賀様、ながも〜様、黒一文字様、スペリオルス様、感想をありがとうございます!！」

メガネ「黒一文字様からは大量の料理を、スペリオルス様からは遊戯王GXの『早乙女レイの服（3期）』と小龍包を、頂きましたありがとうございます!！」

コヨリ「スカート……みじかいです」（早乙女レイの服）

レイ「美味しそ〜コヨリ！早く食べよう!」（キラキラ）

「コヨリ」はい……」

レイ「頂きま〜す」

「コヨリ」いただきます」

レイ「アムアム……美味し〜」

「コヨリ」モムモム……美味しいです……レイ、くちがよ〜れていきます」（フキフキ）

レイ「ありがと〜」

メガネ「えっと……『コヨリの容姿は一言で言うなら』『ロリ巨乳』です。レイ、最後締めて」

レイ「っ〜!!!!」（小籠包で身悶え中）

「コヨリ」あついつて、いったのに……」

メガネ「……っ。皆様の意見や感想など色々待っています!!」

……俺も食べよ〜っ」と

「コヨリ」よそいます……なにがいいですか?」

メガネ「何ていい子!?!」

〜次回もお楽しみにしてください!〜」

デート・アリサ編(前書き)

とにかくアリサをデレデレにしてみました……

ツンデレは大好きです!!

デート・アリサ編

「……………」

俺は大抵の事なら平然としていられるが、今回はかなり驚いている。

「あら？良いタイミングね」

なぜ俺の家の前にアリサを乗せているリムジンが……いや、確かに昨日の夜に約束をしたが……

「何でリムジン？」

「何でつて……今日はコレで行くのよ」

……………取り敢えず乗る事にした。

「で、何処に向かうんだ？」

「着けば分るわ」

そう言われて車に乗る事数十分……………

着いたのは中心部から少し離れた山にあるレストランだった。

「海鳴にこんな所があったのか……………」

「知らないのも無理は無いわよ、ここは有名な隠れ名所だもの。予約するの大変だったわ」

「有名？隠れなのにか？変じゃないか？」

「自分で言つて何だけど、そう思うわ……………」

有名な隠れ名所って矛盾してるからな。

「で、これからどうするんだ？」

「そうね……………メインは夜だし……………近くの湖にボートの貸し出しがやっているからそこに行きましょう」

「そこは任せる」

「勿論、このアリサ様に任せなさい」

アリサに腕に抱きつかれて、その湖に行く事となった……

何か逆効果だな……何とかして落ち着かせないと落ちる……

「とにかく落ち着け」

「そ、そうね……すゝはゝすゝはゝ」

深呼吸をするアリサ……だが、立っていたのが不味かった。

グラッ……

「え？」

さっきまで暴れていたのに、ボートはまだ揺れている……ったく。

グイッ

「ふえ？」

ポフッ

「っ！！！！」

落ちそうになるアリサの腕を引き自分の腕の中に抱きよせた。

「ああああああああアンタ！！一体何によ！？！！！！」

「揺れているんだ、収まるまでこうしている」

ぎゅゝ

暴れない様にしっかりと抱きしめる。

「あうあう／＼／＼／＼（落ち着くのよアリサ！！これはアイツがアタシ達が落ちない為にしただけで、アタシが考えている様な意味何か無い！！……でも、コイツ……良い匂い……ってアタシは乙女かゝっ！！！！／＼／＼）」

何か即行で大人しくなったが、収まるまでこうしていよう……

暫くして、何とかボートの揺れは収まった……

「で……もう少しで日が暮れるから、ボート返すか？」

この状態のまま聞いてみる

「／／／／／」（コクコク）

「戻るが、このままじっとしているよ？」

「／／／／／」（コクコク）

無言で頷いてる……怖かったのか？

とにかく揺らさない様に漕いで、事故も無く戻る事が出来た。

ボートを返し、戻る頃にはもう日が暮れていた。

確かアリサはメインは夜つて言っていたが……

「なあ、夜に何かあるのか？」

「まあね、付いてくれば分るわよ」

アリサの後を付いて行く事にした……

「これは……」

「ふふ〜ん！どう？」

アリサが誇らしげに胸を張る。

予約していたレストランは静かで良い雰囲気……料理もそれに合う

様な美味しい、それ以外に……

「星空を見ながらコース料理って……」

レストランに隣接してあるテラスにある席で、明りはテーブルにある手元が見える位だけで、そのおかげか上を見ると普段見れない位の星空だった。

「コレは有名になるな……」

「最近口コミで話題になってるらしいわよ。」

そんな話をしながら料理を食べ進めていき、最後にデザートのケーキがやってきた。

「このケーキも美味しいって評判なのよ……アム」

アリサがそう言いながら食べ始める………だか

「アリサ？」

あれ？………徐々に赤く……

「きゅ／＼／＼」

「アリサ？………まさか」

俺もケーキを食べて見る………ブランデー入りだコレ。

「コレだけで………酒に弱いのか？」

アルコールの臭いだけで倒れる奴もいるからな………サクラ達とか。

「取り敢えず休める所を探すか………」

店員を呼んで聞いた所。実はここはレストランでもあり宿泊施設でもあり………つまりペンションみたいな物らしい、部屋は空いているので使わせてもらう事にした。

「………よっ」

案内された部屋のベッドにアリサを寝かせる。

「さて………一応連絡はしたから問題は無いだろう………」

今の内に酔い止めの薬でも………

クイ

「ん？………」

振り返ってみるとアリサが目を覚まし俺の袖を掴んでいた。酔っている所為で顔が赤くなっている……

「どうした？」

「……………の？／／」

「ん？」

「いつちやうの？／／」

「は？……………」

上目遣いで……………何か涙目になっている。

「わたしをおいて……………どっかいつちやうの？／／／」

「置いては行かない、今から薬を買ってくるから大人しく「やあ！／／／」って

更に強く掴まれる。

「やあ！！アリサを一人にしないで！！／／／」

今度は腕に抱きついてくる。

「すぐ戻るから待っていていろって」

「やあだあゝいっしょにいてえゝ／／／」

もう何か泣きそうだ……………酔っ払いには正論は通じないし……………こういうのは満足させて寝かせるしかないか。

「分った…居てやる」

「ホント！？ウソつかない？」

「本当だ……………」

「じゃあ……………アリサのあたままでて」

……………やらないと泣きそうだし……………アリサの頭を優しく撫でる。

「えへへゝ／／／」

何か『ふにゃゝ』と言う効果音が似合う顔になっている……………

「ねえねえ！今度はギュゝってして！／／／／」

……………と言う感じにアリサの言う事聞いている内にアリサは眠った
が……………

「えへへゝ／／／」

思いつ切り抱きつかれているので動けない。外そのものなら涙目に

なる……

「……薬は明日にするか」
俺も寝る事にした……

くおまけく

「／／／／／／／／／／／／／／／／」

翌朝、頭痛によりかなり早く目を覚ましたアリサは昨夜にあった事をはっきりと思い出した……

「／／／／／（酔っていたとは言え、何て事を……コダイに抱きついたり頬ずりしたり子供みたいに甘えて……酒の力恐るべしね／／／）」

アリサがチラリと横を見るとコダイが横で静かに寝息を立てている。……小学生の頃とか泊まっていたりしてたけど、一番早く起きてたから分らなかったけど……コダイってこんな可愛い寝顔を……つて！アタシは思春期男子か！！／／／

頭を抱えて悶えるアリサ、けどコダイを起こさない様に小声で器用に叫んでいる……

「っ！……まだ痛いわね。もう少し寝ようかしら……」

チラリとコダイを見る……

「……うん。別に良いわよね……うん……お、おじやまします／／／」

アリサはさっきまで自分が居たコダイの腕の中に戻り再び眠ってしまった。

「えへへ／／／（私をここまで好きにさせたんだから責任取りなさいよね）」

……二人が起きたのは昼頃だった……

デート・アリサ編（後書き）

メガネ「アリサ編は当初。アリサが風邪を引いて、コダイが看病してデレデレアリサのつもりだったが、それではデートじゃないだろうと思いききなおした裏話があります」

レイ「アリサ可愛い〜」

コヨリ「おさけは……ハタチからですよ？」

メガネ「ケーキだから問題ない！」

レイ「感謝コ〜ナ〜、スペリオルス様、黒一文字様、心の剣様、龍賀様、ながも〜様、感想ありがとうございます!!」

メガネ「スペリオルス様からはうな重を、黒一文字様からは旧スク水着を、心の剣様からはバイオハザード2のエイダ・ウォンの服を、龍賀様からは龍斗がネコミミとメイド服で（メイド服+ネコミミ+涙目+上目遣いで「お帰りなさいませご主人様」と言っている C.V 柚木涼香さん）のビデオを、頂きましたありがとうございます!!」

コヨリ「いまから、レオンに……ロケットランチャーをあげてきます」（エイダ・ウォンの服）

メガネ「落ち着け、レオンは良いからな？」

コヨリ「はい……わかりました」

レイ「今回は誰かな？」

コヨリ「みなさまからのいけんやかんそうなどイロイロ……まっています」

メガネ「さて、この龍賀様から貰ったこのビデオを見るか……」

お帰りなさいませ、ご主人様……

メガネ「グボオハツ!!」(吐血)

次回もお楽しみにしてください!!

デート・フェイト編(前書き)

少しフェイトらしい感じのデートかな？
aggaggなのは変わらないけど。

デート・フェイト編

昨日の夜、電話でフェイトと約束をして、フェイトが言った場所へ早めに向かう途中に……

「あれ？コダイ？」

「ん？フェイトか」

フェイトと遭遇した。

「早いな……」

「うん、早く起きちゃったから驚かせようかなくて」

「十分驚いた……遅刻とか既に居るとかならまだしも、向かう途中で合うとは……」

「私も……」

これは予想できなかった。

「まあ、早めになったが今日の予定は何だ？」
無駄なんだけどね……

「え？予定……最初は映画館かな？」

「映画？」

「リンディ母さんが『凄く泣ける』って言ったの。ホラ、チケットもくれたよ」

そう言つてフェイトが映画のチケットを見せる……リンディの時点で怪しさ満点だが。

「早速映画館に行くか、遅れたら意味無いからな」

「うん」

そう言つてフェイトが俺の腕に抱きつく。

「動きずらくないか？」

「ふえ？私は大丈夫だけど……もしかして動きずらい？」

「俺は平気だ」

「なら問題無いね」

「そうだな」

そのまま映画館に向かう事にした。

映画館に着き、適当に飲み物を買って指定された席に座る……客層は若いカップル……ジャンルは恋愛か？いや、あのリンディが勧めた映画だ。何かある筈……とすると大人向けのか？

「あ、始まるよコダイ」

そんな事を考えていると映画が始まった……ってコレは……

「「「「「きゃあああああああああああああああああ……！」

「「「「

あゝ……予想斜め上を言ったよあの女。

「ヒック……コダイ」

「確かにコレは『凄い泣ける』映画だな」

フェイトが俺の腕にしがみ付いてと言うか、顔を抑えつけている……俺が見ているのは一番怖いと話題のホラー映画だ……腕や首が飛んだりしているし……スプラッターも入ってるなコレ。

「コダイは平気」「きゃあああああああああ……！」
「ひゅっ……！」

ぎゅ〜!!

「もつとエグイ物見ているだろ、と言っか力緩める服が千切れる」
「だつてこわ」「いやああああああああああああ!!」「」
きゃああああああああ!!」

う〜ん……………ホラーは良く見るジャンルだが……………

「」「」「ぎゃああああああああ!!」「」「」

映画より客の悲鳴が怖い……………

「っ……………」

今度は首に抱き付いてガツチリホールドしているフェイト……………

「フェイト首を絞めるなと言っか離れる見れないだろ」

「ゴメン……………お願い……………終わるまでこのままでっ……………」

……………もしかしてコレが男女のカップル客が多い理由か？

「はあ……………」

「ほら、アイスコート……………要望通りミルクと砂糖多めの奴」

「あ……………ありがとう」

テーブルでうつぶせになっているフェイトの傍にアイスコーヒーを置く。

映画が終わり、終わっているのに未だにしがみ付いてるフェイトを解放するために近くのファーストフードで休憩を取る事にした。

「大丈夫……な訳無いか」

「リンディお母さんのばか……」

「何回も被害にあっているんだから、学習しろよ……」

「うう……言い返せません（でもコダイにずっと抱き付いていた

……うう～思い出したら顔から火が出そう／／／）」

何か脚をジタバタしているけど……大丈夫か？

「……で、次の予定は？」

「えっとね……チョット見て見たい所があるんだけど…手伝わてる？」

「まあいいが……今から行くか？」

「……もうちょっと休んでからで」

10分位休憩して、次の場所に向かった……

「ねえねえこれはどう？」

「無いな」

今俺達が居るのは服屋だ。

フェイトが此処にした理由はエリオに服をプレゼントしたいかららしいが……

「ちょっとコダイ!? ソレ酷いと思うんだけど……」

「ふざけるな、あり得ないだろ猫とかウサギとか……」

今フェイトが持っているのはアニメ調に描かれたネコやウサギとかの可愛い動物が沢山描かれている服だった…

「え？可愛いのに……」

「男の子の服に可愛さを求めるな……」

「ん〜……じゃあこのクマやライオンに……」

「そのシリーズから離れるシヨタコン」

「コレも！？だってカッコいいよ？ライオン」

「確かにライオンはカッコいいと思うがそのアニメ調に描かれて迫力の『は』の字も無いライオンがカッコいい訳あるか」

何か見た事あるぞ？ポ デライオンか？

「もつとマシなのがあるだろ」

「十分まともな筈なのに……」

その後もフェイトが持つてくる服を（言葉で）切り捨てる事が暗くなるまで続いた……

「ココココダイ？ホントにここを通るの？」

フェイトが腕にしがみついてガタガタ震えている。

「早く帰りたいんだろ、だったらここを突っ切れば近道だ」

エリオの服選びは何時間も掛り、何着か買う頃にはもう真っ暗になつていた……

今歩いている公園を突っ切ればすぐフェイトの家に着く。

「出ないよね？幽霊とかで無いよね！？」

「出る訳無いだろ……」

居るなら大体気配で分る……

「でも！そう言いながら歩いている若いカップルがお化けに襲われるってさっきの映画で……っ！！」

「唯でさえ怖がりなのに思い出すな」

「言うつか見てたのかよ……怖い物見たさか？」

「そそそそうだけど、思い出したくないのに次々と……あぁ！そう言えばその後カップルは……」

面倒臭い……殴って気絶させるか？

ガサガサ！

「ん？」

本気で殴ろうと思った瞬間、茂みから音が……

「きゃああああああああああああああああ！！！！」

「って抱きつくな、離れる」

「おばけええええええええええええええええ！！！！」

………何か驚き方がエルそっくりだな。

ガサガサ！！

「アレ？……音が大きくなって無い？」

「近づいてる」

「ええ！？」

段々音が大きくなるにつれ、フェイトの抱きつく力が強くなる………

ガサッ！！！！

「きゃああああああああああああああああ！！！！！！」

茂みから出て来たのは………

「にゃ？」

野良猫だった……

「ね、ねこお〜？……………」

緊張が緩んで力が抜けてその場で座り込むフェイト……

「にゃ〜」

ん？『お嬢さん方、こんな夜に一体何を？（CV・某黒執事）』つて？

「帰る所だ……………気にせず徘徊してくれ」

「にゃ〜」

元に茂みに戻る猫、『では私はコレで』か……………何だあの礼儀正しい野良猫は。

「はあ……………早く帰るぞ「待つて！！」ん？」

振り返ると、まだその場でへたり込んでいるフェイトが……………

「えつとね……………腰……………抜けちゃった／＼／＼」

仕方ない……………これしかないか。

ひよい

「っ！？／＼／＼」

フェイトを横抱えで持ち上げた……………確か桃子達が言うには『お姫様だっこ』だったか？

「このまま家に送る」

「ええっ！？は、恥ずかしいよう／＼／＼」

「腰を抜かした貴様が悪い、ソレに俺は恥ずかしく無い」

この状態のまま、フェイトのマンションの家の前まで送る事にした。

「うう〜／＼／＼（お姫様だっこされちゃった……………チヨット……………いや凄く嬉しいかも／＼／＼）」

くおまけ

フェイト（コダイにお姫様だったことで）帰宅後……

「フェイト、何でコダイにお姫様だったことで帰って来たのかな」（ゴゴゴゴゴゴゴゴ……）

「ね、姉さん？」

コダイがフェイトを自室まで運び帰った後、アリシアの纏う黒いオーラに震えている……

「チョット公園で色々あって……それでその腰が……／＼／＼／＼震えながらだったのではしどろもどろになる……」

「つまり、フェイトは夜の公園でコダイ君に足腰立たなくされたのね。若いつて良いわね」

それを確信犯の如く爆弾発言をしたリンディ。

それを聞いて黙っていないのは……

「フェイト？」

「少しOHANASHIを」

「聞かせて……」

「くれますよね？」

アリシア、プレシア、アルフ、リニスのテストロツサ家だった……

バインドで拘束され、引きずられて行くフェイトをリンディはリンディ茶を飲んで……

「ん、デジャビュ？」

とのんきに言った……

クロノ「なんだあの光は！？コツチにきてぎゃああああああああ
あああああああああああ！！！！！！！！！！」

（次回もお楽しみにしてください！！）

デート・アリシア編（前書き）

アリシアらしいって何だろう？…と思い書いてみました
………所詮はggggggと！

デート・アリシア編

「コダイ」

むにゅ

時間は昼前、なのに真っ暗……… コレは何？

「ん、久々のコダイ分補給中」

正解はアリシアに前から抱きつかれて、身長差で顔が胸に埋まっている状態。おまけに息も出来ない。

「……………」

開いている両手で握り拳を作り、それをアリシアのこめかみがあるだろう場所に近づけ……

グリグリ

強くねじる。つまり梅干しだ……

「痛い痛い痛い！ギブギブ！」

ようやく離れたアリシア……

「いきなり何だアリシア……」

昨日の夜にアリシアが指定した場所で待っているといきなりアリシアに抱きつかれた。

「だってだってコダイとデートだよ？テンション上がらずにはいられないよ！」

「だからと言って『ソニックブーム』を発動して抱きつくな」

一瞬だけだったから気付かれないで済んだが。

「うう…ゴメン」

「まあいいが………今日はどんな予定だ？」

「あのねリンディ母様にコレを貰ったの」

アリシアが掲げたのは……遊園地のチケットだ。

「今日は遊園地か？」

「うん！一日フリーパスも貰ったから一日中遊べるよ」

随分準備良いな……リンディだから要注意だな。

「早く行こう！」

「遊園地は逃げないぞ？」

「でも時間は逃げちゃうよ？」

「……それもそうだな」

「レッツゴー！」

アリシアが俺の腕を絡めて、そのまま引っ張っていく……元気だな

……

チケットを受け付けに渡し、ゲートを潜ると、そこはゲート外とは別世界の様だった……

「わぁ………凄いなコダイ！」

「あぁ………」

CMとかで宣伝していたけど実物はかなりの物だった……

「よし！遊園地のアトラクションを制覇するぞー！」

アリシアが手を高々と突き上げる。

「此処にあるのを全部か？一日では無理だろ」

「ふふ〜ん それは大丈夫だよ！」

アリシアがメモ帳を取り出し俺に見せる。

「ん？『子供の頃にやりたかった事』………何だコレ？」

「ほらさ、私つてさ……リハビリとか勉強とか色々あったから……

……だからある程度落ち着いたらやってい見たい事をこのメモ帳に

書いたの!」

「成程…………… 射線で塗りつぶされているのはもうやった事なのか?

…………… にはしては意外に少ないな」

もう何年も経っているのに。

「あはははは…………… 落ち着いた途端色々トラブルが…………… なのは(入院)やフェイト(試験)やコダイ(重傷)が」

「その点に関しては反論はできないな……………」

平気だと言っているのに全員が騒ぎ立てるからだ……………」

心臓が潰れるとかは重傷以前に死にます by 作者

…………… 今の『』は腹が立つ。俺は死ねないんだよ……………」

「…………… ん? 『ジエットコースターを乗る』か……………」

受付で貰ったパンフレットを見る……………」

「かなり怖いと評判だぞ?」

「大丈夫! 怒った時の母様達より怖くないから!」

「それはそうだな」

早速ジエットコースターに向かう…………… だが。

「アリシア…………… ここは俺にかまわず行け」

「え?…………… どうしたのコダイ」

「この先は…………… 俺は行けない」

「何で? もしかして怖いのか?」

「怖い以前の問題だ…………… 俺には越えられないモノが目の前にある

……………」

「…………… 越えられないモノ?」

アリシアが真剣な顔で俺を見る……………」

「…………… アレだ」

俺が指した先には……………」

『この線より低い方は乗れません』

……身長制限の看板だった。

「……………他を探そう？」

「待つても良いが？」

「コダイの一緒に乗りたかったの……………コダイが私達よりも大きくなつたらね？」

「望みはかなり薄いぞ？」

前の世界でも環境や精神的な影響でかなり小さかったから。

「どのくらい薄い？」

「貴様が全教科90点代を超える位」

「数学以外無理だー！！」

……………数学は良いのかよ。

改めて向かった先は……………メリーゴーランドだが……………

「……………コレでいいのか」

「うん！」

どう言う状況かと説明すると俺は普通に馬に跨り、アリシアは俺の脚に横向きに座りその状態で抱き付いてる。

でそれに着いて聞いてみると満面の笑みで答えるアリシアだ。もう動いているから無駄だけどな。

「これもやりたかった事の一つか？」

「うん！」

凄いいい笑顔……………コレの何処が良いのか分からない……………ん？

「アリシア、あっち見てみる」

「アツチ？」

俺はその方向を顎で指す……両腕はアリシアを支えているので使えない。

「あ……」

そこに居たのは、5歳位の少女達がこちらに向かって手を振っていた……

「え？……私？」

「そうみたいだな……手を振り返したらどうだ？」

「う、うん／＼」

もう一周して今度はアリシアが手を振る……するとさっきの少女たちは更に大きく手を振ってた。

「アハハハ……コレ、チョット恥ずかしい／＼／＼（抱きついちゃってるし、コダイに腕回されているし、イイ匂いだし……／＼）」

「今更かよ」

アリシアはメリーゴーランドが終わるまでその少女達に手を振っていた……

終わってから周囲からの微笑ましいものを見る様な視線が嫌に痛かった。

その後もアトラクション（身長制限OKのみ）をハイペースで回り気付けばもう夕方になっていた……

「コダイ！最後にアレ乗ろう！」

アリシアが指していたのは観覧車だった。

「コレもやりたかった事のの一つか？」

「そうだよ！」

観覧車はかなり空いていたのですぐ乗れた。

「うわあ〜綺麗〜」

「しかし結構カップル客が多かったな……」

パンフレットを見ると『夕日に染まる景色を眺める恋人たちの絶景スポット』と書いてある……

「こっから私達の家見えるかな？」

「ん？あそこだろ？」

「ふえ？どこ？」

「いや、あの青いコンビニの近く」

「……………そんなの分ないよ〜」

「だから……………」

アリシアに近づき分り易い様に説明する……

「っ／／／／（顔が……………ほっぺがくっつきそう……………くっつけて良いかな？／／／／）」

「そうだな……………あその大きなビルがあるだろ？そこから……………って聞いているか？」

「ふえ！？えつとね！！／／／／／」

手をバタバタさせて何を慌てている？

「ゴンドラで暴れると倒れ……………」

グラッ……

「はっつー！！……………」

言い終わる前にアリシアが倒れた……………と言うか俺も近くいたから巻き込まれ、いつの間にか押し倒された形になった……………

「っ、ごめんコダ……………っ！／／／／（コダイの顔が全部見えてる／／／／／）」

「気にするな、お互い怪我は無い様だし……………」

「うん……………／＼／＼」

アリシアの様子がおかしい……………顔は赤いし眼は何かトロンとしているし……………あれ？何か近づいてる。

「アリシア、とにかく離れてくれ起きれない」

「うん……………わかったよ／＼／＼（コダイの顔……………お人形さんみたいに綺麗／＼／＼）」

いや、だから近づくな……………

「コダイ……………／＼／＼／＼」

離れると言っているのに……………疲れて意識が朦朧としているのか？

……………だったら殴って気絶させるか……………

そう思い拳を握った瞬間。

「お疲れ様ですありがとうございます……………あら？」

係員が扉を開けたもう一周したのか……………

「ひゃうあっ！……………！」

「ゴン……………！」

「うう……………」

奇声を上げて後ろに跳んだアリシアだが向こう側の窓ガラスに後頭部を強打ししゃがんで悶えた……………

「えっと……………もう一周しますか？」

「（フルフル）」

「もう帰るそうだ……………」

「えっと……………お気を付けてお帰りください……………」

係員の苦笑いが印象的だった。

帰る途中、アリシアが赤くなったり悶えたりと忙しかったが……………やっぱり疲れたのか？

くおまけ

アリシア帰宅後……

「………きゃー！！どうしようどうしよう！？／／／／／」

ベットに顔をうずめて脚をバタバタさせて身悶えるアリシア……

「偶然とはいえ、コダイを押し倒して………キキキキキ…キスマ
でしちゃうところだったよう／／／／」

暫く顔を埋めた後、突然立ち上がる。

「……元はと言えばコダイが天然で反則的に綺麗で可愛いのがいけ
ないんだ！！だからキスしたくなっちゃうんだ！……あれ？むしろ
やれば良かったんじゃない？」

「へえ………そんなことしたんだ………姉さん。ちよつとO H A

N A S H I しよ？」

地を這う様な声に振り向くとそこにはコダイの様なハイライトが無
い目をしているフェイトが…

「フェイト？………何でバルディッシュを起動しているの！？………

というかアルフ達は？」

「アルフとリニスはここに結界を張って先にO H A N A S H
I したよ？」

「手遅れ！？」

「姉さん……二人つきりで………O H A N A S H I しよ？」

「いやあああああああああああああああああああああああああ
ああああ！！！！」

「アリシアくゴメンよくアタシはフェイトの使い魔だから」(ガ
タガタ)

「ゴメンナサイ……………今のフェイトを止めるのは私達には不可能で
す……………」(ブルブル)

震えながら部屋の外で結界を張っていた使い魔、sだった……

デート・アリシア編（後書き）

メガネ「アリシアは遊園地にしてみました……でも結局good good
だな」

レイ「遊園地……いいなあ」

コヨリ「メリーゴーランド……たのしそうです」

レイ「今度一緒に行こう!!」

コヨリ「……………ハイ」

メガネ「約束は良いけどコツチも進めて〜」

レイ「感謝コ〜ナ〜、スモーク様、スペリオルス様、龍賀様、シ
ーザ様、ポワソ様、感想ありがとうございます!!」

メガネ「スペリオルス様からは『ハリー・ポッター』のベラトリッ
クス・レストレンジの服と『蛙チヨコレート』を、龍賀様からはコ
ヨリ用にDグレのリナリーの団服（後半の）とレイには東方のお空
の服を、俺にはDグレの神田ユウの団服と全員分のケーキ（イチゴ
とチヨコのショートケーキとモンブラン、その他諸々）を、シーザ
ス様からはD・Gray-manのクロス元帥のイノセンス、？断^{ジャ}
罪者^{ツシメント}?と神田 ユウのイノセンス？六幻^{むげん}?とドラゴンクエストの？
粉碎の大錠?を、ポワソ様からは『E・S』の戒が着ていたアシユ
ラムの軍服とレイには『ドラゴンクエスト』のプリンセスローブを、
頂きましたありがとうございます」

レイ「うにゅ？カラス？」（お空の服）

メガネ「口癖が似てるし似合ってるな」（神田の団服）

コヨリ「かわいいです」（リナリーの団服）

メガネ「最近はこのネタ良いなと書き始めたら、何か別のキャラの方が良いかな？ってのが多くなりました…」

コヨリ「どんまい……です」

メガネ「あゝ……大丈夫かな？」

レイ「皆様からの意見や感想などイロイロ待っています!!」

〜次回もお楽しみにしてください!!〜

デート・なのは編(前書き)

ネタそろそろヤバい事に……
なのは……ゴメン

デート・なのは編

「コダイくん!!」

なのはが手を振って走って来た。

「ハアハア……ゴメンね！遅れちゃって」

確かに…なのはが約束した時間から数分遅れている……

「まあ……理由は何となく分るが」

桃子絡みだ……

「うん……お母さんが……色々恥ずかしい服を／＼／」

「断ればいいだろ」

「だつてえ……コダイ君を悩殺出来るとか……／＼／／」

何か後半ブツブツ言っていて聞こえなかつたがまあいいか……

「そんなの上目遣いで『殲滅兵器』おねちゃんつて言えば一発だろ」

今でも使うし……

「それ……親子では効果ないんじゃない……」

「……しまった!」

まさかこんな欠点が……ん？

「別に俺は関係無いからいいか……効かなかつたら物理的にやれ

ば良いだけだ」

「にやははは……流石コダイ君なの」

「ん？何が流石は知らないが……予定とかあるのか？」

「うん、お洋服を見たいの……成長期で服が小さくなって」

……俺には縁が無い話だな。

「大変そうだな……この時期は」

「そんな人事みたいに……」

「いや、来てもそのサイズに合わせて作ればいいから」

「そう言えばレイちゃんの服も作っているんだよね？」

「後、サクラとエルとアンズとエリオとリインだったな」

「改めて聞くと……ホントにお母さんだね」

「誰がお母さんだ……早く行くぞ？」

「あ、うん！」

なのはが俺の腕に抱き付いた……ん？

「うっ……／＼／＼」

なのはが離れて今度は俺の手を握った……

「どうした？」

「えっと……抱きつくのは流石に恥ずかしかったの／＼／＼」

……昔はよく抱き付いてたくせにか？

服屋に着き、欲しい物を見つけたなのはそれを手に取って、試着室に入った……

「コダイ君どう？」

今なのはが試着しているのは白いワンピースだ

「なのはらしいが……似合わない」

「どう言う事？」

「服が大人っぽいくて似合わない」

「コダイ君、私中学生だよ！？」

「充分子供だろ……」

その後も試着する服は大人っぽくて似合わない物だった……

「にゃあ……私ってそんなに子供っぽく見えるの？」

「少なくともその口調をやめない限りな」

「にゃあ〜……………」

試着室の中で体育座りをするのは………… ツインテールで結んだ髪も垂れている、アレは生き物か？……………ん？待てよ？

「なのは、立って後ろ向け」

「……………ふえ？」

少し間があつてなのはが立った。

「動くなよ」

「う、うん」

俺はなのはの髪を結んでいるリボンを解く………… 結構伸びているな…………

…シニヨンは似合わない…………よし、コレにしよう。

なのはの髪を手早く纏め、リボンで結んだ。

「よし……………やっぱり、コレで似合うな鏡見てみる」

「え？……………」

なのはは呆然としている、今のなのはの髪はサイドテール……………つまり片側に纏めて結んでいる。

「何か私じゃないみたいなの……………」

「まあ一気に雰囲気が変わってるからな……………さっきのも着たらどうだ？」

「うん！」

さっきの服も試着した……………今度は似合っていた。

髪型も変えたからこの際服も選ぼうと俺もなのはの服を選んだ……………

…この時桃子が（面白がって）着せそうな服を選んだらなのはに怒られて断念した。

「コダイ君……………ありがとう……………」

「ん？どうした？」

会計の時、なのはが顔を赤くして言った。ちなみに今着ているのは俺が選んだ服だ。

「あの……………服……………」

「ん？……………気にするな、俺もたまには悪くないなと思って自分の分

も買ったからついでだ」

参考にと……後はエリオにもやるかな？

「えっと……うん／＼（コダイ君にコーディネートされちゃったの……はっ！と言う事は私は今コダイ君色に染められてる！？）にや／＼／＼／＼」

なのはが突然クネクネし出した……

「あの……お客様は大丈夫ですか？」

「元から大丈夫じゃないから心配するな」

店員にそう言った……

なんかトリップしていたなのはを猫だましで起こし、次にやって来たのは……

「わあ〜 このモンブラン美味しそうなの〜」

ショーケースの中、周りの陳列棚も見渡す限り様々なケーキで埋め尽くされている……そう、ケーキバイキングだ……しかもなのはが入った瞬間に皿等をもって暴走した。

「コダイくん！！早くしないと無くなっちゃうよ〜！」

「そんな訳………」

なかった……他の客を見ると皿からこぼれそうな程盛ってる奴も

いた……俺も皿を持って、急いでなのは元に向かった……
で、適当にケーキとセルフのドリンクを選んで席に座ったが……

「コダイ君……」

「ん？」

「もしかして甘い物好きなの？」

なのはの前にある皿は3枚、そしてその隣にいる俺の前にある皿は6枚……さらに言えば1枚につき盛られてる量がなのはより多い。「確かに好きだが……レイ達はこれより食べるぞ？」

普通でもかなり食べるがケーキ類になると更に倍食べる……
『甘い物は別腹』……は少し違うか

「にははははは……わたしにも無理なの」

あんなに食べたらどうなる事やら……ん？デバイスとプログラムだから問題ないか？

「アム………にゃ〜美味しいの〜」

あ、なのはがケーキ食べて蕩けてる……

「アム………ん、美味しい」

種類も多いが一つ一つのレベルが高い……しかもサイズが通常より少し小さい……だから女受けするのか？

「アム………あう」

なのはが幸せそうに何個目かのケーキを口に入れた瞬間、苦い表情をした……

「どうした？」

「このガト ショコラ苦いの〜」

「ガト ショコラ？確か俺も取った筈………」

自分のガト ショコラを食べて見る……

「かなり甘いぞ？」

「嘘！？……味覚の違いかな〜？」

「食べて見るか？……あーん」

フォークで一口分にしたガトーショコラを差し出します。

「あ………あ〜ん………甘い」

なのはが口に入れた瞬間、再び蕩けた。

「なのは、ソッチノモ」

「うん…はい、あ〜ん」

「あーん……………」

差し出されたガトーショコラを口に入れると、苦い……………と言うよりカカオの味が口に広がる……………確かに味が違う、ミスでは無いとする……………あ

「なのは、コレだ」

「え？コレ？」

俺が指したのはガトーショコラの上に飾ってるなのはの方の80と俺の40と書かれたチョコだ……………

「多分カカオの事だろ……………80とか40とか」

「あぁ〜成程〜」

つまりなのはは苦いのを俺は甘いのを偶然取ったと言う事か。

「交換するか？」

「ん〜……………私が取ってきたから全部食べるよ」

それなら良いが……………

その後は特に変わった事は無く取ってきたケーキを食べ進める……………

「ん、美味しい……………このモンブラン、バナナを使っているがバナナってこんなに甘いか？砂糖だけでこんなに甘くしたら口当たり最悪だから……………」

「〜美味しいの〜」

とか考えていると隣からのんきな声が……………なのはが頬にクリームを付けてニコニコケーキを食べていた。

「なのは、クリーム付いてる」

「ふえ！？どこ！？／＼／＼」

見当違いの所を触る……………

「此処だ」

頬に着いてるクリームを指で取る。

「ありがとう／＼／＼」

「どっやったらここに付く……ん」
指に付いたクリームを口に入れる……
「っ！！／＼／＼／」
「ん……甘い……どうした？」
「にやんでもにやいよ！！／＼／＼／（あゝんは少し慣れちゃったけど、新技は反則なの／＼／＼／）」
呂律が回って無い……ブランデー入りでも食べたのか？

「なのは……お前食い過ぎだろ」
「そうかな？」

ケーキバイキングを出るともう夕方、帰り道を歩きながら話していた。

「ああ……将来大変だぞ？」
あの後なのは二回も同じ量のケーキを取りに行った……実際俺より食べているかも……

「うう……でも仕事で体いっぱい動かすしそれで落とすの！それよりも何でその細い体に沢山入るの！？」

「そうか？……別に普通だよ」
レイを始め、サクラ、エル、アンズ、エリオがやたら食べるから麻痺したのか？……アインも俺と同じ位だし……

「やっぱり非常識の非常識だよ……………あ」

「ん？どうやら着いたみたいだな」

もうなのはの自宅前……………長いと思ったがこう話しながらだと短いな

……………

「じゃあ、またこん「まって！！／／／／」ん？」

振り返ると、なのはが顔を赤くしてモジモジしている。

「あのね……………コダイ君……………私、コダイ君の事が！！／／／／／」

ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ……………

……………

なのはの言葉を遮る轟音と共に大きなトラックが近くを通った……………

「……………」

思わず固まるのは……………

「ああ……………もう一回言ってくれるか？」

「ふえ！！……………あう……………やっぱり何でも無いの！また今度ね！」

そう言っつて勢いよく家に入っていったなのは……………

「何て言おうしたんだ？……………」

考える事数分……………

「言わないのなら大したことは無いだろう……………」

さて、今日はなに作るのかな……………

くオマケ」

なのは帰宅後……

「うう〜……………トラックのばか〜」

部屋に戻りそのままベットで不貞寝してしまったのは……………後に部屋に来た桃子に今回の事を話した…

「告白寸前でトラックの音で聞こえないって……………これはまた、ラブコメねえ〜」

「うう〜……………折角のチャンスが〜」

「大丈夫よなのは！まだチャンスは沢山あるわ！」

「ホント!?!」

「ええ!……………だからその時にコダイ君を悩殺出来る服を今から選ぶのよ」

そう言っでどつからか色んな服を取り出す……………

「お母さん!?!その服……………なんかへそとかふとももとかいっぱい出てるよ!?!?ノノノノ」

「何を言っているの?普通の服で悩殺出来ると思っているの?逆に色気で悩殺されるわよ?」

「それは……………そうだけど……………ノノノノ」

「ちなみに私のお勧めはコレね コレで土郎さんを食べちゃおうとしたら逆に食べられちゃった ノノノ」

「お母さん!?!ソレ完璧にリボンだけだよね!?!服じゃないの!?!ノノノノ(でもコレ着たら……………私、コダイ君に食べられちゃって……………それでノノノ)」

……………

「孫は何人でもいいわよ」

「心読まないですよ!?!ノノノ」

終始、桃子がなのはを弄ったのは言うまでもない……………

デート・なのは編（後書き）

メガネ「ネタを絞りだすのに苦労しました!!!」

レイ「ねえねえ、リボンってお洋服なの？」

コヨリ「ちがうと……おもいます」

メガネ「ああ〜そんな事より始めちゃって〜」

レイ「感謝コ〜ナ〜、スペリオルス様、スモーク様、黒一文字様、龍賀様、真王様、フェンリル様、シーザ様、感想をありがとうございます！」

メガネ「スペリオルス様からは『ガンダム00（1期）』の『フェルト・グレイス』が着ていた水着と『焼きおにぎり（味噌味&しょうゆ味）』を、黒一文字様からは成長薬を、龍賀様からは核金3つ（コヨリにバルスカ、レイにシルバースキン、メガネにニアデス）とジェットコースターの制限に引つかからない程度にのびる薬を、シーザ様からはドラゴンクエスト?の『天空の剣』、『天空の盾』、『天空の鎧』、『天空の兜』一式とレイにドラゴンクエスト?の『ピアンカの服』、『フローラの服』、『デボラの服』とコダイ（コヨリ）にドラゴンクエスト?の『踊り子の服』とゾロの刀『雪走り』とブリーチの一護の服（卍解時）を頂きましたありがとうございます！」

レイ「しょうゆ味ゲット!!!」（ピアンカの服）

コヨリ「みそあじ……おいしいです」（踊り子の服）

メガネ「俺も……………あれ？何この殺気」

レイ「シーザス様からのD・Grey-manの『AKUMA』レベル1〜4だつて！」

コヨリ「なまえ……………まちがえましたから」

メガネ「シーザス様本当にすみません！！！！」

コヨリ「こつちにきました」

メガネ「こんな所で死ぬわけには行かないんだああああああああああ！！！！」（天空シリーズ一式装備）

……………

レイ「おお〜！カッコいい！！！！」

コヨリ「もりあがっているとこるわるいんですけど……………」

レイ「ふえ？」

コヨリ「AKUMAはエクソシストのぶきでないとおせないのは？」

レイ「あ……………」

コヨリ「ついでにいうならもらった、せいちょうやくがにほんともなくなってます……………」

レイ「ええ!？」

メガネ「ちょ!!きかねえ!?!一応コレ伝説の武具何ですよ!?!?...
...あつ砲撃しないで!チヨットまぎゃああああああああああああ
あああああああああああああ!?!?!?!?!」

「?????」フフフフ.....」

デート・シグナム編（前書き）

シグナムとかはこんな感じかな？……………ggggggでスンマセン！
！！（土下座）

デート・シグナム編

朝早くシグナムから連絡が来て、指定した時間と場所に来てみると

……

「フフフフフ……待っていたぞ」

バリアジャケットを展開して仁王立ちのシグナムが……

「用事を思い出した「待てい！！」って行き成りバインドか……」

「何故逃げる……」

チャキツ……

「逃げたくもなる……誰でもあんな状態の奴をさわやかに迎えられるか。後、デバイスしまえ」

「何を言っている……折角の……デート……なのだぞ／＼」

そんな顔されてもレヴアイティンで台無し……は？デート？

「シグナム……デートの意味分るか？」

「当たり前だ！主はやてが言うには女の一世一代の決闘だ……」

「ああ……意味が違うとか、馬鹿とか言う以前に言っておく……一度でいいからシヤマルに脳を診て貰えこの戦闘^{バトル}狂が」

はやてはそう言う意味で言った訳ではないだろう……

「何っ！？違うのか!？」

「違うのが分つたらバリアジャケットとバインドを解いてくれ」

「す、すまない！」

拘束されてたバインドが解かれる……

「……ではトキガワ、デートと言う物は一体何だ？」

「俺も詳しくは知らないが……お、アレなんか所謂デート中みたいものらしいな」

「そうなの……かつ！！／／／／」
シグナムは俺が指した先を視線で辿った瞬間、固まった。
俺が指したのは……

男の腕に絡まる様に抱き付き、頭を撫でられて嬉しそうにしている
女……

俗に言うバカツプルのデート中の光景だった……

「こんな事出来るか！！／／／／」
と言いつつガン見してるぞ？

「私が……あんな風にトキガワに甘える……無理だ！恥ずかし
さで死んでしまう！！／／／／」

「……何なら俺が女装をして、してやるつか？」
女装はオシヤレだし……

「なん……だと」
あ……シグナムが固まった。

「……（トキガワが……甘える？可愛い服を着てさっきの
女達のように……腕に抱きついたり膝枕とかして……甘えるだど！？
／／／／）」

あ、今度は震えた……

「（妄想中）………アリだ！！！！／／／／」
「何がアリだか知らないが戻ってこい」

スパンツ！！

ハリセン（はやて・作）で頭を叩く。

「ハッ！………私は何を！？」
「目を覚ましたか？」

「ああ、すまない………だがどうすれば良い？………アレをやるには
恥ずかしすぎる／／／」

「そうだな……シグナムが行ってみたい所とか無いのか？」
「行ってみたい……実は　　と言う所に／／／／」
「……すまない、良く聞こえなかった。もう一度言ってくれ」
今度は聞き逃さない様に耳元をシグナムに近づける。
「　　と言う所に」
今度は聞こえたのでそこに向かう事とした…

「おい、シグナム……これはお前がやりたかったんだろ？」

「あ……ああ……」

「何で隅っこに居る」

「そ……それが」

今いる場所は、近くのゲームセンターの一角にあるプリクラコーナーだった。

何故プリクラだと聞いてみたら。以前、はやて俺達と一緒に撮ったプリクラを嬉しそうに見せていて、うらや……その後は聞こえなかった。

「ほら、設定終わったぞ？」

「あ……ああ……」

そうやってシグナムは俺の背後に……

「それでは背後霊だろ、それに証明書の写真では無いから直立不動になるな、怖い」

「では一体どうすれば」

「指定されたレンズに向かって適当にポーズをとれば良い……ほら、カウントが始まる」
お互いに適当にポーズをとり、カウント0と共にシャッター音が鳴る。

一枚目、まだシグナムの顔がぎこちない。

二枚目、チヨット余裕が出てきてる。

三枚目、完璧に慣れた様子……デバイスを起動しかけた時は焦った。

「次で最後の一枚だが……希望のポーズとかあるか？」
「そ……そうだな……では、前に立ってくれ／＼」
「ん？分った」
言われた通りに前に立つ……一体何をするつもりだ？

ギョッ

「は？……シグナム？」
「こうして撮りたいんだ……ダメか？／＼」
後ろかシグナムの声……後ろから抱き付かれた……
「別に構わないぞ？」
まあ身長差で顔は映るからな……
撮り終わると、自由に装飾が出来るかと教えて、一枚目から三枚目までを俺が四枚目をシグナムが装飾することになった……

「殴る。計三回殴って平均を計るんだ……ホラまた来た」

ドゴン……！

ドゴシヤツ……！！

「こんな感じだ。まあ最高値があるから正確には分らないが……ホラ」

グループをシグナムに渡す……結果？ほぼパーフェクトだけど？

「成程……自分の力の高さを決める勝負か……面白い」

「いや別に勝負と言う訳では……まあ昔は力を誇示するために作られたって聞くが……って聞いて無いな戦闘狂」
バトルジャンキー

シグナムがマシーンの前に立ち拳を構える……

「ふう………ハアツ……！」

ゴシヤツ……！！……！！

「む、トキガワと同じか……」

「シグナム、限界があるからその辺で威力を抑えろ、壊れる」

「問題無い、これ位で壊れるほど柔な鍛え方は………していない！」

いや、そうじゃなくて………って聞いて無い……

ドゴシヤツ……！！……！！

は？さらに威力上げたよ………

「次で最高値を出せば私の勝ちだな……」

凄い良い笑顔だよコイツまあ………壊れなったから問題は………おいシグたんミ………何その右腕の紫の魔力光は？強化？強化してるの

か？

「おい馬鹿こんな所で使う馬鹿が「ハアアアアアアツ！！！！」……
……居たよ目の前に……」

グシャツ！！！！……バキヤツ！！！！

「「え？」」

えっと……どう言っているのか分からないが……簡単に言うと、
マシンの殴る所が根元からバツキリと折れた……まあ見た所
古かったし。

「トキガワ……この場合は？」

「取り敢えず逃げた方が良いな」

お互いに頷き合い、一目散にその場から全速力で逃げた……

「暫くあそこいけないな……」

全力で走り、結構離れた公園で一息を付いた。

「ハア……ハア……」

「大丈夫か？」

「なんとか……」

ベンチで息を整えるシグナム……

「なんで……お前は……平気なんだ……」

「俺のスタミナの多さは知っているだろ？ホラ、コレ飲んで落ち着

け」

近くの自販機で買ったペットボトルのお茶を渡す。

「すまな……ッ……!」

突然シグナムがペットボトルを落とし手首を押えていた。

「ん？手首が……って、はあ……」

俺はシグナムの隣に座り、腕を脇に抱え動けなくした。

「ト、トキガワ!? / / /」

「だから、抑えろって言ったんだ……力任せに殴ったら手首を痛めるだろ」

自分に買っていた水で持っていたハンカチを濡らし、軽く絞ってからシグナムの手首に巻いた。

「よし、後はシャマルに見て貰え。あくまでも応急処置だから」

「……すまない / / /」

顔が赤くなってる……痛かったのか？

「……ん？このハンカチかなり良い物だな……刺繍が細かい」

「それか？それは服を作った時に出た余り布で、地味だから俺が刺繍しただけだぞ？」

「何!? コレをか!？」

「元々服は肌に触れるからハンカチにも良い素材だしな……気に入ったのならやるぞ？あ、でも元は余り物だから今度ちゃんと「いや!コレで良い!!」……そうか」

そんなにその柄と刺繍が気に入ったのか？

「だ、大事に……使わせてもらうぞ / / / / (トキガワの手作りのプレゼント…… / / / /)」

まあ……嬉しそうだから良いか。

その後、一応怪我人のシグナムを家まで送った……

デート・シグナム編（後書き）

メガネ「今回はシグナム！……何かギャグが多かったような」

レイ「シグナム大丈夫かな」

コヨリ「しんぱいです」

メガネ「色々な意味で手遅れな気がする………すすめて」

レイ「感謝コ〜ナ〜、山義 芳原様、スペリオルス様、シーザス様、スモーク様、フェンリル様、和尚様、感想をありがとうございます！」

メガネ「山義 芳原様からはアメリカ製軍用食とイギリス製軍用食を一週間ずつと呪い人形（次元世界そのものが手を出すほどのシロモノ）を、スペリオルス様からは『ポケモンブラック・ホワイト』の『女主人公の服』とカキ氷とシロップ各種を、シーザス様からは俺に家庭教師ヒットマンリボンのツナの？グローブ（継承式編）ボンコレギアとVG大空のリングVer.？とツナの制服をレイにクロームの制服とVG霧のイヤリングVer.？をコヨリにアーデルハイトの制服（至門中）と氷河のSRと後モンスターハンターの回復薬グレートと秘薬の秘薬と古の秘薬を、 龍賀様からは俺に妖刀・天狼をコヨリには赤セイバーの服をレイちゃんにはキャス狐の服を、フェンリル様からはディーグレの神田のイノセンス無幻とエリクサーとポーションを百個ずつと東方の十六夜咲夜と射丸の服を（着るとサイズに合う）レイとコダイとコヨリとアイン達分とチョコとレアチーズケーキを人数分を頂きましたありがとうございます！！」

レイ「私はいちごシロップ」

コヨリ「わたしはミルクを…」

メガネ「俺はブルーハワイ」

レイ「ねえねえ、ブルーハワイって何でブルーハワイなの？」

メガネ「由来はカクテルの『ブルー・ハワイ』に色が似てるから。と言っても酒は入ってないから大丈夫」

レイ「なるほど」

コヨリ「シャクシャクシャク……っ！！」（頭を押さえる）

メガネ「ああ……やっぱりやったか……レイ、絞めちゃって」

レイ「っ！！」（悶絶中）

メガネ「……皆様からの意見や感想など色々待っています……！」

「次回もお楽しみにしてください」

デート・ヴィータ編（前書き）

今回で100話です!!

そして、いつの間にか200万PVを突破していた………何かするか………オリジナル後に

ヴィータは完璧にデレている状態です………

後、無印編の一部を大きく修正しましたが、特に読まなくても大丈夫です。

デート・ヴィータ編

「時間は…… 10分前か」

朝にヴィータから連絡が入り。言われた場所で待っていた…

「しかし……何だっただんだ？」

誘われる際『いいか！二人きりだかな！コダイと私の二人きりだかなっ！！／／／』とすごい剣幕で言われた一体……ん？

「早いなヴィータ」

俺がそう言つと、何故か俺の顔の横にある手が止まった。

振り返るとそこには……

「む……」

頬を膨らましてむくれているヴィータがいた。

「折角『だ』れだ！』ってやって見たかったのに……」

「ああ……何かゴメン、ヴィータの気配がしたから……」

「でも……すぐに私って分ったから許してやる／／／いいんだ……」

「そう言えばあの時間きそびれたが、何処へ行くんだ？」

「えつとな……ここ何だけど……」

ヴィータが一枚のチラシを見せる。そこにはファンシーショップだった。

「早速行くか？」

「おう！」

ヴィータが俺の腕に抱きつく……

「ん〜 何かコレ久しぶりだあ〜」

「そう言えばそうかもな……けど、今の俺は背が少し伸びたから動きずらくないか？」

ヴィータが小学校低学年位で俺が高学年位の身長だからな……

「全然〜 早く行くぞ〜！」

引つ張るヴィータに付いて行く事にした……

「ふあゝ……………」

店に着いた瞬間、ぬいぐるみのコーナーに走り、ヴィータは自分と大して変わらない大きさの『のろいウサギ』に抱き付いていた……人気あるのかあのシリーズ、名前だけで文字通り呪われそうなのに……

「ふわふわだあゝ／＼／＼」

今にも溶けそうだな……………」

「何か買いたい物があるのか？……もしかしてそれか？」
俺は今抱き付いているのを指す。

「こんなの大きくて置けねーよ……………」

だろうな……………」と云うか買えるのかよ……………」

「か、買いたいの……………」アレだ／＼／＼」

ヴィータが指した方を見ると……………」

『呪いウサギ（ウエディングVer.）』

と書かれたプレートを前にタキシードを着た黒ウサギとウエディングドレスを着た白ウサギが……………」何々？……………」『それぞれのウサギにネームプレートがあり名前を入れる事が出来ます。結婚祝いや恋人にプレゼントにどうぞ』？

「祝っているのか呪っているのかどっちかにしろ……………」ん？これ

『カップル限定』って書かれているぞ？買えないだろ……………」

「だ……………」だから」

「こうすればカップルに見えるだろ／＼／＼」

そう言つて俺の腕に抱き付いてくるヴィータ……

「色々と無理があるぞ？……」

「わ、私とじゃあイヤなのか……？」

突然、泣きだしそうになるヴィータ……

「別にヴィータとカップルになつても良いが、俺の容姿が原因で姉妹にしか見え……どうした？」

「……私がイヤじゃ無いのか？」

「そんな訳ないだろ」

「そっか……良かった／＼（嫌われて無くて良かった……カッブルでもいいか……えへへ あのウサギ見てーにコダイと……ん？

逆も良いかも／＼／＼）」

泣きそうになつたり、笑顔になつたり大変だな……ヴィータ……

ちなみにぬいぐるみは怪しまれたが、俺が生徒手帳を出して何とか買えた。

次にヴィータの要望で来たのは有名なアイス専門店だ……

「うゝん……」

店に着き、ヴィータは即座にメニューと睨めっこを始めた……

「どれもウマそう……ジュルリ」

「自分が今一番食べたい物を選べばいいだろう？」

「そうだけど……色々あつて……それに高いし……」

まあ、確かにこういう専門店はかなり値が張るからな。

「これ位奢るぞ？遠慮はするな」

「マジか！？よゝし！端から端まで全部「頼んでも良いが残したら

O S H I O K Iだぞ？」じよ、冗談だつて……えつと、バナラとチヨコとイチゴだ！」

「俺は……チヨコミントと抹茶とシーソルトだな」

注文したアイスを貰い席に着き食べ始めた。

「ギガウマー！」

「ん、美味しい」

味はかなり良い……流石専門店……再現出来るか？……何とか出来そう。

「なあ、その『シーソルト』って何味だ？」

「ん？塩味だ」

「塩？そんなのがウマいのか？」

「意外と面白い味だ、食べて見るか？」

シーソルト味をスプーンで掬ってヴィータの口元に持っていく。

「あーん」

「あゝん……ん！？ウマっ！何か不思議な味がする！？」
気に入ったようだ……

「あっヤバ……溶けねえ内に食わないと」

そう言つてペースを上げるヴィータ……あ、口元にアイスが。

「急がなくても間に合う……ほらコツチ向け」

備え付けの紙ナプキンでヴィータの口元を拭く。

「ん……あ、ありがと／＼」

少し嬉しそうに笑うヴィータ、そして食べ始めるかと思つたら俺と自分のアイスを交互に見ている……

「……よし……コダイ」

「どうした」

「さっきのお礼だ……その……食わせてやる／＼／＼」

そう言つてイチゴのアイスが乗ったスプーンを差し出してきた……
何かチヨット震えてる

「え？……ありがとう」

「じゃあ……あゝ……あ」

震えていて狙いが合わなかったのか、スプーンは口元に当たる様な形で入った……

「あ……ゴメン……」

「ん？大丈夫だ、コレ位拭けば「あ、あのさ／／／ん？」

「私が拭いても……いいか？／／／／」

「別に良いが……」

「うん／／／」

ヴィータは紙ナプキンを一枚取って、俺の口元を拭いていく……

「……よし、拭けた／／／（うう……紙越しにコダイの唇の感触が／／／／／）」

「ありがとう……顔赤いが大丈夫か？」

「だ、大丈夫だ！ちよつと柔らかか……いいや何でもねえ！！／／／／／」

「やわらか？……一体何だ？」

「何でも無いなら良いか。アム……このチョコミント美味しい」

「マジ！？」

「ああ……あーん」

「あーん……ギガウマ！このチョコもギガウマだぞ？あーん」

「あーん……美味しい……抹茶も試すか？」

「苦いのは苦手だけど……食べさせてくれるなら／／／／」

その後も何度か食べさせ合った……

「うう……」（コクツコクツ）

お互いに二個目のアイスが食べ終わった頃、ヴィータが船を漕ぎ出した……

「……ヴィータ？」

「……ハッ！どうした、コダイ！？」

寝てたなさつきまで……

「眠いのか？」

「眠くねーよ！ただ目がシヨボシヨボするだけだ！」

「それを眠いって言うんだよ……」

と言っか寝ていただろさつき……

「……昨日は寝たのか？」

「昨日は……明日何処に行くかとかどの服を着ていくかとかイロイロ迷って……」

「中々寝付けなかったと……」

「いや……一睡もしてねー……ふあっ」

「おい」

あくびをしているヴィータにツッコむ、遠足前日に寝付けない小学生か……って肉体年齢それ位だったな。

「だいじょーぶだ……このてっついのきしが……ねむけなんかにまけるか……アイゼンでぶつとばして……やるう……」

「惨敗中だぞ」

睡眠不足と満腹になった事で一気に眠気が来たのか？

「アム……ぎがうま〜」

寝ながらアイス食べてる……

結局ヴィータは最後のアイスを食べたが、その直後に糸が切れた様にテーブルに突っ伏して眠ってしまった。

「……あ、ストロベリーサンデーがある」

暫く起きるまで待つか……

ストロベリーサンデー頼んでから食べ終わっても、ヴィータは目を覚まさず。店にも迷惑になりそうなのでおぶって買える事にした……

「にゅ〜 コダイの匂いがする〜／／／」

どっかで聞いたことあるセリフだな〜……………確かこの後ヴィータが起きて……………

「ん〜……………あれ？此処は？」

「おはよう、ヴィータ」

あれ？……………確か前はこの後死んだはず……………

「な……………なあああああああああああああああああああ！！！！！！／／／／／」

ジタバタ！！

「ななな何で私コダイに！？降ろせ！降ろしてくれ！！！！／／／／」

「暴れるな、落ちるぞ」

「うわっ！わわわわわっ！！」

ヴィータは俺の首に腕を回す事で落ちるのを避けた。

「ご、ゴメン……………その、重く無かったか？／／／」

顔のすぐ横でヴィータが聞いてくる。

「軽い方だな……………」

「そうか……………良かった／／／／」

ん？顔が赤く……………

「恥ずかしいなら降ろすが？」

「いや！このままで良い！！！！／／／／（ふざけんな！こんなチャンス滅多に無いんだぞ！！！！／／／／）」

「そうか？……………まあ、家までまだあるから眠いなら眠っても良いぞ？着いたら起こす」

「お…おう／／／」

はやての家に着くまで、ヴィータは顔が赤いままだった……………恥ずかしかつたんじゃないのか？

くオマケく

ヴィータ帰宅後……

「えへへへくくくくく」

ヴィータはコダイに初めて合った時に貰ったのろいウサギ（黒）を抱き締め、ベットの足をゴロゴロ転がった。

「今日な、コダイにイッパイ抱き付いたんだくくく」
頬を緩ませながら、そのウサギに話しかける。

「アイスもあ〜んとか食べさせ合っだし、口とか拭き合っただくくく」

そう嬉しそうに言っていたが突然シユンと落ち込む……

「けど、昨日寝て無かったから、デートの途中で眠っちまったんだよお〜」

落ち込んでいたがすぐまた頬が緩んだ。

「でも！コダイが家までおぶってくれたんだくくくくく」
再びウサギを抱き締めゴロゴロし始めるヴィータだった……

「ヴィータ可愛過ぎやー!!」

それを扉の隙間から部屋を覗いていたはやてが悶えていた。

デート・ヴィータ編（後書き）

メガネ「ヴィータはコダイに合った当初からデレたので、こんな感じにしました」

レイ「あついで」

コヨリ「あついです」

メガネ「暑いって言うか蒸すって感じなんだよな……最近、それでもにも書けるのは涼しくなってからと言う……」

コヨリ「あつ……い………です」

メガネ「暑くても先進めなきや……」

レイ「感謝コ〜ナ〜、黒一文字様、ながも〜様、スモーク様、スペリオルス様、龍賀様、フェンリル様、ポワソ様、心の剣様、感想ありがとうございます……！」

メガネ「黒一文字様からは水着セット『黒のトランクス青のビキニとスクミズ』を、スペリオルス様からはチューペットを、龍賀様からはゲルバナを、フェンリル様からはコヨリにバイオ3のジルの服と作者にはカルロスの軍服とISの紅椿とブルーティアーズと白式とラファールリヴァイブとアイスのソーダとバナラとチョコとイチゴを人数分を、ポワソ様からはコダイにはTODのリオンの衣装とシャルティエのレプリカをレイにはTODのフィリアの司祭服とクレメンテのレプリカをコヨリちゃんにはTOSのリフィル先生の服とBCロッドを、頂きましたありがとうございます……！」

レイ「心の剣様から質問来てるよー」

質問『コダイの間に生まれる子供で男か女どっちがいいすっか？』

ラバーズ「『『『『『りよ、両方で／／／／／』』』』』』」

メガネ「まあ、どっちが生まれようとルックスは極上だから……性格が父親似でなければなお良し」

レイ「チューペット美味しい」（スクミズ着用）

コヨリ「こおらすとおいしいです」（青のビキニ着用）

メガネ「俺はこの緑のを………ゲブアッ！！………ゲルバナだった、これ………ガクッ」

レイ「だいじょーぶ？」（ツンツン）

コヨリ「おきませんね？」（つんつん）

レイ「………先進めようー！」

コヨリ「はい」

レイ「皆様からの意見や感想など色々待っていますー！」

コヨリ「コレがゲルバナ？……………アム……………！！なにかふしぎなあ
じがします！！」

メガネ「ええ〜！！それだけ！？と云うか落ちた物を喰うなよ」
（復活）

〜次回もお楽しみにしてください〜

デート・シャル編（前書き）

シャルは乙女で攻めるかお姉さんで攻めるかで悩みました……
どっちも違和感が無いし……でもgggg

デート・シヤマル編

今日、シヤマルから連絡が入り、待ち合わせ場所に向かうと。既にシヤマルがそこに居た。

「今日はお付き合ひしてくれてありがとうございます！コダイ君」「ん……所でその後ろにあるのは何だ？」

シヤマルが後ろに隠しているが少しはみ出ているバックを指した。

「えっとコレは………秘密です！」

あ、転移した……

「後のお楽しみですよ」

「そうしておく………」

シヤマル笑顔でこれ以上の詮索は控えた方が良いと思った……

「えっと……今日は何処に行くんだ？」

連絡の時『頑張ります！私、頑張りますよ〜！』と言って切ったので具体的な所は聞いて無い……

「本屋さんです………料理関係の本を……色々」と

徐々に声のトーンが下がるシヤマル……

「………何かあったのか？」

「………聞いてくださいよおおおおおおお………！」
突然、シヤマルが涙目で俺の肩を掴んで来た。

「最近みんな、私を台所に立たせてくれないんですよ〜！」

理由は大体分る………あんな色しか判別できない料理を作られたら誰だっけな。

「皆仕事で忙しいから、頑張って栄養価の高い物を使っているのにい〜」

「ちなみにその食材は？」

「えっと………何かの動物の肝です」

「内臓の処理は難しいし、しっかりしないとマズくなるぞそれより何だよ何かの動物って………」

「コダイ君はちゃんと食べてくれるし……」

それは俺が異常なだけで……

「まあ……今度教えてやるか？アインと一緒に」

「そ……それはやめておきます……（コダイ君厳し過ぎるから……

でも失敗してお仕置きと言つのも／＼／＼）」

「そうか？無理強いはしないが……」

はやての方が教えるの上手そうだし……

「まあ、厳しくし過ぎて精神崩壊何てゴメンだしな……」

「どの位厳しいんですか！？」

「ん……アインの口調が妹（アイン）になる位？」

「よくトラウマになりませんでしたね……アイン」

ちなみにこんな感じになった……

アインはゴミですカスですう……グシュ……レシピ様の書かれた通りにお料理をさせて頂きますう……

何て事があつて全員に止められたぐらいだ……それ以来抑えている。ちなみに桃子は『修行時代を思い出すわ』と懐かしんでいた

……

シャマルが向かった本屋は、はやてが良く料理関係の本を買う所ら

しく、掘り出し物が多いらしい。

「料理関係は……あっちだな」

少し奥の方だな……

「け……結構ありますね……」

「目当てとかあるのか？」

「特に……呼んで見て良いのを探します」

そう言つて、シャマルは最初に目に入った本を取つて読み始めた。

「俺も何かあるかな……ん？」

目の前に大層な装飾で『究極料理大全』と書かれた本があり、それを読むことにした……

「……うん」

全部読み終わつて棚に戻し……

「絶対シャマルに見せない方が良いな……」

書かれていた内容はゲテモノ料理ばかりだった……美味しいんだけど勇気が居るモノだ……コレをシャマルが知った日には八神家に明日は無い……

「コダイ君、何か良いのが合つたんですか？」

「無いな……あれは何だ？」

今度は少し上に興味を引く本が合つた……

手を伸ばす……

「……」

届かない……つま先立ち……

「……あ」

何とか届いた……ピッタリ詰まっているな……何とか取れそうだな……

「あの……コダイ君？私に取りましようか？」

シャマルが俺の後ろに着ていた……

「大丈夫だ……取れそう……あ」

取れたと思つた瞬間手から本が滑り落ち、俺の頭上を通り過ぎる……

固く目を閉じているシャマルに聞く。

「……………あれ？なんとも……………っ！！／／／／／」

ボンッ！！

爆発した…

「おおおおおしおしおしおしおし／／／／／」

「おし？……………尻餅でも付いたのか？」

「いいいいいいえ！そう言う訳では…（押し倒されてる！？私今コダイ君に押し倒されている？！これはアレ？GOって事！？合意って事！？／／／／／）」

何かもにもによ言つて分らないが取り敢えず起きた方が……………
…あ、上に本が乗っついていて動けない……………

「コダイ君……………／／／／／」

つてコツチは首に腕を回され引き寄せられる……………

「落ちて着けシャマル」

背中の本が危ない事に……………

「大丈夫です……………此処からはあまり見えませんし、結界も張りました／／／／／」

「それは何の大丈夫だ……………」

「……………／／／／／」

「何だその無言は……………」

と言つか引き寄せせるな、引き寄せると……………

スルッ……………

頭の上にある本が滑り落ちる。

ゴスッ！！

「あぐつ！」
シヤマルの額に落下、しかもハードカバーだからかなり痛い……証
拠に悶絶してる。
「だから落ち着けと……」
「すみません……」
若干涙目だ……
その後、シヤマルの魔法で物を直し、コッソリ店を後にした……

次は何処に行くのか？と聞いて誘われたのは自然公園だった……

「くくく」

大きな樹の下に着くと……何かご機嫌にシートを敷いているよ。

「シヤマル……一体何を？」

「えへへ 実は……」

旅の鏡を展開して……シートと言う事は……まさか……

「お弁当作って来たんですよ！」

出たよシヤマルの料理、別名『対生物用滅殺兵器』……しかも重箱。

「じゃーん！どうですか？」

広げられた弁当の中身は……

「見た目は良くなったな……」

凄いまともだった。おにぎり、卵焼き、唐揚げ、ハンバーグ等……

変色も無い……変な臭いも無い……

「はい！はやてちゃんに教わって頑張りました！」
それなら安心だな……

「更に自分流のアレンジも加えました！」

………それ、料理ベタが一番失敗するパターンだよ。

「どうしたんですか？固まって………あつ！大丈夫ですよ？コダイ君に沢山食べてもらいから、摘み食いなどは一切してません！」

頼むから摘まめ………出ないとはやて達が死ぬ………ん？お前は平気だろう？それでも不味いものは不味いんだよ………

「ささっ、どうぞ」

小皿と箸が渡される………よし、比較的失敗の無い唐揚げを………

ガサガサッ！

「ん？」

何だこの音？

「何でしょう？」

シヤマルが音の方を向いた瞬間……

「にゃあああああ……！」

そのの茂みから野良猫が飛び出して、素早く弁当の中からハンバーグ啜えて走っていった。

「あ！コラッ！」

別に一個位………

「………！！」

パタン………

………突然、猫が硬直して倒れた。

「い、一体何が？」

「取り敢えず見てみるか………」

そう言つて痙攣している猫を診てみる……あ……

「分りましたか？」

シヤマルが心配そうな顔で覗き込む……

「コイツ……息してない」

「……………え？」

その後の行動は早かった。内容物を吐き出させて、シヤマルの治療により野良猫はすぐに走り去った……

「なんとかなつたな……」

俺はチラリ横を見ると……

「うう……」

体育座りで落ち込んでいるシヤマルが……まあ原因が自分の料理だからなあ……相手は猫だからフオロー位出来るかな？……

「あのハンバーグは自信作だったのに……頑張つて肉だけで作つたのに……」

肉100%……フオロー出来ない、玉ねぎはネコにとって毒だから……フオローが出来ない……

「……………」

シヤマルから負のオーラが……よし。

俺は弁当箱を持つて……

「え！？コダイ君！？」

シヤマルの弁当を食べ始めた。

「アム……………」

卵焼きなのに卵の味がしない？……………ハンバーグに至つては肉汁とは思えない何かの汁が溢れる……と言つか見た目や臭いは普通なのに、何で味は殆ど進歩してないんだ？天才か？

「コダイ君ダメです死んじゃいます！」

問題無い死ぬのは一回だけだ……

「……………不味い」

「うう……………」

殆ど食べてから感想を言つた……

「だが……今までで、一番良い出来だ」

「え……………?」

泣きそうだな……

「俺の為に作って来たのなら残す訳にはいかないしな……………次に期待」

「えう……………ゴダイグウウウウンー!!」

「あ……………よしよし」

泣き付いてきたシャマルの頭を撫でる……………子供だな……………

そんなんだからお母さんって言われるんだよ by 作者

……………あれ? 作者こいつに最近顔合わせて無い様な……………

「ふあ…………… / / / / /」

ん? シャマルの様子が……………

「あ……………ん……………ふあ / / / / (ふあああ……………なでられるたびにのみそとけちやいそうです / / / / /)」

……………面白そうだからもっと撫でてやる事にした……………

「ふあああああああ…………… / / / / /」

……………何か楽しくなってきた。

「 / / / / / / / / / / / / / / /」

「その……………ゴメン。調子に乗り過ぎた」

20分位頭を撫でていた……………

「だ、大丈夫ですよ!?? ちょっと気持ちよかつ……………いいえ何でもあ

りません／＼／＼（あの手は凶器ですロストロギアです……／＼／＼）

「そうか……取り敢えず片付けるか」

「そう言つて弁当箱片付ける……」

「ごめんなさいコダイ君……なんか今日は色々迷惑をかけちゃったみたいで……」

「気にするな……シャマルの成長も見れたからな」

「あう……恥ずかしいです／＼／＼」

「始めから出来る奴はいない……経験を積めばマシになると思うぞ？」

「本当ですか！？はやてちゃんやコダイ君見たくなれますか！？」

「経験しだいな？……まずは……シャマル」

「はいんむっ」

シャマルが口を開いた瞬間、弁当箱の隅に残っていた卵焼きを放りこんだ。

「っっ！！」

目は涙目で見開き、口は強く引き結ばれている……この顔を見ればどんだけ不味いか一目瞭然だな。

「味見はするようにな？」

「（コクコク……）」

喋れないから強く頷くシャマル……

片付けを終えて、シャマルを家まで送る事にした……

くおまけく

シャマル帰宅後……

「くくくく／＼／＼／」

鼻歌を歌いながら楽しそうにキッチンに立つシャマル……

「はやてえく何で止めなかったんだよ」

「ごめんなヴィータ……あのシャマルのやる気に満ちた目を見たら止められなかったんや……」

「また……胃薬の世話になるのか……くっ……せめてトキガワと同じ胃袋があれば……!!」

「落ち着くんだシグナム……アレは誰にも真似できない……」

「でもコダイ君からコツ教えてもらえたら……大丈夫やろ……多分」

「でもコダイの事だから面白がってそのままにする可能性も……」

「あり得るな……トキガワなら」

「確かに……」

「……リンに強い回復魔法の準備をして貰おうか……」

ガツシャーン!!!

「大変です、はやてちゃん！シャマルが料理の味見をして気絶しましたあ〜!!」

「……自殺!?」「……」

その後、シャマルの治療と料理の廃棄に大慌ての八神家だった……

…

デート・シャルマル編（後書き）

メガネ「スイマセン最近体調不良が続いて更新できませんでした」

レイ「夏バテ？夏風邪？」

メガネ「それに近い感じ……………何か頭が痛い日が何日も続いて……………」

コヨリ「だいじょうぶですか？」

メガネ「大分良くなった……………って事でさっさと進めよう」

レイ「感謝コ〜ナ〜、スペリオルス様、山義 芳原様、ながも〜様、ポワソ様、surteinn様、龍賀様、シーザ様、フェンリル様、アナザー様、感想ありがとうございます！！」

メガネ「スペリオルス様からは『Pabo』のグループ衣装とざるそばを、山義 芳原様からはソフトクリームとクーリッシュのソーダ味とコダイinnネコミミ&猫の尻尾の水着姿の写真（撮影場所はばらばら）を6枚を、ポワソ様からはコダイには『サモンナイト3』の主人公レックスの衣装をレイにはベルフラウの衣装をコヨリにはソノラの衣装を、シーザ様からはメガネには犬夜叉の『火鼠の衣の服』をコヨリには犬夜叉のかごめの着ていた制服を、フェンリル様からは雪見だいふくを人数分と炭酸飲料を30本とバレットウィッチの武器ガンズロッドとコスチュームを、アナザー様からはコダイへ『ゴッドイーター』の服装で黒色の『スイーパー』の女性Verをトップスとボトムス両方とリュウトの召喚獣の神機とアリサさんの服と神機とレイにはハルナの魔装少女なりきりセツトを、頂きましたありがとうございます！！」

レイ「後、シーザ様とフェンリル様から質問も来てるよ」

メガネ「まずシーザ様から」

質問『レイはじゃんけんをするとどのくらい強いんですか?』

メガネ「弱過ぎです……と言う事でやってみる」

レイ&コヨリ「じゃんけんポン!」「」

レイ チヨキ

コヨリ ゲー

レイ「うう」

コヨリ「だすまえからそのてになってます」

メガネ「次、フェンリル様からの質問」

質問『コダイは、もう銃を使わないんですか?また、使いやすいのは、どんなのですか?カテゴリーで教えてください』

メガネ「これは本編のコダイから手紙を買った……えっと」

コダイ『もう素手で行くつもりだったが、使うつもりだ………使いやすいのはハンドガン系だデザートイーグルは威力が高いから使っている』

メガネ「の事です……………つか使うのかよ……………ん？」

リュウト（召喚獣）「……………」

レン（召喚獣）「……………」

メガネ「えっと……………アナザー様の作品の『バカとテストとアノ人達』に出てくる神埼リュウトと雨宮レンの召喚獣です！」

リュウト（召喚獣）「（コクン）」

レン（召喚獣）「（ペコリ）」

メガネ「召喚獣って話せないんだよね……………」

コヨリ「あゝ」

メガネ「どうした？」

コヨリ「ほんぺんのコダイというひとからこんなものが……………」（ダンボール）

メガネ「何だコレ？……………手紙が……………『要望通り女装写真集だ』って何送って来たんだ！？……………まだ続きがある見たいだな」

コダイ『取り敢えず6歳から現在に至るまでの女装写真をまとめた。それとさつき貰った魔装少女？のなりきりの写真も同封してある……………』

……………女装はオシヤレだ！！』

デート・プレシア編（前書き）

プレシアは以前デートした事があるので、少し違う感じに………g
dgd言う事は変わらないです。

コダイのお母さんスキル発揮です…
以前に後書きで頂いたお土産を使います。

デート・プレシア編

「プレシア……一体どうしたんだ？」

昨日電話が来て誘われたが詳しい内容は明日、家に来たら話す。と言われた……經由してミッドに行くのか？

「リンディと同類だからな……良からぬ事を企んでいるだろうな……
… 確実に」

そんな事を考えていたらハラOWN&テストタロッサ家の前に着いた……

ピーンポーン

インターホン押して少し経つと……メールが来て。

『鍵は開けたわ……悪いのだけど私の研究室まで来てくれるかしら？』

と言う内容だった。

「何でメールだ？手が離せないのか？」

とにかく家に入る事にした。どうやら誰も居ないようだ……

「プレシア……入るぞ」

プレシアの研究室の扉をノックしてから開けるとそこには本やら資料やら散らかっている研究室の真ん中に……

「きたわね……コダイ」

長い黒髪で、プレシアが着ていた服をブカブカになっても羽織っている推定年齢5前後の少女が……と言うより……

「何をしているプレシア」

「こつちがききたいわよ……」

舌足らずで落ち込む幼女と言うなんと面白い光景が目の前にあつた……

「プレシア……自分が歳だからって流石に幼女は無いだろ」
「だれがとんだー！」

キレてデバイスを起動するが……

「わわっ……わわわわわわわ」

デバイスが大き過ぎて今のプレシアでは持てない……

「もう少し大きくなつてから持とうな？」

デバイスを取り上げる。

「あー！かえして！かえしなさい！」

脚にしがみつくプレシア、チョット涙目………何か面白い。

「と言つか何で幼女に？」

「………なりたくてなつたんじゃないわよ………」

「元に戻るのか？」

「ほんのしょうりょうだからはんにももたないわ」

なら………

「………一応この事をリンディと桃子に連絡するか」

戻るまで楽しむか。

「ちよつとまちなしゃい！！なんなのそのじんせん！？リンディは

わかるけど、ももこはみんかんじんよ！？」

「だめなのか？」

「だめにきまつて………なによその『あたらしいオモチャ』をみつ

けた力才は！！」

「何を言っているんだ？無表情の俺がそんな顔する訳無いだろ？」

実際そうだけど……

「まあ……そんな事は一先ず置いて、なぜこうなつたか説明して

くれ………」

「あれよ………」

プレシアが指した机の上には二本の瓶が……

「何々？……『成長薬』と『ジェットコースターの制限に引つかか

らない程度にのびる薬』………何だコレは？」

「あとが………ではなくあるところからてにいれたくすりよ」

以前、黒一文字様と龍賀様から頂いたお土産です！ありがとうございます！
b y 作者

説明どうも……アレ？誰と話していた？

「聞く限りでは……子供になる要素は全く無いみたいだが？」

「このくすりのきょうつうてんは、にくたいねんれいをかえることなの。だからこれをかいせきして、つごうのいいへんしんやくをつくるつもりだったの」

「自分で都合の良いとか言っなよ……で、その姿は自分で……」

「マイナス5さいじゃなくて、5さいになったのよ……うっ……うえ
くん……」

あ、泣きだした……精神に肉体が引っ張られているのか？

取り敢えず、頭を撫でた……

「ふにゃあああああ／／／／／」

効果は抜群だ……

落ち着かせた後、プレシアが部屋を片付けたいと言う事手伝う事に
した。

「この本は？」

「あそこのたなのうえよ」

ちなみに今プレシアの着ている服は俺が寝巻に着ているワイシャツ
の袖を何度も捲って着ていて、足元も裾で隠れている。今は椅子に
座って俺に指示を出している。

何か俺には渡したくないそうだな……………仕方ない。

「きゃっ／＼／」

プレシアを後ろから抱き上げる。

「これなら届くだろ？」

「そうね…………／＼／」

プレシアが真っ赤になりながらおそろおそろファイルの本棚に入れた…………

「コレでおわ「ま、まって／＼／」ん？」

「あ、あたらしい…………しりょうをとりたいから…………このままで／＼／」

「ん？だったら俺が「ダ、ダメよ！！」は？」

「しりょうのいちぶには、わたしいがいがあるとばくはつするワナがあるによよ！！／＼／」

「どんな罠だよ…………まあ、爆発はゴメンだ…………抱き上げてやるか取れよ？」

「うん／＼／＼／（コダイに抱き上げられるなんて滅多に無いわ！！ここは一秒でも長くだっこされるように…………フッフッフ／＼／／）」

プレシアの資料探しを手伝ったが…………その間、抱き上げているプレシアが妙に嬉しそうだったのは何故？

くう〜

「あう／＼／＼／」

この音と反応からして、プレシアのものらしい…………

「ご飯にするか？冷蔵庫の物を勝手に使っていないのなら」

「え…………え〜つと…………おねがいます／＼／」

「いただきます」

今回のメニューは材料を抑えて、ペンネと言うパスタにトマトソースを絡めたものと野菜サラダだ。

食べる際に『フォーク使うか?』と聞いたら『こどもあつかいしにやいで!』と箸を持って怒った…

「おいし〜」

けど、食べた瞬間に機嫌が治った、徐々に子供になっていく…
口にソース付いてるし…

「ほら…」

「ん〜…ありがた〜…はっ!!ノノノノ」

口元を拭くと笑顔でお礼を言おうとして、我に(?)かえった…

「大丈夫か?何か段々と精神が子供に…」

「だいじょうぶよ!」

そう言っただけはサラダに手を付けるが…

ポロッ

「あ……………」

小さく角切りしたニンジンを手掴もうとして失敗した。

「も、もういつかい……………」

もう一度掴む……………」

ポロッ

「あ……………」

「纏めて掴めよ……」
「このだいまどうしがニンジンにまけるなど……」
三度目……お、いけるか？

ポロツ

やっぱり失敗か……
「うう……ひつく……ぐすっ……とれない」
あ、泣き始めた……
「ほら……あーん」
「あ〜ん……おいし〜」
「次は Pasta だ……」
「あ〜ん / / / (あれ？ここままではダメな様な……ま、いつか おいし〜し / / / / /)」
食べさせたら機嫌が治った……また泣かれたら困るので、この後も食べさせる事にした……

1271

「ん〜……すうすう」
ご飯の後片付けが全て終わった後、プレシアを見るとテーブルに突っ伏して寝息を立てていた……
「満腹になって眠ったのか？……もう子供だな……」
「こどもじゃにやいよお〜……く〜」
寝言で突っ込まれた……
「……仕方ない」

プレシアを抱き上げる……
「ベットまで運ぶから、寝るならそこでな」
「ふあゝい……………えへへ／＼／＼（おかゝさんのおいだあゝ／＼／＼）」
プレシアをベットまで運んだ後、完全に眠った後に家を出た……
「あ……………アルフとリニスには説明しておくか」
帰りながら二人にメールを打つ。

くおまけゝ

コダイ帰宅後……………

「こ、これは……」

「ほゝれ、ほっペツンツン」

「しゃわらにやいでよあゝ／＼／＼」

コダイの連絡を受けたアルフとリニスはすぐさま帰宅し、小さいプレシアを発見。今はアルフが膝に乗せて頬を突いている。

「しかし何であんな事を……………」

「かたんよ……………ふたりにしつもんなんだけれど……………コダイ

……………しかもオトナになったコダイは好き？」

「それは……………確かに今でも反則だけど……………大人のコダイは……………卑怯だよ／＼／＼／＼」

「あれで惚れるなど言うのが無理な話です……………／＼／＼／＼」
プレシアの質問に真っ赤になる二人……………

「そう……………おとなコダイははんそくよ……………つまり、あのくすりをのませればおとなコダイとデートできるのよ！しかもいまのわたしのように、せいしんもひっぱられるとくてんつきによっ！……………かんじゃった」

「な、なんだってー！！！！」

「しかもそのくすりはかんせいしてるわ!」
プレシアが瓶を掲げる。

「にほんあつたけどいっぼんはいらいぬしにわたしたからこのいっぼんがさいご……つかいなさい」

その瓶を二人に渡す。

「むむむしゅうだからジューズとませたりしなさい」

「何でコレをアタシ達に渡すんだい?ライバルがさらに増えるんだよ?」

「いいアルフ?こんかいのデートはコダイにわたしたちをオンナとしてみてもらったためのデートよ。かずはおおいほづがいいわ……」

「アンタ策士だねえ」

「だてにきこんしゃじゃないわよ」

アルフの膝の上で誇らしげに胸を張るプレシア……

「では有難く使わせて貰います……コレでコダイさんを……」

「フフフフフフフ……ノノノノノ」

怪しく笑う使い魔……

「ん……でもこんかいみたいにコドモになってあまえるのもわるくな……っ!」

ボンッ!!

「っっノノノノノ(わ〜!思い出しちゃった!思い出しちゃったノノノノノ)」

それをよそに悶えるプレシアがいた……

デート・プレシア編（後書き）

メガネ「幼女なプレシア……略してプレシアさんとコダイのお母さん回でした〜」

コヨリ「りやくしてません……」

レイ「今回ののはデートなの？」

メガネ「所謂、自宅デート？な感じにしました！」

コヨリ「いろんなデートがあるんですね……」

レイ「感謝コ〜ナ〜 スペリオルス様、アナザー様、龍賀様、surteinn様、ながも〜様、シーザ様、フェンリル様、ポワソ様、感想ありがとうございます！！」

メガネ「スペリオルス様からはざるうどんとゴマだれを、龍賀様からはイノセンスのジャツジメントと神機のクサナギ改とシヴァ真を、surteinn様からはバファリンを、シーザ様からはメガネには『一つだけ必ず願いが叶う薬（時間制限十秒以内）』 説明書付きを一つとレイに遊び相手のスライム×100とスライムベス×100とメタルスライム×100とバブルスライム×100とはぐれスライム×100とキングスライム×100とメタルキング×100とコヨリには武装錬金フェイタルアトラクションを、フェンリル様からはエリクサーとハイポーシオンとフェニックスの尾を1000づつと飛騨ねぎを使ったほうば味噌とメンチカツとスイカとメロンを人数分と恋姫無双の登場人物のコスチュームを人数分とコダイにS&Amp;W500とデザートイーグルをマガジンとスピー

ドローダー100づつを、頂きましたありがとうございます……！」

レイ「アナザー様から質問きてるよ……！」

メガネ「答えは貰って来たから早速行こう……！」

質問『シャマルはいつた何の肉を使用した？』

メガネ「答え……！」

シャマル『えつと……名前が長くて忘れちゃいました……』

メガネ「次……！」

質問『コダイよ、何をしたらアインがそんなことになる……』

メガネ「答え……のつもりでしたが、あまりにも危なく更に全員が止めに入るほどなので……想像に任せます……以上で質問終わります……！」

レイ「見てみて……！ニューニューだ……！」（スライムを抱っこ）

コヨリ「プルプルです……！」（キングスライムに抱きつく）

メガネ「えつとこの薬は……『コレは受け取って十秒以内に飲まないで願いが叶わず、逆に不幸を呼び寄せる……』ってもうすぎとるわあああああ……！」

シュン……！」

なのは（召喚獣）&フェイト（召喚獣）」「（ペコリ）」「（箱を差し出す）

メガネ「えっと……………アナザー様のところのなのはとフェイトの召喚獣です……………えっと、レイとコヨリに姫路瑞希と島田美波の召喚獣なりきりセットを頂きました！アナザー様ありがとございます！！」

レイ「カツコいい〜！」（姫路瑞希の召喚獣コス）

コヨリ「かつこいいですけど……………ムネがきついです」（島田美波の召喚獣コス）

メガネ「本人居なくて良かったな……………ん？何ですか？あの物凄い怖そうな生き物は……………」

レイ「アナザー様のもう一つのお土産で、ハンニバルとアマテラスとスサノオとツクヨミとディアウス・ピターって言うアラガミだつて！」

メガネ「ちょ！えっ！？俺狙ってんの！？薬か！？薬の所為なのかあああああああああああ！？」（逃亡）

……………（追跡）

コヨリ「だいじょうぶでしょうっか？」

レイ「う〜ん……………こーゆー時は、龍賀様から送られたもう一つのお

土産を……………」

メガネ「もう一体！？……ってえ？アラガミと戦っている……………」

レイ「アラガミのハンニバル侵喰種だよ！」

メガネ「龍賀様ありがとうございます！！……………おお！！あのアラガミを一瞬でたおした！？」

「ヨリ」「ノリでかいりょうしたらしいです。さらにみんなになつくと……………」

メガネ「流石龍斗だ……………は？懐く？チヨット待て！！そのでかさでジャレたら……………やっぱり薬の所為かあああああ！！！」

（逃亡）

.....

レイ「あはははは.....ドンマイー！」

「ヨリ」おみやげありがとうございました「ペ」

なのは（召喚獣）&フェイト（召喚獣）「ペ」

シユン

レイ「皆様からの意見や感想など色々待っていますー！」

メガネ「くそおおおおおこつなったらこの際言わせて貰おう
!.....不幸だあああああああああああああ!!!」

く次回もお楽しみにしてください!~)

デート・アルフ&リニス編（前書き）

今回のデートは二人かがりです……………
夏バテ状態なのでいつもよりg d g dです……………スイマセン！！
（土下座）

デート・アルフ&リニス編

「え？……二人？」

リニスから電話が来て、待ち合わせの場所のマンションの前に着くとそこにはアルフとリニスがいた。

「はい、今日は私達とデートしてくださいね（一対一では勝てないのなら二人掛かりで……）」

「にゅふふ〜モテモテだね〜（狼は集団で獲物を狩る……覚悟しなよ／＼）」

……なんかヤバい空気が漂っている。

「で……まず何処に行くんだ？そう言うのなら計画があるんだろ？」

「はい……ですけど、まずコレを飲んでください」

リニスが渡したのは一つの小さな瓶だ。

「栄養剤です……最近お疲れの様ですし」

「そうそう、さあググっといっちゃいな！」

「疲れては無いが……倒れてからでは元も子も無いな」

そう言っつて栄養剤を飲む……

PON!!

「……………？」

あれ？……視線が高い……と言っか。

「大人になった？」

「というか何で服まで大きく？」

ご都合主義です！by作者

触れるなって事ね……

「闇の書の事件の時とは違って髪は黒いままだ」

19歳位だね……

「ねえ、さっきのつてもしかしてプレシアが作っていた薬？」

「はい……でも、栄養剤と混ぜていたので栄養剤でもありません／＼／＼（大人コダイさんだ……どどどうしよう／＼／＼）」

「えっと……騙す様な事をして……ごめん／＼／＼（ムリムリムリムリ！あんな反則美人を直視出来る筈が無い／＼／＼）」

あれ？……なんで顔赤くして俯いてるのかな？

「えっと……まずは何処に行くの？」

「その……ペットシヨップです／＼／＼」

「ペットシヨップ？何で？」

「私たちは普段は主の負担を減らすために動物形態で居る事が多いんです、留守を任されてる意外ほとんどは……そしてこの時期になると色々……」

「あゝ毛とかね……大変だね」

動物形態の二人が自分の抜け毛をコロコロで掃除するシュールな光景を想像した……

「後ドックフードもね！」

「アルフ……相変わらず食べてるの？」

「結構いけるよ？ねえリニス」

「はい……たまに食べる美味しいですよ？キャットフード」

「……もしかして動物関連の人って皆こんな感じ？」

ザフィーラは『保存食の様な物だ』って言ってるし……まあ、前の世界で食べた事あるし美味しいのは分るけど……

「えっと……じゃあ行こうか」

「はい……それと……その／＼／＼」

突然リニスがもじもじし始めた……

「て……手を……繋いでもいいですか？／＼／＼」

上目遣いで聞いてくる……

「あ、アタシも良いかい！？／＼／＼」

アルフは飛びあがる位手を上げている。

「え？良いよ？」

そう言うと飛び付くと言う表現が近い感じにリニスが右手、アルフが左手を握って来た……

何か嬉しそう……何で？

リニス達に案内されて、ペットショップに着いた。

犬や猫だけで無く、鳥やハムスター…更に熱帯魚まである大型の専門店だ……

「こんなのあつたんだ」

私も知らなかった……フェレット（ユーノ）の飼う時はこんなのがあった。

「買ったとしても普通のフェレットじゃないからカゴ以外無駄に終わったけど」

チラリと二人を見ると『コッチの方が』『いえいえコチラが……』等と口論しているらしく。私が入ってはダメな気がする……

口論が終わるまで猫と遊んでよ……あ、マンチカン（猫の種類）だ。

〈10分後

「だから小動物は反則だって……」
時間忘れたよ……

「二人はもう終わっているのかな？」

二人の方に向かうと、真剣に何かを見ている様子……

「どうしたの？」

「ひゃうっ！！／＼／＼」

二人が飛び上げってこちらに振り返る。

「いい行き成り驚かさないでください！！／＼／＼」

「ビックリしたじゃないかい！！／＼／＼」

普通に声掛けたんだけど……え？

「ねえ……アルフ、リニス……ソレ、何？」

私は二人の首にある『どうしても首輪にしか見えない物』指した……

「えっとコレは……その……に、似合うかい？」

「アルフ？」

「ど……どうでしょうか？」

「リニス？」

どうしたんだらう……二人とも元が犬と猫だし……

「似合ってるよ？」

「そ、そうかい／＼」

「では、決まりですね／＼」

二人は首輪をはずしてレジに向かう、もう買う物が決まって……

「ちよっと待って」

二人の肩を掴む。

「どうしたんですか？コダイさん」

「もしかして……首輪を買うの？」

「そうだけど？」

「もしかして……付ける為？」

「首輪の使い道はそれしかありませんよ？」

「何でそれを買おうとするの？」

「それは……アンタが似合うって言うてくれたから／＼」

リニスとアルフが交互に答えてくれる……

「ダメ……首輪何て付けたらダメ」

二人から取り上げる。

「あぁっ!？」

「どうしてですか!？」

「ペット用の首輪は防虫剤付きだから肌がかぶれるから」(天然)動物形態なら問題ないけどあのサイズからして人間状態の時に使うはず…

「この近くにアクセサリーショップがあったからそこでチョーカー買ってあげるよ」

「本当かい!？」

「嘘では無いですよね!？」

「本当だよ、分ったら会計済ませてね？」

「分った(分りました)!!」「」

シュバツ!!

早い……何か躡けているみたいだな……

会計後、近くのアクセサリーショップで二人が買おうとしていた物に近いチョーカーがあったから、それにした。

「えへへへ／＼／＼(コダイからのプレゼント)……はっ!首輪って事はアタシはコダイのペット……ううゝ嬉しい様な恥ずかしい様な／＼)」

「フフフフ／＼／＼(コダイさんのペット……アリです!最高です!!／＼／＼)」

………なんか嫌な予感が………まあ良いか。

「次はどこなの？」

「次はアタシだよ」

私が聞くとアルフが腕に抱き付きながら引つ張っていく…

「むうっ」

何かリニスがむくれなが腕に抱き付いて来た…

「ここだよココ！」

「ここって……ケータイショップ？」

「実はこの前のは寝ぼけて壊しちゃって……」

「目覚ましと間違えて全力で叩き壊したんです…」

「言うな〜！！／／／」

何かアルフらしい壊れ…と言うより壊し方だね…

「ん？全員持つてるの？携帯」

「人間形態で出かける時はね」

「此処で念話していたら怪しまれますし…」

え？………普通にレイとしていたけど？………まあ、他人の視線何か

気にしてないけど。

「もう買う機種は決まったの？」

「カタログで強い衝撃に耐えられるケータイってのがあったからそれ

にするつもりさ」

「私のもそろそろ変えようかと……」

「私はどうしようかな？……」

アレ以来（A's編）変えて無いから………4年位だね。

「変えようかな………私も」

そう言っただけ私も新機種にする事になった………

アルフはオレンジでリニスはどこかのブランドとコラボした薄い金

色で私は前と同じ白の形態を購入した。

「あんな状態で良くメモリーとか無事だったね…」

「い、言うなっばっ！！／／／／」

アルフの前の携帯は店員が軽く引く位ボロボロになっていた………流

石の私もそこまでボロボロにした事は体以外無い…

「あのさ、コダイ……ちょっと良いかい？」

手続きも全部終了して店を出た後にアルフに袖を引かれた。

「どうしたのアルフ？」

「えっとさ……写真……一緒に撮っても良いかい？／／／／」

「良いけど……どうして？」

「リニスのケータイの待ちうけがああ時のコダ「ワー！ワー！何言っているんですかあっ！！／／／／」モゴッ！！」

突然リニスに口を塞がれるアルフ……ああ時の……何なの？

「コダイさん！！私も一緒に撮っても良いですか！？／／／／」

「え？良いよ？」

「では順番に撮りましょう！！まずアルフから」

「（コクコク）」

口を塞がれてるので頷くアルフ……いい加減話したら？

その後、適当に場所を選んでアルフ、リニスの順に一緒に写真を撮った……

「ありがとう……大切にするよ／／／／（コダイと2ショット……こうして見るとコダイって小柄だね／／／／）」

「永久保存します……家宝にします／／／／（大人コダイさんの写真が増えました／／／／）」

撮られた甲斐がある……でいいのかな？

「今日は本当にありがとうございました」

「何か悪いね、コッチばかりの用件で」

「いや、私も楽しかったし良いよ」

今、私達は公園のベンチで休んでいる……理由はペットショップで買った物が予想以上に多かったと言う事。

「しかしこのままでは私達の気が治まりませんし……」

「そうだね……そうだ！何か私達にして欲しい事は無いかい？」
して欲しい事？……あつたかな？

「何でも言つてください……どんな事でも／＼／＼」

「チョット待つてリニス、そこで赤くなる理由が分らない……」

「そうだ。動物形態になつて」

「そう言つと、リニスが結界を張り山猫にアルフが子犬になつた……」

「で……何をするんだい」

「そのままが良いよ」

「そう言つて私はブラシを取り出す……」

「二人の毛繕いしたかつたんだよね……」

「ユーノにはフェレットの時やつていたし、結構得意だよ？すずかの猫にも撫でリストつて言われたし……」

「ふああああああ／＼／＼（のーみそがあ……のーみそがとけりゆう……／＼／＼）」

「ふにやああああ／＼／＼（はんざいですう……そのてはだめですう……／＼／＼）」

（数十分後）

「良し……終わり……あれ？」

「……／＼／」（ピクピク）

「……／＼／」（ピクピク）

「ん〜眠ったのかな？丁度いいか。そのまま運んで帰ろっ」
アルフとリニスを腕に抱き、フェイト達の家まで送った……勿論荷物も持って……

〜おまけ〜

アルフ&リニス帰宅後……

「「うう〜／＼／」」

コダイに送られた二人は動物形態のまま唸っていた……

「ったく何あの手は…撫でられるだけでもヤバいのに毛繕い何て／＼／」

「ツボを正確に捉えています……何ですかあの完璧超人……弱点とが無いんですか？／＼／」

「そう言えば……フェイト達も以前、弱点を探したらしいけど……」
「どうでした？」

アルフが首を横に振ると、再び落ち込むリニス……

「そう言えば……プレシアが言っていた薬の依頼主とは誰なんですよっ？」

「う〜ん……あの二匹が妥当じゃないかい？」

「あの人達ですか……」
暫く考えた後……

「コダイなら大丈夫だね」

「あのコダイさんなら下手な事出来ませんし」
特に問題無いと結論に至った使い魔、sだった……

デート・アルフ&リニス編（後書き）

メガネ「あの二匹って言う時点で誰だか分りそうだけどね」

レイ「あの二匹って……………まさか!？」

コヨリ「だれなんですか?!」

ズベシヤアアアアアアアアアア!!!

メガネ「流石コヨリ……………良い所でボケる」

コヨリ「?」

レイ「感謝コゝナゝ　ながもゝ様、ポワソ様、山義　芳原様、龍賀様、ヒロアキ141様、シーザス様、フェンリル様、魁斗様、感想ありがとうございます!!!」

メガネ「ながもゝ様からは安産祈願のお守りを、ポワソ様からはコダイに『ドラゴンクエスト』のへんげの杖をレイに』とある魔術の禁止目録』の歩く教会をコヨリに『聖闘士星矢』のアテナ沙織が持つてる二ヶの杖を、龍賀様からはコダイにはジャツカルとカスールでレイにはカブトゼクターでメガネには剣のベルトをコヨリには武装錬金のバスターバロンを、シーザス様からはコヨリにラグナロクオンラインDSの職業シャーマンの服と『聖なる腕輪』と『守りの指輪』とレイにはティモシーのイノセンスの憑神を、フェンリル様からは『けいおん』の桜岡高校の制服人数分（着た時にフィットします）にかき氷のメロンとソーダとイチゴとスイカにエースの腕の文字の刺青シール（仲間の印の?印付き）を人数分と飛騨桃白鳳を

10玉入り5ケースを、魁斗様からは仕込みトンファー（大きさ等は持ち主にあった大きさになる）とボンゴレスーツとアニマルボックスの人形と忍具一式とボンゴレボックス&ボンゴレリングを頂きましたありがとうございます！！」

レイ「なんかブカブカ」（歩く教会着用）

メガネ「よし！コレで何とか……なるかな？」（『聖なる腕輪』と『守りの指輪』を装備）

コヨリ「あの……何か振ってきます……」

メガネ「え？」

ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！

メガネ「うおっ！！後ろ！？腕輪が無かったら直撃だったかも……」

コヨリ「おっきい……おふねです」

レイ「これってこの前の超巨大輸送機で長門型戦艦（第二次世界対戦仕様）だよな？」

メガネ「山義 芳原様からのお土産で5000人を半年分賄える程の食料とのコダイの子供姿の写真（無邪気なさまで愛くるしい姿の）をコダイLove x 人数分を頂きましたありがとうございます！！」

デート・リーゼアリア&リーゼロッテ編（前書き）

リーゼ姉妹は大人コダイに一目惚れでそのまま一気に好きになっています。

ここまで来るとコダイの天然フラグ能力がヤバい事に……
大人コダイはかなりの美人設定です。

デート・リーゼアリア&リーゼロツテ編

「えっと……確か此処で合っているんだよね？」

今日はリーゼ達と約束をしていてミッドの首都クラナガンで待ち合
わせてをされていて、現在そこに向かっている……

「そう言えば久しぶりにミッドに来たな……」

夏休みは殆ど海鳴に居たからな……さて、リーゼ達は？

「いたいた！おーい！コダイ〜！！」

「こつちだぞ〜！」

いた……道理で見つからない訳だ……

「今日は私服か……」

リーゼ達はいつもの局員の服では無くて、普通の私服だった……

「ふふ〜ん 似合う？」

「久しぶりに来たんだが……間違っただけ無いわね？」

「ああ……似合っている」

ん？そこは綺麗とか付けたしとけ？何を言っている……俺が綺麗と
か言ったら皮肉にしかないだろ。

「久々の休暇……とことん遊びつくす！！」

ロツテがガッツポーズをして燃えている……

「ロツテに何があったんだ？アリア……」

「最近休暇が潰れたりして色々溜まっているんだ……」
成程……

「それはそうと、道中暑かっただろう？コレでも飲んで体を冷やせ」
アリアが渡して来たのはスポーツドリンクだった……

「別に海鳴よりは暑くないし……慣れてるし……」

そう言いながらスポーツドリンクを飲む……あれ？このパターン

は……

P O N

「ああ……… やつぱり」

また大人になった………

「ぐっ……… 更に……… 色気がノノノ（人形の様に細い……… コレで男なのが嬉しいのか残念なのかどっちだ……… ノノノ）」 or z
「やつぱり……… 勝てないノノノ（激強なのにチヨット力を入れたら壊れそうな細さ……… このギャップが萌える！！ノノノ）」 or z
あれ？……… コレ前にもあったよね？

「大人にして理由は聞かないけどさ……… 今日は何処に行くの？」

このままじゃ話進ま無いしね………

「服とか色々だな………」

「最近キツクなったしね〜胸が！」

と胸を張るロツテ……… と言うより。

「使い魔って成長するの？見た所キツクなったのはウエ……… っ」と

顔面に来る蹴りと魔力弾を避ける………

「ウルサーイ！元はと言えばお前の手作りの差し入れの所為ニャー

！………」

「そくだ！あんなに美味しい差し入れが来たらついついお酒と飲みたくなるだろうが………！」

「それって私の差し入れよりお酒の所為なんじゃ………！」

「………」

黙る二人………

「服を見に行くんでしょ？早く行かないと緊急の連絡とかで潰れちゃうよ？」

「そ、そうだった………！」

「早く行こう!」
アリアとロツテに手を掴まれ引つ張られる……

女性服専門の服屋に来たんだが……

「ねえねえコレはどうかにゃ?」

ロツテが服を手にとつて聞いてくる。

「……もう一つ色が濃いのは無かったの?」

「あつたけど……似合わない?」

「似合うけど……此処まで明るいとはやけるから」

「分つた、濃い方にしてくるよ」

ロツテが戻っていく……それとすれ違いに今度はアリアが来た……

「なあ……コレはどうだ?」

「コレって……流石にそれは丈が長い……」

「な、何!?だがこれ以上短いとラインが……」

「中途半端に長いと逆に太く見える……細く見せるには短い丈の方が良いよ」

「そう言う物だったのか……ありがとう、短いのにして見る」

アリアが向こうに行く……入れ違いの様にロツテが……

「濃いを持って来た」チヨット待つてロツテ「ってどうしたの?」

チヨット言いたい事が……

「短い丈と言う事でマイクロにして見たが「アリアも待つて」……どうしたんだ?」

別に良いけど一つ言いたい……

「何で私の所に持つてくるの?」

「一番センスあるから」

声を揃えて答えてくれたよ……流石双子……

「チビツ子達に服を作っているんでしょ？」

ロツテが言うチビツ子はレイ達の事だ……確かに作ってるよ？

「そのセンスで私達をコーディネートしてくれ」

「それは良いけどアリア……それとロツテ……ソレ明らかにサイズ合わないよね？」

ロツテが自分の着る服の他に持って来たのはロツテには小さい服だった……

「これ？……コダイ用！！」

と目の前で広げたのは袖が広がっている長袖の可愛いシャツだった

……

「何で私に？」

「だってコダイ殆ど黒を着てるじゃん、これなら抵抗無く着れるかな？とか」

それは好きなのと返り血が目立たない様にするため……

「成程……一理あるな」

アリアが顎に手を添えて頷く……ああ成程……同種だこの二匹……

「よし！私も探すぞ！」

「負けないぞ〜！」

同時に走り出す二人……

「自分の買い物は？」

……聞いて無いね。

〜試着中〜

「こ、これは……／＼／＼（大人コダイに女装……完璧な大人の女だなコレ……／＼／＼）」

「か、可愛い……／＼／＼（食べたいけど……壊れそう……そんな感じが良い！／＼／＼）」

その後も沢山の服を買ったけど……

「後半……と言うより7割り位私の為に買っていたよね？」

「あ、あはははは……」

乾いた笑いをする二人……

今、私の着ている服は白黒のボーダーのシャツにデニムのジャケットト、白いフリルの付いたフレアスカートに茶色のヒールサンダル。小物に黒縁メガネ、幅が広くてバックルが大きなりボンになっているファッションベルト、髪はアリアが持っていたピンで顔が見えるように…… ロツテが何故か持っていたシリコンパッドで胸も（シグナム並み）出来てる……

あ……服は郵送したらしいよ？

「なんでパッド何て……」

「何時かクロスケに付けようかと！」

「凍らされるよ？」

散々模擬戦やった所為か無詠唱でエターナルコフィンが出せるもんアイツ……

今いるのは屋台のクレープ屋……かなり美味しいらしい。

「このクレープ美味しくってさ、休憩中とかによって食べたりするんだよね」

「お持ち帰り用もあるからお土産に買って帰る局員もいるんだ」

「確かに凄い客だね……」

結構混んでるし……

「私達に任せて」

「この死地をいつも潜り抜けているからな！」

そう言つて人ごみに入つて行く二人……何食べるか言つて無いけど……まあ、いいかな？

「何処で待つてよう……」

出来れば分り易い方が良いよね……そう考えていると。

「ねえその君、良かったら俺達とお茶しない？」

と後ろから声が聞こえて振り向くと数人の男達がコツチを見ている？……男達の視線を追うけどどこそこには特定の人物はいない……

…もしかして？

「私？」

「そうそう……言つか君しかいないし」

「何か用なの？」

「あんまり見ない顔だけど何処から来たの？」

「地球」

「それつてエース・オブ・エースの高町なのは出身世界じゃん！
？つて事は知り合い？」

「同じ学校だけ……」

「マジ？それつて結構凄くね？」

次々と男達に質問される……これつて……

「ハッ………もしかして私ナンパされてる！？」

ズベシヤツア！！

「え？……え？」

何で転んだんだろう……

「君……天然つて言われない？」

「良く言われるよ？」

良く分つたね……ああ〜そう言えば前の世界じゃかなりの確率でナンパされていたんだけど、この世界では殆ど無かったから忘れてた……

「君の言う通り、君が可愛いからナンパしているんだよ、暇なら俺

「アム……美味しい」

「でしょ」

「気に入ってもらえて良かった」

買ったクレープを歩きながら食べる事にした…

「ん〜 やっぱりここのクレープは美味しいにや〜」

ロツテがクレープを頬張り頬が緩んでる…

「そうだな……お父様にも買って欲すれば良かったか？」

「でも、お父様は甘い物はあんまり好きじゃ無い様な……」

「けどこの前のコダイの差し入れの……和菓子は食べていたぞ？」

「甘さの違いだよ……バター使わない分軽いの」

私もクレープを食べながら会話に参加する……

ベチャツッ！

「あ……」

クリームが溢れて掛った……

「勿体ない……ん」

服に落ちたクリームを指で掬って舐め取る。

「ん……ちゅっ……れる……あむ……」

このクリーム滑らか過ぎて垂れる……手首まで来た…

「れる……ん……ちゅる……よし取れた」

「コダイ……」

突然アリアが真剣な顔をして肩を掴んで来た……

「別に舐め取るなどは言わないが……せめて人前ではやらないで

くれ……特に男や私達はやて達の前では……」

「え？……何で？」

「何でもだ……（刺激が強過ぎる……本当に13の色気か！？

／／／／）」

……目がヤバく息も荒く、危険な雰囲気だったので頷く事にした…

……その時、アリアの足元で鼻を押さえてい膝を付いているロツテを見た。

「……………／＼／＼（ヤバい……………あまりにもエロすぎて鼻血出た……………／＼／＼）」

食べ終わった後は、何だか調子の悪い二人を送って海鳴に戻った……

……
帰ったら、エリオが真っ赤になってぶっ倒れるわアインが鼻血を出して気絶するなどがあった。一体何故？……………ああ、女装中オシヤレだったからか……………

くおまけく

アリア&ロツテ帰宅後……………

「……………あ、危なかった……………」

気が緩んだかの様にその場でorzになる二人……

「も、もう少しで飛び掛かる所だったにや……………」

「あいつ……………色気にますます磨きがかかっているな……………」

頬に伝う汗を拭うロツテとアリア。

「と言うか何あの色気……………シグナムやシャマルとは違う感じの……………」

……………」

「そうだな……………リンディ提督の様な……………プレシア・テストロッサの様な」

「後、なのはの所の桃子さんにも当てはまるよね？」

「あの三人の共通点」

考える事数分……………導き出された答えは……………

「……………ああ……………子持ち……………」

二人の脳内にはさっきの女装したコダイに娘の様に甘える祝福の風の妹が浮かんだ……

「……って何でこのコダイ何だー！！！！／／／／／」
直後、頭を抱えて悶えるリーゼ姉妹だった……

デート・リーゼアリア&リーゼロッテ編（後書き）

メガネ「リーゼ姉妹は他のヒロインより攻めが強いので大人コダイに女装させて悶えさせました!!」

レイ「きゆう…／／／」

コヨリ「あ……きぜつしました」

メガネ「コダイだから仕方ない……ほらレイ」（ホッペプニプニ）

レイ「うにゅ……はっ！こごどこ！？川は?!」

メガネ「間一髪だな……そのまま感謝コーナーいっちゃって」

レイ「感謝コナ、スペリオルス様、ながもく様、龍賀様、シーザ様、フェンリル様、魁斗様、ポワソ様、感想ありがとうございます！」

メガネ「スペリオルス様からは『シャーマンキング』のアンナの黒ワンピースと鯛の兜煮を、龍賀様からはコヨリには銃剣と本（アンデルセン所持の聖典）とメガネには北斗神拳の秘伝書とレイには南斗水鳥拳秘伝書を、シーザ様からはコヨリに『ひぐらしのなく頃に』のレナが持っていた鉈（血糊べつたり）とメガネに同じく圭一のバット（血糊べつたり）とレイに沙都子の罌^{トラップ}一式×999999999を、フェンリル様からは『緋弾のアリア』より武偵校の制服人数分とコダイ用に暗器一セットとラーメン各種×20とメガネとコダイに鉄扇と後の人には（コヨリも含めて）ふつうの扇を、ポワソ様からはコダイにTOD2のジューダスの衣装をレイにはTOAの

アニスの衣装をコヨリにはTORのアニーの衣装を、頂きましたあ
りがとうございます!」

レイ「トクナガ」(アニスの衣装)

コヨリ「ぼうだんってなんですか?」(武偵校の制服)

メガネ「それは「銃弾を防ぐって事だよ」って被せんよ!」

?「そんな事よりさつさと僕の事紹介してくれないかな?」

メガネ「そんな事って……えっと魁斗様の作品の『NARUTO
』転生と始まりと終焉』の主人公の青葉アランです!」

アラン「先ほどその小食動物から紹介された青葉アランだよ」

レイ「レイ・モモ・ブラッドです!」

コヨリ「コヨリです」(ペコリ!)

アラン「ワオ……よろしくね……それはそうとコダイは本当に鈍感
だね」

レイ「でしょ!?コダイは鈍感なんだよ」

コヨリ「そうなんですか?」

レイ「そうなんだよ」コダイの事大好きなのに」orz

アラン「大丈夫だよ、レイは誰よりもコダイに近いんだ……だから

きっとその気持ちは伝わるよ」(ナデナデ)

レイ「ありがとう」(涙目)

コヨリ「アランも頑張ってください」

アラン「勿論頑張るさ……さて、頑張る為にも帰って修業の再開
でもするよ」

コヨリ「あ、これはコダイからのおみやげです……」(『コダイの
手作りカレー』を大鍋ごと渡す)

アラン「これは……ワオ……カレーかい？」

コヨリ「あたためなおして、むこうのさくしゃさんとたべてくださ
い」

アラン「ありがとう、またね」

シュツ!!

メガネ「速っ!？」

コヨリ「かえりましたね……それよりもしずかでしたね？」

メガネ「下手に噛み殺されない様にな……レイ、落ち込んでない
で締めてくれ」

レイ「うゆ……皆様からの意見や感想などイロイロ待っています
!」

シュン!!

次回もお楽しみにしてください!!

デート・アイン編(前書き)

正直……リインを出すかどうか迷って止めた… g d g d g d がさくらに g d g d になるから(キリッ)

コダイの所のアインは乙女全開です。

コダイの為に頑張って少し空回りする乙女です

デート・アイン編

「戸締りは……よし」

玄関の扉に鍵を掛ける。

「では行きましょう」

アインが昨日寝る前に『明日どこか出かけませんか？／／／』と誘われた。

その日はレイ達は用事でいなくて俺とアインだけなので『良いぞ？』と即返答した。

「アイン、何も聞いていなくてけど行きたい場所とかあるのか？」

「は、はい……一つだけ／／」

顔を赤くして答えるアイン……

「えっと……喫茶店何ですけど、普通の喫茶店とは違って……／／」

「普通も何も何で喫茶店でそんなに顔が赤くなる？」

「それは……その……」

こいつが赤くなる程の喫茶店……

「もしかしてメイド喫茶？」

「何でそうなるんですか！！確かにメイド服は好きですけど……／／／」

家に居る時は殆どメイド服になりつつあるし、時々俺にメイド服製作をリクエストする位だし……あ、ちなみに今日は普通の私服だぞ？

「桃子さんに聞いたんです！！主と二人で行くならこの喫茶店だつて！！」

「だから何でお前は相談してはいけない人間に相談しているんだよ……」

アレの事だから面白さ半分で喋ってるし……あ、面白いなら良いか。

「じゃあ桃子のお勧めとやらに行くか……と言っててもまだ時間が

あるな……」

まだ午前だし……喫茶店に行くのは午後過ぎでもいいだろう。

「そうですね……あ、実はもう一つ主と行きたい場所が」

「なら先にそっちにするか」

「はい！」

そう言つて腕に抱き付くアイン……

「／／／（主とデートだあ／／／……えへへ／／／）」

……何か凄い顔が緩んでるな……

「……案内してくれよ？」

「／／……はっ！……ハイ！大丈夫です！！！」

あ、顔が元に戻った……

「ここって食器屋？」

「はい……この前の『アレ』でマグカップが……」

ああ……マテリアルズとレイが喧嘩して魔力弾やら魔力刃が飛んで食器が割れたアレか……被害がマグカップとリビングだったけど……

「全く……あれほどケンカに魔法を使うなら表で結界を張れと」

「愛用のマグカップが壊れたのにキレて室内でデアボリックを放つ奴に言えるか……エリオ泣きそうだったぞ」

あの後、修理するのどれだけ掛ったか……

「似たようなマグカップあるか……」

「あると良いですね……」

「アレ……凄い気に入っていたな」

「だってそれは……／／／（主が初めて買ってくれた物ですし……／／／）」

「ん？どうしたんだ？」

「何でもありません！早く行きましょう！」
腕を引っ引っ張られて店の中に入っていく。

「な……………何ですかこの食器の数は！！！」

「皿と言つても飾る用の大きいのもあるし……………と言つか何でバカラとかエルメスとかがあるんだ」

中に入ると、あまりにも食器の多さに驚くアインと呆れる俺……………
普段はホームセンターとか100円均一とかで売つてあるのを買つているからな……………

「……………あると良いですね、前のが」

「あるとか無いとかの以前に、見つかるかどうかだろコレ……………」

「……………手分けしましょう」

「そうだな……………マグカップのコーナーは……………あっちだな」

アインと別れマグカップを探す事に……………なるべくと同じような物を……………

「流石エルメス……………0が余計に多い……………買えるかこんな物」

金には余裕過ぎる位あるが、唯でさえエンゲル係数が凄い事になっているんだ……………油断したら無くなる……………まあ俺も作り過ぎる所為もあるが……………本編とかで何でも買つている様に見えるがしっかりと節約しているんだよコレでも。

「と言つかなんだよコレ……………何でダー ベー ーの仮面のマグカップが……………」

他にもメリケンサック見たいな取っ手をしたものやら殆ど機能性を二の次にした物ばかり……………

「もつとまともなもの……………まともなのは……………」

「どうかしましたか？」

「ん？アインか……………良いのは見つかったか？」

「いえ……………何かこう……………デザイン重視のが多くて……………」

「作った奴は一体何を考えているんだろうな……………あ、それとあんまりここら辺のを触らない方が良いぞ……………一つ五桁はする物がある」

ピシッ！

何かを手に取りうとしたアインが固まった……

「……………食器って高いんですね」

「まあ、ピンからキリまでのものもあるしな……………俺達の使っている食器は大体100円だから気にするなよ」

「…今度からなるべく食器洗いの際は、割らな様に気を付けます…

…」

その後も二人一緒に見て回ったが特に良い物は見当たらなかった……

「そろそろ昼過ぎだし出るか？」

「そうですね」

アインと出入り口に向かう……

「マグカップは帰りにでも……………ん？」

呟きながら歩いていると……………ふと、目に留まったのは小さな猫がプリントされた白いマグカップ……………値段も手ごろだし、前のとあまり変わらない……

「まともなのはコレだけ……………か」

……………コレしかないか。アインはもう先に出ていた……………すぐ買って店を出た。渡すのは後でもいいか……

時間は昼過ぎ、当初の予定通り桃子がアインに勧めた喫茶店だ……………

内装は普通とあんまり変わらない、だが……………カップル多くないか？

「いらっしゃいますっ」

「あの……予約した者ですが……」

予約したのかよ……それほど人気なのか？

「……はい、ではこちらへどうぞ」

そう言つて店員に案内された席に座る……

「普通の喫茶店と変わらない様だが……客層がコアだが」

「はい、ここは入るのも畏れられる喫茶店なんです」

「紹介したの桃子だよな？」

絶対碌な事にならない……

「あ、そう言えば注文してない」

「大丈夫です、実は予約の際に注文しました」

……要予約が必要な程人気な物なのか？

「お待たせしました」

店員が持ってきた物は……

かなり大きなグラスに着色料を使った青いジュース、南国風に添えられた果物……更に螺旋状の途中からハートの形になりそこから飲み口が二つに分かれたストローが一本入っていた。

「何だコレは」

「ラヴィいちゃストロベリージュースです」

なんだその歯の浮く様な名前は……

「何でコレが……」

「この期間は『カップルフェア』をやっておりますましてカップル限定のメニューを出しているんです……ですけど店内で注文するのが恥ずかしいと言う方が居るので電話で予約もしているんですよ」

「ああ……つまりコレを俺と飲みたかったのか？アイン」

「（コクコク）／／／／」

桃子が勧めたのはソレが理由か……実際やっているかもな……

「ちなみに店内で注文した猛者は今のところは一組だけです」

「猛者って……ちなみに誰？」

「『たかまち』って言う若い夫婦です」

本当にやっていたし、若くないし、子供三人いるしあの二人……

おおおおおおおおおおおおお！！！！

パチパチパチパチパチパチパチパチパチ！！！！

騒ぐな拍手を送るな外野。

「ちなみに10分以内に飲み干すと景品のペアアクセを一種類プレゼントです」

「ペアアクセって……「やりましょう！！！！」って……もしかして欲しいのか？」

「はい！！！！」

凄い勢いで即答だった……

「ん……分った、なら飲むか」

二人でストローに口を付ける……間隔が狭いな……

頬どころか肩や腕や脚とか側面はほぼ密着しているそうでないか飲めたものじゃない……

「どうぞお幸せに！！！！」

と言う店員の言葉にまた外野から拍手が……

「んく……んく……この量……飲めるか？」

「んっ……んっ……いえ……まだ何とも／＼」

念話でアインと話す、コレなら飲んだままでも話せるし……

「んく……んく……飲めなかったら無理をするな、俺が全部飲む」

「んっ……んっ／＼　ありがとうございます……えっと今は飲む

事に集中したいので……／＼」

「んく……んく……分った」

念話を切って俺も飲む事に集中した……

「んっ……んっ……んー！！！！（の、飲む事に集中しないと頭が如何にかなりそうな程にふっとーしている……もっと主と飲みた

いのに時間制限もある……でも景品のペアアクセスは欲しい……どーしよー！！／／／／」

何か飲みながら唸っている……辛くなったのか？確かにもう半分以上は飲んでるしな……

「残り5分で〜す」

おっと急ぐか……

ジュースは制限時間内に飲み終わる事が出来て、景品のペアのリングを貰った。

その時の外野の喝采と拍手が倍位騒がしかった……

「何だろう……ただジュース飲むだけだったのに何でこんなに疲れるんだ？」

「そ………そうですね／／／／」

喫茶店を出て、今現在家に帰る途中だ……

アインは貰ったリング指に嵌め、俺は都合によりケースサイズにしまっている。

「あの……主、その抱えている袋は何ですか？喫茶店までは持っていなかった様な……」

ああ……ジュースの事で頭から抜けていた。

「忘れていた………ほら」

アインに包装された袋を渡す……

「主………コレは？」

「開けてみる」

「………コレは………何処にあっただんですか？」

「あの食器やで偶然見つけた……超個性的なカップに埋もれている所を……まともなのがこれ位だった」

「良く見つけましたね……」

「本当にな……」

「前のとさほど変わってませんし……え……主？」

「ん？どうした？」

アインが驚いた表情でこちらを見る、その手には二つの同じマグカップがあった。

「何で二つも？」

「実は俺のも洗う時に割れてな……ついでだ」

「そうですか（……はっ！つまりコレは……お揃い！？……」

「っ／／／／／」

「……アイン？」

「っ／／／／／主／／／／／」

小さな声で俺を呼ぶ……

「……ありがとうございます！！／／／／／」

ギョッ

……視界が暗くなる……と言つか抱きしめられて顔が胸に埋った。

「主いゝアインは嬉しいですうゝ／／／／／」

「分った、だから落ち着け……息が出来ない」

口調も妹になつているし……

「えへへゝ あるじいゝ／／／／／」

……拘束が解かれるのに10分掛った……

「ゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイ……」

土下座中のアインが呪詛の様に謝る……別にO S H I O

K I はしてない、ただ我に返って即行土下座し出しただけ。

「気にするな、だから土下座はやめろ」

「ゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイ……」

……目を覚まさせるのに結局O S H I O K I使う事になった
……

くおまけく

その日の夜……

「さて……もう少しだな」

アインは上機嫌にコダイに買って貰ったマグカップに紅茶を淹れて飲む事にした……

「く」

「ふにゆ？どうしたの？……あ！新しい奴だく買ったの？」
上機嫌なアインが気になり近寄ったレイが新しいマグカップに気付く。

「ああ……主コダイが買ってくれた物だ」

「えっと……あの時はゴメンナサイ」

「フフ……もう終わった事だから気にするな……」

物凄く落ち込んでいるレイに微笑むアイン……その時、タイマーのアラームが鳴った。

「よし、あとはマグカップに注ぐだけ……」

「あ、見せて見せてく！」
レイは妖精サイズになり紅茶を注いでるアインの邪魔にならない様に近づいた……

「わあく！可愛いく！！」

「こ……これは……くくくくくく」

紅茶を注いだ時、レイは目をキラキラさせ、アインは顔を真っ赤にしていた……

「ハートになってる」

レイの言う通り……このマグカップは見た目こそ普通だが飲み物を注ぎ、上から見るとハート型になるマグカップだったのだ。

ちなみにコダイはコレを知らず天然で買っていた……

デート・アイン編（後書き）

メガネ「どうしてウチのアインはこんな乙女何だ……」

レイ「メイド服の回時じゃないの？（特別編『アイン頑張ります！』参照）」

メガネ「本当はコダイの為に頑張るアインを書きたかったんだけどいつの間にかあんな乙女に……」

コヨリ「……ほんねは？」

メガネ「面白いからもつとやる」

コヨリ「やっぱり……」

レイ「感謝コ〜ナ〜、スペリオルス様、Rain様、黒一文字様、神夜 晶様、ながも〜様、山義 芳原様、シーザ様、龍賀様、たまご様、フェンリル様、ポワソ様、魁斗様、感想ありがとうございます……」

メガネ「スペリオルス様からは『遊戯王GX』の女子生徒の制服と無添加トマトジュースを、Rain様からはスク水と縞ニーソと猫耳とセーラーを、ながも〜様からは『1/1スケールメガネ人形』を、シーザ様からはレイにワラニンギョウx9999とメガネにはカブトムシとクワガタとオウゴンオニクワガタとヘラクレスオオカブトとヘラクレスリッキールーとアトラスオオカブトを全部百匹づつと虫籠とコヨリに『ロックマンエグゼ』のバトルチップ『オーラ』を、フェンリル様からはコダイにベヨネッタの服と『ブラッ

クキヤット』のトレインの服をコダイと俺にと『エアギア』にでてくるAT（簡単に言うと超小型のモーターを積んだローラーブレード）を人数分とレイ達にはシルバークセサリー（レイ達にあうように可愛いデザイン）をコダイにはシルバークセサリー（コダイにあうようにダークな感じ）あとアイスを人数分（イロイロな味あり）と薬膳料理を、ポワソ様からはコダイには『SO2』のクロードの制服とレイには『SO2』のレナの衣装（レイちゃんsize）コヨリには『SO2』のセリーヌの衣装（コヨリちゃんsize）を、魁斗様からは小さく可愛いアランのメイド服で『ごちゅんちやま？』と首カツクンとしている動画を、頂きましたありがとうございます！」

レイ「ネコさん」（スク水と縞ニーソと猫耳とセーラー着用）

コヨリ「ふしぎなかつこうです」（スク水と縞ニーソと猫耳とセーラー着用）

メガネ「どうせならコレも付けたら？」（二人に眼鏡プラス）

（言葉では表せない音）

メガネ「ん？………つて！後ろから！？俺の影から何かだあああああああああ！？」

?????「よいしょっと………はじめまして」

レイ「メガネ！この人だあれ？」

メガネ「えつと……今回のゲストは黒一文字様の作品の『テイルズ オブジアビス』氷影の少女」の主人公のユエです」

ユエ「初めましてユエです」

レイ「レイ・モモ・ブラットです！」

コヨリ「コヨリです」

ユエ「レイにコヨリ……ですね」（ナデナデ）

レイ「ふにゅ〜」

コヨリ「」

メガネ「何故頭を？」

ユエ「何故か撫でたくなりました……何と云うか……」

メガネ「……小動物？」

ユエ「あつ……ソレです、そんな感じですよ」

メガネ「二人も嬉しそうだし好きなだけどうぞ」

ユエ「はい……所でメガネ様……アレは何ですか？」

メガネ「アレ？……」

「ヨリ」がんばってください

「ユエ」応援します!」

「メガネ」いや、止めるよ……」

「レイ」よし!この写真渡してくる!」(パタパタ)

「メガネ」ソレでやられたろ!」

「レイ」ダイジョーブ!ワラ人形があるから!」

「ユエ」それは何も意味が無いですよ!」

「ヨリ」もどってください!」

「メガネ」一度死んでも馬鹿は治らないのかよ!ってああ!前よりも強そうな集束砲撃が……」

「ユエ」……私に任せてください!」

コヨリ「ありがとうございます」

ユエ「いえ、当然の事をしたまでです」

メガネ「お礼にコツチの主人公のコダイが作った『手作りケーキ盛り合わせ』をお土産にどうぞ」

コヨリ「たくさんあるのでみんなでたべてください」

ユエ「あの……………そのコダイと言う人は一体誰ですか？見ていないんですけど……………」

メガネ「アイツは諸事情により不在だ」

コヨリ「かわりにしゃしんがあります」（普通のコダイの写真を見せる）

ユエ「凄く綺麗な女性ですね。私より年上ですか？」

メガネ「いや、年下で……………性別は『男』だ」

ユエ「え？……………男の子何ですか！？」

メガネ「そんなに驚く事か？というかそっちにも似たような奴がいるだろ……………（イオンとか）」

ユエ「そうなんですか？……………あ、ケーキありがとうございますとコダイに伝えてください」

チユドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
!!!!!!

メガネ「……………」

「ヨリ」……………」

メガネ「……………えっと……………」ヨリ、締めてくれ。俺はレイを回収する……………まあコダイのデバイスだから生きてるだろうな」

「ヨリ」はい……………みなさまからのいけんやかんそうなどイロイロまっています」

「次回もお楽しみにしてください!!!」

デート・レイ&マテリアルズ編(前書き)

季節が少し過ぎたネタですけど。デート編の時期は夏休みですから問題なし！

..... なわけないですよね orz..... 一番デートっぽくないし。

デート・レイ&マテリアルズ編

「あの四馬鹿が……………」

今俺は神社の夏祭りに来ている……………レイとマテリアルズが『夏祭り行きたい!!』と言って来たので、連れてってやった。

アインが定期メンテナンスで来れなくて涙目になっていたし……………エリオはフェイト達の家に泊まるらしい……………何でもフェイトとアリアが離してくれないらしい……………保護責任者だし問題無いか。

「まさか開始早々全員がバラバラになるとは……………」

浴衣に着替えさせ、神社までは一緒に居たが、着いて少し目を話した瞬間に居なくなっていた……………

何かやらかす前に見つけないとな……………首輪付けないと、どっかに行くって……………犬かよアイツら……………

「そここのかの『消え去れチャラ男』『ゴパツァ!!』」

後ろから来たナンパ男を裏拳で潰す……………

俺も浴衣(女物)を着ている。金と銀で刺繍された水の波紋がある浴衣を着ている……………

「速く見つけないと(俺が)面倒臭い事に……………」

まずはエルとアンズと……………サクラとレイを……………ってコレは全員だ。エルは馬鹿だから何をするか分らないし、アンズはあんな風でもエルの次に馬鹿だからな……………サクラは……………一番危険だ、客との一悶着で砲撃放ちそうだし、レイは……………一番危険だが一番馬鹿だから早急に回収しないと……………

「……………探索魔法をユーノに教えて貰えば良かったか『クソー!!おじちゃんもつかい!!』……………無くても良いかな?」

射的屋で何か暑くなっている青色で花火の様な模様がある浴衣を着たエルを発見……………

「よし……………狙い撃つぜ!!」「エル」ふえ?」

「ゴンー！」

「事前に逸れるなって言っただよな……………」

「うう…………ごめんなさーい！」

大きなタンコブを抑え、しゃがみ込むエル。

「今まで何していた？」

「えっと…………チョコバナナ食べてアメリカンドック食べてフランクフルト食べて、りんご飴を食べて、後はずっとここに居た！」

「他の奴は？」

「ううん…僕だけだったよ？あーでもチラッとアンズは見たよ」

アンズはこの近くか…………

「じゃあソレが終わったら、案内してくれ」

「分った！絶対取ってやるー！！」

張り切っているエルは銃にコルクを詰め構えた…………狙いはどれだ？…………アレじゃ当たらないな。

ヒュン

「くっそー！！」

コルクは景品の間を通り過ぎた。

「…………どれが取りたいんだ？」

台に置いてある銃を取り、コルクを詰めながら聞いた。

「え……………つと、あのお菓子ー！！」

アレなら……………大丈夫だな。

「コダイ最強」

俺が取った戦利品（駄菓子）が詰まった袋を持って、反対の手で俺と手を握って嬉しそうなエル。

「けど凄かったよ！倒した景品でもう一つ景品を倒すなんて！……おっちゃん引きつってたな〜！」

「コレでも銃は剣の次に得意だからな。狙った獲物は逃がさない」手を銃の形にして、エルに撃つふりをする。

「うっ／／／／」

そして胸を抑えるエル……

「エル……それは、はやての専売特許だぞ？」

撃たれて倒れるって……

「うう／／／／／（反則！今の『BAN』って反則！／／／／／）」

何かこつちを見て唸っているし……

「……で、エル……ここでアンズを見たのか？」

「あ……うん！こつちから動いて無ければいるは」「このくじ引き風情が……！！」「いたね」

いたな……紐クジの所に……白と水色で風車が回っている模様の入った浴衣を着てたアンズが。

「ぐぬぬぬ……もう一度だ！今度こそ……！！」

背後から近寄って見ると、持たせた袋一杯にクジで当てた（ハズレた？）物が詰まっている……

「お〜いアンズ？」

「話しかけるな！気が散る……！！」

「……アンズ」

「我に話しかけると……！！」

こちら振り向いたアンズが……

ピシッ!!

固まった……

「……ひ、姫？」

ゴンー!!

「俺さ……此処に着く前に言った事……アンズは覚えてるか？」

「スミマセン」

頭に大きなタンコブを作って正座しているアンズ……

「浴衣汚れるから立て……今まで何をやってた……」

「うむ……チョコバナナを食べ、アメリカンドックを食べ、フランクフルトを食べ、りんご飴を食べ、後はココに居たぞ」

立って。顎に手を当て思い返す様に話すアンズ。

「ええっ!? 最後以外僕と同じだ!？」

「何だと!? すれ違わなかったのか!？」

世の中凄いな……

「所でアンズ。何やっているの？」

エルが興味津津に紐クジを見ていた。

「コレは紐クジと言ってな、この紐の束の中から一本だけを引っ張り、向こう側にある紐で結ばれている物を引っ張り上げるとそれが貰えるのだ!」

「何か凄そう!!……で当たったの？」

「色々当たったが、目当ての物が当たらなくてな」

「目当ての物？」

「アレだ」

俺が聞くとアンズはある物を指した……

「PSP?」

「うむ」

「あるだろ6台も……」

「姫の分が無いではないか!」

レイ、サクラ、エル、アンズ、アイン、エリオ……………本当だ。

「俺はゲームはやらない」

嫌いじゃないけど好きでも無いから……………キャラクターの大半に虫唾が走るけど……………

「我は姫とゲームがしたいぞ!」

「俺はゲーム自体やりたくない」

「むむ……………ではこのクジでPSPを当てたら我らとゲームをすると言うのはどうだ!」

「……………まあ仕舞っておくのも勿体ないから……………それでいい」

「ウム!ではやるぞエル!」

「うえ!?僕も?……………いいけどさあ……………あ!コダイもやるぞ!」

「いいけど……………」

皆で一回分を払い紐を選んで……………引いた。

「またしても……………」orz

アンズ 腕時計

「なんか良さそう!」

エル 花火詰め合わせ

「……………結構、良い物だな」

俺 モデルガン(ガンベルト付き)

結果が上記の通りである。

「……………改造すれば何とかなるな」

「コダイ……………アンズが凄い落ち込んでいるよ」

ん……ああ……凄い落ち込んでるな。

「惜しかったなアンズ……最後まで悩んで止めたあの紐な……あれにすればPSPが当たっていたんだぞ？」

「又オオオオオオオオオオオオオオオオ……」

「コダイ……それはフオローじゃ無いって僕にも分るよ……」
お、エルも成長したな。

「しかしどうするこのモデルガン……俺はやるつもりは無かったから袋何て持ってないぞ」

「僕のに……って、もう満杯だ」

「我もだ……」

二人は袋見て確かめた……仕方ない。

「付けるか」

浴衣の裾を開き、太もみに巻き付けた……コレなら目立たないだろ……

「……………／／／／／」

「…アンズ？」

隣に居たアンズが真っ赤になっている……この熱気で逆上せたか？

「何でも無いぞ！！／／／／（太股が………白い太ももが／／／／

／）」

突然鼻を押さえるアンズ……

「……………どうしたんろうアンズ………ムグムグ」

「……………よし……っと……俺も分らない……」

隣で呑気に駄菓子を食べていたエルだった……まだ入るのか？

「ところで姫よ、サクラとレイは見つかったのか？」

「ん？いや……だが何処に居るかはすぐに分る……」

だからこいつらを先にした。

「では何処に居るのだ？」

それは………

「じ……………」

「じ……………」

少し歩くと、ある店をじっと見ているサクラとレイがいた。

「本当にいた……………」

「しかし、何故わたあめ屋に……………」

「行く前に二人が綿菓子について聞いてきたから、細かく説明してたら子供の様に目を輝かせていたからな……………」

「え？え？どう言う事？」

「フン……………コレだからエルは……………いいか、つまり姫が言っている事はだな…二人はわたあめに興味津津なんだ！」

「そう言う事、早速行くぞ」

二人を連れて、レイとサクラの元に向かう……………」

「素晴らしい……………見えていないのに、その機械に箸を回すと徐々に綿が集まっていく……………まるで集束砲撃の様です……………発射出来ませんかね…アレ」

「わあ… スゴイ！……………コダイのジェノサイドブレイカー見たいだあ〜」

「ただの綿菓子に物騒な例えをするな」

ゴン！！x2

「レイ、サクラ……………行く前に俺の言った事覚えているよな？」

「モウシワケアリマセン」

頭に大きなタンコブを作って正座する二人……………」

「浴衣汚れるから立て……………」

「ハハイ……」

涙目で立ち上がる二人……

サクラは薄いピンクで金魚蜂に入ってる金魚の絵が沢山水玉模様の様に描かれた浴衣を着ていて。

レイは俺と同じ浴衣だが違いは裾がミニでニーソックスを履いている所だ……理由は簡単、すぐコケるからだ。

「……で、二人は今まで何を？……サクラから」

「はい……チョコバナナ、アメリカンドック、フランクフルト、りんご飴、の順に食べ歩き、後は此処に居ました」

「……次、レイ」

「ん」と……チョコバナナを食べて、次にアメリカンドック、フランクフルト、りんご飴を食べて、少し前にここでサクラに会ったよ？」

「ええ！？二人も同じ様に！？」

「エル……二人も言うのは……」

「エルだけでは無い……此処に居る我らを探していた姫を除く四人が最後以外、同じ様に同じ順に店を回っていたんだ……」

「何ですれ違わないんだ？」

「……アハハハハ……」

俺のツツコミに乾いた笑いを返す。

「で……わたあめ屋では見てただけなのか？」

「買いましたよ」

「見て見て〜！」

サクラとレイの手にはわたあめがあった。

「何だ、買っていたのか」

「はい、その後じっくりと見てました」

「店の邪魔したのを叱るか、その場で止まっていた事を褒めるべきか……」

まあ、さっき説教したから良いけど……

「コダイ様も一口どうですか？」

サクラがわたあめを指でちぎって差し出す。

「ん……じゃあ……アム」

差し出されたわたあめを口に入れる。

……甘いな。まあ、砂糖だけだしな……

「……………／＼／＼」

アレ？……サクラが自分の指を見て真っ赤になっている……

「あ……いえ……／＼／＼（わたあめと一緒に私の指がコダイ様の口の中に／＼／＼）」

「大丈夫か？……」

「みてみて〜 ピンク〜」

さつきは良く見えなかったが、レイのわたあめは桃色だった……

「何で桃色？」

「かわいいから〜モフツ」

そう言つてわたあめにかぶり付くレイ……わたあめが大きいから顔が埋まり掛けている……

「モムモムモムモムモムモム……」

食い進んでいる……虫みたいに。

「モムモム……ぷはあっ！！苦しかった〜」

わたあめから顔を離すレイ……顔がわたあめだらけだ……

「ほら、わたあめ付いてる」

顔に着いてるわたあめを取ってやる……

「ありがと〜！アムツ！！」

「……………ああっ！？……………」

レイが突然、わたあめを取った指を口に啜えた。それを見た三人が叫んだ……

「ん〜？」

啜えたままでコツチを見るレイ……

「ん……………ん？」

しつかり舐め取ると指を離した……

「ふにゆ？……あ……えへへへ／＼／＼（コダイの指啜えちゃった／＼／＼）」

暫く考え、何にかに気付いた様に顔を赤くするレイ……どうしたんだ？

全員で逸れない様に歩いていると、不意にレイに裾を掴まれた。

「コダイ、何で皆上を向いてるの？」

周りを見ていると、殆どの人間が上を向いて期待に満ちた目をしていた。

「たしか……この時間に打ち上げ花火があるんだ」

ドーン！！

その直後大きな音と共に花火が上がった……

「すっごーい！！」

「何だアレ！？カッコいい！！」

「何と綺麗な……まあ姫には劣るかな」

「そう言えば今までテレビでしか見なかったんですが……やはり生で見るのは違いますね……迫力が」

と各々感想を述べている……

「あぁー！？」

全員で花火を見ていたが、レイの大声で視線をレイに降ろした。

「どうした？」

「……………ビンのラムネ買うの忘れてた!!」

「……ああー!!」

マテリアルズが同じリアクションをする。

「ん？ラムネならさっき買ったぞ？」

俺はラムネを四本取り出した……………え？どっから出した？それは浴衣の中から決まってるだろ？…え？ぬるくなる？……………大丈夫だ。俺は低体温だから。

四人はラムネを開け始めた。

「アレ？……………コダイの分は？」

「心配するなレイ。自分の分も購入済みだ」

そう言つて。また浴衣の中からラムネを取り出す。

「エルよ、ラムネは脚は肩幅で空いている手は腰にして一気に飲むのが正しい飲み方だと聞いたぞ!!」

「本当に！？よし……………僕も!!」

「それつてもしかしなくても牛乳の飲み方で、炭酸でやったら」「ゲルウオバナツ!!」「やっぱり……………」

二人は予想通り咽た。

「レイも真似「ゲルウオバナツ!!」遅かった」

レイも咽た……………

「この状況つてまさか……………」

サクラの方を見ると。

「エッホッ！エホッ！」

咽ていた……………

「此処まで来てお約束する必要はないだろ……………」

狙つて無いよな？……………そう思いながらラムネを飲んだ。

「花火終わったら帰るぞ」

「……は……い……………ゲッホッ！ゲッホ!!」

四人は咽ながら答えた……

くおまけ

帰宅後……………

「楽しかったね」

「そうですね……………」

帰宅してもまだ遊び足りない四人はエルが紐クジ当てた花火を庭でやっている。コダイは買って冷やしていたスイカを着る為台所に居る。

「どうだ二刀流!!」

「フツ……………甘いぞエル！我は三刀流だ！」

エルとアンズは花火を持って振り回している。

「エルくアンズくあぶないよ〜！」

「はあ……………コダイ様に怒られても知りませんよ……………?」

溜息を吐いたサクラがある物に気付く……………それは大きな筒状の打ち上げ花火だった。実は打ち上げは自分が来るまでするなとコダイに言われたりしている……………

「何々……………『スターライトブレイカー数多亜羅威屠武零火亜』?」

「うわ……………物騒過ぎる」

「名前からしてどんな物か想像しやすいな……………」

「そだね……………」

名前を聞いて若干顔が引きつるエル、アンズ、レイ……………

「コレは派手そうですね……………皆さん離れてください」

サクラが導火線に火を付けて、皆の元に避難する。

導火線が燃えていき……………そして……………

プスン……………

……鎮火した。

「……………この見掛け倒しがああああああああああ！！」

アンズがキレて花火を蹴り倒す。

「アンズ！落ち着いてください！」

「他の花火やろうよ！ね？」

「まだまだ沢山あるから」

「う、うむ……そうだな」

アンズが落ち着きを取り戻した後は、他の花火をし始めた……

「ああー！！」

レイが突然大声を上げる……

「どうしたんですかレイ？」

「大事な事を忘れてた！」

「大事な？……あ、しまった」

思い出したのか頭を抱えるサクラ……

「今回のデートの目的はコダイ様に私達を女として見てもらうため

の物……純粹に祭りを楽しんでそれすら忘れてました」 or z

「し……しまったあ……」 or z

「無理だ……あんな状況で見てもらえるはずが無い……」 or z

「うゆ〜」 or z

その場で崩れ落ちる四人……

「いや……まだです！」

「そつだ……僕は諦めない！」

「王たる我がこんな所で屈するか……！」

「頑張つてコダイに女として見て貰うぞー……！」

ゆっくりと立ち上がり……

「「「「おー!!」「」」」

拳を突き上げた瞬間……

ヒュン!!

何かの光の塊が四人の間を掠める……

「「「「え?」「」」」

視線を向けたその先には……サクラが点火して、アンズが蹴り倒した打ち上げ花火が……

ヒュンヒュンヒュンヒュン!!!!

「「「「「にゃあああああああああああああ!!!!」「」」」」

その後、四人はコダイと帰って来たばかりのアインにこっぴどく叱られた。

デート・レイ&マテリアルズ編（後書き）

メガネ「デート編はコレで終了です!！」

レイ「ふにゅ〜…疲れたよ〜」

コヨリ「おつかれさまです」

メガネ「もう一つ話を挟んでいよいよ新章に行きたいと思います!」

コヨリ「ついにですか……」

メガネ「時期的にはA・Sエピソードからです!」

レイ「ねえねえ……どんな感じ!?!」

メガネ「ネタバレの為ノーコメント」

レイ「ぶー」（-3-）

コヨリ「はやくはじめましょう」

レイ「感謝コ〜ナ〜 龍賀様、シーザ様、スペリオルス様、魁斗様、フェンリル様、感想をありがとうございます!!」

メガネ「シーザ様からは『記憶の水晶石』とレイに『海猫』とコヨリに『天使の衣』を、スペリオルス様からはレイに『ガンダムZ』のエルピー・プルの衣装とロシアンルーレットショートケーキを、魁斗様からはコヨリとレイにはヒバードと雲ハリネズミと雨燕

の匣兵器と雲と雨のボンゴレリングを……………」

レイ「メガネにはエクスカリバー×100000とエヌアエリシユ
×100000とレールガン×100000とXバーナー×100
000とカリバーン×100000発とかめはめ波×100000
とビッグバンアタック×100000と100倍ビッグバンかめは
め波×100000を、フェンリル様からは『ブラックキャット』
のトレインのレーザー時代の服とメガネにハーディスとナルガク
ルガとマフラーと手袋と天津甘栗を人数分を、頂きましたありがと
うございます!！」

メガネ「ってあの光はそれかあああああああああああああ
ああああ?!！」

コヨリ「わたしたちにはひがいはありません」

オオン!!!!!!
チュドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオン!!!!!!

メガネ「し…………死ぬかと思った…………」

コヨリ「良く生きてましたね……………」

メガネ「以前ながもく様に貰った、メガネ人形を身代わりにしたけ
どその余波で……………」

クロツクオーバー

????? 「つと…着いたか」

メガネ「此処でゲスト紹介！龍賀様の作品『テンプレな転生 強き信念持ちし者』の主人公の森 龍斗です！！」

レイ「龍斗君だ〜」（ぎゅ〜）

龍斗「レイ、久しぶりだな」（なでなで）

レイ「にゅ〜」

龍斗「それとコレ、お土産の『願いをかなえる石』と『絶対守護領域を張れる符』だ」

メガネ「ああ。コレはどうもご丁寧に……」

「ヨリ」ありがとうございます」（ぺこり）

龍斗「気まぐれに作っただけだ」（なでなで）

「ヨリ」……………」

龍斗「というか、本編の最後のアレ…大丈夫だったのか？レイ」

レイ「うん！結果と家は毎回強化されてるし問題無いよ！！」

龍斗「毎回って……そうじゃなくてレイ達の事だ」

レイ「ふにゅ？……………ガクガクブルブル」(トラウマ発動)

龍斗「おい！どうしたー！」

メガネ「多分O S H I O K Iされた時のトラウマが蘇ったんだろ……事故とは言え、あんな事したんだから……少しすれば治る」

龍斗「相変わらず凄いな」

メガネ「それはコダイだから」

龍斗「それなら納得」

コヨリ「あの……………これ、コダイってひとから」(翠屋のケーキ盛り合わせ)

龍斗「翠屋か……………ブルッ！！」

コヨリ「どうかしました？」

龍斗「懐かしさと同時に寒気が……………」

コヨリ「なぜですか？」

メガネ「(恐らく女装(黒歴史)が原因だろう……)」

龍斗「……………そうだ用事を思い出した、俺はあの猫二匹+ を殺し

て解して並べて揃えて晒す為に来たんだ」

メガネ「えー!!!?!?」

龍斗「答えろ……あの猫は何処にいるんだア?」

メガネ「ちょっと待って一方通行さん!!」

「ヨリ」あの……コダイからてがみとどいてます」

龍斗「このタイミングで来るって事は……」(手紙を読む)

コダイ『まずは久しぶり。龍斗の事だからアリアとロツテに用があると
思うから、場所を教えようと思う……二枚目に続く』

龍斗「ったくよオ……気が利いてンのか利いて無いのかどっちなんだア?」

コダイ『……翠屋だ。三枚目に続く』

龍斗「……」(恐る恐る捲る)

コダイ『その日は桃子とリンディとプレシアを含めた6人で翠屋の新コスチュームを決めるらしく、俺もモデルとして参加するから是非とも来てくれ。女装はオシヤレだ』

龍斗「……」予定変更だア……テメエを殺して解して並べて揃えて晒してやる」

メガネ「何で俺?!普通コダイじゃね!?!」

そろ帰るか………ではな！」

シュン！

レイ「ばいばい」

コヨリ「きえました………」

レイ「皆様からの意見や感想などイロイロ待っています!!」

「次回もお楽しみにしてください!」

特別編『結果報告』（前書き）

デート編その後の対談。

新章の名前どうしよう…… orz

— 纏めにした為にかなり長くなりました。

特別編『結果報告』

「それじゃあ始めるで…………『デート報告会』を」
はやての言葉に真剣な顔で頷くなのは含む18人……

今なのは達ははやてが言った通り、コダイとのデートの報告会を始めた。場所は桃子が快く（面白そうだから）翠屋を休日にして提供してくれた。桃子はリンデイと一緒に遠くから見ている。

コダイは今、リンとエリオと一緒に翠屋の買い出しに行かされた。
「でもはやて？まず誰から報告するの？」

「ん……………妥当にデートした順でええやろ。フェイトちゃん」

「それならまずははやてね、包み隠さず全部話しなさい！」
アリサがはやての肩を掴んで言った。

「わ、分つとるってアリサちゃん。ちゃんと話すから……………」

～はやて報告中～

「……………以上がウチのデートや」

「にゃんかフツーだねえ～初々しいねえ～」

はやての報告を聞いた後ロツテがニヤニヤしながら言った。

「ロツテ！？それはどう言う事や?!」

「いや～はやてなら、もっと攻め攻めだと思ったからにゃあ……………ラ
ンジェリーシヨップで試着して見せる～とか」

「そう言うのはオツパイ担当のシグナムやすずかちゃんができるもん
やー！」

「あああああぁぁい!?!」

「何言ってるのははやてちゃん!?!」

突然名指しされて慌てふためくシグナムとすずか。

「ああ……………うん、自分でも言っちゃってちょっと落ち込んだ」

苦笑いして、頬を掻くはやて。

「それは置いていて。まあ、『フー、フー』はアタシ達はして貰った事無いから羨ましいわね」

「エリオが風邪引いた時にもしてたよー」

アリサの言葉にレイが手を上げて答えたが、アリサが『それはノーカン』と返した。

「で、最後にコダイ君の『好きでも無い奴と……』って言う言葉に妄想が飛躍して気絶したんですね？」

「うう〜…シヤマルう〜ソレだけは言わんといてえ〜…思い出すだけで恥ずか……ぷしゅ〜」

頭から煙を出してテーブルに突っ伏したはやて。

「どうやら思い出しちゃった様ね………弄るのはこの辺にして次の報告でもしましうか？色々（文字数的）危ないし」

「シヤマルさんの意見に賛成ね………次の報告を始めるわよ。次は…

……」
「さすが手を上げる。アリサははやてを起こしてから、すずかに報告させた…」

「すずか報告中〜」

「デートなのに迷子になるってアンタ………」

「だってライオンの赤ちゃん見たかっただもん……」

頭を抱えて呆れるアリサと唇を尖らせるすずか。

「でも、睨んだけで人を怯えさせるって流石コダイ君なの………」

「うん………アレはね…怖いよね」

苦笑いをするなのはとフエイト………

「なあなあ！ライオンの赤ちゃんは見れたの!？」

「うん アリーちゃんって言って。ちっちゃくて可愛くてね、コダイ君に撫でられてすごく気持ち良さそうだったよ」

エルが目を輝かせて聞いたので、嬉しそうに教えたすずか。

「………いいなあ〜」「」「」「」

「……（撫でられて羨ましい……）」

羨ましがる子供組に別に意味で羨ましがる4匹の使い魔、s……

「そして膝枕って……普通逆じゃない？」

「でもアリサ、逆じゃ無くても似合ってると思うよ？コダイだから……それは分っているわ……言ってみただけよ」

アリシアの言った事が妙に納得してしまったアリサだった。

「帰る時に恋人握りを希望するなんてなあ……すずかちゃんって案外大胆だな」

「えへへへ　でも、最初の時、コダイ君は天然でやってたみたいだよ？」

それを聞いて全員『やっぱりか……』という顔をしていた。

「コレで私の報告は終わり。次はアリサちゃんだっけ？」

「そうよ」

くアリサ報告中く

「そ、それは……」

「凄い……」

「凄いつて言っより……」

「にやははは……」

「え……と……」

報告を聞いてはやて、フエイト、アリシア、なのは、すずかはどう言っで良いか分らない状況だった。

「な、何よ……何か言いなさいよ！」

「ああ……じゃあ言わしてもらっで？……コレはコダイ君云々より……なあ？」

「……アリサ（ちゃん）が可愛い」「……」

はやてが目で合図を送り、五人同時に言った。

「声を揃えて言っなああああああああああ……！」

「何言っとなや。お酒で酔っでデレデレとか、前半のポートが揺れ

て落ちそうになる所を抱き止められた事が薄れる位のインパクトや
で？」

「子供の様に甘えたって言ったけど……他にはどんな風に甘えたの
？」

フェイトの質問に全員から目を逸らしながら、小さな声で言い始め
た……

「移動する時は……常にお姫様だったことか……それ以外は膝の上
とか……後」

「後？」

「後……それはあ……」

アリサの頭から徐々に煙が……

「フェイトストップ！！これ以上やったらはやての二の舞だから！
！」

「ね、姉さん！？分った！アリサ！もう良いから、十分聞いたよ！
！」

「きがえ……っ！……そ、そう！？もう良いのね！」
何か言おうとした所で意識が覚醒した。

「これ以上の詮索はアリサちゃんが壊れかねんし……次行こか？」
「次は私だね……オホン……」

フェイトが気持ちを切り替える為に咳払いを一つした……

（フェイト報告中）

「フェイトちゃん、ドンマイなの」

「同情するぞ、テストロッサ……」

「うん……うん……ありがとう」

報告後、震えているフェイトの肩に手を置くなのはとシゲナム。

「私の遊園地のフリーパスと同じようにフェイトはチケット貰って
たんだ」

「うん……怖かった……」

すずかは呼吸困難寸前である。

「身長制限に引つ掛かるって……アイツどんだけ小さいんだよ……」

「えっと制限が確か150cmだから……それよりもかなり低めだから14「その時点ではやて達より小さいな……」？」

アリシアが言うのをヴィータがそれを遮る。

「それでも沢山乗れて楽しかった!!」

「最後に二人きりで観覧車……王道ですね」

腕を組み何度も頷くサクラ。

「はあ……はあ……何とか落ち着いた……」

「フェイト大丈夫か？」

「うん、ありがとう。エル」

さつきまで悶絶しかけたフェイトに心配そうに声を掛けたエル。

「しかしフェイトよ……貴様もしっかりと復讐しているではないか

……」

呆れる様に溜息を吐いたアンス。それにフェイトは視線を逸らした。

「まあ気持ちは分るぞ?……あの場に居たら塵芥と化す所だな」

「ええ……最大出力の砲撃で屠るところです」

「オメーら何物騒な事言つてんだよ……」

アンスとサクラの発言に呆れてツツコミを入れるヴィータ……

「フーか話が脱線しているだろ……次行こうぜ、次……次は……」

「ん」と、ん……なのはだよ?」

レイが指折り数えてヴィータに教えた。

「おゝい!なのは、とつとと初め……つてまだ笑っていたのかよ……」

ヴィータがなのは達を見ると未だに笑いを堪えていた。

「コダイが聞かなくて良かったぜ……」

なのは達が落ち着くのに10分掛った……

「なのは報告中」

「……何(ですか)そのラブコメ……」

なのはの報告聞いた全員の第一声である。

「お、お母さんと同じリアクションなの」

「ふ〜ん……だからソレ以来サイドテールなんだにや〜」

「大人っぽくなっている似合っているぞ」

「えへへへっ……ありがとうございます」

ロツテとアリアに褒められ照れ臭そうに笑うのは。

「けど、本当にコダイ君って凄いですよね。ファッションセンスとか……特に女物に関しては物凄く」

「それに似合わない物は似合わないとズバツツと切ってくれるあたりもな」

シヤマルとシグナムは思い出す様に言った。

「でも……コダイ君、その時に凄く危なそうな服を入れようとしたの……」

「そ……それもそれで凄いわね」

「何も躊躇無く行動に実行するあたりな……」

それを聞いて今度は顔を引きつらせるシヤマルとシグナム……

「はいはい！しつもん！桃子があげたりボンをなのはは着るの？」

「ふえっ！……!?」

レイの爆弾投下てんねんに全員がなのはを向く……

「きききききき着る訳無いの……！第一アレは服じゃ無いの……！」

「じゃあ私が貰っていいかじゃ？何時の日かプレイに使うから」

「ろろろロツテさん！？プレイって何!？」

「それは勿論『プレゼントはワ・タ・シ』……っと言うプレイを」

「にゃあああ！皆ロツテさんを止め……え？」

なのはがさつきから会話に参加しない皆の方に視線を向けると……

「……リボン……プレゼント……ワタシ……」

「……」

全員真剣な顔でメモを取っていた。

「メモらいでよおおおおおおおおお……！」

「……ああ！ゴメンな、なのはちゃん……」

一番早く気付いたはやてが詫びを入れる。

「ううう…疲れたの……」

「あれだけ叫べばなあ……お疲れさん、なのはちゃんの番はこれで
終いや。次はシグナムやで……期待しとるでえ」

「は、はい……」

はやての文字通り期待しているニヤついた顔をシグナムに向けた。
それにシグナムは少したじろいだ。

「シグナム報告中」

「ああ……ゴメンなシグナム、ウチがもつとちゃんと説明しとけ
ば……」

「いえ…私が勘違いしなければ……」

報告後、真つ先にシグナムに謝るはやて。

「つーかそれに勝負と結び付けるなんてどんだけバトル脳なんだよ
……コダイの言葉を借りる訳じゃねーけど一度シャルマルに脳を診
てもらえ」

「ヴィータちゃん。流石に癒しが本分の私もシグナムのアレは治せ
ないわ……」

「グッ……」

ヴィータとシャルマルの言葉に胸を抑えるシグナム。

「ま、まあそれはもう終わりにして。コダイ君と二人でプリクラ撮
ったんやろ？」

「は……はい」

はやてが素早くフォローを入れる。自分はその原因を作った一人な
ので何も言えなかった。

「んで、何で撮ったんや？」

「主達が一緒に撮られているのが羨ましくて……その」

「だいぶ前に皆で撮ったアレを見て?……それで、そのプリクラは
何処に貼っとるん？」

「……コレに」

シグナムが携帯を見せる。そこにはシグナムが後ろからコダイを抱きしめているプリクラだった。

「密着しとる……」

はやての顔がどんとんと険しくなる……

「えっと……その」

「コレはどっちを羨めばええんや？」

「あ、主はやて？」

シグナムは予想していた反応と違っていたので少し戸惑う。

「恥ずかしがって初心な所も見せつつも自分の巨乳おっぱいを巧みに使っている……流石や」

「そんな真剣に解釈されましても……コレは偶然ですし」

「第一偶然でも無くてもコダイ君には一切効きませんし」

「色気じゃ誰も勝てねーもんな」

「シャマルとヴィータの言う通りや……この対策は今後練るとして……次はヴィータや！」

「おっしやあ！ついに来たぜ！私は……」

〈ヴィータ報告中〉

「おんぶかぁ……お姫様だっこならされた事あるけど」

「私達はコダイ君より背が高いから……チョット羨ましいな」

「ふふん！どうだ！」

アリサとすずかに胸を張るヴィータ。

「で、どうやった？コダイ君の乗り心地は」

「えっと……よく分んなかった……途中で眠くて寝ちまったし……」

「それだけ心地よかつたって事やる？」

「うう……そう、なのかな？」

上目遣いではやてに聞く。

「そう言う事や」

「あう……」

「ヴィータ可愛い」

「うるせ〜！それと頭撫でんなよレイ！！」

ヴィータは自分より背が低いレイに頭を撫でられてる。

「でも家帰つてのろい黒ウサギを抱きしめてゴロゴロしてたヴィータはホンマ悶える位可愛かったで？」

「は〜や〜てえ〜！」

「あはははは……でもまあ、ヴィータはホンマにコダイ君のこと大好きなんやね」

「うっ」

「そう言えばトキガワに初めて会った日以来、時々頬が緩む事があったな」

「うっ……」

「コダイ君が家に来た時はずっと腕にくっ付いていたものね」

「うっ……」

はやて、シグナム、シャマルと畳み掛けられて、若干涙目になるヴィータ。

「もう……あんまりイジメちゃダメ！」

レイが腰に手を当てて頬を膨らまして……怒っているようだ。だが力が全く無い。

「まあこのままコダイ君ネタでヴィータを弄っていたら時間が足らんしな」

「じゃあ、次は私ですね？」

「シャマルか……よし！言ったれ！！」

「はい」

〜シャマル報告中〜

「シャマルに自殺あじみを覚えさせたのか……」

「後、シャマルの料理と言えないアレを全部食ってるし……」

「しかもちゃんと評価しとる……ウチは一口食べただけで気絶して
もうたからなあ……」

「三人とも酷いです……クスン」

シグナムとヴィータとはやての反応に泣きそうになるシャマル。

「さ、さすがに言い過ぎなんじゃ……」

「なのは……オメはアイツの料理を見てねーからそんな事言える
んだよ!!」

ヴィータが苦虫を噛み潰したような顔をした。

「アイツはシチューの材料で原形を留めて無い原色の何かが出来る
んだよ!!」

「そんなに!?!」

どんな物かは今の説明で容易に想像できた。

「しかもシチューからはかけ離れたマズさなんだよ……コレでも
まだマシなんだよ」

「それでも!?!」

「最悪……結界張って無かったら近所迷惑も良い所だぜ」

「そんなに!?!」

もう驚く事しか出来ないのはだった。

「それで驚くのはまだ早いぞ高町」

「え?……シグナムさん?」

シグナムもヴィータと同じ苦い顔をしていた。

「シャマルの料理は理解しただろ?……そのシャマルの料理をト
キガワは眉ひとつ動かさずに食べきるんだ」

「ええ!?!」

「それだけでは無い、しかもそれを我らでも食べれるように加工出
来るのだ」

「……………」

今度は驚き過ぎて、口が塞がらなかった。

「皆さん酷いです……………コレでも頑張っているんですよ?」

隅っこで影を背負って体育座りをしているシャマル……

「それは私も主コダイからよく聞いている……私も修行中の身だ、お互いに頑張ろう……」

「アイン……はい！」

「コレは何時も主に言われているんだが必ず味見をする事だ」

「それはちゃんとしているんですけど……何故か味見をする前後の記憶が無いんですよ……」

「……………」

アインは『それがいつまでも上達しない原因では？』と思った。

「シヤマル……そろそろ戻ろう。次の報告が出来ない」

その考えを一旦置いといたアインだった。

「そうですね……次は、プレシアさんでしたね」

「ようやく私ね……」

～プレシア報告中～

「その時のお母さん見たかったな」

「うんうん」

フェイトとアリシアが羨ましそうに言った。

「フェイト達が帰る頃には戻っていましたがからね」

「まあ、小さい頃のフェイトにそっくりだったよ……流石親子だね」

「当り前よ……」

プレシアは当然の様に言った。

「母様！もう一回子供になって！それで抱っこさせて……！」

「私も……！」

アリシアとフェイトが手を上げる……

「残念だけど、まだ量産化に成功してないわ」

「ぶ………だったらコダイにその時の母様の写真を撮って無いか聞いてみよう」

「止めなさいアリシア……彼なら絶対やっているわ」

「もう確定事項なんだ……」

「良く考えなさいフェイト……彼の性格なら絶対やりかねない」
「……うん、納得」

フェイトも実際に被害にあっているのだから納得した。

「………所でコダイさんから送られた、その件のプレシアの画像が此処にあります」

場を変えるかの様にリニスとプレシアが携帯を取り出した。

「リニス!？」

「見たい方は拳手を」

リニスとプレシア以外が即座に手が拳がった。

「ではどうぞ」

携帯を皆に見せる。そこに映っていたのは、『体を丸め、指を咥えてスヤスヤ眠っている幼児化したプレシア』だった。

「もつとマシなのは無かったの?!」

プレシアがデバイスを起動してリニスに詰め寄る。

「いいえ……ですが一番可愛いを選びました。後あるとすれば『ニンジンが取れなくて半分泣いている』のとか『寝ている時にコダイさんが離れて泣きそうになるとか』……」

「もういいわ!!」

「リニス!!後で送って!」

今度はアリシアが詰め寄る。

「良いですけど……コダイさんに頼んだ方がいいのでは?あの人ならこの10倍は持つてそうですし」

「そっか!早速頼んでみるよ!」

携帯を開きアリシアがコダイにメールを送る……

「姉さん、送られたら私たちにも」

「モツチロン!!」

満面の笑みでサムズアップをした。

「………はあ」

「ツッコミはやめたんですか?」

「疲れたのよ。私はもともとツツコミを入れるキャラでは無いもの……捌き切れないわよ」

「そうですね……では、次は私達の番ですね、行きますよアルフ」
「ふっふっ皆聞いて腰抜かすんじゃないよ」

アルフが意味も無く指の骨を鳴らした……

〈リニス&アルフ報告中〉

「…………ちよつとO H A N A S H Iしようか」「…………」
リニスとアルフ、プレシア以外目を単色にしてゆつくりと立ち上がる……

「ちよつとまった！！チヨット待つてくれないかい！！」

「落ち着いてください！！大人コダイさんの写真沢山撮ってるので後で送ります！！」

早口で話す二人、逆に腰を抜かしそうになった。

「…………」……………………「…………」

無言で座った……

「アルフとリニスもズルイよ。大人コダイとデートだなんて……」

「言っておくけどフェイト？…………あの大人コダイに何時も通りにいられるかい？」

「目を合わせたり、手を握ったりするだけで精一杯だったんですよ？」

「お、大人コダイと……………きゅ」

思い出したのかフェイトは頭から煙を噴き出し、テーブルに組んだ腕の上に顔を伏せた……

「けど、不思議なものね…………私、アリシアとフェイト……リニスとアルフ…………一家全員同じ人を好きになるなんて」

「そうだね」

「私と姉さんだけだと思っただけどまさかお母さんまで……」

「意外とは良い言い切れませんか？プレシアはああ見えて乙女チツ

クな所がありますから…傷だらけになりながらも自分を助けてもらったから始まり、ストーカーを退ける為に大人コダイさんとのデートで一気に火が付いたみたいですね」

「リニス…それは貴方にも当てはまる事よ？」

リニスにジト目で答えるプレシア…それにリニスは無言で視線をそらした。

「今考えればコダイに一家全員救われているんだねえ…あはははははっ！！」

そう言つて嬉しそうに笑うアルフ。

「それを言うならウチらから救われたで？」

はやてを筆頭に八神家が頷いた。

「私やサクラ達もだ。元々消えゆく運命だった筈が、今こうして生きているのも主コダイのおかげ…」

「此処に居る皆はコダイに救われたんだね」

「そうだねレイちゃん…だから皆コダイ君の事が好きなの」

なのはの言葉に全員照れ臭そうにしていた

「次は私達だ！おねーさんのミリキに驚くがいい！！」

「ロツテ…それを言うなら『みりよく』だ…それとその発言は嫌な予感しかないから止めてくれ」

そう呟くアリア…

（アリア&ロツテ報告中）

「…………ちよつと O H A N A S H I I しようか」「…………ゆっくりと立ち上がる…………」

「やっぱり嫌な予感的中した!？」

「落ち着くにゃ！お土産に女装した大人コダイの写真があるから！

「！」

「……………………………………………………………………………」

無言で座った…………

「ふう……………危なかったにや〜」
「ほら見る……………だから言ったんだ……………」
「アリア……………でも言わなくても同じ結果になっているかも」
「それは……………否定できないな」
「「はあ……………」」
リーゼ姉妹が溜息を吐く。
「というか女装したんかコダイ君……………」
「からかい半分で持ってきて来たんだけど物凄く乗ってきて来て……………」
「一筋縄ではいかない事が良く分った……………」
ロツテとアリアが少し苦笑いを浮かべている……………
「ん〜……………レイちゃん、質問ええかな？」
「うにゅ？……………いいけど？」
「コダイ君って家ではいつつも女装しとるの？」
「ううん。時々やっているよ？毎日オシャレは疲れるって言ったし……………」
レイが首を傾げながら答えた……………
「やっとなるんかい！……………まあ似合っとなるからええけど……………」
「あの時のコダイは……………顔は綺麗で、スタイルは人形のように細く小柄、胸も大きい……………おまけに家事が完璧……………」
アリアが指折り数えている……………
「あと天然も萌えポイント……………アレ？ひよっとして私達、女装したコダイに『女』として負けてね？」
ロツテの発言に全員影を背負った……………
「まあ……………薄々分ってたけどね……………」
アリサが力無く呟く……………
「えっと……………コダイ君が色っぽいのは今に始まった事じゃないし、次行こうよ……………ね？」
「さすがが気持ちを切り替える為、案を出した。」
「うん……………ソレが良いよ」
「この後も女装関連の話しだから……………」

ロツテとアリアもそれに頷いた。

「次は私か……先ほどの二人よりはインパクトに欠けると思っが…
…」

そう言つてアインが報告を始めた。

〈アイン報告中〉

「誰だよオメー。色んな意味でインパクトデーよ
アインの報告を聞いたヴィータの第一声である。」

「あの時はすみませんでしたアイン……」

「あのマグカップが姫との思い出の品だと知らず……」

「ゴメンナサイ」

サクラ、アンズ、エルはあの時のマグカップの件について謝つてい
た。

「いや……あのカップは何年も使っているし寿命が来たのだから…
…それに私も大人げない反応をしてしまった…私からも謝らせてく
れ……」

アインが頭を下げる……

「その後皆でコダイに O S H I O K I されたけど……」

「……ガタガタブルブル……」

レイの言葉にトキガワ家が震える……

「私の母が前回のメイドや今回もおかしな事を教えたようですみま
せん……」

今度はなのはが頭を下げた。

「ああ…アインさんのメイド服つて桃子さんが原因か……それもそ
うね、コダイなら着せるより着る方だもの」

アリサが納得した感じに話した。

「アインにメイド服を着させるなんて……桃子さんも凄いなあ……」

「こつゆづのが周りに居ると『お母さん』がまるで別の生物に思え
る…コダイを含め」

「ん〜それはシャマル…アレやる。サクラちゃん達はコダイ君が取り込んだ闇の書の間から産まれたんや…つまりコダイ君の天然がかなり入っとなるって事や」

「くっ……………実際に起こった事だから言い返せぬ！」
アンズが握り拳を固めている…

「それに……………その巨大打ち上げ花火の名前……………」
『スターライトブレ 数多亜羅威屠武零
火^{イカ}』？だっけ……………アレだよね？なのは……………」

「それしかねーだろ…世間って案外狭いな……………」

「フェイトちゃんもヴィータちゃんも酷いの！！」

「何を言っているんですか。アレで火事になり掛けていたんですよ……………結界を張っていなければどうなっていたのやら……………まさに魔王の如しでした」

「サクラちゃんもひどいの〜」

三人の総攻撃により涙目になるなのは。

「それで……………その後はどうなったの？」

「さすが首を傾げて聞いてきた。」

「主コダイがレイ達に説教をしていて、その後にレイ達に修復させました」

アインが『私も説教に参加しました』と付け加えた。

「実はあの花火が他の打ち上げ花火にも当たって大惨事に……………」

「水を掛けても全然消えなかった……………」

「朝に帰って来たエリオが家の惨状をみて気を失っていたな」

「直るまでデザートのスイカ無しって言われて……………凄い必死にがんばったよ〜」

サクラ、エル、アンズ、レイが酷く疲れた顔をしていた……………

「……………だが、夏祭りは楽しかったんだろ？」

「……………うん（はい）（うむ）！……………」

アインが聞くと四人が笑顔で頷いた。

「えっと……………コレで全員ね……………でもコレって」

「そやな……………」

アリサの眩きにはやてが腕を組みながら答えた……

「皆の報告を聞いた結果……『進展無し』……というかコダイ君の天然タラシ能力の所為で更にコダイ君の事が好きになってしまったって所やな……」

「……あう……」

その言葉に全員……言っただけは本人も真っ赤になっていた。

「あらあらあら」

「流石リーダーね 幼女から人妻まで守備範囲が凄いわね……いえ、この場合は攻撃範囲かしら？」

それを遠くで見ていた桃子とリンディはとても嬉しそうな顔をしていた。

「一体コダイ君は誰と結ばれるのかしら……リンディさんは誰だと思えます？」

「そうね……いつその事全員と言っただろうかしら？」

リンディが意味ありげに笑う。

「そんな事が出来るの？」

「簡単よ……コダイ君の戸籍を一夫多妻が可能な所にすれば……」

「あらあら それは面白そうね……」

「フフフフフフフフフフ」

楽しそうに……怪しく笑う二人だった。

くおまけく

グシャー!!

リインを連れて買い出しに出かけたコダイが手に取っていたリンゴを握りつぶした。

「と……とーさま?」

異様な雰囲気におそろおそろコダイに尋ねるリイン……

「リイン、少し待っている……翠屋を襲ってくる」

「はい?!」

その後、コダイが翠屋を襲撃。理由は……

「何か俺について散々言われてる気がした……」

……当たらずとも遠からずだったので反論出来なかった被害者達であつた……

特別編『結果報告』（後書き）

メガネ「実はこの話過去最大の（メモ帳で）28KBだった！」

コダイ「どうでもいい」

メガネ「おっしや終わったー！！そんでコダイが後書きに復活！！」

コダイ「凄いどうでもいい……」

レイ「コダイ……！！」（ぎゅ）

コヨリ「はじめまして」

コダイ「おい、コヨリがなんで此处に居る……」

メガネ「何か沢山コヨリ宛てにお土産がきているから、後書きのレギュラーにした」

コヨリ「……ブイ」（ピース）

レイ「感謝コ〜ナ〜 ながも〜様、Rain様、スペリオルス様、アナザー様、マーボー様、七夜士郎様、龍賀様、ポワソ様、感想をありがとうございます……！！」

メガネ「Rain様からは美味しいお団子詰め合わせを、スペリオルス様からはレイにガチャピンの人形とスーパーロシアンルーレットキー（8個セット）を、アナザー様からはコダイの分のPSP色は銀をサクラとレイにはムッツリー二作のコダイ等身大抱き枕を、

メガネ「何でブシドーが！？つか名言を言う前に死んだ！？」

レイ「龍賀様の所から来た見たい」

コダイ「俺がガンダムだ……」(CV・刹那・F・セイエイ)

メガネ「やめんかい！！そんなにネタ知らんわ！！」

?????「おお……何か凄い音がしたが……」

コヨリ「だれですか？」

メガネ「今回のゲストはスペリオルス様の作品『魔法少女リリカルなのはStrikerS 青年と魔導師の交わり』の主人公の赤青^{せきせい}龍士^{りゅうじ}が来てくれました！！」

龍士「なんか凄いな……毎回こんな事が？」

メガネ「最近が特に……何か恨みでもあんのか！？」

コダイ「作者が作者してるからだろ」

メガネ「存在全否定！？」

コダイ「今に始まった事ではないだろう」

メガネ「……………」orz

レイ「ねえねえ！このケーキなに？」（キラキラ）

メガネ「無視かい！！……………」
「まったくスペリオスル様のスーパーロシア
ンルーレットケーキ（8個セット）か？」

レイ「ろしあんるーれつとつてなに？」

メガネ「えつと……………」
「コレに例えるところの中のケーキの内どれかがハ
ズレでそれを当てたら負けつていうゲーム」

レイ「なるほど」

コダイ「ちなみにハズレは真・激辛&超苦の二つだ」

龍士「だからあの時ヘッドフォンとアイマスクが装着されたのか…」

コヨリ「でも8こあります」

メガネ「三人が二個担当で良いだろ」

龍士「ならジャンケンで負けた三人が二個担当でいいか？」

レイ「意義ないし」

「……………」
「ジャンケン、ポンー！！……………」

メガネ「まあ…分つてたけどね」

レイ「ケーキ二個だあ」

龍士「この中にハズレが一個……いや、二つともと言う可能性が…」

コヨリ「どうしたんでしょうか……」

コダイ「どうでもいい、さっさと食べろぞ」

メガネ「待った！同時だ！同時に食べるぞ……行くぞ」

「……………せーのっ！」「……………」

パクッ×5

メガネ「……………ウマイ」

レイ「美味しい」

龍士「セーフだった…」

コダイ「食べれるな」

コヨリ「はい……」

メガネ「って事は…もう一個に…」

レイ「うっ……」

龍士「………覚悟はできてる……」

「「「「せーのっ……」」」」

パクッ
×3

「「「………普通だ!!」」」

コダイ&「ヨリ」「?」「」

メガネ「辛くも苦くも無い!」

龍士「どうなっているんだ?」

レイ「おいしい〜」

コダイ「モムモム」

「ヨリ」「モキュモキュ……」

レイ「「ヨリ」そのケーキはどじつなの?」

「ヨリ」「はい……食べれます…食べますっ」

レイ「うん!あ〜ん………っ………っ………」(「トロトロ」
「トロトロ」)

「Iしてくる…」(トトトトトトトトトト)

「コヨリ」おみやげです」(箱を渡す)

「コダイ」俺が作ったロールケーキだ、クリーム、チョコ、フルーツの三種類セットだ」

龍士「ありがとう、アイツらと分けて食べるよ……………じゃあな!!」

「シュン！」

「コダイ」本当に転移って便利だな……………」

「メガネ」まだできないのか？」

「コダイ」試作したが宇宙に飛ばされた……………」

「メガネ」良く生きていたな……………」

「レイ」皆様からの意見や感想など色々待っています!!」

「メガネ」実は次章の名前考えて無かったり」

「コダイ」今すぐ考えろ」

「次回もお楽しみにしてください!!」

所詮周りの評価何てそんなモノboyコダイ(前書き)

新章突入!

時期はA・Sエピソードからです

名前の由来は……………何時か書きます

所詮周りの評価何てそんなモノbyコダイ

アレから……何年だ？…一年位経過した……
恒例の様にその間あった事を話そう。

まず、エリオが管理局の保護施設に戻った。元々は人に慣れさせるのが目的だったしもう問題無いだろうと言う事になった………その際、レイ達が大泣きしてたけど……

更にサクラ達が『保護施設を破壊すればエリオとまだ居れる』とか言い出したから即行 O S H I O K I をした。

次に部隊の名前だ。クリミナルのままにするが、ミゼットにそのままではマズイと言われたので表向きの偽名を作り普段はそれで行く事になった。

表向きの部隊名は『犯罪事件強制襲撃隊』通称『強襲隊』となった。名前の通り次元犯罪のみならず小規模から大規模の犯罪の犯罪者や犯罪組織を強制的に襲撃する部隊。

簡単に言えば、どんな事件でも首を突っ込み、危険となれば即襲撃する部隊だ。コレなら高ランクが何人いても問題無い。

まあ、こんな部隊だから、かなり評判悪いけど………それについては後に話す。

最後に一年位経ったって言ったら、もう分るよな？

今年で俺達は中学三年だ………クラスも同じで席も近い……呪われているのか？

そんな事はともかく今は………

「じゃむぐい！！！！！！」

「ぶつつけ本番で転移何てするんじゃ無かった………」

早くここから如何にかしないとレイがヤバイ………

今日、朝早くからクロノから連絡が入りアリサとすずかにメールを入れて任務に向かう………それで、昨日試作したばかりの転移魔法で第162観測指定世界移動する筈だったが。その魔法にミスがあ

り、隣の極寒世界へ転移してしまった……

「しゃしゃしゃしゃむいよ〜!!!!」

「だから、元に戻れって言った」

「でもお〜!!」

俺はこんな極地は慣れているが……

「取り敢えずもう一回転移だ……この距離なら外さないだろう」

「はやく〜!!」

「分っている」

応急処置をした転移魔法で第162観測指定世界に転移した……

「……………今度コレを実践する時はユーノ同伴でやろう……………」

「しゃむかつたあ〜」

何とか目的に定置観測基地に着いた……

「遠路お疲れ様です。本局管理補佐官、グリフィス・ロウランです」

「シヤリオ・フィニーノ通信士です」

基地に着くと出迎えが……名乗って置くか？

「コダイ・T・ベアトリスだ」

「ガタガタブルブル……………」

レイはさっきの寒さがまだ残っているのか、まだ震えている……

「ご休憩の準備をしておりますので、こちらへどうぞ」

グリフィスがこちらに促す。

「俺は良いが、コイツに暖かい飲み物を頼む」

「あ、私やります!じゃあ行こう……………えっと」

シヤリオがレイと視線を合わせるようにしゃがみ、首を傾げる……

……あ

「レイ、挨拶」

「えっと……レイ・モモ・ブラッドです！」（にぱ）

「……………」

ギョ

「ふえ！？」

「あの……この可愛い生き物は何ですか？」

シヤリオがレイを抱きしめながら聞いてくる……

「俺のデバイスだ」

「この危ないお兄さんをキュンキュンさせる様なこの子がデバイスなんですか！？」

「ああ……なんなら時間まで一緒に居て良いぞ？」

「本当ですか！？ありがとうございます！レイちゃん、ココア好き？」

「ココア！飲む〜！」

ココアと聞いて目を輝かせるレイ。

「じゃあ行くっか？」

「はい」

シヤリオと手を握り向こうへ行くレイ……

「えっと……すみません。アイツはデバイスが絡むと……しかし何であの子は震えていたんですか？」

「此処に転移するつもりが、誤って隣の極寒世界に転移を……」

「あ……ああ……」

あ、微妙な顔をした……

「それはそうと久しぶりだな、グリフィス」

「っ！覚えてていたんですか！？」

俺がそう言つと目を見開き驚くグリフィス。

「当たり前だろ？あんな顔合わせを忘れるのが可ましい」

「あはははは……」

「あれ？お二人は知り合い何ですか？」

「コッコア」

グリフィスが苦笑いをしていると。カップを持つてるシャリオが来て、その後にカップを両手で持っているレイが居た……中身はコッコアだろう。

「どうぞ！」

シャリオに差し出されたカップを貰う……

「何で俺の分まで？」

「レイちゃんから話を聞いて……」

「成程……ありがとう」

礼を言ってからコッコアを飲む……ん、甘い。

「で……さっきの話ですけど、何処で知り合ったんですか？」

「あまり思い出したくない話なんです……」

遠い目で言うグリフィス……まあそうだよな。
知り合ったのは少し前。

リンディとレティに誘われて、飲みに行く事になったんだが。その二人が飲みまくって泥酔……仕方なくレティの端末から迎えを寄越す様に連絡した、その時に来たのがレティの息子のグリフィスだった……

「……飲み屋で知り合った。そうだったよなグリフィス」

「え、ええ！はい、飲み屋で知り合ったんです！」

まあ嘘は言っていない。

「……………ん！なのは達来たよ？」

暫く四人で話していると、レイがココアを飲みながら俺に言った。

「なのは達が？という事は今回は合同か？」

「あつ！お出迎えしなきゃ！」

「僕も……………それでは失礼します！」

シヤリオ、グリフィスの二人は走って行った……………

「レイ……………俺達も行くぞう」

「うん！」

このカップは……………どうするのか聞かないと……………

二人で後を追うと、もうなのは達と合っていた。

「あ、レイちゃん」

「一番早く気付いたのはラインだった。」

「ライン」

レイが妖精サイズになってラインの元に飛び……………

ギョッ

「……わ……い……わ……い……」

何時もの様に抱き合ってはしゃぐレイとライン。

「朝から仕事って聞いたけど、まさかウチらと同じかあ」

「はやて達もロストログアの回収か？」

「そや、エイミイさんに送られてさつき着いた所や」

……………俺もクロノに頼めば良かったかな？

「場所は二か所あって。もう一か所はシグナム達が向かっているよ」

「今回は簡単だね」

フェイトとアリシアが今回の事を簡潔に説明してくれた。

「コダイ君……」

なのはが何故か念話で話してきた。

「どうした？」

「ロストロギアの事なんだけど……」

何かあるのか？そのロストロギアに……

「……また取り込んじゃだめだよ？」

「……善処する」

アレは無意識というか。いつの間にか取りこんでいたと言う事だから俺に言われてもな……

「はあ〜！」

その声に振り返るとシャリオが目を輝かせてコツチを見ていた……

「本局次元航行部隊のエリート魔導師のフェイト・テストロツサ執務官とアリシア・テストロツサ執務官！いくつもの事件を解決に導いた本局地上部隊の切り札の八神はやて特別捜査官！武装隊のトツプで航空戦技教導隊所属の不屈のエース！高町なのは二等空尉！更にミッド、ベルカに次ぐ第三の魔法体系『ベアトリス式』を創った新代の魔導師！更に凶悪犯罪組織を一人でいくつも壊滅させた犯罪事件強制襲撃隊所属の不死身の魔人と称されるコダイ・T・ベアトリスさん！そんな有名人と一度に会えるなんて光栄です！！」

一息で良く言えたな……

「というか何だその不死身の魔人って……」

「はい！攻撃を喰らい瀕死の重傷を負っても必ず立ち上がり敵を倒す事からそう呼ばれているんですよ！後、バリアジャケットが！」

……本格的に防御魔法覚えた方が良いか？……いや、この際攻撃魔法を確定させてからにするか……

「……こんな綺麗な人たちがあんな二つ名を持っているなんて……」

ピクッ
x 5

シャリオの眩きに反応する5人……………よし。

「レイ」

「ん？なに？」

さっきまでラインと抱き合っていたレイがフルサイズに戻り俺に駆け寄った。

俺はそれを抱き上げ……………

「こいつを頼む」

「は？」

グリフィスに抱かせ、その場を音も無く去った……………

くおまけ

「なあ……………その二つ名って何なん？」

「えっとですね……………フェイト・テストロツサ執務官は犯人が幼児誘拐等をした場合、地獄の底まで追いかけて鎌で斬り伏せる『管理局の金色の死神』アリシア・テストロツサ執務官は邪魔な物とはにかく破壊の『管理局の金色の破壊神』八神はやて特別捜査官は歩くロス・トロギアと謂われ広範囲魔法を放ち草の根一つも残さない『管理局の白い殲滅者』高町なのは二等空尉は例え相手が手負いだらうと子供だらうと全力全壊の砲撃を至近距離で放つ『管理局の白い魔王』と……………」

シャリオが顎に手を添えて考える様な仕草で話し始めると。フェイト、アリシア、はやて、なのはの順に崩れ落ちた……………

「それ……………誰から聞いたん？」

「ベアトリスさんです……………アレ？ベアトリスさんは？」

「ベアトリスさんならさっきレイを預けてどこかに……………っ！！」
振り返り探すシャリオに言ったグリフィスだがシャリオの背後に揺らめく4つオーラに引きつった……………

「フフフフフフフフ……」

怪しく笑いながら立ち上がり戦闘態勢に入る4人、そして……

「……コダイ(君)……… O H A N A S H I I しょうか」

「」

そう言つて凄い速さで飛んで行つた……

「はやてちゃ〜ん！待ってください〜！！」

置いてきぼりを喰らつたラインが後を追う。

「あはははは……あなたが間違つていないのかも……納得」

乾いた笑いを浮かべながら頷いたシャリオ……

「うう〜大丈夫かな〜コダイ……」

心配そうに向こうを見ているレイ……

「まあ……ベアトリスさんなら大丈夫でしょう……」

「何でそんな事が分るの？」

「いや……あの人……リンディ提督に似ているから……」

「ああ……それも納得。次、私にレイちゃん抱っこさせて？」

かくして、北部定置観測基地内でのM・D・O(魔王式ダークネス鬼ごっこ)が勃発した……

所詮周りの評価何てそんなモノbyコダイ（後書き）

メガネ「さて、新章は何話掛るだろうな……」

コダイ「……序章が7話、無印が23話、日常編が5話、A・S編が32話、A・S後日常編が7話、Criminal編はが9話、Criminal日常編が24話……40話か？」

メガネ「そんな計算だったらStrikers編は60話近くになるだろうが!!」

コダイ「頑張れ作者」

メガネ「無理!!」

コヨリ「いばらないください」

コダイ「放って置いて始めるぞ……」

レイ「感謝コナ」 スペリオルス様、龍賀様、山義 芳原様、シ
ーザ様、ポワソ様、感想ありがとうございます!!」

メガネ「スペリオルス様からはコヨリとレイに『遊戯王』のハネクリボーのぬいぐるみを、龍賀様からは転移札とネギまの別荘（中の一週間が外の一時間＋老化防止）を、ポワソ様からはコダイに真女神転生ifの最強銃『ブラフマーストラ』をレイにはアトリエシリーズの『逃げ足のくつ』『妖精の帽子』をコヨリにはガンダムでお馴染みのハロをメガネにはテイルズシリーズの『デリスエンブレム』をトキガワ家にはアトリエシリーズの『ゲヌークの壺』『生きてる

ナワ』を、頂きましたありがとうございます!!」

コダイ「それと龍士の所にゲストで来た時に貰ったカップ（形は普通で色が赤、青、黄、紫、緑、水）もあるぞ？」

メガネ「スペリオルス様ありがとうございます!!」

コヨリ「コダイ……アレはなんですか？」

ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!!

コダイ「ん?……アレは強行強襲型輸送機PAF-2188TPだな……この距離だと近いな……しかもあの様子じゃあここに突っ込んでくるぞ……」

メガネ「山義 芳原様ありがとうございます!!という事で全員逃げろおおおおおおお!!!!」

ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!!

コダイ「大した事無かったな……」

メガネ「胴体着陸してきた輸送機を生身で受け止めるな!!!!」

コダイ「ん？安心しろ中身は無事だ」

レイ「チョコレートケーキとビターケーキ11号ニホールずつと博麗霊夢の巫女装束と八雲紫の服と狐の耳&尻尾と黒猫の耳&尻尾（つけければ脳波で耳と尻尾は動くし、遠くの音をとったりする事が出来る。個人差あり）に性転換薬5本入り五ダースを、頂きましたありがとうございます！！」

メガネ「シーザス様から質問を頂きました！！」

質問『メガネ様を含めたあとがきキャラのじゃんけんの勝率を教えてください』

メガネ「コレは前にもやったけど今度は全員か……」

コヨリ「どうきめるのですか？」

コダイ「交代しながら二人づつやって勝率決めればいい」

メガネ「よし！……ジャンケン……」

全員「」「」「ポン！」「」「」

♪ジャンケン後♪

コダイ「こんな物だな」（3戦3勝）

メガネ「うゝん……微妙？」（3戦2勝）

コヨリ「コレはいいのですか？」（3戦1勝）

レイ「うゆ〜」orz（3戦全敗）

コダイ「レイは手を出す時の手が丸見えだから何が出るのか丸分り
…」

コヨリ「わたしでもかてます……………」

メガネ「えつと……………以上が勝率でした！次の質問です！」

質問『ロシアンルーレットをしましたか、誰が一番強くて、誰が一番弱いんですか？ あとがきキャラ（メガネ様含む）だけで教えてください』

メガネ「えつとコレはですね……………一番強いのはレイ、その次に俺、次にコヨリです」

コヨリ「コダイは？」

メガネ「こいつは例えワサビたつぷりの寿司でも、激辛シューでも平然と食えるから論外だ。ルーレットの意味が無い」

コダイ「どうでもいい……………」

メガネ「以上で質問は終わりです！…」

コダイ「次回はやつと調査に入る…」

メガネ「お前が暴走させたんだろ……………」

レイ「皆様からの意見や感想などイロイロ待っています!!」

コヨリ「はたしておられるでしょうか……」

メガネ「不安になりそうな事言うなよ……」

「次回もお楽しみにしてください」

コレでも一応頑張っている……byコダイ（前書き）

コダイは未だに攻撃魔法系しか創ってません……ブツチャケ魔導師
としては弱いです……Sランクなのに……

コレでも一応頑張っている…… byコダイ

M・D・O（魔王式ダークネス鬼ごっこ）に勝利した後、そのまま発掘地点に向かった…

今の俺は『スタイル・イレイザー』でなのは達と並走している、この方が飛ぶより楽だから。

発掘地点に近づくと何やら動く影が……

「……人影が二人……あと球状の様な影が沢山……」
「見えるんですか!？」

ラインが目を見開き驚く……まあ、かなり遠いからな。

「こんな事で驚いたらあかんでライン?コダイ君にとってこれ位朝飯前やで?」

ふえ?はやて朝ごはん食べて無いの?

「そうなのか?……朝食を抜くと太るぞ?」

「コダイ君の事や!?!というかさり気無く乙女が傷つくワードをサリと入れたやろ!?!」

「ん?俺は食べたぞ?」

今日は白米に鮭の照り焼きに厚焼き卵、味噌汁の和食だ。

私も食べたよ!?!ご飯9杯おかわりした!?!

「ラインは2杯ですう!レイちゃんはすごいですう!」
エッヘン!

多分レイはデバイスの中で胸を張っているだろうな……

「うう……羨ましい……昔はそんな事気にしなかったのに……」

「大丈夫だよフェイト!レイディ母様が言ったように胸が大きくなっただけだから!」

何か腹部を触って気にしているフェイトに色んな意味で爆弾発言をするアリシア……

「何やこの天然が天然を呼ぶ『ボケスパイラル』は!?オチが!オチが見つからん!?!つかまたデカくなったんかいフェイトちゃん!

！」

「はやてが頭を抱えてワナワナ震えている……………」

「そや、なのはちゃん、砲撃を打つんや！爆発才チで締めるんや！」

「はやてちゃん落ち着いて！コダイ君とレイちゃんのボケ合戦は今に始まった事じゃないの！」

「なのはがはやての肩を揺する……………飛びながら揺するって器用な事するな……………」

「……………っは！ウチは一体何を！？」

「はやてちゃん大変です！さつきとーさまが言った場所に生命反応二つ、正体不明の反応が多数です！！」

「はやてが覚醒したと同時に。ラインがサーチした結果を報告した。」

「ん！皆急ぐで」

「俺達は速度を上げて現場に向かう……………」

「現場に着くと、さつき見た通り……………作業員が2人と謎の機械が多数いた……………」

「現場確認。機械兵器らしき未確認体が多数出ています！」
「ラインがすぐに現状を知らせる。」

「コダイ君、フェイトちゃん、救助には私とアリシアちゃんが回る！」

「任せて！！どんな攻撃からも防いでみせるから！」

「なのはとアリシアが作業員の元に、二人の防御力から考えても正解

だな。

「私とコダイは遊撃する……はやてとリインは上から指揮をお願い
!!!」

俺はフェイトとあの機械を止めればいいのか。

「リイン行くで!!!」

「はい!」

「「ユニゾン・イン!!!」」

はやてがリインとユニゾンをした:

「中継!こちら現場!発掘地点を襲う不審機械を発見!強制停止を
開始します!」

「本部に中継します!!!」

なのはの通信にシャリオが応答した。

「なるべく早くな」

そう言つて『エアシユーズ』を使い、空中を強く蹴つて:

ゴシャツ!!!

作業員の一番近くにいた機械を蹴り飛ばす。

「全く……貴様ら『ロボット工学三原則』を知らないのか?」

ふにゆ?なにそれ?

「ロボットは人間に危害を加えてはいけない、人間の命令に服従し
なければいけない、その二つを守る範囲で自分を守らなければいけ
ないって言う原則の事だ」

そうなんだ

「だが……ミッドにはデバイスって言う物があるから、そんなのは
無いかもしれないが……」

ガンッ!!!

俺は目の前に迫ってくる機械を殴り飛ばす。

「話を通じる相手ではなさそうだな」

そうだね

強制停止という事は壊したらダメ何だよな？

「プラズマランサー、ファイヤー！」

フェイトがプラズマランサーを放ち、機械を足止めする…

「壊さなければいいなら……スローナイフ」

俺はスローナイフを数本機械に向かって投げて……

バースト

ドオン！！

機械の目の前で爆発させて動きを止める。スローナイフの威力は気絶させればいい所だから大したダメージになっていないはずだ……

「大丈夫ですか！？」

「は、はい！」

なのはがプロテクションを発動しながら後ろに居る作業員に聞いた。

「アレは一体！？」

「分りません…コレを運び出していたら急に現れて……」

そう言う作業員は箱を持っていた……恐らくロストログア、つまり

あの機械はコレを狙っている？

「広域スキャン終了！此処に居る人以外反応は無しや！」

コレで暴れても問題なさそうだな。

「アレは……機械兵器？」

該当データにありません

フェイトとバルディッシュも知らないみたいだな……

「こここの警備ロボット……にしては新しいしな」

「中継です！やはり未確認！危険認定、破壊停止許可が出ましたっ

！！」

シヤリオから破壊停止許可が下りた連絡が来た。

「了解！発掘員の救護は私が引き受ける！4人は思いっ切りやって

ええよ！」

「了解！」

「やっとか……」

正直すぐ破壊した方が安全な気がするけど……ロストロギアを狙っているのなら危険な装置は入っていないだろうし……

「ん？……なんだあれは？」

機械が突然何かに包まれた……フィールドか？

「障壁か？……なら」

プラス・ブレイク

障壁破壊の魔法を発動して殴りかかる……拳が障壁に触れた瞬間。

パキンッ！！

体を覆っていた虹色の魔力光が消えた、すぐさま後ろに飛んで距離をとる……

プラスブレイクが消えた！？

「障壁では無い？……さっきのは消えたと言うより無力化されたのか？」

「無効化フィールド……AMF!？」

なのはが驚いていた。

「AMFって、アンチマジックフィールドの略称で。魔力結合と魔力効果発生を無効にするAAAランクのフィールド系の上位防御魔法……だったよな？」

皆頷いた……合っているようだ。

「しかし何で機械にそんなモノが……」

そう言えば以前クイントを見つけた施設で同じフィールド発生させる犬の未確認物体がいたよな……つまり同じ人間が造ったのか？

今はとにかくあの機械を何とかしないと……AMFは同ランクより

下位の魔法は無力化される、かといって俺の使える魔法で高ランクは2、3個程度……よし、アレで行くか。

「ここは俺に任せる、やってみたい事がある」
左手に魔力を集束させる。

ナイトフェンサー！！

ギイイイイイイイイイン！！

チェンソーの様な音を立てて現れたのは以前の様な魔力刃では無く、大型のスフィアの上下左右の四方向から魔力を噴出させた大型の魔力刃だった……

「あれ？私に使っていたのと違う……」

「アリシアに使っていたのは未完成型、コレがナイトフェンサーの完成形だ……」

ナイトフェンサーを掲げて高速で回転させ……

「軌道調整準備」

OK …… 出来たよ！

それと同時にナイトフェンサーを投げ飛ばす。

ギイイイイイイイイイン！！

高速で回転したナイトフェンサーは円盤状になり飛んで行き、軌道上にある機械を次々とノコギリの様に切り裂いて破壊していく……
「リリース」

グンッ！！

そう唱えるとナイトフェンサーは軌道を変え俺の元に返ってくる。それを捕まえて、さっきとは違う方向に投げ飛ばして仕留めそこなった機械も残さず破壊する。

「……よし、実戦初投下にしては上出来だな」

威力も申し分ないし……

「凄い何アレ！？どうやったの！？」

アリシアが目を輝かせて俺に詰め寄る。

「ナイトフェンサーはスローナイフの上位版で前のは投げれなかった。だから別方向からも噴出させて推進力を発生させて、投擲を可能にした。魔力結合を無効化されても消された傍から集束して噴出を繰り返すから消えずにAMF内でも発動できる」

ちなみにコレを思いついたのはエリオがブーメランで遊んでいるのを見て思いついた。

「さっき言ったワードを唱えれば手元に戻ってくるし、勿論スローナイフ同様に爆発も可能だ」

「ねえコダイ！今度ソレ教えてくれる！？」

「ベアトリス式は勝手が違うから無理」

「ぶう〜」

アリシアの頬が膨らんだ……

「完成形と言っても暫定だ、起動補正はデバイスで補っているし、一つしか出せないしそれに……」

「それに？」

アリシアが首を傾げる……その時。

コダイ、ゴメン！

「軌道がデバイス頼りだから……」

「きゃっ！」

近くに居るアリシアを掴み、一緒に高度を下げると……

ギイイイイイイイイイイン！！

ナイトフェンサーが頭上を飛び、遙か遠くへ飛んで行った……

「気を抜くとあんな風になる」

「いやいやいや！そんな軽く言っちゃダメだって！！」
アリシアが焦ってツツコミを入れた……………

「これがそのロストロギア？」

「はい……………」

その後、敵がもういないか確認をして。一段落がつき。
作業員から箱を受け取っていた……………

「中身は宝石の様な結晶体で…『レリック』と呼ばれています」
作業員が説明を続ける……………

俺は箱を開き、中に入っていた赤い宝石を手にとって観察をする……………
「ジュエルシードとはまた違うエネルギーの結晶体か……………」
綺麗だね〜

「……………ってコダイ君何しとんねん！！！！」

突然のツツコミと同時にはやてにレリックとその箱が奪われる。

「いや……………中身の確認を」

「コダイ君がしてもうたら吸い込んでまうやる！！全く……………ロストロギアをポンポン吸い込んで……………」

「俺は掃除機かよ……………それに取り込んだのは二度だけだ」

「二度ある事は三度あるとも言つやる!」

「そうなのか……なら尚更返せ」

「何でや!？」

「二度ある事は三度あると言つが、二度ある事は四度あるとは言わないだろ?なら……」

「ならつて……ああ、今の内に三度目をしてこれ以降を無くそうと言つ事やな……つてアホかい!」

ブウン!!!

「つとノリツツコミで杖で殴るなよ……」

「かわして言うなや!!魔法で無かっただけマシやる!」
確かにそうだな……

「こちらアースラ派遣隊!シグナムさんですか?」

そんな事をしているとなのはシグナムと連絡を取っていた……確かもう一か所はシグナムが行っているはずだったな。

「さて、俺は此処から別の仕事がある」

「え?……ウチらと同じ任務やなかった?」

「同じ任務なら同時に呼び出されるだろう?」

「あ……成程。手元滑つて爆発起こすんやないで?」

「頑張る………凄い頑張る」

他の奴らとも軽く挨拶をしてそのまま別の仕事に向かった……

くおまけ

シグナムはなのはとの通信で現場の状況を説明していた。

「こちらは襲撃では無かった。危険回避のため既に無人だったのが

不幸中の幸いだったが、発掘現場は跡形もない……先ほどシヤマ
ルとヴィータを緊急で呼び出した。今日の任務……気楽にこなせる
ものではなさそうだな。それに……」

「それに……どうしたんですか？」

「あ……いや、大した事ではない。ただ、先ほど高ランクの魔力が上
空を高速で飛来したのを確認してな……」

シグナムの言葉に全員固まった……

「ど……どうしたんだ？」

「あゝシグナム……それはアレやコダイ君のアレや」
はやてが目頭を押さえながら皆を代表して答えた。

「アレ……ですか、今回は随分大人しいですね」

「完成の一步手前らしいで？」

コダイの魔法による天然ミスは『アレ』で済まされる程に頻繁に起
こっているのを物語っている会話である。

メガネ「真後ろに落ちて来た！？何だコレ？……フェンリル様から？」

コダイ「あ……F22」（普通では見えません）

メガネ「フェンリル様からはコダイに武器商人（バイオ4）のマスケット銃とファルコンネルと前渡した銃のカスタムパーツにレイにはマフラー手袋をラバーズには猫耳＋猫手袋＋尻尾を各自の魔力カラーごとにわけたやつと後トリコに出てくるサンサングラミーの天ぷらメルクの星屑がけを人数分を。スペリオルス様からはシヨコラケーキを。龍賀様からはコダイに88mmアハトアハトをコヨリには空想具現化ができるようになる薬（副作用なし、効力は1日）レイには変身が使えるようになる薬（効力＋副作用は同じ）メガネには無明神風流が全て使用できるようになる本を。ポワソ様からはコダイとコヨリにはスピリットリングをレイにはシャーマンリングをメガネには精霊石×1000をトキガワ家の皆にはマーチャントパスを。頂きましたありがとうございます！！！」

レイ「フェンリル様とシーザ様から質問が来ています！！！」

メガネ「まずフェンリル様からの質問！！！」

質問『M・D・O（魔王式ダークネス鬼ごっこ）逃げ切れる自身ありますか？（ハイパーポーション×100同封）』

メガネ「無理！！！」

コダイ「即答だな」

メガネ「逃げ切れるお前が異常！！そこはギャグ補正で捕まれ！！！」

コダイ「捕まったら確実に一回死ぬから（魔法的な意味で）」

レイ「次はシーザス様からの質問です」

質問『メガネ様が好きな仮面ライダーを教えてください（何人でも可）』

メガネ「仮面ライダークウガ、アギト、龍騎、555、ブレイド、電王、キバ、W、オーズ、フォーゼ……というより平成ライダー殆どです！」

コダイ「次の質問だ」

質問『メガネ様の好きなウルトラマンを教えてください（何人でも可）』

メガネ「ウルトラマンは良く知らないんですけど……子供の頃何度も見たのはパワードですね」

コヨリ「ウルトラマンパワード？」

メガネ「そ。ケイン・コスギが出演していた。海外版のウルトラマン」

レイ「知っている人居ないでしょ？」

メガネ「たぶんね。子供の頃はパワーレンジャーも好きだった」

コダイ「ジュウレンジャーの海外版戦隊モノだろ？」

メガネ「そうそう！海外ドラマのフルハウス見たいな感覚が凄く好きでさ……っと話が長くなるので此处で……」

「ヨリ」しつもんおわりです」

メガネ「完全オリジナルストーリーなので遅くなるかも知れません」

コダイ「それ以前にggggdを何とかしろ」

メガネ「うん、ソレ無理」

コダイ「バニシングバスター」

メガネ「零距离はな」（ジユ……）

レイ「皆様からの意見や感想などイロイロ待っています」

「ヨリ」またです」

「次回もお楽しみにしてください……」

出かける前は鍵を掛ける事b yコダイ(前書き)

空港火災は少し後です……

後、クロノの性格が大分変わっています。コダイの仕業で……

出かける前は鍵を掛ける事byコダイ

なのは達と別れ、今回の仕事の現場らしき場所に到着した。

「つと……此処で良いのか？」

秘匿の通信でモニタを開き、クロノと連絡を取る。

「そこだ……そこ周辺のエリアに未確認物体の反応多数。さっきのとは違う奴だ」

それを確認してバリアジャケットを解く。

「そう言えばシグナムから通信があつたが何があつた？」

「シグナム達が向かつた現場はロストロギアのレリックの暴走で爆発、跡形も無くなつたが怪我人は無しだ」

クロノが焼け跡のクレーターの映像を開いて見せてくれた。

「ロストロギアの暴発でよくソレだけで済んだな」

「そうだな。それと通信によるとお前も遭遇した機械兵器があつちにも来ていたらしい」

成程、暴発に巻き込まれてスクラップになつたと言う事か。

「……となるとあの機械の目的はレリックの回収」

「そうなるな……今はコツチを優先させよう。あの機械兵器程度ならフェイト達でも問題は無いだろう」

「そうだな……だって魔王に死神に破壊神に殲滅者がいるからな」

「……聞いたら殺されるぞ？」

「大丈夫、さつきなり掛けた」

「はあ………お前アホだろ」

クロノが頭を押さえて大きな溜息を吐いた。

「でも事実だろ？」

「否定はしない」

「やっぱりクロノもそう思っているか……まあ、10になるかならないかの子供が訓練室を半壊させるほどの魔法を当たり前の様に使われたらな。」

「後、今回は早く片付けろよ?」

「ん?……今日はそんなに忙しいのか?」

「いや、フェイト達が集まってるの任務は久しぶりだから……」

「あ……リンディ辺りが『もう無いかもしれないから終わったら賑やかにしましょう』って言ったのか?」

「良く分ったな……」

「同類だからな……」

「まだ、皆任務中だが……早くしないと食事がアルフに食われるぞ?」

「それもそうだな。フェイトが犬^{アルフ}を抑えている内に……」

コートから銃……今回はベレッタM92を取り出し、セフティーを外す……

ガサガサツ!!

「コッチの犬を躡けないと」

気配に気付き飛びだしたのは。以前クイントを見つけた施設で見た

あの犬だった。

あのタイプ……やはり目的は同じレリック?……いや、それなら同時に配置した方が良く……となるとあの機械と製作者は別人と言う事か……

数は……7匹か。

「ご丁寧にAMF付き……盛大に嫌われてるな……心当たりがあり過ぎだけど」

「お前の場合特にな。で、大丈夫なのか?」

「問題無いクロノ……」
通信を切る。

ガアツ!!

一匹が飛び掛かってくる。
「その為の質量兵器だ」

ダウン！！ダウン！！

飛び掛かって大きく開けている口に2発撃ちこんだ。

グ……………ガア……………

やはり死骸を利用してただけあつて、内側はかなり脆い。犬は血を吐き出し地面へ落ちた。

「やっぱり響くな……………勘付かれない様にデザートイーグルはやめたんだが……………」

魔法使うとバレルし……………あ……………アレ持ってきたか？

ダウン！！ダウン！！

コートの中を探つてある物を探す。そのついでにさっきの犬がまた飛び掛かったきたから口の中を撃つて殺した。

「……………あ、ヤバい…引つ掛かった……………つと。何とか取れた」
コートから出した黒い金属製の棒を銃口に取り付ける。

「これで少しはマシだろ」
後ろにいる犬に振り向きざまに撃つ。

タアン！タアン！タアン！タアン！

さっき取り付けたのは減音器、サプレッサーだ。

「便利なのは良いが手入れがな……………」

熱を持つと消音効果に悪影響が出るから、やたらと連射が出来ない。

「警沢言つて つと…られないか」

タァン！ タァン！ タァン！ タァン！

しゃがんで後ろから飛び掛かった犬を避け、後ろに下がりながら、機械からむき出しの生体部分の目や口の中を狙い撃つ。

「コレで2体」

マガジンを抜き、新しいのと交換する。

グルルルルルルル……

近くから順番に犬に狙いを定める。

残り5体の犬は唸るだけで襲い掛かってこなかった。

掛ってこないね

「来たらやられるって今覚えたんだろ？」

良い事したら頭撫でないと！

「それは飼い主のみだ」

思ったより早く補充したな……威力は期待してなかったが、後マガジンは……4本か。

グルアツ！！！！

それが合図の様に、3体が同時に襲い掛かった。

「同時に掛って倒せると思うな」

袖から大型のナイフを取り出し、一番近い犬の首を切り落とし。銃で遠くの犬を撃ち落とし。中間は、近づいたら蹴り上げて落ちて来た所を踏み潰す。

「残り2………って」

残っていた5体の内2体はもう小さくなるまで逃げていた。

「本当に賢いな………」

「どうしたんだ？」

呟いているとクロノからの通信が。

「敵2体を取り逃がした」

「そうか……いったん戻るか？まだアツチは任務の途中だが……」

「いや、このままあの犬を追う。逃げると言う事は休む拠点があると言う事だ」

もしかしたら手がかりがあるかもな。

「分った……あの犬をサーチャーして見る」

「問題無い、あの犬の臭いは嫌でも覚えさせられる……臭いで追える」

「……お前の方が犬だろ？」

「狂犬注意か？」

人肉を生でしかも直で食べるしな。

「じゃあ帰ったら頭でも撫でて貰おうか」

「ちゃんと出来たらな」

そんなやり取りをクロノとして、犬の後を臭いで追った。

犬の臭いを追って付いた場所は古い研究施設だった。

「やけに静かだ……最近まで人がいた形跡が無いな……」

……っと、もうサブレッサーは必要ないな。

施設の内部はもう、破棄されたのか通路が暗い……さっきの犬も

入口近くで死んでいた。

「弾が変な所に当たって作動させたら困るし、コレにするか」
ベレッタをコートに仕舞い、代わりにさっき出した大型のナイフを
取り出した。

ねえコダイ

「どうしたレイ？」

そのナイフいつつも使っているよね？……気になっているの？

「切れ味は良いし頑丈で使いやすいから気に入ってはいるな」

見た目は懐刀だが細かく分けると懐刀では無いナイフ。

コレは『あの子』が護身用にと持たされた物であり。あの時俺が初
めて人を殺したナイフ……だから思われがあるのか？

コダイ！その奥の扉、何か光ってない？

暗闇に慣れた目を凝らすと、扉らしき物の隙間から薄い光が……

「機能が生きているのは此処だけか……」

誰かいるのかな？

人の気配は無い……

「開けるのが一番だろ」

そだね！

隙間に指を入れて、かなり力を込めて扉を引く……

「……ん？」

あかない？

扉は一ミリも動かなかった……

どうして？

「扉がズレて噛み合って無いのか？……直してみるか」
軽く扉を蹴る。

ゴオオオオオオオオツ……

すると扉は鈍い音を立て『前』に開いた……

……ふにゆ？

「……………」
えっと……これは。かなりの力を込めても動かなかった扉が軽く蹴っただけで開いた………という事はコレは『引き戸』では無かった？あ……良く見たら取っ手付いてた。

何だろう……この空っぽになる感じは……
「ツツコミが居ないからだろ」

そんな感じを引きずりながら部屋に入ると、予想通りにその部屋の機能だけ生きていた。

壊れた生体ポッドが部屋の周りに並んで置いてあった。

「クローンの研究か？」

部屋を入れて真向かいにあるデータベースを操作してコピーしながら探る事にした……

「また戦闘機人に犯罪者のデータ………そう言えばこのデータがあった施設にも犬がいたよな………」

未確認体………戦闘機人………犯罪者………何か共通するモノがあるのか？
「……………生体ポッドがあるって事は何かを創っていた筈だ………一体何を………っ！！」

コダイ後ろ！！！！

後ろからの気配とレイの声一緒に来たと同時に横に跳んで避ける。

ゴシヤツ！！！！

間一髪。俺のいた場所に何かが通過してデータベースに突っ込んだ

………
ふえ？！な、何？！

「俺が聞きたいぐらいだ」

突っ込んだ何かがゆっくりと立ち上がる………

形は人………だが腕や脚、胴体………顔の全てが体のラインに沿う様な真っ白な流線型のプレートらしきものに覆われている。人間か？
「ああ………もしかして此処に住んでいるのか？だったらもうちょっ

と片付けたら？いくら節電とはいえ暗す……っと」

ブンッ！

突然来た蹴りをバク転でかわす。

「勝手に上がったのは悪いと思ってるが、そもそも鍵が掛って無かったし、入ってくれと言わんばかりに扉も開いていたし、それに………」

「………」
「こちらを無言で見ってくる……」

お部屋に勝手に入ってゴメンナサイ

「俺達はもう用事はないのでこの辺で失礼させていただきます」
そのまま何事もない様に扉に向かう………」

……ユッ

「やっぱり駄目か」

キーン！！

後ろから来る風切り音に察知して、予め持っていたナイフを使って受け流して回り込んだ。

「……っと……レイ、アイツあんな物持っていたか？」

ううん

回り込む際によろけたのを直して俺が見たのは。

さっきまで何も持っていなかったアイツが自分と同じ真っ白の槍を持っていた……もしかしてデバイスか？

「………」
「槍を2、3度回して、コッチに構える……その後ろには唯一の出入り口。」

「成程……『此処を通りたければ自分を倒せ』ね……実に分り易い
レイ、記録の方を頼む」
うん！

俺はナイフを逆手に持ち替えて、対峙した……………

出かける前は鍵を掛ける事byコダイ（後書き）

メガネ「久々に戦闘描写やって満足！」

コダイ「貴様の満足はこの程度か」

レイ「私達の満足はこれからだよ！」

メガネ「実は遊戯王はあんまり知らなかったり……」

コヨリ「だったらなんで……」

メガネ「ノリ」

コダイ「そのままのノリでレイ」

レイ「感謝コ〜ナ〜、スペリオルス様、龍賀様、山義 芳原様、
冷凍パン様、ポワソ様、フェンリル様、感想ありがとうございます
!!!」

メガネ「スペリオルス様からはコヨリとレイに『デジモンクロスウ
ォーズ』の『キュートモン』のぬいぐるみとティラミスを皆に。山
義 芳原様からはカルピス原液（グレープフルーツとパイナップル
オレンジ、バナナ、ミカン、苺、ぶどう、レモン、りんご、青りん
ご、梨）を四つず（グレープフルーツの内一つがある人の自家製で
すけど、創造者が 何 故 か 一時的に意識不明&体力
の急速劣化&能力封印される謎の物体）とリアルパッドと
白のTシャツとちよつとダボダボのズボンを。冷凍パン様からはK
EYのRewriteの風祭学院の制服と冷凍パンを。ポワソ様か

らはコダイに幽遊白書の死出の羽衣とレイにスーパーマリオのヨッシーの着ぐるミとコヨリにはサモンナイトの宇宙からの石版をメガネにはFFのリフレクトリングを。後……」

ゴオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!

メガネ「ウオワツ!!!また真後ろ!?!」

コダイ「F14-Dか?それとなに送られた?」

メガネ「えつと……フェンリル様からはIS学園の制服人数分(女子)にホットミートとこんがり肉を人数分をメガネにイングラム×2とその弾を無限に平成仮面ライダー変身ベルト一式(クウガからフォーゼまで)をコダイにエポニー&アイポリーとブルーローズとレッドクイーンを平成仮面ライダーのバイクを全種類を、頂きまし
たありがとうございます!!!」

コダイ「最近流行っているのか?真後ろ」

メガネ「な訳無いだろ!!!……」

レイ「ちなみに山義 芳原様は」

コダイ「ウォーシップガンナー2仕様に荷物を運ばせた後、改伊勢型見たいな戦艦に速攻で回収されたぞ」

コヨリ「しつもんきてます」

レイ「フェンリル様からだね!」

質問『コダイのアレで起きたいちゃんの被害は何ですか？詳細に説明シテクダサイ』

メガネ「アレって伏せるから……アレだなNGワード的な…では答えをどうぞ！」

コダイ「ロード・オブ・ブレイザーを使って一度に4、5個程世界を崩壊させた(奇跡的に全部無人世界)」(キツパリ)

メガネ「オiiiiiiiiiiiiiiiiiiii!!!!!!!!!!」

コダイ「『僕は悪くない』『違う』『クリボーが勝手に』」

メガネ「ネタをませるなああああ!!!!!!!!!!」

レイ「質問を終了します!!!!!!!!!!」

コダイ「今更だが新キャラか？」

メガネ「んにゃ。バラしておく」

コダイ「よし」

レイ「皆様からの意見や感想など色々待っています!!!!!!!!!!」

コヨリ「またです」

〜次回もお楽しみにしてください!!!!〜

弱点は定番を狙えb yコダイ(前書き)

この話で一番悩んだのはサブタイトル

弱点は定番を狙えb y r o d a i

ヒュッ！！

キーン！！

ヒュン！！

ガッ！！

ブンッ！！

タッ！

対峙したのは数秒、喉元を狙い突き出された槍をナイフで受け流す。そしてそのまま懐に潜り掌底を突きだすが左腕で防がれた……ならその腕を上にも払いのけてガラ空きの胴に蹴りを繰り出すが、後ろに飛ばれ空振りになった……

「ただの機械では無いな……っ」

ブウン！ブウン！ブウン！

ヒュッ！！ヒュッ！！ヒュッ！！

休む間もなく繰り出される突きと払いを、ナイフで受け止め、受け

流し、体を反らしてかわしていく。

動きが素人では無い……明らかに訓練された動きだ。

「中に人間が入っているのか？……だとしたら少し厄介だな」

人間であれば顔を見て動きが予測できるが、プレートで全身覆われていて見えないし、金的や内臓を狙うもプレートに完全防備されている……さっきの掌底から返って来た感じからかなりの強度だな。

「だったら……」

相手に向かい走る。

「……………」

ブウン！！！！

それに合わせて振り下ろされた槍を寸前で止まる事で避け、その槍を踏みつける。

ゴシャツ！！

そしていくら頑丈でも人間に有効な場所……………顎を蹴り上げる。更に蹴り上げた脚を降ろし、軸足にして今度は後ろ回し蹴りで蹴り飛ばした。

飛ばされた相手は壁に衝突して煙が上がる。

「この隙にトドメを」

煙の方へ向かう。

頑丈な奴でも脳を揺すられれば動けない……………

ゴウツ！！！！

突然、煙から飛び出したのは動けないかと思っていた奴だった。そいつが槍を掲げると槍からカートリッジが一発吐き出され、そのまま俺に向かい振り下ろされる……

「こっとなつたら……っ……コレはやばい」
受け止めてカウンターを狙ったが、何か危険を察知して後ろへ大きく跳んだ。

ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！！！

振り下ろされた槍は爆音と共に地面を抉り取った。

ふえ！？何アレ………シグナムみたい！！

「カートリッジを使っていた………魔力を高密度に武器に付与し、打撃として撃ち込む………ベルカ式術者の基礎にして奥義ともいえる技法………魔法も使えるのか」

本格的に魔法を使われる前に一気に決める。

相手もこちらに気付いて振り下ろそうとするが…

「上げていろ！」

右腕を蹴り上げてそれを阻止、そのまま逆手に持っていたナイフを間接同士の隙間、喉元に突き立てる。

ゲシッ………

刺さったのは切っ先、どうやら中身も頑丈の様だ。

「なら………」

再び振り下ろされた槍をかわし、その持ち手を挟むように槍を掴み一気に回して右手を捻り干切る。

その槍を後ろに投げ捨て。

「文字通りダメ押しだ」

ゲシヤッ！

刺さったままのナイフを根元まで押し込んだ。

「……………」

両腕がダランと下がり、押し込んだナイフから重みが来る……どうやらコレで死んだようだ……

ナイフを抜くと糸が切れた人形のようにその場に崩れ落ちた。

「一体誰なのかを確かめるか……」

この顔の仮面外れるかな？……

カチャカチャ……カチャカチャ……バキンッ！！

あ…外れた

「というか壊れた」

まあいいか……仮面の内側を見ると機械がびっしり入っていて空気穴とかが一切なかった……

「強化武装では無いみたいだな……」

今度は中身を見ている……？

「あれ？この顔どこかで……」

つい最近見た様な……あ。

「そうか……だから戦闘機人のデータが……」

となるとかなり厄介な事に……

「他に何か無いか調べてみるか」

コンピューター生きてるかな？

「アレが派手に突っ込んだが……何とかなるだろ」

コンピューターに近づくと……

『コンピューターが破壊されました。機密保持のため破壊から15分後に施設を爆破します』

「……………レイ。アイツが現れてどの位経った？」

えっと……12分

その瞬間全速力で施設から脱出した……

「こ、こわかったあゝ」

「間髪だつたな」

施設脱出後、クロノから連絡が入り『報告は後で良いから。アースラに行つてくれ』と言われて今、アースラのレクリエーションルームに向かっている。レイも実体化している…

「施設を出た瞬間に爆発……」

「うん……」

「通路にみつちりとアレと同じ物が……」

「みつしりじゃないの？」

「あの密度はみつしりで無くみつちりだ」

あれは気持ち悪かった……

「あ、コダイ通り過ぎたよ」

「そうだった、ここがレクリエーションルームだった。確か皆少し前に来てる筈」

扉を開けると、もう任務にいたたなのは達他にリンディ、エイミイ、ユーノ、アルフ、リニス、プレシアが集まっていた……

「え………何これ」

一番先に目に入ったのは大量の豪華な食事……

「もう無いかもしれないから賑やかにしようと思って……ちなみに半分はアコース君の差し入れよ」

リンディが楽しそうに顔で言ってきた。

「賑やか過ぎるだろ」

忘年会でもするつもりか？

「ふふふっ 面白いから良いでしょ？」

「面白いなら良い」

「さて！全員そろった事だし早速始めましょう！」

パン！とリンディが手を叩き各々豪華な料理を食べ始めた……

「そういえばとーさまの犯罪事件強制襲撃隊って何なんですか？」
食事を始めて暫くしてラインがジューズを片手に俺の元にやってきた。

「あ、私も詳しく聞きたいの」

それを聞き付けたなのは達が集まって来た。

「そつだな……簡単に言えば野次馬だな」

「野次馬ですか？」

「そ、拘束とか何やらをするのに色々と許可が下りる必要があるだろ？さつき見たいに」

全員が頷く。

「だが犯罪事件強制襲撃隊……通称強襲隊は許可無しで自由に動ける、更に『同じ隊の指揮官以外の命に従わなくて良い』という特権がある」

「それってダメなんじゃないですか？」

「ライン、強襲隊は事件や犯罪を止めるので無く、文字通りに強制的に襲撃して力で叩き伏せる事。つまり許可とかは必要無い……時間に限られている場合とか、強力な組織がある場合に現場に向かい休む間もなく強襲するのが俺の所属隊だ」

「確かに聞こえは悪いけど、強力な犯罪者と戦うために部隊でのラックに制限が無いし、そのおかげで近年犯罪率が減っているのは確

かだからね」

とユーノが付けたしてくれた。

「まあ、強制的だから色々な事件や犯罪に首突っ込んでいるから上からは煙たがられているけどな」

更に俺も付けくわえた。

「やり方がメチャクチャけど、次元犯罪寸前の事件を寸前で強襲隊が止めたのは事実やしなあ」

はやてが腕を組んで何かを考え出した……

「つまり犯罪者を素早く倒しちゃう部隊って事ですか？」

「その通りだリイン。さて、コレで話は終わりだ、早く食べないと冷めるぞ？」

その言葉に約一部が食事を再開した………ちなみにレイとアルフだ。「そうだ！コダイこれ見て」

フェイトがモニターを開いて俺に見せてくる、そこに映っていたには元気な顔をしているエリオだった。

「元氣そうだな」

「そう言えばエリオって少し前までコダイ君の家に住んでいたんだよね？」

「慣れさせるためにな」

なのはが会ったのはフェイト達の家に居る時だったな……

「慣れさせるためとは？」

「色々事情があつて私と姉さんが保護者で、リンディお母さんが法的後見人になっているの。それで人に慣れて貰う為が一番の適任者のコダイに預かって貰ったの」

「成程………確かに他にはいない程の適任者だな」

シグナムの疑問にフェイトが答えると納得したように何度も頷いた。「フェイトちゃんとアリシアちゃんの専門がロストログアの私的利用とか違法研究の捜査とか、子供が巻き込まれる事が多いからなあ」

「子供が自由に未来^{ユク}を見られない世界は大人も寂しいですから」

「それが私達の仕事だから」

はやての言葉に答えるフェイトとアリシア……………

「流石だな……………流石に執務官試験を『2度』も落ちた奴は言う事が違うな」

俺は『2度』を強調して言った。

「確かに……………『2度』落ちた者の言葉は重みがあるな」

それにシグナムが乗ってきた。

「もう！コダイ、シグナム！」

「そんな事言うと写真見せてあげないよ！！！」

だって弄り易いもん……………

「し、試験の時期に私が色々心配かけたりしましたし……………」

「その所為で俺が大怪我したしな」

「ほう！！！」

なのはが胸を押さえて膝を付いた。

「確かに1度目は俺達の所為だが2度目は完璧に二人の自業自得だろ」

「『ほう！！！！』」

今度はフェイトとアリシアが胸を押さえた。

「その代わりはやてはスゲーな！上級キャリア試験一発合格だもんな！！」

「いやゝまあ、運が良かっただけやし」

ヴィータが自分の事のように嬉しそうに言ったのを聞いて、照れ臭そうにわらうはやて。

「確かにな、過去に俺が受けていた事を知って、俺に頼んだのは本当に運が良かったな」

「あははは……………」

苦笑いを返すはやて……………ん？俺の結果？試験管半殺しで不合格だけど？

「やっぱりコダイ君がいると一段と賑やかでたのしいねゝ さすがみんなのお母さん」

こっちを見てニヤニヤしているエイミィだが……………

弱点は定番を狙えbyコダイ(後書き)

メガネ「ちなみに……『DEATH NOTE』は今どれ位？」

コダイ「……………Vol.517になったばっか」

メガネ「良くそんなに集まるな……」

コダイ「生きていればそれだけ情報を積み重ねる事、これからも増えるぞ？」

メガネ「なにそれ怖い」

レイ「感謝コナッ スペリオルス様、畏無様、龍賀様、地海月様、感想ありがとうございます……！」

メガネ「スペリオルス様からはサーターアンドギーを、頂きましたありがとうございます」

コヨリ「コダイさん……すこしおはなしが」(コダイを引っ張る)

コダイ「……………ん？」(ついて行く)

メガネ「……………二人が遠くに言ったので質問に答えようと思います……！」

レイ「スペリオルス様からです……！」

質問『なのは達はコダイの子供は何人欲しいんだ？性別も一緒に答

えてくれ』

コダイ「ラバース……出来れば沢山……／＼／＼／＼」

メガネ「コダイなら実現できそうで怖いな……質問は終わり！」

コダイ「ん？なのは達来なかったか？」（戻ってきた）

メガネ「気の所為だよ」

コダイ「そうか……」

メガネ「後、活動報告にも書きましたけど今月18日にこの小説が1周年を迎えます！」

コヨリ「すごいです」

メガネ「何をするかは再び活動報告に書きます！」

レイ「皆様からの意見や感想など色々待っています！！」

コヨリ「またです」

〜次回もお楽しみにしてください！！〜

部隊はいつもこんなノリb yコダイ(前書き)

クリミナルは何時もこんなノリでやっています。

偶々シリアスが入りますがすぐシリアルになります。

部隊はいつもこんなノリbyコダイ

クロノから指定された時間も近いので宴会の途中で退席した………
チラツとはやてがお酒の様な何かを持っていたが………リンディが録
画してそうだし後で聞くか。

クリミナルの秘密の執務室に入ると、そこには………

「……………」(ゴゴゴゴゴゴゴゴ！！！)

「……………」(ガタガタガタガタ)

無言で更に笑顔で威圧しているクイントに正座してガタガタ震えて
いるサクラ、エル、アンズ………

「状況報告を求む」

「此処であの子達が喧嘩したらしくそれをクイントさんが叱ってい
たんだ……………」

ティードが簡潔に教えてくれた……………

「何だいつも通りか」

「うん…いつも通り」

「ガタガタブルブル」

レイは俺のコートの裾を握りしめて震えていた……………

「主、レイ、任務ご苦労様です」

「アイン、そっちはどうだった？」

今日はマテリアルズとここに居たんだよな。

「いつもと変わりません」

「いつもとね……………」

いつも通りか……まあ良いか。

「すまない待たせた」

「あ、クロノだ！」

レイの言葉に反応して全員クロノを見る。

「問題無い」

さて、クロノも来た所だし早速始めるか……

ユーノは無限書庫から極秘で中継してる……アレ？

「ユーノ……アースラに居るんじゃない？」

「えっと……何か嫌な予感がして……」

ユーノもか……まあ、良いか。

「皆これを見てくれ」

俺が拡大して映した映像は、あの施設でのレイに録画させた戦闘映像だった……

「何だあの未確認体は！？魔法を使っている！？」

やっぱりクロノもレイと似た反応だった……

「体系は近代ベルカだったな……アイン、ベルカに似たようなのあったか？」

「いえ……このような物は見た事ありません」

だとすると新しい技術か……

「今度はクイントとティータに質問する……あの顔に見覚えはあるか？」

と俺が指した映像には丁度、仮面をはぎ取った後の顔が映っていた。

「…………あれ？見た事ある様な…………ティータ君は？」

「俺も…………どつかで見た事があります…………えっと確か…………」

「それってコイツの事か？」

俺は二人の前にあるデータ展開した。

「あ、この人よ」

「この人は一体誰？」

クイントとティータも知っているみたいだな…

「それはその施設にあった、次元犯罪者のデータ…………詳しく言えば

『処刑』された犯罪者だ」

「はい！」

「エル…なんだ？」

「それって…………つまり死んでいるって事？」

エルが手を上げて聞いてきた。

「大分昔にな…………」

簡単に答えると、マテリアルズとレイが震えだした。

「死んでいるのに生きている…………という事はゾンビイイイイイイ

イイイイイイイイ！！！！？」

「ひうつ！！！」

「あれは幻あれは幻あれは幻あれは幻あれは幻あれは幻あれは幻アレハマボ

ロシアアレハマボロシ…………」

「……………きゆう」

エルの悲鳴に似た叫びで、驚くアンズ、そしてサクラの自己暗示の様に呟き、最後にレイの気絶……………そう言えばこいつらホラー系全然だめだった…………

「アイン…………あの四人を頼む」

「っ！！は、はい！！！」

アインは驚きながら、四人をバインドで離れた場所に運んだ……………
そう言えばこいつもダメだったな。

「その施設にも戦闘機人のデータがあった、それに全員が一度も遭遇した犬型の未確認体がその施設の近くにあった……そしてクロー
ンか本人か分らないが処刑された次元犯罪者」

これらを結び付けて考えられるのが一つ……

「管理局が『処刑』と処理した犯罪者を戦闘機人の人体に機械部品を埋め込む技術を応用して、あの犬型の未確認体と同じ事をして使
い勝手のいい武器を造り出したと言う事だな……」

「また管理局か……」

クロノが溜息をついて頭を押さえている……

「確かにあの方法なら戦闘機人の欠点の『拒絶反応』や『長期使用
における機械部分のメンテナンス』は死体を使えばそんな必要無い
から解消されるし、パーツもあの機械に近いからコストも低そうだ
な。色んな所に知恵が回るな……管理局つて」

「耳が痛いな……」

「お、同じく……」

局員として長いクロノとティードが落ち込んでいる。

「成程……確かに犯罪者の遺体を横流しして施設に運んでも、死体
の処理で済むもんね」

「その通りだユーノ、更にその手の犯罪者は決まって高ランクが多
いからコレほど鮮度の良い素材は無いという事……まさに産地直送
だな」

「ブツ……コダイうまい!!」

ユーノが嘔き出した。クロノ達も少し嘔き出している。

「さて、コダイ……これからどうする？」

クロノが少し落ち着いてから聞いてきた。そうだな……

「ユーノはこのケースが過去に事例が無いかを調べてくれ。ティ
ーダ達はアレと同じ系列の施設の調査、残りは襲撃隊として表から探
ってみる」

「要するにいつも通りだな」

「そう言う事……さて」

ソファーから腰を上げて……

「ご飯にするか？」

「……わーい！！！！！！」

子供組が目を覚ました……

「コダイ君、ちょっと良い？」

食事も終わり、クロノは仕事にアイン達は寝静まった頃、クイントに呼ばれた……

「どうした…俺に話でも？」

「ええ……まあ……」

何か歯切れの悪い返し方だった……

「チョット長くなるけど良い？」

「問題無い……紅茶でも淹れるか？」

「ありがとう」

紅茶を淹れて、俺はクイントが話す事を黙って聞いた。
簡単に纏めるとこんな感じだ。

クイントが局員だった頃に、二人の子供を養子に引き取った。その子供が戦闘機人でもクイントの遺伝子を用いて製作されたらしい……

「だから俺が戦闘機人の話をした時に黙っていたんだな」

「ええ………コダイ君はどう思う？」

「どう思うって？」

「何だ行き成り……」
「だって……さっきまでの会話がその一言で凝縮された気がして……」
「……」
そう言っただけでまた大声で笑い始めた……

ゴンッ！！

「笑うのは良いがポリウム落とせ、何時だと思ってる」
「ごめんなさい！」
頭を押さえて涙目になるクイント……
「けど……全部受け入れるって流石は幼女から人妻まで落とした天然フラグ母神！器が大きいわね」
「なんだその天然フラグ母神というのは」
「あら？ただのフラグビルダーじゃ面白くないから考えたんだけど……お母さんっぽいし」
「フラグって何だよ……あと違う……」
こんな会話が数10分続いた。

翌日、やっぱり録画していたリンディが映像を見せてくれた……
「ユーノ逃げて良かったな……」
映像を見た後の、俺の第一声である。

部隊はいつもこんなノリbyコダイ（後書き）

メガネ「コダイは『天然フラグ母神』の称号を得た！」

コダイ「消え去れ元凶」（ガンブレイズ）

メガネ「その至近距離はほんそ（ジユ……）」

コヨリ「あ、すみになりました」

コダイ「と言っかなんだフラグって………本当に意味が分らない」

コヨリ「わたしも………わかりません」

レイ「感謝コ〜ナ〜、龍賀様、畏無様、山義 芳原様、ソラト様、スペリオルス様、ポワソ様、感想ありがとうございます!!」

ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!

レイ「ふええええええええええええええええ!!」

コヨリ「なんですかアレは？」

コダイ「あれは輸送艦か?………大きさは全長62284m、全幅31142m………化物だな」

メガネ「全員退避iiiiiiiiiiiiiiiiiiii!!」

ゴオオオオオオオオオオオオオオ!!!

レイ「あぶなかつたあ〜」

メガネ「えつと……………丁度、山義 芳原様からお土産が来ました」

コヨリ「すごかったです」

コダイ「というか維持費は大丈夫なのか？という突っ込みは無しか？」

メガネ「龍賀様からはコダイには攻撃用にRPG7（反動ほぼ零＋威力3倍）をコヨリちゃんには鋼糸（30m分）をレイとメガネには龍斗の手作り紅白饅頭を。山義 芳原様からは軍用レーション八千人分と米を^{たわら}俵で五千個と野菜類や調味料と肉類と魚類を総計4万t（総計の為、個数にばらつき有り）乾麺類を2万tと航空機のSU-1救難飛行艇五機とAH-1S対地戦闘ヘリ十五機とT-3初等レシプロ練習機三十機とF-2戦闘支援機十機を。スペリオルス様からは沖縄のちんすこうを。ポワソ様からはコダイ君にはレッドタリスマン、レイちゃんにはスターネットワークス、コヨリちゃんには癒やしネコ、メガネにはリバースドル×50を。頂きましたありがとうございます！！」

コヨリ「ふにゃ〜」（癒しネコ）

コダイ「今回のシリアスか？」

メガネ「いいえシリアルです」

レイ「コダイが何言っているか分らなかった」orz

コヨリ「わたしもですっ」(癒しネコ)

メガネ「コダイが皆にお母さんと言われるだけ、器が大きいと言う事。だから幼女から人妻まで天然で落とす天然フラグ母神と言われる」(キリッ)

コダイ「言われたのは今回が最初だろ……」

メガネ「次回はからは空港火災！モチロンフラグ立てます」

コダイ「もう勝手にしろ……」

メガネ「言ったな？」(ニヤリ)

コヨリ「きもちわるいです」

レイ「皆様からの意見や感想など色々待っています!!」

「次回もお楽しみにしてください!!」

やっぱり碌な事無いな…byコダイ(前書き)

空港火災。だけどコダイは何時もの様に通常運転。
そしてコダイのフラグ立て(色んな意味で)……………

……………そっかあゝ

今の間は分つてない様だな。

あ、はやてから通信だよ！

はやて？こんな時に何だ？……………

「繋げてくれ」

OK

右腕にくっ付いてる青い菱形の宝石、レイからモニターが現れては
やてがアップで映っていた…もしかして甲冑を着てるのか？

「コダイ君大変や！」

「どうした、またシヤマルが料理していたのか？」

「そんなボケかましとる場合やない！！」

怒られた……………

「第8臨海空港で大規模火災が発生したんや！まだ中には何人も救
助者がある……………悪いんやけど、救助作業手伝つてくれへん？」

え？……………第8臨海空港？

「それは無理だ……………」

「え？もしかして今任務……………」

バゴオオオオオオオン！！

はやての言葉を遮る様に俺の近くで何かが爆発した……………

「何や！？まさかレイちゃん達ケンカしとるんか？」

「そうでは無い。実は今……………その第8臨海空港の火の海のと真ん中
に居る……………」

「……………はやてが固まってる。」

「……………って何、悠長に言つとるん！？もつと驚かんかい！！」

「いや、ここでこそ冷静になるべきだろ…あと俺の見た範囲では殆
ど逃げ切った様だが？」

幸いに入入り口から近かったからな……………

「実はまだ何人かおるんや。今なのはちゃんとフェイトちゃんが突入したから、合流して手伝ってくれへん？」

「そんなモノは首都航空部隊任せればいいだろ。今日はそっちは休暇だろ？」

「その首都航空部隊やけどな……来るのにまだ時間が掛ると……」
「……やっぱり物理的に潰すか？管理局。」

「……後、10分で来なければ俺が『死ね鈍亀』と言っていたと伝えてくれ」

「ウチがもうチヨイ偉くなったら伝えたるわ」

あ、はやてもそう思っていたんだ。

「取り敢えずグルリと見てくる」

「気を付けてな？」

はやてとの通信を切る。

「まずは……エントランスから探すか……」

道が塞がって無ければ良いが……

ドオオオオオオオオン！！

「ギリギリだったな」

行動が速かったからか、そんなに被害は少なく……爆発と炎上は何度もしたが、難なくエントランスに着いた。

と言ってもさっきの爆発で来た道が塞がった。

「コレはなのはと先に合流した方が良かったか？」

流星に救出に使える様な魔法は持ち合わせて無いしな……バリアもろくに張れないし、転移だって上手くいくかどうか……

……ぐすっ……ひっく……

……声？何処から……あそこか、天使像の近くに居る座り込んでいる短い青い髪の子供が一人……アレがスバルか？

「怪我でもしているのか？」

話して見ないと分らないのでスバルの元に向かう……

……ピキ

「この音……もしかして」

天使像を見ると徐々に亀裂が入っていく。

この壊れ方だと……あの子供に落ちる。

「そこから逃げろ、死ぬぞ！」

「ひっく……ギン姉……ギン姉え……」

パニックで聞こえないのか？

もう、天使像はスバルの方に倒れて行く……

「え？……きゃあああああああああああああああ……！」

「全く、たまに良い事すると碌な事が起きない……！」

一気に駆けだす、目標はスバルでは無くあの天使像……

「羽があるのに落ちるな」

天使像に向かい跳んで……

「浮いている……」

天使の顔を蹴り上げた。

ドコオオオオオオオオ……

「あ、やり過ぎた……」

本当は、反対側に倒すつもりが強過ぎて、天井に頭が突き刺さった

……

「まあ……本当に浮いたから良いか……ん？」

不意に、引つ張られる感覚……振りかえると、スバルが俺の服を強く掴んでいた……

「………た……」

何か言った様だが、俯いていて良く聞こえなかった。

「どうした？」

「………った」

「は？」

「怖かったよう！うえええええええええええええええええん！！！」
突然俺に抱きついて泣き始めた………確か11歳だよな？………背
が俺より少し低い程度だ………

「まあ……大丈夫だ、安心しろ」

取り敢えずお決まりのセリフを言って、頭を撫でて落ち着かせる……

少しして、泣きやむとスバルは俺から離れた。

「あの…ありがとうございます！……えっと……」
ん？……あ、名前か？

「コダイ・T・ベアトリスだ」

「ありがとうございますベアトリスさん。でもすごいね、私と同じ位の女の子なのにあんな石像を吹き飛ばすなんて……」

「そうか？……後、二つ訂正。こんな容姿でも性別は一応男で歳は15だ」

「え？……男の人で……年上？」
スバルの問いかけに頷く……

ボン！！

「あああああう！！」
スバルが行き成り爆発して両腕をジタバタ振っていた……

「ベアトリスさんは綺麗で可愛いのに男の人で、小さくて細いのに私より年上？……？……？……？」
混乱して目が回っている……

「ギン姉とあんまり変わらないのにギン姉より年上？……？……？」
良い感じに混乱している……だが。

パン！

「わっ！！」

猫だまして正気で戻す。

「落ち着いたか？」

やっぱり、偶に良い事をするとか碌な事が起きないな……………

くおまけ

天使像（under the コダイ）を破壊したのはがスバルの元に降りた。

「大丈夫？怪我は無い？」

「あ……………」

「どうしたの？もしかしてさっきのでケガしちゃった！？」

「あ、いえ……………そうではなくて……………実は天使像の下にベアトリスさんが……………」

「え？……………ベアトリスさん？」

スバルにその名前を聞いて固まるのは……………

「もしかして背がコレ位で黒くて綺麗なベアトリスさん？」

なのはが身長を計る様に自分より少し下に手を置いた

「はい、背がコレ位で黒くて綺麗なベアトリスさんです」

スバルは自分より少し上に手を置いた。

ガラガラッ……………！！

「……………」

瓦礫が崩れる音に反応して、二人が天使像だった瓦礫の山を同時に見た……………

「……………コダイくううううううん！！」

「ベアトリスさああああああん!!」

瓦礫を退かす作業に入ったのは……スバルも手伝ったのでコダ
イが見つかるのにそんなに時間は掛らなかった。

やっぱり碌な事無いな…byコダイ(後書き)

メガネ「スバルにフラグ！そしてコダイに死亡フラグ！まさにフラグ祭り！」

コダイ「慣れない事はするものじゃ無いな……」

メガネ「ちなみにスバルが抱きついたのは、見た目同年+見た目女の子だったからです！」

コダイ「背が低いしな……st sではどうなるんだ？」

メガネ「え？お前もしかして小さいの気にして……」

コダイ「背が高いと上目遣が出来ないからな……」

メガネ「そうだと思ったよチクショウ……」

レイ「感謝コナ、畏無様、White Seal様、FRE A様、龍賀様、スペリオルス様、ポワソ様、フェンリル様、感想ありがとつございます……」

メガネ「スペリオルス様からは『宇宙戦艦ヤマト』と『ガンダムW』でてきた『MDトールス』、『MDビルゴ(?)& amp;…(?)』をそれぞれ100機ずつを。ポワソ様からはコダイにはバブルローションx20とマインドリング、コヨリにはスレイヤーリングとシルドピラス、レイにはプロテクションリングとレジストリング、メガネにはマジックミストとロマネコンチx20を。フェンリル様からはコダイに鉄扇、後のマテリアルズ、クリミナル、レイ、作者、

メガネ「えつと……何でスペリオルス様の作品の『魔法少女リリカルなのはStrikers 青年と魔導師の交わり』の主人公、赤青龍士せきせいりゅうしが此処に？」

龍士「紹介ありがとう。実はお土産を贈ろうとしたら間違っ
てメガネさんの真上に送ってしまった……すまなかった！」

コダイ「謝るな、こいつがどうなるうともギャグで済むから」

メガネ「酷くね!？」

龍士「そうか」

メガネ「納得早くね!？」

龍士「それとコダイ、一つ言いたい事があった」

コダイ「何だ？」

龍士「この前にゲストに来て貰った時に言ったが。女性陣達から向
けられる照る感情には敏感になった方がいいぞ、本当に絶対面白
くなるから」

コダイ「だがそのままの方がもっと面白いと桃子とリンディが言っていたぞ？」

龍士「しまった！あの人達に教育済みだ！？」

メガネ「成す術が無いな……」

コヨリ「あの……アレは何ですか？」

メガネ「アレ？……ミラーモンスターにオルフェノクにアンデックに……なんじゃこりゃ！？」

レイ「フェンリル様のもう一つのお土産で平成ライダーの怪人だって……『へいせい』って何？」

コダイ「コッチ来てるぞ……殺るか？」

龍士「手伝うぞ」

メガネ「此処は平成ライダーで行こう！」（平成仮面ライダー変身ベルト一式を並べる）

コダイ「どっから出した」

龍士「俺も良いか？」

メガネ「モチ！……俺はこれだ！」

シュルルルルル…カチンッ！（ベルトが巻かれる）

メガネ「……………へシン！」

TURN UP

メガネ「ウェイ！」（仮面ライダー剣に変身）

龍士「なら俺は……………これにするか！」

Standing by

龍士「変身！」

Complete

龍士「よし！」（仮面ライダー555に変身）

コダイ「なら俺は……………コレにするか」

Three! Two! One!

コダイ「変身」

レイ「ワワッ！」（スカートを押さえる）

コダイ「そして確か……………宇宙、キタ
！！」

ッ！

レイ「キタ

！！」

コダイ「仮面ライダーフォーゼ！タイムン……じゃ無かった、ケンカだケンカ！」

〈ただいま男三人戦闘中〉

コヨリ「あ……おれいどうしましょうか……」

レイ「うーん……そうだ！桃子とリンディが作った『コダイの女装写真集』をスペリオルス様に送ります！」

コヨリ「ちゃんとみんなのぶんもあります」

レイ「皆様からの意見や感想など色々待っています！..」

コヨリ「バイバイです」

コダイ（フォーゼ）「ライダー……………100億ボルトブレエエエエ
エエエエイク！！！」

ズガガガガガガガガガガガガガガガ！！！！

メガネ（ブレイド）「ウエ！？」

龍士（555）「危ねえな！！俺に当たる所だつたる！！」

コダイ（フォーゼ）「痛みは心の栄養だ！！」

メガネ（ブレイド）「つかアイツ何かとり憑いて無いか？」

「次回もお楽しみにしてください」

一周年記念特別編『レイとリンの冒険』（前書き）

祝・一周年！これからも宜しくお願いします！！

レイとリンメインのお話。コダイ達が中学二年の時のお話です……
実はやりたかったけど忘れてたネタです。
初の視点変更をやってみました。

一周年記念特別編『レイとラインの冒険』

「いいか？車に気を付けるんだぞ？」

「OK アイン！」

こんな会話を玄関前でしているアインとレイ。いつもと違うのはレイが黒い猫のバック（コダイ作）を背負っている。

「あんまり寄り道はせずに真っ直ぐな？」

「ダイジョーブ！」

こうなったのは数分前、コダイが仕事が遅くなってミッドから直接学校に行くと連絡が会あった。

なので弁当を届けようと話になりアイン、レイ、サクラ、エル、アズ、エリオの6人でジャンケンをして勝った1人が弁当を届ける事になり、レイが見事に勝った。ちなみに弁当はアインが作った物だ。

「いってきまゝす！」

元気よく走って行くレイ……

「大丈夫だろうか……」

「大丈夫ですよ。地図も持たせているんですよ？」

「そうなんだが……主と同じ位の天然だからな……」

「……ああ……」

アインの溜息に何も返せないエリオだった……

「よし！ココまでは真つ直ぐだったから迷わなかった！」
レイの目の前には3方向に分れた横断歩道。

「えつとココから……」

レイはアインに貰った地図を見る……手書きだったが。かなり綺麗に分り易く書いてある。

「……漢字があつて読めない……」orz

だが、レイにはそれ以前の問題だった……

「うゆ……どうしよ……あつ！」

崩れて落ち込んでいたが、何か思ひだしたかの様に立ち上がる。

「分らなかつたら人に聞けばいいってコダイが言つてた！」

それを思い出したレイは早速人を探す。対象はコダイ達と同じ学校に行く人、つまりなのは達と同じ制服を来ている人だが……

「う……見つからにゃいよあ……どうしよ……」

今の時間帯は完全に授業時間なのでいるはずもない……

誰も見つからず泣きそうになるレイ……

「レイちゃん……！」

「ふえ？」

泣きそうな顔で後ろを振り返ると、白いウサギのバック（これも「ダイ作」を背負ったリインがコッチに向かって走っている……）
「……………リイン？」
「レイちゃん！」
「……………リイン」
さっきの泣き顔から笑顔になりリインの元に駆け寄る。
「レイちゃん」

ぎゅ〜

「わ〜い わ〜い」
抱き合ってはしゃぐレイとリイン、二人は会うたびにこうやっている。

「レイちゃんは どうしてココに居るのですか？」
「コダイにお弁当を届けるの！……………でも地図が読めないよ〜」
「奇遇ですう、リインもはやてちゃんにお弁当を届ける所ですう」
リインが言うには、今日珍しくはやてが寝坊して慌てていて弁当は作ったが鞆に入れるのを忘れてらしく、それを届ける様だ。
……………ちなみにリインはヴィータとジャンケンで勝ったらしい

「レイちゃん、地図を見せてください」
「ふえ？……………いいよ」
レイに地図を貰ったリインはじっくりとソレを見る。
「コレは……………ねーさまの字ですね……………コッチです」
ピシッ！と効果音が出そうな勢いで指をさす。

「分るの!？」
「ふふ〜ん コレでもリインは漢字が読めるのです！」
「すっごい!！」
大きな目を更に大きく見開き、目を輝かせるレイ。

実は、レイの方がリインより早く産まれたが精神年齢やユニゾンデバイスとしてはリインの方が年上である。

「では行きましようレイちゃん。あ、横断歩道は手を上げて渡りましよう」

「OK」

二人は手をつなぎ、空いてる手を上げて横断歩道を渡り学校へ向かって行った……

それを見ていた周囲の人たちはとても和んだとか……

sideコダイ

「はあ……」

面白く無い授業も半分が終わり、昼休みだと言うのにはやてがくたばっている……

「どっしたの？はやてちゃん……」

なのはがはやての肩を揺する。

「お……」

「お……」

「お弁当……忘れてもった」

「お弁当を忘れるなんてはやてらしく無いわね……」

「それがなあアリサちゃん……お弁当はちゃんと作ったんや……けど……入れるの忘れてもった」

「ドジね〜」

「うう〜」

アリサのトドメにさらに死んだ……

「……返事が無い……ただの小狸「誰がタヌキや!」……あ、生きてた……」

死んでもツツコミを入れる……流石はやてだ。

「そんなにツツコめる元気があるなら買いに行くぞ。今日はミッド直で学校だったから弁当が無いんだ」

「あ〜………」

はやての襟首を掴んで引きずり、教室を出る……

「カワイイ〜!!」

「ねえねえ!何処から来たの?!」

何か騒がしいな……この声は女子か?……

「誰かの親戚の子かな?」

「このバック可愛い〜……何処で売ってるの?」

……何だ?この女子の大群は……いくらなんでも多過ぎるだろ……

「うゆ〜!!」

「前にすすめませ〜ん!!」

……………は？

「コンッ

「アダッ!!」

思わず襟首を掴んでいた手を離してしまった…

「何すんねん!コダイ君!!」

「はやて…………アレ」

「アレ?…………へ？」

俺が指した先には…………

「うゆ〜!!」

「く、苦しいですう〜!!」

女子にもみくちやになっっているレイとリインが…………

「リイン?!!」

「何でレイも…………」

「あ、はやてちや〜ん!!」

「コダイ〜!!」

俺達に気付いた二人は、もみくちゃになっているのを振りほどき、
リインははやてに、レイを俺に抱きついて来た……

「レイ……何でここに？」

「お弁当を届けに来たんだよ！リインと一緒に！」
別に良かったのに……

「その子達って八神さんとトキガワくんの所の親戚?!」

「名前から外国人っぽいけど何処からきたの?!」

「もしかして二人の子供!？」

何か女子の群れコツチに向かっている……

「はやて、逃げるぞ」

俺達は逃げ出した……

「そやな……ってなあ?!」

しかし回り込まれてしまった……何と言つフィットワークのよせ……

…男子よりも凄い。

「囲まれたな……」

「どうすればええんやろ……」

「俺が全員殴り殺すそれは却下や」……チツ」

だったらどうするか……ん？

「いい加減にしなさいああああああああああああああああああああ

あい……!……!……!」

考える間もなくアリサがバーニングした……
その後、アリサの仕切りによって緊急質問会が行われて女子の群れは数分もしないうちに無くなった……

質問会も終わりレイとリインを連れて屋上に向かい、何時もの様に昼食を取る事に……

「あ、そう言えば二人の分は？」

俺とはやてが二人に弁当を渡された時に、思い出したようにすずかが言った……そう言えばそうだな。

「大丈夫ですう！ちゃんとリインの分もあるですう！」

リインはバツクから小さい弁当箱を取り出す。

「私もあるよ〜！」

とレイがバツクから取り出したのは、俺より大きい弁当箱……

「レイは良く食べるんだね……」

「うん……何処に入ってるんだらう……」

フェイトとアリシアが引きつっている……というかアリシアは、レイの胸を凝視している。

「コレはまだまだ少ない方だぞ？」

「嘘お!?」

驚くテストロツサ姉妹。

「嘘ついてどうする……余計な時間も喰っているし早く食べるぞ……」
まだ余裕は少しあるが。

「にやははは……そうだね、じゃあ……」

「……………いただきます!」

全員手を合わせてから、食べ始めた……ん?俺もちゃんとやってるぞ?

「おいし」

「コツチも美味しいです」

「リイン、コレ美味しいよ?あ〜ん」

「あ〜ん……美味しいですう ではリインはこれをレイちゃんにあげます!あ〜ん」

「あ〜ん……おいし」

「はあ……和む……むっちゃ和む……」

レイとリインのやり取りを見ながらお茶を飲んではやて……何歳だ貴様は。

「何?あの可愛い生き物は……そう思わない?フェイト」

「うん、姉さん……それにコダイの家にはサクラ、エル、アンズ、アインとかいるんだよね……エリオ大丈夫かな」

その点は問題無いぞ……レイは友達だと思っているし、アインとサクラ達は弟だと思っている……面白いから大半は止めないが。

……でも最近アインが『エリオが主に似てきている……フラグ的な』と言っていたな……だからフラグってなんだよ。

「アム……………ん、悪く無い」

味付けもバランスも問題無い……………だけどフライは弁当用を教えて無いからチヨットベタついてるな……………今度の休みにでも教えるか。

「くつろいでいる所悪いのだけど……………アンタ達この後レイとリインをどつするの?」

「「あ……………」」

……………その後、俺とはやては養護教諭に二人を預ける事になった……………

一周年記念特別編『レイとリインの冒険』（後書き）

メガネ「子供がいるなら学校に入るネタはやらんと損だろ！」

コダイ「その所為で俺とはやてが大変だったけど」

レイ「みんな優しくしてくれて楽しかった」

ゴン！！！

コダイ「少しは反省しろ」

レイ「うゆ〜…」

コヨリ「まあまあ……」

コダイ「反省したのならさっさと始める」

レイ「ふあい……ぐしゆ」

メガネ「ホントお母さんだな……」

レイ「感謝コ〜ナ〜 スペリオルス様、ヒロアキ141様、畏無様、フェンリル様、ソラト様、龍賀様、ポワソ様、感想ありがとうございます！」

メガネ「スペリオルス様からは『ノロイうさぎ』を。ヒロアキ141様からはゴークカイジャーのゴークカイガレオンバスター、ゴークカイガンとゴークカイサーベルとレンジャーキー全種類を、フェンリル様

からはコダイにスナイパーライフルを、メガネにはサブライダーの変身ベルト一式を、レイ達にはキーキ各種、全員に肉まんを10個づつとF22、F14、Su-37を人数分と異世界のオーロラを使えるようにしたコントローラー（ディケイドのオーロラを出せる装置で、色はタトバ色など何でもだせます）を。龍賀様からはカブトゼクターとハイパーゼクター（改良済）を。ポワソ様からは静寂の玉×50とウェーブリング、レイには女神の腕輪とクマのぬいぐるみ、コヨリには幸せの靴とイヌのぬいぐるみ、メガネには魔除けの鈴とスモークボール×50を。頂きましたありがとうございます！！」

コダイ「それにしても良く一年も持ったな」

メガネ「正直俺もビックリ……」

レイ「もう一年！」

メガネ「流石にこの小説終わっているだろ……」

コダイ「そこは作者の見せどころ」

メガネ「無理ッス……」

コヨリ「ムグムグ……ひゃいひんほふひはふうはっへひはひはへ」
（肉まん口に詰め込んで）

メガネ「通訳」

コダイ「最近特に寒くなりましたねと言っている……というか飲みこんでから言え」

コダイ「なら戦っただけだ」(サブライダーベルトを漁る)

メガネ「俺は……………よし! 『コイツ』に決めた!」

レイ「コウモリ?」

メガネ「蝙蝠モドキ……………力を貸せ!」

キバット?世「良かろう……………ガブリ!」

メガネ「っ……………ってチョットチクッてするだけだった」(仮面ライ
ダーダークキバ)

コダイ「なら俺は……………これにするか」

Change

コダイ「更にもう一枚」(仮面ライダーカリス)

Evolution

コダイ「フッ……………」(ワイルドカリス)

(突撃中……………)

キバット?世「ウェイクアップ2!」

メガネ(ダークキバ)「キングスバーストエンドオオオオオオ!
!!」(技名)「

レイ「さらにハイパーキャフトオフ!!」

Hyper Cast Off

レイ「よぉ〜し……………てえ〜い!」(ハイパーカフト)

コヨリ「よっやくおちつきました……………」(コトコトコトコト)

ガチャガチャ (ライダーベルトを漁る)

コヨリ「これにします…へんしん!」

メガネ(ダークキバ)「ちょ!?!それクウガのベルト!!!!」

コヨリ「ゴラゲサパ パダギグゼンギン リバゴソギ」(アルティ
メットクウガ黒目Ver.)

メガネ（ダークキバ）「グロンギ語?! 通訳頼む!」

コダイ（ワイルドカリス）「お前らは 私が全員 皆殺し」

メガネ（ダークキバ）「俺らも対象!？」

レイ（パイパーカブト）「み、皆様からの意見や感想など色々待っています!!!」

「次回もお楽しみにしてください!!!」

うん…そう見られるのは慣れているからロンドンダイ（前書き）

空港火災の続きです。

コダイがまた死にかけるのは決定事項。

これからどうゆづ展開にもって行く…

うん…そう見られるのは慣れているからbヨコダイ

「一回綺麗に死んだぞ」

「ご…ごめんなさい」

目を覚ますと、なのはが俺を膝枕していた……

なのはが壊した天使像の瓦礫が、後頭部に直撃、打ち所が悪くて一回死んだ。

「あ……あの大丈夫なんですか？」

「問題無い、体は頑丈だ……」

スバルがオロオロしている……

何事も無く立ち上がる。

実際大したことは無い……後頭部に綺麗に入っただけで、殆ど無傷だ。

「なのは、俺はもつと奥を探す。そいつを連れて速く逃げろ」
大分火の手が回ったしな……

クイツ！

完全に燃えない様に急いで奥へ向かおうとすると、後ろに引っ張られる感覚が。

「つと……ん？」

「ま、待って下さい！」

引っ張ったのはスバルだ……

「あの！私……お姉ちゃんと離れ離れになってそれで……！！」

スバルの姉？……と言うとギンガ？だったな。

「大丈夫だよ、きつと他の局員が助けているから……」
なのはが優しくスバルの肩に手を置く。

「でも……私、弱くて泣いてばっかだから……心配させない様にとって……絶対私の事探してるよお……」

そう言うスバルは俯いて肩を震わせ、今にも泣きそうだった………
ついでに探しに行くと言ってもスバルが離してくれない限り動けな
い、どうすれば………あ、そういえばクイントが……

「スバル」

「え？……あ」

スバルの名前を呼んで顔を上げさせる、そしてコツンと軽く額同士
を合わせた……

これはクイントが怖い夢を見たりして、泣いているサクラ達にやっ
ていた。聞いてみた所泣いている娘に良くやっていたらしい。

「あ……これ」

スバルがコートを掴んでいた手で額に触れ、少し驚いた感じでコッ
チを見ている。

「俺に任せろ、知り合いを手伝うついでに拾ってくる」

「あの……これ！」

スバルに何か聞かれる前に奥へ向かう。

………レイがすっかり話そうだから。

「そう言えば……もう首都航空部隊着いても良い頃だろう……レイ、
聞いてみてくれ」

OK リインに聞いてみる………ううゝまだ来てない見たい
「………今更現れたら一人づつ殴る」

第一何で空飛んでる奴が遅い………あれか？滑走路が無いと飛べない

し降りれない飛行機か？

コダイ、もうちょっと向こう側に魔力反応

「フェイトか？」

ちがう……もっと小さいかな？

逃げ遅れた魔導師か？

もしかしたら……

「かもな……つと」

ガァン！！

行く道を塞ぐ物を蹴り飛ばし、レイの言っていた場所に着くと。そこにいたのは魔導師では無く、数人の一般人。それを守る様に薄紫の障壁が張ってある……

……もしかしてギンガがやったのか？

ドオオオオオオオオン！！！！

すぐ近くから大きな爆発音、この魔力は……

「コダイ！？」

やっぱりフェイトだった。

「管理局です！もう大丈夫ですから」

フェイトは近くに降りて、もう一枚障壁を張った。

「このバリアは？」

「俺もさっき来たばかりだ、多分逃げ遅れた魔導師だろう」

「あの、その事なんです」

「ん？」

「実は魔導師の女の子がバリアを張ってくれて、その後妹を探すと
言っただけの方に」

と、一人が指した方は炎に包まれた更に奥だった。

「その女の子と言うのは、髪が長くて青い奴の事か？」

「はい、その子です！」

ギンガだな。

「コダイ知っているの？」

「さっきそいつの妹をなのはに渡してきたばかりだ
早めに行かないとな……自分も危ない。」

「俺は先に行く、ここは任せたぞフェイト」

「あ、ちよっと！そのままじゃ危ないよ！」

一回死んでるから大丈夫。

ここだよ！こちら辺にあのバリアと同じ魔力反応

レイはそう言うが。俺の目の前には火の海と瓦礫しか無かった。

ドオオオオオオオオオオン！！！！

「っ……何度爆発すれば気が済むんだよ」

足場が脆くなってきた……もつのか？

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！！！！！！

爆発の後、そんな音と共に地面が大きく揺れ床に罅が入っていく……

「地震か？」

おへそ隠さなきゃ！

「それは雷だろ……」

きゃああああああああああああああああ！！！！

「悲鳴……この下か」

下を覗き見ると、少し下に床が崩れて落ちていく人影…ギンガを見つけた。

「あそこか」

俺も下へ落ちる、その際に壁を強く蹴り勢いを付ける。

かなり強く蹴ったのが良かったのか、ギンガの元にすぐ追いついた。

「よし……後は着地すれば……っ！」

ギンガを抱き留めて、着地地点を探す時に見たのは。罅が入り脆くなっていた床だった……

マズいな……この勢いで着地したら崩れる……なら。

「デイレイスperl・アウト」

ウエブバンド！

俺と地面を一直線に結ぶ様にスフィアを等間隔で並べる。

「振り落とされない様にしっかり掴んでろ」

「は、はい……」

腕の中に居るギンガは俺の服を強く握った。

俺はギンガを庇う様に背中から落ちていく……

バキャン！！！！

「っ……」

配置したスフィアに近づいた瞬間、スフィアは網状のバンドになり、俺達を包むように拘束するが、未だに強度に問題があるので、勢いに耐え切れず壊れる……

バキャン！！！！バキャン！！！！バキャン！！！！バキャン！！！！バキャン！！！！

次々に展開されるバインドは壊れていきそして……

ゴシヤツ！！！！

「っ……！！！」

「きゃっ！」

床に叩き付けられて、お互いに反対側に転がっていった……

「う………何とかなるモノだな」

ウェブバインドを並べたのは、このバインドの強度で何とかなると
思っただけ……だから連続でぶつかって勢いを殺す事にした。結果
は成功……

「大丈夫！？」

ギンガがこつちに駆け寄ってきた。どうやら軽傷で済んだようだ……

「問題無い」

叩き付けられた痛みが引いたので立ち上がる。

「でも頭から血が……」

「血？……ああ、そこらへんの瓦礫で切ったのか……」

コートの袖で血を拭う。

「でも止血位はしないと！」

「そうだが、今は此処から外に出る事を考えるか」

さて……随分下まで降りたが……レジアスに地図でも貰っとけば良
かったな……

「だったらあそこ、その通路の先に非常口があるよ」

「良く知ってるな……」

「父がこの空港の地図を送ってくれたの」

ああ……そう言えば会う約束をしていた筈だな。

「さて、火に通せんぼされる前に行くか」

「そうね……えっと……君の名前……聞いて無いよね？」

「そうだな、コダイ・Ｔ・ベアトリスだ」

「え……」

名前を言った瞬間、ギンガが固まった……

「……………スイマセン！私はギンガ・ナカジマ陸士候補生です！先程はとんだ無礼を……」

「いや待て、落ち着け、俺は局員では無いから」

突然直立で敬礼をし始めたギンガ、言っておくが俺は強襲隊に所属している囑託魔導師で、正式な局員では無いからな？

「いえ！ミッド、ベルカに次ぐ第三の魔法体系『ベアトリス式』を創り。『新代の魔導師』『不死身の魔人』と呼ばれる人に……本当にすみませんでした！！」

「気にするな、そう見える容姿だと自覚しているし、さつきもお前の妹にも間違われたし」

「妹？……スバルを見たんですか！？今どこに！？」

「さつき俺が見つけて局員に渡した、もう外に出ているだろう。軽傷だがかすり傷程度だ」

「よ……よかった」

ソレ聞いて安心して、ギンガがその場でへたり込む……腰が抜けたのだろう……

「無事で良かった……本当に良かった……」

「無事だと分つたなら速く行くぞ、今度はコッチが無事になる番だしやがんでギンガと視線を合わせる……」

「良かった！良かったよう！……ヒック……グスツ……」

「抱きついて泣くって……妹ソックリ……いや、あっちが似ているのか？」

取り敢えずスバルにした様に落ち着くまで頭を撫でる事にした……

うん…そう見られるのは慣れているからb yコダイ（後書き）

コダイ「スバルとはかなり違って冷静だったな…」

メガネ「陸士候補だからね、こんな感じかな…って…後、s t s
でてくるキャラクターの性格がイマイチ掴めない…ナンバーズ
とか」

コダイ「一気に出てくるしな…」

メガネ「誰を追加するか考え中だしな…（ハーレム）」

コダイ「何にだ？」

メガネ「いずれ分る、レイ」

レイ「感謝コナ、山義、芳原様、畏無様、真王様、スペリオ
ルス様、ソラト様、龍賀様、フェンリル様、ポワソ様、感想ありが
とうございます…！」

メガネ「え？ああはい…ハンコ？サインでもいいですか？…大丈夫
ですか？…はい、ありがとうございます！」

コヨリ「なんですか？」

メガネ「さつき荷物届いたんだよ」

キイイイイイイイイイイイ…

コダイ「コツチにも荷物来たぞ？」

メガネ「よし……山義 芳原様からは大きな苺のケーキ（分り易く言うならウェディングケーキ見たいな）と超豪華客船の世界一周無料招待券5枚を。畏無様からはチョコシュークリーム全員分と収束型アルカンシエル（一発で星消滅）を約10発を。スペリオルス様からはレイにスバルのバリアジャケットを。フェンリル様からはポーションを100と、ホットケーキを人数分、コダイ、コダイラバーズ、マテリアルズに高性能カメラ（物凄く高画質かつ1キロさきの鳥もよく見える）を。ポワソ様からはコダイには霧露乾坤網、レイには太極符印、コヨリには金蛟剪、メガネには九竜神火罩を。頂きました、ありがとうございます！！！」

レイ「わあ〜カッコいい〜」（スバルのバリアジャケット）

メガネ「ちなみに俺が受け取っていたのは山義 芳原様の土産で、コダイが受け取っていたのはフェンリル様からのお土産です」

コダイ「俺の所に来たのはF14（戦闘機）だったぞ……」

メガネ「そして、今回のゲストは原作から……リインフォース・ツヴァイです」

リイン「レイちゃん」

レイ「リイン」

わ〜

レイ&pp・リイン「わ〜い わ〜い」

「コヨリ」たのしそうですね……」

レイ「コヨリもこっち〜!」

リイン「そうですね!コヨリちゃんも来るですう」

コヨリ「いいんですか?……えっと、じゃあ……」

レイ& amp・リイン& amp・コヨリ「」わ〜いわ〜いわ〜
〜い「」

メガネ「え……何この天然トリオ……」

コダイ「で……なぜリインが此処に?」

リイン「?……何ででしょう?」

コダイ「……………」(メガネをチラッ)

メガネ「えっと……実はフェンリル様からレイとリインに質問が来ているんだ」

コヨリ「さっそくこたえましょう」

レイ& amp・リイン「」は〜い!」「」

質問『学校へ行った感想は?』

リイン「楽しかったですう〜」

レイ「お菓子一杯もらったよ」

メガネ「よくロリコン男子が来なかったな……」

コダイ「話によると女子が近づくとロリコン男子をフクロにしたとか……」

メガネ「女子怖え」

コヨリ「つぎのしつもんです」

質問『どんなことをして待っていたのか？』

レイ「本読んで貰った」

リイン「お手伝いもしました」

コダイ「あ……そう言えば何時も仮病を使う生徒が突然教室に戻ったとか……」

リイン「レイちゃんと怪我をしている人に『痛い痛い飛んでけ』ってしてました！」

メガネ「……別の意味で癒されたんだな」

コダイ「反応が無かったら心配そうに上目遣い……」

メガネ「迂闊に仮病出来ねえ……な」

リイン「こわかったですう〜」（別の場所に転移で無傷）

コヨリ「……………」（2、3発掠った）

コダイ「何回死んだんだ？」（5発直撃、リバーストール未使用 + 血まみれ）

???「血の臭いを辿ってみれば……随分と血でめかし込んだお姫様がいるみたいだな」

???「アハハハハハ！！喰ラツテヤガル！！」

レイ「ふにゆ？誰？」

メガネ「龍賀様のお土産で、殺人貴と鬼巫女……コダイとコヨリにストレス解消のお土産だって」

コダイ「つまりアレか？問答無用で殺して食って犯しても良い私へのご褒美って事？」（髪と服が白になる）

リイン「とーさま!？」

メガネ「さすが元コダイ……相手の煽り方がえげつない……」(ガクガクガクガク)

レイ「あ……あっちも怖いよお」(ブルブルブル)

リン「とーさま……とーさまがあ……」(ガタガタブルブル)

殺人貴「まさに残り物には福があるとはこうゆう事だな」

殺人姫「そうね……さあ、私と一緒に遊ぼう?」

殺人貴「まいったね。その眼で誘われたら断れない」

殺人姫「さあ……来て、殺人貴」

殺人貴「ああ、行くぞ……殺人姫」

メガネ「一方は妖怪戦争で、もう一方は名前繋がりで（殺人姫と殺人貴）の対戦！？」

レイ「こわいよ〜」（ガクガクブルブル）

メガネ「つか俺…………殺人貴の性格をあんまり知らないんだが…………七夜っぽいのか？」

レイ「私にきかないで〜」

メガネ「ああ〜ゴメン…………取り敢えず五体満足でいる内に締めようか」

レイ「み、皆様からの意見や感想など色々待っています」（ガクガクブルブル）

メガネ「ヤバツ！！スペルカード使いやがった…」（逃亡）

リン「怖いですつづつづつづつづつづつづつづつ…！！」（逃亡）

レイ「きゃあああああああああ…！！」（逃亡）

〜次回もお楽しみにしてください〜

俺は悪く無い……いや、オレは悪くねえっ！！byコダイ（前書き）

空港火災はこれで終わりです……さてどうしよう。

俺は悪く無い……いや、オレは悪くねえっ!! byコダイ

少しして落ち着いたギンガに案内されて非常口に辿り着い屋のは良
いが……

「崩れているな」

「崩れてますね」

非常口の扉は瓦礫によって塞がれていた……

「良く見たら扉も変形している」

「そうなんですか?」

アレじゃあ扉として機能しないな……

「……このほかに非常口は?」

「ありますけど……此処から遠いですよ?」

間に合わないな……

「救助を待ちますか?」

「ギンガに会う少し前に連絡を取ったが望みは薄いぞ?」

火災が起きて結構経つ……速く逃げるか。

「仕方がない、壊すか……レイ」

バニシングバスター!!

ドオオオオオオオオン!!

右拳から放たれた虹色の砲撃は扉に直撃し、瓦礫をブチ撒けたが、
肝心の扉には一切変化が無かった。

「流石非常用……頑丈だな」

うーん……ディ・レント・フォーは

「俺達死ぬだろう……」

「何ですかそれ?」

「ん?……簡単に言えば魔力素や魔法を触れた傍から吸収する超巨
大のスフィアを頭上から落とす魔法、バリアでガード不可、範囲が

とうよ」

「助けた…と言えるか微妙だけどな」

瓦礫の下敷きになって死んだし、高い所から落ちて死にかけたし……

「……… やつと来やがった……」

ゲンヤが空を見ながら呟く。俺も空を見ると幾つもの光………アレは首都航空部隊……… やつと来たか。

「さて、俺も行くか………」

「お？救助を手伝うのか？」

「いや……… 今更やってきた奴に出番は無い……… 早急に退場して貰う………」

第一俺が救助なんてしたらもう一回死ぬ、確実に。

レイを起動して、飛んでいる首都航空部隊に向かう………

首都航空部隊の奴らを全員殴りに飛ばしても、俺は悪くないと思う……… だって遅いもん。

俺は悪く無い……いや、オレは悪くねえっ！！byコダイ（後書き）

メガネ「空港火災編終了！これから先は少し更新が遅れそうです」

コダイ「ここから本格的なオリジナルか……」

レイ「コダイはやっぱりロストロギアを取り込むの？」

コダイ「なんだそのやっぱりとは……」

メガネ「それ位取り込んでいるだろうが」

コダイ「させたのは貴様だけだな」

メガネ「気にしたら負けだ」

コヨリ「しゅじんこうほせいです」

コダイ「どっから覚えた……」

レイ「感謝コナ、スペリオルス様、畏無様、山義 芳原様、龍賀様、ポワソ様、感想ありがとうございます！！」

メガネ「スペリオルス様からは野球セットを。畏無様からは出来立て醤油ラーメンとバイオでお馴染みの追跡者10体を。山義 芳原様からはシャルンホルスト級巡洋戦艦とレストランの招待券を二枚、ナス服とローゼンメイデンの第一ドールの服を。ポワソ様からはコダイにディメンジョン・スリップ、レイに転換の杖×50、コヨリに聖杖ミスティック・ワイザー、メガネに咎人の剣”神を斬獲せ

し者”、トキガワ家の皆さんに七色の飴玉×1000を。頂きました、ありがとうございます!!」

コヨリ「ハフハフ……ところで…あの、あなたはなんですか？チュルチュル」（ラーメン食べながら）

メガネ「ん？……ああ、山義 芳原様から来たお土産が空中投下された後だよ」（ラーメン食べながら）

コダイ「それもかなり上からな…」（ラーメン食ry）

レイ「フウフウ……あちゅっ!!」

コダイ「ほら……小鉢に移して冷ましてから食べる」

レイ「ありがとう〜!」

コダイ「所でお土産であった追跡者とは何だ？スパイの一種か？」

メガネ「えっと……目標を死ぬまで追っかけて殺すバイオ3に出てくる敵だな」

コダイ「ハタ迷惑だな……でどんな奴だ？」

メガネ「全体的に黒っぽくて紫っぽくて大きい？」

コヨリ「もしかしてアレですか？」

追跡者×10「スタアアアアアアアズ……………」(ロケラン装
備)

メガネ「まさかそっち!？」

コダイ「頭飛ばせば良いだろ」(ベレッタ)

メガネ「ハンドガンじゃ無理だって……………せめてクレネードランチヤ
ーの冷凍弾があれば……………」

コダイ「冷気に弱いのか……………液体窒素でも持ってくればよかったな
……………」

「ヨリ」「こおりじゃだめですか?」

メガネ「流石に無理だろ……………」

レイ「じゃあ……………えい!」

レイ「追い掛けられるよ?」

コダイ「誘って溶鉱炉に落とせば良いだろ」(逃げる)

メガネ「だな……………」(逃げる)

レイ「皆様の意見や感想などイロイロまっています」(にげる)

コヨリ「バイバイです」(にげる)

次回もお楽しみにしてください

この容姿は結構役に立つboyコダイ(前書き)

The Striker編はシリアス大目に……なるかもしれませ
ん。

ggdgdでスイマセン!!

この容姿は結構役に立つboyコダイ

あの火災から二日後……

「どうしてこうなった」

俺は約二週間の謹慎を喰らっている……

「……応援に来た首都航空部隊を一人残らず殴り飛ばすから（です）」

「……」

「だって……アイツら遅すぎたんだ……大義名分で……ほら、俺第

一被害者だし」

「いや、流石にそれは無理あると思うわ……」

「確かに遅すぎるけど……全員殴り飛ばすのがマズかったんじゃない？」

「……ですが病院送りが5名だけで済んだのは不幸中の幸いと言ったところでしょうか……」

あの時の空港火災の事でクイント、ティータ、アインから総ツッコミを受けている……

「え……何これ？俺悪者」

「お前は根っからの悪^{ヒール}だろ」

「ああ……そうだ忘れてたよティータ……」

俺悪党だった……犯罪者^{クリミナル}だった……

「だって管理局がやっている事見ていると何かコツチのやっている事がなんか……ね」

「確かにそうね……アレから随分と違法研究所を破壊しているのに一向に収まらないし」

「あの未確認体も気になりますね……後黒幕も」

「確かに……クイントが言っていた研究所はまだ末端と言いつし、ティータの言っていた未確認体もアレから頻度は少ないが遭遇する事があった」

第一に目的がな……戦力を増やすと言うならあの機械を使うだけで

良い、AMFもあるし死体を使う理由が無い……人間いや、死体を使う事に意味があるのか？逆に死体を使う理由……死者を蘇らす？

となると……『誰』を？

「全然わからないな……」

「コダイ君の『シード』を使っても？」

「新し過ぎるからそれらしい情報が無い……」

無限書庫もそれと同じ理由で情報が見つからないらしいし……

「無い物を探しても意味無いか……」

ソファアから立ちあがり、扉に向かう……

「主、どこに行くのですか？」

「買い出し」

そろそろ冷蔵庫の中身が……

「えっと……あとはコレとアレを買えば良いかな……あ、アレも切らしていたっけ……」

紙袋を抱えて店を出る……

「えっと……この三つはあそこで纏めて買ったよな？」

紙袋を片手で抱えて残った手で指折り数える。

「コダイ！私持つ、私持つ！」

グイグイとコートを引つ張るレイ……いつの間に実体化した？

「大丈夫だ、それにレイには重すぎる」

紙袋自体大きいからレイが持つと前が塞がる……

「持つ〜！も〜っの〜！」

更にコートを掴んで駄々をこねる……前はこんな事しなかったのに……

……あ。

「もしかして手伝いたいのか？」

「ふえ！？……うん」

驚いた拍子にコートを掴んでいた手を離し、その後小さく頷いた……

「アインが……嬉しそうにコダイのお手伝いをしているからチョッ

ト……うらやましいなあ……って」

人差し指同士を突き合わせて、頬を赤くして上目遣いでコッチを見
てくる……

確かに……もうレイは人間で言う6歳だからな、見た目相応になっ
ているし……そうだな……

「じゃあハイ」

「わわわっ！」

レイに紙袋を待たせて、レイから少し離れた向こう側に立った。

「それを持って、此処までコレたら手伝わせてやる」

割れて困る物が入って無いから大丈夫だろ……

「ホントに！？よ〜し……うんしょっ……おっととと」

レイは紙袋をしっかり前で抱えて、ゆっくり歩き出すが、少しよろ
めいた……

「とととと……っしょっ……うんしょっ……うんしょっ……」

それを持ちこたえて、ゆっくりと歩き出す……よし、後半分だ。

道は真っ直ぐだし迷わないだろう……

「うんしょっ……うんしょっ……あぁっ！？」

レイの体が前に大きく倒れる……良く見たら足元に石が……コレで
転んだのか。

「よっと」

倒れそうになるレイを受け止める……

「惜しかったな」

「ううゝなかみがあゝ」

レイが今にも泣きそうだな。倒れそうな時に受け止めたのはレイだけだったから、紙袋の中身がぶちまけられている……

「大丈夫だ、幸いにも低い位置で落ちたから壊れた物は一つも無い。ほら、拾うのを『手伝って』くれ」

わざと『手伝って』の部分強調する……

「手伝って？……うん！……頑張る！！」

さつきまでとは一変笑顔になったレイはテキパキと落ちた物を拾って袋に入れていく。俺も周りのだけ入れとくか……

「……コレと……コレ……あれ？一個足りない」

リンゴが一個足りない……周りには無いし……レイの方か？

「あの……もしかしてコレか？」

声が出た方に振り向くと、青年……同年代か？それ位の男がリンゴを持ってコツチに差し出してきた。

「多分そうかも、ありがとう」

リンゴを貰い、袋に入れる。

「全部拾ったよゝ！」

遠くに落ちていた物を全部抱えて来たレイ。

「じゃあ此処に全部入れて」

「はい！」

……よし、確かに全部だね。

「手伝ってくれてありがとう、レイ」

「えへへゝ」

「この子レイって言うんだ？」

「ふにゆ？この人だれ？」

「手伝つてくれた人だ」

「そうなの？えっと……ありがとうございます！……」
レイがさっきの男にペコリと頭を下げる。

「気にしなくていいさ、お兄さんの手伝いして偉いね」
その男がレイの頭を撫でた。

「ふにゆ」

「じゃあ、俺はコレで」

男がその場を去ろうとする……っと

「その前に一つ聞きたい」

「え？……一体な……」

ヒュン！！

俺はその青年に向かって、逆手に持ったスローナイフを振った。

「ッ！」

だが紙一重でかわされた……

「貴様は何者だ」

「え……一体何を言っている！？」

「……何故俺が『男』と分った」

こいつはさっき俺の事を『お兄さん』と言った……まずあり得ない事だ。

「喋り方は男も女も使うが、一人称を使ったのはさっきの一回だ……」

「行き成りなんだよ！俺達は初対面だろ！」

「初対面だからあり得ない……初対面の人間は確実に俺を女だと勘違いする……名前は一応知られているがそれでも正確に性別を知っている奴はマズいない……」

なのは達以外で知っているのはとアースラクルー達と三提督とか…

…数える位だ…

「それを前に置いてもう一度聞く…」

俺はもう一度スローナイフを持ち男に突き付ける…

「貴様は… 一体何者だ」

その瞬間…

「やっぱり隠せないか」

空気が一変した…

この容姿は結構役に立つboyコダイ（後書き）

メガネ「本当にgood goodでスイマセン」（土下座）

コダイ「遅いんだよ」

メガネ「結構苦労したんだよ!」

コダイ「ギャグで落とすか否かでな……」

コヨリ「さすがにこれはギャグオチはむりですね」

メガネ「まあ……分つてたけどね」

レイ「感謝コ〜ナ〜、畏無様、漆黒の墮天使様、スペリオルス様、ポワソ様、感想ありがとうございます!!」

メガネ「畏無様からは鰻重と音が死ぬ程痛く聞こえるのに、全く痛くない弾入りの狙撃者（サイレンサー付&ステルス）を。漆黒の墮天使様からは魔法少女まどかマギカの魔法少女達のコスプレとコダイには英雄王の武器+鎧を、メガネにはゲートオブパピロンと無限の剣製を。スペリオルス様からは『ターミネーター3』の『T-X』を10体を。ポワソ様からはラヴァースを含めた皆にアップルパイ×20、シヨコラーデ×20、スイートパイ×20、ミスティカティー×20を、頂きましたありがとうございます!!」

ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!

メガネ「早速、漆黒の墮天使様のお土産のゲートオブバビロンに無限の剣製来た　　！」

コダイ「今の内に逃げるか」

レイ&コヨリ「うん！」（鰻重を食べながら）

メガネ「助けるやあああああああああ！……！」

ピチューン！

メガネ「……………」

コダイ「…………返事が無い、ただの屍の「生きてるっての！！」ちっ……」

メガネ「全く…………最近東方やってたからやられ方がソレになった」

コダイ「しかしこの調子で大丈夫なのか？」

メガネ「なんとか…………今後の展開も考えているし」

コダイ「……………本当に大丈夫だろうな」

メガネ「……………」

コダイ「黙んなよ」

メガネ「……………アレ？レイとコヨリは？」

コダイ「（無視か）……………逃げる途中にアレに捕まった」

メガネ「アレ？」

レイ「うゆ〜！」

コヨリ「はなしてください〜い〜！」

メガネ「ああ……………スペリオルス様のお土産の『ターミネーター3』の『T-X』を10体……………かわいいもの見つけると無表情のまま追っかけて、捕まえると無表情のまま延々とほおずりし続ける改造をされた……………つて!？」

コダイ「ん？」（マミの服）

メガネ「二重の意味で死亡フラグを!？」

コダイ「心配するな貴様もだ」

メガネ「っていつの間に?!」（以前貰った八雲藍の服）

タッタッタッタッタッタッタッタッタッタッタッタッタ
タッタツ（全力疾走）

メガネ「って女装なのに6体コツチ来た!？」

コダイ「念の為にメイクした……女装はオシャレだ」

メガネ「うわコレ誰!？て言うかメチャクチャ速っ!？」（鏡を見ながら逃亡）

コダイ「残りの四体は代わりばんこでレイとコヨリを頼ずりしている」（逃亡）

メガネ「皆様からの意見や感想など色々待っています!！」

コダイ「こんな状況で良く言えるな……」

メガネ「現実逃避だよ!！無表情で追っかけて来てムチャ怖え!！」

ある意味最悪の相手boyコタイ(前書き)

最近一話一話が短い………

の爆発を起こした。

「壊れて爆発だから……コレはむしろ暴発に近いな……」
近くの建物の屋上から広がる爆炎を見下ろす……

「レイ、今の内に戻れ……ついでにアインに連絡だ」

「うん！」

レイが右腕の宝石の中に戻った。

「切れた？……スローナイフはかなり頑丈な設定だ、切れる事はまず無い……」

アレは一番最初に考えた魔法だ……間違っても変なやり方はしない筈……考えられるのは一つ……あの男が指さしたと同時に俺のスローナイフを切った……どうやって……？

「今のがベアトリス式……かなりの威力だな」

「噂をすれば……か」

声に振り向くとあの男が何事も無く立っていた。

……無傷？いや待ておかしいぞ？

スローナイフの威力は大の男を気絶させる程度だぞ、なのに傷一つ無い……恐ろしく頑丈なのか？

「言っておくがそれは俺の魔法の中でも最弱の威力だ……」

「だろうな……お前がそんな奴で無い事は分っている……」

手品のタネは本人に聞いた方が速いか……

「まあ……一応『仕事』だから言っておくかな……時空管理局だ、貴様を怪しい容疑で抹殺する」

なんか違う気が……

レイのツツコミを無視して。それと同時にスローナイフを数本投げ放つ。

「成程……複数同時に放てるのか。頑丈さもさっきので分ったし、おまけに爆発もする……結構やっかいだな」

ドオオオオン！！ドオオオオオン！！ドオオオオオン！！ド
オオオオオン！！ドオオオオオン！！ドオオオオオン！！

スローナイフが俺と男の中心で全部爆発した……今度は何もしない
で……

複数同時に切れるみたいだな。

「今度はコツチの番だ」

男が俺を指す……

カツ！……

小さな音が男の足元から聞こえた……

ガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガ！！！！

！！

少し間を置いて地面を小さく細く割れる跡が、コツチに向かって一
直線に走ってくる。

「迎え撃つだけだ」

バニシングバスター！！

スパアツ！！

ふえ！？

砲撃と男の攻撃がぶつかったのは一瞬、後は砲撃を真つ二つに裂きながらコツチに向かつてくる。

「砲撃にしては中々速いな……」

「砲撃もかよ……」

横に飛んで次に備える……

ズウウウウウウウン！！！！

その直後、物凄い地鳴りと共に大きく揺れた……

「っ……今度は何だ」

コダイ後ろ！

「後ろ？……なんだコレは」

振り返った時に見たものは……

向こう側の建物が縦に裂かれて崩れている光景だった……

何アレ！？爆発したの！？

「……いや、それにしても規模が小さい……恐らく」

アイツが放った攻撃の跡を見る、それは真つ直ぐ……屋上の端で途切れているが向こう側の建物まで結んでいる。

「俺のかわした攻撃がそのまま向こうまで跳んで建物を破壊した……そうだろ？」

今度は男の方を見る。

「……流石、その通りだ。だが……攻撃の正体まで説明するつもりは無い。お前の頭脳なら分るだろうしな」

「誘いに乗ったのが失敗だったようだ……」

え？……あゝ！！

俺があつた男をだと思つて刺したのは……

「何でここに未確認体が居るんだよ……」

アレ以来時々見かけるあの未確認体だった……

「それは俺達の所で作ったからだ」

何処からかあの男の声が響いた……

ど……どこ？！

「……そこだ」

ズガアアアアン！！！！

気配がした方に振り向きざまスローナイフを投げたがまた途中で爆破された。

「それはお前ら管理局が度々見かけるレリックを運ぶ機械、『ガジエツト』の同パーツを多く使用している」

男はそんな事も気にする事無く話し続けた……

「生物と機械の混合兵器……いふなれば『生体ガジエツト』だ」

「生体ガジエツトね……わざわざ教えてくれてありがとう」

ありがとうございます！

「礼はいいさ、コッチの作戦が成功したからそのお礼だ」

「……お礼ついでにその作戦の一部始終を教えては……くれないか」
「当たり前だ……迎えも来たようだしな」

男の隣にミッドの魔法陣が展開しそこから一人の女が現れた……

「お疲れ様」

「大して疲れては無い……」

……ああ、成程、俺は囿に嵌った訳か……

「アレはあつたのか？」

「コレよ」

女が男に何かを渡していた……金属見たいな感じだな……

「レイ……ついでにアレと撮っておけ」

OK

「……あら？ねえこの子は？」

念話を使ったからか、ようやく俺に気付いた女……

「ああ……『アイツ』だよ」

「へえ……『アイツ』ねえ……」

二人がコツチを見据える……こいつもだ、この女もあの男と同じ雰
囲気を纏っている。

「……さて、今日はこの辺で帰るか」

男がベルカの魔法陣を展開した。

「はあい、一応自己紹介ね。私の名前は『コツチでは』ターエン……
……じゃあまた今度ね」

女……ターエンはそう言つてどこかに転移して行つた……

「俺も名乗つて置くか……俺は『コツチでも』アスカだ」

「コツチでも？」

偽名か？……それともただ名前が複数あるのか？

「それともう一つ……今回は挨拶代わりだ」

そう言つて男……アスカは自分の左肩を指して、そのまま転移して
行つた……

「そうですね……………主の方は？」

「時間稼ぎに遊ばれて、その後仲間と合流して消えたよ……………追っても無駄だな」

しかし……………あの二人は一体何だ？妙な雰囲気にあの去り際の言葉

……………『コッチ』とはなんだ？

「ターエンと……………アスカ」

あの二人の名前をふと呟く……………『コッチでは』……………『コッチでも』……………アスカ？

「まさかアイツ……………」

ブシャアアアアアアアア！！！！

突然左肩から勢いよく血が吹き出た……………

「主！？」

「この場所は……………」

『今回は挨拶代わりだ』

さっきアスカが行った事を思い出す……………いつの間に切ったんだよ……………

「成程……………だからか」

失血で意識が遠のきその場に倒れ込む……………

「……………るじ……………！……………あ……………」

アインの声が遠くに聞こえる……………

「最悪……………本当に最悪よ……………こんなことって……………」

あの二人は……………

前の世界で私が殺した人間だ……

ある意味最悪の相手byコダイ（後書き）

コダイ「まさかのこのパターンは予想しなかった」

メガネ「コダイに恨みがある奴は前の世界の人間しか無いな〜って」

コダイ「……………多過ぎて困る」

レイ「何のお話？」

コダイ「何でも無いから勧めてくれ…………」

レイ「感謝コ〜ナ〜、アナザー様、スペリオルス様、畏無様、ソラト様、山義 芳原様、ポワソ様、七夜士郎様、龍賀様、感想ありがとっございます!!」

メガネ「アナザー様からはコダイとメガネにモンハンの『元気ドリ
ンコ』それぞれに十本と「お疲れさん。やすんどけよ?」とリンド
ウさんからの手紙を、榊とジェイルからコダイ、レイ、コヨリ、そ
れぞれにアラガミ『ヴァジュラ』『カリギユラ』『ハンニバル』の
喋って動くもふもふ人形とのほんさんからポケモンの『リオル』
『ピカチュウ』『プリン』のもふもふパジャマを。スペリオルス様
からは『恋姫無双』の関羽の衣装と鬘と武器のセット。畏無様から
は『東方』の咲夜さんとスカーレット姉妹に、最後は『なのは』の
ザフィーラの着ぐるみを。山義 芳原様からは?号戦車D型500
両と?号戦車E型とH型を1000両、?号戦車1500両、28
0mm列車砲七両、装甲列車八両編成十四組、某?な氷精の服と、
某パラッチ天狗の服を。ポワソ様からはコダイには斬妖剣、レイ
には賢者の石、コヨリにはエルメキア・ブレード、メガネには餓骨

杖を。頂きましたありがとうございます!!」

コヨリ「このくるまのあとはなんですか?」(リオルの着ぐるみ)

メガネ「山義 芳原様のお土産が送られた跡」

コダイ「直接運送の他にレールを作りながらの軍用列車での運送だったからかなり時間かかったぞ」(関羽の衣装)

レイ「見たかった!!」(プリンを着ぐるみ)

コダイ「お前それ着て熟睡だったろ……」

????「ターゲット………メガネ確認」

メガネ「え?………なにあのメツサチャージ中なウィングガンダム
ゼロカスは?!ヒイロさん!?!」

レイ「アナザー様のお土産だよ!」

コヨリ「どうしましょう………きょうはゲストきますのに」

コダイ「仕方ない……止めてくる」(ウイングガンダムに向かって飛ぶ……)

コダイ「お兄ちゃん、頭冷やすなの」(CV・魔王)

ヒロ(CV・魔王の兄)「な……なのは？」

「暫くお待ちください」

コダイ「よし……大人しく去ってくれたしコレで良いだろ」

メガネ&レイ&ヨリ(見なかった事にしよう)(う)(う)(う)(う)

シュン!!

????「此処に来るのも久しぶりだな……」

????「あ！三人とも可愛い〜！」

メガネ「今回のゲストはアナザー様の作品で『バカとテストとアノ人達』の主人公の神崎リュウトとヒロインの一人、シャルロット・デュノアです！」

リュウト「そう言えば前は召喚獣だったな。改めて初めまして」

シャルロット「僕は本当にはじめましてだね」

レイ「レイ・モモ・ブラッドです！」（カリギュラのもふもふ人形を抱きしめる）

「コヨリ」「コヨリです……」（ハンニバルのもふもふ人形を抱きしめる）

シャルロット「可愛い〜！似合ってるよ！」（レイとコヨリに抱きつく）

レイ「こゆ〜」

「コヨリ」「」

リュウト「というか何でお前は女装なんだよ」

コダイ「女装はオシャレだ」

リュウト「秀吉と良い何でお前ら普通に女装出来るんだよ……」

コダイ「リュウちゃんなら分る筈だ。第四の性別何だろ？」

リュウト「……………コイツモギセンカンケイナクコロシテモイイカ？」

(赤の腕輪に触れる)

シャルロット「お、落ち着いて!!」

コダイ「模擬戦？何の事だ？」

リュウト「ああ、これか？実はツバキさんからこんな物を渡されてな……………」

『神崎リュウトに命令。今よりメガネの所へ行き後書きにてトキカワコダイと模擬戦を五分間して来い。銃などの武装攻撃限定だ』

コダイ「成程……………ただでは面白くないから何か賭けるか」

リュウト「止めてくれ！お前の場合碌でもない事になりそうだから」

シャルロット「そ、そうだよ！普通に模擬戦すればいいんだからね！？」

コダイ「……………ここにプレシア印の変身薬がある……………負けたらコシを飲んで子供になるでどうだ？」(『デート・プレシア編』等を参照)

シャルロット「コダイ頑張って!!（小さい頃のリュウトが見れる!!）」

リュウト「シャルウウウウウウウウ?!!」

メガネ「速攻で逃げ場無くしたな」

コヨリ「きたない…さすがゲドウきたない」

コダイ「心配するな…効果は一日。勝てばいいんだ…始めるぞ」

リュウト「おい!女装のままか!?!」

コダイ「コツチの方が動きやすい…さてどっちが子供になるか…」

リュウト「絶対俺は飲まないからな!!さっさと始めるぞ!!」

コダイ「ではこちらから行かせてもらおう」

メガネ「さて俺達は避難するか」

シャルロット「そうだね。行こうレイちゃん、コヨリちゃん（二人の手をつなぐ）」

レイ&コヨリ「ハッイ」

メガネ「時間は五分だっけ?タイマーでもセットしておくか」

コダイ「……………」

ヒュンー！

リュウト「っと……………良くそんな細い腕でこんな力が出るな」

コダイ「受けといて良く言っ……………今で顎をはね上げたつもりだったかな」

リュウト「顎は常に気を付けているさ。今度はコツチの番だ」

ブウンッ！

コダイ「ッ……………」

ドコオッ！……！

メガネ「コダイが派手に吹っ飛んだ！！」

「ヨリ」すごいです……」（シャルロットに頭を撫でられている）

メガネ「でも何かリュウト悔しそうだな……」

シャルロット「咄嗟に腕でガード、さらに蹴られたと同時に自分も飛んでダメージを軽減したんだよ」（レイを膝に乗せて）

メガネ「何で膝の上にレイを？」

シャルロット「可愛いから！」

「ヨリ」つぎ、わたしです」

レイ「どっちもがんばれ」

「ダイ」っ……………！！」

「ユン」！

リュウト「低い……足払い！？」

タンッ！

コダイ「跳んだ……掛った」

クン！

リュウト「フェイント?! やべえ!」

ドコオ!!

コダイ「っ……腕に挟まれた」

リュウト「ちっ……そのまま伏せてる!」

ゴウッ!!

コダイ「だが断る」

コロコロ

リュウト「クソ……ただでさえ小さいのにしゃがむな! 当たらないだろ!」

コダイ「世の中大きければ良いと言うモノでは無いだろ……」

シャルロット「そうだよね!!大きければ良いものじゃないよね!
!」(コヨリを膝の上に)

コヨリ「どうしたんですか?」

メガネ「触れてやるな……ライバルがデカイ(色んな意味で)って
事だ」

コヨリ「そうですか」

レイ「だいじょくぶ?」

シャルロット「大丈夫だよレイちゃ……………」(レイのある一点を凝
視)

ピシッ!!

レイ「うにゅ?」(歳不相応の特盛り)

シャルロット「……………」

メガネ「…………復活するまで放っておこうか」

コヨリ「あ、もう少しで5分です」

メガネ「そうか、秒読み行くか…………5…………4…………3…………2…………1…………」

ピカアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!

「コヨリ「みえませんがおとがはげしくなっています」

シャルロット「二人とも！！もう終わりだよー！！！」

（数十分後……）（観客側が回復するまで）

リュウト「決着つかなかったな」（無傷）

コダイ「まあ5分だけだしな」（無傷）

メガネ「あんな派手な音して無傷かよ……」

シャルロット「もしコダイが魔法使ったらどうなるんだろう？」

メガネ「100%負ける。コダイは魔導師としてなら最弱に近いから」

シャルロット「そっか………そうだ！？賭けは！？」

リュウト「引き分けだからそんなもの無しだ！！」

シャルロット「そっか………」（シュン）

リュウト「なんでそんなに寂しそうなんだよ……」

コダイ「しかしこのパジャマ着心地良いな」（ピカチュウのもふもふパジャマ）

リュウト「いつの間に!？」

シャルロット「似合ってる似合ってる。可愛いよ」（コダイをナデナデ）

リュウト「ああ……シャル、悪いがそろそろ結果を報告しないといけないから」

シャルロット「そっか……じゃあね、レイちゃん、コヨリちゃん」

レイ「バイバイ」

コヨリ「また今度です」

コダイ「あ、シャルロット、コッチ来てくれ」

シャルロット「?……どうしたの?」

コダイ「お土産の今回のパジャマを着て、ぬいぐるみを抱きしめた写真数枚に……コレだ」

シャルロット「いつの間になってえ?……メモ帳?」

コダイ「プレシア印のアノ変身薬のレシピだ、どっか腕の立つ『科学者』にでも渡したらどうだ?後、その見本にその現物も」

シャルロット「……………ありがとうございます！！」（サムズアップ）

コダイ「面白ければそれでいい」（サムズアップ）

リュウト「おーい！早くしろー！」

シャルロット「あ、待ってよー！！」

シユン！！

メガネ「お前一体何を渡したんだ？」

コダイ「いつも通り……………」

メガネ「お前の何時もは碌でもないだろ……………」

レイ「皆様からの意見や感想など色々待っています！！」

コヨリ「みなさんバイバイです」

「次回もお楽しみにしてください」

え？俺ってそう言う認識？……b yコダイ（前書き）

ジュエルシード20個（レイを除く）……闇の書……後コダイは
何個取り込むのだろう？……

え？俺ってそう言う認識？……byコダイ

アスカ……………確かにアイツは俺の前の世界の人間だ……………しかし何故今になってこの世界に転生したんだ？アイツの言葉からするにまだターエン以外にも俺が殺した転生者がいる事は確かだな……………

数はどのくらいだ？……………まさか殺したの全員は無いだろさすがにあの女神ロリショタコンが気づく、約1億人だからな……………それにあの金属は見た所あの金属しかないか……………

……………問題はあの攻撃だ。見えないし気配も無い……………魔法の類では無いらしい、それに挙動からもどんな攻撃かも予測できない……………それに一番の問題はあの未確認…生体ガジェットがあつちで作られたとなると先にこつちを何とかしないと……………

「問題は山積みだな……………」

そう呟きながらアースラの廊下をクロノと歩く……………あの日から翌日の事である。

「なあコダイ……………お前確か謹慎中だったよな？」

「ああ……………もみ消した……………」

「おい待て外道……………」

「今回の件は俺が被害者なのと首都航空隊が遅かったのその後、上の弱味を少々……………」

「成程……………手に持っている『DEATH NOTE』に少々と言う所に物凄い疑問があるが……………」

「気にしたら駄目だ……………」

「しかしその怪我で大丈夫なのか？聞いた所だとかかなり深いと聞いたぞ……………」

「物凄い鋭い刃物で切られて様に深い……………それに傷口が変色しているから治るのに時間が掛かりそうだ……………」

これと似た様なのが後何人も居ると考えると考えると正直面倒くさいな……………間に分かりやすいシグナム並みに戦闘バカを挟んでくれない……………」

と……

「そつちの方はどうなんだ？」

「かなり深刻だな…… 負傷者と言う訳で無く襲われた場所だ……」

「バレたら危険な所か？」

「ロストロギアの保管庫だ…… かなりのロストロギアを盗まれた」

「いろんな意味で危険だなそれは……」

ロストロギアの中には管理局が改造した物もあるしな…… それに管理局を襲ってロストロギアを奪うとはな……

「犯人は恐らく最低でもSランク以上はあると考えて、今回の部隊を編成した……」

アイツらSランク以上か、つまり俺達と同じ…… 実戦経験の多さから見て、辛く見てもSSSは有りそうだな……

この世界に来たととなると当然魔法も持っている…… だとすると前の様には行かないか……

「クロノ…… その犯人とは俺が戦う」

「勝てるのか？……」

「やって見なくては分からない。どうやら、恨みを売っていた様だから釣りを返してくる」

一度は殺したが、今度はしっかりと欠片も残さない……

「…… 僕的には『ようやく買ったか』という気持ちの方が強いけど」

「悪い事しかしてないからな……」

お、もう着いたか……

「わい わい」

居ないと思ったらここに居たよあの小娘……

アイン、サクラ、エル、アンズもいるし……え？俺もしかして最後？
「まだ時間があるから他の人と話して来い」

そう言うとクロノはリンディの元に向かって言った。他の人って言うても……

「と言うか見知った顔しかないな……」

なのはやフェイト、アリシア、はやてにヴォルケンス……エースが多すぎるだろう。

「あ、コダイ君！」

「ん、なのは……何か久しぶりと言う気がしないな……」

「にははは……この間も一緒だったからね」

「ねえコダイ、今回の事件って闇の書事件より危険って聞いたんだけど……」

さすがフェイト執務管、情報速いな。

「危険で無ければ事件とは言わないだろう……」

「うん……そうだけど……」

「まあ今回は犯人がハッキリしているし、闇の書事件よりは簡単だろ」

その犯人がかなり強いってだけでな。

「ん？あれ？コダイって謹慎してたんじゃ」

「そういえば姉さんの言う通り、あの空港火災で応援に来た首都航空隊を殴って約2週間の謹慎のはず……何で？」

俺が『DEATH NOTE』を見せると納得したように苦笑いを

返すなのは、フェイト、アリシアの三人。

「しかしこの面子……AAA〜Sランクって戦力過多だろ、戦争でも起こす気か？」

「仕方あらへんよ、沢山のロストロギアを盗まれたとなるとこんなに居ても足らへん位やし」

まあ……はやての言う通りだけど……

「けどよー管理局に殴り込んでロストロギアを盗むって相当ヤバイ相手って事だよな」

「そうだな……襲われた局員が言うには『どうやって攻撃されたか分からなかった』らしい……」

盗んだ奴も似たような攻撃方法を持っているのか……

「シグナム、詳しく分かるか？」

「トキガワ？……いや、私も聞いただけでな。『突然現れたと思ったら既にやられていた』との事だ……」

最後に『……是非とも戦ってみたいものだ……フフフフ』とか言っているシグナムを軽く無視して隣にいるヴィータに聞いてみる。

「ヴィータ……ベルカ式に見えない魔力刃を飛ばす魔法ってあるのか？」

「あ？見えない魔力刃？……どう言う事だ？」

ヴィータにあの時の事を転生者関連以外を話した。

「ん……見えない魔法かあ……」

「体系がベルカ式だったから知っているとってな」

「さすがに私でも詳しくは知らねえしな……はやてを守れば十分だし。細かい事はシャルとかシグナム……今は無理だな」

「フフフフ……」

ヴィータと二人で妖しく笑うシグナムを少し引きながら見ていた……

「……ここは私に任せる」

「本当に任せた」

ここをヴィータに任せて、はやての近くにいるシャルにさっきの事と同じことを話した……途中、鈍い打撃音を後ろで聞きなが

ら。

「そうですね……コダイ君、その人はどんなデバイスを持っていたか？」

「デバイス……見てないな」

「そう言えば転生したのだからデバイスは持っているのか？」

「自分を見えなくする認識阻害系の魔法なら有りますけど……さすがに魔法その物を見えなくするのは難しいですね。あるとすればその人の稀少能力レアスキルが変換資質かもしくはロストロギアを借りてるか……」

「何かを持っている様子は無かった……前二つの可能性が高いな」
魔力を見えなくするレアスキル……厄介だな。

「つまりベルカ式にはその手の魔法が無いという事か……」
だとするとミッド式か？……いやでも転移の際ベルカだったし、二つの体系を使える奴って……はやてがいたか。

「主コダイ……その、大丈夫ですか」

「ん？アイン？……何がだ？」

ここに来てから時々コツチをチラチラ見ていたアインがようやくこつちに来た。

「その…あの時の怪我の方は」

「怪我？……心配するな幸い血は止まっている」

あの時思いつきりコツチに突撃したからな。

「そうですね……良かった」

かなり深く治りにくいかな。

「それに俺がこの程度で如何なるとか思っているのか？」

「そんな訳有りませんが……またロストロギアを取り込んでしまわないかと心配で……過去に取り込んだ時は瀕死だったので……」

「貴様も言うか……」

ロストロギアは俺が取り込む物だと周りから認識されているのか？

「大体ロストロギアを取り込めたとしても、そう簡単にあり得ないだろ……」

「コダイ君なら100%（パー）やる」（はやて）

「コダイなら大丈夫だよ！取り込んでも！」（フェイト）

「現に20個位取り込んでるからね〜」（アリシア）

「にやははは…大丈夫なの！コダイ君の方がロストロギアより凄いの…！」（なのは）

「諦める、歴史が物語っている」（シグナム）

「ま、心配スナナって。シャマルの料理を食っても平気なら大丈夫だろ…！」（ヴィータ）

「私は最近、コダイ君の方がロストロギアに見えてきました…」（シャマル）

「安心しろ…取り込もうが我らは仲間だ」（ザフィーラ）

「主コダイ、お願いですからこれ以上ロストロギアは取り込まない
てください…主の身に何かあったら…」（アイン）

「コダイ様がロストロギアを取り込まなかった事ってあったんです
か？」（サクラ）

「……はっ！……そうか！ロストロギア古代遺産だからコダイが取り込んだじゃう
んだー！」（エル）

「成程エル！ーうまいぞ！………だか何の意味も無いぞ！」（ア
ンズ）

「そう言う事だったんですかあゝさすがリインのとーさまですう！」
（リイン）

「ふにゆ？……ロストロギアとコダイってどんな関係なの？」（レ
イ）

「……………貴様ら、少しなぐじ話合おっ……………」

「そ、総員撤退や!!」
「「「「「了解!!」」」」」

はやての命令で散らばる馬鹿共……………とりあえず言った順から
殴っていくか……………

くおまけ

あのカオスから蚊帳の外……………と言うより事前に避難していたリンデ
イとクロノは……………

「やっぱりこうで無いとアースラじゃないわね」

「今回は珍しい逆パターンですね。10分経っても収まらなかった
ら強制終了させます」

そう言うクロノは既にデュランダルを起動していた……………

「あらあら クロノも変わったわね」

リンディは嬉しそうに言いながら、緑茶に砂糖とミルクを入れ始め
た……………

「……………まだ飲んでいるんですか?」

「まだ?フツフツ……………これは前のリンディ茶とは違う『NE
Wリンディ茶』よ!」

「……………具体的にどう違うんですか?」

「砂糖を黒糖にミルクを低脂肪の物にして健康志向に……」
「緑茶に入れている時点で不健康だと思います……」
こっちも力オスだった……

え？俺ってそう言う認識？……byコダイ（後書き）

メガネ「コダイの名前ネタは偶然です！そう言えばって感じて気づきましたので深い意味は有りません！」

コダイ「俺も知らなかった……」

メガネ「俺はさつき知った……」

コヨリ「むしろ…いまきづいたのか？というかんじですね」

レイ「感謝コナ、スペリオルス様、アナザー様、龍賀様、畏無様、黒一文字様、山義 芳原様、漆黒の墮天使様、感想ありがとうございます！」

メガネ「スペリオルス様からは恋姫の張飛の衣装を。アナザー様からはコダイに『コードギアス』のC・Cのコスチューム、コヨリ、レイには『テイルズオブヴェリア』のパーティ・フルール、リタ・モルディオのコスチュームを、山義 芳原様からは宇宙戦艦ヤマトに出てくる艦艇を一種類50万隻ずつと射撃演習地を丸ごとと翠屋のシュークリームや新鮮な水と魚介類、秋刀魚やマグロ、鮭、イクラなどと、リボンの赤と青と緑と黄と紫を。漆黒の墮天使様からはコダイには一方通行の服（1期の）と聖なる右を、メガネには魔女狩りの王イノケンティウス5体とGatling | Railgun ガトリングレールガンを5機とラジゾンデ要塞を20機あとはエイウスを50体をいただきます、ありがとうございます！」

コダイ「と言う事ださつさと魔女狩りの王イノケンティウス5体、Gatling | Railgun ガトリングレールガンを5機、ラジゾンデ要塞を2

0機、エイワスを50体に向かって死んで来い」

メガネ「死んでたまるか！！山義 芳原様から貰った戦艦で立ち向かうー！！」

コヨリ「……………いっちゃいました」(リタ・モルディオの衣装)

コダイ「逝ったな……」

パシャパシャ！

レイ「ふにゆ？」(パーティ・フルールの衣装)

……………

コダイ「ん？もう戻ってきたのか？」

……………

「……………」のやろおおおおおおおおお………「……………」(コダイに殴りかかる)

コダイ「シャルロット、このシヨタコン女どもは誰だ……」

シャルロット「君って良くこんな状況で冷静だね……同じクラス
のラウラ・ボーデヴィツヒに神崎セラと……同じ『フェンリル』の篠
ノ之束さん……」

レイ「シャル〜！遊ぼう〜！」

コヨリ「私も良いですか？」

シャルロット「いいよ〜！……じゃあ遊んでくるから」（ダッシュ）

コダイ「逃げたな……さて、お前も逝って来い」

りゅうと「じがちがうよね!？」

コダイ「『フェンリル』なんだろう？だったら自分で何とかしろ。俺
は今の貴様と同じ年ぐらいに既に人を五桁殺しているんだぞ？」

りゅうと「おまえといっしょにするな!?!」

コダイ「……止める方法ならあるぞ？」

りゅうと「本当か?!」

コダイ「何でも言う事を聞く覚悟はあるか？」

りゅうと「くっ……あしもとをみやがって……だが、たのむ!お
しえてくれ!」

コダイ「じゃあ言われた通りにやれ……（ボソボソ）」

りゅうと「……………それをやれと!?……………くっ……………わかった」
（パタパタパタパタ……………）

ラウラ「おおっ!? 嫁がいたぞ!！」

セラ「さあ帰りましょう? 私がしっかり面倒を見ますから……………フフ
フフフ」

東「ねえねえ! 東さんと一緒にお風呂入ろ?」

りゅうと「……………お」

ラウラ&amp;amp;セラ&amp;東「……………お?」「……………」

りゅうと「お……………おねーちゃん」
（涙目+上目づかい）

コダイ「貴様、何でも言う事を聞くと言ったな？何簡単だ……ただの撮影会だ、女装以外もあるから心配するな」

りゅうと「それかんぜんにじょそうするってことだよな！？じょそうはオシヤレじゃない！！」（逃亡）

コダイ「シャルロット、ラウラ、セラ、東……シヨタリゅうとの女装写真が欲しければ協力しろ……」

リュウトラバース「……イエスマム！！！！」

ガシツ！！！！x4

りゅうと「はやっ？！しゅくちれべるをはるかにこえてる！？？とうかしゃるいがいたおれてなかった！？………ちよつとまって、こだいがもっていることもさいずのごすりにはなに？………ちよ、ちよ、やめ………アッー！！！！」

りゅうと「シクシク………」（TOLLOVEの金色の闇の服）

リュウトラバース「……ありがとうございます！！！！」「……」
（敬礼＋全員肌ツヤツヤ）

ムッツリーニ「……豊作」

レイ「黒ゴス、白ゴス、巫女服、不思議の国のアリスの服、セーラー服、体操服、園児服（男女両方）、半ズボンにポロシャツ……いっぱいあったね！」

コヨリ「とちゅうでヴィックをつけてました……」

コダイ「四人には先ほどの上目づかい涙目のシヨタリゅうとの写真をやる、後着た衣装もだ」

リュウトラバース「……ありがとうございます！！！！」「……」

コダイ「ムッツリーニにはさっき撮ったシヨタリユウトの写真のメモリーとシャッター音がしない高性能のカメラだ」

ムッツリーニ「……業物」

プチン

コダイ「あ？この音は？」

レイ「えっと……ムツツリーニは写真を持って帰りました」

コヨリ「コダイはりゆうと、シャル、ラウラ、セラ、タバネ、ついでにメガネにおいかけられています……」

レイ「皆さまからの意見や感想など色々待っています!!」

コヨリ「バイバイです」

コダイ「良いだろ別に……女装はオシャレだ」（余裕）

『シード』でフラグの意味探せるか？……b yコダイ(前書き)

短くてスイマセン……区切りを良くしたらこうなりました。

『シード』でフラグの意味探せるか？……byコダイ

「これから作戦会議を行う……その前に質問はあるか？」

さっきまで騒がしかったのが一変、静かな部屋に響くクロノの声。

「あの……クロノ君、ひとつええか？」

はやてが小さく手を挙げた……

「何だ？八神特別捜査官」

「……この氷解いてください」

あいつ等と話合なぐじいの最中にクロノが『いい加減会議が進まないから頭冷やせ』と言ってエターナルコフィンで体の下半分が氷漬けと言
う結果になった……

「冷やすどころか凍らせてどうする、頭とは見当違いの所が冷えて
るし……」

ちなみに俺は無傷、何度も模擬戦で喰らってるから大体避けれるよ
うになった……制裁を兼ねて全身氷漬けで放置とか良くあるし。
その後、クロノが氷を解除して各々席に座り会議を再開した……リ
ンディ？のんきにお茶を飲んでたぞ？

「今回の事件は非常に危険だ、管理局が襲撃されて保管されている

複数のロストロギアも盗まれている……」

クロノが今回の事件に関して説明している。

今までで分かっている事は、犯人が3人。俺が見た二人と管理局を襲った一人だ。その一人はベルカ式らしい。

その三人のランクは最低Sランク、デバイスも使っていないらしく実力はまだ未知数……共にレアスキルかロストロギア持ちと暫定して進める事になる。

「それと、盗まれた複数のロストロギアだがどうやら無差別と言う訳ではないらしい」

そういつたクロノは次にロストロギアの情報がかつているモニターをいくつも開いた。

「これらのロストロギアはすべてジュエルシード、レリックのような魔力の高エネルギーの結晶体のような性質。またはそれに近いものだ」

「それって……ジュエルシードみたいに願いを叶える事も？」

「いや、フェイトが言う願いを叶える性質はジュエルシードだけだ

……これは高エネルギーの結晶体と言うだけだ」

「それだけ？……ほかにモバイロストロギアとかあるの？」

犯人の行動に首を傾げるアリシア。確かに管理局にはたった一つで次元世界を破壊するロストロギアも保管されているが、それには全く手付かずだったらしい……

「そうだな……だがロストロギアの他に盗まれたコレがあるなら説明が見つく」

次に開かれたモニターにはある金属が映し出された。

「これは……なんなの？」

今度はなのはが首を傾げた……というか殆どが。

「コダイ、説明頼む」

「……これは『ギガメタル』簡単にいえば力を制御する金属でどんな力も抑え込め、コントロールが出来る性質を持っている、デバイスにもこれを少量混ぜて使用されている。希少だがデバイスには一

つまみでも有れば足りるから……あんまり目には止まらない代物だ」
「そう言えばコダイ、デバイスマイスターの資格持ってた……」

あ、フェイトに言われて思い出した……

「コダイが説明した『ギガメタル』も盗まれている……そこから考えられる事は。それを使って盗んだロストログアをすべて制御して何か行つ……そこがまだ分からない」

そうだな……次元世界を破壊するならその手のロストログアを盗むはずだし、ここまで事を運んでわざわざそんな回りくどい真似をするとは思えない……

「分かっているのはこれだけだ。犯人の居場所や情報についてなどはさっぱり分からない……コダイ、分かるか？」

「残念だが顔も名前も知らない奴を探すのは無理だ」

今回の場合転生者だから、分かっても探せるかどうか……

「そうか……それに関してはこっちも全力で捜査に当たるとして……今回は部隊を三つに編成して、一隊に一人指揮官を置く。まずは八神はやて特別捜査官」

はやてが立ち上がり敬礼をする。

「次に今回協力してもらった犯罪事件強制襲撃隊の指揮を自分が……最後の一人はコダイにして貰う」

はやてにクロノに俺か………は？

「おい待て……何で俺なんだ？俺なんかリーダーに向いてないだろ……」

「まあそうだな」

はつきり言つなよ即答で……

「僕は強襲隊、はやてはヴォルケンリッター、コダイはなのは、フェイト、アリシアを頼む」

「貴様は俺にロデオをやれと？」

カチャ

「コダイ君……それはどういう意味なの？」

「そのままの意味だよ」

背中にレイジンググハート（しかもエクセリオンモード）を突き付け
てきたなのは……ほか二人も起動している……

「そう言うな……僕の所も小さいのがあるんだぞ？」

「こらー！ククロノ、どういう事だー！！」

それをいち早く聞いたエルが腕を振り回す……というか反応する時
点で自覚してるのか？サクラとアンズも何か騒いでるし……あ、ア
インに止められた。

「……まあ、今はこれだけだ。全員いつでも出撃できるように準備
してくれ、以上……では解散！」

軽く咳払いをしてククロノが最後に締めた。

「まあ昨日の今日だしな立て続けに起こる訳「アカン！それはフラ
グやコダイ君！」って、何だよいきなり……」

何故かはやてにセリフを被された……

ブー……！ブー……！

「無人世界から調査中の局員からの救難信号！！場所は……………」
エイミーが艦内に通信で知らせている……………」

「はぁ……………」

何かクロノが溜息を吐いてこっちを見てくる……………え？俺のせい？

「コダイ君は色んな意味でフラグビルダーやな……………死亡しかり、事件しかり……………」

「えっと……………ゴメンナサイ？」

はやて……………結局フラグってなんなのさ？

「エイミー、どうだ？」

「さつきから通信してますが応答しません！」

「僕たちは現場に向かう、引き続き頼む」

……………犯人に会ったら腹いせに殴る……………半殺しまでに……………」

「レイ、戻れ」

「OK！」

レイを戻して、その無人世界に向かう……………もちろん犯人を殴るために……………」

『シード』でフラグの意味探せるか?……byコダイ(後書き)

メガネ「短くて本当にスンマセン!」

コヨリ「やっぱりしょぶんします」

コダイ「構わん、殺れ」

グシャー!!

レイ「感謝コ〜ナ〜、ながも〜様、畏無様、雷光様、スペリオル様、ソラト様、龍賀様、山義 芳原様、感想ありがとうございます!」

メガネ「雷光様からはコダイに【サイバーポッド】100体、保健用に(けっして大人の意味ではない)【エリクサー(賞味期限が1ヶ月過ぎてる)】を1個、メガネに【サイコハ口】100機。スペリオル様からは恋姫の孔明の衣装を。山義 芳原様からは揚陸艦六隻とMig-21、Mig-29、Mig-31、Su-27、Su-31、Su-33、Su-35、Su-47、S-37、A-10、F-1、F-14、F/A-22A、F-22、F-35、F-4、F-15、F-16、F/A-18、F-2を一機ずつと特殊戦車(空を飛べて海を航海できる戦車)を200両と、スワイ蟹を50キ口、最高級牛肉20キ口を。頂きました、ありがとうございます!」

コダイ「と言う事で蟹は蟹鍋にしてみました」(恋姫の孔明の衣装)

メガネ「お前って本当躊躇無いよな」

コダイ&mp;????「女装はオシヤレです(だ)」

メガネ「って何かいる!？」

コダイ「はわわ!誰でしゅか!？」

コヨリ「あなたもダレですか?……というかかみましたね……」

????「モグモグ……ん〜最近鍋が美味しい季節になったね〜

」

レイ「ふにゅ?だあれ?」

メガネ「えっと……本日のゲストは黒一文字様の作品『少年は魔法少女と出会う』の主人公綾野黒羽と『第二の人生は波乱の人生!?'の主人公、結衣咲^{ゆいさ}シイが来てくれました」

黒羽「女装はオシヤレ」(女物の服)

コダイ「そうでしゅ!オシヤレです!」

メガネ「……いい加減着替えたら?」

コダイ「そうですね……」(以前貰った関羽の衣装)

メガネ「でも結局女装かよ……」

コダイ「女装はオシヤレだ……」

黒羽「よし、ならば模擬選だ！」

メガネ「どっから繋がるの!?!」

黒羽「何故かコダイと模擬戦してみたくなった……」

コヨリ「がんばりですか……」

コダイ「なら早速……レイ」

レイ「お鍋たべたい……」

コダイ「ならいいか……」

コヨリ「良いんですか……」

メガネ「てか速っ!?!」

コダイ「……………っ」

ガン!!

コダイ「あ、防がれた」

シイ「うわぁ…………コダイの魔法…………邪道だなぁ…あのディレイスペルってコッチのに似ているよね」

メガネ「まぁ…………それがモデルだし…………トリッキーが基本だからさ」

レイ「ふうふう…………アム」

コヨリ「カニをついかします…………コダイがあらかじめしたごしらせをしてました」

メガネ「アイツ準備いいな…………」

レイ「モキユモキユ…………ふにゅ？ねえねえあれはなぁに？」（遠くの黒い塊を指す）

メガネ「ん？雷光様のお土産のサイコハロ100機だ」

コヨリ「あれ？…………ずいぶんれいせいですね」

メガネ「俺には狙わない設定だから…………」

シイ「は？…………って事は？」

……………

コヨリ「あ…………コダイの方に」

療済み)

黒羽「ありがとう。結局決着付かなかったな」

シイ「ありがとう！カニ鍋美味しかったよ！」

シュン！

コダイ「やっぱり転移魔法は便利だな……また試すか」

レイ「ガクガクブルブル」(トラウマ)

コヨリ「よしよし」(レイの頭を撫でる)

レイ「にゅ」

コダイ「俺は鍋片づけるから締めといてくれ」

レイ「皆さまからの意見や感想など色々待っています……！」

コヨリ「バイバイです」

メガネ「結局……こんな落ち「死ね」ガフツ！」

「次回もお楽しみにしてください」

世の中大きければ良いと言つモノでは無いbノコダイ(前書き)

みなさんスイマセン……

ロストログアをずっとロストギアと間違つてました……

全部修正したと思います……報告してくれた方々ありがとうございます……
ます!!

世の中大きければ良いと言うモノでは無いb yコダイ

第257番無人世界。文明レベルE、魔法文化有り、生息しているのは原生生物のみ。自然に溢れ太古の地球を思わせる世界で。遺跡もある事から、かつて人が文化を築いたのでは無いかと仮説もされている。

現地をなのは、フェイト、アリシアと飛びながクロノとはやて同時にモニターを開いて通信している。

「所で何で今更こんな世界の調査を？」

「情報だと、微弱なロストロギアの反応が見つかったらしくその調査らしい」

「それで見つかったんか？」

「いや……何しろ反応は一瞬、しかも微弱だったからかなりの人数で探しているらしい……」

「どんなロストロギアだよ……全然見つからないって。」

「うーん……そのロストロギアも並行して探したらどうや？コダイ君の事もあるし」

「おいはやて……何でそこに俺が出る？」

「コダイ君さつきフラグ立てたやろ？もしかしたら管理局を襲った犯人がまた盗むかもしれんしな」

「成程……」

クロノ……そんな真剣な顔で頷くな。

「僕とはやてがロストロギアの調査を並行する、コダイ達は救助を最優先だ」

「そやな『また』取り込まれたら困るしな」

「はあ……言われた通り、こっちは救助優先だ。見つけても連絡だけで無視だ」

「怒らないの？」

フェイトが隣に並走してきた。

「一応、クロノの命令だしな……俺も似たように弄っているからな」

強襲隊に命令できるのは同じ強襲隊のみだからな……

「そうだ、聞きそびれた事があるんだが……管理局が襲撃された時の被害者の中で一人だけ死んだのがいたよな？」

「そう言えば言っただけ無かったな」

「ああ……そいつについて教えてくれないか？……死因とかその時の状況とか……」

相手がどんな能力を使っているのかが未だに分からない、少しでも情報が欲しい。

「……分らない」

クロノから返ったのはその一言だけだ……

「……この事件の担当になったんだ、それ位の情報があるだろ」

「その死んだ奴は……突然、爆発して跡形も無く消えた。大破したデバイスを残して」

「爆発？」

思わず立ち止り、なのは達とモニターを囲むように集まった。

「爆発して何も残って無い……重軽傷の局員の殆どがその爆発に巻き込まれた……」

人を一人跡形も無く消す位の爆発……あいつ等と似たような能力か。

「爆発の原因は一切不明で……すまない、サクラが部隊を発見したようだ……切るぞ」

「あ、コッチもシヤマルが見つけたみたいや……ほな後で」

そう言っただけクロノとはやてが通信を同時に切る。

まだ聞きたかつ「コダイ！コッチも見つけたよ！」……丁度コッチもアリシアが見つけたようだな。

「じゃあ急ぐか」

『バーニア』！

久々のスタイル・ブレイザーの機能『バーニア』の出力を上げて目的地へ向かう……

「時空管理局です!!」
反応があつた場所に降りると、フェイト達は真つ先に近くに倒れている局員に向かった。
フェイトが声を掛けると、気が付き此方を見てきた……見たところ気を失っていただけで大した事はなさそうだな……支えなくても立っているみたいだし。
「この状況を見ると……何かに襲われたか」
それに頷く局員、周りを見回すとここ一帯だけ何かが発火した様に焼け焦げていた。
「まさかな……」
多分、誰かがでかい砲撃でも使った位だろう……
「コダイ、ここにはこの人しか居ないみたいだよ」
「そうか……俺はクロノに連絡するから、フェイトはリンディに転移の準備を」

「分かった」

俺はクロノに連絡を取った……

「クロノ、局員を一人見つけた」

「本当か!？」

「嘘言つてどうする……派手な爆発の跡に延びてた。そっちは」

「コツチも5、6名……はやても同じくらいだ、だが調査に行った人数と合わない」

クロノの後ろには怪我をしている局員がいた。

まあ、ロストログアを探すのに10人ちよつとじゃ足りないか……

「引き続き救助の方を頼む」

「分かった」

クロノとの通信を切る。さて……もうフェイトの方は終わったか「

「フェイト(ちゃん)!後ろ!」は………?

何が起こったのかは今のなのはとアリシアの声で分かった。俺はいつの間にフェイトの後ろで腕を振り上げている局員を近づいて蹴り飛ばした。

「一体何だ?」

「フェイトちゃん、大丈夫!？」

「う、うん、大丈夫だよなのは……コダイが助けてくれたから……」

「ちよつと!私の妹に何するのよ!!!」

アリシアがハルバートを局員に突きつける。

蹴り飛ばされて、頭から落ちた局員は何事も無く立ち上がってコツチを見てくる……

「………」

局員は無言で見ているだけだ……

「コダイ!この人……」

「如何した、レイ?」

………様子がおかしい!!

「……いや、見れば分かる」「……」

なのは、フェイト、アリシアと同時に突っ込んだ……ここまでぴっ

たりは凄いな。

「いや……様子がおかしいのはこいつだけでは無いようだ……」
周りから複数の気配……数は20か？物陰から次々に局員が……全
員似たような感じだな。

「なんで？反応は無かったのに……」
なのはの言う通り、こんなに近くにいたら俺でも気づくのに、これ
は……

「誰かに操られているのか？」

「だとしたら近くに魔導師がいるよ」

精神操作系は例外はあるが、一定範囲にいないと駄目だからな……
だけど。

「でもなのは、あの時この人の反応以外何も無かったよ？」

アリシアの言う通りならこれは例外だな。

「何それ？遠隔操作で高みの見物？趣味悪いな……」

とか言ってる間に囲まれてるし……

「全員、せーので上空に飛んで一気に終わらせる」

念話で三人に伝え、三人が小さく頷く……

局員はまだ動かない……遠隔操作は精度は低いから行動に条件が
あるはず………定番はこれだな。

ダン！！

誰にも分かるように大きく一歩動いた。その瞬間、弾かれる様に飛
びかかった。

「せーの」

四人一斉に上空へ飛ぶ、囲む状態から飛びかかった局員は中心でぶ
つかり合った。

やっぱり動くのが条件だったか……けどまだ見たいだな。

あんなに派手にぶつかり合っても何事なく立ち上がってくる……
そしてデバイスを起動してコッチに飛んで来た………と言うかデバイ

ス使えるのかよ。

「付かず離れず、お互いにフォロー出来る距離を保って散らばれ」

「了解！」

全員別方向に飛び相手の戦力を分散する。俺のところに来たのは5人……もう少し多い方が良かった。

「緊急事態だ、救助した局員が操られている」

「やっぱりな、コッチは戦闘中だ」

「コッチもや！叩いても叩いても起き上がってくるで……痛み感じてるのかMかどっちかやな！」

通信するとクロノもはやても戦闘中だったようだ。

「俺はMに一票……っと」

近づいてくる局員を拳と肘を使って顎先を殴る。数メートル後ろに下がっただけでまたコッチに向かってくる……脳を揺らしても駄目か。

「ウチもMに一票や！」

「投票は後にしろ！今は、局員を止めて話を聞くしかないだろう」
後でいいんだ……っと

「しつこいな……っ！」

突っ込んでくる局員の腕を掴んで投げ……え？

ゴシヤッ！！

投げた局員は何人も巻き込んで吹き飛んで行った……

「もう一つあった……局員が死んでいる。死んでいたら痛みを感じるなんて無いからな……」

さつき掴んだ腕が異様に冷たかった……良く見れば顔に血の気が無いな。

「と言う事は死んでる人間を操つとるんか？」

「クツ……外道め！！」

「それは相手に言うなよ？付け上がるだけだから」

ド外道おれが良い例だからな？

「それやったらどうするんや？叩いても起き上がってくるから埒あちが開かんで！」

「埒あちを開けるには、全員黙らせるしか無いだろ」

「それしか案が無いみたいだな……そろそろ切るぞ」

「分かった」

クロノとはやてとの通信を切った。

「よし……殺せるならコッチのモノだ……って、通信中も殴ってるのに、いい加減倒れるって……？」

何だ？……この局員の首の後ろにある金属パーツは……もしかして。

「これか？」

裏拳をそこに向かって振るう、バキンと割れる音が聞こえると局員の体勢がガクンと崩れた……これで操って

「……………イ……………ダ……………コダイ!!!」

「!……………フェイト?……………っ」

何が起こったんだ?今、分かっている事は俺は装甲が大破したボロボロの状態でフェイトに脇に腕を通して抱えられている。体がうまく動かない……………

「……………レイ、あの時何が起きた」

えっと……………コダイが殴って……………局員が凄く光って……………眩しくて良く分からなかった……………ゴメン

「局員が光った?……………フェイト、遠くからみてどんな感じだった?」

「コダイの方から凄い光と音がしたと思ったらコダイがコツチに吹っ飛んで来たから……………」

「受け止めてこの状況か……………ありがとう」

「大丈夫、コダイ小さくて軽いし」

まあ、俺が背で勝てるのはレイやリンやヴィータとか位だしな。

「その話を推測すると……………俺が局員を操っている装置破壊したら、爆発してその周りにも連鎖して爆発、俺はここに飛ばされたか……………」
「気を失っていたという事は一回死んだわけか……………」

「フェイト……………!!」

「大丈夫……………!!」

アリシアとなのはがコツチに飛んで来る。さっきの爆発で駆け付けたのか?

「っつてコダイ（君）が大丈夫じゃない〜！！」

「いい加減慣れるよ……いつもの事だ」

ん？お前は慣れちゃいかなだろっつてか？……悪い、もう手遅れだ。

超巨大な反応を確認！！上です（だよ）！！

「上？」

レイ達デバイス軍が言った上を見ると……

ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！

何か本当に大きいのがコツチに来てる。

「確かに超巨大だな」

遠くからでも大きいと分かる……

ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ……

……！！！！

物凄い速さで降りて来たのは……

「車……か？あり得ない色だけだ」

「車……なのかな？あり得ない位大きいけど」

「車……だよな？何か物騒なの付いてるけど」

「車……なんだよね？飛んでるけど」

俺、なのは、フェイト、アリシアでお互いに確認を取る。目の前に降りて来たのは現実からかけ離れた（魔法の時点で離れているだろうと言っつツッコミは無し）、赤……と言っつか紅の色をした巨大な車だった。

ガキイン！！！！

「……え？」「……」

その車は耳に残る様な音を立てた……

ガキイン！！ガキイン！！ガキイン！！ガキイン！！ガキイン！！ガキイン！！ガキイン！！ガキイン！！
イン！！！！

「……」

言葉にすると上記のような音を何度もしながら部位が変化？……変形するのを茫然と眺めていき……

ガキイイイイイイイイイイイイ！！！！

えっと……変形し終わると車だったのが超巨大の人型に変形して……ポーズ何かを決めた……うん、何だこれは？

「車から人が！？」

なのは……それを言うなら『人から車』でなく『人が車』だろ？

「アレ何！？デバイス！？」

あんな二次元の壁をブチ破ったデバイスがあるかアリシア…

「何だろっ……エリオ喜びそう……」

まあフェイトの言う通り、エリオの歳なら喜びそうだな……実際に……

カッコイイ〜（キラキラ）

中で目を輝かせてるだろっレイが居るし……とにかく言いたい事は一つ。

「……………何食べたらあんなに大きくなるんだ？」

「……………ええっ?!そこ!?!……………」

……………三人に突っ込まれた……………

世の中大きければ良いと言うモノでは無いb yコダイ（後書き）

メガネ「ふざけてませんよ？一応まじめに考えたゆえのアレです」

レイ「ねえねえ！あのロボットってどんな感じ！？」

メガネ「あゝ…………昔見た変形ロボットアニメ的なヤツ？うる覚えだけど…………」

コヨリ「カツコイイです……………」

メガネ「おお…………コヨリがテンション上がってる……………」

レイ「感謝コゝナゝ ケモテイラー朱炎様、エドワード・ニューゲート様、スペリオルス様、龍賀様、雷光様、畏無様、ポワソ様、感想ありがとうございます！！」

メガネ「エドワード・ニューゲート様からは、コダイにIS インフィニット・ストラトス で、ラウラが着ていたあの黒い水着を、レイにはポケモンのピチュウの着ぐるみを。スペリオルス様からは華蝶仮面の仮面を。龍賀様からは怪我を否定する概念武装（形状は剣）を。雷光様からはコダイに【ノイエ・ジール】 【ディピニタド】 【ユニコーンガンダム】 【クイン・マンサ】 各70機と幻想殺しに【ライフボトル】 【フェニックスの尾】 【死者蘇生】 【1upキノコ】を各15個ずつ、メガネに【オシリスの天空竜】 【オベリスクの巨神兵】 【ラーの翼神竜】と【無限の剣製】 【マシユマロン】を。畏無様からは、全員分の豚骨ラーメンにコダイにF a t eの凜の私服を、ポワソ様からはコダイにはダオスとクラトスのなりきり服、レイにはアーチェとメルディーのなりきり服、コヨリにはファラと

ハロルドのなりきり服、メガネにはレイスとジューダスのなりきり服を。頂きましたありがとうございます!!」

レイ「と言う事で今回は無限の剣製と言うところで後書きを始めてます!!」

メガネ「固有結界の外ではコダイが雷光様からのお土産のMS軍とドンパチやってます……幻想殺しで能力封じられて」

レイ「コッチにもいるよ？オシリスの天空竜とオベリスクの巨神兵とラーの翼神竜が……」

メガネ「まあ、マシユマロンがいるし、それに無限の剣製もあるし大丈夫だろう……コダイには龍賀様に貰った概念武装があるし……」

コヨリ「あの………これですか？置いてあったので拾いました」（剣を見せる）

メガネ「コダイ用に置いたんだよ!!じゃあ何!?アイツ龍賀様に送られた概念武装と一緒に来た烈メイオウ攻撃も喰らってるのか!？」

コヨリ「……………てへ」

メガネ「無表情がマジでむかつく!!」

グルルルルアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!

!!!!!!!

メガネ「やば!?無視したから神がキレてる!？」

「コヨリ」やりました」

レイ「おー！！！」

↳ 数時間後

メガネ「ドジリスでよかった、ドジっ子で良かった…ありがとう、
マッシュマロン
生贄」(オシリス担当、ボロボロ)

レイ「怒ったコダイより怖くなかった」(オベリスク担当、軽傷)

コヨリ「チツ……大した事無いですね……」(ラー担当、無傷)

メガネ「ああ……そろそろ外に様子見るか……怖いけど」

レイ「ガクガクブルブル……」

殺人姫「何？もう終わり？早　じゃあるまいしもっと動いてくれな
いと……まだ両手足引き抜いただけじゃない」（血まみれ＋スクラ
ップの山の上）

メガネ& amp・レイ」「ほらやっぱり……！」（ガクガクブル
ブル）

殺人姫「……………あら？」

ゴシャー！！

コダイ「何だ、もう戻ったのか」

メガネ「それはコッチのセリフ！ついでにコヨリ踏みつぶしてるし
……………」

コダイ「……………まだ面白くないからこれを使う」（血濡れのチケット
を見せる）

メガネ「それって雷光様がコッソリ送ってくれた『白井を強制転送
お仕置きチケット』……………いつの間に、てか半分血で汚れてるから出
来ないだろう……………」

コダイ「そこは俺の『想像を創造する能力』で……………」

パサッ……

メガネ「……は？」

コダイ「面白そうだから白井の『服』だけ、強制転送させた」

メガネ「何しとんじゃあああああああ……！」

コダイ「よし……これなら赤で血が目立たないしオシャレだ」(F
etaの凜の私服)

メガネ「どうなっても知らないぞ……」

コダイ「何言ってるのコッチはあの幻想殺しの所為でマジギレした
んだから当然よ……！」(CV・あかいあくま)

メガネ「あくまだ……あかいあくまがここにいる……」

レイ「皆さまからの意見や感想など色々待っています……！」

次回もお楽しみにしてください

相変わらずトリッキーなベアトリス式byコダイ(前書き)

遅くてスイマセン……短くてスイマセン……

コッチ来たー！しつこすぎるよ〜！

やっぱり追ってきた局員達は無傷、と言うかシールドを張られて防がれた……

「さすが高ランク魔導師、結構自信あつたんだが……」
立ち止つて、局員を見下ろす。コッチが動かなければ、アッチも動かない。

本当に厄介だな、攻撃すれば爆発して、遠くから狙えば魔法で防がれる、バインドは……何の解決もならないな。

次に、周りの様子を見てみる……なのはとアリシアは防御主体で、フェイトは機動力で突っ込んでくる局員達を凌いでる……

ど、どうしよ〜

「あつちにはフォロイー出来る状態じゃないな……」

魔法も使える動く爆弾を相手してる様なものだし……ん？待てよ……俺はもう一度なのはとアリシアの方を見る。二人は自分を球状に包むシールドで突っ込んでくる局員を防いでいる……そう言えば局員が使っている魔法は飛行魔法とさっきの障壁……攻撃魔法は一切使っていない。

いくら頑丈がウリのなのはのシールドでもこれだけの局員が一斉に魔法で攻撃すれば破壊ぐらいはできるはず……なのに何でそれをしてない？

「……成程」

なら……ついにアレを使う時だな。

「レイ……落ちるぞ」

OK ……ふえ？落ちる？

バーニアを切り、重力に従って真つ逆さまに落ちていく……

ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ……

……確か反応も一瞬って言うていたな。

「まあ……この規模の次元震と次元断層ならロストログアも飲み込まれるだろうな」

ならもうココに用は無いな。俺達はアースラに帰還した……

全員がアースラに帰還して数十分後、第257番無人世界は崩壊した。

相変わらずトリッキーなベアトリス式byコダイ（後書き）

メガネ「ああ……どうしよう、続き考えてねえ」

コヨリ「さいあくです」

メガネ「大まかに出来てるのよ……そこに肉付けとなった途端難しくなる」

コダイ「それを何とかするのが貴様だろうが……」

メガネ「ああ……はい、ガンバリマス」orz

レイ「感謝コ〜ナ〜、White Seal様、畏無様、ポワソ様、雷光様、山義 芳原様、龍賀様、リョウ・マーズ様、感想ありがとございます!!!」

メガネ「畏無様からはコダイにDQの『メタルキングの盾』となんとなく集束アルカンシエルの弾薬なマシンガン。ポワソ様からはマーボーカレーの甘口、中辛、辛口の三食とマジカルポットを。雷光様からは【カレーライス激辛DX】（通常の激辛の56倍の辛さです）とテイルズの【レディアントシリーズの装備】を1式を。山義 芳原様からは猫のぬいぐるみの様なパジャマとありとあらゆる物を防ぐお守りを一つ（効果は三時間、ランダムで壊れる）と本マグロ総計1800tを。頂きました、ありがとうございます!!!」

コダイ「と言う事で」

レイ「~~~~~!!!」（コロコロコロコロコロ!!!）

メガネ「……で、何でレイは悶えているんだ？」

コダイ「カレーライス激辛DXを間違つて食べた……ほらレイ、氷」
(カレーライス激辛DX)

レイ「コクコク……!!」

コヨリ「あまくちはのこしときましよう」(マーボーカレー中辛)

メガネ「レイって辛い駄目なのか？」(マーボーカレー辛口)

コダイ「好き嫌いは無いが基本子供舌……まあアホだから少ししたら忘れて同じ目にあつた」

メガネ「なにそのアフォの子……あ、俺マーボーカレーって実際作つた事あるんだよ。動画で作つてたのを見て」

コヨリ「どうでした？」

メガネ「うまかった。豆板醤とかの辛さとカレーの辛さって意外と合う。後、豆腐がまるやかにしてくれる」

コヨリ「……はじめてさくしゃがすごいとおもいました」

メガネ「ひでえ……」orz

レイ「ふう……おさまった」

コダイ「よし、なら締める」

レイ「ふえ?!」

メガネ「鬼だな……」

レイ「皆さまからの意見や感想などイロイロ待っています!」

コヨリ「バイバイです……レイ、マーボーカレーのあまくちたべます?」

レイ「食べる」

次回もお楽しみにしてください!」

まあ…学生だからなbyコダイ(前書き)

そう言えば学生らしいイベントってやって無かったような……
ちなみに前編・後編と分かれています。

まあ……学生だからなbyコダイ

あれから数日後、あの無人世界が崩壊した原因の詳細は未だに不明。ただ、レイが一瞬感じ取ったロストロギアの反応はアースラでも見つけたらしいが同じく一瞬だったと言っていた。局員達が操られたのも、今となっては宇宙の塵。

突然現れたロボットも妨害されて逆探知不可能……

現在、クロノ達が他の周囲の世界に影響は無いか調査中。

時間がかかると言う事で、俺、なのは、フェイト、アリシア、はやての五人は………地球に戻った。

三日位調査に参加したが、さすがに何日も開けるのは駄目だと言うリンデイの判断だ………後、俺の怪我。

緊急まで暫く待機………随時連絡をすとの事………を、今日の昼休みににアリサとすずかに伝えた。

「変形ロボット………見たかったなあ………」

その二人の反応である………そんなに良い物なのか？

「言って置くがな、あんなのが目の前に現れてみる………リアクションに困るぞ」

「あははは………さすがのウチも映像で見たけどどっからツッコんでええか分からなかった」

はやてが頬を掻いて苦笑い………なのは達も苦笑いをしていた。

「全員苦笑いの中、サクラとエルとアンズとレイの4人は目を輝かせて喰い付いてたが………」

「あ、それは何となく想像できる」

「ついでにアンタに怒られるのもね………」

確かに4人に拳骨を落とすだけ………

あの映像を見せた時、リンデイに『映像間違えてない？』と真剣な顔で返された。それ位リアクションに困るモノだった。

実際………あの悪ふざけの塊みたいなロボットは地面を殴っただけで、

とつとと帰ってしまった。今回の事件と関係があると踏んで捜査が進められてるが……アレって見つからない代物なの？ただ大きいだけだし。

「で……アンタは何時もの様に重傷と」

アリサが呆れながらコツチを見た。近くで見たいと分らないが、制服の下は包帯を巻いている。

報告後、シヤマルに診てもらった時に気づいた……動きづらいつていたらかなりの数の骨が折れていたらしい……

「もう殆ど治っているがな……それにシヤマルは腕が良いしな、腕が2、3本飛んでも何とかなるだろ」

「腕は二本しか無いわよ!!!」

ブウン!!

「いい加減当たりなさい!!」

「だから当てるよ」

アリサの拳を何時もの様にかわす。

「ア、アリサちゃん落ち着いて!」

「放してすずか!今日こそアイツの顔に一発入れないと……!」

また殴りかかろうとしたアリサはすずかに羽交い締めされた……

「そ、それで捜査の方はどうなの?」

すずかが羽交い絞めしながら聞いてきた。

「ん?今のところ進展無し、コツチの部隊もフル(クイント&am

p:ティータを除く)に出ているけど手掛かりが掴めないみたいだ」

「と言う事は……今日はコダイ君お家一人?」

「いや、レイも地球に戻ってる……今は留守番している」

レイがいないと空も飛べないからな……

「一人つて……大丈夫なの?」

羽交い絞めから解かれたアリサが心配そうに聞いてきた。

「本当は連れて行きたかったが……」

〈回想中〉

家を出る前…

「私、お留守番する！」

「……………は？」

「コダイが帰ってくるの待ってるよ！」

「いや……………連れていくつもりだったんだが……………いいのか？」

「うん！」

「今日はアイン達はいないんだぞ？俺が帰ってくるまで一人で大丈夫なのか？」

「ダイジョーブ！この家は私が守るモン！」

「そこまで言うなら……………大人しくしてるよ？」

「いってらっしゃーい！」

〈回想終了〉

「と言う事があって今留守番……………？」

何で皆顔を押えているんだ？

「天使って……………近くにいたんだね、フエイト」

「そうだね……………姉さん」

誰だよ天使ってテストロツサ姉妹……………

「レイちゃん……………大きくなったの」

え？……………なのは、もしかして泣いてる？

「アレ……………おかしいな……………目からしょっぱい水が出る……………」

「奇遇ね……………アタシもよ」

人はそれを涙と言うぞ？はやて、アリサ……………

「コダイ君!!」

「さすが突然俺の肩を掴んで……って涙目になってる？」

「今日コダイ君の家に行つて良い?!と言つか泊つても良い?!」

「そつちが問題無ければ良いが……」

「皆聞いた!？」

「ええ……聞いたわ」

若干鼻声のアリサ、といか目が若干赤い……

「皆、今日の放課後コダイの家に行くわよ!良いわね!」

「……了解」「……」

アリサに向き合つて敬礼をする他五人……え?何が起こつたの?俺の家に来ることは分かつたけど何で?

「コダイ、帰りに寄つて行く所ある?車で行くから送つていくわよ」

「ん?……そう言えば冷蔵庫の中身がそろそろ危なかつたから買いに行こうと思つてるが、アリサ達の用があるならそつちを優先で良い」

泊るとか言つていたし着替えとかだろっけど……

キーン〜コーン〜カーン〜コーン

放課後、アリサが呼んだ車でまずなのは達の荷物を乗せた後、いつも行く店で全員で手分けして食糧を大量に購入して、家に向かった……
「ただい「お帰り」……!!」「っ!!」

ドコオ!!

扉を開けると、恐らく玄関前で待機していたレイが飛びついて来たと
言うか飛んできた。両手が荷物でふさがって回避できなかった……
「大丈夫だったか?」

「うん!……ふにゆ?……みんなどうしたの?」
抱きついていたレイが俺の後ろにいるなのは達に気がついた……

「どうやらレイの為に遊びに来たらしい」
「私のため?」

「そうだよ。レイちゃん、一人でお留守番偉いね」
なのはが抱きついたままの、レイの頭を撫でる。

「ふえ?……その……う……にゆ」
何時ものように嬉しそうでなく少し恥ずかしさも混じった顔をして
いるレイは顔を赤くして……

「あのね……お留守番できたけど……すこし……さびしかったかな
……」
途切れ途切れ呟いた。

「か、かわええ〜!何やこの萌えっ娘!!アノ性格最悪のコダイ君
から出て来たと思えへん天使や!!」

「はやて……人の事言えるかよ……」
俺は貴様のようなオツサンからあのラインが生まれたとか思えない
ぞ……

「チョット!いつまで玄関に固まっているのよ!……」

「あ、ゴメン」

玄関を上がつてリビングに買ってきた荷物を置いた。

「コダイ君これ、お母さんが持って行きなさいって新作ケーキ詰め合わせ」

なのはが取りだしたのは大き目の箱だった。

「桃子の？冷蔵庫に入れといてくれ」

「ケーキ ケーキ」

レイがケーキと聞いてテンションが上がる。

「それにしても一杯買ったね」

「一か月分はありそうだね」

アリシアとフェイトが置いてある袋の中身を除いてる…

「それで一週間、以て10日だ」

「……え？」「……」

それを聞いたはやて以外が此方を向いた……

「家には育ち盛りが後3人いるからな」

「うちも所もこれ位は買つとかんと以たないで？」

「だから節約とかやりくりが欠かせない」

「そうそう、閉店前とかタイムサービスが狙い目や」

「あ、ココから遠いが業務用スーパーとか良いぞ、肉がキロで売っている時あるし」

「ホンマに？今度場所教えて！？」

「場所はさっきの店から……」

「何、井戸端会議してんのよ中学生！！」

スパアン！！

「イダア！」

「よっと……」

アリサの振るうハリセンをかわす、はやては頭を押さえて悶えてる

……どっから持ってきたそのハリセン。

くうく

「うゆ〜……おなかすいたあ〜」

「あ、もうこんな時間か……早速作るから待っていてくれ」

「コダイ君、ちょっと待って」

エプロンを取ろうとしたらはやてに止められた。

「夕食何だけど……ウチらが作ってもええか？」

「『ウチら』とは？」

「コダイ君とレイちゃん以外の皆で……じつは買い物中にコッソリ相談したんや」

ああ……だから手分けしてとか提案したのか。

「まあ、スペースはあるが……良いのか？客なのに」

「ええって！今日はレイちゃんの為や、コダイ君達はゆっくり寛いでや……駄目？」

……本当は料理したいけど、今回は………良いか。

「あそこのボックスの中に予備のエプロンあるから好きに使ってくれ」

そう言っただけ俺は冷蔵庫近くのカラーボックスを指すと皆『ありがと』と言って、エプロンをつけ始めた。

「みんなの料理……どんなのかな〜」

「ずいぶんテンション高いな……」

玄関からずつと抱きついてるし……

「うん！」

まあ……一応シャマルじゃないから問題ないだろ……シャマルでも問題無いけど。

「ねえ、どうせなら料理対決しない？審査員レイとコダイで」

「「「「乗った！」「」」」」

「……うん、問題無い……よな？」

まあ…学生だからなbyコダイ（後書き）

メガネ「コダイの家でお泊まり会・前編！」

コダイ「続くのか？あの事件後にやりそうな事がまだ続くのか？」

メガネ「事件ばっかじゃ（俺の）気が滅入る」

コヨリ「ほんねただもれです……」

レイ「〜」（ニコニコ）

コダイ「コツチは顔に出てる」

コヨリ「レイ……進めましょう」

レイ「感謝コ〜ナ」 畏無様、エドワード・ニューゲート様、スペリオルス様、龍賀様、感想ありがとうございます！！」

メガネ「畏無様からはワサビロシアン饅頭（20個の内当たりは4個で、当たりは中身がワサビ丸々）を。エドワード・ニューゲート様からはメガネに「トランスフォーマー ギャラクシーフォース」に出てくるトランスフォーマー達の総攻撃を、コダイには執事服（パット付）、レイにはカービィの着ぐるみを。スペリオルス様からは激辛麻婆豆腐を。龍賀様からは姫アルクの服とタマモの服とネロの服を頂きました、ありがとうございます！！」

ゴゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
！！！！

メガネ「そしてタイミング良く総攻撃キタ

！！！！」

チユドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！

コダイ「返事がない、ただの屍「殺すな！！」生きておった」(ネ
口の服)

レイ「見てー『りょうさいけんぼ』のキツネさん」(タマモの服)

コダイ「意味わかっておるのか？」

レイ「コダイって事だよな？」

コヨリ「そうですね」(姫アルクの服)

メガネ「ノリ良いな……パクパク……！！くうくう！！！！」(ワサ
ヒロシアン饅頭を食べた)

コダイ「一発目で当てるとはツイテいるのか無いのか……」

メガネ「く……ハアツ！ふうく……さすがにわさび平気な方だけどこ
れはキツイ、頭イタイ」

コダイ「その時はコーラを飲むと良い」（コーラを渡す）

メガネ「ありがとう……」

コヨリ「おなじからいのにですか？」

メガネ「わさびは一気に来るからな……」

コダイ「じゃがマスタードは平気なのだろう？」

メガネ「えっと次回もお泊まり編です、こんなほのぼのは時々入ると思います」

レイ「皆さまの意見や感想などイロイロ待っています!!」

コヨリ「バイバイです」

〈次回もお楽しみにしてください〉

料理の評価は難しいboyコダイ(前書き)

お泊まり会のつづきです。

料理は作者の勝手なイメージです。

そして長いですgdgdです。

後編では収まらなかったなので中編です…

料理の評価は難しいbyコダイ

「ワクワク」

ソファーに寛いでる俺の脚の上に座っているレイは、ソワソワしながらある一点を見ている。

レイの視線の先にはなのは、フェイト、アリシア、はやて、アリサ、すずかの6人が台所で各々の料理を作り始めている……

初めは『皆で料理する』ハズだったが、馬鹿アリサの提案で『皆で料理対決をする』という事になっている。しかも俺やレイを審査員に巻き込んで……

「まだかな、まだかな」

そんな事も知らずにソワソワしているレイ。

シヤマルじゃないし全員問題無いだろう……下手な材料買ってないし。

と言うか良く6人で台所をぶつからずに動けるな……確かに台所はかなり広い方だが……幼馴染の成せる業か？

「レイ……とりあえず落ち着け」

「ふえ？……うん」

さて………何が出るか……

全員の料理は完成、順番は事前にジャンケンで決めたらしい……最初はフェイトだ。

「はい、おまたせ」

俺とレイの前に置かれた料理はオムライス、しかも……

「見てみて！私の顔が描かれてる！」

ケチャップでレイにはレイの、俺には俺の顔がオムライスに描かれていた……

「印象は良いな……」

今回はレイの為の料理だしな……しかし絵が上手いな……

「コダイ、早く食べよう！」

そうだな……この後もまだあるからな。

「いただきまーす！」

スプーンでオムライスを掬う、中は一般的なチキンライスの様だ……

……味はどうだ？

「アム……」

「アム！……モグモグ……おいしー！！」

「美味しい……」

「本当！？」

向かいのテーブルから身を乗り出すフエイト……

「嘘を言っでどうする」

卵もふんわりして、鶏肉が柔らか過ぎず程良い弾力……ん？この後から来る爽やかな酸味と甘みは？……あ。

「……リンゴだ、リンゴが少し入ってる」

「え？！一口で分かつちゃったの？……確かに鶏肉を柔らかくするのにリンゴの果汁に漬けて、ケチャップにもすりおろしたのを少し加えたけど……」

果汁か……俺は匂いが移るのが嫌で、ヨーグルトを使っているけど……

……逆に全体的に風味付けして一体感を出したのか……。

「甘くておいしー」

「後味が良いな……今度試してみるか」

こう言うのがあるから料理は面白いんだよな。

「えへへっ……実はコレ、母さん達が教えてくれたの胃袋を掴むのが一番手っ取り早いって」

リンディとプレシアが……確かにあの二人の料理の腕は桃子と同じ位だったしな……何が一番何だ？

「頑張つてはいるんだけどコダイ見たく中々うまく行かなくて……エリオから聞いた『半熟トロトロオムライス（命名レイ）』の話聞いた時は色々大変だった……コダイの料理って聞いているだけで美味しそうだもん……」

ああ……それな、何となく作った半熟オムレツをチキンライスの上に乗つけてそれを開いて被せたオムライスの事……エリオが好きな料理の一つでもある。

「なら、今度行つてフェイトとアリシアに作り方教えてやろうか？」

「え……いいの?!」

「エリオの保護責任者だろ？好物の一つでも覚えとけ」

「ありがとう!それと、リンディ母さんから聞いたんだけど男を落とすには『ビヤク』を入れると良いって聞いたんだけどそんな調味料コダイ知ってる？」

「……今度……見つかつたらな……」

あの甘党女本気で始末するか……

次はアリシア……そう言えばアリシアの料理って食べたこと無いな……どんなものか……

「私はコレ!」

「わ」

アリシアが料理を出した瞬間、大きな目を見開き輝かせるレイ。興奮気味に俺の袖を引く。

「お花だよ！お花！カレーに目玉焼のお花があるよ！！」
代わりに説明ありがとうレイ。

アリシアの料理はカレーライス、しかもその上に型を使ったのか花形に焼かれている目玉焼が乗っている。

「これは子供の頃に良い事をした時に母様が作ってくれた『はなまるカレー』だよ！」

「あ、これ私も食べたことある！」

胸を張るアリシアの隣で懐かしそうに見ているフェイト……

「くっ……さすがシヨタコン執務官姉妹や……子供心をガツシリ掴む料理を覚えとる……」

「「はやて！私そんなじゃないよ！！本当だよ?!」」

「そうだ、フェイトとアリシアはロリシヨタコンだ」

「「フォロー無し?!」」

「「いただきまーす！」」

「「コツチは無視?!」」

レイは無視と言うよりご飯目の前に聞いて無いと言うのが正しい。

さて、カレーの方は……少し辛めだな、カレーはルウっぽいな……

ニンジン、ジャガイモ、玉ねぎ、牛肉と具は普通だが隠し味にコーヒーを入れているな……

「ハフハフ……かりゃ〜い」

レイは嫌いなものは無いが辛いのと苦いのがそんなに得意じゃないから大丈夫か？

「あ、辛かったら上の目玉焼を崩して混ぜて食べてみて？」

「混ぜるの？」

「うん、目玉焼きの下にはチーズが乗ってあるから混ぜると辛さが和らぐよ」

「やってみる〜……まぜまぜ……アムツ……辛くない!!」

「でしょ？辛いのが好きならそのまま苦手なら混ぜるのがこのカレーの食べ方！」

そっと、目玉焼きを避けるとその下にスライスチーズが乗っていた。

「見た目も目玉焼きが乗ってて豪華だし、見栄えだけじゃなく辛さの調整を自分で出来る……良い工夫だな」

「まあね、後チーズは私オリジナルだから!」

成程、乳製品は辛さを和らげるからチーズは持って来いだな……

「そう言えばエリオから聞いたんだけど、コダイってカレーはルウを使わないでスパイスから作ってるんだよね?……何で?」

「カレーの香辛料は漢方と同じ、ルウには油分が入っているし、人の倍以上食う奴がいるから、出来るだけ体に良いのを作るのは当然だろ」

「へえ……やっぱりコダイってお母さんだね」

誰がお母さんだ。

「次はアタシよ!」

「わあ〜!」

「これは……」

アリサの料理はピザ。しかもクォーター、味は一般的なマルゲリータとエビやイカやホタテ等が入っているシーフード、更に……これは?

「アリサ、マルゲリータとシーフードの他は何だ?」

「えっと……コレが餅と明太子のピザにコレが照り焼きチキンのピザよ。大丈夫、味は保証済みよ!」

「いただきます!」

後の二つは食べたこと無いが知らないが、前の二つは見るからに美味しそうだ……しかも生地が厚く日本人好みのモチモチした生地で

は無く、本場イタリアの薄い生地……凝っているな。

「それにしてもアンタのレンジって最近発売された石窯オーブンレンジなのね」

「それな、この前ちょっとした事でレンジが爆発してこの際だから最新のを買おうと……」

「ちょっと待ちなさい！！一体全体何をどう間違ったらレンジが爆発するのよ！！」

「簡単に説明するとな……」

ある日の夕飯、サラダのゆで卵を忘れた 『私に任せてください』
と言ったアインに任せる 『これですぐ出来ます！』と言うアイン
の左手には卵パック（Ｌ１０個入り）、右手でレンジを開ける 爆
発 レンジの戸が顔面直撃で一回死亡

「という一連の流れがある日の夕方に起こった」

「さらっと言ってるけど一回死んだって……」

嫌々、アレって結構硬いんだぞ？軽く死ねる……

「んしょっ、んしょ……」

レイはピザから溶けて垂れたチーズを一生懸命乗せている……俺も
食べないと、レイに取られるな。

……非常に面白そうでそえられるこのモチ明太子を……

「アム……美味しい」

「当然よ！」

そう言えば以前、モチとチーズのお好み焼きがかなり美味しかった
な（デート・はやて編参照）。明太子も良いアクセントになってい
るな……

そしてこの照り焼きチキン……照り焼きってあれだよな？あの照り
焼きで良いよな？合うのか？……面白そうだから良いか。まず一
口……

「……何だこれ？意外に合う……少し濃くて甘めの照り焼きが逆

にチーズと下のソース……マヨネーズか？それと絡んで丁度良くなる」

「モヒモひんもふおももひんなもいひ〜（モチモチキンもトマトもみんなおいし〜）」

ハムスターの頬袋みたいにピザを口に詰めて喜んでるレイ……

「一度にマルゲリータとシーフードとモチ明太子と照り焼きチキンを入るな……味が分からなくなるだろう」

生地が薄いから一度に口に入るけど……って俺まだマルゲリータとシーフード食べてないな。

「マルゲリータもシーフードも美味しい……しかも本格的だ」

「ふふん！何時かアンタに『ギャフン』と言わせるために練習したのよ！……アンタに『美味しい』って言って貰えるように……もしかしてアリサって凝り性？……と言うか最後辺りなんて言っただんだ？」

「大本命の登場や！！」

はやてなら不安なことは無いだろう。

タケノコの炊き込みご飯に肉じゃが……あの六人の中で料理歴の長いはやてらしいな。

「いただきまーす！」

レイは炊き込みご飯の方を食べ始めた……

「モグモグ……おこげおいしー！」

「ほう……おこげを知るとは、レイちゃん中々の通やな〜」

おこげもあるのか……色も焦げすぎてないな。

「土鍋で炊いたのか？」

「ウチの家では炊き込みご飯は土鍋やで」

俺も炊き込みご飯は土鍋、いつもは炊飯器だ、理由は………土鍋じゃ足りない。

「ん…このタケノコ、しっかりエグミ取れているな……」

「そやで、エグミを取る際に米のとぎ汁で茹でてるんや。」

「俺は米ぬかと鷹の爪（唐辛子）で茹でてる」

タケノコは採ったそばからエグミが出てくるから、しっかり取らなければ食えたものじゃないからな……

「米ぬかつてこの近くにあつたんか？」

「商店街近くに精米所あるだろ、あそこに山の様にあるぞ」

それに大根煮たりとかする時も使うし栄養もあるしかなり役に立つ。

「それにこの肉じゃがも味が染みてるのに煮崩れてない、箸でしっかり掴める、圧力鍋か落としぶたでも使ったのか？」

「フッフ……コレこそ長年の勘や！」

「この味付けもか？」

味がしみ込んでいるのに濃すぎず薄すぎず丁度いい感じに仕上がっている。

「フッフ……ただのめんつゆではこの味は出せんぞ」

「ムグムグ……オイモホクホク」

そんな妖しい笑いを浮かべるはやてをよそにひたすら食べ物に集中しているレイだった。

「と言っかレイちゃん、お箸使えるんやな」

「むう？」

はやてが自分を見ていた事に気付いたレイが炊き込みご飯を限界まで口に詰め込んだままこつちを向いた。

「何でもないで、気にしないで食べてや」

「それ以前に詰め込みすぎだ……」

「む……ムグムグ」

返事がどうか分からないがレイが口の中のモノを飲み込み始めた……

「箸の持ち方とかは一回教えたらすぐ覚えた……しかも実体化して間もない頃に」

「リンやヴィータは何度か練習して覚えたで……コダイ君から産まれただけあって覚えがええな」

漢字は未だにダメだけどな……

「えっと……はやてちゃんの次はあんまり自信ないの」

なのはは重箱の一段を使って半分は俵型のおにぎり、もう半分は卵焼き、大葉とチーズを肉で巻いて揚げたフライ、ドレッシングを掛けたサラダと弁当風になっている。

「いただきます！」

「フライは横にあるソースにつけてどうぞなの」

お、このソース手作りか？……見た目はタルタルソースみたいだな。フライにソース付けて一口……

「……触感がタルタルソースなのに味が根本的に違う……和風？」

「うん、お母さん特製和風タルタルソースなの」

桃子直伝か……桃子には時々新作ケーキの試食を頼まれる……が殆どは新制服の試着だ、女装はオシャレだから良いが。

「アム……このサラダのドレッシングも手作りか」

「このドレッシングはお家でも使ってるの！」

これは醤油やゴマ、ネギ等を使った和風ドレッシングか。

「コダイ！このおにぎり、色んな具が入ってる！」

レイがおにぎり両手に興奮気味にコッチを見て来た……

「分かった……分かったから、そのお弁当を食った時に付いたお弁

当を取れ」

「ふにゆ？」

「レイちゃん、ほっぺにご飯粒ついてるよ」

「にゅ〜……ありがとう！」

なのはがレイについてるお弁当と取ってやる、その後ろで5人が『ああっ！？ずるい！』とか言っていた……

「おにぎりの具は、基本的な梅、鮭、おかかに加えエビマヨ、カリフォルニアロール風、挽肉をカレー粉で味付けしたキーマ風とバリエーションに富んで飽きさせない」

「モグモグ……おいひ〜」

その証拠にレイが口の中の物が残っているのにまた手を伸ばしてる。

「レイ、それ飲み込んでからにする」

「ふぁ〜い……モグモグ……ゴックン！」

「これも桃子の直伝か？」

「えへへへ……まだ自分の味付けって言うのが良く分からなくて……まだ修行中の身と言う事か……」

「でもいつか見つけてみるからその時は味見してね！」

「いつでも良いぞ」

味見役ともなればレイ達は諸手を挙げて喜ぶぞ？

「その時はよろしくね、レイちゃん」

「モグモグ……えう？」

だからお前は一度に口に詰め込むな……

「お疲れ様、最後は私だよ」

「うう」

長かった料理対決も最後のすずかの料理。

レイは疲れて唸っているのか、もうすぐ終わるのになのか……完
全に後者だろう。

「おお」……

今までのリアクションとは違い息を漏らすレイ……

茶碗蒸し、ほっけの煮おろし、出汁巻き玉子と本格的な和食だった。

「自分的には上手くできたかな」って思っているんだけど……

「いただきまーす！」

「レイ、魚の小骨はしっかり取れよ？」

「OK！」

さて……まずは、ほっけの煮おろしを……アム……うん。

「美味しい……自信持っていいぞ？」

「本当に!？」

「煮おろしの出汁に苦みや臭みが一片も無い……灰汁取りをしっか
りしている証拠だな」

「出汁の灰汁取りね、実は卵白を入れると卵白が灰汁をくっ付けち
やうから簡単に取れるんだよ」

卵白で灰汁取りはたまにするが毎回やると黄身が異常に残るから普
段はひたすらおたまで取る……

「残った黄身は？」

「ちゃんと出汁巻き玉子と茶碗蒸しに入ってるよ」

成程、だから全部の品に卵を使っていたのか。

「茶碗蒸しの具もしっかりと下拵えしているし、出汁巻き卵も焼く
前にザルでこしているから口当たりも良い……全部しっかりと処理
しないとここまでで無い味だ」

「だっしまつきたま」

変な歌を歌いながら出汁巻き玉子を食べるレイ……

「レイちゃん、沢山食べるのは知っているけどそんなに一杯食べて
お腹壊さないの？」

「心配するなすずか、アイツはそんな柔な胃袋をしてない。すずかも知ってるだろ？」

こいつが人並みに以上に食べるのを。(一周年記念特別編『レイとリンの冒険』参照)

「うん……でも太らないか心配だよ……」

「いや、デバイスだから太らないから」

あれ？待てよ？……こいつらと同じぐらい食べるエリオはどうなんだ？……って、子供だからそんな心配無いかな？

「モグモグモグ……おいしー！」

「……羨ましい……」

「すずか、落ち着け」

声と目がマジだぞ……

「……………で、優勝は！？」「……………」

全ての料理を食べ終え、審査をする事に……と言っかコレ対決だったな。

「待て、今回はレイの為の料理だろ？なら判決はレイが適任だろ
そう言って、未だ食べ続けているレイに聞く。

「レイ、この六人の中で誰の料理が良かった？」

「モグモグ……ゴツクン。ふえ？……皆おいしかったよー！
上機嫌な笑顔で答えて再び食事を再開する……

「と言っ事だ」

「ま、まあ……レイがそう言っなら」

「全員優勝でええな」

アリサ、はやてに続き全員が納得したみたいだ。

「料理対決は全員がゆ」「ごちそうさま!!」「……………は?」

思わず声がした方に全員が向く、そこにはレイが自分に出された料理を全部食べ終えた後だった……………

「……………優勝レイ……………異議は?」

「……………異議なし……………」

料理対決はレイの一人勝ちに終わった。

料理の評価は難しいbyコダイ（後書き）

メガネ「お泊まり会編と言うより、料理対決編になってしまった」

コダイ「予想以上に長いな……まだ続くのか……」

メガネ「後編が短くなるので練り直し練り直し……」

レイ「おいしかった……あ！デザートがあるんだった！」

メガネ「まだ食べるのか!？」

コヨリ「よくだべますね……」

コダイ「食べても良いがやる事をな？」

レイ「感謝コナ、アナザー様、畏無様、エドワード・ニューゲート様、山義 芳原様、スペリオルス様、雷光様、龍賀様、ポワソ様、感想ありがとうございます!!」

メガネ「畏無様からはレイにデザート食べ放題、メガネには地獄に居るような気分になるお茶と天国に居るような気分になる芋けんぴを、コダイには三日月饅頭（チョコ味）を。エドワード・ニューゲート様からはメガネとコダイにテイルズシリーズの??料理人として有名な皆様からの料理一式をコダイにはそれに加えてプレシアの服装とこちらのメエプロンドレス（眼帯付）を、レイにはテイルズオブシンフォニアのコレットの服とこのパンダのぬいぐるみを、コヨリには和服を。山義 芳原様からは鮫五十匹と抹香鯨ミンククジラを五十頭、最高級牛肉50t、高レベルの鶏肉40t、高レベル豚肉30tを。

スベリオルス様からは最高級玉露と饅頭を。雷光様からはレイに【胃薬】を10個、メガネ様に何となく【胃薬】と【ポーシヨン】を10個を。ポワソ様からはレイに体力回復効果のある『エリーのアトリエ』の<チーズケーキ>10ホールと、プレゼントに同じく『エリーのアトリエ』の調合用アイテムの<精霊の涙>を。頂きましたありがとうございます!!」

コダイ「モグモグ……」(??料理を食べてる)

メガネ「よ、良く食べれるな……中には見せちゃいけません的なモザイクが掛かりそうなのもあるのに……」

コダイ「ん?シャマルの料理より味が分かるぞ?」

メガネ「今俺の中でシャマルの料理が神格化したんだけど……」

コヨリ「ソレをへいきでたべるコダイもどうかとおもいます」

メガネ「コイツに関しては今に始まった事じゃないだろ」

コヨリ「そうですね」

レイ「モキユモキユ……」(デザート食べ放題)

メガネ「なあ……あいつさつき六人分食ったんだよな?本編で」

コヨリ「はい……」

メガネ「んで今、大量のデザートを食べいる」

「コヨリ」かなり食べてます……」

メガネ「レイ……ってかマテリアルズとエリオ、あいつ等の胃袋如何なっているんだ？さらにもう少し経つとナカジマ姉妹やナンバーズも……あいつ等が同時に会ったらどうなる？」

「コヨリ」エンゲルけいすうがマツハで大変なことに……」

メガネ「それこそコダイの節約レシピの出番だな」

「コダイ」何の話だ？」（食べ終えた）

「レイ」「ごちそうさま！！」（同じく）

メガネ「と言うかコダイも食べるんだな……」

「コダイ」俺は出されたら出されただけ食べるだけだ」

メガネ「ここにも大食い候補が……」

「レイ」皆さまの意見や感想などイロイロ待っています！！」

「コヨリ」ばいばいです」

「次回もお楽しみにしてください！」

深夜のテンションが異常bYロダイ(前書き)

お泊まり会・後編

深夜のテンションが異常b yコダイ

「……………よし。片づけ終了」

料理対決も終了し、今なのは達は沸かした風呂にレイと行かせていて。俺は食器等の後片付けだ……………え？入浴シーンを見せる？

残念だな。レイ（幼女）がいるから駄目だ。

「さて、そうだな……………明日の朝食と弁当の下拵えとかして置くかな。明日は人数多いし……………」

と言つてもいつもより量が少ないから凄く楽なんだけど……………

「朝食は……………パンかご飯で弁当決めないと……………あ、どうせなら皆にリクエスト聞くのも良いな……………」

……………早く上がって来ないかな。（料理したくて仕方ない）

P i P i P i P i P i P i P i

「ん？通信だ……………」

開くとモニターにリンディがニコニコと手を振っているのが映っていた……………後ろでマテリアルズが騒がしいけど……………

「こんばんわ〜コダイ君」

「区切りの良い所で掛けてくるな……………確信犯？」

「いやね〜ただ『コダイ君もう後片付け終わったかな？』って思った時に掛けているだけよ？」

なにそのストーリーカー級の勘は……………

「で、何か分かったのか？」

「崩壊した257無人世界の周囲を世界を調査しても進展は無し……………けど、その調査中に何度も崩壊した世界で見つけたロストログアの反応が何度も確認されたわ」

レイが一瞬しか分からなかったあの反応か。

「解析は？」

リンデイが首を横に振る……

「一瞬すぎて全然……それに、あの操られた局員もソレ以降目撃情報がないわ」

「進展無しで通信したと言う事は……変更か？」

「その通りよ。次は調査範囲を広げる予定なの、だからコダイ君達は明日学校が終わったらアースラに出向して」

「分かった。皆に伝えとく、近くにいますし」

「あら？……コダイ君の家にいるの？」

「今日何故か知らないが泊るらしい……それにアリサとすずかも一緒だ」

リンデイがキョトンとした顔から徐々に……あ、この顔は馬鹿な事を考えている顔だな。

「これはお赤飯炊かなくちゃ」

「何で赤飯？……祝う事なのか？たかが泊るだけだろ？」

「……そうだった……そういう子だった」
何か呆れられている？

「コダイ〜!!」

レイが上がって来たな…

「じゃあ、そろそろ切るからな」

呆れている状態リンデイの通信を切る。

「あがつたよ〜」

髪を下ろし、Yシャツ一枚のレイがゴツチに走って来た。

「牛乳は!？」

「いつもの所だ」

そう言った直後には冷蔵庫を開け、牛乳パックを取りすぐ冷蔵庫を閉めた。

「お風呂ありがとうコダイ君」

「良いお湯だったよ」

「大人数でお風呂って何年ぶりだろうね？」

「それよりもこの人数で入れたのがビックリ……」

「ほら、しっかいしなさい！」

「うう……ありがとうアリサちゃん」

レイがコップに牛乳を注いでいると、パジャマに着替えてるなものとすとフェイトとアリシアが最初に見えた。少し疲れているようだ……それにはやてはアリサに支えられているし、何があった？

「騒がしかったろ？レイ」

「にやははは……うん」

「楽しかったけど……少し疲れちゃった」

気の抜けた笑いで返すのはとすずか。

今まで俺か、アインか、マテリアルズと言う選択ししか無かったが今回の様な大人数で入るのは初めてだからテンションが異様に高かったんだろう……

「私は楽しかったよ、子供の頃に戻った気がする」

逆にアリシアは物凄い元気そうだ……

「今でも子供だろ」

「酷っ！？これでも皆の中で一番背が高いんだよ！？」

「俺はレイを除きこの中で一番小さいが子供扱いは無かったが？女扱いはあるが」

「あう……それはコダイが反則的に色っぽいからだよ！」
色気関係無いだろ……

「それはもう良いとして。何ではやてがああ成っている？大方誰かの胸を揉んで反撃されたか？」

「えっと……それは……確かにそうだった……というか未遂で済んだと言っか……」

フエイトの歯切れが悪い……一体何が。

ガシッ!!

「……………コダイ君」

「はやて?」

ふらつきながら俺の肩を掴んできたはやて、少し震えている?

「……………レイちゃんに何て言う兵器を装備させたんやああああああああああ!!!!!!」

「兵器? 装備? 何で血涙?」

「シャンプーハットや!」

「それか? レイがいくら言っても目を閉じないから買った奴だが…

…そのどこが兵器なんだ?」

「兵器やる!! 幼女がシャンプーハットを装備したら可愛さと萌えが10000も上がるんや! 一人でお留守番出来て『成長したな』と思っただらこれやで!? ウチを萌え殺す気か!? 持ち帰って良いですかお母さん!!」

「言っている意味が分からないが誰がお母さんだ。誰か説明頼む…

…風呂場で何が起こった」

「私が説明するわ……………簡単に纏めるとはやてがレイにセクハラするために頭を洗ってあげるとか言っただよ。そしてレイがシャンプーハットを付けてはやてに向かって『優しくしてね?』と言っただよ」

「それでアリサ、はやては本当にやったのか?」

「気絶したわ……………私が代わりに……………」

それ程凄いのか?……………レイにシャンプーハット……………

ちなみにはやてが正気に戻ったのは数分後だ。

そして夜も更け深夜。

「皆と一緒に寝るー！」

というレイのバカな要望をなのは達が賛同しリビングに布団を敷いて何時かの様な状態に……

更に中学生が大人しく寝るわけもなく……全員布団の上に円を描く様に座り話しこんでいる……

「というか寝ないのかよ……」

「せっかくのお泊まり会やで？眠ったら損や」

意味が分からない……

「皆でお泊まり何て小学生以来なの」

「そうだね、でも仕事とかで泊る機会は少なかったけど……」

「中学からはリンディ母様が仕事を減らしたから、皆と会う時間が長かったけど」

「今年は何受験生やな」

としみじみとしている魔導士組。

「アタシとすずかは進学、アンタ達はミッドチルダに引っ越すものね」

「海外と違うから会える機会が一気に減っちゃうね」

「うゆ……寂しいよお」

「二度と会えない訳では無いんだ。連絡位取れるだろ」

それにプレシアに言えば転送ポートを作ってくれそうだしな。

「それもそうね……でも、アンタ等ワーカーホリックっぽい所ある

し連絡が来なそうだし」

アリサがジト目で魔導士組を睨む。

「にゃ、にゃははははは……そんなこと無いよ」

「否定するなら、その笑いはどうかと思うぞ」

誤魔化すような笑いをしているのはにツツコンでやる。

「私はちゃんと連絡……ってダメだあゝコダイのお仕事が忙しい

」

強襲隊もクリミナルも殆ど前線で戦うからな……

「そうね……アンタが一番危ないわね……」

え？なのは達からコツチに矛先が向いた？

「心配するな、仕事はサボっても連絡はサボらない」

「仕事はサボっちゃだめでしょ！！アタシが言いたいのはアンタのフラグ体質よ！！アンタに助けられた美少女はフラグが立つんだから」

「だからフラグってなんだよ……しかも何故美少女限定？」

「前にも言ったけどアンタが助ける」美少女よ！！」

何だよその極論……

「あ、フラグと言えば。ナガジマ三佐から聞いたんやけど……」

はやてが何か思い出した様に手を合わせる。三佐？……ゲンヤの事か。

「コダイ君が助けたナカジマ三佐の娘さんが最近コダイ君の事聞いてくるらしいで？」

「コダイ君が助けたって……もしかしてあの空港火災の？」

なのはが首を傾げながらはやてに聞いた。

「そやで、見たところ将来有望やで？胸とか。ウチが聞く限りバツチり立つとるで？」

セクハラ混じりの発言をするはやて。

「やっぱり立ててるじゃないのこのフラグ母神……！！」

何だよそれは……

「フラグ母神とか意味が分からない……」

「種類問わずフラグを立てまくるからよ！…もっフラグの母じゃない！」

だからフラグって何だよ……………

その後、フラグの話はそこで終わり、別の話で盛り上がり……………

「あ……………もっ日にち過ぎてる」

「……………嘘お！？」……………

俺が気づかなければ、朝まで話していたと思う……………ちなみにレイはフラグの話の途中で就寝リタイアしていた。

深夜のテンションが異常byコダイ（後書き）

メガネ「修学旅行の時、友達と話してガチで朝になっていたって事があります……」

コヨリ「ねむくならなかったんですか？」

コダイ「今も、夜中に起きている事多いよな……」

メガネ「いや……深夜の方が静かで執筆しやすいってのもある。あと、深夜のテンションで書く事が多い……」

コダイ「それで、朝に見て意味不明な文面で消す」

メガネ「正解です……」orz

レイ「感謝コナ、畏無様、七夜士郎様、山義 芳原様、龍賀様、感想ありがとうございます!!」

メガネ「畏無様からはメガネに犬(30m)を。山義 芳原様からはシヨートケーキ四人分と白百合の花束を二つを。龍賀様からは宝具『王の軍勢』を。頂きました、ありがとうございます!!」

コヨリ「おうのぐんぜい?」

メガネ「簡単に言うと、周りを平地に変えて独立サーヴァントの連続召喚する宝具?」

コダイ「サーヴァント……と言う事は英霊と言う事か……よし、

The Striker 編主人公・デバイス設定（前書き）

忘れかけてた主人公設定です…

The Striker 編主人公・デバイス設定

名前 時代ときがわ 古代こだい 本編ではカタカナで表記

コダイ・Tトキガワ・ベアトリス（これはミッドにいる時）

性別 男の娘若しくは第三の性別『コダイ』

妄想CV・ 柚木涼香（武装錬金の津村 斗貴子をイメージ）

年齢 14〜15歳

身長 なのは達よりかなり低い（『デート・アリシア編』を見るに約145cm前後）

体重 なのは達よりかなり軽い（多分女の子でも持てる位）

好き 料理、動物、面白い事

嫌い 正義、過去話、面白く無い事

特技 料理、声帯模写、瞬間記憶、完全記憶、情報収集（顔と名前が分かれば知れない事は無い） e t c .

趣味 家事全般（料理の腕は桃子やはやて以上）

魔力光 虹色（レアスキルの所為で変色していて、本来の魔力光は純白）

魔導師ランク S

使用魔法体系 ベアトリス式

容姿

前髪は顔を隠し、後ろは膝まである黒髪。髪に隠れている目は青くハイライトが無い（『とある』の御坂妹の目）のが特徴。

身長と体重から分かるように小柄で華奢で肌は白く、とてつもない美女顔。（だが男だ）

服装は主に黒いロングコートの黒ずくめ（季節問わず）。中学の制服は指定の男子服にネクタイを外し、ブレザーの代わりに同色のカーディガンを着ている。

たまに女装しているが本人曰く『女装はオシャレ』らしい。ちなみに私服は殆どが自作である。

性格

良く言えば天然ドS。女子供容赦なしの性格。無表情だが、面白そうと言う理由で行動する、桃子やリンディに近いヒエラルキーの持ち主。

周りから『性格最悪の完璧超人』と言われるだけあってか、性格以外に非の打ち所が殆ど無い……（魔法は除く）

全体的な雰囲気は大人すぎる為か知っているのは達からは『お母さん』と呼ばれる事もある。

あまりにも天然故の直球の言動でフラグが立っている事を全く自覚して無く、ある意味でも『性格最悪』である。その事から『フラグ母神』と言う二つ名が付いた。

『正義』という言葉が極端に嫌いで、耳にした途端、口調が中性的になる（コダイ曰くコレが本来の口調）

前の世界の出来事の所為か人を殺すのを当たり前、悪くない事だと思っっている……

レアスキル
稀少能力

チューニング
『同調』

一度見た魔力光なら完全に変える事ができる、魔導師が持つてる魔力変換資質もその魔導師の魔力光に変えれば扱うことができる。

稀少能力は魔力と関係ないので使用できない。

自分より魔力量が多い魔導師に変えても魔力量はコダイに依存する。また、魔力光を完全に変える事が出来るので、人のデバイスを起動させる事が出来る。

コダイの魔力光が虹色の理由はこの同調によるもので、周囲の魔力素に反応して変色してる。本来の魔力光は純白。

特異体質

ファンタム・ペイン
『幻痛』

魔法を強制的に殺傷設定で受けしてしまう体質。

『不死体質』

どんな事があっても死ねない体質。不死身というより、死≡気絶程度になる。

再生力は普通の人間並み。

コダイの前の世界にあった能力。

『想像を創造する能力』

コダイの前の世界で使っていた能力。

詳しい事は『トキノツキト』に載っている…

名前の通りイメージさえしっかり出来ていれば何でも出来る能力。ただし、コダイは重傷にならないと発動出来ない様になっている…

女神に「あなたの人生不幸過ぎ！って事で転生させるね」と殴りたくなる様な顔で言われ（実際殴った）転生させられた。

転生する前は「殺人姫」と呼ばれ、世界を恐怖に貶めるほど大量殺戮をしていた超極悪人。実は、何で死んだのか良く覚えてない。

リリカルなのはの世界に転生後は、なのはと巻き込まれる様な形で「P・C事件」「闇の書事件」を解決、その最中、囑託魔導師になり半年を掛け「ベアトリス式」を作る。後に「新代の魔導師」「不死の魔人」と言われるようになる。

現在は、三提督公認犯罪組織「クリミナル」とそのカモフラージュの強襲隊に所属、人助けの片手間に人殺しをしている。

元が悪人の所為か、人を助け様とすると安全な筈なのに死にそうな目に合うが、逆に人殺しの最中だとどんな危険な状況でもほぼ無傷でいられると言う。ジンクスのものを持っている。

本人とは無関係にロストロギアを取り込んでしまい、周りからネタにされてしまう事がある。

使用武器はデバイスのレイの他に銃器数種、ナイフ（大型の多目的用と小型の投擲用）、妖刀「白式・幻魔」（滅多に使わない）、「DEATH NOTE」（現在Vol.547）

ここでの「DEATH NOTE」はジャンプのアレでは無く、ばれたら社会的に殺せれそうな情報が沢山あるメモ帳の事である。

コダイ「ずいぶん変わったな」

メガネ「振り返って、自分でも分かりやすいようにした」

コヨリ「それにジंकスって……」

メガネ「それね。コダイ「悪人だし……第一防御魔法は一切覚えてないし」

コヨリ「とことんまもるのにむいてないんですね……」

コダイ「どうでもいい、そんなものは良い人（なのは達）に任せればいいだろ。良い事をするとかクナ事が起きない」

メガネ「そして次は天使と呼ばれた萌えっ娘のレイです！」

レイ「は〜い!〜!」

デバイス

名前 レイ・モモ・ブラット（愛称レイ）

声 榊原ゆい

歳 約6歳

形態 顔も隠れる全身甲冑（起動時）、実体化（ユニゾンデバイス状態）

待機 右手首のジュエルシードを中心に右肘まで金の蔦が伸びてる
好き みんな、コダイの料理、食べる事、リインと遊ぶこと、コダイのお手伝い！！

嫌い 辛い物、苦い物、漢字、お化け（重要）、怒った時のコダイ
（超重要）

魔力光 虹色（レアスキルの所為で変色していて、本来の魔力光は
純白）

魔導師ランク 不明（元ロストロギアなのでコダイよりは上）

使用魔法体系 ベアトリス式

容姿（実体化）

肉体年齢は6歳前後。身長は年相応だが、体型は年齢を無視した容
姿ではやてが『成長期を無視した巨乳』と言っている。

見た目は黒髪で青い目のT O L O V Eるの金色の闇。
実体化に至って経緯は。

はやてから右脳タイプの説明を聞く 実践 実体化成功

性格

コダイから実体化しただけあって、持ち主以上に天然。戦闘中もお構いなしの天然発言が多く、コダイも同レベルの天然なので放っておくとボケ合戦を始める。

かなりの食いしん坊で、5人前は余裕、調子が良ければ10人前は軽く行ける（byコダイ）

年相応の言動でやや舌足らずだが。最近肉体年齢と精神年齢が一致

したのか、物を持ちたりや留守番等、良く手伝いをしたがる。
漢字は未だに読めない。

機能

『バーニア』

背中と脚から魔力を噴射して空を飛ぶ機能。小回りやスピード微調整に優れているが、魔力の燃費がとてつもなく悪い。

『リコール』

破壊された装甲を再構成する機能。けど破損具合によってかなりの魔力を使うが、完全に修復が可能。

『シーリング』

ロストロギアを封印して回収する能力。普通の封印と違って、特殊な波長を出してロストロギアを吸い寄せるように封印して回収する。

『シード』

対象を情報として検索することが出来るが。検索ワードが正確でないと欲しい情報が無かったり余計な情報も入ったりする（用はググるって事）

『エクステンend』

コダイとそのデバイスのレイのシンクロ率が規定以上を越すと、能力・性能・容量・形状が増える。レイはコダイと疑似神経で、肉体と融合しているので普通のデバイスと違い強化が出来ないのでこの形で強化される。

現在のシンクロ率は1920%

『カートリッジシステム』

右腕の装甲の一部がスライドしてロードする。

手動装填式で最大装填数は5発。

『スタイル・イレイザー』
超高速戦闘形態。

フェイトのソニックフォームに似ているが、コッチの場合は防御は一切捨ててる。速さはソニックフォーム以上で、先読みの速さで更にそれ以上に動ける。

この状態ではカートリッジシステムと『バーニア』は使用不可能。
(イメージは髪型、服装共にT.O.L.O.V.E.の金色の闇)

『エアースューズ』

イレイザー限定の機能。『バーニア』の代わりでもある。
空飛ぶと言うより、空を走ると言う感じが正しい。

『フルフラット』

装填しているカートリッジを一度に強制的に全てロードする機能。

コダイがジュエルシールドを(うっかり)取り込んで、変質して生まれたデバイス。通常のインテリジェントデバイスにしては思考が幼すぎる。

入手当初は魔法が一切使えなかったが、コダイ達が開発した『ベアトリス式』のみ魔法が使えるようになった。

機能とはデバイスに備わっている物で魔力を使って使用するが、かなり燃費が悪いらしい。

リンとはとても仲が良く仕事とか無い日は良く一緒に遊んでる。

メガネ「レイはこれからどう成長させるか考え中です……取りあえず漢字読めるように……」

レイ「お勉強はやダー!!」（パタパタパタ……）

メガネ「今回はもう一つおまけとしてアイツの設定も書いてみました」

名前 コヨリ

性別 おんなです

妄想CV・SHUFFLE!のネリネの声……

年齢 14〜15歳

身長 コダイと同じ

体重 （血で汚れて読めない）

好き レイ、コダイ、作者、面白い事

嫌い 面白く無い事、面倒くさい事、漢字

メガネ「後書き限定キャラこんな感じ、見た目はレイが髪を下ろし

たのをイメージしてください」

The Striker 編主人公・デバイス設定（後書き）

レイ&pp・コヨリ」「メリークリスマス」」

メガネ「さて……今年はこれで最後の投稿になるのかな……」

コヨリ「がんばれ」

メガネ「うわ軽っ……」

レイ「感謝コゝナ」 畏無様、ソラト様、龍賀様、ポワソ様、感想ありがとうございます……」

メガネ「ポワソ様からはコダイとメガネにはペーネロペーとクスイーガンダム、レイとコヨリにはハロ（小型）を。頂きました、ありがとうございます……」

シュン……」

????「だよ……ってアレ？」

メガネ「霧夜たんインしたお！」

霧夜「死ねえ……」

ザシュ……」

レイ「今回のゲストは畏無様の作品『異形の魂を宿す者』の主人公、霧夜・T・ゼクトです……」

霧夜「……………」(キヨロキヨロ)

コヨリ「どうしたんですか？」

霧夜「え…………いや、コダイはどこかと……………」

レイ「知らないよ？コダイに用なの？」

霧夜「そうじゃないんだ…………ただ…………あいつがいると女装させられる可能性が……………」

メガネ「男の娘故、仕方ない」

霧夜「うわっ?!細切れにしたはずなのに!」

コヨリ「いつもの事です」

メガネ「コダイならあそこだ……………」

殺人姫「フフフフフフ……………」

メガネ「畏無様のお土産の名も無き英霊達を惨殺してる」

霧夜「え?…………英霊を惨殺って…………コダイって人間？」

メガネ「シャマルの料理を平気で食べれるしな」

霧夜「うわぁ……………どんだけやばいの？」

コダイ「見た目や匂いは普通だが味が壊滅的、何を使っているのか分からない、玉子焼きに関しては味が一切しないとか……………」(血まみれ)

霧夜「血まみれでなに言ってるんだよ!？」

メガネ「と言うかもう英霊達殺したのか」

コダイ「王の軍勢より大した事ないな」

レイ「サンタさ〜ん」(ミニスカサンタ)

コダイ「霧夜にプレゼント、手作りのクリスマスケーキだ」

霧夜「ケーキ可愛い……………しかも大きい……………」

コダイ「ちなみに予算は通常の半分だ」

メガネ「さすがお母さんだな……………」

霧夜「量も多いし早速帰って切り分けるよ」

レイ「コダイ〜」(抱きつく)

ゴシヤアアアアアアアアア!…!(ヘッドスライディング)

レイ「サンタさんのクリスマスプレゼント」

(ほっぺに)チュ

「ヨリ」わたしも」

(ほっぺに)ちゅ

レイ「えへへ」

「ヨリ」ふふん」

霧夜「……………もしかして酒か？」

メガネ「アレ？……………そんなものは手の届かないところに……………あるのは子供用シャンパンだけど……………」

霧夜「それって1%未満の奴だよね……………」

レイ「ふにゃ」

「ヨリ」にゅ」

「ダイ」……………」(打ち所が悪く、死亡……………)

メガネ「えつと……………何かゴメンナサイ」

霧夜「ああ……………まあ……………じゃあな！」

シユン

コダイ「よし、アルテミスに霧夜の寸法で作った振袖を送ろう……………」

メガネ「復活して早々コレだよ」

レイ「ふにゃ〜」

コヨリ「〜」

メガネ「次回の投稿は来年からになります。来年もよろしくお願
いします！〜！」

〜次回もお楽しみにしてください〜

天然（レイ）は放って置くと危険だb yコダイ（前書き）

新しいPCを買いました、以前とキーが小さくてなれませんかorz
なので少しの間は誤字が多くなると思います。

天然（レイ）は放って置くと危険だb yコダイ

「レイちゃん、好きな食べ物は？」

「コダイが作ってくれるごはん」

「くくくかわいい」

ああ………いきなり時間飛んでいるが、朝の教室だ。

え？何でレイが教室に居るかって？………昨日の連絡で放課後アースラに向かうので学校の転送先でそのまま行けるようにレイを連れて来た。その際に教師といういるあつたがレイが……

『コダイと一緒にいちゃダメなの？』（上目遣い+涙目）

と言ったら大人しくすると言つ条件付きで一発OKをもらった。ちなみにこの技はまだ教えて無い……天然でやったのか。

「レイたん！下着のい」くくく死ねやロリペドオオオオオオオオ！！！！」ギヤアアアアアアアアアア！！！！」

あ、また勇者^{だんし}が女子にフクロにされた。

「ふにゆ？何だったけ？……えつと」答えなくていいし、確認しな

くてもいいから」ふみゆ!？」

俺の席でスカート上げて中身を確認しようとしているバカをド突く。

「一気にクラスのマスコット……いや天使だね」

「あははは……私達が転入した時もこんな感じだったのかな?」

何か昔を懐かしんでいるテストロッサ姉妹。確かに凄いテンションだったな……男子が。

「俺が転入した時もこれ位のテンションだったな……」

「コダイ君の転入か……即効男子を敵に回したやな!」

「よく分かったなはやて」

「いや、今までの逃走劇見たら丸分かりやで」

いつも逃げているフリだがな、本気で逃げるのはM・D・Oだけだ。

「しかしそんなに子供が珍しいのか?」

「まあ、ここに子供が来る自体珍しいと言っか……大半はアンタが原因よ」

「俺?」

アリサに言われて記憶の中を探るが、身に覚えがあり過ぎる……だがレイに関しては無い様な……

「確かに……アリサちゃんの言う通り、コダイ君の身内にあんなに可愛い子が居たって聞くだけで驚きだもん……」

「にやははは……確かにビックリするけど、それでも無いかなく? だって二人とも天然だもん」

「ん? 誰と誰が天然だ?」

一人はレイ……もう一人はフェイトかアリシアのどちらかか?

「ほらね?」

何が『ほらね?』何だなのは?それに頷くなそこの五人娘。

パタパタパタ

「コダイ〜皆からお菓子貰ったんだ〜」

レイが両手を挙げてその中にある飴やクッキーなどを見せてくる。

「レイ、あんまり知らない人から物を貰うなど言っているのだろ……」

「ふにゆ？だつてコダイの知ってる人なら私の知ってる人だよ？」

「そう来たか……」

そう言えばコイツは五年前まで俺の右腕の宝石だったな……

「……………礼は言ったのか？」

「うん！ちゃんと『ありがとうございます』って言ったよ〜」

レイがまるで『褒めて褒めて〜』という感じの期待に満ちた目でこちらを見てくる……

「ほら……」

「にゅ〜 えへへ〜ほめられちゃった〜」

頭を撫でるといつもの様に変な風に鳴く……………前から思ったけど何なんだ？

「か、かわいい……………」

「凄いとむ……………なにこの天使」

「何でだろう……………トキガワ君が凄なお母さんに見える……………」

何言っているんだ、特に最後の女子、誰がお母さんだ。

「コダイはお母さんだよ！ご飯も美味しいよ！それに昨日なのは達がとま「レイ〜お菓子はお弁当食べてからだだからバツクに仕舞おうか〜」む〜！！」

何か言いかけたレイを後ろから口を塞いで拉致ったアリサ達……

「どうしたんだろうバニングスさん達……………」

「聞かれたく無い事でもあったのだろ？」

俺もよく知らないが……だが、アリサ達の行動が正しかったと気づくのはこの時気づかなかった……
その後、教師が来て授業は始まった……ん？レイ？俺の膝の上だ。

「ごはん ごはん」

授業中はトラブルは無く言う通り大人しくしていたレイ。現在昼休みにいつもの屋上で弁当を食べる事に……なんか男子がいつもの5割増しなんだが……

「コダイ、今日は何？」

「今用意しているから待っている……」

手を動かしながら、ソワソワしているレイに言う……って。

「何で貴様らもソワソワしているんだ？」

弁当を用意している途中にソワソワして視界にチラつく六人娘に目を向ける。

「だってコダイのお弁当だよ！？朝から楽しみで授業に集中できなかったよ！」

「気持ちは分かるけど、ダメだよ姉さん……」

力説したらダメな発言をしたアリシアにツツコミを入れているフェイトを軽く無視して用意を再開する。

昨日の夜に全員にリクエストを聞いたので朝食と同時進行で弁当を作った。初めからレイを連れて行く予定だったので、一人ひとり作るより全員分を纏めて作った。

「出来たぞ」

床に敷いたマットに重箱を並べる、中身はおにぎりとサンドウィッチから始まり、全員がリクエストしたおかず全部である。レイが食べる量も計算しているのでその光景はかなり凄い……量は重箱（五段）二つ分だ。

「飲み物は黒い魔法瓶が緑茶で銀の魔法瓶が紅茶な、あと箸と皿は使い捨てでいいか？」

魔法瓶二つと割り箸と紙皿、紙コップも並べる……全部どこに入っていたというツツコミは無だ、服の中に決まっているだろ。

「相変わらず凄い量だね」

「言っただろフェイト、俺の所には育ち盛りが4人もいるって。毎日これ位の量は作れる」

「うーん、これでも成長したと自負してるんやけどコレ見たら自信無くすな」

仕方ない……単に経験キャリアの差だ。前の世界から加算すると……10年以上か？

くうく

「うう〜まだあ〜？」

「悪い、待たせたな早速食べるか」

「うん！」

「いただきます！」x7

全員で弁当を囲って食べ始めた……

あれだけの量の弁当が10分ぐらいで殆ど空に近い状態になっている……主にレイなんだがな、ほかの六人も結構食べている……

「あ、そういえばコダイ、コレ！」

何かを思い出したかの様にレイが俺に薄いピンクの手紙を見せた……
「どうしたんだ？」

「コダイの机の中に入ってた！」

そう言えば授業中大人しくなんか漁っていたな……送り主の名前が書いて無い……

「コダイ！コレってもしかしてラブレターだよ！」

「は？ラブレター？」

「うん！だって甘い匂いするし女の子だよ！」

ピタ……

周囲の空気……正確には俺達を囲う様に空気が止まった……

「……………またしてもお前かあああああああああああ！」

「……………」

次の瞬間、その空気が弾ける様に屋上の男子勢が咆哮した。

「学園の六大美女を侍らしてもまだモテ足りないのかこのハーレム野郎!!」

「拳句の果てには純粹無垢の天然ロリ巨乳だと!? 範囲広すぎなんだよ!!」

えっと……何言っているか全然分からないが、俺がこれを貰って怒っているのか?

「食事中ぐらい静かにできないのか……たかが手紙貰っただけだろ」

「別に誰かがラブレター貰ってもここ前では無いがな……」

「貰った相手がお前だと別なんだよ!!」

「クソー!! 仲良く同じ弁当何か突き合ってよ! んなこと女子と一度もしたことねえぞ!!」

何て言うか、怒りの方向性が分からん……

「それは……」
「チヨイ待った!!」
「ん?」

突然はやてが念話で割り込んで思わず念話で返してしまった。

「今ここで、ウチ等が昨日泊まった事言ってみ……火に二トロやで」

「二トロ? ……そんなになのか?」

「当たり前や! せやからあの時レイちゃんをアリサちゃん止めに入ったんやで?」

だからか……

ラで、隣のフェイトとアリシアに似てるのがエル、そしてこのはや
てに似ているのがアンズで……」

レイが説明する度に男子の殺気が膨れ上がっている……話してい
る当の本人は気づいて無い様子……

「コダイ……今の内に逃げなさい」

「ここは私達に任せて」

アリサとすずかが袖を引き耳元で小声で話してきた。

「逃げるフリじゃないわよ、ガチで……」

「今コダイ君怪我しているんだから……」

「アタシ達が時間を稼ぐ、そんでレイを止める」

その方が良いみたいだな……

「もしもの時の男子の記憶操作とレイの始末を頼む」

そう魔道士組に伝えて屋上から飛び降りた……

「銀髪美人のメイドさんと同棲だとおおおおおおおお！？」

「それに高町さん、テストロツサ姉妹、八神さんのそっくりなロリ
っ娘だとおおおおおお！！」

「明らかにロリ成分が増えるだろうが！どんだけ範囲広いんだよ
！！下はロリで上は人妻までかあああああああ！？」

「このフラグビルダーが！！あれか！？前髪で目元隠すのはギヤル
ゲーの主人公だからかあああああああ！！！！！」

屋上からの叫び声が下りた校庭からも響いた……

「今日はいろいろお疲れ様」

「大した疲れてないけどな」

アリサの労いの言葉に軽く返す。

男子は昼休み終了間際には撒く事が出来た、今回は粘った方じゃないか？男子。なんか日を増すごとに強化されてるし、卒業間近になるとどうなるんだろう……面白そうだな。

教室に戻るとレイが泣きながら謝ってきた……どうやらなのはが軽くO H A N A S H Iをしたらしい。

午後は何時もの様に男子が居ないだけで何もなく進み現在放課後……屋上の転送ポートに向かう途中。

「ああ!？」

突然立ち止まるレイ……

「バックわすれたあ!!」

そつえば背負ってないな。

「どこにあるか分かるか？」

「ん……つと教室だと思っ」

「俺がとつてくるから先に待っている……俺も鞆を忘れた」

「どこまで似た者同士やねん!!」

はやてのツツコミを後ろで聞きながら教室に戻る……

教室に戻ると誰もいなく、俺の席に鞆とレイのバックが置いてあった。

「以外に早く見つかった……ん？」

レイのバックを持ち上げると、薄いピンクの手紙が足元に落ちた……コレってレイが昼休みに見せたラブレター、あいつバックに入れていたのか。

「……やっぱり名前が書いて無いな……中身を見るしかないか」
糊付けはしてないので破かずに中身を確認する。

「えっと……『あなたに会って、話したい事があります。放課後、教室で待っててください』……名前が書いて無いな」

ガタッ

「ん？」

「あつ……え……」

物音に振り替えると教室の出入り口に、一人の女子生徒がいた。肩口で切り揃えた茶色い髪、やや童顔で桃子やリンディが言う『可愛い系』と呼べる人物だ。

「どうした？そっちも忘れものか？」

「えっと……そうじゃないんですけど……」

そう言う女子の視線は顔を赤くしながら俺と俺が持っている手紙を歩き来している……この反応はどうやらこの女子が手紙の送り主の様だ……

天然（レイ）は放って置くと危険だよコダイ（後書き）

メガネ「遅れてすみません!!」

コヨリ「こんかいはしかたありません」

メガネ「新しいPC買いましたね……前のよりキーが小さくて余計なものまで押さる……」

レイ「ねえねえ！コダイにラブレター送った相手は誰なの？」

メガネ「それは次回に」

コヨリ「はやくすすめましょう……（つづきがきになります）」

レイ「感謝コ〜ナ〜、龍賀様、山義 芳原様、ソラト様、感想ありがとつございます!!」

メガネ「山義 芳原様からは？号戦車F型パンターを200両とF-Xを500機とレトルトカレー（辛口、中辛、甘口）を200食、カレーの元一式五百人分を。いただきましたありがとうございます!!」

コヨリ「ちなみにおみやげは、せんとうきいがい『くうちゅうとうか』されました」

メガネ「まさに絶景……ちょっとした弾幕ごっこでした……」

レイ「ふにゅ？コダイは？」

メガネ「あそこ」

「コダイ&mp;????????」……………」

「コヨリ」おんなのひととメンチきってます」

メガネ「今回のゲストで龍賀様の作品『テンプレな転生 強き信念 持ちし者』の主人公の森 龍斗です……………」

「?????」私もいます」

レイ「ふえ!?誰!?!」

メガネ「同じ龍賀様の作品のキャラのナギです……………」

ナギ「はい。それとお土産のケーキを（イチゴ、チョコ、モンブランの三種）」

レイ「わ〜い」

メガネ「龍賀様ありがとうございます!」

「コヨリ」こんかいのようけんはなんですか?」

ナギ「龍斗がコダイと殺し合いたいそうです」

龍斗「零崎を始めよう……」

殺人姫「あら？とてもいい名前ね」

メガネ「二人とも本気モード!？」

コヨリ「とにかくにげましょう」

ナギ「その前にこれを盾に」(メガネを掴む)

メガネ「おいこら!!」

殺人姫「ハアアアア!!」

龍斗「るああああ!!」

ゴジャツ！！

バキヤツ！！！！

ゴシヤツ！！！！！！

龍斗「もう我慢できないってか！？殺人姫！！！！！！」

殺人姫「その通りよ！さあ」

グシヤツ！！（龍斗の胸を貫く）

殺人姫「おいで……………零崎龍識」

龍識「ああ……………」

グシヤツ！！（コダイの胸を貫く）

龍識「いくぞ……………殺人姫」

殺人姫「フフフフ……………」

龍識「ククク……………」

ゴジャツ！……！！

バキヤツ！……！！

ゴシヤツ！……！！

メキヤツ！……！！

ドカアツ！……！！

ザシュツ！……！！

「ヨリ」「うわぁ……」

ナギ「子供は見てはいけません」（レイの目を塞ぐ）

レイ「ふえ！？何？何が起こってるの！？？」

メガネ「お互いに相手の心臓貫いたまま、残った腕で殴り合っている……」

ナギ「最初の方は完璧にHELLSINGでしたよね」

メガネ「あの殴り合いね……良いじゃん好きだもん……」

「ヨリ」「かわいくいってもきもちわるいです」

ナギ「貴方とは気が合いますね」

メガネ「うわゝ合わせちゃ行けない組み合わせ？」

ズガン！！！！！

メガネ「あ、お互いの頭を銃で撃った……」

ナギ「タイミングも同時……お互いドがつく殺人狂ですね」

メガネ「お互いにドがつく程の 嫌いだからな」

コヨリ「ふたりともたのしそうにころしあってます」

レイ「ナギ〜！みえないよお〜！」（ジタバタ）

殺人姫「龍識の……アツイのが……いっぱい」 返り血のことです。

龍識「クククク……アハハハハハハ！！！！いいぜエ……お片づけのじかんだア……」（血まみれ）

殺人姫「嬉しいわ……私こう見えても綺麗好きなの」（血まみれ）

龍識「>体は絶望で出来ている……血潮は無で心は闇、幾たびの戦場を越えて不勝……ただ一つの希望もなく、ただ一つの勝利もなし……」

龍斗「殺し合いの空気じゃないな」

殺人姫「そのようね」（龍斗の『大嘘憑き』で全快）

ナギ「スッキリしました」（キラキラ）

殺人姫「見てわかるもの、肌がツヤツヤ」

ナギ「貴方の肌も白くて羨ましいです」

殺人姫「白すぎても問題だと思うけど……どう思う龍斗？」

龍斗「なんで俺にふる……」

殺人姫 & ナギ「男の娘だから」

龍斗「……次は貴様らだ……」（クロスを構える）

殺人姫「ナギ」

ナギ「はい」

シユン！（龍斗転移）

ナギ「強制帰還です、ついでに頼まれたので」

殺人姫「正月明けに食べる七草粥も作ったからみんなで食べてね
（土鍋を渡す）

ナギ「どうも」

殺人姫「後これ、この前のそっち感想で貰った『龍斗の女装集』で
子供の頃着ていた服を今のサイズに作り直してみたの、可愛いでは
よ？」（沢山の紙袋を渡す）

ナギ「さすがお母さんです……では」

シユン！（ナギ転移）

コダイ「あ、女装はオシャレだっけ言うの忘れてた」

コヨリ「まだいつつもりですか……」

レイ「皆様からの意見や感想などイロイロ待っています!!」

メガネ（だったモザイク）「……………」（ピクピク）

「次回もお楽しみにしてください！ー」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3965o/>

魔法少女リリカルなのは～ある転生者の新たな世界～

2012年1月12日01時25分発行